

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

原始・古代日本における勾玉の研究

A study on comma-shaped beads in primeval  
and ancient Japan

2018年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

瀧音 大

TAKIOTO, Hajime

研究指導教員： 谷川 章雄 教授

## 目次

序論 本研究の基礎的前提	1
第1節 勾玉研究と問題の所在	1
1. 勾玉をめぐる研究史	1
2. 問題の所在	38
第2節 本研究における視角	39
1. 分析対象としての地域および時期	39
2. 方法論としての集成データの活用	40
3. 本研究に用いる集成データについて	45
4. 本研究に用いる用語について	48
第1章 出土勾玉からみた時代的・地域的変遷と社会動態	54
第1節 問題の所在	54
第2節 出土遺跡数および分布からみた変遷	56
第3節 出土点数からみた変遷と地域性	64
第4節 材質の割合からみた変遷とその地域性	66
第5節 出土遺構の変遷とその地域的特徴	71
第6節 小結	78
第2章 刻み目を有する勾玉について	83
第1節 研究史の整理と問題の所在	83
第2節 「刻み目勾玉」の分類	86
第3節 各類型の材質および出土点数	92
第4節 各類型における分布とその地域性	93
第5節 各類型の出土遺構とその時期的変遷	96
第6節 小結	97
第3章 丁字頭勾玉の展開過程と地域性	105
第1節 問題の所在	105
第2節 分布・出土遺跡数にみる時期的変遷	107
第3節 材質からみた消長	116
第4節 出土状況の特徴と地域性	121
第5節 丁字頭勾玉の展開過程	124
第6節 展開過程からみた地域性	127

第7節 小結	128
<b>第4章 背合わせ勾玉についての一考察</b>	131
第1節 名称設定	131
第2節 先行研究の整理	133
第3節 分布状況	135
第4節 背合わせ勾玉の成立	139
第5節 子持勾玉との関係性について	144
第6節 背合わせ勾玉における歴史的意義	145
第7節 小結	148
<b>第5章 土製勾玉に関する基礎的研究</b>	152
第1節 問題の所在	152
第2節 出土遺跡の分布とその変遷	154
第3節 土製勾玉の特徴からみた時期差・地域差	160
第4節 遺構の種類および出土状況の変遷	161
第5節 土製勾玉の系譜の検討	167
第6節 小結	168
<b>結論 日本列島における勾玉の消費が及ぼす文化的作用</b>	174
第1節 各時期区分の整合性とその意義	174
第2節 消費地からみた出土勾玉の文化的作用	177
引用・参考文献	186
挿図出典	219
表出典	221
初出一覧	222
<b>付篇 日本列島出土土製勾玉集成</b>	

## 挿図目次

### 〔序章〕

第1図	坪井氏が紹介した「メキシコの勾玉」	2
第2図	坪井氏が紹介した海外の勾玉関連資料①	4
第3図	坪井氏が紹介した海外の勾玉関連資料②	5
第4図	野津氏による勾玉の型式分類図	6
第5図	小滝川ひすい峡	9
第6図	極楽寺遺跡出土の玉類	18
第7図	研究史でとり上げられている中国の玉器たち	22
第8図	『日本玉研究会会誌』4号の表紙	24
第9図	『玉文化』創刊号と『玉文化研究』創刊号の表紙	37
第10図	日本列島から出土する主な勾玉	46
第11図	本研究で用いる勾玉の部分名称	51

### 〔第1章〕

第12図	出土遺跡の分布①	57
第13図	出土遺跡の分布②	58
第14図	出土遺跡の分布③	59
第15図	出土遺跡数と出土点数の変遷	65
第16図	出土勾玉における材質の変遷①	67
第17図	出土勾玉における材質の変遷②	68
第18図	出土勾玉における材質の変遷③	70
第19図	出土遺構の変遷①	72
第20図	出土遺構の変遷②	73
第21図	出土遺構の変遷③	75
第22図	出土遺構の変遷④	76
第23図	出土遺構の変遷⑤	77

### 〔第2章〕

第24図	樋口清之氏の分類における「頭部刻み目勾玉」	84
第25図	梅原末治氏の禽獣首形勾玉	85
第26図	河村好光氏の分類における「頭部刻み目勾玉」	85
第27図	「刻み目勾玉」の種類	91
第28図	各類型における材質の割合	92
第29図	各類型の分布状況①	94

第 30 図	各類型の分布状況②	95
第 31 図	各類型における分布の時期的変遷	98
第 32 図	熊本県ワクド遺跡出土の「頭部刻み目勾玉」	99

〔第 3 章〕

第 33 図	出土遺跡の分布とその変遷	115
第 34 図	I 類・II a 類・II b 類・III 類における形態差	116
第 35 図	各材質における丁字頭勾玉の種類	118
第 36 図	頭部および体部に文様や刻み目が施されている丁字頭勾玉	119
第 37 図	材質ごとの消長	121
第 38 図	丁字頭勾玉が出土する古墳の墳形	123

〔第 4 章〕

第 39 図	鳥取県博労町遺跡出土の背合わせ勾玉	131
第 40 図	先行研究における背合わせ勾玉と立花	133
第 41 図	梅原末治氏のいう「背合せ双形玻璃勾玉」	135
第 42 図	千葉県高部古墳群出土の背合わせ勾玉	137
第 43 図	成立過程の参考資料	140
第 44 図	古墳時代以前の参考類例	143
第 45 図	接続された子持勾玉	145
第 46 図	刻み目が施されている立花	147

〔第 5 章〕

第 47 図	出土遺跡の分布①	156
第 48 図	出土遺跡の分布②	157
第 49 図	土製勾玉の種類	160
第 50 図	出土遺構の変遷①	162
第 51 図	出土遺構の変遷②	163
第 52 図	出土遺構の変遷③	165

〔結論〕

第 53 図	石製を中心とした勾玉と土製勾玉との時期区分の差	174
第 54 図	石製を中心とした勾玉と土製勾玉の出土遺跡数の変遷	176
第 55 図	各地域における石製を中心とした勾玉と土製勾玉の出土の割合	177
第 56 図	使用形態からみた石製を中心とした勾玉の大まかな流れ	178
第 57 図	使用形態からみた土製勾玉の大まかな流れ	179

## 表目次

### 〔序論〕

第1表	坪井氏が作成した勾玉の定義に関する対応表	2
第2表	第5期にみられる玉類の集成に関する主要文献	12
第3表	第6期にみられる玉類の集成に関する主要文献	26
第4表	第6期における玉類の主要なシンポジウム資料と特集企画	27
第5表	玉類に関連した主な常設展・企画展	43-45
第6表	集成によって得られた出土遺跡と出土点数	47

### 〔第1章〕

第7表	消費地における集成データの蓄積状況	54
第8表	各県における出土遺跡数および出土点数の変遷	60

### 〔第2章〕

第9表	「刻み目勾玉」出土一覧	87-90
第10表	類型ごとの出土遺構	96

### 〔第3章〕

第11表	出土遺跡一覧	108-113
第12表	県別にみた出土遺跡数の変遷	114
第13表	各地域における類型ごとの変遷	117
第14表	近畿地域・九州地域における古墳時代以降の出土遺構	124
第15表	出土が確認される近畿地域・北部九州地域の後期古墳	127

### 〔第4章〕

### 〔第5章〕

第16表	各県における出土遺跡数の変遷	158
第17表	土製丁字頭勾玉の出土遺跡一覧	161
第18表	竪穴建物における土製勾玉の出土場所の変遷	166
第19表	九州地域の縄文時代における石製勾玉の消長	167

### 〔結論〕

## 序論 本研究の基礎的前提

### 第1節 勾玉研究と問題の所在

#### 1. 勾玉をめぐる研究史

##### 第1期；研究の黎明期

第1期は、性格について言及した研究もみられるものの、いずれも実証的に行なわれたとは言い難く、それよりも実際に目にすることができた勾玉とその周辺の事柄に関して記録・記述することが中心に行なわれた時期である。また、時期差・地域差といった観点からの考察はそれほどみられず、勾玉の製作工程や習俗の解明といった視点も積極的に行なわれてはいない。時代は、勾玉研究が行なわれ始める1780年代から1867年までとする。

勾玉の研究は、玉類の魅力に引き込まれた人、換言するならば石愛好家らなどによって始められ、それに伴い勾玉について記述された書籍が刊行されていく。具体的には、藤貞幹の『集古圖』（註1）（1780）や青柳種重の『三器略説』（1816）に加えて、国学者の立場から勾玉をみた谷川士清の『勾玉考』〔谷川 1774〕や考古学的な観点から勾玉をみた木内石亭の『曲玉問答』〔木内 1936〕などはよく知られているものである（註2）。このことから、江戸時代にはすでに勾玉が研究対象としてとり扱われていたことがわかる。

また、ドイツの博物学者であるシーボルトは、自身が著した『日本』のなかで勾玉に関して記述している〔シーボルト 1978〕（註3）。シーボルトの勾玉研究については、斎藤忠氏が詳しくまとめているので〔斎藤 1977・1990b〕、その成果と合わせながら述べていくことにする。シーボルトは、勾玉について3種類に区分できるとしているが、管玉や白玉もそれぞれ1つの種類としていることから、彼のなかで勾玉という単語の示す範囲が不明瞭であったことが分かる。さらに、勾玉が貨幣としての交換物であったという現在では否定されている考えも多くみられるが、所有者や用いられる場面などにも着目し、性格づけを積極的に行なっていることは評価できる。また、シーボルトの勾玉研究の根底には、伊藤圭介氏の「勾玉考」があったことはよく知られている。この「勾玉考」はオランダ語で書かれたものであり、そのタイトルを日本語で直訳すると「日本の勾玉即ち曲った宝玉の記述」となる〔伊藤 1830〕。内容は木内の『曲玉問答』を整理し、考証したものであった（註4）。これらのことから、日本列島に「まがたま」と呼ばれる特異な形態の玉類があるという事実が、どの程度知られていたのかはおいておくとして、19世紀前半にはすでに海外の人びとによって認知されていたということになる。

##### 第2期；視点の多様化と考古学的アプローチへの芽生え

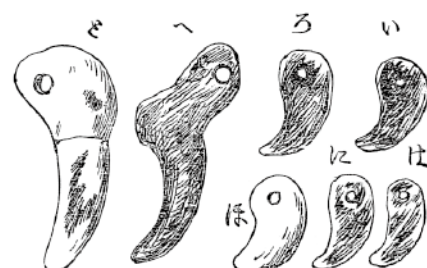
第2期に入り、近代日本の人類学および考古学を支えた鳥居龍蔵氏は、勾玉を研究することが「日本人種を取調べんと欲する者には最も注意すべきことなりとす」〔鳥居 1895；

209頁]と述べている。また、高橋健自氏〔高橋 1911〕を始めとした近代日本の考古学者らは、勾玉を使用する習俗が日本人の国民性、あるいは民族性を表徴しているという認識のもと、研究に取り組んでいく〔河村 2014〕。この傾向は、認識の強弱はおいておくとして、現在、勾玉を含む玉類の研究者のなかにもみられることである。このような姿勢をもつことで、必然的に様々な視点から勾玉を捉えようといった動きが生まれていく。

具体的には①定義設定に関する議論、②工具と製作工程の解明、③形態・材質の多様性と時期差・地域差の把握、④起源・用途・性格・系譜の検討、⑤北海道・沖縄県・海外資料への着目がある。また、勾玉自体を詳細に観察することで製作技術の復元や、形態の変遷・地域性の把握を試みるといった考古学的研究が徐々に行なわれ始めるのもこの頃からである。時代は、1868年から1915年までとする。

### ①定義設定に関する議論

定義に関する議論は、『東京人類學會雑誌』のなかで激しく行なわれていく。まず、坪井正五郎氏がメキシコに勾玉があると報告したことに対して〔坪井 1889〕、三宅米吉氏が日本の勾玉と同じものとしてよいのか、と疑問をなげかけたことから始まる〔三宅 1889〕。坪井氏が参考



第1図 坪井氏が紹介した「メキシコの勾玉」

資料としてあげた「メキシコの勾玉」は、計7点あり(第1図)、いずれも石を素材としている。そのなかで「ほ」と示したものについては、「日本の曲玉の如し」と強調して報告されている。この坪井氏の報告に対しては、羽柴雄輔氏も否定的な意見を述べている〔羽柴 1890a〕。

このような意見の食い違いは、勾玉の定義がそれぞれ異なることが原因であった。そこで、坪井氏はそれぞれの定義を対応表にまとめ(第1表)、議論を深めることで定義づけをより厳密に行なおうとした〔坪井 1890〕。しかし、それぞれの考えを統一することは、困難を極めた。3氏は、物質・大きさ・形状・体・装飾・

第1表 坪井氏が作成した勾玉の定義に関する対応表

用	孔	装飾	躰	形状	大小	物質		
装飾	有り	不關	圓	す多少勾形をな	不定	石	ば三宅氏に従へ	曲玉とは左の如き物なり
装飾	有り	不關	圓或は平	す多少勾形をな	不定	不定	ば羽柴氏に従へ	
不定	有り	不關	圓或は平	す多少勾形をな	不定	不定	ば坪井氏に従へ	

孔・用途の計7項目によって定義を行なっている。そのうち問題となったのが、用途についてであった。三宅氏・羽柴氏は装飾としての用途を定義に組み込もうとする一方で、坪井氏は用いる場面に多様性がみられることから、定義として積極的に組み込まずに装飾は主たる用途とするべきと考えていた〔坪井 1890・1891b〕。この坪井氏の意見に対して、三宅氏・羽柴氏は、たとえ神に奉げたり、あるいは死者に副葬する場合であっても、最終的にはその使用する対象を装飾するという意味が想定できるとし〔羽柴 1890b〕、意見は平行線をたどっていく。大野延太郎氏は、3氏を含



めたさまざまな議論を整理したうえで、時代を縄文時代と古墳時代に分けて、それぞれ形態・材質・製作・用法から定義づけを行なっている〔大野延 1896〕。

## ②工具と製作工程の解明

まず、工具について述べるならば、坪井氏が出雲地域の玉作関係遺物をみていきながら、勾玉の袢り部の製作には、それと同時期にみられる中細の一字形品を用いていたことを想定している〔坪井 1904〕。さらに、坪井氏は勾玉の砥石には2種類あるとし〔坪井 1910〕、1つ目は先ほどあげた袢り部を形成する板形砥石であり、2つ目は背部を研磨するときを使う筋の入った据え置きの砥石としている。また、大道弘雄氏も出雲地域でみられる筋砥石を紹介するとともに、武蔵国玉造出土の破片や大阪市天満天神境内白米稻荷社内の「狐の爪磨石」が砥石であった可能性を推測している〔大道 1909〕。

製作工程については、柴田常恵氏の研究がある。柴田氏は、古代の勾玉作りには2つの方法があったことを想定している。1つ目は、「予め其形状に石を打欠き、先づ内曲面より磨きを加えて両側面に及ぼし、後ち孔を穿ちて琢磨を施するに至りしもの」で、2つ目は「先づ両面を磨きたる扁石に孔を穿ち、而して磨を加へて内曲部をも造るもの」としている〔柴田 1910a・1910b〕。また、穿孔に関しては「孔を穿つことが、すべての加工を終へし後ちなされしと見ゆるものあり」とも述べている。

## ③形態・材質の多様性と時期差・地域差の把握

形態の多様性については、すでに第1期（1780年代から1867年まで）から把握されていたことではあるが、第2期においても、各地で確認されている異形勾玉の紹介を研究者らが行なっており、参考資料の蓄積がなされている（註5）。

時期差・地域差について述べるならば、まずは時期差についてみていきたい。第2期になると縄文時代における勾玉の存在が、研究者の間に広く認知されていく〔羽柴 1886、鳥居 1894a など〕（註6）。研究者によって呼称は異なるが、「石器時代曲玉」〔林 1896、兩角 1931a〕や、次の第3期（1916年から1939年）にみられる「貝塚曲玉」〔高橋 1916〕と呼ばれたものである。

次いで、地域差について述べるならば、鳥居氏が関東地域と九州地域との間には、形態に差異がみられることを明らかにし、さらに、日本列島を通じて形態が一樣ではないことを指摘している〔鳥居 1895〕。また、鳥居氏は八重山諸島から出土する勾玉の形態分類を行なったうえで、本土の勾玉との比較が今後は必要になると説いている〔鳥居 1894b〕。この鳥居氏の考えに呼応するかたちで、各地域の勾玉の情報が研究者らによって提示されていく。事例をいくつかあげるならば、中井伊與太氏は徳島県でみられる勾玉の石材比較を行なっている〔中井 1895〕。その他にも、大野氏は秋田県南部地域〔大野延 1898〕・関東地域〔大野延 1904〕、小川敬養氏は北部九州地域〔小川 1895〕における勾玉の状況を報告している。

#### ④起源・用途・性格・系譜の検討

起源・用途・性格は、それぞれが密接に関連していることを念頭にいれながら、さまざまな学問によって議論が進められている場合が多い。そのため、これらを1つのカテゴリーとしてまとめていきながら、議論が行なわれてきた民俗学・人類学と考古学とに区切って整理を行なっていく。

まず、民俗学や人類学からのアプローチをみるならば、坪井正五郎氏は勾玉を身につけることに対して、獣類の歯牙の威力を恐怖し、それを自身に身につけることで、そのもつ呪力を自らも得られるという呪的信仰が基礎にあることを述べたうえで、勾玉の獣牙起源説を唱えている〔坪井 1886〕。この着想は坪井氏が大英博物館に行ったさい、目にした獣牙穿孔の飾玉を参考にしていることはよく知られる。

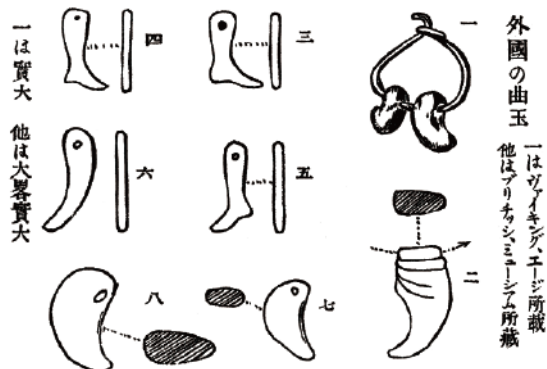
考古学の立場からみるならば、谷千生氏は、勾玉が足玉・手玉、そして首玉として用いられる際に生じる玉と玉が触れ合い鳴ることに意味があるとしている〔谷 1888〕。また、八木柴三郎氏は、玉の用途について①祭祀の際、②神霊として、③祝賀の際、④身体の装飾、⑤貿易の媒介として、といった計5つをあげており、そのうち②は三種の神器を想定している〔八木 1898〕。

系譜について述べるならば、縄文時代の勾玉と古墳時代の勾玉との間に連続性がみられるか否かについて、議論がなされている。大野氏は、縄文時代の勾玉は未開人が石器を使って作ったものであり、古墳時代の勾玉は専門集団によって生産されたものとし、両者を区別できるとしている〔大野延 1896〕。

#### ⑤北海道・沖縄県・海外資料への着目

北海道の勾玉をみていくと、青森県の商人が北海道から勾玉が出たという話をしていたことが報告されている〔淡 1888〕。

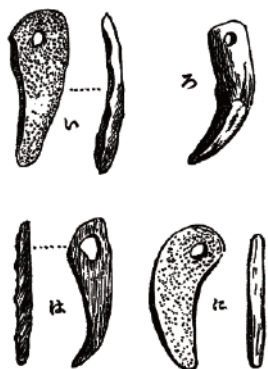
沖縄県の勾玉については、すでに述べた八重山諸島の勾玉を分類した鳥居氏の研究がある。そのなかには当時、沖縄本島の勾玉がどのような経緯で存在するのか、についても検討がなされている〔鳥居 1894b〕。また、八



第2図 坪井氏が紹介した海外の勾玉関連資料①  
一は、ノルウェーの丸塚出土のガラス製品、二～六は、エジプトのメノウ製品、七・八は、メキシコの石製品

木氏は玉類の分布を把握していくなかで、出土が確認できる終焉の時期になると、沖縄県の島々に古式の勾玉が多く見られるようになることを明らかにしたうえで、沖縄県の勾玉が本土で廃れたのち流入してきたものである可能性を推測している〔八木 1898〕。

次に、海外の勾玉について述べるならば、朝鮮半島南部で出土事例が多く確認できる



第3図 坪井氏が紹介した  
海外の勾玉関連資料②  
フランスアヴェーロンの墳墓出土品  
(ろ：獣牙、い・に：貝殻？石灰質  
石？、は：青銅)

ことが分かってくる。その事実を受けて、今西龍氏は日本府が金海付近にあった可能性を述べ、そこに住んでいた日本人が勾玉を使用していたことを想定している〔今西 1908〕。

その他の国における資料については、坪井氏がノルウェー・エジプト・メキシコ・フランスでみられる勾玉状の製品の紹介を行なっている〔坪井 1891a・1891c〕(第2・3図)。

### 第3期；考古学に基礎をおいた勾玉研究の始まり

第3期は、京都帝国大学に日本で最初の考古学講座が新設され、その教師にイギリス留学からもどった濱田耕作氏が着任する。濱田氏はロンドン大学のペトリ教授から学んだ、当時、最先端の考古学を紹介していきながら、『京都帝國大學文学學考古學研究報告』の刊行も行っていく。これらの成果によって、日本の考古学における調査・研究の基盤というものが出来あがっていく時期である。

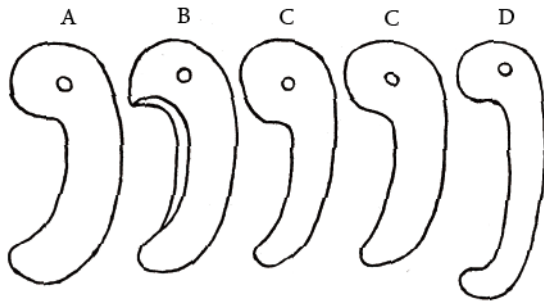
勾玉研究をみると、第2期(1868年から1915年まで)から継続してさまざまな視点での研究が行なわれていくなかで、濱田氏によってもたらされた考古学的なものの見方や分析の方法によって、新しい成果が出されていく。たとえば、玉作りの技術および工具の解明や、形態・材質からみた時期差・地域差を把握した研究は、現在の玉類研究の基礎となっているものが多い。そこで当該期においては、①工具と製作工程の解明、②形態・材質の多様性と時期差・地域差の把握、③起源・用途・性格・系譜の検討、④北海道・沖縄県・海外資料への着目、⑤史料のなかの勾玉研究の5つに分けて、研究史を整理していきたい。時代は、1916年から1939年までとする。

#### ①工具と製作工程の解明

京都帝国大学が中心となって発掘調査が各地で行われ、その成果は『京都帝國大學文学學考古學研究報告』として刊行されていることはすでに述べた。そのうちの第10冊として出されたのが『出雲上代玉作遺物の研究』であり、刊行されたのは1927年のことである。この報告書のなかで濱田耕作氏は、出雲地域における膨大な玉作り資料をもとにして、古代における玉類の製作工程を復元している〔濱田 1927〕。穿孔に関して述べるならば、出雲玉作跡遺跡から出土した碧玉・瑪瑙・水晶製の未成品には、片面から穿孔されたものが多くみられることが明らかにされている。

#### ②形態・材質の多様性と時期差・地域差の把握

まず、形態・材質の多様性については、柴田氏が出土事例10点を用いながら形態分類や使用材質に関する研究を進めていくことで〔柴田 1916〕、研究者のなかでその多様性がより明確なものとなっていく。また、和田千吉氏は古墳から出土する石製勾玉に着目し、平面形態がE字形のものや、表面に刻み目が施されているもの、孔が様々な方向から穿た



第4図 野津氏による勾玉の形式分類図

いる。野津氏は、古墳時代の出雲地域では国庁跡周辺で確認される勾玉である「國廳式勾玉」と、その前の段階の勾玉である「国造式勾玉」の2つの様式の勾玉が確認できるとしている〔野津 1925〕。そして、「国造式勾玉」から「國廳式勾玉」への移り変わりについては、「国造式勾玉」ではC字を呈していたが、「國廳式勾玉」の終わりの頃になると胴部が間延びし、尾部がやや上向きになる。加えて、袂り部が縦に伸びることにより、平面形がコノ字を呈するものへと変化していくといった一連の流れが提示された(第4図)。この野津氏の指摘が出されて以降、勾玉の形態の大まかな変遷を述べる際には、C字形が古く、コノ字形が新しいといったことがいわれるようになる〔濱田 1927〕。

また、地域差について述べるならば、後藤守一氏は東日本と西日本とでは時期差が大きくみられることを考慮した上で、主に古墳時代における西日本の勾玉が東北地域の勾玉から影響を受けている可能性を推測している〔後藤 1930〕。

### ③起源・用途・性格・系譜の検討

また、起源・用途・性格については、考古学をはじめとして、文献史学・民俗学・人類学といったさまざまな学問領域からアプローチがなされている。

まず、文献史学からのアプローチとしては、喜田貞吉氏の研究があげられる。喜田氏は、「たま」の名称について、孔を穿ち緒を通す個々の物体というのは、第2次的転用の名称であり、「当初は是等の個々の物体を、所謂「タマの緒」を以て連絡したもの」のことを指すと述べている。〔喜田 1933〕。そして、「マガタマなる古語が緒を以て綴った連珠の稱」であり、勾玉がただちに「マガタマ」と呼ばれていたとは考え難いと述べている(註7)。その一方で、人の死と玉の緒が絶えることを対応させて考えていることから、古代の人びとがもっていたであろう玉の思想のなかには、霊魂との関係性も含まれていたことも想定できるとしている。

民俗学・人類学からのアプローチとして述べるならば、第2期(1868年から1915年まで)に提示された坪井氏の獣牙起源説に対して、中山太郎氏が干し固めた肝臓を胸に懸けたのが勾玉の古いかたちであるとし、勾玉の肝臓模倣説を唱えている〔中山 1930〕。その性格については、①山の神に捧げた心臓に対して自分らがこれを所持することは神の加護をうけるもの、②性器崇拜の結果はこれに呪力の存するもの、③原始時代の勇者の徽章の

れているものなどといった、いわゆる異形勾玉を数多く紹介している〔和田 1916〕。石以外の材質については、岸川清信氏がガラス製勾玉の事例報告を行なっている〔岸川 1930〕。

次に時期差についてみていくと、野津左馬之助氏は1つの時代のなかであっても、時間の経過と共に形態が変化すると述べて

3つが考えられるとしている。

一方、折口信夫氏は、「人間の身体に出たり這入ったりするところの抽象的なたま（靈魂）を具体的にしむぼらいずせる玉をばたまと称して、礦石や動物の骨などを此語で呼ぶと述べ、「靈魂のたまも、まじっくに使用せられるゝ珠玉も、所詮同じものであつて、一つの物体の両面の様なものである」としている〔折口 1996〕（註8）。また、折口氏は、靈魂が中宿として色々な物質に入りこむものとしたうえで、靈魂の貯蔵所の1つとして玉を想定している。さらには、玉と玉とを触れ合わせ音を鳴らすことにより靈魂が出てくるとも述べられている。

考古学の立場からみるならば、獸牙起源説をふまえて考察を行なう研究者が多くみられる〔兩角 1931a、柴田 1924a など〕。後藤守一氏もその一人であり、彼は当初、イルカの牙など曲がっていない牙があることを根拠として、祖形の特定には慎重な姿勢を示していたが〔後藤 1927a〕、後に動物の牙からの起源を肯定的にとらえるようになる〔後藤 1930〕。その一方で、大野氏や兩角守一氏は、獸牙起源説をふまえてはいるものの、勾玉のなかには珧状耳飾りの欠損品を再加工したものもあった可能性も指摘している〔大野延 1930、兩角 1931a〕。この両氏の考え方は、なるべくそれ以前の近い時代の遺物から祖形を見出そうとしているという点で高く評価できよう。用途や性格に関しては、高橋健自氏が勾玉の輪郭に護身の力があるとし〔高橋 1928〕、また後藤氏も勾玉が単なる装身具ではなく、一種の護符として用いられていたことを推測している〔後藤 1930〕。

系譜については、まず、第2期（1868年から1915年まで）に大野延太郎氏が、縄文時代の勾玉と古墳時代の勾玉は、生産者や製作技術の違いで明確に区別することができる、としたことに対して、大野雲外氏は先住民が使用したものと、日本民族が使用したものとといったように区別はしているものの、両者とも自然のものに孔を穿ち、連ねて用いることを根拠として、系統は同質のものであったとしている〔大野雲 1916・1924〕。これと同様な考えを示したのが後藤氏であり、彼は両者の間に有機的關係性がみられるとしている〔後藤 1930〕。

#### ④北海道・沖縄県・海外資料への着目

高橋勇氏は、北海道にあるアイヌ墓から出土した勾玉4点についての報告を行なっている〔高橋勇 1933〕。

また、沖縄県の勾玉について述べるならば、沖縄本島のノロたちが所有していた勾玉について、濱田氏の下で助手・講師を勤めたことのある島田貞彦氏が報告を行なっている〔島田 1933〕。そのなかで、大きさによる分類・材質の産出地・製作地・流入時期などについて言及しており、大きさの差については、所有者の階層と関係していることを推測している。この島田氏の報告・研究について、谷川章雄氏は考古学に基礎をおいた沖縄県の勾玉研究の出発点と評価している〔谷川 2008〕。

海外の勾玉について述べるならば、朝鮮半島での用いられ方が日本とは異なることや〔濱

田 1927)、生産自体も朝鮮半島で行なわれた可能性があることなどが指摘されている〔小川 1927〕。後藤氏は、朝鮮半島南部で発見されるものは内地のものと同系統を等しくするものとしており、起源の地については言及するにはいまだ不十分としている〔後藤 1927b〕。

また、朝鮮半島でヒスイ製勾玉が大量に確認されていくにしたがい、中国の玉器に多くみられる軟玉との比較検討も重要な研究テーマの1つとなっていく。その背景には、日本列島で確認されるヒスイは硬玉であり、それと軟玉との区別は肉眼観察では容易に行なうことができないとされていたことが考えられる。この問題に対して、島田氏・小泉顯夫氏は日本列島の勾玉 271 点と朝鮮半島の勾玉 162 点を用いて分析を行ない、その結果、比重の差によって硬玉と軟玉とを区別できることを明らかにしている〔島田・小泉 1927〕。また、ヒスイの流通ルートからみた日本列島と中国との関わりについても議論がなされていくが、これは当時、日本列島でヒスイ産出地が確認されていなかったことが大きな要因であり、日本列島のヒスイは中国から入ってきたとする考えが大勢を占めていたためである〔高橋 1916、濱田 1928〕。そのようななか、後藤氏は中国で硬玉製品が多く確認できないことや、日本列島で軟玉製品が少ないことを述べたうえで、中国からの流入といった考えに対して疑問を呈している〔後藤 1930〕。

#### ⑤史料のなかの勾玉研究

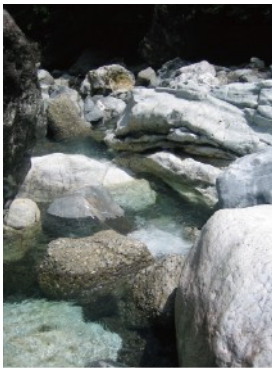
柴田氏は、歴史書のなかに記載されている八坂瓊勾玉を大いなる赤い勾玉であったと述べている〔柴田 1924b〕。このことから、彼が瑪瑙を素材として考えていたことが推測できる。また、東洋史学者である橋本増吉氏が、「魏志倭人伝」のなかに記されている「青大句珠」の実態について言及しており、それは碧玉製勾玉であると推測している〔橋本 1932〕。

#### 第4期；ヒスイ製勾玉への新視点と研究の進展

第4期は、日本列島でヒスイ産出地が発見されたことによって、日本列島から出土するヒスイ製品について再検討を余儀なくされていく。また、盧溝橋事件をきっかけに起こった日中戦争や、第2次世界大戦といった世界的規模の戦争により国内は混乱していき、その影響は日本歴史学界・考古学界にも及んでいく。この時期の勾玉研究は、日本列島でのヒスイ産出地の発見を受けて、従来のヒスイ製勾玉に対する考えをもう一度、検討し直す必要性が出てきた時期である。また、奈良時代へと研究の視野を広げるなど、新しい展開はみられるものの、全体的にみて第2期（1868年から1915年まで）や第3期（1916年から1939年まで）のような研究への積極性は弱まる時期でもある。当該期においては、①ヒスイ産出地の発見とヒスイ製玉類の再検討、②形態・材質の多様性と時期差・地域差の把握、③起源・用途・性格・系譜の検討、④沖縄県・海外資料への着目、⑤史料のなかの勾玉研究の5つに分けて記述していく。時代は1940年代から1959年までとする。

#### ①ヒスイ産出地の発見とヒスイ製玉類の再検討

旅順博物館館長であった島田氏は、旅順工科大学地質学教室にいた小倉教授から、日本



第5図 小滝川ひすい峡

列島でヒスイ産出地が発見され、そのことが学術雑誌に発表されていることを教えられた〔島田 1941〕。それは、東北大学地質鉱物学研究室にいた河野義禮氏の「本邦に於ける翡翠の新産出及びその科学性質」という研究であり、『岩石鑛物鑛床學』の第22巻第5号に収録されたものであった〔河野 1939〕（註9）。具体的な内容は、新潟県姫川の支流である小滝川においてヒスイ産出地を発見した、というものである（第5図）。しかしながら、この画期的な発見については、当時、国の情勢が非常に不安定であったため、国内はもとより地元の人びとですら、とりたてて騒ぎたてることはなく、ましてや他の学問領域の人たちの目にふれるには時間を要する状況であった〔宮島 2004〕。

そのようななか、1941年に島田氏が「日本発見の硬玉に就いて」を発表し、そこで小倉教授から教えられた河野氏の研究を紹介したことによって〔島田 1941〕、考古学界は日本列島でヒスイ産出地が発見されたという事実を初めて知ることとなる〔樋口 1948〕。この島田氏の研究が発表される前から、数は少ないが日本列島でのヒスイ産出地の発見を予察していた研究者がいる。第2期でとり上げた後藤氏に加え、原田淑人氏や八幡一郎氏がそうである。原田氏は、「我國上古に當つてあれまで多量の硬玉が西南亜細亜から遙々我國に輸送されたか頗る疑はしくなる。又その間に江南の支那人が仲介者となつたとすれば、原石の外に何等か支那臭く加工した遺物が出てよいように思はれるのである。私は勾玉などに使用された硬玉質の原石が、その当時我國又はその附近に産出したものと想像する方が寧ろ妥當であるやうに感ぜられてならない」〔原田 1940；426-427頁〕と述べ、日本列島内でのヒスイ産出の可能性を推測している。また、八幡氏は『ひだびと』で発表した「硬玉の礦脈」のなかで、飛驒の溪川をヒスイ産出地の候補地としている〔八幡 1941〕。八幡氏の推定地の是非はおいておくとして、島田氏の紹介により、後藤氏・原田氏・八幡氏が主張した国産ヒスイの存在が明確なものとなったのである。

新潟県で産出地が発見されて以降、樋口清之氏や藤田亮策氏はヒスイ製玉類が全国的にみられることなどを根拠として、未だ発見されていないヒスイ産出地が他にあるのではないかと、といったヒスイ産出地の多所説を展開させていく〔樋口 1948、藤田 1957〕。また、樋口氏は出土するヒスイ製玉類について、すぐに全てを国産品と捉えるのではなく、なかには大陸産の素材を使ったものもあるのではないかと述べ、発見された産出地をすぐさま流通の出発点とする安易な考えに対して注意を促している〔樋口 1948〕。

## ②形態・材質の多様性と時期差・地域差の把握

まず、島田氏の「勾玉雑考」〔島田 1940〕と樋口氏の「垂玉考」〔樋口 1940〕のなかでは、主として勾玉の平面形態から分類が行なわれている。さらに、原田氏は縄文時代中期から後期に移り変わるにつれ、ヒスイ製大珠が確認できなくなり、代わって小形のヒスイ

製玉類が出現することをふまえて、大珠が分割され、再利用されていた可能性を推測している〔原田 1940〕。

また、それまでみられなかった奈良時代の勾玉についての研究が、石田茂作氏によって行なわれていく〔石田 1940〕。石田氏は、奈良県にある元興寺の塔跡から出土した勾玉や正倉院蔵にある勾玉の観察を行ない、いずれも古墳時代のものであることを指摘している。奈良時代の事例でいうと、他にも梅原末治氏が奈良県東大寺三月堂の本尊である不空羂索観音像の宝冠にみられる勾玉を紹介している〔梅原 1950〕。

### ③起源・用途・性格・系譜の検討

この時期においても坪井氏の獣牙起源の立場をとる研究者は多くみられる一方で、考古学的アプローチからその考えを疑問視する研究者もいた。大場磐雄氏は管玉や丸玉などの玉類の多くが、本来的には自然にある草木果実を素材としたものであり、それを身体装飾品として用いることから始まったと述べたうえで、勾玉の起源を獣牙に求めることについて、未だ考慮の余地があるとしている〔大場 1943a〕。また、麻生優氏は、牙製垂飾具が成立する場所では、石製勾玉が出現してもよいのに、その現象が多く地域でみられないことや、石製勾玉の起源を石製品に求めていくことは十分に可能であることを述べている〔麻生 1953〕。さらに、麻生氏は弥生時代の勾玉が、牙製垂飾品や縄文時代における「く」の字形の勾玉に酷似したもの、そして塊状耳飾りの再加工品の3つの展開がそれぞれ関係し合いながら成立したものと推測している。

また、用途から性格について言及した研究者もいる。後藤氏は、京都府にある久津川車塚古墳（5世紀前半）〔梅原 1920〕から出土した5000点を越える勾玉が、あたかも石棺内に散布されたかのような状況で確認されたことに注目して、古墳出土の玉類には被葬者に対する服飾品とする以外の用途を想定している〔後藤 1940〕。具体的には、勾玉に一種の靈威があると推測している。この後藤氏の指摘がなされて以降、各時代における玉類の出土状況が厳密に検討されるようになり、その用途・性格を推測するさいには、装飾性以外の側面にも研究者の目が向けられていくようになる。また、島田氏は頸飾りを表現した埴輪を観察し、勾玉の着装時における正面観に着目しながら宗教的性格について言及している〔島田 1940〕。島田氏は「従来勾玉の形態観は常に曲れる鉤状の側面を以って正容とする意識にとらはれ、側面観よりする彎曲の點に主観をおいてゐるが、これは少なくとも正面観よりする直線的の正容を本體としてみるべきもの」とし、「勾玉の本質は横に曲れるものではなく、云はゞ前につき進む無限の形を上曲終止したもの」であるとした。そして、勾玉を直玉として捉え、神社建築における「千木の高く天空を摩する」といった精神と同じくすることを推測している。大場氏は鏡・剣・玉の三器が副葬される事例から、死霊恐怖から被葬者を防御するといった宗教的性格を玉類にみている〔大場 1943b〕。また、石田氏は、奈良時代の玉類について、1 装身具として、2 器具として、3 器物の装飾として、4 鎮壇具として、5 観賞用としてといった5つの用途を提示している〔石田 1940〕。



系譜については、八幡氏が古墳時代にみられる丁字頭勾玉の祖形は、それ以前の弥生時代あるいは縄文時代までさかのぼって考えられる可能性を推測している〔八幡 1940〕。

#### ④沖縄県・海外資料への着目

まず下地馨氏が、宮古島の勾玉を名称・形態・材質・用途に加えて、関連した歌謡・伝説・古記録などから検討している〔下地 1944〕。その結果、「曲玉買入禁止の古文書」などの古記録をふまえてみると、宮古島では17世紀後半まで本土から勾玉の流入が確認できることが明らかとなった。これは、琉球の勾玉は奈良・平安時代であったとする従来の考えに対して、再検討をうながす契機となった。

海外資料については、朝鮮半島の勾玉を対象にした研究が目立つ〔梅原 1947 など〕。斎藤忠氏は、慶州金鈴塚・慶州飾履塚・慶州瑞鳳塚・慶州普門里夫婦塚の勾玉を整理しており〔斎藤 1940〕、加えて、任那日本府という視点のもと、勾玉の影響が日本列島から朝鮮半島へと広がっていったことを推測している〔斎藤 1943〕。

#### ⑤史料のなかの勾玉研究

まず、八坂瓊勾玉を含む三種の神器に関する研究が行なわれており、特に戦後に入ると、専門的立場からその問題を解決しようとする動きがみてとれる。入田整三氏は、『日本書紀』・『古事記』・『正倉院文書』にみられる勾玉を整理していきながら、八坂瓊勾玉について言及している〔入田 1940〕。

また、後藤氏と小林行雄氏は、『古事記』・『日本書紀』・『古語拾遺』などに記載されている神器をめぐる問題、すなわち三種の神器の実態について、考古学の立場から検討を試みている。後藤氏は、実際の出土状況などをふまえたうえで、奈良時代の段階では三種の神器と皇位継承のしるしとしての神器は別物であった可能性を述べている〔後藤 1946・1947〕。そして、天皇になった際に奏上するのは鏡と剣の2種であって、玉を加えて三種になったのは後のことと推測している。また、小林氏は、鏡・剣がセットで出土するのが弥生文化にみられることや、弥生文化の神器として最も適当な銅鐸が、神話の世界に描かれていないことなどを根拠として、三種の神器という思想が成立したのが、その次の時代である古墳時代前期頃であったと主張している〔小林 1947〕。

その他には、第3期（1916年から1939年まで）で、橋本氏が「魏志倭人伝」の「青大句珠」を碧玉製勾玉としたことに対して、原田氏は魏の天子に贈ったものとしては、むしろヒスイ製勾玉であったとする方がよいのではないかと述べている〔原田 1940〕。

### 第5期；勾玉研究の発展と玉類研究の増加

第5期は、都市開発による事前発掘調査の増加に伴い、玉作関係遺跡・遺物も急激に蓄積されていくなか、それらの集成が行なわれていく。そして、その成果をもとに玉作り研究が発展・成熟していき、消費地あるいは生産地を含めた流通に目をむけた研究も徐々に

行なわれていく時期である〔石川県埋蔵文化財センター 2003 など〕。研究の対象となる時期・地域は細分化されていき、時代ごとに管玉や丸玉なども含めた玉類全体を俯瞰するような研究や、出土玉類の組成から時期差・地域差を把握する研究が多く行なわれていく。

その結果、勾玉研究は継続してみられるものの、玉類全体の様相を明らかにするために勾玉の研究が行なわれていく傾向が強くみられるようになる。他には、性格についての予察やガラス製勾玉の研究が活発に行なわれていくとともに、玉類研究を専門とする研究会が発足する。加えて、この時期から科学分析が1つの研究方法として採り入れられていく。また、新潟県産のヒスイの発見を受けた朝鮮半島の勾玉の研究も進んでいく。この時期については、①資料集成、②玉作り研究、③消費地・流通の研究、④ガラス製勾玉の研究、⑤起源・用途・性格・系譜の検討、⑥沖縄県・海外資料への着目、⑦科学分析の導入とその成果、⑧史料のなかの勾玉研究、⑨「玉」を冠する研究会の発足の9つに分けて研究史を記述していきたい。時代は、1960年代から2003年までとする。

### ①資料集成

第2表は、第5期にみられる主な資料集成の成果をまとめたものである。この表をみると、縄文時代のヒスイ製玉類は全国的に集成が行なわれている一方で、他の石材については千葉県・石川県の資料が集められているのみである。弥生時代ではヒスイ製が全国的、ガラス製は西日本を中心に集められている。その他には、墓から出土したものを対象とした集成も行なわれている。

第2表 第5期にみられる玉類の集成に関する主要文献

文献	時代	材質	地域	
竹内理三・井上辰雄・江坂輝彌・加藤晋平・小林達雄・坂詰秀一・佐々木銀彌・佐原眞・平川紀一 編 1983『考古遺跡・遺物地名表』日本歴史地図く原始・古代編>別巻 柏書房。	縄文～続縄文	ヒスイ	北海道	消費地
	縄文	ヒスイ	東北～九州	消費地
	弥生	ガラス	北陸・近畿・中国・九州	消費地
島根県教育委員会 1987『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ 玉作関係遺跡』。	弥生～奈良	石	島根県	生産地
金子裕之 1988『律令期祭祀遺物集成』昭和61年～63年度文部省科学研究補助金総合研究A研究成果報告書Ⅱ。	奈良・平安	土	東北～近畿	消費地
森 浩一 編 1988『付録・縄文時代の硬玉製玉類出土遺跡一覧』『古代翡翠文化の謎』新人物往来社 205-256頁。	縄文	ヒスイ	全国的	消費地
玉城一枝 1990『付録 弥生・古墳時代の硬玉出土地一覧』森浩一 編『古代翡翠道の謎』新人物往来社 263-324頁。	弥生～古墳	ヒスイ	全国的	消費地
千葉県文化財センター 1992『研究紀要』13 生産遺跡の研究2-玉-。	縄文～古墳	石・コハク	千葉県	生産地 消費地
小山雅人 1992『弥生勾玉の分布とその変遷』『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 埋蔵文化財研究会 25-32頁。	弥生	石・ガラス	東北～北部九州	消費地
東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀-祭祀関係の遺跡と遺物-』第1分冊～第3分冊 第2回東日本埋蔵文化財研究会。	古墳	滑石・土中心	全国的	祭祀遺跡
池上 悟 1993『古墳出土の琥珀玉』『立正大学文学部論叢』97 1-26頁。	古墳	コハク	全国的	古墳
藤田 等 1994『弥生時代ガラスの研究-考古学的方法-』名著出版。	弥生	ガラス	近畿・九州中心	墓中心
石川県考古学研究会 1995『装身具Ⅰ』石川県考古資料調査・集成事業報告書。	縄文	石	石川県	消費地
石川県考古学研究会 2000『装身具Ⅱ(玉つくり)』石川県考古資料調査・集成事業報告書。	弥生～古墳	石	石川県	生産地
中山浩彦 2000『埼玉県内古墳出土の勾玉(Ⅰ)』『調査研究報告』第13号 埼玉県立さきたま資料館 15-20頁。	古墳	石	埼玉県	古墳
中山浩彦 2001『埼玉県内古墳出土の勾玉(Ⅱ)』『調査研究報告』第14号 埼玉県立さきたま資料館 15-24頁。	古墳	石	埼玉県	古墳
会下和宏 2001『弥生時代の玉類副葬-西日本～関東地域を中心にして-』『日本考古学の基礎研究-茨城大学人文学部考古学研究報告第4冊-』145-167頁。	弥生	ヒスイ・ガラス	関東～九州	墓
岸本竹美 2003『グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察』『紀要 沖縄埋文研究1』55-72頁。	グスク～近世	石	沖縄県	消費地

古墳時代では、ヒスイ製が全国的に集成されている。また、祭祀遺跡から出土した滑石製・土製のものや、埼玉県内の古墳から出土したもの、加えて、千葉県内あるいは古墳から出土したコハク製のものといったように、いずれも視野が限定されてた集成がほとんどである。奈良・平安時代については、土製玉類が集められてはいるものの、報告された点数が少なく、さらには岩手県の事例の割合が多いことから集成内容に偏りがみられる。

## ②玉作り研究

まず、縄文時代中期から晩期の新潟県寺地遺跡〔青海町役場 1970〕や晩期の同県細池遺跡〔糸魚川市教育委員会 1974〕など、ヒスイ製玉類の生産遺跡が調査されていく。寺地遺跡では勾玉の未成品が確認されており、その資料を基にして当該期における製作技術の解明が進められていく。奴奈川郷土文化研究会の土田孝雄氏は、玉作関係遺跡・遺物の検討や実験考古学からのアプローチを駆使して、糸魚川周辺に展開するヒスイ製玉類の製作技術・工程の復元や、ヒスイ原石と工具との有効性について、考察を加えている〔土田 1982〕。

弥生時代においても、勾玉を生産していた遺跡が調査され〔斎藤義 1998 など〕、製作工程の復元などが試みられている。事例をあげるならば、新潟県諏訪田遺跡では中期のヒスイ製勾玉が作られており、そこでは原石－荒割－形割－打撃整形－研磨－整形研磨－穿孔－仕上げの順で勾玉作りが行なわれていたことが、寺村光晴氏によって明らかにされている〔寺泊町 1991〕。その他の中期の玉作りについては、石川県八日市地方遺跡でヒスイ製半球形勾玉が生産されていたことが明らかにされている〔石川県小松市教育委員会 2003〕。また、徳島県稲持遺跡では後期の蛇紋岩製勾玉が作られており、その製作工程の復元が行なわれている〔菅原 1988〕。さらには、吉野川流域でみられる勾玉の原石の色や含有物などから6つのタイプに分けたうえで、それぞれの分布の把握も試みられている。

古墳時代についても同様で、茨城県烏山遺跡〔国士舘大学文学部考古学研究室 1988〕や新潟県大角地遺跡〔青海町教育委員会 1979〕、島根県出雲玉作跡遺跡〔玉湯町教育委員会 1972〕など、勾玉を作っていた工房跡が数多く確認されている。そして、それぞれの発掘調査報告書のなかで工具の把握や製作工程の復元が行なわれている。出雲地域を例にあげて述べるならば、まず、角田徳幸氏・米田克彦氏が碧玉製・瑪瑙製勾玉の製作工程について言及している〔角田・米田 1999〕。また、米田氏は出土した膨大な玉作関係資料を遺跡ごとにほぼすべて実見・観察したうえで、分類や生産における器種・組成の把握を行ない、それらを遺跡ごとに比較することで、出雲地域における玉類生産の実態の解明を目指した〔米田 1998〕。加えて、近畿地域・北陸地域・東国地域といった他の地域における玉作り遺跡の様相と比較することによって、玉類生産からみた出雲地域の独自性を見出そうとしている。

寺村氏は、工房跡・製作技術・工具・玉作部・玉作名郷・社の成立といった生産側からみた複合的な研究を進めていくなかで、島根県忌部玉作遺跡における勾玉未成品の観察をもとに、荒割－形割－側面打裂－研磨－穿孔－仕上げ工程－完成の順で勾玉が作られてい

たことを明らかにしている〔寺村 1964・1966〕。さらには、北陸地域・東国地域・出雲地域の玉作りの様相を比較したうえで、地域によって製作工程に地域性がみられることを指摘した〔寺村 1974・1980a〕。また、今まであまり研究されてこなかった地域間における製作技術の伝播についても議論されていく。事例をあげるならば、奈良県曾我遺跡では、北陸地域で多く確認できる施溝分割の技術を用いてヒスイ製玉類を作っていたことが明らかにされていることから、北陸地域からの製作技術の伝播が推測されている〔河村 1992a・1992b〕。さらに、河村氏は出雲地域における玉作りの特徴の1つに片面穿孔をあげており、同様な技術が曾我遺跡でも確認できることから、両地域間の交流を想定することができるとしている。他にも、前期の茨城県にある霞ヶ浦周辺の地域では、山陰系の技術を用いて瑪瑙製勾玉が生産されていたことが指摘されている〔大賀 2002〕。

その他には金製勾玉の製作工程の復元〔村上 1995〕や、法量の比率から工人集団の違いや時期差をみたり〔堅田 1995〕、砥石をとり扱った実験考古学〔成澤・土肥 2000〕も行なわれている。さらには、列島規模からみた縄文・弥生・古墳時代のヒスイ生産の概要がまとめられていたり〔寺村 1998〕、千葉県〔千葉県文化財センター 1992〕・石川県〔石川考古学研究会 2000〕、島根県〔島根県教育委員会 1987〕における玉作遺跡・出土玉類の集成成果をもとにして、県ごとに玉作りの様相の把握が試みられていく。

### ③消費地・流通の研究

まず、縄文時代では頭部に刻み目が施された勾玉の紹介や〔梅原 1969・1971〕、ヒスイ製勾玉の概要を整理した研究に加えて〔瓦吹 1998〕、県単位での集成なども確認できる〔石川県考古学研究会 1995〕。

弥生時代について述べるならば、森貞次郎氏・木下尚子氏が西日本における膨大な数の勾玉を集成し、形態分類やそれらの出現時期および分布の把握、縄文時代からの連続性などについて言及を行なっている〔森 1980、木下 1987〕。木下氏は森氏の分類をふまえて、弥生時代の勾玉が縄文系勾玉と弥生系勾玉に分けられ、前者には獣形・緒締形・不定形、後者には定形・亜定形・板付型・半珠型があるとしている。そのうち、定形勾玉が前期末葉に出現し、中期前半に形成され、中期中頃から後半に完成することを述べ、勾玉の定形化が弥生時代にみられることを明らかにした。これら森氏・木下氏の研究が、現在の弥生時代における勾玉研究の基礎となっている。小山雅人氏は、東北地域から北部九州地域における勾玉の形態・材質・法量・分布に着目しながら、時期的変遷や地域性の把握を試みている〔小山 1992a・1992b・1996〕。具体的には、ヒスイ製勾玉がみられない地域にガラス勾玉の分布がみられることを根拠として、地域によってはヒスイのかわりにガラスを用いていた可能性を推測したり、ヒスイ製定形勾玉が北部九州地域を中心に段階的に西日本各地へと広がっていったことを明らかにしている。

一方、東日本に目を向けるならば、廣瀬時習氏は福島県勝口前畑遺跡で作られた半珠形勾玉をとり扱いながら、それに関係したものが東北地域から関東地域にかけてみられるこ

とや、使用形態が中部高地地域から影響を受けていることを指摘している〔廣瀬 2003〕。さらに、半球形勾玉の生産地の1つである北陸地域とは、使用形態が異なることもふまえて、技術的側面では北陸地域、使用形態では中部高地地域との関係を想定している。この研究によって、東日本の各地では多岐にわたる文化的要素が複雑に結びつき合っていたことが浮き彫りになってきた。浅野良治氏は、北陸地域でヒスイ製勾玉生産が開始される以前から、北部九州地域にヒスイ製勾玉が存在していることや、その形態が北陸地域で生産されるものとは異なることを明らかにしたうえで〔浅野 2003〕、北部九州地域の人びとが北陸地域からヒスイ原石を入手し、加工を行っていた可能性を指摘している。地域間における人の移動についてさらに述べるならば、水野裕之氏は愛知県の勾玉を集成したうえで、中期の愛知県朝日遺跡では北陸地域からの技術者の移動が想定できるとしている〔水野 1999〕。

その他には、墓から出土した玉類の形態・材質・組成・出土状況・用途を整理し、地域ごとの副葬形態の変遷を明らかにした研究も多く行なわれている〔石川考古学研究会 2001、会下 2001 など〕。

古墳時代については、副葬事例からの研究が多く行なわれている。石神孝子氏は、甲府盆地の古墳 31 基の事例をもとに、甲府盆地内では瑪瑙製勾玉の分布に偏りがあることや、水晶の産出地が身近にあるにもかかわらず水晶製勾玉の出土が極端に少ないこと、加えて、前期にヒスイ、後期に瑪瑙・蛇紋岩・滑石といったように時間の経過によって主体となる材質に変化がみられることを明らかにしている〔石神 1994〕。中山浩彦氏も埼玉県内にある古墳出土の勾玉 128 点の整理を行なったうえで、後期後半になると瑪瑙製の割合が高くなると共に、性格も変化していった可能性を推測している〔中山 2000・2001〕。

また、コハク製玉類についての研究もみられる。寺村氏は、コハク製玉類が石製品の分布や保有に対して密接に関係するものであり、引いては初期ヤマト政権のあり方とも無関係ではないことを指摘している〔寺村 1985〕。また、池上悟氏は古墳から出土するコハク製玉類の集成を行ない、種類ごとに変遷や分布を明らかにしている〔池上 1993〕。その結果、コハク製勾玉が千葉県の後期古墳から集中してみられることや、形態は「く」の字形のものが多くあることなどがわかってきた。

このように、各地域における勾玉の様相が少しずつではあるが明らかにされていくなか、大賀克彦氏は地域ごとで特徴的にみられる玉類を系統別に示したのち、それらが古墳時代のなかでどのような変遷をみせるのかについて、主に流通・普及の視点で網羅的に示そうと試みている〔大賀 2002〕。研究・分析を行う際に、大賀氏は暫定的な概念であることを前置きしたうえで、「分類されたそれぞれの集合は、一般的には特定の地域と結び付いた生産集団の共通性を意味しており、「系」という概念で表現できる。ある生産集団が複数の種類の玉を生産している場合にも、同一の「系」にまとめられる」〔大賀 2002 ; 313 頁〕とし、地域名の後に「系」を付けて流通を把握する独自の理論を展開している。

また、1つの時代にテーマを絞った研究が多く行なわれるなか、時代を跨いで、勾玉の

様相を整理する研究も少しみられる。具体的に述べるならば、寺村氏による縄文時代から古墳時代におけるヒスイ製勾玉の研究〔寺村 1995〕、そして、玉城一枝氏は弥生・古墳時代におけるヒスイ製玉類の集成を行ない、その様相を列島規模で概観している〔玉城 1990〕。そのうち、玉城氏は墓に副葬されたヒスイ製勾玉の数に着目し、弥生時代後期から古墳時代へ移り変わるなかで、相対的に1つの遺構に対してヒスイ製勾玉を多用するようになることを明らかにしている。その他にも高橋進一氏は、弥生時代から平安時代における勾玉の形態・材質・玉類の組成の変遷について言及している〔高橋 1992〕。また、湯尾和弘氏は、縄文時代から古墳時代における出土勾玉の流通形態を把握したうえで、分布・材質の変遷からみた場合、古墳時代後期前半を境として、流通形態が異なることを指摘している〔湯尾 2003〕。

#### ④ガラス製勾玉の研究

ガラス製勾玉の研究は、第5期に入り最も発展する。議論の中心は鋳型・製作技術・工程についてであり、その解明には多くの研究者が推測を試みている〔藤田 1977・1994 など〕。まず、梅原氏は福岡県から出土した鋳型をみて、2つの鋳型を合わせて用いて勾玉を作っていた可能性を指摘した〔梅原 1960〕。使用する鋳型の数はおいておくとして、生産において鋳型が有効的であることは小林氏も述べている〔小林 1978〕。由水常雄氏は、鋳型を用いた3つの製作技術を提示している〔由水 1978〕。1つ目は1枚の雌型に溶融したガラスを流し込み、ガラスの表面張力を利用するもの、2つ目は型押し法と呼ばれるもので、まず1枚の雌型に溶融したガラスを流し込み、その後にもう1枚雌型をその上に乗せて型を整えるもの、3つ目は鋳造法と呼ばれるもので、2枚の鋳型を合せて鋳口から溶融したガラスを流し込むものである。そのうち、鋳造法に関してはガラスの粘性の問題から難しいのではという意見や〔潮見 1988〕、仮に青銅器鋳造技術に依拠していたとして〔河村 1986〕、型合せ印に加えて、鋳口周辺にできるであろう熱による鋳型の変色がみられないことから疑問視する研究者もいた〔藤田 1994〕。2001年に大田区立郷土博物館から刊行された『ものづくりの考古学』のなかには、2枚の鋳型を組み合わせて、鋳口から溶かしたガラスを流し込む方法での鋳造実験の様子が写真と共に紹介されており、生産自体は可能であることが明らかとなった〔大田区立郷土博物館 編 2001〕。同書の中でまとめられている勾玉の製作工程をみると、1枚の鋳型を用いた鋳造法と巻付け引伸し技法の2種類があげられている。前者における孔の製作には、粘土を薄く張った針金を鋳型に指していた可能性が考えられている〔潮見 1988、大田区立郷土博物館 編 2001〕。後者は、粘土を薄く塗った針金に溶かしたガラスを巻き付けた後、一方を引き伸ばすことで勾玉形を作り出すというものである。

また、小瀬康行氏は鋳型の構造から見た場合、大きく1枚型と円筒型の2つに分類できることを指摘している〔小瀬 1994〕。また、小瀬氏は、実験考古学の立場から出土するガラス製勾玉と鋳型とを同定する際には、それぞれの計測値の一致だけを以って行なうこと

は危険であるとも主張している〔小瀬 1997〕。

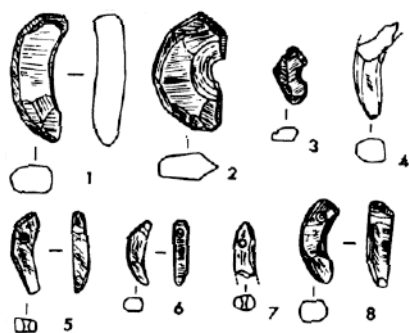
他に議論された点を見ていくと、弥生時代の鋳型を集成したうえで、形態分類・分布・変遷・地域性を把握する研究が行なわれている〔藤田 1994〕。また、ガラス製勾玉の集成も行なわれおり、弥生時代には北部九州地域・近畿地域に分布が集中することが明らかにされている〔藤田 1977、河村 1986〕。小瀬氏は、関東地域における古墳・横穴墓から出土したガラス製勾玉 61 点を取り扱いながら、それらのガラス内部に確認できる気泡と形態・色調・材質との関係性について言及している〔小瀬 1989〕。

### ⑤起源・用途・性格・系譜の検討

まず、起源・用途・性格については、さまざまな学問領域のなかで議論が行なわれている。文献史学では、水野祐氏が勾玉の原義を究明するにあたり、①発生の時期、②最古のオリジナルな形態、③原石の種類を重視して検討を試みている〔水野 1983〕。水野氏は「勾玉の起源は、石器時代中期というきわめて古い時期にさかのぼり、それはたんなる装身具として発生したものではなく、呪的護符的意義をもって身につけられていたものだとおもわれる。やがてその信仰や習俗は広く一般的にひろまり、弥生時代を通じて古墳時代にいたるまで、とくに一部の海の生活に関聯する人々の間で継承されていた。航海の神を信仰し、漁業の営み、航海通商にたずさわっていた、いわゆる広義での古代航海者・海人部族の間には、勾玉信仰が存在した。そしてそれは航海や潮の干満に関係の深い月神の象徴として、月の像をかたどった呪的護符として貴ばれたものであり、ここに勾玉の原義があると私は考える」〔水野 1969a ; 218 頁〕と述べ、当時、定説化されつつあった獣牙起源説を否定し（註 10）、勾玉を月神の象徴であるとしている。また、勾玉の原義には、色彩も考慮する必要があるともしており、勾玉の本来的色彩は青色を尊重していたことも推測している。

民俗学・人類学からのアプローチをみると、金関丈夫氏は勾玉が鈎状をしていることに注目し、「もとは獣の牙から起ったとしても、動物の牙そのものが、餌を口から離さないための装置である。牙も勾玉も、その他の鈎状の飾りも、みなこの、魂拘禁具とみるべきであろう」〔金関 1975 ; 38 頁〕とし、さらに外部から侵入する邪霊を引きとめる役割も備わっていることを推測している。また、金関氏は魂の色と勾玉の色を青白色（註 11）に揃えることによって、その同色性から魂を引き寄せ、その鈎でつなぎとめると考えている。そして、魂の形が球状の頭と細長い尻尾の形をしていると推測したうえで、勾玉の形が単なる鈎ではなく魂の形でもあるとする。その他に、玉に靈魂を鎮める役割を想定している研究者も多くみられる。たとえば、野本寛一氏は静岡県にある焼津神社の御神体（玉）が、水霊を鎮める役割を担っていると考えている〔野本 1975〕。

望月信成氏は、天照大神を太陽、月夜見尊が月、そして素戔鳴尊は嵐・颱風の神格化であり、いずれも天体との関係が深いことを述べたうえで、勾玉の起源を動物の牙とすることを肯定的にとらえながらも、「たまたま`きば`の形が天体の一つの星座の形と共通して



第6図 極楽寺遺跡出土の玉類

いて、やがて「きば」を首にさげて勢力や権勢を表象する意味よりも、一步進んで、天体信仰にまで発展した」と述べ、「曲玉の「おたま杓子」のような形は北斗七星の形」であるとする興味深い説を唱えている〔望月 1961〕。

考古学からのアプローチをしてみると、縄文・弥生時代における玉類の資料が蓄積され、また、海外における玉類の状況も把握されていくに従い、多く

の研究者が獣牙起源について再検討するべきと主張するようになる〔藤田 1960、寺村 1968a、江坂 1989 など〕。1つ事例をあげるならば、土田氏はそれまで提示されてきた起源について整理を行なったうえで、勾玉の祖形・モチーフは玦状耳飾りに求めようとした〔土田 1982〕。この考えには、玦状耳飾りが半分ないし3分の1ほど割れたものに孔をあけ、意図的に修復しようとしたものが縄文時代前期の遺跡から出土しており、それが勾玉状になっているということが根底にある。しかしながら、藤田富士夫氏は生産遺跡では勾玉は当初から勾玉として製作されていることを述べ、玦状耳飾りの再利用が勾玉の起源であるといった土田氏の考えを否定的にとらえている〔藤田 1989〕。また、藤田氏は勾玉の初現を早期末から前期初頭に求めており、事例としては富山県極楽寺遺跡〔富山県教育委員会 1965〕から出土した滑石製品をあげている（第6図）。

そのような状況のなか、木下氏は出土状況などの分析を通して、縄文時代から古墳時代にかけての性格を網羅的に述べている〔木下 2000・2003〕。まず、縄文時代の勾玉には、「鉤」（註12）と「結縛」（註13）の意味があるとして、個人個人の魂を体に結び留め、さらに、肉体から魂が出ていこうとする際には、魂を引っかけて体内から出ていくのを阻止する機能を想定している。次に、弥生時代の勾玉については「権力者の生命を守り、かつ権力の序列に対応した体系を備える装身具」へと変化していくとしたが、一方では頭部に放射状の刻み目を有する、いわゆる丁字頭勾玉の存在から縄文時代の勾玉にみられた「結び」の性格も継続的に持ち続けていたとも述べている。また、縄文時代とは異なり、弥生時代の墓に勾玉が用いられるようになることについては、「魂の再生を信じた農耕社会ならではの考え方が、弥生人に死んでなお勾玉を着装させたのだろう」と解釈している。古墳時代の勾玉は、弥生時代の勾玉と同様に、霊的なものを肉体に留める役割を想定しつつも、①他の玉類と綴って用いられること、②勾玉の材質に多様性がみられること、③祭祀に用いられるとされる石製模造品の登場の3点を根拠として、弥生時代から古墳時代に移り変わっていくなかで勾玉の意味が変化していることを指摘している。また、「身分表示の中心的役割を担うが、祭祀具セットの影響により、古墳時代後半ついに伝統的な呪力を失う」としており、古墳時代のなかにおいても勾玉の意味が変化することも述べられている。

寺村氏は、民俗学者である谷川健一氏と対談するなかで、第2期でとりあげた折口氏の考えに対する自身の考えを述べている〔寺村・谷川 1984〕。その対談のなかで寺村氏は、



古代の玉に込められていたであろう意味をすべて包括して一言でいうのは困難であるとしている。すなわち、同じ古代の玉類でも意味という観点からみた場合、そこには時期差がみられるということである。そして、玉類と魂に関する折口氏の考えは、古墳時代中期（5世紀中葉）から古墳時代後期（6世紀）までの玉類に対応し、これは古墳時代終末期（7世紀）までは下らないとしている。

さらに、寺村氏は古墳時代の玉類の様相には、前・中・後の3つの画期があることを述べ、第1期における玉類の性格は、呪的・宝的性格がみられるとしている。第2期では、滑石製模造品の種類が古墳と祭祀遺跡とは異なっていることなどを根拠に、祭祀司掌者による神祭りの玉と首長が直接司る玉類の2つに性格が分離していくとしている。また、この時期に関して、①1期でみられたヒスイ製勾玉と碧玉製管玉といった、いわば統一された材質・色彩・形態観が多様化していくのが古墳の副葬形態にみられ、②形式化、粗造化された滑石製模造品の盛行は祭祀遺跡で確認でき、③子持勾玉の出現は単独出土するようになるといった3つの特徴がみられるとしている。その上で、呪的・宝的性格を保有していた第1期の玉の宝的性格は①にみられ、呪的性格から祭性への変化は②に、呪性の伝統的残存は③にそれぞれみられるとした。第3期には、祭祀遺跡や子持勾玉が減少することに加え、古墳への副葬品において多彩化が弱まる一方で、仏教と玉との関係性が色濃くみられるようになることを指摘している。

乙益重隆氏は、勾玉を含む玉類を壺や甕などの容器に納め、土の中へ埋める行為について述べられており、その性格には地鎮信仰、すなわち「土地の神に対する信仰」との関係性を指摘している〔乙益 1987〕。そして、これが古代中国でみられる瘞玉信仰に基づくものと推測している。大場磐雄氏は勾玉に呪力・霊力が内在していること、さらに接続することでその呪力・霊力を強化できることを当時の人びとが考えていた可能性を推測している〔大場 1962〕。この考え自体が子持勾玉の性格についての解釈に端を発するものであるにせよ、勾玉の宗教的性格を考えるうえで大変興味深いものといえる。

一方、藤田氏は古墳時代から奈良時代に移り変わるさい、勾玉の宗教的性格が急激に変化したことを指摘している。古墳時代にはみられなかった用途として、奈良県飛鳥寺の塔心礎から金銅製舍利容器とともに、ヒスイ製勾玉2点とその他多くの玉類が舍利荘嚴具として用いられている事例や、奈良県の東大寺法華堂にある不空罽索観音像（740年頃）が被っている宝冠に垂れ下がっているヒスイ・水晶・ガラス・コハクといった様々な材質の勾玉の事例をあげている〔藤田 1992〕。奈良時代の勾玉については、森浩一氏も述べている。森氏は、奈良時代において寺院などでみられる大半の勾玉が、平城京や寺院を造るさいに壊した多くの古墳からでてきたものであるとし、寺院における勾玉の利用には、ただ単に再利用といった意味というよりも「被葬者を鎮める」意味が多分に含まれていたことを推測している〔森 1992〕。

次に、系譜の検討について述べるならば、第5期になると、ある時代の勾玉とそれより前の時代の勾玉との間に系譜的つながりがあるか否かについて議論するさいには、形態や

材質の比較から検討を行なうといった、より実証的な方法をとるようになる。藤田氏は「縄文文化期の硬玉と古墳内のそれとは、質と色とに類似のものが多いが、後者のものの分布が全国的であることと、良質半透光の玉材の少ないことをはっきり区別すべきである」〔藤田 1960 ; 617 頁〕と述べている。

また、水野氏は弥生時代中期から出現する丁字頭勾玉が、「頭部に隆節をつけて、瘤節状を呈する」縄文時代の勾玉から影響を受けていることを推測している〔水野 1969b〕。弥生時代の勾玉の発生については、他にも多くの研究者が言及している。森氏は、弥生時代の勾玉の基本には獣形や緒締形といった縄文系勾玉があったとしたものの、定形化の要因には当該期に流入してきた楽浪系文物の影響を推測している〔森 1980〕。木下氏は、定形勾玉の原型としてプロト定形勾玉を設定している〔木下 1987〕。このタイプは、菜畑型勾玉ともよばれ、縄文文化的要素と渡来的要素の双方を兼ね備えたものとされる。さらに、木下氏は弥生時代の勾玉が縄文時代の勾玉に起源し、これが弥生時代前期に入ると形態と質の両面において自立的に変化していくとも述べている〔木下 2003〕。

次に、地域から地域への伝播という観点でみると、河村氏は弥生時代の勾玉が、北部九州地域の周辺で確認できた縄文時代の勾玉が祖形となり誕生したものであり、ヒスイを用いるという考えは北陸地域との関係性を推測している〔河村 2000〕。また、東海地域の影響が西に及ぶことによって、九州地域に緒締形勾玉が出現することや〔木下 2001〕、北陸地域で作られた縄文時代の勾玉が時間を経て、弥生時代前期には大阪府、弥生時代前期末から中期前半には山口県へと伝播した可能性も指摘されている〔藤田 2001〕。

その他については、奈良県飛鳥寺で確認されたヒスイ製丁字頭勾玉の孔に紐づれの痕が確認できることから、それが長期間使用された伝世品であることが明らかにされている〔藤田 1992〕。

## ⑥沖縄県・海外資料への着目

沖縄県の勾玉については、横山学氏が沖縄県八重山郡波照間島の家で代々伝えられている勾玉と、同地域の畑から出土した勾玉の計2点の報告を行なっている〔横山 1971〕。横山氏は穿孔の仕方から前者をA型、後者をB型に分け、A型をより古いものと考えた。また、第4期（1940年代から1959年まで）でとり上げた、宮古島の勾玉が17世紀後半まで流入していたという下地氏の研究をふまえながら、これら2種類の勾玉の歴史的背景について考察を加えている。そのうち、A型の勾玉は、当該地域ですでに存在していたものであり、琉球王朝が中央集権を確立されるために他地域の有力者へ配ったものであったと推測している。

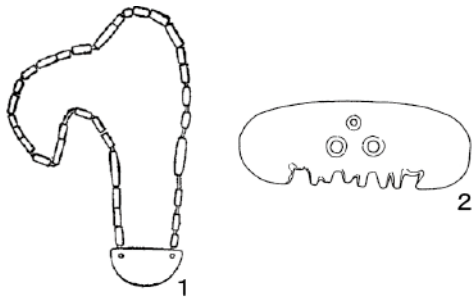
岸本竹美氏は、沖縄本島および宮古・八重山諸島におけるグスク時代（12世紀から16世紀）と近世の玉類を集成し（第2表）、形態別・材質別の出土傾向や、遺跡の性格および年代別にみた出土状況など、様々な視点でもって当該地域における玉類の様相を明らかにしようと試みている〔岸本 2003〕。

海外の勾玉については、朝鮮半島における先史時代の勾玉の様相が明らかにされていくに従い、三国時代の勾玉がどのような過程を経て出現・展開していくのか、について集中的に議論されていく。西谷正氏は無文土器時代から原三国時代における勾玉の形態分類を行ない、種類・分布などから変遷の把握を行なっている〔西谷 1982〕。そのなかで、西谷氏は三国時代の勾玉について、先史時代以来の伝統のうえに成り立つものと捉えており、朝鮮半島での独自の成立・発展を考えている。

この三国時代の勾玉に対する考えは、朝鮮半島の研究者に多く支持されていくが〔崔 1986 など〕、それぞれ考え方に若干の差というものがみられる。たとえば、金元龍氏は日本列島・朝鮮半島のそれぞれの地域で勾玉が自生的に成立したものの、ヒスイ使用の風習は5世紀頃に日本列島から朝鮮半島へ渡ってきたものと推測している〔金 1986〕。また、李殷昌氏は、三国時代（3世紀以後）の玉類の文化について言及していくなかで、勾玉の変遷については原始的曲玉（新石器時代）—始源型的曲玉（祖型的曲玉・青銅器時代—初期鉄器時代）—典型的曲玉（古式曲玉・原三国時代）—全盛型的曲玉（新型曲玉・三国時代）といった系譜的發展を想定している〔李殷 1991〕。さらには、朝鮮半島での出土量が膨大であり、日本列島からの流入だけでは説明がつかないとした一方で、両国間における玉類の文化の交流はあったとしている。すなわち、先史時代から三国時代へと勾玉が系譜的に發展してはいるものの、両国にみられる勾玉、特にヒスイ製のものをを用いる文化は同系統のものであったことが指摘されている。大坪志子氏は、朝鮮半島における勾玉の形式設定を行ない、形態ごとの変遷について考察を加えている〔大坪 2001・2003〕。その結果、先史時代にみられる半球形よりも前に確認できる原始形と、三国時代にみられるC字形との間に連続性がみられることを明らかにしている。これらをふまえて、大坪氏は朝鮮半島では定形とヒスイとの組み合わせが日本列島から入ってきてはいるが、C字形の起源は朝鮮半島にあることを想定している。

その一方で、朝鮮半島内での独自の成立・発展を疑問視する研究者もいた。李仁淑氏は、三国時代の勾玉の系譜に関して、先史時代に見られる天河石製勾玉と、三国時代のヒスイ製勾玉との間に直接的な祖形となる資料が不足していることを根拠として、両者間に系譜的繋がりを見出し難いとしている〔李仁 1987〕。田村晃一氏もヒスイ産出地問題に加えて、丁字頭勾玉の出現期が日本よりも遅れることなどをあげ、朝鮮半島内での自立的発展に疑問をもっている〔田村 1986〕。

門田誠一氏は、各国の研究者が提示した起源説を整理したうえで、①朝鮮半島でヒスイの産出地が見つかっていないこと、②三国時代の古墳におけるヒスイ製勾玉の出土状況、③新羅の冠に様々な種類の勾玉がみられ、そのなかには獣形勾玉も含まれていることの3点に注目している〔門田 1990〕。特に③であげた獣形勾玉は、日本の弥生時代に確認でき、古墳時代ではほとんど見ることはできない。そして、朝鮮半島の新石器時代でもそれは知られていない。そういったものが三国時代の冠の飾りに混ざって確認できることをふまえて、門田氏は朝鮮半島で古い形態の勾玉が三国時代まで系譜的繋がりをもって伝わってい



第7図 研究史でとり上げられている中国の玉器たち（縮尺不同）  
（1：遼寧省鄭家窪子遺跡の半月形玉類  
2：遼寧省牛河梁遺跡の勾雲形玉器）

た可能性は低いとし、新羅の有力者が外の国から一括して手に入れていた状況を想定している。

また、日本列島との比較という観点でさらにみると、寺村氏は古墳時代中期になると、日本列島でヒスイ製勾玉の出土が減少する一方で、朝鮮半島では増加していることや、日本列島の古墳から金製品や鉄器などが大量に副葬され始めることをふまえて、朝鮮半島からは金と鉄がもたらされ、日本列島からはヒスイ製勾玉が交易品として

流出していた可能性を示唆している〔寺村 1984〕。また、李殷昌氏や門田氏によって、朝鮮半島のヒスイ製勾玉は、6世紀後半に入ると副葬事例が少なくなり、7・8世紀になる頃には寺院の塔心礎などの仏教信仰に関わる遺構から出土することがわかってきた〔李殷 1991、門田 1988・1989〕。これは日本列島でもみられる現象であり、この共通性をもって、朝鮮半島のヒスイ製勾玉が日本列島から移入されたものと考えられている。

他には、先史時代の勾玉の成立についての研究も行なわれている。西谷氏は先史時代の勾玉には歯牙製品が玉石化したものと、中国東北部の遼寧式文化の影響がみられる天河石製半環形勾玉の2つの系統が想定できるとしている〔西谷 1982〕。それ以降、先史時代の勾玉については、朝鮮半島北部に集中して分布することが明らかにされたり〔李殷 1991〕、半環形勾玉と中国遼寧省鄭家窪子遺跡の半月形玉類（第7図の1）との関係性も指摘されている〔韓 1976、李健 1991〕。

また、大坪志子氏は不定形・半環形・原始形・半月形に中国東北地域からの影響をみており、加えて、獣形と遼寧地域にみられる勾雲形玉器（第7図の2）との間に関係性があるとしている〔大坪 2001・2003〕。

## ⑦科学分析の導入とその成果

まず、出土する玉類自体が科学分析の対象となっていく。その背景には、蛍光X線による産地分析の技術が飛躍的に発達したことがあげられ、その結果、考古学的研究にもよくとり入れられるようになる。茅原一也氏は、青海地域における玉類の科学分析を行ない、当該地域の近くで産出するヒスイと蛇紋岩との比較を行なっている〔茅原 1964 など〕。さらに、茅原氏は新潟県糸魚川産ヒスイの分析を窓口として、日本列島内外を問わずヒスイ輝石岩の事例を紹介していくことにより、ヒスイの文化圏を世界規模で把握しようと試みている〔茅原 1987〕。

その他にも当時、京都大学原子炉実験所にいた藁科哲男氏が精力的に出土玉類の科学分析を進めている。藁科氏は各地から出土したヒスイ・碧玉製玉類に対して、蛍光X線分析法などを用いて産地同定を行っており、その分析の結果は各報告書などで発表されている〔藁科 1990・1994・1998a〕。具体的な成果をみると、佐賀県宇木汲田遺跡出土のヒ

スイ製勾玉が糸魚川産であることや〔藁科 1997〕、糸魚川産のヒスイや島根県花仙山産の碧玉を使った玉類が全国的に分布していることなどが明らかにされている〔藁科 1988・1998b など〕。さらに、藁科氏は縄文時代の勾玉の材質のなかに、ヒスイではない緑色の濃い石材があることを指摘し、その産出地に南九州地域を推測している〔藁科 1999〕。この藁科氏の研究は、南九州地域からはじまる勾玉の生産や流通を考える契機となったことから重要な成果といえる。

また、崔恩珠氏が朝鮮半島の勾玉において、初めて蛍光X線分析を導入し、科学的なアプローチから産地の特定を試みている〔崔 1986〕。その結果、朝鮮半島のヒスイ勾玉と日本列島の勾玉とは異なる分析結果がでたことが報告されている。この報告については、コレクションを分析資料としていたり、分析条件が資料によって異なるため、そのまま分析結果を併用することはできないという批判がみられた。そこで、早乙女雅博氏と早川泰弘氏は、出土地が明らかな慶尚南道にある梁山夫婦塚古墳出土勾玉2点と、奈良県にある古市方形墳出土勾玉2点の計4点のヒスイ製勾玉に対して、同じ蛍光X線装置を使い分析を行なった〔早乙女・早川 1997〕。その結果、朝鮮半島と日本列島の両方のサンプルから同じ分析結果が出てきた。このことをふまえて、梁山夫婦塚古墳出土のヒスイ製勾玉が日本のヒスイを用いて作られていたことが考えられている。但し、今後、朝鮮半島においても同様な分析結果が出るヒスイの産出地が確認される可能性もあり、その時には再検討が必要であることも述べられている。

また、玉作関係遺跡から出土する内磨砥石も分析の対象となっている。出雲地域から出土する内磨砥石には紅簾片岩製のものが多くみられる一方で、出雲地域ではその産出地は知られていない。とすると当然のことながら、どこから持ってきたのが問題になっていく。この点については、勝部衛氏と渡辺暉夫氏らが積極的に研究を行っており〔勝部・渡辺 1983a・1983b〕、内磨砥石に使われる紅簾片岩が徳島県産とするよりは、紀伊半島産とした方が妥当であることが指摘されている。また、島根県出雲玉作跡遺跡から出土した紅簾片岩製内磨砥石の成分も提示されており〔渡辺 1984〕、他の玉作り遺跡から同様な砥石が確認されたときの比較資料として重要なものとなっている。

その他の科学分析としては、ガラス製勾玉の成分分析も行なわれている。事例を1つあげるならば、三浦清氏・渡辺貞幸氏が島根県西谷3号墓から出土したガラス製環状勾玉の成分分析を行なっている〔三浦・渡辺 1988〕。

## ⑧史料のなかの勾玉研究

まず、「魏志倭人伝」のなかに記されている「青大句珠」の材質が議論の対象となっている。これについては、第3期(1916年から1939年まで)に橋本氏が碧玉製、第4期(1940年から1959年まで)に原田氏がヒスイ製といった考えがすでに提示されている。

そのようななか、斎藤氏は弥生時代中期にみられるガラス生産技術の発達を根拠として、「青大句珠」がガラス製であった可能性を推測している〔斎藤 1966〕。一方、水野氏・寺

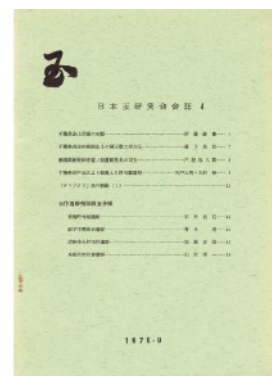
村氏はヒスイ製を主張しており〔水野 1969b〕、そのうち、寺村氏は当該期における出土玉類の様相や、本来的には大陸の技術で作られたガラス製勾玉を魏への貢上品とはしないのではないか、という観点から論を展開している〔寺村 1968b〕。この寺村氏の考えに対して、藤田氏は、弥生時代中期の北部九州地域では良質なヒスイ製勾玉がみられるが、邪馬台国の時代である弥生時代終末期・古墳時代初頭の北部九州地域でも同じような状況であったのかは疑問としてうえて、「青大句珠」が北陸地域の「琅玕質翡翠大勾玉」のことを指していると推測している〔藤田 2000〕。

また、水野氏は、歴史書のなかに記されている王権のシンボルとしての三種の神器と勾玉との関係性について考察を行なっている〔水野 1969c〕。この三種の神器については、1990年に刊行された『歴史読本』でも特集されており、歴史学・考古学・国文学・比較神話学・宗教学といった、それぞれの学問領域において、神器の意味や発生時期は現段階で何処までいえるのかを一般の人々が読んでも理解しやすいようにまとめられている〔新人物往来社 1990〕。さらには、森浩一氏も同様に三種の神器の1つである八坂瓊勾玉に着目しており、記・紀が編纂される少し前の時期にあたる6世紀の勾玉の様相や、現在の新潟県、古代でいうところの越の国で産出されるヒスイの拡がりを見ていくことで、その実像を明らかにしようと試みている〔森 1993〕。

その他の議論として、寺村氏が当時の人びとが有していたであろう「たま」の概念規定や、時間の経過による認識の変化を文献史料からひも解いていこうとしている〔寺村 1972・1980b〕。具体的には、『日本書紀』の中にみられる「たま」の記載を集め、神代から持続にかけて、「たま」を記す際に用いる漢字がどのように変化しているのかを追求している。その結果、人名に関しては4世紀に「瓊」、5世紀中葉以降は「玉」、6世紀中葉以降では「珠」と変遷していることから、崇神・仁徳・継体のいわゆる三王朝交代〔水野 1952〕を期に「たま」に関する観念が変化していることが指摘されている。

## ⑨「玉」を冠する研究会の発足

1960年代頃から玉類に興味をもった研究者のなかに、互いに集まり、深く検討し合いたいという気運が高まっていく。そして、1970年に「玉をめぐる種々のことがらについて、これを総合的に研究して行こうとする」(寺村 1970 ; 11 頁) 研究者らが、主要なメンバーとなり、日本玉研究会が発足される。それとともに、機関誌『日本玉研究会会誌』が1970年に創刊されるが、その後、4号を発刊して止むことになる(第8図)。最終巻である4号が発刊されたのは、1975年のことであった。この研究会では、メンバーが月に一度集まり、玉類に関する研究史の整理や、玉作り遺跡の報告・研究、玉類を含めた社会や文化に対する意見の交換といった玉類をめぐるすべての事がらについて検討が行なわれた。注目すべき点をあげるならば、この研究会では、考古学



第8図 『日本玉研究会会誌』4号の表紙

だけではなく地名学からのアプローチも試みていることであり、これは玉類の文化を複合的な視点で捉えようとしているあらわれと思われる。事例をあげるならば、各地にみられる「タマツクリ」名の収集が行なわれている（日本玉研究会 1975）。

また、機関誌に投稿されたもののなかで、勾玉に関連させて述べるならば、内藤武義氏による勾玉の製作工程の復元的研究（内藤 1970）や、藤田氏による富山県極楽寺遺跡の資料を基にした勾玉の発生に関する考察（藤田 1972）、加えて、藤下昌信氏（藤下 1975）や戸根与八郎氏（戸根 1975）は各地で出土した勾玉の報告を行なっている。この日本玉研究会の発足やそれに伴う機関誌の発刊によって、徐々にではあるが、出土勾玉を含んだ玉類の情報が広く研究者らに共有されるようになる。この一連の動きは、玉類が考古学的研究の対象に成りえるといった認識を研究者のなかに想起させるよい契機になったと思われる。

2003年5月には、上述した日本玉研究会の会長であった寺村氏を先頭にして、その研究会を支えたメンバーの多くがもう一度集まり、日本玉文化研究会を発足させる。この研究会の成果が玉類の研究動向へ影響を与えていくのは、機関誌が創刊される2004年以降である。そのため、日本玉文化研究会については第6期にまとめて記述していきたい。

## 第6期；資料集成と消費地・流通研究の活発化

第6期は、引き続き、玉作関係遺跡・出土玉類が年々増加していく。その結果、第5期（1960年代から2003年まで）よりもさらに、研究者個人でそれらを網羅することが困難になっていく時期である。この問題に対応するべく、さまざまなレベルで集成が行なわれ、その成果報告がより重要視されていく。とくに第6期になると、地域を横断した集成が数多く行なわれていくことで、日本列島を俯瞰する研究が活発になる。それと並行して、重要な資料はある程度、蓄積されたという観点から、各時代における玉類の様相を大まかに把握する、いわば概説的な研究も多く行なわれ、その成果はシンポジウム資料や機関誌の特集号などに収められていく。この時期については、①資料集成と概説的研究、②玉作り研究、③消費地・流通の研究、④起源・用途・性格・系譜の検討、⑤沖縄県・海外資料への着目、⑥科学分析の導入とその成果、⑦史料のなかの勾玉研究、⑧「玉」を冠する研究会の展開と学会の発足の8つに分けて述べていきたい。時代は、2004年以降とする。

### ①資料集成と概説的研究

まず、2004年に寺村氏らによって、ほぼ全ての県を網羅するかたちで玉作遺跡の集成が行われていく〔寺村 編 2004a〕。同年、島根県古代文化センターの松本岩雄氏らが中心となり、中国地域の玉作関係遺跡（生産遺跡）の集成が行なわれ、その成果が『古代出雲における玉作の研究Ⅰ』としてまとめている〔島根県古代文化センター 2004〕。翌年には、同じく島根県古代文化センターから、中国地域の玉類の出土遺跡（消費地）を集成し『古代出雲における玉作の研究Ⅱ』が刊行された〔島根県古代文化センター 2005〕。この3冊の書籍・報告書の刊行は、玉類研究のある種1つの到達点であるが、それと同時に、列島規模で出土玉類を把握する研究が活発となるきっかけを与えるものであったと評価することが

第3表 第6期にみられる玉類の集成に関する主要文献

文献	時代	材質	地域	
島根県古代文化センター 2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ－中国地方の玉作関連遺跡集成－』。	縄文 ～平安	石	中国	生産地
寺村光晴 編 2004『日本玉作大観』吉川弘文館。	縄文 ～中世以降	全般	全国的	生産地
島根県古代文化センター 2005『古代出雲における玉作の研究Ⅱ－中国地方の玉製品出土遺跡集成－』。	縄文 ～平安	石	中国	消費地
野村 崇 2005「北海道出土のヒスイ製装飾品」『地域と文化の考古学Ⅰ』六一書房 531-546頁。	縄文	ヒスイ	北海道	消費地
高橋浩二 編 2005『ヒスイ製品の流通と交易形態に関する経済考古学的研究』平成15～16年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究成果報告書。	縄文 ～中世以降	ヒスイ	全国的	生産地・消費地
埋蔵文化財研究会 大阪市文化財協会 2005『古墳時代の滑石製品－その生産と消費－』発表要旨・資料集。	古墳	滑石	全国的	消費地
九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回 九州縄文研究会沖縄大会資料集。	縄文	石	九州	消費地
日本玉文化研究会 2004～2006「縄文時代ヒスイ玉集成」『玉文化』創刊号～第3号。	縄文	ヒスイ	全国的	生産地・消費地
青森県埋蔵文化財調査センター 2006『研究紀要』青森県における装身具の集成 縄文時代編 第11号。	縄文	全般	青森県	消費地
藤原秀樹 2006「北海道における縄文時代後期・晩期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』第3号 玉文化研究会 23-90頁。	縄文後期 ～晩期	ヒスイ	北海道	消費地
日本玉文化研究会 2006『北近畿における弥生～古墳時代の玉』北近畿の主要な玉作関係遺跡・玉類出土遺跡資料集。	弥生 ～古墳	全般	北近畿	生産地・消費地
北山峰生 2007「北近畿における墳墓出土玉類の検討」『玉文化』第4号 日本玉文化研究会 1-39頁。	弥生 ～古墳	石・コハク	北近畿	墓
青森県埋蔵文化財調査センター 2007『研究紀要』青森県における装身具の集成 弥生時代～平安時代編 (付・縄文時代追加編) 第12号。	縄文 ～平安	全般	青森県	消費地
松本一男 2008「静岡県内出土の縄文時代玉集成－玉から見た縄文時代－」『静岡県考古学研究』40 25-38頁。	縄文	石	静岡県	消費地
黒坂秀樹 2008「考察編 高月における玉作の理解に向けた基礎的覚書 (弥生編) 一近江玉作研究ノート3」『横山遺跡Ⅰ (七郷遺跡群Ⅰ)』高月町教育委員会 186-357頁。	弥生	石	全国的	生産地
日本玉文化研究会 2008『北陸における弥生・古墳時代玉作の変革 玉作遺跡関係資料集』。	弥生 ～古墳	石	北陸	生産地
山陰考古学研究会事務局2008『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究会資料集。	弥生	石	山陰	消費地
日本玉文化研究会 2008～2010「縄文時代翡翠玉集成」『玉文化』第5号～第7号。	縄文	ヒスイ	全国的	生産地・消費地
沖縄県教育庁文化課 編 2011『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第149集・沖縄県史料調査シリーズ 第4集。	縄文 ～近世	石・ガラス	沖縄	消費地
九州縄文研究会 南九州縄文研究会 2012『縄文時代における九州の精神文化』第22回九州縄文研究会 鹿兒島大会資料集。	縄文	石	九州	消費地
日本玉文化研究会 2012「翡翠玉集成」『玉文化』第9号。	縄文	ヒスイ	全国的	生産地・消費地
高橋浩二 編 2012『韓半島出土翡翠勾玉集成－釜山・金海編－』平成21年～23年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究成果報告書。	三国	全般	釜山・金海	消費地
関 雅之 2013「新潟県における縄文・弥生時代ヒスイ勾玉の一考察－縄文勾玉の形態と弥生勾玉の生産及びヒスイ産地の玉問題－」『新潟考古』第24号 新潟考古学会 61-80頁。	縄文 ～弥生	ヒスイ	新潟県	生産地・消費地
宇野慎敏 2013「北九州市内出土の勾玉集成」『研究紀要』第27号 北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室 11-19頁。	縄文 ～古墳	全般	北九州市	消費地
大坪志子 2015「付篇 九州出土縄文時代後晩期玉集成」『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』 雄山閣。	縄文後晩	石	九州	生産地・消費地
宇野慎敏 2015「宗像および周辺地域出土勾玉の地域性とその歴史的意義－宗像市・福津市・古賀市・新宮町を中心として－」『法政考古学』第41集 1-15頁。	弥生 ～古墳	全般	北部九州	消費地
高橋浩二 編 2016『韓半島出土翡翠勾玉集成 忠清道・全羅道編』平成24年～27年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書。	三国	石	忠清道・全羅道	消費地
遺跡発行会 2016「愛媛県古代装身具出土遺跡一覧」『遺跡』第50号 埋蔵文化財の保護と考古学研究的発展のために』 83-118頁。	縄文 ～古墳	全般	愛媛県	消費地

※古代歴史文化協議会では、14県が共同して、古墳時代における玉類の研究を行なっている。また、2015年～2018年の3年間をかけて成果を報告する予定である(山陰中央新聞の2014年7月25日金曜日)。また、共同した14県における玉類の集成データは、同協議会のホームページ上で公開されている。



第4表 第6期における玉類の主要なシンポジウム資料と特集企画

シンポジウム資料

ヒスイ文化フォーラム委員会 2005『ヒスイ文化フォーラム2005 神秘的勾玉－弥生・古墳時代の翡翠文化』資料集。
日本玉文化研究会 2005『日本玉文化研究会第3回北海道大会研究発表会要旨・資料集』
九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回 九州縄文研究会沖縄大会資料集。
日本玉文化研究会 2006『北近畿における弥生～古墳時代の玉』北近畿大会 発表要旨集。
日本玉文化研究会 2007『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会第5回シンポジウム栃木大会資料集。
糸魚川市 2008『ヒスイ文化フォーラム2007 ヌナカワとヒスイー講演記録ー』。
日本玉文化研究会 2008『北陸における弥生・古墳時代の玉作の変革』発表要旨集。
日本玉文化研究会 2011『魏志倭人伝の末盧国・伊都国－王(墓)と翡翠玉－』資料集。
九州縄文研究会 南九州縄文研究会 2012『縄文時代における九州の精神文化』第22回九州縄文研究会 鹿児島大会資料集。
徳島県教育委員会・徳島市立考古資料館・日本玉文化学会 2013『玉の魅力に迫る－四国と周辺の玉生産と玉文化－』開館15周年記念特別企画展記念シンポジウム 資料集。
鳥取県埋蔵文化財センター 2013『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺池遺跡の交流をさぐる～』青谷上寺池遺跡フォーラム2013。
藤田富士夫 2013『シンポジウム 予稿 勾玉とは何か－その起源と形の変化－』『形の科学会誌』第28巻第1号 76-77頁。
日本玉文化学会 2014『関東地方の玉文化研究の歩み』平成26年度 日本玉文化学会研究会 関東大会 資料集。
小松市埋蔵文化財センター 2014『日本海を行き交う弥生の宝石in小松』フォーラム資料。
日本玉文化学会 2015『古墳時代社会と出雲の玉』平成27年度 日本玉文化学会 島根大会 発表要旨集。
朝日町教育委員会 朝日町中央公民館 NPO法人野外調査研究所 2015『ヒスイと縄文人』第1回翡翠フォーラムin朝日町 北陸新幹線開業・浜山玉づくり遺跡発掘50周年 記念企画 資料集。
古代歴史文化協議会 2015『古墳時代の玉作りと神まつり』第1回古代歴史文化協議会講演会資料集。
朝日町教育委員会 朝日町中央公民館 NPO法人野外調査研究所 2016『古墳時代の玉の謎』第2回翡翠フォーラムin朝日町 北陸新幹線開業・浜山玉づくり遺跡発掘50周年 記念企画 資料集。
古代歴史文化協議会 2016『玉から古代日韓交流を探る』第2回古代歴史文化協議会講演会資料集。
九州考古学会・嶺南考古学会 2016『日・韓の装身具』九州考古学会・嶺南考古学会第12回合同考古学大会 資料集。
朝日町教育委員会 朝日町中央公民館 NPO法人野外調査研究所 2017『古代人の心性と玉文化』第3回翡翠フォーラムin朝日町 北陸新幹線開業・浜山玉づくり遺跡発掘50周年 記念企画 資料集。
日本玉文化学会 糸魚川市教育委員会 2017『日本玉文化学会 平成29年度研究会 in糸魚川 めなかわの玉と石材』
古代歴史文化協議会 2017『古墳時代の玉飾りの世界』第3回古代歴史文化協議会講演会資料集。

特集企画

雄山閣 2004『季刊考古学 縄文時代の玉文化』第89号。
雄山閣 2006『季刊考古学 弥生・古墳時代の玉文化』第94号。
ニューサイエンス社 2008『考古学ジャーナル 特集 玉生産研究の現状』No.567 1月号。

できよう。それ以降の集成をみると（第3表）、縄文時代のヒスイ製玉類〔日本玉文化研究会 2004～2006 など〕や古墳時代の滑石製玉類〔埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 2005〕などを対象とした全国的集成が行なわれている。2014年には、関東地域・近畿地域・中国地域・九州地域の計14県が、それぞれの地域および隣接地域における古墳時代の玉類を共同で研究していくことが発表された。そして、2015年から2018年までの3年間をかけて、その成果を報告するとしている（註14）。また、山陰地域における弥生時代の玉類や〔山陰考古学研究集会事務局 2008〕、九州地域の縄文時代装身具〔九州縄文研究会・沖縄大会実行委員会 2005 など〕、北海道における縄文時代の玉類〔野村 2005〕、愛媛県の古代装身具〔遺跡発行会 2016〕、朝鮮半島のヒスイ製勾玉〔高橋 編 2016 など〕な

ども集成・報告されている。さらに、北海道における縄文時代後・晩期の墓から出土したヒスイ製玉類〔藤原 2006〕や、北近畿地域における弥生時代から奈良時代の墳墓出土の玉類〔北山 2007〕なども集められている。

次に、概説的研究について述べるならば、第6期に入り、勾玉を含む玉類に関連したシンポジウムが多く行なわれていく(第4表)。それらを見てみると、ヒスイの産出地がある北陸地域や、多数の玉作り遺跡が集中してみられる関東地域・山陰地域・四国地域、そして定形勾玉が成立する九州地域での開催が目立つ。また、開催地域で玉類の出土が顕著にみられる時代にテーマを絞ってシンポジウムが催されている。シンポジウムの内容は、いずれも出土玉類の種類や材質・製作技術・変遷・分布・地域性・出土遺構・流通ルート・地域間交流・材質の産出地の問題などを整理し、開催地域における玉類の文化について、大まかな全体像を浮き彫りにすることが、開催の目的となっている。それと並行して、各時代における玉類の研究結果が整理されていく(第4表)。具体的に述べるならば『季刊考古学』では「縄文時代の玉文化」や「弥生・古墳時代の玉文化」〔雄山閣 2004・2006〕、『考古学ジャーナル』では「玉生産研究の現状」〔ニューサイエンス社 2008〕といったような特集が組まれている。これらを読むことで、各時代の玉類の様相がある程度、把握することができるようになっている。

## ②玉作り研究

縄文時代よりも弥生時代以降の時代を対象としたものが多くみられ、弥生時代の玉作り遺跡に関する発掘調査報告書がいくつか刊行されている。事例をあげるならば、新潟県吹上遺跡〔新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会 2006〕や石川県八日市地方遺跡〔石川県小松市教育委員会 2003・2014〕では、中期のヒスイ製半球形勾玉が生産されており、福岡県潤地頭給遺跡〔前原市教育委員会 2005〕では、終末期から古墳時代初頭にかけて、蛇紋岩製勾玉が作られていたことが明らかとなった。さらに、鳥取県青谷上寺遺跡では、すでに調査された玉作関係遺物についての整理報告書も出されており〔鳥取県埋蔵文化財センター 2013〕、そのなかで製作工程の復元が行なわれている。

それぞれの研究をみていくと、河村氏は製作技術から縄文時代と弥生時代とを明確に区別できるとしている〔河村 2008〕。具体的には、弥生時代になると石鋸のようなもので石材に溝をつけて、そこに少しの衝撃を与えて割っていくといった擦切技法が採用されることを指摘している。また、高橋氏は北陸地域でのヒスイ製半球形勾玉の製作工程や地域性について考察を行なうだけでなく、河村氏が指摘した擦切技法とヒスイの質との関係性に着目して、時期差というものを想定している〔高橋 2005・2008・2010・2012a〕。擦切技法は、緑色透明な勾玉を効率的に生産することができ、その技法の最盛・衰退と出土玉類の質が密接に関係していく。そして、縄文時代では白色不透明なものが目立ち、弥生時代前期・中期になると緑色透明への意識が高まり、後期に入るとその傾向は弱まるのが指摘されている。その他にも、高橋氏はヒスイ製定形勾玉の製作技術やその工程、流通過程

をみていくと共に、北陸地域における生産の開始が弥生時代後期後半から終末期前半まで遡ることも述べている〔高橋 2012b〕。また、廣瀬氏は北陸地域で作られる半球形製勾玉が、北東部と南西部とでは形態差がみられるとし、1つの地域であっても地域差というものがあることを指摘している〔廣瀬 2006〕。この半球形製勾玉については、厚さが中期から後期になるにつれ、薄くなる傾向が明らかにされており、法量から時期差の把握ができるとする研究もある〔斎藤 2011〕。

その他の地域をみると、田平徳栄氏は製作過程で生じる2次・3次製品の出土量をもとに、唐津地域でヒスイ製勾玉が作られていた可能性を推測している〔田平 2008〕。

古墳時代について述べるならば、埼玉県にある反町遺跡・前原遺跡では、前期の水晶製・瑪瑙製勾玉が生産されていたことが明らかにされている〔ユニー株式会社・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011、都市再生機構・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012〕。特に、前期の関東地域で水晶製勾玉が作られていたという事実は、他の地域との交流を考えていくうえで重要な要素となることから、玉類の研究者が注目している。たとえば、宮城県入の沢遺跡から出土した前期の水晶製勾玉が、形態や穿孔技術の特徴から関東地域との関わり合いが推測されている〔大賀 2017〕。反町遺跡における玉作りについては、山陰地域の工人との関係性が考えられているが〔山田 2015 など〕、大賀氏は両地域の空間的距離の問題から疑問視している〔大賀 2008a〕。また、同時期の勾玉生産については、栃木県市ノ塚遺跡における瑪瑙製勾玉の製作工程も明らかにされている〔上野・川又 2015〕。

他の地域について述べるならば、大賀氏が奈良県曾我遺跡における玉生産の様相ふまえて、生産される玉類の種類やその規模には時期的変化がみられることを明らかにしている〔大賀 2008b〕。また、清水邦彦氏はガラス製勾玉の鑄型の分析から、近畿地域と東海地域との交流を指摘し、その背景には東海地域の銅鐸工人集団ちとの繋がりを想定している〔清水 2015〕。

そして、山陰地域の玉作りをみると、前期後葉から勾玉を作るにあたって片面穿孔が採用されること〔島根県古代文化センター 2004〕や、前期から生産が開始する瑪瑙製玉類の器種がほぼ勾玉に限定されること〔深田 2006〕などが分かってきた。片面穿孔は、他地域の玉作り遺跡でも確認されることから、その存在をもって山陰地域から始まる地域間交流が推測される場合があることはすでに述べた。この考えに関連して述べるならば、米田氏は出雲地域と近畿地域では共通して片面穿孔を採用してはいるものの、使用石材の選択などは異なる事例をあげたうえで、一概に片面穿孔といった共通性だけをもって両地域を結びつけることはできないとしている〔米田 2008〕。

また、出雲地域の玉作りで特徴的にみられる紅簾石片岩製内磨砥石の産出地問題についても議論がなされており、徳島県・和歌山県の岩盤からそれぞれサンプリングを行ない、肉眼観察での検討会も行なわれている〔菊池・山岡 2007〕。

その他にもさまざまな視点から玉作り研究が行なわれている。たとえば、ヒスイ製勾玉の石質や穿孔技術が前期末葉・中期初頭を境にして大きく変化することを指摘したのが大

賀氏である〔大賀 2005〕。具体的に述べるならば、石質は透明感があり鮮やかな緑を含む良質なものから透明感がなく緑色部分もほとんどみられないものになり、穿孔技術は片面・両面の併存からほぼ片面へと統一されていくことが指摘されている。また、篠原祐一氏は勾玉の規格性をみていくことで玉作り集団の出自をある程度、把握することができるとしている〔篠原 2009〕。さらには、実験考古学からのアプローチによって、古代における勾玉製作技術の復元も行なわれており、加熱によってヒスイの加工が容易になることや、用いられる研磨剤が土や川砂でも十分機能することが分かってきた〔大西・土肥・黒河 2010〕。

### ③消費地・流通の研究

縄文時代については、北日本を中心とした研究が多くみられる。たとえば、乾芳宏氏は北海道大川遺跡から出土した晩期のヒスイ製勾玉について、北陸地域とのヒスイ取引のなかで意味づけを行なっている〔乾 2007〕。また、鈴木克彦氏や鈴木真美子氏は、主に北海道・東北地域の勾玉に焦点をあて、形態の変遷や地域性・玉類の組成などを把握したうえで、九州地域との地域差について言及している〔鈴木克 2004・2013 鈴木真 2012〕。さらに、森山高氏は北海道・青森県・岩手県・秋田県の勾玉を形態から分類し、各類型の分布・材質の変遷について考察を加えている〔森山 2012・2015〕。その結果、形態と材質との間に関係性が見出せないことや、後・晩期の勾玉には形態的系統性があり、時期によって系統間に共通性がみられることが指摘されている。そして、小林清隆氏は房総地域における後・晩期の玉類の様相について、材質や出土状況などに着目していきながら、その全体像の把握を試みている〔小林 2017〕。

弥生時代について、まずは発掘調査事例からみると、佐賀県中原遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の甕棺墓の中から透明感のある緑色のヒスイ製勾玉が計 10 点確認されている〔国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所・佐賀県教育委員会 2005、佐賀県教育委員会 2010〕。玉類の研究者たちはこの成果に注目していくことになるが、その理由は出土した勾玉の形態が獣形・不定形・定形・緒締形とバラエティーに富んでおり、それらが同時期に形成された墓域で確認されたからである。

次に、研究成果についてみていきたい。大賀氏や廣瀬氏は、形態・材質からみた地域性や流通の様相について、俯瞰的な視点から全国的な傾向をみていこうとしている〔大賀 2009a・2011、廣瀬 2006・2009〕。そのうち、廣瀬氏は列島規模で地域性をみた場合、関東地域が流紋岩製勾玉文化圏、青森県から九州地域にかけては半玥形勾玉文化圏、北陸北東部型の半玥形勾玉文化圏、北陸南西部型の半玥形勾玉文化圏、北部九州系の影響がみられる文化圏、北部九州地域に多くみられる定形勾玉文化圏の 6 つに分けて把握することができるとしている〔廣瀬 2009〕。この研究によって、勾玉の文化圏が複数あり、それらが重なる地域もあるということが分かってきた。

また、西日本を対象にした研究もいくつかみられる。谷澤亜里氏は弥生時代後期・終末

期の墓から出土した勾玉をとり扱いながら、形態・材質・分布の変遷や流通について考察を行なっている〔谷澤 2014a〕。地域間の流通について、谷澤氏は各地域における墳墓の展開と関係していると述べたうえで、その背後に有力者層間における相互参照を考えている。また、小寺智津子氏はガラス製勾玉の形態・成分・色調・分布の変遷に加えて、生産地と墳墓からの資料を比較することで、中・後期における地域性の抽出を試みている〔小寺 2006・2016〕。

他には、米田氏が中国地域・四国地域における勾玉の様相について整理を行ない、それぞれの地域的特徴を述べている〔米田 2009・2011・2013a・2013b〕。また、消費形態から勾玉祭祀の存在を推測しており、その需要には地域性がみられるとしている。具体的に述べるならば、後期の吉備地域で急速に勾玉祭祀が普及していき、それが近隣地域に徐々に広がっていく。後期後葉から末葉の吉備地域では、首長壺葬送儀礼の場でヒスイ製勾玉を用いた祭祀が行なわれ始める。米田氏はこの状況が前期古墳でも共通してみられることを根拠として、吉備地域の勾玉祭祀が初期ヤマト政権の祭祀にも継承された可能性を推測している。一方、四国地域では中期中葉の愛媛県でいち早く勾玉祭祀が定着し、隣接地域へと波及していき、祭祀が行なわれる場所は墳墓が多い吉備地域とは異なり、集落内が中心であったとしている〔米田 2011〕。

また、1つの地域に焦点を当て、そこから他の地域へと目を向ける研究も行なわれている。たとえば、斎藤あや氏は、神奈川県大原遺跡の方形周溝墓から出土したヒスイ製半球形勾玉の流入経路を明らかにしようと試みている〔斎藤 2011〕。具体的には、生産地の資料を法量・穿孔技術の観点から比較を行なった結果、中期の北陸地域で作られ、後期になり神奈川県の墓の副葬品として流入したものも存在することを明らかにしている。菅原氏は、阿波地域で作られる小形の蛇紋岩性勾玉を稲持型・矢野型の2つの形式に分け、形態・石質から分布の把握を行なっている〔菅原 2013〕。このうち矢野型は、後期を中心として讃岐地域・吉備地域・伊予地域などに拡散したことが分かってきた。また、流通形態には広域分布・特定遺跡集中分布・特定区域分布・散在分布があり、地域ごとで様相が異なっていることも推測されている〔菅原 2015〕。また、大賀氏は中期の北部九州地域で作られたヒスイ製勾玉・丁字頭勾玉が、時間の経過と共に東方へ分布圏を拡大していく過程について考察を加えている。具体的に述べるならば、北部九州地域から備讃地域を経由して近畿地域へといった一連の流通ルートを設定している〔大賀 2012〕。また、河村氏も同様な流通ルートの存在を考えており、ヒスイ製丁字頭勾玉の他に環状勾玉の分布からも傍証が可能としている〔河村 2010〕。そして、北部九州地域のヒスイ製勾玉の多くが、弥生時代後期後半以降、瀬戸内海を経由して大阪湾沿岸地域に持ち込まれ、その後さらに東へと流通域が展開していったことが想定されている。

また、九州地域で作られた勾玉がどのように拡散していったのか、についても議論がなされている。小松氏は定形勾玉が唐津地域で発生するとし、中期中頃に北部九州の各地域へ、後期に入ると九州地域を越え全国的に拡散するとしている〔小松 2011〕。木

下氏は唐津地域と早良地域との地域間交流を明らかにし、さらには北部九州地域・山陰地域・北陸地域を含めた日本海沿岸地域における流通ルートを想定している〔木下 2013〕。また、大坪氏は勾玉の抉りの入り方から分類を行ない、抉りが明確にコ字になっているものを九州型とし、さらに抉りの開き加減によって中九州タイプと南九州タイプに細分化している〔大坪 2013〕。そして、後者の2つのタイプが四国地域で確認できることから、中九州地域・南九州地域と四国地域との地域間交流が想定されている。

古墳時代について述べるならば、戸根氏は断面形・削り痕の有無・法量から滑石製勾玉を分類したうえで、それぞれの変遷を明らかにするとともに、その変遷が墳墓・集落ともに同様な傾向を示すことを述べている〔戸根 2014〕。また、同じ滑石を用いて作られた丁字頭勾玉については、前期末葉から中期中葉にかけて確認することができ、近畿地域を中心とした西日本に偏って分布すること、さらには同じ時期の関東地域では滑石製玉類が盛行するなかで、丁字頭勾玉はみられないことが明らかされている〔大賀 2008c〕。

また、大賀氏が第5期（1960年代から2003年まで）で提示した「系」の概念を使い、各地域で特徴的にみられる玉類を系統別に分けたのち、それらがどのような変遷・地域性をみせるのかについて、全国的に示そうといった試みがなされていく〔大賀 2013 など〕。勾玉の系統をみても、碧玉・瑪瑙・水晶勾玉のものが多く、比較的大きくてやや角ばった「コ」の字形の抉りを有するものは山陰系勾玉〔大賀 2009b〕、蛇紋岩製で両面穿孔が施され、孔周辺が陥没しているものが東海系勾玉といったような設定がなされており〔戸根 2008〕、それぞれの変遷・分布について議論されている。

また、谷澤氏は九州地域におけるヒスイ製・滑石製・山陰系（碧玉・瑪瑙・水晶）・ガラス製勾玉の変遷や分布の把握を試みている〔谷澤 2014b〕。その結果、古墳時代前期に出土数が減少し、流通する種類の多様性も弱まることを根拠として、勾玉が弥生時代後期・終末期から古墳時代へと連続的に展開していないことを推測している。

そして、特定の遺跡・出土状況に焦点をあて、そこから変遷や流通について考察を行なったのが、中村大介氏を含む研究チームや米田氏である。中村氏らは、京都府芝ヶ原古墳の事例から古墳時代前期初頭（註15）における玉類の流通について言及している〔中村・藁科・田村・小泉 2014〕。この古墳からは、糸魚川産ヒスイを用いた勾玉や近江系土器が確認されている。加えて、中村氏らは福井県林・藤島遺跡でみられる穿孔技術との共通点を指摘したうえで、芝ヶ原古墳のヒスイ製勾玉が北陸地域から近江地域を経由して持ち込まれたものと推測している。また、米田氏は中国地域・四国地域における前期古墳の玉類副葬事例から、玉類の流通をみている〔米田 2014〕。

奈良・平安時代における玉類の全国的な出土傾向や、性格・流通については、秋山浩三氏によって大まかな把握が行なわれている〔秋山 2007〕。

その他の論点をあげるならば、篠原祐一氏は勾玉の抉り部を長径・短径の数値と楕円扁平率から数値化して比較することが、時期的変遷を把握するうえで有効であることを明らかにしている〔篠原 2010〕。

#### ④起源・用途・性格・系譜の検討

まず、起源・用途・性格について述べるならば、鈴木克彦氏が定義や形態からみた変遷・分布の把握に重点を置きながら起源について言及している〔鈴木 2005・2006〕。その中では、獣牙起源説が旧説としてとり扱われている。この鈴木氏の考えに対して、藤田氏は小林達夫氏によって示された、遺物の材質の違いが「<型式>の展開によって生じたバラエティーなのであって、各々の差異にすぎず、あくまで同一形式として把握されねばならない」〔小林 1967；2頁〕という考えを例にあげて、獣牙起源説を肯定的に再評価するべきと主張している〔藤田 2013〕。

また、大坪氏は、縄文時代の九州地域における玉類の変遷や地域性と、農耕の拡散との間に関係性を見出している〔大坪 2004〕。さらに、大坪氏は副葬事例を概観したうえで、玉類が晩期末葉を境として、生者に向けられたものから死者に対するものへと変化していったことを述べ、その要因には朝鮮半島から葬送形態とその観念が入ってきたことを推測している。

弥生時代の勾玉について述べるならば、辰巳和弘氏が唐古・鍵遺跡〔田原本町教育委員会 2008〕から出土したヒスイ製勾玉の事例をもとにして、その用途と古代中国の思想との関係性について言及している〔辰巳 2004〕。具体的には、本来的に褐鉄鉦の殻状容器の中には、中国で仙薬としてとり扱われている粘土が入っていることを述べて、なぜ、この殻状容器の中にヒスイ製勾玉2点（註16）が入れられていたのか、について考察を加えている。その結果、この容器の中にはすでに仙薬をいれるものとして認識があり、仙薬とヒスイ勾玉を類似した性格として、人びとがみていた可能性を示唆した。

また、木下氏は第4期（1940年代から1959年まで）から継続して、縄文時代から弥生時代になると護身用の呪具から身分を表象する装身具になったと推測している〔木下 2011〕。さらに、木下氏は弥生時代中期後半から勾玉の序列化が行なわれてくることを指摘し、地域によって序列が異なるものの、勾玉の質・形・大きさの組み合わせと着装者の権力の序列とが対応したものになっていると推測している。具体的な序列については、ガラス>ヒスイ>緑色石材、丁字頭定形勾玉>定形勾玉>その他の形、大>中>小という順序を提示している。

他には、小寺氏が従来漠然といわれてきたガラス製勾玉の政治性について、具体的な根拠を提示しながら言及しており、その政治性は中期後葉では須玖岡本・糸島を中心とした北部九州地域、後期後葉から終末期では丹後を中心とした北部近畿地域でみられることを指摘している〔小寺 2006・2016〕。

古墳時代の勾玉については、辰巳氏・藤田氏・木下氏・大賀氏が言及している。まず、辰巳氏は大阪府にある紫金山古墳〔京都大学大学院文学研究科 2005〕から出土した勾玉文帯神獣鏡から性格を推測している〔辰巳 2011a・2011b〕。この前期古墳から出土した銅鏡は、内区に神仙界、外区に35個の勾玉形の文様を帯状にめぐらせている。このことをふま

えて、辰巳氏は勾玉形の文様を勾玉として仮定するのであれば、内区と外区の関係性、つまりは神仙世界と勾玉との間に密接不離な関係性がみてとれると述べている。

また、藤田氏は大阪府の和泉黄金塚古墳に副葬されたヒスイ製勾玉が〔末永・嶋田・森 1954〕、「神仙」の働きをもつ玉であったことを推測している〔藤田 1988〕。その根拠としては、鏡・剣・玉がセットで副葬されていることに加えて、『万葉集〕〔高木・五味・大野校注 1960〕に収められている歌の内容を重要視している。具体的に歌をあげるならば、「天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月讀の 持てる變若水 い取り来て 君に奉りて 變若得しむもの」(巻第 13-3245)と「淳名川の 底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも 惜しき 君が 老ゆらく惜しも」(巻第 13-3247)とが一連の歌として詠まれたものであり、變若水が不老不死の水、淳名川の底なる玉が糸魚川産ヒスイを示していると藤田氏は述べている。

木下氏は、弥生時代で徐々に浸透していった身分表示の体系が、古墳時代になるとヤマト政権を中心とした階層秩序に対応していき、その一方で呪具としての本来の役割も併存していたと推測している〔木下 2005〕。また、中期に入ると材質に瑪瑙・水晶が用いられるようになり、緑色に限るといった色の規制が無くなると同時に、勾玉にみられた身分表示の機能や呪力も弱まり、副葬品として用いられなくなる。そして、6世紀末葉から8世紀には、仏教文化のなかで勾玉が徐々に終焉を迎えるといった一連の変遷を木下氏は想定している。木下氏と同様に、ヤマト政権との関わりから性格を推測しているのが大賀氏である。大賀氏は三角縁神獸鏡の分布との類似性をふまえて、古墳時代前期に作られたヒスイ製丁字頭勾玉が、近畿地域から各地域へ配布されたものと考えている〔大賀 2012〕。

その他の視点としては、長野県にある玉依比売命神社で行なわれている児玉石神事が、古代における玉の信仰を考えるうえで重要視されている〔玉元 2011、椛山 2015〕。この神事で児玉というのが勾玉のことを指し、奉納された勾玉を数えることでその年の吉凶を占うというものである。この神事では勝手に増えた勾玉を「生れ石」と呼び、そこには玉が増殖するという信仰が内包されていると考えられている。

系譜については、縄文時代から弥生時代へと移り変わるなかで、系譜的繋がりがみられるか否かについての議論が目立つ。まず、河村氏は縄文時代における北陸地域の勾玉が北部九州地域でもみられ、それを基に弥生時代の勾玉が形成されると推測した〔河村 2000〕。この考えに対して、大坪氏は縄文時代晩期中葉から弥生時代早期かけて、九州地域では石製装身具が確認できないことを述べ、弥生時代の勾玉と縄文時代の勾玉は系譜上で繋がらないとする〔大坪 2016〕。そして、弥生時代の勾玉の成立には、朝鮮半島の石製装身具の影響を推測している。さらに、大坪氏は熊本県ワクド石遺跡から出土した縄文時代晩期のヒスイ製勾玉と共に、定形勾玉とほぼ同形態の勾玉が採集されていることを報告した〔大坪 2004〕。このワクド遺跡の勾玉は、第5期(1960年代から2003年まで)で木下氏が設定したプロト定形勾玉の前身にあたるものである〔木下 2011〕。そのため、大坪氏の報告は、定形勾玉の成立を考えていくうえで重要なものといえる。



また、北海道の勾玉についても議論がなされている。それは、ヒスイ製玉類が確認できなくなるといった観点から、縄文時代と続縄文時代との間に連続性がみられないとする研究である〔鈴木 2012〕。

#### ⑤沖縄県・海外資料への着目

宮城弘樹氏は、沖縄県の勾玉について、グスク時代にあたる 14 世紀前後になると、装身具としての性格が定着することを推測し、加えて、本土で確認できる弥生・古墳時代の勾玉との関係性は見出すことが難しいと述べている〔宮城 2005〕。また、谷川章雄氏は沖縄県における玉類の研究史を整理し、沖縄諸島・先島諸島出土における勾玉の様相を明らかにしていきながら〔谷川 2008〕、文献史上からも考察を行なうことで、本土との交易からみた沖縄県における玉類の意味づけを行なっている。岸本氏は、5 期(1960 年代から 2003 年まで) から継続して、石製・ガラス製玉類の出土傾向の把握していきながら、縄文時代から琉球処分が行なわれた 19 世紀にわたって、玉類がどのような変遷をみせるのかを明らかにしている〔岸本 2011〕。

また、仲原弘哲は伝世品であるノロの勾玉の様相を整理していくと共に、その意味やノロの制度との関わりといった観点で論を展開している〔仲原 2011〕。徳田誠志氏は「琉球勾玉」の全体像を浮き彫りにするために、関西大学博物館など複数の施設で収蔵されているものを取り扱いながら、本土における弥生・古墳時代の勾玉との繋がりといった視点をもちながら考察を行なっている〔徳田 2015〕。その際には、「琉球勾玉」を全長が約 7 cm 以上から 10 cm を超えない程度で、頭部には 2 条の溝が施されている、いわゆる丁子頭を呈するものと定義づけている。これは、古墳時代の勾玉と比べてかなり大形といえる。そして、徳田氏は「琉球勾玉」の出現について、18 世紀後半頃の「江戸上り」のため琉球王国から本土へ派遣された使節団が、木内の『曲玉問答』などのいくつかの研究で提示されていた勾玉の図を見たことが大きな要因であるとし、それ以降、王国が主導となって生産していたことを想定している。この考えは、実際、グスク時代の遺跡から出土する勾玉が、「琉球勾玉」のような定型化されたものではないということを根拠としている。すなわち、定型化している「琉球勾玉」は、古墳時代の勾玉を参考にして作られていたとして、その契機に「江戸上り」が密接に関わっていることを推測しているのである。

次に、海外資料については、朝鮮半島の勾玉についての研究が多くみられ、さらに新しく中国で確認された勾玉形垂玉の紹介も行なわれていく。まず、門田氏は朝鮮半島における勾玉の変遷について、第 5 期(1960 年代から 2003 年まで) から継続的に述べており〔門田 2005〕、三国時代の勾玉の発生については、日本列島からヒスイ製勾玉自体が朝鮮半島へもたらされたことが要因と考えている。李相吉氏や盧希淑氏は、新石器時代から三国時代までを視野に入れて形態分類を行ない、その変遷や系譜的繋がりなどを整理していくことで、朝鮮半島における玉類の文化の一端を明らかにしようとしている〔李 2007、盧 2009〕。また、高橋氏は朝鮮半島出土のヒスイ製勾玉について、日本列島における時期

が異なるヒスイ製勾玉が、一括して5・6世紀に朝鮮半島にもたらされ、その後、副葬品となったことを推測している〔高橋 2012c〕。この高橋氏の指摘は、第5期（1960年代から2003年まで）に提示された門田氏の考えと共通点は多い。

そして、朴天秀氏は2016年段階で780点を超えるヒスイ製勾玉が朝鮮半島で確認されていることを述べ、それらをもとに変遷や日本列島との関係性について考察を行なっている〔朴 2016〕。少し詳しく述べるならば、朴氏は朝鮮半島におけるヒスイ製勾玉が、3・4世紀には日本列島に近い金海・釜山といった金官伽耶地域で出現し、5世紀になると新羅地域へと分布が拡大し、6世紀頃には本格的に百済地域で確認されていくことを明らかにした。さらに、日本列島との関係性については、ヒスイ製勾玉をとり扱いながら議論を展開している。まず、朝鮮半島ではヒスイ製勾玉の生産遺跡が確認されてはおらず、4世紀初頭にヒスイ製勾玉が登場するが、それは西日本で出土が確認される時期よりも後にあたること、加えて、科学分析によって、慶州市・梁山市・完州郡にある古墳から出土した勾玉の材質と糸魚川産のものとの合致していることをふまえて、三国時代の勾玉が日本列島から移入されたものと、朴氏は考えている。

中国の遺跡から出土した勾玉形垂玉については、松浦宥一郎氏によって紹介されている。松浦氏は、遼寧省で2点・吉林省で1点・黒竜江省で1点の事例を紹介し、これらが中国東北地域に集中して分布することを指摘している〔松浦 2009〕。さらに、中国内蒙古自治区碾房渠窖藏遺跡の竪穴では、瑪瑙製勾玉形垂玉が金製品やトルコ石玉類などと共に出土していることも報告されている〔松浦 2015〕。この事例について、松浦氏は日本列島の定形勾玉より早い時期に出現しており、両者に直接的な関連はないとしている。これら松浦氏の研究が発表されたことによって、勾玉をめぐる文化を考えていくには、朝鮮半島だけではなく、他の東アジア圏の国々へと視野を広げて議論を行なっていく必要性が提示されることになる。この視野を広げて勾玉をみていくという姿勢は、第2期（1868年から1915年まで）にはすでに見られてはいた。しかし、視野の広げかたという観点でみた場合、第2期と第6期との間には決定的な差というものを指摘できる。それは、第2期が点的・飛び石的であるのに対して、第6期は面的であり、後者のような徐々に地域的視野を広げていくほうが、より分析方法としては適当といえる。

## ⑥科学分析の導入とその成果

第5期（1960年代から2003年まで）から継続して、玉類の産地同定が行なわれており、その対象となったのは、ヒスイ・碧玉・滑石・ガラス・コハク・そしてクロム白雲母などである。ヒスイ・碧玉は藁科氏〔藁科 2009・2013a など〕、滑石は井上氏〔井上 2005・2012 など〕、ガラス・コハクは国立文化財機構・奈良文化財研究所〔国立文化財機構・奈良文化財研究所 2011 など〕が積極的に分析を行なっている。そして、クロム白雲母について述べるならば、2007年に大坪氏が九州地域出土の玉類（165遺跡・889点）を分析対象として、蛍光X線分析を行なっている〔大坪 2007〕。その結果、従来、縄文時代後・晩期における

使用石材には統一性がみられないといわれていたが、実際にはクロム白雲母岩と滑石ではほぼ統一されていたことが明らかにされた。これは、すでに刊行されている報告書の石材記載と、分析によって得られた石材名との矛盾を視覚的にとらえる結果となった。さらに、大坪氏はクロム白雲母製玉類を九州ブランドと位置づけたうえで、クロム白雲母製勾玉が島根県・岡山県・山口県といった中国地域、愛媛県・高知県といった四国地域でも多く確認でき、加えて、石川県・愛知県でも少量確認することができることも指摘している（大坪 2015）。

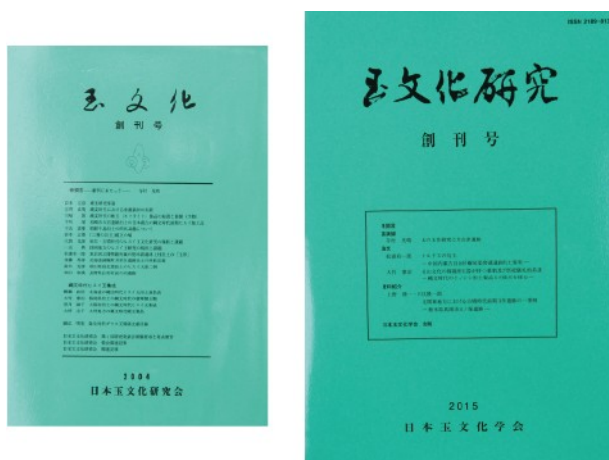
また、玉作りの工具も分析対象となっており、藁科氏が石鋸の蛍光X線分析を行ない、産出地について議論している〔藁科 2013b など〕。

### ⑦史料のなかの勾玉研究

酒井英一氏は、江戸時代後期の庄内藩士である安部親任が著した『筆濃餘理』〔鶴岡市史編纂会 編 1977・1978〕をもとに（註 17）、当時の人びとが勾玉をどのように認識していたのか、について言及している〔酒井 2007〕。酒井氏は、風雨の激しい天候のときに時々石鏃が降ると考えていた平安時代の人びとと同様に、江戸時代の人びとも勾玉が荒天のときに天から降ってくるものと考えていたことを指摘している。さらに、その勾玉で数珠を作った話があることを根拠として、当時は装身具としての用途ではなく、霊地と関連させて用いていた可能性を推測している。また、『歴史読本』では、三種の神器が特集されており、数多くの研究者が考古学や文献史学の視点から様々な議論を行なっている〔新人物往来社 2008〕。

### ⑧「玉」を冠する研究会の展開と学会の発足

日本玉文化研究会の会長である寺村氏は、機関誌『玉文化』の創刊号のなかで発足の背景および目的を明確に記している〔寺村 2004b〕（第9図）。要約すると、現状では、玉類に関する研究に加えて、発掘件数の増加によって関係資料が膨大な量をもって蓄積され、いまをもってなお継続的に増加している。その結果、それらを研究者個人で把握することは困難なことになっている。そのようななか、「研究者間の情報交換や研究活動の交流などを、円滑に進めるためには、広く門戸を開放し、成果を共有」し、「正確な記録と成果は、広く公開し、協力体制をとることが、貴重な資料の亡失を防ぐ第一歩であり、かつ必死の課題」である。そのために「研究会



第9図 『玉文化』創刊号と『玉文化研究』創刊号の表紙

などの開催は勿論ですが、ここに広く発表の場を提供するとともに、研究・情報センターとしての役割を果たすような、機関誌の発刊が多くの方々から熱望されてきた」と寺村氏は述べている。この研究会の発足によって、玉類の研究者らが1つの場に集まり、議論を重ねた成果を継続的に機関誌で発表していくことができるようになり、その結果、玉類を考古学的に研究できるということをもう一度、日本考古学界に印象づけた。また、研究会は長年、玉類の研究を続けてきた研究者と、玉を研究しようと思っていた若手研究者とを繋ぐパイプのような役割も担っており、会の認知度が高まっていくにしたがい、玉類の研究全体もより活発になっていった。

研究会での具体的な活動をみると、研究史上の核となる玉作遺跡に赴き、その資料を実見・再検討したり、新しく発見され、これから重要視されると思われる玉類を見に行き、研究者間で議論が行なわれた。さらに、その見学会に伴うかたちで、各地域の玉類の文化をテーマに据えたシンポジウムを開催していった。

また、機関誌『玉文化』では、縄文時代におけるヒスイ製玉類の集成を列島規模で行ない、その成果を継続的に発表していく〔日本玉文化研究会 2004～2006・2008～2010・2012〕。この集成については、集成できたのが31県であり（註18）、県ごとの項目設定に統一がなされていないことなどの問題点はあるものの、ヒスイ製玉類を研究するうえでは欠かせない基礎資料となっている。その他にも、時代や材質を問わず、北海道から沖縄県、さらには中国や朝鮮半島の玉類に関する研究が発表され、さらに、各地域における新資料の紹介も収録されていく。これにより、研究者個人が時代・地域においてある程度、俯瞰するかたちで研究を行なえるようになった。また、機関誌には勾玉に関する研究も多く寄せられ、さまざまな切り口からの検討が行なわれている。しかしながら、この研究会は第10号に「日本玉文化研究の21世紀展望」と題して、各時代の玉類研究の現状と今後の展望について整理することを1つの区切りとして、新しい局面を迎える。

それは、組織内の諸事情により、会長である寺村氏および多くの研究者らは研究会を離れ、その後、新しく日本玉文化学会を発足させる（註19）。この学会の目的や活動内容は、研究会の時と同様に、日本列島のみならず海外の玉類へも目を向け、学術上の情報交換を積極的に行なえる場を提供することを心掛けている〔寺村 2015〕。機関誌『玉文化研究』でもそういった傾向が色濃くみられ、さまざまな時代・地域を対象とした研究が寄せられている（第9図）。そのなかには、すでにあげた中国の勾玉形垂玉についての報告もみられ、勾玉研究においても重要な情報の提供源となっている。さらには、玉類の変遷を列島規模で把握しようとする研究も数多く収録されていることをふまえて述べるならば、より全体的な視野をもって玉類研究を行なうことができる環境が整いつつあるといえる。

## 2. 問題の所在

これまでみてきたように、勾玉の研究は江戸時代から驚くべき持続力をもって行なわれ続けてきたが、その視点や分析方法は、当時の時代背景と強く結びついていた。たとえば、

イギリス流の考古学を日本にもちこんだ濱田氏の影響に加えて、戦後になると皇位のしるしである三種の神器については、積極的に専門的な立場から言及されていく。加えて、科学技術の進歩に伴って勾玉や砥石の産地同定が行なわれてきた。

また、勾玉を研究していくことによって、単なるものについての研究に留まらず、現在、私たちが日々行なっている習俗の歴史、大きな枠組みとして言い換えるならば、国民性が形成されるプロセスの一端を明らかにするうえで重要な鍵になるといえる。さらには、日本だけではなく、アジア圏に広がる文化の一端をみていくことができると思われる。

この国民性の究明あるいは、アジア圏という視野をもつといった場合、いずれにしても、日本列島全体の様相を把握しておくことは必要なことである。これらをふまえて、研究史をもう一度みてみると、勾玉研究の中心的テーマは生産地・生産側を意識した研究が多く、すでに全国的な大まかな傾向が示されつつある。それに対して、消費地・消費側について述べるならば、生産遺跡や副葬品という観点から出土点数が多い地域、あるいは、古墳群が顕著にみられる地域とその周辺に関してはある程度、把握されてはいるものの、それらをもって日本列島の全体の傾向とすることは到底できないのが現状である。

また、勾玉の出現から終焉といった一連の流れを具体的な数値を提示しながら把握した研究もみられない。

さらには、研究史でみてきたように、勾玉の性格・意味についての議論も数多くなされてきたことからわかるように、勾玉の全体像といった場合、多様な側面が予期される。しかし、従来、行なわれてきた議論のなかに、具体的な事例をある程度の量をもって比較・検討したものはそれほど多くはなく、いまだ検討の余地があると思われる。これらの問題点を解決するために集成事業や、列島規模での視点をもった研究が行なわれてはいるが、その多くは時代・地域・材質・出土遺構のいずれかが限定的なものといえる。

そこで、現在、2万点をゆうに超えている出土勾玉について、列島規模での集成を行なったうえで、長期的な視野のもと、分布や形態・材質・使用方法・意味などが時間の経過によってどのように変化していくのか、加えて、その変化を生じさせた要因について、統一的、且つ、横断的な資料にそくして、考察を行なっていきたい。これは、当時の人びとの社会や精神文化の一端を把握するうえで、極めて大きな意義があることと考える。

本研究の目的は勾玉を構成する各要素について、時間や地域を横断したマスメータの構築を通じてその普遍性・独自性を検討するとともに、日本列島における勾玉の全体像と、それをめぐる文化の一端を解明することにある。

## 第2節 本研究における視角

### 1. 分析対象としての地域および時期

本研究では、日本列島全域を対象地域にすえて考察を行なっていくため、まず、地域設定の概要を述べておく必要がある。最も小さな地域の単位は都道府県として、それらをあ

る程度、まとまりのある地域としてみていく場合には、大きく9地域を設定した。

具体的には、北海道・東北地域・関東地域・中部地域・近畿地域・中国地域・四国地域・九州地域・沖縄県の9地域に日本列島を大きく区分する。そして、そのなかの中部地域は、北陸地域・東山地域・東海地域の3つの地域に細分する。また、地理的な条件を考慮して、岐阜県は東山地域、三重県は東海地域に含めることとし、両県を中部地域にいておくことにする。

次に、対象とする時期については、勾玉の出土が確認できる縄文時代から近世以降というように、時期幅を大きく設定している。勾玉が出土した遺構の年代は、本来ならば、その地域で共通した年代観のもと、時期区分を行なうべきである。

しかしながら、本研究では、取りあつかう地域が日本列島全域と広域にわたるため、各地域間の並行関係を把握することは困難である。そのため、遺構の年代については、各報告書や研究論文などで報告者や研究者がそれぞれ想定した編年や年代観を基本的にはそのまま採用することとした。

但し、戦前に刊行されたものに多くみられることではあるが、発掘調査報告書や研究論文のなかで結論付けられている遺跡の年代が、現在の年代観からずれて合わない場合には、その都度、修正を行なっている（註20）。

また、各都道府県、市町村から刊行されている発掘調査報告書・県史・市史・村史のなかには、百年紀によって遺跡や遺構の年代を表しているものもある。本研究における古墳時代から平安時代について述べるならば、3世紀中葉から4世紀後半を古墳時代前期、4世紀末葉から5世紀中葉を古墳時代中期、5世紀後葉から6世紀後葉を古墳時代後期、7世紀を古墳時代終末期、8世紀初頭から後葉を奈良時代、8世紀末葉から12世紀を平安時代としている。

## 2. 方法論としての集成データの活用

日本考古学における「集成」は、濱田耕作氏から始まり、それ以降、森本六爾氏、小林行雄氏など、多くの研究者によって継続的にその活用性および問題点について、言及されていく。その結果、「集成」は、研究者の間で徐々に浸透していくことになる。そこで、まずは本研究における集成データの活用方法について考えていくために、日本考古学における「集成」の歴史について整理を行ないたい。

まず、濱田耕作氏は、交流のあったロンドン大学教授のフリンダース・ペトリー氏が、古代エジプトにおける土器の研究で採用した集成という研究方法を知り、日本でも考古資料の整理・研究を行なうにあたり、同様な研究方法が有効であることを述べた〔濱田 1922〕。この濱田氏の考えについては、自信が著した『通論考古学』のなかにある「集成」の必要」という項目をみてもよくわかる。

その「集成」の必要」には、「考古學的資料の根本的整理は、遺物の集成（corpus）を作成するに在り。然るに従來の學者意を此處に用ゐるもの少く、吾人は新に発見せる遺物

を従来発見の同種のものと比較するに際して常に無益なる検索と照合とを餘義なくせらるゝこと、恰も完全なる目録を有せざる大圖書館に在るの思を禁ぜざらしむ。而かも年々歳々増加し行く遺物は其數莫大にして、此の「集成」を作り完全なる分類目録 (inventory) を編するに非ずんば、將來學者の研究は徒に無用なる勞力を照合比較す可き既発見の遺物の検索に空費せらるゝに至る可し」〔濱田 1922 ; 140-141 頁〕と記されており、濱田氏が日本考古学における集成の活用性を強く主張していることが読みとれる。このような考えをもとに作られたのが、濱田氏の「彌生土器型式分類聚成圖録」である〔濱田 1919〕。この集成図録では、皿・鉢・壺といった大きな枠組みでの分類を行なった後、蓋が付いているものなど、それぞれ抽出できる特徴によって、さらに細かく分類がなされている。そして、濱田氏は類型ごとに実測図を並べるとともに、遺跡名や所在地・所蔵先・図版の出典などの情報が明記されている表も作成し、載せている。この表と実測図とが対応しているため、他の研究者は容易に遺物の照合が可能となっているのである。

次いで、濱田氏の集成に対する考えを継いだのが、梅原末治氏である。梅原氏は、濱田氏が「彌生土器型式分類聚成圖録」を作るにあたって、収録する土器の製図を中心となつて行ない、その後、鳥取県の遺跡・遺物を整理しながら、各地で確認されている石斧・石剣・石包丁・子持勾玉の実測図や出土地点などの情報を集成している。その成果は、大正 11 年に発刊された『鳥取縣史蹟勝地調査報告』の第 1 冊のなかに収録されている〔梅原 1922〕。

そして、森本六爾氏は「時評 日本考古學に於ける聚成圖の問題」のなかで、濱田氏が事あるごとに「聚成」を有せざる考古學は、「目録」を有せざる大圖書館に比すべきものだ〔森本 1933 ; 53 頁〕と発言していたことや、集成図の 1 つの成功例として梅原氏の『鳥取縣史蹟勝地調査報告』があることを述べたうえで、集成の活用性と問題点、さらには今後の展開についても指摘を行なっている〔森本 1933〕(註 21)。まず、活用性については、集成図が分類の問題、地名表が分布の問題に多大な成果をもたらすものとしている。問題点については、資料を集成するにあたり、全日本的に均一な水準のもと行なわなければならないと述べられている。そして、今後の展開については濱田氏の集成図からもう一段階発展させた集成図の必要性を主張している〔森本 1932〕。具体的には、濱田氏の集成図は器種による集成図であり、次の段階の集成図には「地域別による試み」によって、「地域的様式の存在を確認」〔森本 1932 ; 109 頁〕することが求められるというのである。この森本氏の構想には、小林行雄氏が 1932 年から 1933 年にかけて、数回にわたり発表した「彌生式土器聚成圖」が強く影響している〔小林 1932a・1932c・1933a・1933b〕。

小林氏は地域ごとに作成した集成図をもとにして(註 22)、器種構成としてあらわれる様式概念の構築を行ない〔小林 1933c〕、それが各地域の文化の把握や他地域の文化との比較を行うための重要な要素となることを述べている〔小林 1932b〕。その際に行なわれた集成や集成図に対する小林氏の考えは、『図解 考古学辞典』のなかの「集成 corpus」という項目から読みとることができる〔小林 1959〕。そこには、集成が「同種の遺物の図また

は写真を多数にあつめて、一定の方式によって配列し、相互の関係を一目瞭然たらしめる」〔小林 1959；436-437 頁〕ものであり、配列には一貫した方針というものが必要とされることが述べられている。さらに、集成図は収録する個々の遺物が、様式を構成する代表例あるいは特殊事例であるかを吟味する、すなわち型式学的評価の問題を孕むものであり、加えて、研究の進行と共に配列の訂正や遺物の追加・削除といった変化が生じるものとしている。ここで特筆すべきことは、一貫した方針のもと集成されたものから地域における文化の一端を明らかにできること、そして、各地域間で文化の比較検討が可能となるということである。これは、言い換えるならば、歴史と土地・地理との関係性を視覚的に捉えようとした試みということができると思われる。

研究史で触れたことではあるが、戦後になると、土地区画整備など大規模な開発事業が絶え間なく行なわれるようになり、記録保存のための発掘調査も増加する。そして、膨大な数の報告書が刊行されていくに伴い、遺跡や遺物の情報が急速に蓄積されていく。その結果、研究者が各地域からどのようなものが検出・出土しているのかを容易に検索できなくなる。この解決策として、遺跡・遺物の集成・整理が、都道府県・研究会・個人といった様々なレベルで行なわれ、その成果が報告書として刊行されていくことになる〔千葉県文化財センター 1979・1992 など〕。

その一方で、遺跡・遺物の全国集成が、歴史地図を編むことと連動したかたちで行なわれていく。事例をあげるならば、西岡虎之助氏・服部之総氏らが監修した『日本歴史地図』の「主要遺跡・遺物地名表」や〔西岡・服部 監修 1956〕、竹内氏らが編集した『日本歴史地図（原始・古代編）』の上下巻に対応して作成された『考古遺跡・遺物地名表』などがある〔竹内・井上・江坂・加藤・小林・坂詰・佐々木・佐原・平川 編 1983〕。これらは、遺跡・遺物の特徴ごとに項目が分けられており、それぞれの要素からみた分布が列島規模で把握できるようになっている。

近年では、下垣仁志氏が日本列島から出土する鏡の集成を行っており、その成果のなかで集成データの活用法を説いている〔下垣 2016〕。下垣氏は、集成データが鏡式名・出土地・銘文・法量・共伴遺物などの項目を設定しながら、それぞれについて詳細に記述することによって、さまざまな分析に対応する基礎データとして活用できるとしている。具体的には、従来の分布分析だけでなく、GIS分析にも役立つ可能性を想定している。また、統一した視点で記述することによって、研究者間の誤認を最小限に留めることができることも指摘している。さらに、出土鏡に関して、図録や書籍による基礎データの提示が充実している地域とそうではない地域とがあるため、分布などを比較検討していくにあたって、支障が生じやすいことも述べている。その解決策として、下垣氏は列島規模で網羅的に行なった集成データの構築の必要性を説いている。

以上、考古学における「集成」についての大まかな歴史を概観した。集成データの活用性は段階的に且つ、重層的に発展していったことがいえるであろう。それは目録的なものから始まり〔斎藤 1992〕、地域ごとの文化の把握といったように活用性の幅が広がって



第5表 玉類に関連した主な常設展・企画展

常設展・企画展名	期間	開催地	関連資料(図録・冊子など)	備考	
古代の装身具－中国・朝鮮・日本－	1964年 ～1965年	東京	東京天理教館	東京天理教館 1964『古代の装身具－中国・朝鮮・日本－』	天理ギャラリー 第10回展
装身具展－むかしのアクセサリ－	1973年	和歌山	県立紀伊風土記の丘資料館	和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 1973『装身具展－むかしのアクセサリ－』特別展目録 第3号	開館3周年記念 特別展
原始古代装身具展	1973年	長崎	県立美術館	長崎県立美術館 1973『原始古代装身具展』	
玉と布志名のやきもの	1977年	常設	島根	出雲玉作資料館 編 1977『展示図録－玉と布志名のやきもの－』	
装身具	1979年	東京	宮内庁書陵部	宮内庁書陵部 1979『出土品展示図録装身具』学生社	
房総出土の古代の玉	1981年	千葉	県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘 1981『房総出土の古代の玉』展示図録No.9	
ひずい－地中からのメッセージ－	1987	富山	富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター 1987『ひずい－地中からのメッセージ－』	特別企画展
古代の装身具－美と折りと技術－	1988年	山梨	県立考古博物館	山梨県立考古博物館 1988『古代の装身具－美と折りと技術－』	第6回企画展
古代の装身具・玉－鳥山玉作り遺跡とその周辺－	1991年	茨城	土浦市立博物館	土浦市立博物館 1991『古代の装身具・玉－鳥山玉作り遺跡とその周辺－』	市制施行50周年記念・土浦市立博物館第6回特別展
古代の玉と玉作り－市三宅東遺跡と近江の玉作り－	1991年	滋賀	野洲町立歴史民俗資料館	野洲町立歴史民俗資料館 1991『古代の玉と玉作り－市三宅東遺跡と近江の玉作り－』	平成3年度 夏季企画展
北陸の玉－古代のアクセサリ－	1994年	福井	県立歴史博物館	福井県立歴史博物館 1994『北陸の玉－古代のアクセサリ－』	開館10周年記念特別展
古墳時代の石製品	1994年	奈良	天理大学附属天理参考館	天理大学附属天理参考館 編 1994『古墳時代の石製品』	第25回企画展
アクセサリの考古学－石器時代のピアス・ネックレス・ブレスレット－	1998年	宮城	地底の森ミュージアム	地底の森ミュージアム 1998『アクセサリの考古学－石器時代のピアス・ネックレス・ブレスレット－』	地底の森ミュージアム 平成10年度 特別企画展
卑弥呼の宝宝箱－ちよっとオシャレな弥生人－	1998年	大阪	府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館 1998『卑弥呼の宝宝箱－ちよっとオシャレな弥生人－』	平成10年 秋季特別展
石のアクセサリ	1998年	富山	富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター 1998『石のアクセサリ』	平成10年度 特別企画展
装身具展 古代人のアクセサリ	1999年	群馬	高崎市観音塚考古資料館	高崎市観音塚考古資料館 1999『装身具展 古代人のアクセサリ』	第12回高崎市観音塚考古資料館企画展 高崎のあけぼの11
弥生の装い－アクセサリとその呪術性－	1999年	山口	下関市立考古博物館	下関市立考古博物館 1999『弥生の装い－アクセサリとその呪術性－』	平成11年度 企画展
古代の装い－古代人とアクセサリ－	2000年	静岡	浜松市博物館	浜松市博物館 2000『古代の装い－古代人とアクセサリ－』	第19回特別展
石と人のくらし～美しさと機能をもとめて～	2000年	三重	鈴鹿市考古博物館	鈴鹿市考古博物館 2000『石と人のくらし～美しさと機能をもとめて～』	平成12年度 特別展
首長の装身具	2000年	京都	城陽市歴史民俗資料館	城陽市歴史民俗資料館 編 2000『首長の装身具』	平成12年度 特別展
王のアクセサリ	2000年	福岡	伊都歴史資料館	伊都歴史資料館 2000『王のアクセサリ』	秋季特別展
古代人の装い	2000年	熊本	城南町歴史民俗資料館	城南町歴史民俗資料館 2000『古代人の装い』	第15回特別展
縄文の装飾品展	2001年	岩手	東和町ふるさと歴史資料館	縄文の装飾品実行委員会 2001『縄文の装飾品展』	第5回特別企画展
ラッコとガラス玉－北太平洋の先住民交易－	2001年 ～2002年	大阪	国立民族学博物館	国立民族学博物館 2001『ラッコとガラス玉－北太平洋の先住民交易－』	特別展
縄文アクセサリ	2001年	北海道	浦幌町立博物館	浦幌町立博物館 2001『縄文アクセサリ』	第2回特別展
ガラスのささやき 古代出雲のガラスを中心に	2001年	島根	県立八雲立つ風土記の丘	島根県立八雲立つ風土記の丘 2001『ガラスのささやき 古代出雲のガラスを中心に』	平成13年度 企画展『古代の技術を考えるⅡ』
青いガラスの燦き－丹後王国が見えてきた－	2002年	大阪	府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館 2002『青いガラスの燦き－丹後王国が見えてきた－』	平成14年度 春季特別展
縄文人の美－装身具の世界－	2003年	千葉	船橋市飛ノ台史跡公園博物館	船橋市飛ノ台史跡公園博物館 編 2003『縄文人の美－装身具の世界－』	平成15年飛ノ台史跡公園博物館企画展
花開く翡翠文化－玉・斧の生産と交易－	2003年	新潟	長者ヶ原考古館	ヒスイ文化フォーラム委員会 2003『ヒスイ文化フォーラム ‘2003’ 花開くヒスイ文化－縄文時代におけるヒスイとその広がりに』	特別展
古墳人のアクセサリ－長野県における古墳時代の装身具－	2003年	長野	飯田市上郷考古博物館	飯田市上郷考古博物館 2003『古墳人のアクセサリ－長野県における古墳時代の装身具－』	平成15年度 秋季展示
おしゃれな原始・古代人－東駿河～北伊豆を中心とした原始・古代の装身具－	2003年	静岡	富士市立博物館	富士市立博物館 2003『おしゃれな原始・古代人－東駿河～北伊豆を中心とした原始・古代の装身具－』	第41回企画展
古墳時代の装飾品－玉の美－	2003年	滋賀	栗東歴史民俗博物館	栗東歴史民俗博物館 (財)栗東市文化体育振興事業団 2003『古墳時代の装飾品－玉の美－』	平成15年度 企画展
黄泉のアクセサリ－古墳時代の装身具－	2003年	大阪	府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館 2003『黄泉のアクセサリ－古墳時代の装身具－』	平成15年度 春季特別展
玉つくり－原石に輝きを求めて－	2003年	山口	下関市立考古博物館	下関市立考古博物館 2003『玉つくり－原石に輝きを求めて－』	平成15年度 企画展
翡翠展 東洋の至宝	2004年 ～2005年	東京	国立科学博物館	毎日新聞社 2004『翡翠展 東洋の至宝』	特別展

玉つくりの里	2005年	9月24日 ～10月23日	新潟	青海総合文化会館	ヒスイ文化フォーラム委員会 2005『ヒスイ文化フォーラム2005 神秘的勾玉-弥生・古墳時代の翡翠文化-』	企画展
北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影	2005年	10月4日 ～12月4日	大阪	府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館 2005『北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影』	平成17年 秋季特別展
玉作と玉文化～弥生から古代へ～	2005年	10月12日 ～12月4日	徳島	県立資料館	徳島市立考古資料館 2005『玉作と玉文化～弥生～古代へ～』	特別企画展
とちぎの石ものがたり -人と石の文化史-	2007年	10月13日 ～11月25日	栃木	県立博物館	栃木県立博物館 2007『とちぎの石ものがたり-人と石の文化史-』	
アクセサリーと人の物語-むかしの宝石ってどんなもの？-	2007年	10月30日 ～12月22日	千葉	八街市郷土資料館	無し	平成19年度 企画展
新潟県遺跡発掘調査出土品展	2007年	8月26日 ～9月17日	新潟	青海総合文化会館	糸魚川市 2007『ヒスイ文化フォーラム2007 ヌナカワとヒスイ-講演記録-』	企画展
埋もれる大集落 長者ヶ原～ヒスイのふるさと～	2007	常設	新潟	糸魚川市長ヶ原考古館	糸魚川市長ヶ原考古館 2007『埋もれる大集落 長者ヶ原～ヒスイのふるさと～』冊子	
おしゃれの達人、縄文人	2008年	7月15日 ～10月19日	富山	富山市北代縄文館	富山市北代縄文館 2008『おしゃれの達人、縄文人』	ミニ企画展
輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り	2009年	3月7日 ～5月17日	鳥根	県立古代出雲歴史博物館	鳥根県立古代出雲歴史博物館 編 2009『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』	鳥根県立古代出雲歴史博物館企画展
玉と王権	2009年	10月9日 ～12月13日	宮崎	西都原考古博物館	西都原考古博物館 2009『玉と王権』	国際交流展
古代のアクセサリー～古代人の宝石箱をあけてみよう～	2010年	4月24日 ～6月27日	山梨	県立考古博物館	無し	平成22年度 春季企画展
玉と石製品	2010年	8月24日 ～10月31日	福岡	福岡市博物館	無し	部門別展示
縄文人の装身具	2011年	1月9日 ～2月27日	埼玉	富士見市立水子貝塚資料館	富士見市立水子貝塚資料館 2011『縄文人の装身具』	平成22年度 企画展
装身具-日本・中国・朝鮮よそおいの美-	2011年	10月8日 ～11月27日	大阪	和泉市久保記念美術館	和泉市久保記念美術館 2011『装身具-日本・中国・朝鮮 よそおいの美-』	特別展
おしゃれの考古学～出土したアクセサリー展	2011年	年内	広島	ひろしまWEB博物館	無し	平成23年度 WEB博物館企画展第3弾 <a href="http://www.mogurin.or.jp/museum/hwm/">http://www.mogurin.or.jp/museum/hwm/</a>
まつやまの勾玉	2011年	2月13日 ～3月13日	愛媛	松山市考古館	松山市考古館 2011『平成22年 まつやまの勾玉』企画展開催要項	平成22年度 企画展
玉に魅せられた国～まつらの国のアクセサリー～	2011年	10月4日 ～12月4日	佐賀	末盧館	無し	平成23年度 唐津の歴史文化企画展
発掘されたアクセサリー	2011年	10月3日 ～10月16日	岡山	岡山市埋蔵文化財センター	岡山市埋蔵文化財センター 2011『発掘されたアクセサリー』冊子	平成23年度 企画展
玉・古墳時代の装飾品	2012年	11月3日 ～11月30日	京都	長岡京市埋蔵文化財センター	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 2012『玉・古墳時代の装飾品』冊子	平成24年度 特別企画展
古代の装身具(アクセサリー)-出土品からみる男性と女性-	2012年	7月21日 ～9月2日	大阪	府立近つ飛鳥博物館	無し	平成24年度 夏季企画展
飾るからだ 古代装身具の力	2013年	10月12日 ～12月8日	群馬	高崎市観音塚考古資料館	高崎市観音塚考古資料館 2013『飾るからだ 古代装身具の力』	高崎市観音塚考古資料館 第25回 企画展
縄文時代のアクセサリー	2013年	10月12日 ～11月24日	埼玉	朝霞市博物館	朝霞市博物館 2013『縄文時代のアクセサリー』	第28回 企画展
日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～	2013	9月28日	鳥取	とりぎん文化会館	鳥取県埋蔵文化財センター 2013『青谷上寺地遺跡フォーラム2013 日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』	フォーラムに関連したミニ展示
勾玉の魅力	2014年	1月17日 ～3月23日	宮崎	県立西都原考古博物館	無し	企画展Ⅱ
弥生時代のとやま 下老子笹川遺跡の発掘成果を中心として	2014年	11月21日 ～3月26日	富山	富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター 2014『埋文とやま』VOL129(企画展情報)	企画展
魅惑の玉	2014年	12月3日 ～4月19日	奈良	桜井市立埋蔵文化財センター	桜井市立埋蔵文化財センター 2014『魅惑の玉』冊子	平成26年度 企画展
装身具の世界-玉文化に魅せられて-	2015年	10月18日 ～12月1日	徳島	徳島市立考古資料館	徳島市立考古資料館 2015『装身具の世界-玉文化に魅せられて-』	開館15周年記念特別企画展
装身具の魅力 華麗な出土装身具	2016年	2月16日 ～4月22日	茨城	取手市埋蔵文化財センター	取手市埋蔵文化財センター 2016『装身具の魅力 華麗な出土装身具』冊子	第39回 企画展
発掘50周年記念 浜山玉つくり遺跡展	2016年	9月16日 ～9月30日	富山	かるちゃんセンターみやざき	無し	
飛騨美濃の縄文時代装身具	2016年	4月23日 ～5月15日	岐阜	岐阜県図書館1階企画展示室	岐阜県文化財保護センター 2016『岐阜県文化財保護センター所蔵品展「飛騨美濃の縄文時代装身具」』報道発表資料	
弥生のガラス-二千年前の青い装飾品-	2016年	11月1日 ～12月18日	兵庫	尼崎市立田能資料館	尼崎市立田能資料館 2016『弥生のガラス-二千年前の青い装飾品-』冊子	第46回 特別展
古代出雲のアクセサリー	2016年	7月16日 ～8月28日	鳥根	県立八雲立つ風土記の丘	県立八雲立つ風土記の丘 2016『ミニ企画展「古代出雲のアクセサリー」の開催について』報道発表資料	ミニ企画展
弥生の装い-アクセサリーの考古学-	2016年	8月2日 ～8月31日	佐賀	県立博物	無し	テーマ展

※東京国立博物館の平成館では、テーマ展示(日本の考古学)として、玉類に関わる展示が隔年ごとに行なわれている。

・宝器と玉生産の展覧:2004年(6月8日～12月19日)、2005年(1月2日～6月5日)、2006年(6月20日～12月10日)、2006年～2007年(12月12日～6月10日)、2008年(6月10日～11月16日)、2009年(6月9日～12月13日)、2009年～2010年(12月15日～6月6日)、2010年(6月8日～12月19日)、2013年～2014年(7月9日～6月8日)、2014年(6月10日～12月7日)。

・玉生産の展覧:2015年～2016年(10月14日～7月10日)、2016年(7月12日～12月23日)、2017年(1月2日～6月25日)。

・装身具・まつりの道具:2004年(6月8日～12月19日)、2005年(1月2日～6月5日)、2005年(6月7日～12月18日)、2005年～2006年(12月20日～6月18日)、2006年～2007年(12月12日～6月10日)、2008年(6月10日～11月16日)、2009年(6月2日～12月6日)、2009年～2010年(12月8日～5月30日)、2010年(6月1日～12月12日)。

・縄文時代の装身具とまつりの道具:2011年(6月7日～11月27日)、2012年～2013年(5月29日～6月2日)、2013年～2014年(7月9日～6月15日)、2014年(6月17日～12月7日)。

・縄文時代の装身具と祈りの道具:2015年～2016年(10月14日～6月5日)、2016年(6月7日～12月4日)、2016年～2017年(12月6日～6月4日)。

・弥生時代の装身具:2004年(6月8日～12月19日)、2005年(1月2日～6月5日)、2006年～2007年(12月12日～6月10日)、2008年(6月10日～11月16日)、2013年～2014年(7月9日～6月15日)。

・弥生時代の装身具とまつり:2016年(6月7日～12月4日)、2016年～2017年(12月6日～6月4日)。

く。そして、1つの対象を構成するさまざまな要素に焦点をあて、それぞれ適当な分析方法のもと考察を行なうことのできる基礎データとしての一面が形成されていく。この展開は、集成データの活用性からみた場合、小林氏などの集成からもう一段階発展させたものとして捉えることができるのではなかろうか。

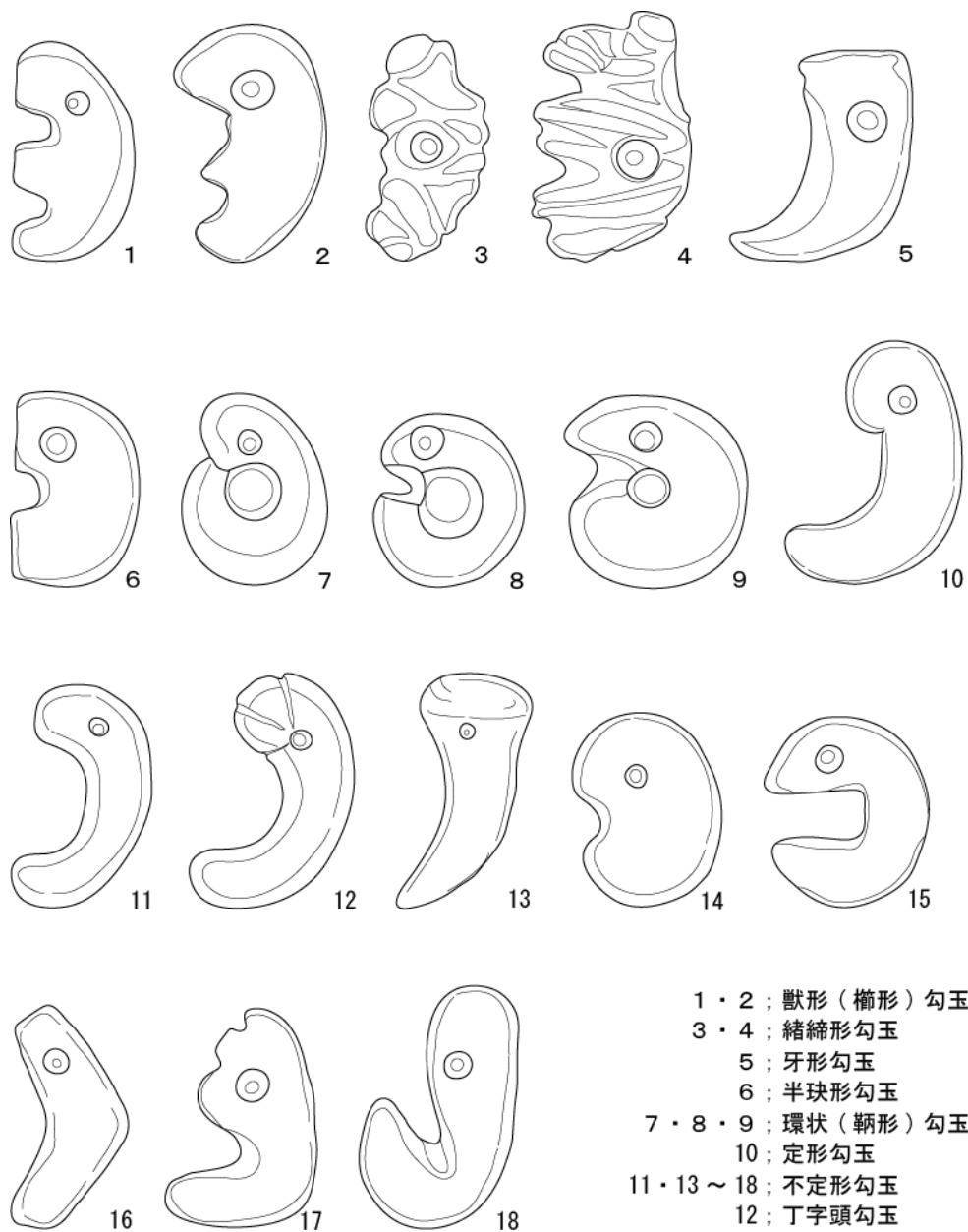
これらをふまえて、本研究における集成データの活用性について考えていきたい。資料集成の成果や(第2・3表)シンポジウム資料(第4表)に時代・地域・材質・出土遺構の限定性がみられることは、先述した通りである。さらに、玉類に関する常設展・企画展が催されており(第5表)、その図録や冊子は出土勾玉の集成データとして、十分に役立つものである。しかしながら、これら展示に関連した刊行物もまた対象が限定的である。つまり、従来の集成データには、データの空白地帯というものが大きく生じていることが指摘できる。そこで、本研究で作成した集成データとそれらデータの空白地帯との関係を見ていくことにする。

時代の空白地帯について述べるならば、本集成では時代を制限していない。そのため、日本列島における勾玉については、出現期の様相、各時代の様相、時代から時代へと移り変わる際の様相の変化、そして、終焉期の様相を通史的な観点でみていくことができる。一方、地域における空白地帯については、47都道府県を対象に集成を行なうことで、下垣氏のいう他地域との比較分析の際の支障というものを最小限に留めることができる。そして、材質・出土遺構を制限せずに集成を行なうことで、変遷や地域性を把握する際には、それぞれにおいてデータの空白地帯というものが生じることはなくなると思われる。

次に、集成データを実際にどのように用いていくのか、について考えていきたい。まず、細かく項目の設定を行なうことで1つの対象を一度さまざまな要素に分けたのち、それぞれの変遷や地域性を明らかにしていく。そして、それらをもう一度、1つの対象へと束ねて考察を行なうことで、より立体的にその対象を捉えることができるようになると思われる。その一方で、集成した勾玉のうち特徴的な形態・材質や、特異な事例に焦点をあて、それらの歴史的変遷についても詳しく考察を加えていくことで、出土勾玉を時には巨視的に、時には微視的にみていきたい。

### 3. 本研究に用いる集成データについて

本研究では、日本列島における勾玉の変遷を明らかにするため、時期による制限は設けずに出土勾玉の全国集成を実施した。



- 1・2；獣形（楕形）勾玉
- 3・4；緒締形勾玉
- 5；牙形勾玉
- 6；半球形勾玉
- 7・8・9；環状（鞍形）勾玉
- 10；定形勾玉
- 11・13～18；不定形勾玉
- 12；丁字頭勾玉

第10図 日本列島から出土する主な勾玉

まず、本集成を行なうにあたり、取り扱った資料については、各都道府県、市町村に所属する機関から刊行されている県史・市史・村史や発掘調査報告書、集成事業の報告書に加えて、各研究会・学会によって行なわれた集成成果がまとめられたシンポジウム資料集、そして、研究者ごとに集成・分析を行なわれた研究論文があげられる。それらの成果からそれぞれ遺跡名・所在地・時代・材質・出土遺構・長さ・重さ・共伴遺物などの情報および、実測図の抽出を行なった。

次に、対象となる勾玉について述べていきたい。先述したが、日本列島から出土する勾玉には多様性がみられる。そのため、研究者の間ではある一定の共通認識のもと、それぞ

れに名称がつけられ、議論が行なわれてきた。事例をあげるならば、平面形態がE字を呈する、いわゆる獣形勾玉とよばれるもの（第10図の1・2）や、表面全体に抉りや刻み目が施され、縦方向にも穿孔がみられる、いわゆる緒締形勾玉（第10図の3・4）、形態が動物の牙に似ている牙形勾玉（第10図の5）、半円形の直線部分に抉りをもつ半球形勾玉（第10図の6）、孔がある方とない方とが接続している環状勾玉（第10図の7～9）がある。

その他には、孔が穿たれた部分とそれに続く部分との間に括れをつけることで両者を区別する、いわゆる定形勾玉（第10図の10）や、両者を区別してはいない不定形勾玉（第10図の11・13～18）、穿たれた孔を起点として放射状の刻み目が施されている丁字頭勾玉（第10図の12）がある。

それらのなかの不定形勾玉について、もう少し細かく見てみると、孔が穿たれた方が立体的に膨れているもの（第10図の13）や、抉りが極端に浅いもの（第10図の14）、抉りがコの字に深く施されたもの（第10図の15）、加えて、抉りの方向や強弱の違いによって、平面形態が「く」の字を呈するもの（第10図の16）や、「L」字を呈するもの（第10図の17）、「J」字を呈するもの（第10図の18）が確認できる。

そこで、本集成ではこれら上述したすべてのものを対象としている。

また、動物の牙・歯・骨を素材としたものは、集成の対象から除外している。その理由を述べるならば、動物の牙・歯・骨で作られた勾玉状の装身具は、石製勾玉よりも早い段階からみられることは周知の事実である。しかしながら、全ての時代を通してみても、勾玉の主体となる材質はやはり石であり、その出現についても同様な材質を中心に考えるべきである（註23）。すなわち、勾玉の変遷における出発点については、石製勾玉の出現と捉えることが妥当と思われるからである。他には、たとえ破片であっても、それ自体で勾玉と判断がつくものは集成に加えている。

第6表 集成によって得られた出土遺跡と出土点数

北海道地域	北海道 70遺跡(206)						
東北地域	青森県 58遺跡(350)	岩手県 45遺跡(205)	宮城県 17遺跡(74)	秋田県 28遺跡(136)	山形県 22遺跡(49)	福島県 47遺跡(427)	
関東地域	茨城県 102遺跡(312)	栃木県 47遺跡(182)	群馬県 156遺跡(575)	埼玉県 127遺跡(360)	千葉県 337遺跡(1,093)	東京都 50遺跡(127)	神奈川県 131遺跡(553)
中部地域	北陸 新潟県 51遺跡(118)	富山県 20遺跡(348)	石川県 56遺跡(140)	福井県 51遺跡(167)			
	東山 山梨県 20遺跡(80)	長野県 134遺跡(492)	岐阜県 49遺跡(427)				
	東海 静岡県 179遺跡(932)	愛知県 76遺跡(199)	三重県 39遺跡(115)				
近畿地域	滋賀県 39遺跡(93)	京都府 126遺跡(4,682)	大阪府 87遺跡(1,062)	兵庫県 103遺跡(387)	奈良県 88遺跡(1,517)	和歌山県 27遺跡(122)	
中国地域	鳥取県 114遺跡(667)	島根県 153遺跡(460)	岡山県 136遺跡(506)	広島県 157遺跡(425)	山口県 63遺跡(351)		
四国地域	徳島県 33遺跡(73)	香川県 37遺跡(99)	愛媛県 81遺跡(1,191)	高知県 14遺跡(30)			
九州地域	福岡県 360遺跡(1,155)	佐賀県 104遺跡(279)	長崎県 44遺跡(90)	熊本県 87遺跡(236)	大分県 71遺跡(604)	宮崎県 44遺跡(147)	鹿児島県 19遺跡(51)
沖縄地域	沖縄県 35遺跡(106)						

※岐阜県は東山地域、三重県は東海地域に含めているため、両県を中部地域に入れている。

そして、古墳時代中期を主として発達し、滑石を板状にしたものを素材としている、いわゆる石製模造品としての勾玉は集成対象から除外している。その理由としては、石製模造品は実物を模造したものである。そのため、分布や性格などを把握するにあたり、実物であるところの勾玉とは、区別しておく必要があると考えられるからである。

さらに、本研究では勾玉の消費地に焦点をあて論じていくため、工房跡から出土したものや、明確な遺構に伴わない場合であっても玉作りの道具と共に出土したものといったような、玉作関係遺物としての勾玉は対象から除いている。

集成表のなかに設けた項目の記載については、留意しておくことが2点ある。1つ目として、遺跡の所在地は平成大合併により市町村の名称に大きな変化がみられるため、その都度、新しい名称へ訂正を行なっている。

2つ目として、勾玉の材質は原則として用いた資料の記載に従っている。但し、近年の石材同定に関する研究の発展によって、すでに報告されている材質が誤って認定・報告されていたものがあることがわかってきた。その研究成果を1つあげるとするならば、大坪志子氏によるクロム白雲母を素材とした玉類の研究があげられる〔大坪 2011・2015〕。これは、従来、縄文時代の九州地域を中心に確認できる緑色の玉類については、ヒスイ製として報告されていたが、実はそのなかに異なる石材であるクロム白雲母製のものも多分に含まれていたことを明らかにしたものである。そこで、このような材質に関する研究によって、報告されている材質に変更が生じている事例については、その都度、できうる限り訂正を行なっている。

こうして、本集成によって得られた出土遺跡は 3,865 遺跡、出土点数は 20,796 点である。また、第6表は出土遺跡数および出土点数を県ごとに示したものである。

本集成については、可能な限り行なったといいつつも漏れは否めないし、なによりも新しい事例は時間の経過とともに増加していく。しかし、本集成によって得られた遺跡数および出土点数を基にして変遷過程を明らかにしていくことについては、それほどの修正を当分は必要としないと思われる。

#### 4. 本研究に用いる用語について

本研究（第1章以降）に入るまえに、使用する用語について説明をしておきたい。理由としては、用語を設定するあるいは使用するさいには、それなりに緊張感をもつ必要がある、そうすることによって研究者間の誤認を最小限にとどめることができると考えているからである。そのため、本研究で使用する用語については、一定の定義付けを行った上で用いていきたい。

1つ目は研究対象であり、すでに幾度も用いている「勾玉」についてである。最近では、「まがたま」というと「勾玉」の漢字を充てて理解することが、私たちのなかで一般的なことになっている。しかしながら、辞典や事典をみていくと「まがたま」は「曲玉」とも表記されている。すなわち、「まがたま」を表すときには、2つの漢字が併用できるという

ことであり、このことは歴史研究者のなかでは周知の事実として認識されている。一見すると、「まがたま」の表記にあたって、「勾玉」と「曲玉」のどちらでも使ってよいのならば、それほど重要視する問題ではないことと思われるかもしれない。しかしながら、安易に勾玉という語句を使い、もしその語句が「記・紀」などの歴史書からの援用であったならば、そこには歴史的背景をふまえた研究者ごとのニュアンスの差というものが生じてしまうことが考えられる。

このことをふまえて、まずは研究者が「勾玉」・「曲玉」をどのような認識のもとで用いていたのかについて、歴史的な流れを大まかに整理した後、本研究における「まがたま」の表記および定義について考えていくことにする。勾玉は『日本書紀』(720)、曲玉は『古事記』(712)のなかで多く用いられていることから(註 24)、8世紀前半の段階にはすでに勾玉・曲玉といった用語が使用されていたことは、容易に想像がつくことである。そして、勾玉・曲玉というような表記のされ方が、それら歴史書に記載された「まがたま」の実態を解明するうえで注目されていくこととなる。研究史のほうで勾玉研究の嚆矢としてあげた谷川士清の『勾玉考』〔谷川 1774〕や木内石亭の『曲玉問答』〔木内 1936〕をみると、江戸時代における「まがたま」の表記の仕方には、それほど強い一貫性がみられない〔斎藤 1990a〕。

また、本居宣長は『古事記伝』のなかで、尾張の国学者である横井千秋(1738-1801)の「勾玉考」(註 25)をふまえながら、勾玉の「勾」は借字であって、本来はまばゆいという意味の目炎耀(マカガヤク)から目赫(マカガ)へ、それを縮めて麻賀(マガ)というところからきているとしていることを指摘している〔本居 1764-1798〕。さらに、曲玉の「曲」は、漢文を作るさいにみられる字面の潤色であることを推測し、単に形の曲ることをもって、曲玉と称することは誤りとしている。八尺瓊勾玉については、「世に希にして、すぐれて麗き玉」であり、土中から多く出土するものとは異なる可能性が指摘されている。

19世紀の終わりごろには、多くの「まがたま」に関する研究が『東京人類學會報告』で発表されており〔羽柴 1886、鳥居 1894a・1895、林 1896 など〕これらの論題には「曲玉」が使用されている。このことから、当時は比較的「曲玉」の表記が一般的であったことが考えられ〔斎藤 1990a〕、そこには本居の指摘が根底にあったのではなかろうか。すなわち、歴史書にある「八尺瓊勾玉」と実際に出土する「まがたま」とは異なるものと考えていたため、「曲玉」を用いた可能性が指摘できる。

20世紀に入ると、先ほどあげた本居の指摘に対して、高橋健自氏が「上古日本民族が如何に多くの勾玉における曲線美を称揚せしか」〔高橋 1911; 193 頁〕と反論をしており、この指摘がなされて以降、多くの研究者は「勾玉」を使い始めるようになる。

このように、「まがたま」の意味と形態的特徴との整合性や、考古遺物との関係性を柱にして、あてられている漢字についての検討が試みられてはいるものの、いまだにこれらに対しての明確な答えは出されていない。

一方、森貞成氏は歴史書にみられる「まがたま」が勾玉・曲玉のどちらであったのか判

断できないとし、異なる切り口から「まがたま」の表記について言及している。それは、『尋常小学校読本』に曲玉と記されていることをあげ、知識の普及を助長するために多くを語らないで今後は曲玉を採用し、これを徹底したほうが無難であるということを主張している〔森 1940〕。この森氏の指摘は、学校教育の面をふまえたものである。

同様な観点でみていくと、時代はやや遡るが、1927年に「小學生全集」の第6巻として『日本建國童話集（初級用）』が刊行されている（註26）。この書籍の著者である菊池寛氏は、「神々の功業は、將來の日本を背負って立つところの、我小學生諸君の脳裡に、深く印象されて、いゝ話である」〔菊池 1927；255頁〕ことを強く思いながら、この書籍を刊行したようである。この小学生に広く読んでもらいたいという思いは、菊版で250頁前後ある「小學生全集」の1冊の値段が、当時の他の書籍と比べてかなり安い35銭に設定されていることから強く読みとれるであろう（註27）。そのような書籍である『日本建國童話集（初級用）』のなかでは、参考にした歴史書に記載されている用語をそのまま使用している。つまり、小学生には用語の使用を含めて、なるべく歴史書の内容を変更しないで伝えるように心掛けていたことが推測できる。

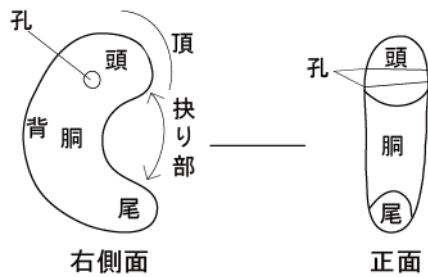
以上のように、「まがたま」を表記するにあたっては、歴史書に由来する用語であり、また歴史教育の普及に根差した用語といった2つの側面を考慮しながら、表記を行なう必要があると思われる。しかしながら、前者について述べるならば、土の中から出てくるものと、歴史書に記載のあるものとのすり合わせは、歴史学における大きな課題である。そして、今もってなお、研究者はその解明に四苦八苦しているというのが現状である。後者については、学校教育で用いられる歴史の教科書のなかには、「まがたま」を「勾玉」と表記しているものが多いと思われる。

次に、定義に関しては羽柴氏・三宅氏・坪井氏らによる議論があることは、すでに述べている。ここでもう一度要点をまとめてみると、議論の核となったのは用途・性格を定義の1つとして組み込むか否かについてであった。定義に組み込むべきではないとする研究者の根底には、出土状況が多様であることから定義のなかで明確に線引きすることができないという考えがあった〔坪井 1891a・1891c など〕。しかしながら、定義付けの本筋からはやや外れてしまうが、用途や性格についてもある程度は定義しておく必要はあると考えている。

これらをふまえて、本研究では歴史書にみられる「まがたま」と考古遺物としての「まがたま」を「勾玉」と暫定的に統一して表記することにする。そして、「勾玉」は平面形態が「く」・「C」・「L」・「J」の字を呈するものが多く（註28）、一端には紐を通すための孔があげられているものとする。さらには、装身具・副葬品としてだけではなく、宗教的性格を帯びたものであるというように、形態的特徴と大まかな用途・性格から定義するに留めておきながら、考察を進めていきたい。

2つ目は、材質としての「ひすい」についてである。刊行されている発掘調査報告書を見てみると、「ひすい」は「翡翠」・「ヒスイ」・「ひすい」というように表記の仕方にバリエ





第11図 本研究で用いる勾玉の部分名称

ーションがみられる。また、「翡翠」は、硬いものであるということから「硬玉」ともいわれている〔松原 2004〕。そこで本研究では、「翡翠」・「ヒスイ」・「ひすい」・「硬玉」をすべて「ヒスイ」に統一して使用していきたい。

3つ目は、勾玉の部分名称についてである。勾玉の各部位については、研究者によって使用する名称に若干の差がみられるものの、大方は坪井正五郎が設定したものを基礎としている。坪井氏は、孔が穿たれている方を「頭」として、穿たれていない方を「尾」、袂りが施されていない方を「背」というように、勾玉の各部位の名称と人体の部分名称とを対応させてよんでいる〔坪井 1908〕。本研究においても、この坪井氏の名称設定に従っていくが、袂りが施されている部分については「袂り部」とよぶことにしたい。

また、勾玉の正面観について述べるならば、孔に紐を通して実際に身につけている状態を基準として設定することにした〔高橋 2012b〕。すなわち、孔があげられている面を「側面」とよび、袂りが施されている面、つまりは身につけたときに前にいる相手に見える面を「正面」とする。これら勾玉の部分名称および正面観について、図化したものが第11図である。

本研究ではこのような定義のもと、用語を使用していきたい。但し、研究史として用いる場合には、その限りではなく、そのままの用語を使用していくことにする。

## 註

- 註1 藤貞幹が著した『集古圖』（玉器 卷之十一）のなかには、丁字頭勾玉3点を含む多数の勾玉が図写されており、出土地点の情報も記載されている。
- 註2 『木内石亭全集』巻1のなかに収録されている「曲玉問答」の書き始めに、「曲玉問答は天明三年六月の奥書により其著作年代を明にす」とある。
- 註3 原著は、P.F. von シーボルトが1832年から1854年まで記述を行ない、それを20分冊にしてライデンから刊行された『Nippon』である。
- 註4 伊藤圭介氏（1803-1901）は、幕末・明治前期の本草学者・植物学者として有名ではあるが博物学者でもあった。そして、伊藤氏はシーボルトが1826年の江戸参府に乗じて、熱田で知識の交換を行ない、翌年にはシーボルトに師事している。伊藤氏の「勾玉考」は、シーボルト文獻研究室から刊行された『施福多先生文獻聚影』の第6冊に再録されている〔伊藤 1936〕。
- 註5 その他にも、松山義通氏は、奈良県で表採された環状勾玉の紹介を行っている〔松山 1905〕。
- 註6 第2期以降、縄文時代の勾玉の存在を認識したうえで、議論を進めていく研究者が多いなか、大野雲外氏は、古墳時代からの視点のみで勾玉の研究を行なっている〔大野雲 1916〕。
- 註7 時代は新しくなるが、鹿持雅澄氏も「たま」の義は、「美しく清明なるを贊いふ称」であったとし、

古代の人のびとが「タマ」のことを物質的な玉と直接的に結びつけて考えていたとはいえないとしている〔鹿持 1946〕。

- 註 8 初出は、1931 年の上代文化研究会講演会筆記である。
- 註 9 他にも、同雑誌には大森啓一氏の「本邦産翡翠の光學性質」が収録されている〔大森 1939〕。河野氏の研究と合わせてこれら 2 編の研究は、日本列島内におけるヒスイ産出地の発見についての画期的なものとして評価されている〔宮島 2004〕。
- 註 10 水野氏は、「獸牙から勾玉に進化したのならば、獸牙を護符とすることが、ほとんどどの民族にも認められる共通の呪術である以上、勾玉と同一の玉が各地に存在してよいはず」〔水野 1969b ; 171 頁〕として、勾玉の獸牙起源説を否定している。
- 註 11 「人魂のさ青なる君がただ濁り逢へりし雨夜の葬りをそ思ふ」（万葉集卷第十六 三八八九）〔高木・五味・大野 校注 1962〕から、人の魂の色彩が青色をしていることが読み取れる。また、上野誠氏は『古事記』に記載されている「倭は 國のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しうるわし」をとりあげ、そのうちの「青垣」に注目し古代人は、青色の中に緑色の意味合いも含まれていた可能性を指摘している〔上野 2008〕。
- 註 12 松岡静雄氏は、神の名称など神聖視されているものに「チ」が含まれること、そして鈎をチと読むのは「上古生活の必需品を漁労する此の器具を貴重視した」ためとした上で、鈎状の形態には、神秘力・超自然観念・宗教的観念が深く関係していることを指摘している〔松岡 1916〕。
- 註 13 結縛崇拜について、長谷部言人は「結縛が物件の保持、封蔵、占有、保全、補強、契合、連結、総約、侵害防止等に有効なるを認識して、これをあらゆる物件に施し、福利の増進を祈念するを云う」とし、さらに、結縛は権利の表示でもあると述べている〔長谷部 1930〕。
- 註 14 この共同研究は 2014 年 7 月 25 日の『山陰中央新報』などで発表され、表題には「「勾玉」の謎 共同研究へ」として大々的に記事にされている。
- 註 15 中村氏らの研究では、芝ヶ原古墳を弥生時代終末期に造られた墳丘墓としている。しかしながら、本研究では、この古墳の築造時期を 3 世紀後半から 4 世紀前半としているため、古墳時代前期初頭の古墳としてとり扱っている。
- 註 16 出土した勾玉のうち 1 点は、長さ 4.6 cm、重さは 48.2 g と全国的にみても大形の勾玉である。また、弥生時代中期後葉のものとする。
- 註 17 『筆濃餘理』は、山形県の歴史書である。
- 註 18 集成された地域は、北海道・山形県・福島県・群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県・新潟県・石川県・長野県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県・大阪府・奈良県・鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・高知県・福岡県・佐賀県・長崎県・大分県・熊本県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県である。
- 註 19 日本玉研究会は、日本玉文化学会が発足した後も、2014 年に第 11 号、2015 年に第 12 号といったように継続的な機関誌の刊行を行なっている。内容はコハク製玉類に関する研究が多くみられる。
- 註 20 1 つの事例として、京都府城陽市にある久津川車塚古墳の年代について述べるならば、まず、大正 9 年に刊行された『久津川古墳研究』が参考資料としてあげられるであろう〔梅原 1920〕。この

報告書のなかで、梅原末治氏は古墳の築造時期を5世紀後半頃と推測している。その後の度重なる発掘調査に加えて、日本考古学における古墳の年代観の研究が進展していったことにより、この古墳の築造時期が5世紀前半頃と修正されている〔城陽市教育委員会 2015〕。

- 註 21 森本氏は、他に後藤守一氏が『日本考古學』のなかで作らせた集成図を肯定的に評価している〔後藤 1927〕。後藤氏の集成図は土器や石器に加え、身につけるものでは、帯・履物・耳飾り・釧、武器では弓矢・槍・刀剣、その他には鏡、農工具、機織具など細かく項目が設けられており、それぞれの項目に対して各地から出土した遺物の写真や実測図を多数載せている。具体的には、石剣については計 21 例集められており、そのなかには肥後国や大和国・対馬国といった国内のものだけでなく、朝鮮半島から出土したものも確認できる。
- 註 22 集成の成果は、武蔵相模之部・畿内之部・遠賀川系土器之部に分けられるかたちで機関誌『考古學』に発表されている。
- 註 23 このことについて述べるならば、動物の牙・歯・骨製の装身具と石製勾玉との間に関係性がまったく無いという意味で集成の対象から除外したわけではない。
- 註 24 厳密に述べるならば、「記・紀」において「勾玉」・「曲玉」の明確な使い分けは行なわれてはいない。事例をあげるならば、『日本書紀』（巻第六）垂仁天皇八七年二月の条に「八尺瓊勾玉」という記載がある一方で、同史料の中には「曲玉」という用語もみられる。また、その他には、3世紀後半頃に成立した「魏志倭人伝」のなかに記載されている「青大句珠」と、考古遺物の「まがたま」との関係性も議論されている〔原田 1940、中川 1957 など〕。
- 註 25 横井千秋の「勾玉考」に関する出典の記載は、本居宣長の『古事記伝』にはみられない。そのため、直接的に参考にしたものについては、不明である。しかしながら、これについては横井千秋と本居宣長との間でやりとりされた書簡の中からその一端が読みとれる。本居宣長記念館が、2007年夏の企画展として催した「『古事記伝』の世界」で展示されたもののなかに「横井千秋 勾玉追考」があり、それに関連させて、1794（寛政6）年12月11日付けの千秋へ宛てた書簡に「曲玉御考儀」とあることが説明されている。
- 註 26 「小学生全集」は、初級用（全33冊）と上級用（全55冊）の2種類から構成され、文藝春秋社から昭和2年から4年にかけて刊行された小学生向けの全集である。
- 註 27 昭和時代に入ると、改造社の「現代日本文学全集」や新潮社の「世界文学全集」のように書籍を比較的安い値段で人びとに提供していこうという気運が高まっていく〔大門 1967〕。そのなかには「岩波文庫」も含まれおり、そこでは100頁を星1つとして表し、1つ星で20銭、2つ星で40銭といった値段設定がなされていた。つまり、版組の大きさはおいておくとして、「岩波文庫」の値段設定で『日本建國童話集（初級用）』の値段をみた場合、それは50銭となる。実際には『日本建國童話集（初級用）』は35銭で売られていたことをふまえて述べるならば、当時、廉価なものとして販売された書籍と比べてみても、より安い値段で提供されたものといえるであろう。
- 註 28 その他にも、平面の形態がE字形を呈するいわゆる獣形勾玉や、孔が施されている方とそうではない方が繋がっている環状勾玉も含める。

# 第1章 出土勾玉からみた時代的・地域的変遷と社会動態

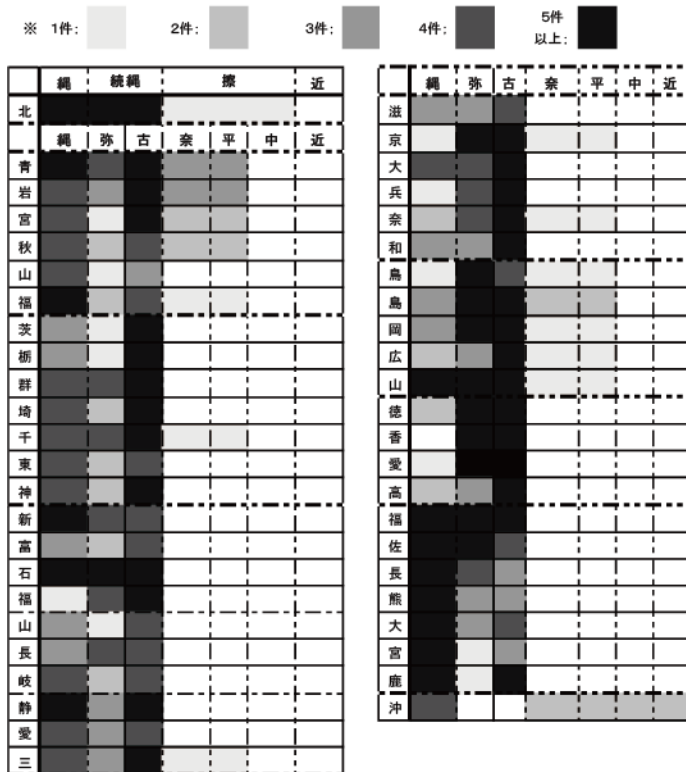
## 第1節 問題の所在

日本列島から出土する勾玉は、縄文時代早・前期といった早い段階からすでに確認できる。また、形態および材質には多様性がみられ、分布範囲は日本列島全域にわたることは、よく知られることである。そして、勾玉は縄文時代から奈良・平安時代、それ以降の時代というように、長期的且つ継続的に人びとが用いたものであり、その特徴から考えてみると他の考古遺物のなかを見渡しても稀有な存在といえる。

とするならば、勾玉を通して原始から古代、さらには中世、近世といった長い時間的変遷のなかで、人びとの勾玉に対する認識がどのように変化したのかを究明していくことが可能であるとともに、このことは興味深いテーマと思われる。そこで、本章では、土製を除いたすべての材質を対象にして、出土勾玉の時代的・地域的変遷を明らかにしたうえで、勾玉からみた社会の変容について考察を試みることにしたい。

考察にあたって、まずは、出土勾玉の集成データの蓄積状況について整理を行ない、問題点を把握することにする。第7表は、序論で取り扱った第2表から第4表をもとにして、消費地における集成が時代・地域ごとに、どの程度行なわれてきたのかを示したものである。この表をみてみると、従来、実施されてきた集成には、対象となった時代や地域に偏りがみられる。そこで、地域ごとにどのような基準のもと集成がなされてきたのかを、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世以降といった5つの時期に分けて記述を行なっていく。

第7表 消費地における集成データの蓄積状況



りがみられる。そこで、地域ごとにどのような基準のもと集成がなされてきたのかを、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世以降といった5つの時期に分けて記述を行なっていく。

縄文時代をみてみると、福井県では集成がそれほど積極的に行なわれてはいないものの、東日本を全体的にみれば、出土勾玉の情報がある程度、提示されている。しかしながら、提示された情報の多くは、ヒスイ製勾玉についてのものである。一方、西日本をみてみると、近畿地域・中国地域・四国地域では、東日本の各地域と比べて集成の実施件数は少ない傾向を

示しており、主に対象となっているのはヒスイである。他の材質に関しては、中国地域や愛媛県といった四国地域の一部において、石製勾玉の集成データが蓄積されている。さらに、九州地域と沖縄県では、ヒスイだけではなく、石以外の材質にも目を向けた集成が行なわれている。

次に、弥生時代について述べるならば、東日本では縄文時代と比べて集成の件数は少ない。そのようななか、北海道・青森県・群馬県・千葉県・新潟県・福井県・長野県では、ある程度、まとまった集成データの提示がなされている。そのなかには、「石製」や「墓から出土する」といった基準を設けて集められたものもみられる。また、他の県で行なわれているのは、やはりヒスイに注目した集成がほとんどである。

西日本についてしてみると、まず、近畿地域では「石製」・「ガラス製」・「墓から出土する」勾玉についての情報が、ある程度まとまって提示されている。また、中国地域では石製玉類の集成や、その成果を基にした研究が数多く行なわれている。そのため、中国地域では他の西日本の地域よりも石製勾玉の様相が把握されている。また、四国地域では、「ガラス」・「墓から出土する」勾玉が集成されてはいるものの、その多くはヒスイを対象としたものである。九州地域をしてみると、縄文時代と比べて集成件数が減少しており、特に南九州地域ではその傾向が顕著にみられる。対象となっている材質は、ヒスイやガラスが中心であり、宮崎県・鹿児島県においてはヒスイ製勾玉の情報のみ集成されている。沖縄県は、出土事例がみられないため、集成データの提示はなされていない。

古墳時代における集成をしてみると、東日本では弥生時代と比べて、集成件数が増加する傾向を示す。また、「ヒスイ」・「滑石」・「古墳出土のコハク」・「古墳から出土する」・「祭祀遺物としての」勾玉といった基準を設けた集成が、東日本ほぼ全域で行なわれている。一方、西日本でも東日本と同様な基準のもとで集成が行なわれてはいるが、九州地域は他の西日本の地域と比べて、集成件数が少ない。沖縄県については、弥生時代と同様に出土事例が確認できないため、集成データの提示は行なわれていない。

奈良・平安時代については、青森県や中国地域の石製玉類に加えて、東北地域や千葉県・三重県・京都府・奈良県では祭祀遺物を対象とした集成が行なわれており、その成果のなかから出土勾玉の情報を確認することができる。沖縄県では、当該期における代表的な勾玉の紹介がなされている。その他の地域については、集成データの提示というものが確認できない。

中世以降について述べるならば、沖縄県でグスク時代から近世にかけての玉類が集成されており、石製・ガラス製勾玉の出土状況について、ある程度把握することができる。しかしながら、その他の地域に関しては、集成が行なわれていない。

以上、従来行なわれてきた集成が、どのような方向性のもと行なわれてきたのか、について整理していきながら、集成データの蓄積状況を概観してきた。縄文時代では「ヒスイ」、弥生時代では「ヒスイ」・「墓から出土する」、古墳時代では「ヒスイ」・「滑石」・「墓から出土する」・「祭祀遺構から出土する」勾玉を中心に、集成は行なわれてきたようである。し

かしながら、各時代を通してみても、対象とはされていない材質や、墓以外の遺構から出土する勾玉については、集成データの蓄積が多いとはいえない。また、蓄積された集成データを重ね合わせてみれば、比較的広い範囲で勾玉が集成されてきたといえるが、そこには集成データを提示するにあたって、地域間における視点の統一がなされていないことや、そもそも集成データの提示自体が行なわれていない地域が存在することを指摘することができる。加えて、奈良・平安時代以降を対象とした集成が、ほとんど行なわれていないことも問題点の1つといえる。

これらのことをふまえて、本章では、勾玉からみた当時の社会構造や人々の精神文化の一端を理解するために、日本列島から出土する勾玉を統一した視点をもってできる限り集成し、従来の勾玉研究がそれほど積極的に行なってこなかった、消費地における勾玉の基礎的データの構築を列島規模で試みたいと考えている。具体的には、日本列島における勾玉の出現・発展・消滅を俯瞰するといった長期的な視野のもと（註29）、出土遺跡の数およびその分布、出土点数、材質、出土遺構に注目して、その変遷を明らかにしたい。この基礎的データを分析することにより、従来あまり注目されてこなかった巨視的な視野で、時代あるいは地域ごとにみられる勾玉の普遍性や独自性の抽出を試みてみたい。とり扱った遺跡数や点数などの詳細については、序論の第2節の3にある「本研究に用いる集成データについて」に詳しく記述してあるので、ここでは割愛させていただきたい。

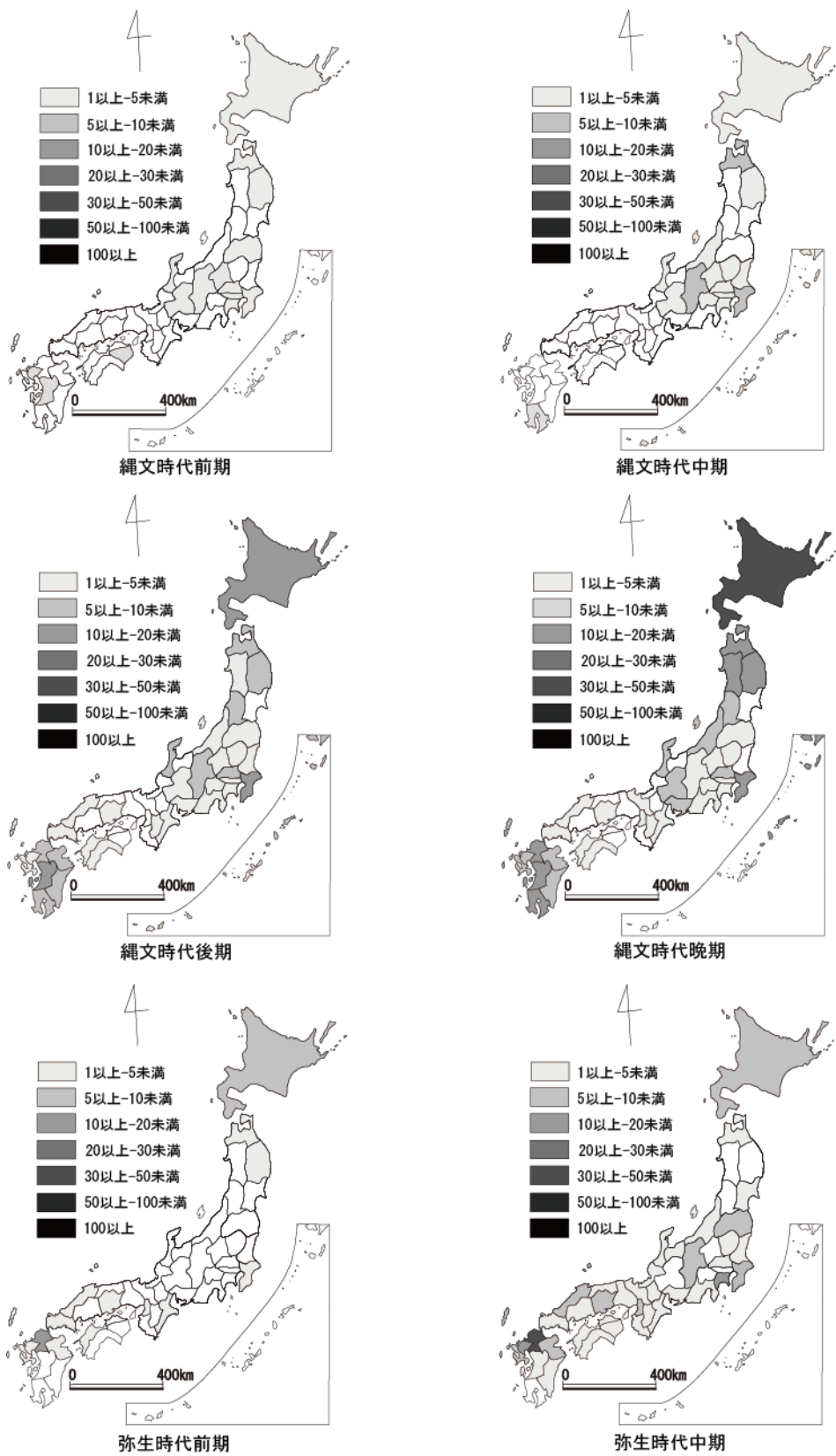
## 第2節 出土遺跡数および分布からみた変遷

第12図から第14図は出土遺跡の分布を面的に示したもので、第8表は各地域の出土遺跡数などを時期ごとに整理したものであり、これらを基にして分析を加えることにする（註30）。

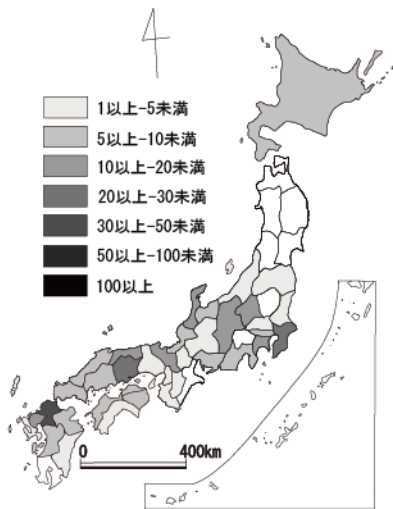
**第1期（縄文時代早期から中期）**について述べるならば、日本列島において勾玉が確認されはじめるのは、縄文時代早・前期からであり、その遺跡数は、早期に1遺跡、前期に22遺跡を数える。

早・前期の分布については、群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県といった関東地域に分布の中心がみられ、それを囲うように、北海道・青森県・岩手県、そして石川県・長野県・岐阜県で勾玉が出土している。また、徳島県・佐賀県・熊本県で出土が確認されるものの、遺跡数は少なく、次の時期への継続性はみられない。東海地域・近畿地域・中国地域で勾玉の出土が確認できないことを考え合わせると、勾玉の出現期においては、関東地域を中心とした東海地域よりも以東の地域で勾玉が積極的に使用されていたことが指摘できる。

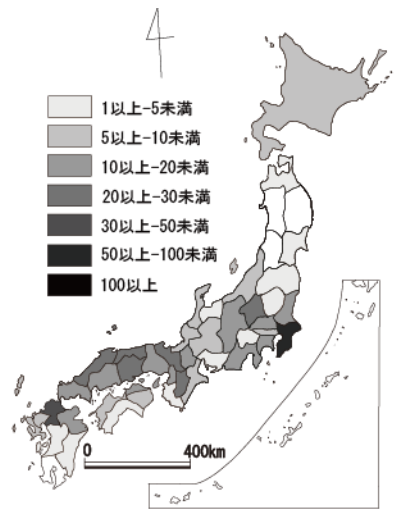
中期になると遺跡数が42遺跡を数え、青森県・岩手県に加えて、長野県で遺跡数の大幅な増加がみられる。また、分布状況は、鹿児島県上ノ平遺跡の事例を除くと、早期・前期の分布と比較してそれほど大差はなく、遺跡数は早期・前期から継続的に増加していっ



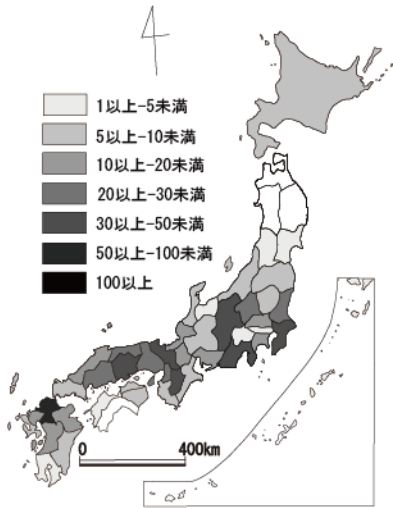
第 12 図 出土遺跡の分布①



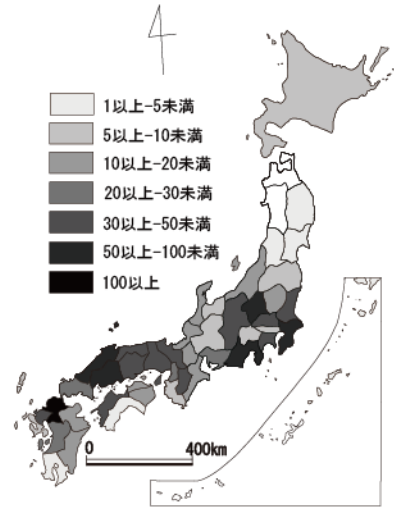
弥生時代後・終末期



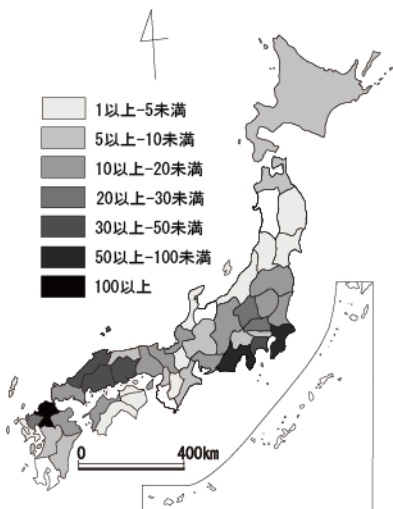
古墳時代前期



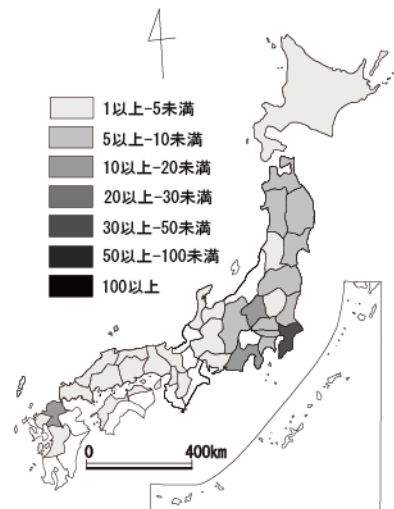
古墳時代中期



古墳時代後期



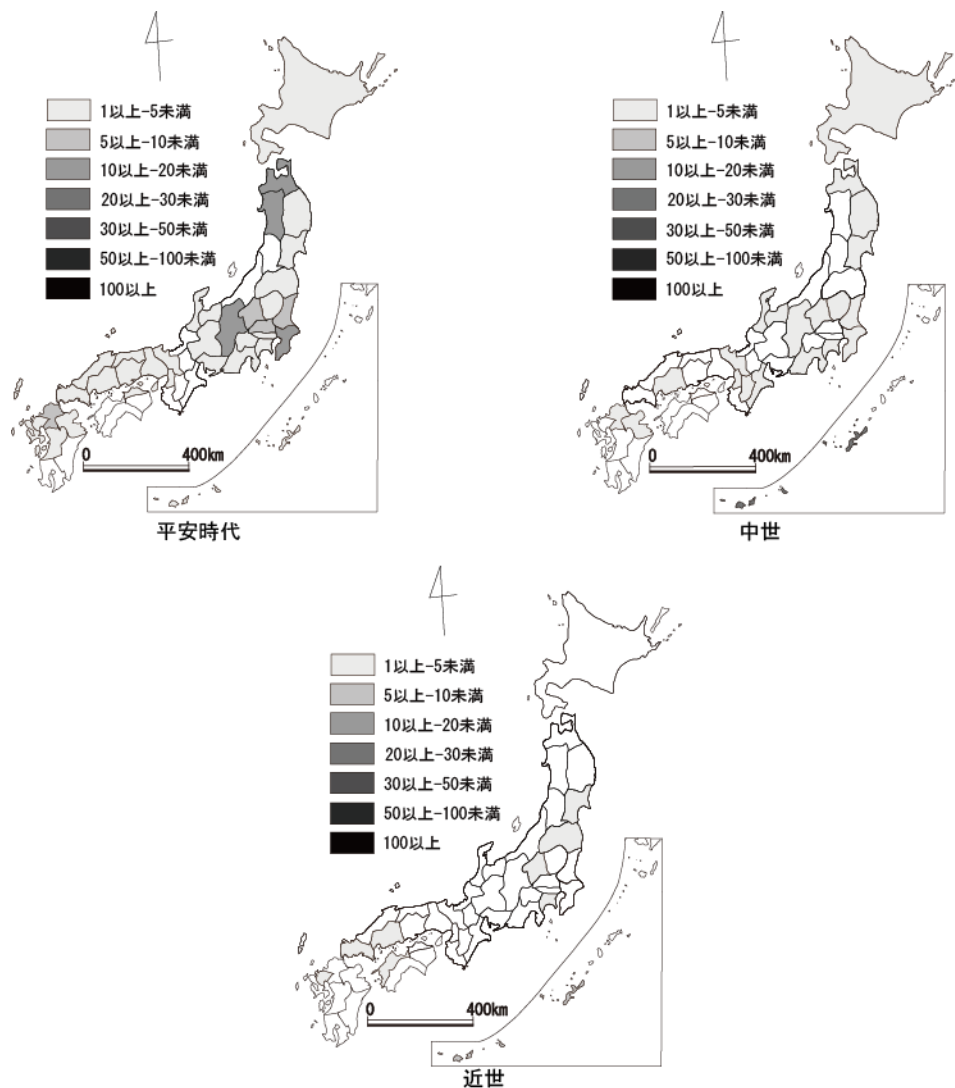
古墳時代終末期



奈良時代

第13図 出土遺跡の分布②





第14図 出土遺跡の分布③

たことが考えられる。

第2期（縄文時代後期から晩期）は、全国的に遺跡数が急激に増加するとともに、九州地域を中心とした西日本で勾玉の使用が、ある程度の事例数をもって確認されはじめる時期である。

具体的には、後期になると遺跡数が増加の傾向を示し、全部で161遺跡が確認できる。

この時期の東日本は、中期から継続して関東地域に分布が集中していることが確認でき、千葉県は17遺跡は、全国的にみても遺跡数が多い。また、最も出土数が多いのは北海道である。中期の分布とは異なる点としては、東海地域で勾玉が出土しはじめることがあげられ、当期になると東日本のほぼ全域で勾玉が使用されることが指摘できる。

一方、西日本については、九州地域に分布が集中することが確認でき、加えて島根県・岡山県・山口県といった中国地域、愛媛県・高知県といった四国地域、沖縄県でも勾玉の



り変わっていることが確認できる。それに伴うかたちで、北海道では遺跡数が増加していき、県単位でみた場合、最も出土遺跡数が多い地域となる。

西日本へ目をむけると、京都府・大阪府・奈良県で1遺跡ずつ確認でき、近畿地域における勾玉の使用がごく僅かではあるものの、面的広がりを見せる。また、後期とは異なり、沖縄県での勾玉の出土は確認できない。その他の地域は、後期の分布と同様な状況を示しており、遺跡数が継続的に増加していることが確認できる。

そのようななか、九州地域は継続して福岡県・熊本県・鹿児島県での出土遺跡数が多くみられる。しかし、佐賀県で5遺跡・長崎県で6遺跡、大分県で7遺跡、宮崎県で9遺跡が確認されていること考えあわせてみると、後期にみられた南九州地域に分布が集中するといった現象は、それほど強く認めることができない。

**第3期（弥生時代前期から弥生時代後期・終末期）**は、遺跡数が増加した福岡県を除き、その他の全ての地域では、出土遺跡数がほとんど見られなくなり、その後、日本列島各地で勾玉の使用が再確認できる時期である。詳しく述べるならば、まず、弥生時代前期にはいると、遺跡数は縄文時代晩期の226遺跡に比べ大幅に減って41遺跡となる。この時期の分布については、北海道の8遺跡と福岡県の15遺跡、加えて青森県・千葉県・三重県・島根県・岡山県・佐賀県・長崎県・大分県で各々1遺跡、岩手県・大阪府でそれぞれ2遺跡、山口県・愛媛県では各々3遺跡が確認されており、遺跡数の量そして、分布の広がり方をみても縄文時代晩期の様相とは明らかに異なることが指摘できる。

また、全国的に出土遺跡数が減少傾向を示すなか、福岡県では遺跡数の増加が確認できる。この現象は、第3期（弥生時代前期から弥生時代後・終末期）における特徴の1つとしてあげることができる。

中期になると、出土遺跡が増加の傾向を示し、全部で164遺跡が確認できる。この時期の東日本は、神奈川県・千葉県を中心とした関東地域に分布が集中していることが確認できる。その他の地域は、北海道・青森県・宮城県・福島県・北陸地域・長野県・東海地域である程度まとまった量の出土遺跡を確認できることから、東日本のほぼ全域で勾玉の使用が再確認できるといってよいと思われる。

西日本では、九州地域に分布の中心がみられ、その他の地域については、近畿地域に加え、島根県・岡山県を中心とした中国地域、四国地域で勾玉の出土事例が確認できる。つまり、沖縄県を除き、西日本の全ての地域で勾玉が使用されていたことが確認できる。九州地域の様相について述べるならば、縄文時代の様相と大きく異なる点がみられる。すなわち、福岡県で34遺跡が確認される一方で、南九州における出土遺跡数の合計が5遺跡であること、加えて、鹿児島県で出土遺跡が確認できなくなることもふまえてみると、分布の中心が福岡県を中心とした北部九州地域に移り変わっていることが指摘できる。

後期・終末期に入ると、さらに出土遺跡数の急激な増加がみられ、合計292遺跡が確認できる。東日本の分布について詳しく述べるならば、東北地域で出土がほとんどみられなくなる大きな変化といえ、その点を除くと、中期の分布と比べて大差はなく、分布

は群馬県・千葉県・神奈川県を中心とした関東地域に集中していることが確認できる。また、石川県で14遺跡、長野県で15遺跡が確認できることから、地域によっては分布に濃淡が強くみられる場合もあることが指摘できる。

西日本の分布については、中期の分布と比較して大差はなく、福岡県を中心とした北部九州地域では依然として分布が集中してみられる。そのようななか、岡山県を中心とした山陰地域の出土遺跡数は、合計65遺跡を数え、福岡県を中心とした九州地域の59遺跡よりも多くみられる。この山陰地域における勾玉を使用する頻度の高まりは注目できる。

**第4期（古墳時代前期から中期）**は、遺跡数が急激に増加すると共に、近畿地域において勾玉の使用が積極的に行なわれていくことが確認できる時期である。具体的にみていくと、まず、前期の出土遺跡数としては、516遺跡が確認できる。この時期の東日本は、東北地域において勾玉の使用が少ないなど、弥生時代後期・終末期の分布と同様な広がりを示しており、遺跡数が継続的に増加していったことが考えられる。そのようななか、関東地域は前代の57遺跡から123遺跡と出土遺跡の大幅な増加がみられ、分布の中心地となっている。関東地域のなかの遺跡数の内訳をみていくと、千葉県の56遺跡が最も多く、次いで群馬県の20遺跡、神奈川県内の14遺跡と続いて多くみられる。また、東山地域では長野県、東海地域では静岡県で出土遺跡数が多くみられる。

一方、西日本では近畿地域で99遺跡、山陰地域で96遺跡、四国地域で28遺跡、九州地域で81遺跡を確認することができ、出土遺跡の総数といった場合には、東日本よりも西日本のほうが多いことが指摘できる。分布の広がりについては、弥生時代後期・終末期の分布と比べて大差はないが、やはり近畿地域での出土遺跡数が急激に増加することが注目できる。近畿地域では、出土遺跡数が前代の25遺跡から99遺跡と驚異的に増加しており、全国的にみても増加幅が大きい地域といえる。

中期になると、出土遺跡数はさらに増え、その数は663遺跡となる。東日本の分布は、前期とそれほど大きな差はみることができなく、分布の中心は関東地域にある。関東地域における出土遺跡数についてみてみると、千葉県の47遺跡が最も多く、次いで茨城県の28遺跡、群馬県の24遺跡が多い地域としてあげられる。また、東海地域では前期の24遺跡から62遺跡と急激に出土遺跡数が増加していることが確認できる。

西日本については、近畿地域で136遺跡、山陰地域で107遺跡、四国地域で17遺跡、九州地域で109遺跡が確認することができ、近畿地域に分布が最も集中するようになる。また、中国地域および四国地域の分布をみた場合、瀬戸内海に面した地域において出土遺跡数が多くみられる傾向が確認できる。九州地域においては、福岡県の51遺跡が最も多い。

**第5期（古墳時代後期から終末期）**は、出土遺跡数が全時代を通して最も多くなり、特に西日本において、山陰地域において遺跡数の大幅な増加が確認できる時期である。詳しく述べるならば、集成からみた場合、後期の出土遺跡数は1,274遺跡を数え、中期の663遺跡と比べると約2倍に増えている。この時期の分布について、まず、東日本では、中期の分布と比べて大差はないものの、福島県といった東北地域の南部において、勾玉の使用

が徐々に増えていることが指摘できる。

一方、西日本の分布について述べるならば、分布の広がりについては、中期と比べて大きな変化はみられない。しかし、出土遺跡数の増加について述べるならば、山陰地域のうち島根県と広島県、そして、北部九州地域のうち福岡県における出土遺跡の増加幅は注目できる。具体的には、島根県は19遺跡から67遺跡、広島県は28遺跡から81遺跡、福岡県は51遺跡から148遺跡へと大幅に増加していることが確認できる。この島根県と広島県で遺跡数が大幅に増加することによって、山陰地域の出土遺跡数が近畿地域よりも多くなる。この現象は、当期における特徴の1つとして考えられる。

終末期に入ると、出土遺跡数は714遺跡と減少する。分布については、まず、東日本では関東地域に分布の中心地がみられるものの、遺跡数は減少する傾向が確認でき、これは中部地域・東海地域でも同様にみられる現象である。一方、東北地域では後期の19遺跡から31遺跡と増加しており、全国的にみても遺跡数の増加がみられるのは、この地域のみである。このことについても、当期の特徴の1つとして捉えることができると考えられる。

また、西日本における分布の広がり、後期の分布と比べて大差はなく、全体的にどの地域においても出土遺跡数は減少していることが確認できる。そのようななか、減少幅の大きい地域としては、近畿地域・山陰地域・九州地域があげられる。具体的には、近畿地域では158遺跡から48遺跡、山陰地域では255遺跡から129遺跡、九州地域では259遺跡から146遺跡といったように、いずれの地域においても100遺跡以上の減少が確認できる。特に、古墳時代に入り急激に出土遺跡の数をのばしてきた近畿地域で、大幅な減少がみられたことは、勾玉の歴史的変遷を考える上で重要な現象と捉えることができよう。

**第6期(奈良時代から平安時代)**は、遺跡数が増加する東北地域を除くすべての地域で、勾玉の出土事例の大幅な減少を確認することができ、西日本においては勾玉の使用がごく僅かとなる時期である。詳しくみていくと、奈良時代に入ると、遺跡数はさらに減少し、その数は182遺跡となる。

この時期の分布の中心地は関東地域ではあるものの、その関東地域から九州地域までといった広範囲で出土遺跡数の急激な減少を確認することができる。具体的には、関東地域は187遺跡から78遺跡、北陸地域は16遺跡から2遺跡、東山地域は26遺跡から9遺跡、東海地域は99遺跡から14遺跡、近畿地域は48遺跡から9遺跡、山陰地域は129遺跡から12遺跡、四国地域は24遺跡から3遺跡、九州地域は146遺跡から16遺跡といったように出土遺跡数の大幅な減少が確認できる。それに対して、東北地域では、古墳時代終末期の31遺跡から37遺跡と出土遺跡数が増加する傾向を示す。

平安時代になると出土遺跡数は126遺跡を数える。当期における分布の広がり、奈良時代と同じ様相を示しており、青森県や秋田県を中心とした北東北地域や関東地域、長野県で勾玉の出土事例が多くみられる。その他の地域は、勾玉が出土してはいるものの、事例数は少ない。また、この時期には、弥生時代から古墳時代にかけて、出土事例がみられなかった沖縄県の3遺跡から勾玉が出土している。

第7期（中世）は、勾玉の出土事例が全国的にごく僅かとなり、出土遺跡数の約半数が沖縄県で確認できる時期である。遺跡数などを詳しくみてみると、中世における出土遺跡数は合計64遺跡となり、そのうちの28遺跡は沖縄県で確認できる。他の地域は、北海道・本州・九州地域でそれぞれ勾玉が出土しているが、数量は少ない。また、神奈川県の1事例については、下層にあった古墳からの流れ込みが考えられている。

第8期（近世以降）は、沖縄県でも出土遺跡の減少がみられるようになり、日本列島で勾玉がほとんど使用されなくなる時期である。近世に入り、遺跡数は18遺跡となり、内訳は福島県・群馬県・神奈川県・広島県・山口県・愛媛県・佐賀県から1遺跡ずつ、宮城県で3遺跡、沖縄県で8遺跡である。但し、山口県の1事例については、流れ込みの可能性が推測されている。

これらをふまえながら分析を加えるならば、日本列島で勾玉が出現するのは縄文時代早・前期のころであり、それ以降、提示した8つの時期と時期の間には、時間の経過と共に分布の広がりや出土遺跡の数が大きく変化していることが確認できた。

以上、勾玉の変遷を第1期は縄文時代早期から中期、第2期を縄文時代後期から晩期、第3期は弥生時代前期から後期・終末期、第4期を古墳時代前期から中期、第5期を古墳時代後期から終末期、第6期は奈良時代から平安時代、第7期は中世、第8期を近世以降といった8つの時期に区分して、出土遺跡の分布や数に注目しながら各時期の特徴について検討を加えた。

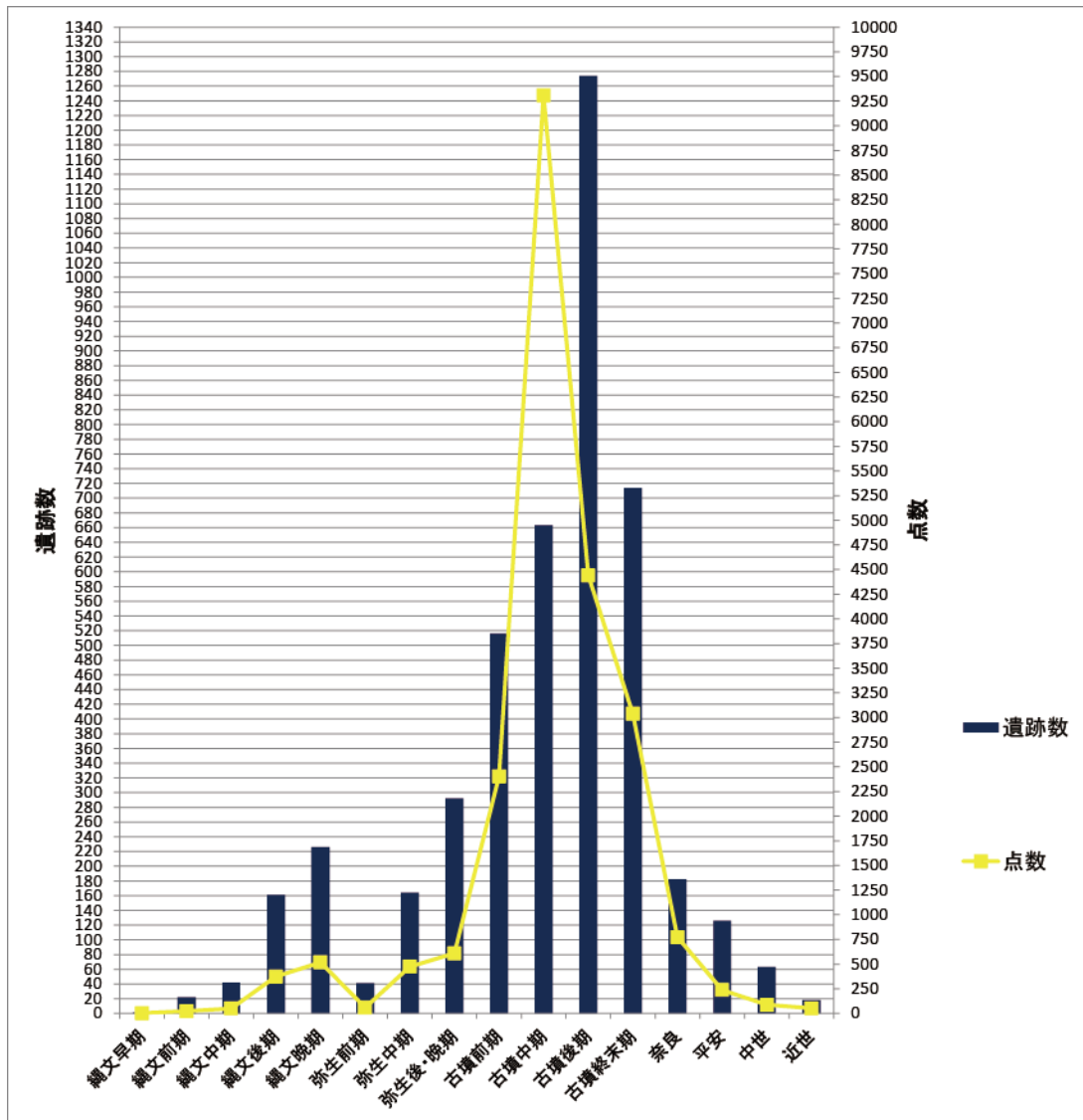
時代を追いながらの叙述ということから、事実の羅列に終始したきらいはみられるが、これによって日本列島における勾玉の分布や遺跡数が時期の変遷によっていかなる変化をみせるのかが具体的に明らかになったと思う。

### 第3節 出土点数からみた変遷とその地域性

時間の経過と共にみられる出土点数の増減や、そこからみることができる地域性は、第2節で明らかにした出土遺跡数や分布の変遷と同様な傾向を示す場合が多い。しかしながら、幾つかの点に関しては、異なる様相を確認することができる。そこで、本節では、その相違点に注目しながら、出土点数からみた変遷とその地域性についてみていくことにする。以下、出土遺跡数と出土点数の移り変わりを示した第8表を用いながら述べていく。

まず、第2期（縄文時代後期から晩期）について述べるならば、縄文時代後・晩期の栃木県では、出土遺跡が2遺跡と少ないものの、出土点数は関東地域内で2番目に多い。また、晩期の秋田県では、東北地域で最も出土遺跡が分布する青森県よりも、出土点数が多いことが確認できる。

第3期（弥生時代前期から後期・終末期）をみてみると、弥生時代中期の福島県が、同じ時期の北部九州地域よりも出土遺跡数が少ないことはすでに明らかにした。しかし、出土点数から見た場合、中期の福島県の111点というのは、同時期の他地域を見渡しても並ぶところはなく、最も多いことが指摘できる。また、長野県では、中期から後・終末期へ



第 15 図 出土遺跡数と出土点数の変遷

と移り変わるなかで、出土遺跡数が全国的な傾向と同様に増加していく一方で、出土点数は減少するという現象を確認することができる。

次に、第4期（古墳時代前期から中期）のうち、中期という時期が、全時代を通して、出土点数が最も多くなるということが、注目できる。すなわち、第2節でみてきたように、出土遺跡数の最盛期が、次の第5期（古墳時代後期から終末期）のうちの後期になることをふまえて述べるならば、全国的な傾向として、出土遺跡数と出土点数の最盛期は一致しないことが指摘できる（第15図）。

この中期に出土点数が最も多くなる現象の背景には、出土遺跡はそれほど多くはないが、出土点数の数値がかなり高くなる地域が確認されていくことが大きな要因としてあげられる。具体的には、縄文・弥生時代においては、30遺跡確認される地域であっても出土点数は100以下であった。これに対して、第4期の前期から、とくに中期になると、近畿地域

を中心として、様々な地域で縄文・弥生時代にみられたような出土遺跡数と出土点数とのある種のバランスというものが崩れていく。事例をあげるならば、群馬県の 24 遺跡で 181 点、岐阜県の 8 遺跡で 290 点、京都府の 32 遺跡で 4,326 点、大阪府の 27 遺跡で 852 点、奈良県の 30 遺跡で 969 点、大分県の 13 遺跡で 463 点などである。

第 5 期（古墳時代後期から終末期）では、遺跡数のわりに出土点数が多い現象を継続して確認できる。とくに終末期の東北地域で顕著にみることができ、このことは、すでに述べた全国的に出土遺跡数が減少するなかで、その数が増加するといった東北地域の地域性と矛盾しない。具体的には、青森県の 6 遺跡で 203 点、岩手県の 4 遺跡で 107 点、福島県の 14 遺跡で 246 点があげられ、同時期の三重県の 5 遺跡で 22 点や、福岡県の 94 遺跡などと比較すると、より東北地域にみられる特異性が目立つ。

その他には、後期の東山地域では、全国的な傾向と同じく、前代から出土遺跡数が増加しているが、出土点数は少なくなる。また、東海地域に目を向けると、後期から終末期に移り変わるなかで、全体的に日本列島では、出土遺跡数と出土点数が減少していくなか、当該地域では出土遺跡数は減るものの、出土点数は 475 点から 596 点へと増加する。

第 6 期（奈良時代から平安時代）では、第 4 期（古墳時代前期から中期）からの出土遺跡数と出土点数とのある種のバランスの崩れと言うものが、青森県を中心とした東北地域で見られるが、その他の地域ではその現象はそれほどみられなくなる。

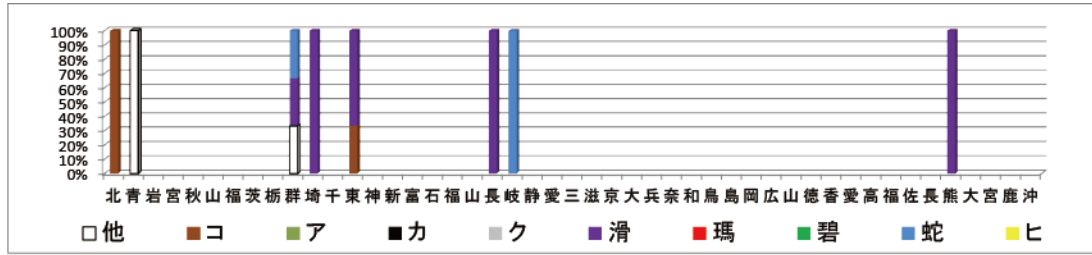
#### 第 4 節 材質の割合からみた変遷とその地域性

日本列島から出土する勾玉が、さまざまな材質によって作られていることはよく知られていることである。このことをふまえて、出土勾玉の材質が時間の経過によって、どのような変遷をたどるのかを明らかにすると共に、その地域性について考えていく。考察を行なうにあたっては、前項で提示した 8 つの時期に対応させながら述べていきたい。第 16 図～第 18 図は、集成した 2 万 796 点のうち、時期の特定ができるものを抽出し、各県における出土勾玉の材質の割合を時期ごとに示したものである（註 31）。

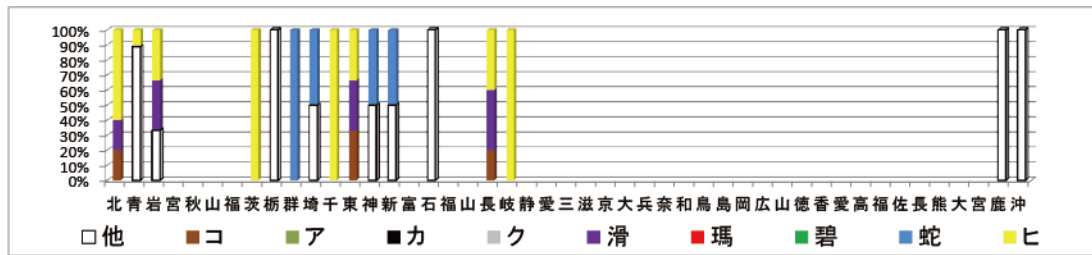
第 1 期（縄文時代早期から中期）では、地域ごとに材質の割合が異なる段階を経た後、東日本でヒスイ製勾玉が主体的に使用されていく時期である（第 16 図）。詳しくみると、出土が確認され始める早期・前期は、滑石が多くみられ、次いで蛇紋岩、コハクの順に出土の割合が低くなる。関東地域・長野県・熊本県で滑石がみられるが、地域ごとに割合は異なる。一方、中期になると、早期・前期と同様に地域ごとに出土勾玉の割合が異なりをみせるものの、北海道・関東地域・東山地域といった東日本でヒスイが目立つようになる。その他の材質は蛇紋岩や滑石、コハクがある。

第 2 期（縄文時代後期から晩期）は、北海道を除き、材質の割合から日本列島をみた場合、ヒスイを主体的に使用する東日本と、ヒスイを受け入れながらもクロム白雲母を主体的に使用する西日本〔大坪 2015a〕と大きく分けることができる時期である（第 16 図）。

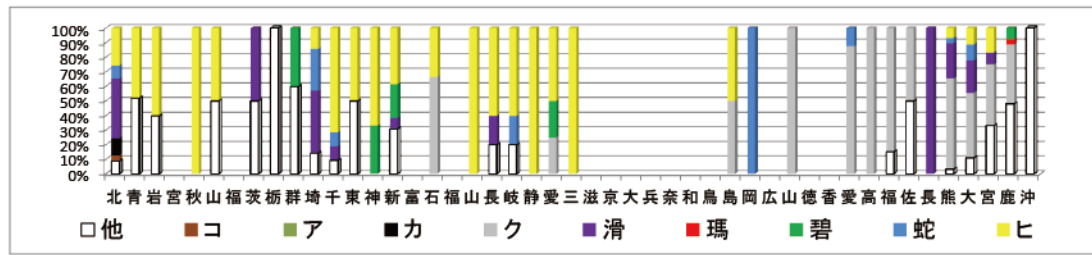




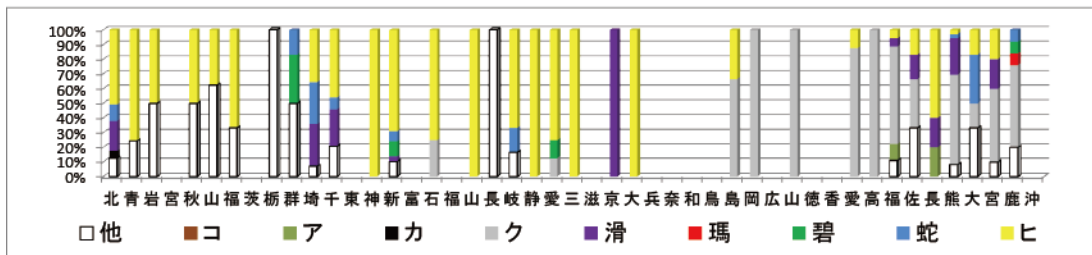
縄文時代前期



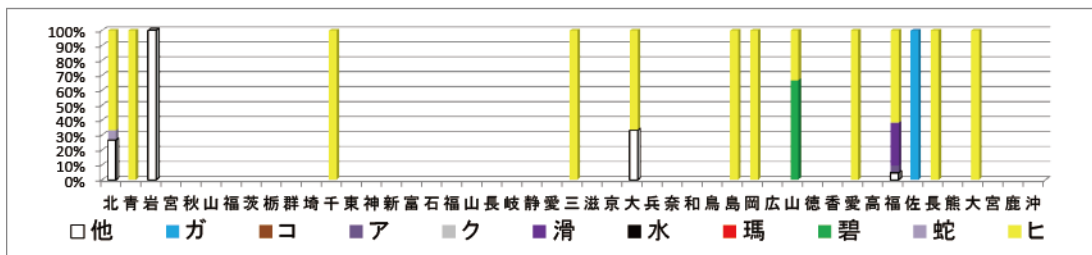
縄文時代中期



縄文時代後期

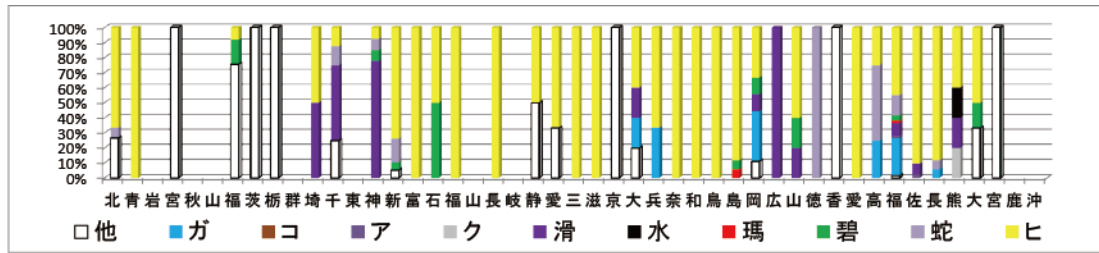


縄文時代晩期

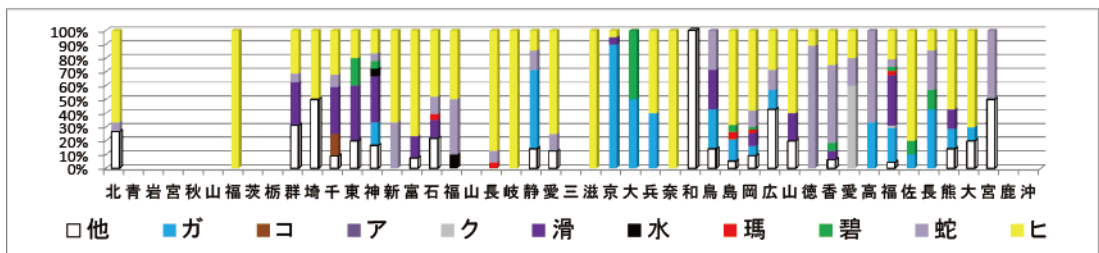


弥生時代前期

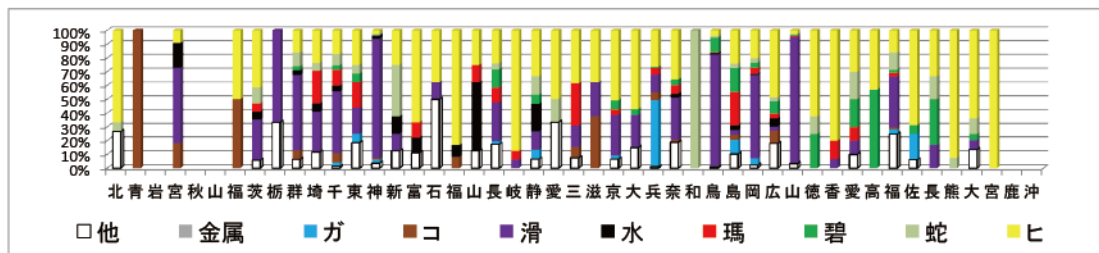
第16図 出土勾玉における材質の変遷①



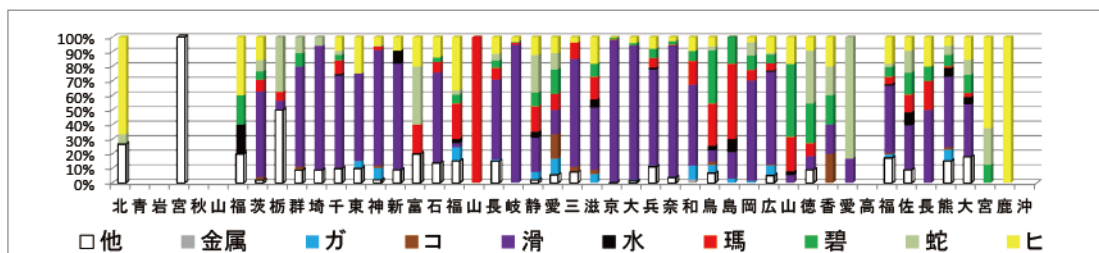
弥生時代中期



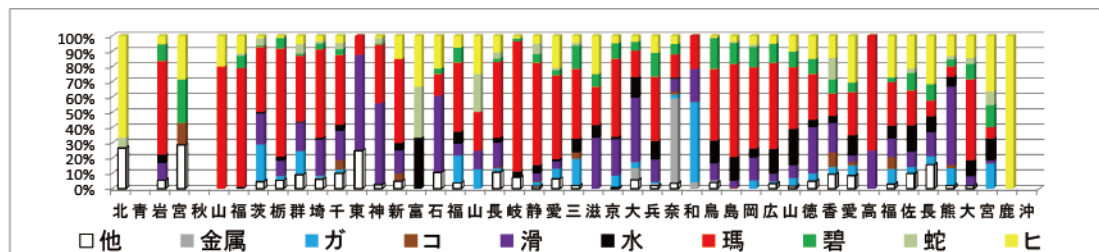
弥生時代後・終末期



古墳時代前期



古墳時代中期



古墳時代後期

第 17 図 出土勾玉における材質の変遷②

具体的にみてみると、まず、東北地域・関東地域・中部地域ではヒスイが材質の主体を占め、他には蛇紋岩・碧玉・滑石がみられる。

また、大坪氏がすでに指摘しているように、当期になると九州地域でクロム白雲母製の玉類が多く確認することができる〔大坪 2015a〕。その他の地域で、クロム白雲母製勾玉の出土事例が多くみられるのは、島根県・岡山県・山口県といった中国地域や、愛媛県・高知県といった四国地域などがあげられ、加えて、石川県・愛知県といった東日本でも少量確認することができる〔大坪 2015b〕。北海道はヒスイ・滑石が割合の半分を占め、その他に蛇紋岩・カンラン岩・コハクをみることができ、材質の割合からみた場合、東北地域・関東地域・中部地域とは異なった地域性をみせている。

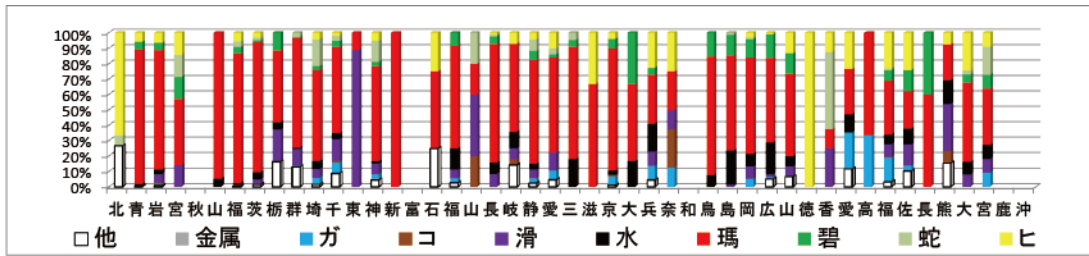
**第3期（弥生時代前期から弥生時代後期・終末期）**は、日本列島の各地でヒスイが割合の多くを占めるようになり、加えて、西日本ではそれまでみられなかったガラス製勾玉が増加していく時期である（第16・17図）。具体的述べるならば、前期・中期になると、東日本だけではなく西日本でもヒスイ製勾玉の出土が多くみられるようになる。

また、縄文時代にはみられなかった材質が3つ確認できるようになる。その1つがガラスであり、前期では佐賀県、中期では大阪府・兵庫県・岡山県・高知県・福岡県・長崎県といった西日本で出土が確認され、時期の経過と共に分布が広がり、出土量も増加する傾向を示す。2つ目は水晶であり、中期の熊本県で1点確認できる。3つ目は天河石（アマゾナイト）であり、福岡県・佐賀県で出土している。このようななか、福岡県の場合、ヒスイの他にも蛇紋岩・碧玉・瑪瑙・滑石・天河石・ガラスというように、さまざまな材質が確認されており、他の県とは異なった地域性をみせている。

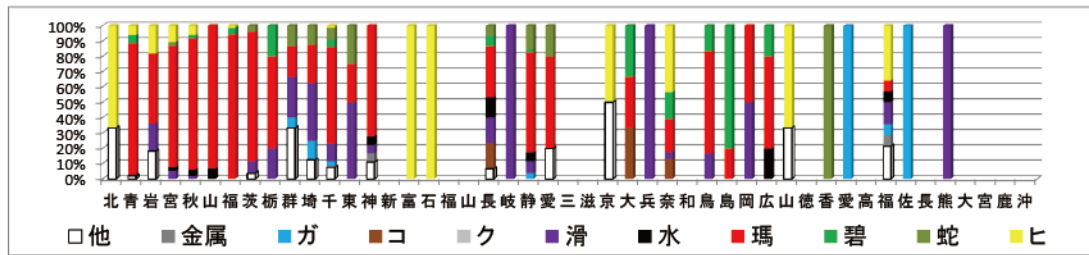
後期・終末期になると、各地ではヒスイの割合は依然として多くみられるものの、その他の材質の割合も高くなる傾向が確認できる。たとえば、関東地域ではヒスイの他に滑石も割合の多くを占めている。西日本では、蛇紋岩やガラスがヒスイの割合と同等あるいはそれ以上になる県も確認できる。

**第4期（古墳時代前期から中期）**では、北海道を除き、日本列島の各地で主体となる材質が、ヒスイから滑石へと徐々に変化する時期である（第17図）。詳しくみていくと、前期から中期へと移りゆくなかで、関東地域から九州地域までといった広い地域では、ヒスイもある程度の量をもってみることもできるが、それよりも滑石の出土量が大幅に増加していく現象が確認できる。また、他の材質について述べるならば、碧玉と瑪瑙の割合が時間の経過と共に増加していく。さらに、当期になると、新しく金属製の勾玉が出土するようになる。事例をあげるならば、和歌山県車駕之古址古墳の後円部墳丘斜面から金製勾玉が1点確認されている。時代は中期である。

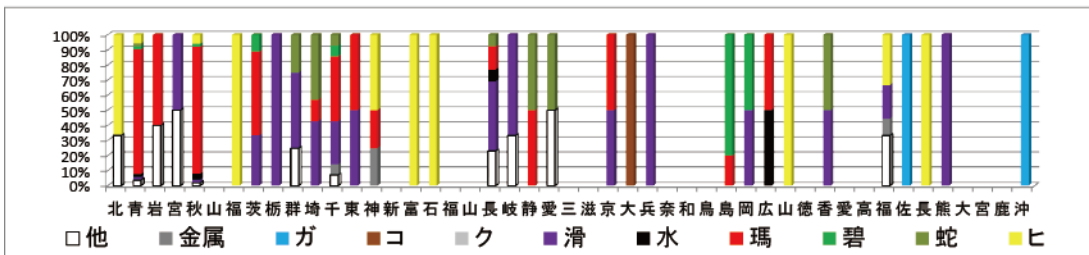
**第5期（古墳時代後期から終末期）**では、北海道を除いた日本列島の各地で、主体となる材質が瑪瑙になる時期である（第17・18図）。詳しくみてみると、東北地域から九州地域までといった広範囲な地域で、材質の割合の多くを瑪瑙が占めるようになることから、第4期（古墳時代前期から中期）とは様相が大きく変化していることが指摘できる。その



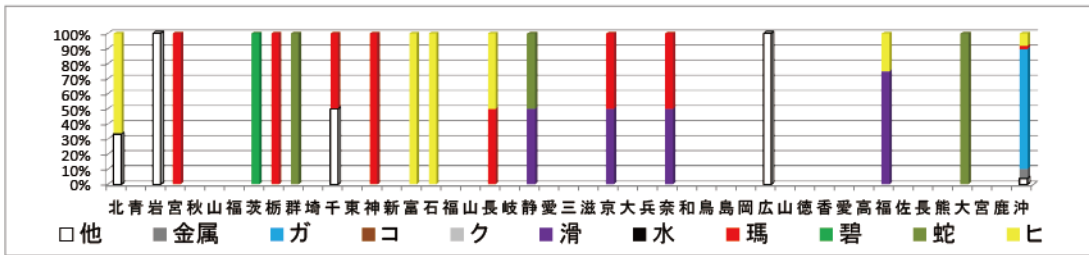
古墳時代終末期



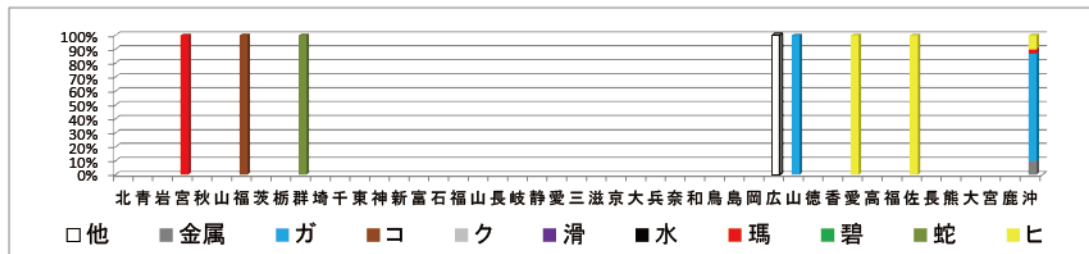
奈良時代



平安時代



中世



近世以降

第 18 図 出土勾玉における材質の変遷③

他の材質については、ヒスイ・滑石・ガラスなどはそれほど多くはないが、どの地域においても確認することができ、水晶の割合においては第4期（古墳時代前期から中期）と比べて増加する傾向を示す。

材質によって地域性がみられるものとして、金属製勾玉があげられる。すなわち、後期の近畿地域で金属製勾玉の出土量が集中していることが指摘できる。事例をあげると、大阪府富木車塚古墳の前方部にある第2埋葬施設から銀製勾玉4点、兵庫県下大谷1号墳の第1埋葬施設から青銅製勾玉1点、奈良県藤ノ木古墳の石棺内 北東部から銀製勾玉127点、同県慈恩寺第1号墳の葬施設内から銀製勾玉7点、同県塩屋地区遺跡の石室内から銅製勾玉1点、和歌山県尾ノ崎遺跡の横穴式石室1号から青銅製勾玉1点が出土している。

**第6期（奈良時代から平安時代）**では、全国的に瑪瑙が割合の多くを占めるといった現象をみることができなくなり、北陸地域や西日本では瑪瑙以外の材質が多くみられるようになる時期である（第18図）。具体的には、奈良時代になると、東北地域・関東地域・東海地域は、第5期（古墳時代後期から終末期）から継続して、瑪瑙が割合の多くを占めていることが確認できる。一方、それぞれの地域で割合は異なりをみせるものの、北陸地域ではヒスイ、近畿地域ではヒスイ・碧玉・滑石・コハク、山陰地域ではヒスイ・碧玉・滑石、四国地域では蛇紋岩・ガラス、九州地域では滑石・ガラスといった瑪瑙以外の材質が目立つようになる。それに加えて、平安時代になると関東地域でも瑪瑙よりも蛇紋岩や滑石の割合のほうが目立つようになり、沖縄県ではガラス製勾玉2点が出土している。

**第7期（中世）**では、県ごとで割合は異なりをみせ、材質の種類も沖縄を除き、1あるいは2種類となる時期である（第18図）。沖縄県について述べるならば、ガラスが割合の多くを占め、その他にはヒスイ・金・瑪瑙などが確認できる。

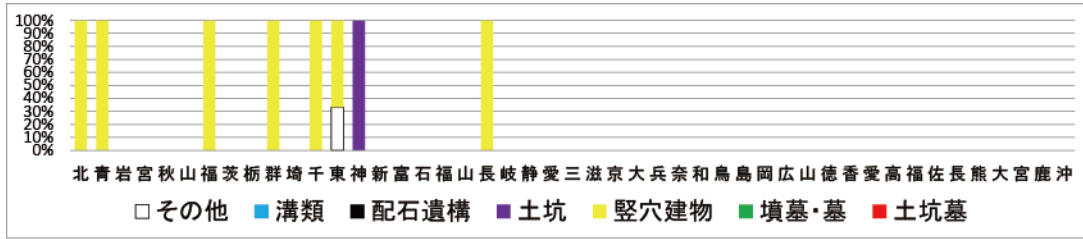
**第8期（近世以降）**では、沖縄を除く、出土が確認できる県では、材質の種類が1種類となる時期である（第18図）。沖縄県は、中世から継続して同じ様相がみられる。

以上のことから、出土勾玉の材質がどのような変遷過程をたどるのか、さらに、そこからみえる地域性についても明らかとなったと考えられる。また、これらと想定した時期区分には、対応性がみられるといえる。

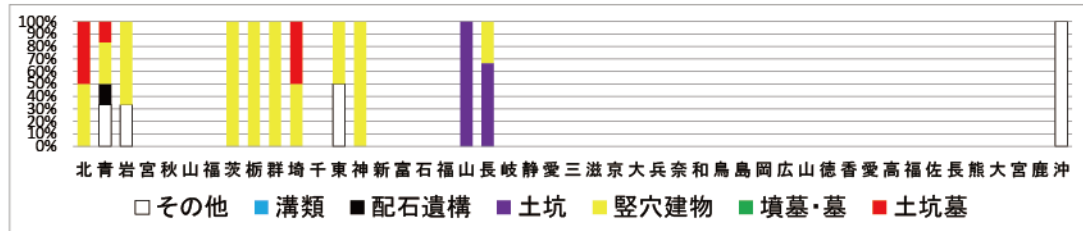
## 第5節 出土遺構の変遷とその地域的特徴

第19図から第23図は、勾玉が出土した遺構が各県でどのような割合で確認されているのかを示したものである（註32）。これらの図を用いていきながら、各時期の出土遺構の変遷とその地域的特徴についてみていくことにする。

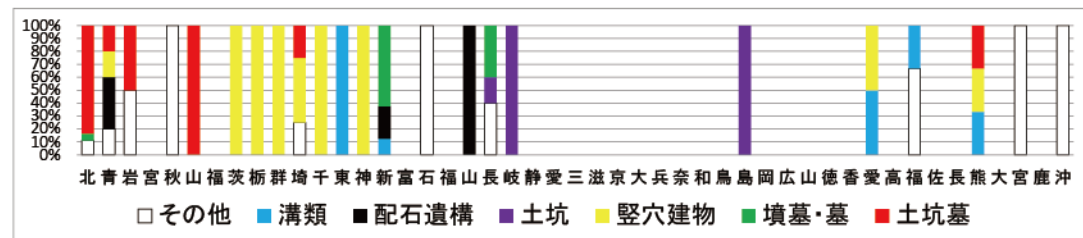
**第1期（縄文時代早期から中期）**について述べるならば、東日本で竪穴建物からの出土が多いなか、徐々に墓からも勾玉が出土してくる時期である。前期の北海道・東北地域・関東地域・長野県では、大半の勾玉が竪穴建物から出土している。また、その傾向は、中期にも継続してみられる。竪穴建物以外の遺構では、土坑は前期の神奈川県、中期の山梨



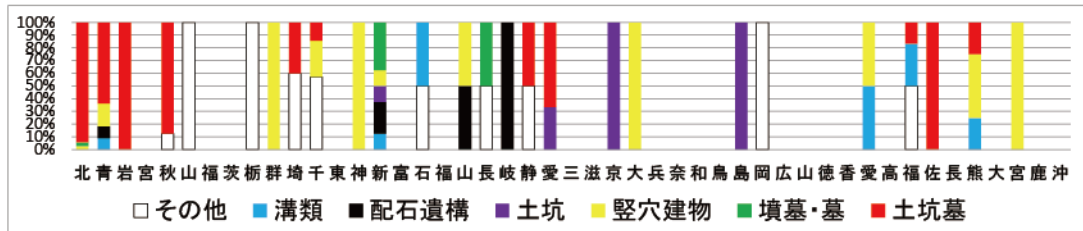
縄文時代前期



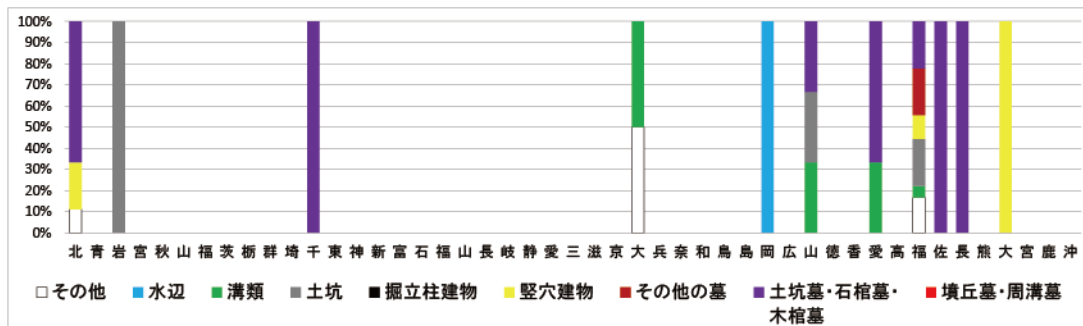
縄文時代中期



縄文時代後期

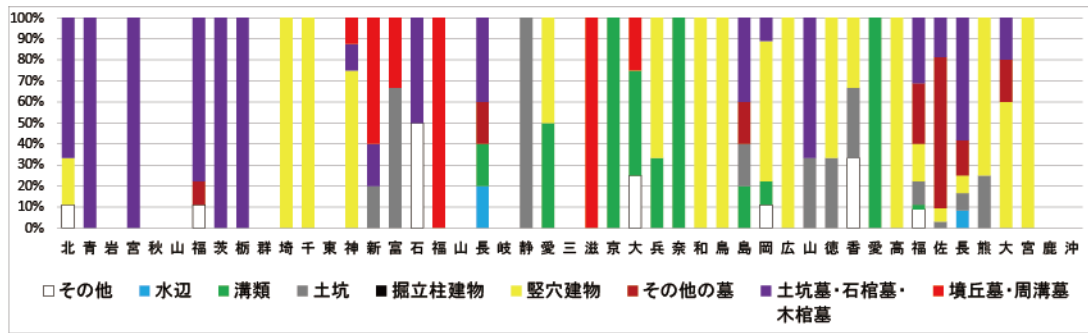


縄文時代晩期

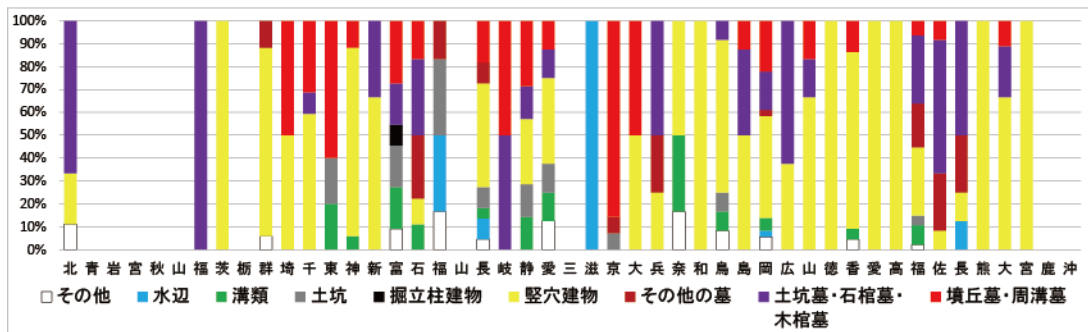


弥生時代前期

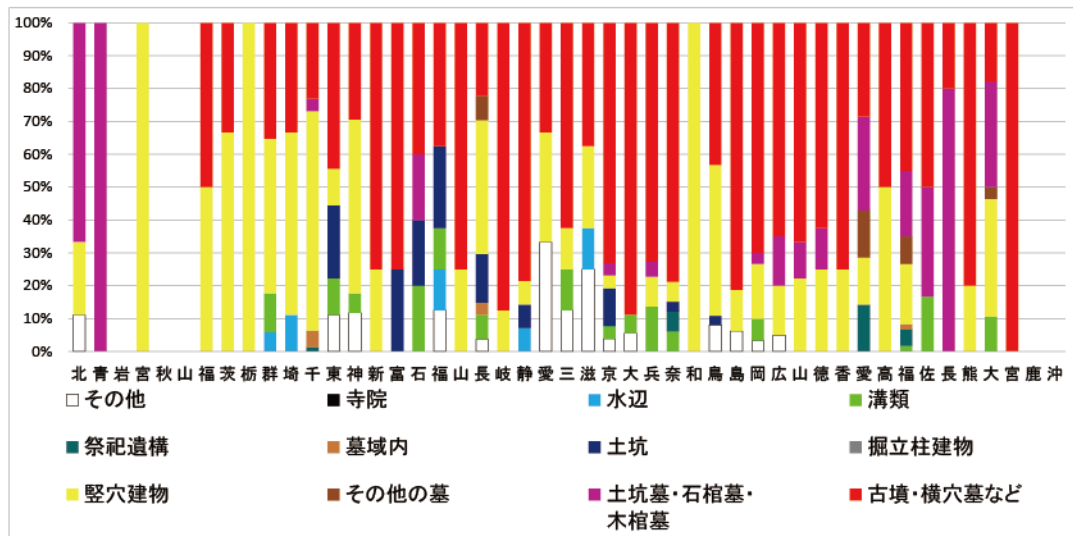
第 19 図 出土遺構の変遷①



弥生時代中期



弥生時代後・終末期



古墳時代前期

第 20 図 出土遺構の変遷②

県・長野県、配石遺構は中期の青森県で確認されている。さらに、墓で勾玉が用いられたことを示す、土坑墓からの出土は、中期になってからみられる現象であり、北海道や青森県・埼玉県で確認できる。

第 2 期（縄文時代後期から晩期）は、北海道・東北地域では墓、関東地域では竪穴建物、中部地域以西の地域では、県あるいは地域ごとに出土遺構の割合に多様性がみられる時期である。まず、東日本をみていくと、北海道・東北地域では土坑墓、関東地域では竪穴建

物からの出土が多い傾向を示す。また、北陸地域・東山地域・東海地域では、土坑や配石遺構・溝類に加えて、土坑墓など墓に関係するかたちで勾玉の出土が確認されており、その割合も県によって様々である。西日本をしてみると、近畿地域や中国地域では竪穴建物や土坑、九州地域では土坑墓・竪穴建物・溝類からの出土が確認できるが、その割合は、北海道や関東地域のように特定の遺構からの出土が目立つというものではない。九州地域に関してもう少し述べるならば、晩期になると、北部では墓、南部では竪穴建物が多くなるという傾向が若干みられるようになる。

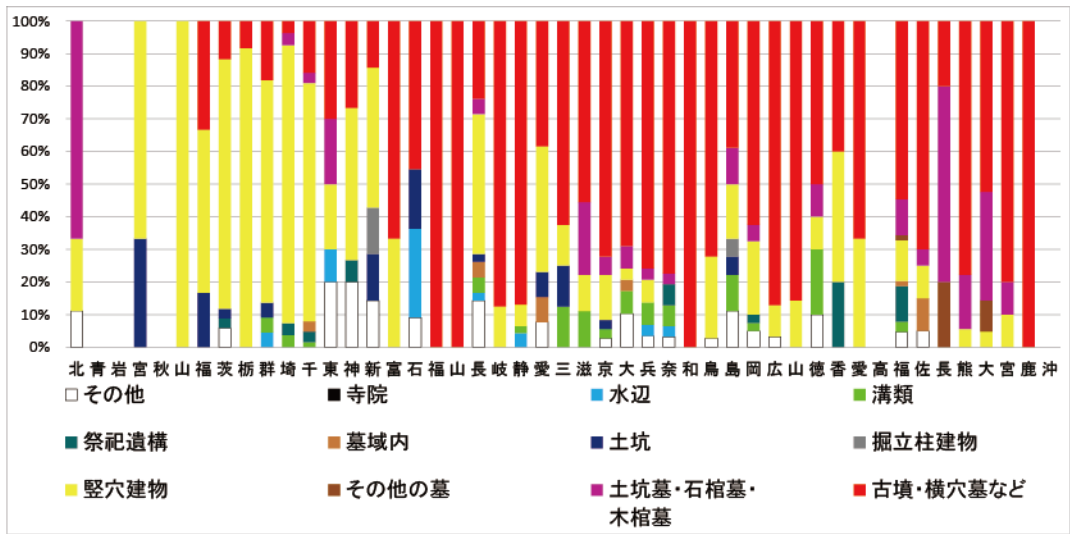
第3期（弥生時代前期から後期・終末期）は、北海道・東北地域は墓、関東地域以西の地域では、竪穴建物と墓が出土遺構の割合の多くを占めるようになる時期である。詳しくみていくと、前期は、北海道・千葉県で土坑墓、岩手県で土坑からの出土が目立つ。西日本については、大阪府は溝類、岡山県は旧河道、山口県は土坑墓・土坑・溝跡、愛媛県は溝跡から勾玉が確認されている。また、九州地域についてみると、北部では土坑墓など墓に関わるかたちで勾玉が確認される場合が多くみられ、大分県では勾玉の出土が竪穴建物からのみ確認できる。

中期になると、北海道から東北地域、そして北関東地域までの地域では墓に関わる遺構、埼玉県・千葉県・神奈川県では、竪穴建物からの出土が大半を占める。また、北陸地域や長野県では、方形周溝墓や土坑墓からの出土が比較的多くみられ、一方、東海地域の勾玉は墓からは確認できない。西日本をみていくと、近畿地域では溝跡から出土が目立つが、中国地域・四国地域では、竪穴建物の割合が高い傾向を示す。九州地域について述べるならば、北部では甕棺墓を中心とした墓から勾玉が確認されることが多いのに対して、南部では竪穴建物からの出土が目立つ。

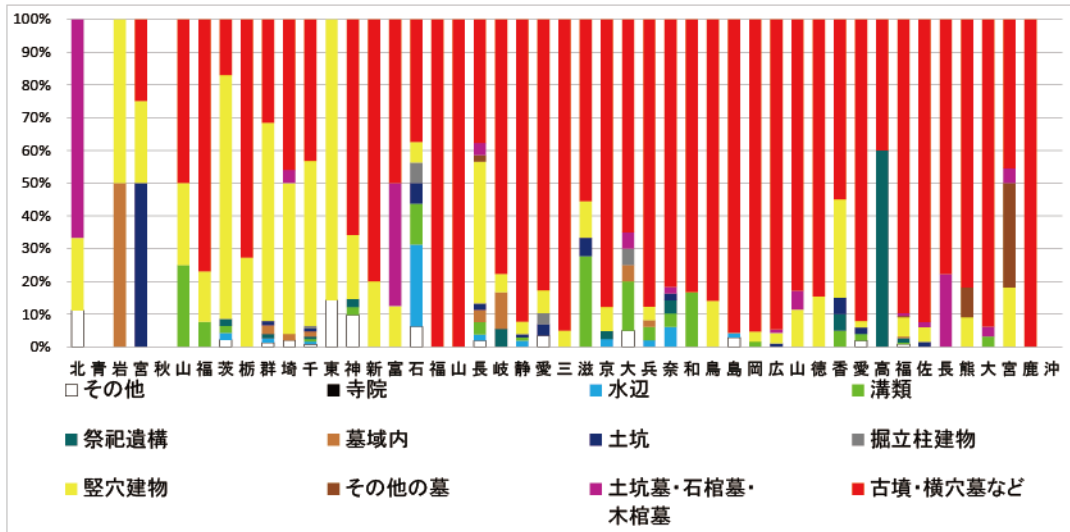
後・終末期にはいると、北海道・東北地域では、依然として土坑墓からの出土が多く、関東地域では竪穴建物、次いで方形周坑墓などの墓から勾玉が出土する割合が高くなる。また、新潟県では竪穴建物が多くみられるものの、北陸地域全体でみれば、方形周溝墓・土坑墓・掘立柱建物・土坑・溝類・水辺など、出土遺構に多様性がみられる一方で、竪穴建物からの出土は少ないことを指摘できる。東山地域・東海地域では、土坑・溝類・水辺からの出土も確認できるが、出土の多くは竪穴建物と墓からである。西日本については、近畿地域では、竪穴建物に加えて、中期ではそれほどみられなかった墓からの出土が増加する。中国地域では墓からの出土が増加する傾向がみられ、四国地域・九州地域に関しては、大方、中期の様相を継続してみることができる。

第4期（古墳時代前期から中期）について述べるならば、北海道・北日本・関東地域を除く、勾玉の出土が確認できる全ての地域で、古墳からの出土の割合が大半を占めるようになり、次いで竪穴建物と続く傾向が確認できるようになる。このことから、第4期は、弥生時代の様相とは大きく異なりをみせる時期といえる。細かくみていくと、北海道・青森県では、土坑墓からの出土が多い。関東地域では竪穴建物の割合が多くを占め、その傾向は九州地域へいくにつれて弱まる。また、墓からの出土については、関東地域ではそれ

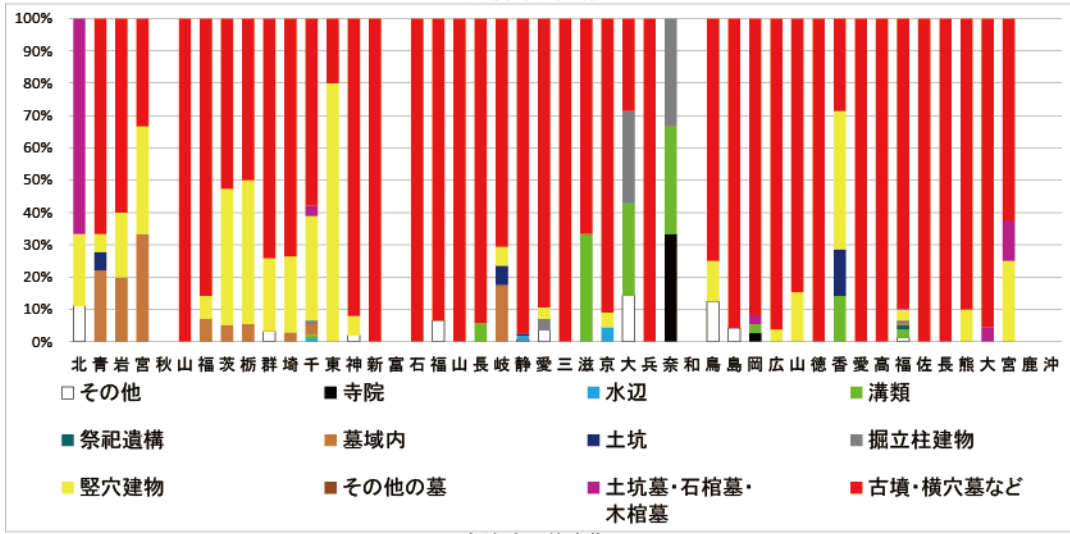




古墳時代中期

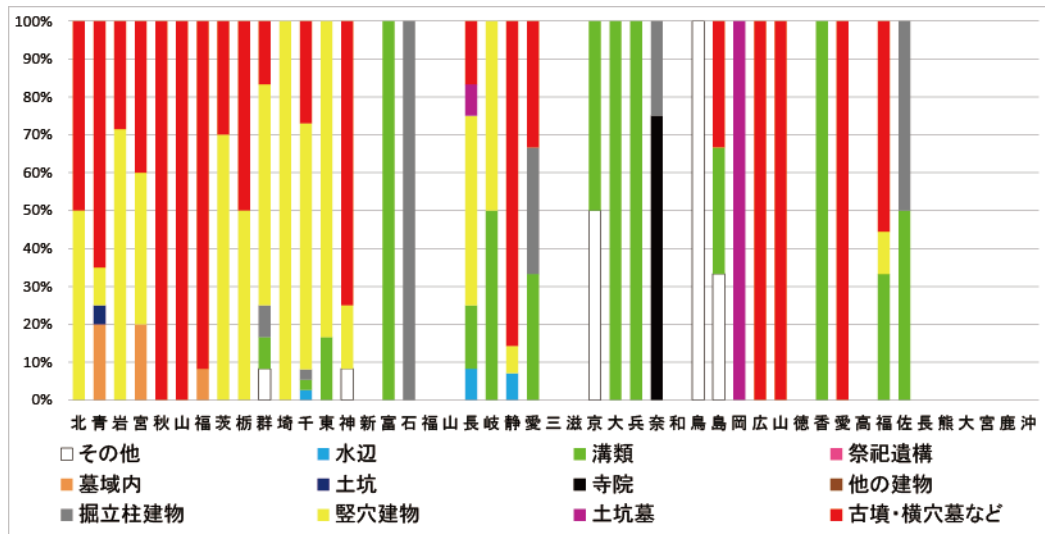


古墳時代後期

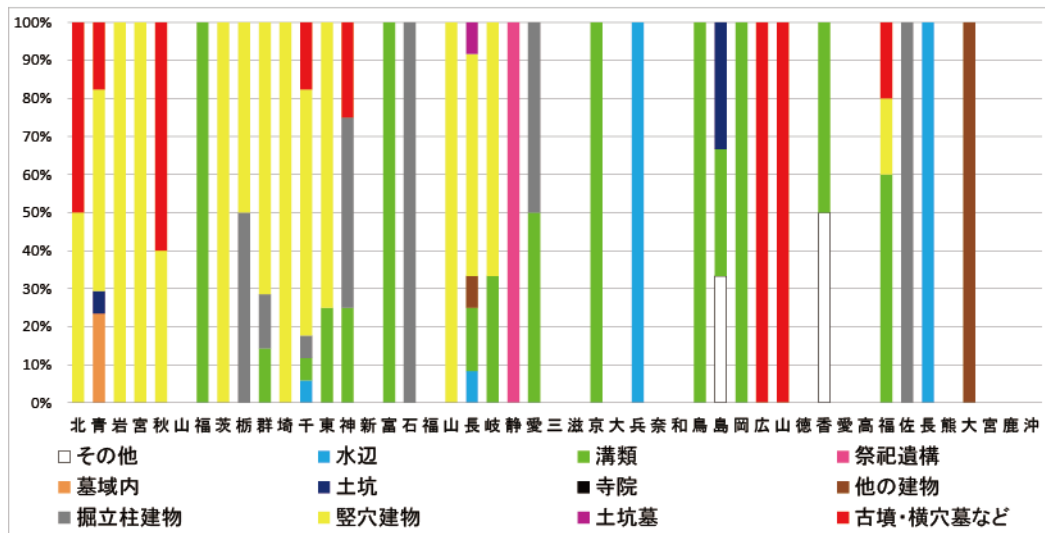


古墳時代終末期

第 21 図 出土遺構の変遷③



奈良時代

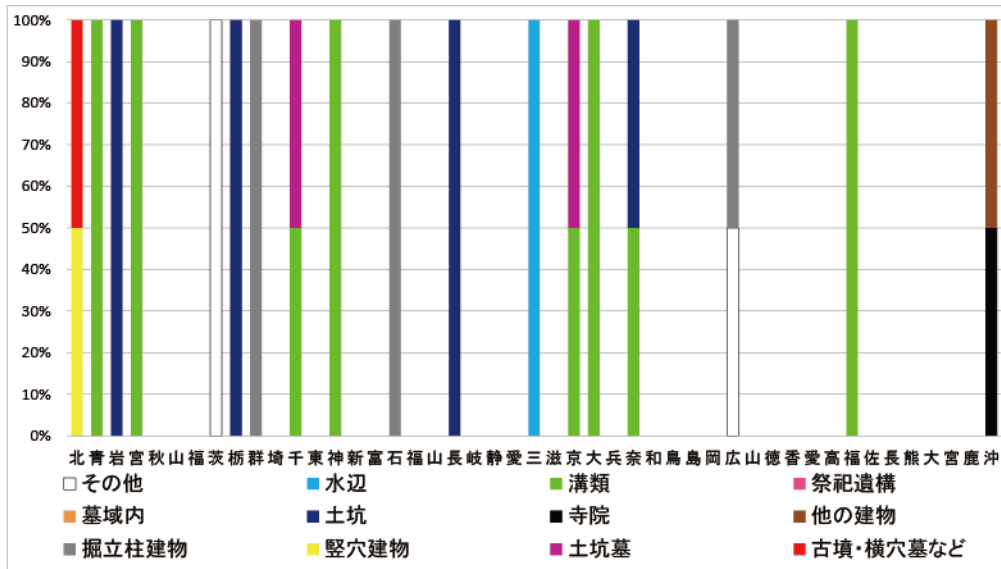


平安時代

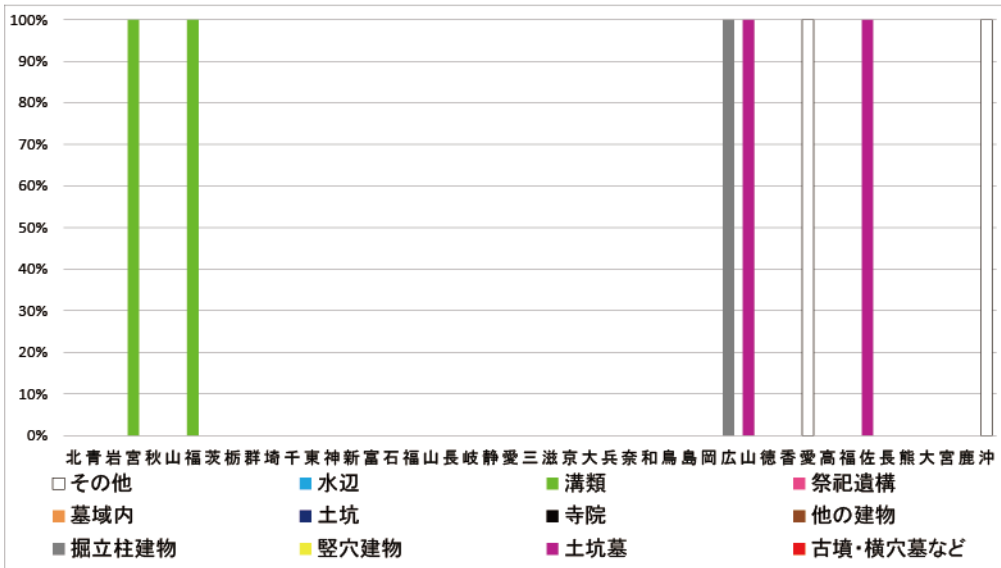
第 22 図 出土遺構の変遷④

ほど多くはないが確認できる。それよりも、中部地域から九州地域にかけての出土遺構の割合の多くを墓が占めるようになり、その傾向は、前期から中期へと時間の経過とともに、より強くなる。

第5期（古墳時代後期から終末期）は、東北地域や関東地域において、古墳や横穴墓といった墓からの出土の割合が増加していき、さらに、近畿地域では、それまでみられなかった寺院跡からの出土が確認されてくる時期である。それぞれの地域について、少し詳しく述べるならば、北海道では墳墓・竪穴建物、東北地域では竪穴建物もみられるものの、古墳などの埋葬施設や周溝といったように墓に関わるかたちで勾玉が出土している場合が多い。関東地域では、古墳・横穴墓と竪穴建物がおよそ半々の割合で見ることができる。また、中部地域・中国地域・四国地域・九州地域の勾玉のほとんどが、古墳や横穴墓といった墓の埋葬施設から出土している。とくに、東北地域は終末期になると、より古墳の割



中世



近世以降

第 23 図 出土遺構の変遷⑤

合が高くなる傾向を示す。そのようななか、近畿地域では、墓からの出土事例は確認できるものの、溝跡や掘立柱建物からもある程度の量をもって確認でき、さらに、奈良県では新しく寺院跡からの出土事例がみられるようになる。

第 6 期（奈良時代から平安時代）は、北海道・東北地域・関東地域では、第 5 期の様相を継続して確認することができる。しかしながら、中国地域を除く、それ以外の地域については、古墳・横穴墓などからの出土はそれほどみられなくなり、かわって、溝跡を中心とした他の遺構からの出土の割合が高くなる時期である。まず、奈良時代からみていくと、北海道で、墓と竖穴建物が半々の割合でみられ、東北地域では岩手県・宮城県で竖穴建物が多いものの、全体的に見れば、墓からの出土が大半を占める。また、関東地域では、堅

穴建物が最も多く、次いで古墳・横穴墓、溝類と続く。北陸地域では溝跡・掘立柱建物、東山地域と東海地域では古墳・横穴墓や竪穴建物・掘立柱建物・溝類・水辺など、様々な場所から勾玉が確認されている。近畿地域では、寺院跡の割合が多い奈良県以外の県では、溝跡からの出土が多い。中国地域では継続して、墓からの出土が多くみられる。また、四国地域・九州地域では、古墳・横穴墓や土坑墓・竪穴建物・掘立柱建物・溝跡など、出土遺構に多様性がみられ、各地域のそれぞれの県で割合が異なる。

平安時代になると、北海道・東北地域・関東地域では、墓からの出土が減り、竪穴建物の割合が増加する。竪穴建物からの出土は、東山地域で顕著に見られるが、その他の地域については、奈良時代の様相と同様に、各県では様々な場所から勾玉が出土しており、その割合もそれぞれ異なりをみせる。

**第7期（中世）**は、古墳時代以降、関東地域を中心として展開していた竪穴建物からの出土事例が、北海道を除いてみられなくなり、加えて、沖縄県にある寺院跡など、様々な種類の遺構から勾玉が出土してくる時期である。詳しくみていくと、北海道では墳墓と竪穴建物、それ以外の地域では、溝跡が最も多く、他にも土坑墓・掘立柱建物・水辺・土坑などがみられるが、これらの割合は県ごとに異なりをみせる。沖縄県では、寺院の基壇内からの出土事例が確認できる。

**第8期（近世以降）**は、全国的に竪穴建物からの出土がみられなくなる時期である。詳しくみていくと、宮城県・福島県では溝跡、広島県では掘立柱建物、山口県では土坑墓、愛媛県では塚跡、佐賀県では土坑墓、沖縄県では盛土内などから勾玉が出土している。

以上のことから、出土遺構の種類がどのような変遷過程をたどるのか、さらに、そこからみえる地域的特徴についても明らかとなったと考えられる。

## 第6節 小結

本章では、勾玉について従来行なわれてこなかった長期的な視野を軸にして、出土遺跡の数およびその分布や出土点数、出土勾玉の材質、出土遺構の種類に着目し、消費地からみた勾玉の変遷過程について考察を試みた。その結果、勾玉の変遷過程については8つの時期に区分し、時期ごとの様相については、遺跡数・分布・出土点数・材質・出土遺構の視点から把握を行なった。視点が複数にわたるので、それらをふまえて消費地における勾玉の変遷過程の要点をまとめる。

まず、**第1期（縄文時代早期から中期）**を勾玉の発生期と捉え、縄文時代早期・前期における関東地域を中心とした東日本の人びとが最も早く、継続性のある勾玉の使用を開始した。また、勾玉は、はじめに竪穴建物で出土が確認されていたが、徐々に墓に伴う事例も見られるようになる。

**第2期（縄文時代後期から晩期）**になると、東日本に加えて、九州地域を中心に中国地域や四国地域といった西日本でも本格的に勾玉の使用が開始される。また、九州地域のな

かでも南九州地域の人びとが、当初、積極的に勾玉を用いていたことが考えられる。出土遺構については、北海道・東北地域では墓、関東地域では竪穴建物でよく用いられていたが、中部地域以西の地域では、県ごとに出土遺構の割合は異なる。そのうち、晩期の九州地域について述べるならば、北部では墓、南部では竪穴建物からの出土が多くみられる現象は、第3期（弥生時代前期から弥生時代後期・終末期）の九州地域でも同様にみられることから、注目できる。材質といった観点でみるならば、特に晩期になると、東日本ではヒスイ、西日本ではクロム白雲母が材質の主体を占める〔大坪 2015a〕といった現象を確認することができる。しかしながら、県ごとの割合はそれぞれ異なりをみせることを考えあわせて述べるならば、縄文時代においては、それぞれの地域の人びとが独自に選択をしながら勾玉を用いていたこと、言葉を換えて述べるならば、勾玉の使用には地域性が強くはたらいっていたことが考えられる。このことについては、出土遺跡数が少ないながらも出土点数が多い地域があったり、地域あるいは県ごとに出土遺構の多様性がみられることも1つの根拠となると思われる。

そして、第3期（弥生時代前期から弥生時代後期・終末期）には、遺跡数が増加する福岡県を除き、全ての地域で一度、勾玉の使用が衰退あるいは途絶えたのち、全国的に勾玉の使用が再確認される。この現象の背景には、ガラス・天河石といったそれまでみることができなかった材質が確認できるようになることもふまえて、稲作を含めた農耕社会が成立する過程で生じる、玉類をとりまく社会の変化が強く影響していると思われる。また、中期の福島県のように、遺跡数が少ないながらも出土点数は多いという地域がみられる。

さらには、北海道・東北地域では墓、関東地域以西の地域では竪穴建物と墓が、出土遺構の大半を占めるが、やはり、各県を細かくみた場合、出土遺構の種類に共通性が見出しづらい。加えて、各県でヒスイが多く確認できる一方で、それぞれの県で割合の様相は異なりをみせる。これらをふまえて述べるならば、弥生時代においても依然として、勾玉を使用することにおいて、地域性が強くはたらいっていたことが指摘できる。さらに述べるならば、後期・終末期で中国地域において、勾玉が墓から出土する事例が増加するという現象は、当該期の西日本においては、比較的大きな変化点と捉えることができると考えられる。

第4期（古墳時代前期から中期）になると、近畿地域の人びとが積極的に勾玉を使用し始めること、加えて、関東地域から九州地域までといった広範囲の地域で、出土勾玉の主体となる材質の割合が前期から中期へと移り変わるにつれて、ヒスイから滑石へと変化する。この滑石の増加と出土点数が、全時代を通して中期が最も多くなることは、密接に関係していると思われる。すなわち、ヒスイよりも産出地が限定的ではないことや、材質の硬度がそれほど高くないため、加工が容易であることが大きな理由と考えられる。また、第3期（弥生時代前期から弥生時代後期・終末期）では、竪穴建物からの出土が全体的にどこの地域においても目立っていたが、当該期に入り、北海道・北日本・関東地域を除く、全ての地域で墓から勾玉が出土する割合が大半を占めるようになる。これらをふまえて述

べるならば、分布や主要な材質、出土遺跡の種類の様相が、弥生時代の様相から大きく変化していることが指摘でき、その大きな要因にはヤマト政権の成立に伴う社会の変化が強く影響していることが推測できると思われる。

**第5期（古墳時代後期から終末期）**に入ると、山陰地域における出土遺跡が増加することに加え、東北地域から九州地域までといった広範囲な地域において、瑪瑙が材質の割合の多くを占めるようになる。この現象が生じる背景には、出雲地域における玉作り遺跡の展開との関わりが推測できる。

出雲地域では、100 を超える玉作り関連の遺跡が確認されている〔深田 2004〕。出雲地域における玉作りは、弥生時代前期末葉から古墳時代まで一貫して行なわれ、一度終焉を迎える。そして、奈良時代に再開され、平安時代まで続いたと考えられている〔米田 2015〕。このように1つの地域で、長期間にわたって玉作りが行なわれたのは、出雲地域だけである。その大きな要因の1つに、良質の「出雲石」とよばれる碧玉や、瑪瑙・水晶といった玉材を豊富に産出する花仙山の存在があげられる。

当期に対応させて述べるならば、玉造温泉の背後にそびえる花仙山の碧玉・瑪瑙・水晶を用いた勾玉の生産が行なわれていく。中期には玉作り遺跡の急激な増加が確認できるようになり、後期になると、他の地域では玉作りが衰退していくなか、出雲地域では玉作りの最盛期を迎える〔深田 2004〕。この出雲地域で作られた勾玉は、北は北海道から南は九州地域まで全国規模で流通していることがすでに指摘されている〔藁科 2005〕。これらを考え合わせて述べるならば、やはり勾玉が出土する広範囲の地域で瑪瑙の割合が増加することと、出雲地域における玉作り遺跡の展開と関係性は看過できないと思われる。

しかしながら、それだけでは広範囲の地域において割合の主体が瑪瑙になるといった共通性がみられる背景の説明としては十分になされているとはいえないように思われる。このように考えて大過ないとするならば、そこにはやはり近畿地域を中心に展開したヤマト政権による、使用する勾玉の材質に関して規制が行なわれていた可能性を考えてよいのではなかろうか。

また、終末期になると、依然として、瑪瑙は出土勾玉の主体を占め、墓からの出土は汎列島規模で多く確認できる。そのようななか、奈良県では墓からの出土がみられなくなり、それに代わって新しく寺院跡から出土事例が確認されるようになる。この点は、第4期（古墳時代前期から中期）からの大きな変化点としてあげられ、その他にもいくつか変化点を指摘することができる。まずは、東北地域では全国的な傾向とは異なり、遺跡数の増加がみられる。加えて、当地域では、遺跡数のわりに出土点数が多くことや、墓への出土事例が増加することも指摘することができる。そのうち、前者の状況は東海地域でも確認できる。これらをふまえて考えていくなれば、第5期の終わりころになると、先ほど述べた、ヤマト政権と勾玉との関係性がその後の時期において変化する兆しのような現象をいくつかみられるようになると、考えられる。

**第6期（奈良時代から平安時代）**は、東北地域・関東地域を中心として勾玉の使用が行

なわれていく一方で、西日本の人びとは徐々に勾玉を使用しなくなる。特に、東北地域では、出土点数が他の地域と比べて多くみられる。また、出土遺構の観点から述べるならば、北海道・東北地域・関東地域の出土遺構の割合は、第5期（古墳時代後期から終末期）から継続していることを確認することができるが、それ以外の地域については、中国地域を除いて、全体的に墓からの出土が少なくなる。加えて、第5期（古墳時代後期から終末期）でみられたように、瑪瑙が出土勾玉における割合の主体を占めるといった現象は、特に西日本では確認できなくなる。これらのことを考え合わせると、分布や材質の割合・出土遺構の様相が、当該期に入り大きく変化していることを指摘できる。

**第7期（中世）**は、全国的に遺跡数が大幅に減少するなか、沖縄県の人びとによる勾玉の使用が最盛期をむかえる。さらには、古墳時代に入って以降、関東地域を中心として必ず見られた竪穴建物からの出土が、北海道を除いてみられなくなる。このように、分布状況や出土遺構の様相が第6期（奈良時代から平安時代）と比べて、大きく変化することが指摘できる

**第8期（近世以降）**は、第7期で最盛期をむかえた沖縄県でさえ遺跡数の減少をみることができ、加えて、出土遺構もそれまでみられた竪穴建物が姿を消していく。これらをふまえて、当該期は日本列島における勾玉の終焉期と位置付けたい。

以上、本章では、消費地における勾玉の変遷過程について述べた。この基礎的な考察により、今後、生産地を含めた流通に関する列島規模での把握や、勾玉の意味を理解するうえでより深い内容の研究が可能となったと考えられる。

また、勾玉の起源や意味、歴史的な位置づけを究明するにあたっては、考古学からだけでなく、文化人類学や民俗学、文献史学などの隣接学問からのアプローチが不可欠であろう。そして、これら個々の研究成果を総合し、重ね合わせてもう一度勾玉を俯瞰するという作業が必要と思われる。

これらのことを今後の課題として研究を進めていきたいと考えている。

考察対象が長期間にわたったことに加えて、資料的制約もあり、論旨がわかりにくいところもあったかと思うがひとまず擱筆することにした。なお、集成表とその出典を省略した点をお詫び申しあげる。

## 註

註 29 遺構の年代については、本来ならば、その地域で共通した年代観のもと、時期区分を行なうべきである。しかし、本章では、取り扱う地域が日本列島全域と広域にわたるため、各地域間の並行関係を把握することは困難である。そのため、年代については、各報告書などで報告者が想定した編年や年代観を基本的にはそのまま採用することとした。

註 30 第12から14図・第8表では、遺構の時期が2つの時期にわたっている場合、それぞれの時期に点数を加算している。

- 註 31 第 16 図から第 18 図では、属する時代が複数にわたっている場合、それぞれの時期に点数を加算して割合を出している。また、図内にある項目については、ヒは硬玉・ヒスイ・翡翠・長崎ヒスイ、蛇は蛇紋岩、碧は碧玉、瑪は瑪瑙・苔瑪瑙、水は水晶、滑は滑石、クはクロム白雲母、カはカンラン岩、アはアマゾナイト・天河石、コはコハク、ガはガラス、金属は鉛・金・銀・銅・金銅・青銅・不明金属としている。
- 註 32 第 19 図から第 23 図を作成するにあたっては、勾玉が出土しているが、その名称や性格が不明確な遺構は、除いている。さらに、取り扱った遺構に関して、属する時代が複数にわたっている場合には、それぞれの時期に件数を加算して割合を出している。また、図内にある遺構の種類については、性格が類似すると考えられるものは 1 つの項目にまとめたり、確認できる件数が少ないものはその他の項目に含めている。たとえば、縄文時代では、墳墓・墓に墳墓・盛土墓・配石墓、溝類に溝跡・環状溝・流路、その他に竪穴状遺構・埋設土器遺構・埋め甕・環状遺構・環状列石・集石・礫群・盛土遺構・傾斜盛土・ピット・祭祀遺物集中地点・捨て場・谷・河跡・河川・河道・道路状遺構・くぼ地・落ち込み、弥生時代では、その他の墓に甕棺墓・壺棺墓・再葬墓・砂丘山墓・墓・方形台状墓・台状墓・区画墓、溝類に溝・大溝・環状溝・環濠、水辺に河道・河川・水田・井戸、その他に竪穴状遺構・焼土・土器群・袋状竪穴・落ち込み・ピット・集石・谷・貯蔵穴・杭列群・壇状遺構、古墳時代では、古墳・横穴墓などに、古墳・地下式古墳・横穴墓・周溝墓・墳丘墓、その他の墓に方形台状墓・方形墓・甕棺墓・石囲い墓・礫床墓・集石墓・地下式板積石室墓・墓、墓域内に（埋葬施設以外）墳頂部・墳丘・墳丘下・周溝・前庭部・掘り方、祭祀遺構に祭祀遺構・山祭祀・岩陰祭祀・岩上祭祀・巨石祭祀、溝類に溝・大溝・流路・溝状遺構、水辺に井戸・水田・導水施設・水路・河道・河川・川・沼・湿地・溜池、その他に竪穴状遺構・土坑状遺構・焼土・ピット・洞穴・杭列群・くぼ地・落ち込み・谷・谷津遺構・くぼみ状遺構・遺物集中地点・土器集中地点・土器集中遺構・土器集積跡・土器溜まり・須恵器溜まり・土器群・集石・窯址・埋納穴・壇上遺構・土壇状遺構・盛り土遺構・方形周溝状遺構・テラス状遺構・岩盤下・塚・貼り石・配石、奈良時代以降では、古墳・横穴墓などに古墳・横穴墓・周溝墓・墳墓、他の建物に礎石建物・建物基礎部・基壇内、墓域内に（埋葬施設以外）周溝・前庭部、溝類に溝・大溝・流路・堀跡、水辺に井戸・川・河川・河道・水田、その他に土器溜まり・集石・壇状遺構・谷津遺構・塚・ピット・段丘岸・拝所・御嶽・城内、というように整理・表示している。



## 第2章 刻み目を有する勾玉について

### 第1節 研究史の整理と問題の所在

縄文時代から日本の各地で出土する遺物の1つに勾玉がある。それらの勾玉のなかには、刻み目が施されているものもみられ、その代表的なものが勾玉の頭部に穿たれている孔から放射状に3条の刻み目が施されている、いわゆる丁字頭勾玉である〔高橋 1913〕。この丁字頭勾玉については、森貞次郎氏や木下尚子氏の研究がよく知られており、弥生時代中期中頃にあらわれることなどが、すでに指摘されている〔森 1980、木下 1987〕。

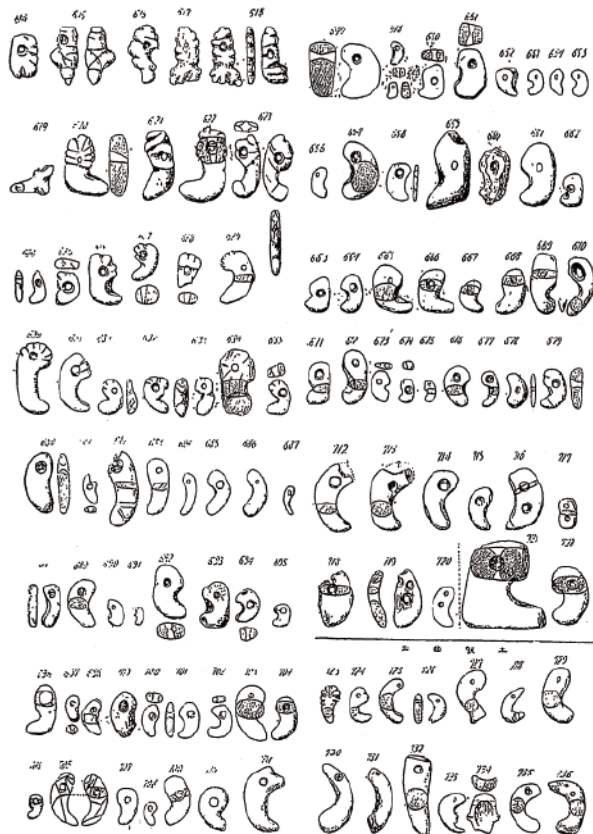
しかし、この丁字頭勾玉が成立する以前、すなわち、縄文時代から弥生時代中期以前においても頭部に刻み目が施されている勾玉（以下、「頭部刻み目勾玉」（註33）と仮称する）が確認されている。そこで、本章では、頭部刻み目勾玉を含む、刻み目を有する勾玉を研究対象とする。

まず、これまでの研究史の整理に入る前に使用する用語について説明しておきたい。「勾玉」は、形状が「く」もしくは「C」字状を呈しており、端には紐を通すための孔があげられているものをいう。次に、頭部刻み目勾玉は、弥生時代のいわゆる丁字頭勾玉とは区別し、頭部に抉りあるいは刻み目が施されている勾玉のことをいう。そして、頭部以外に刻み目が施されているものもみられることから、それらについては、頭部刻み目勾玉を含めた包括的な意味合いをこめ「刻み目勾玉」という名称を用いていく。

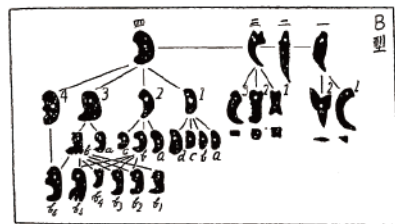
次に、刻み目勾玉および頭部刻み目勾玉についての研究史の整理を行なっていく。まず、勾玉に刻み目が施されることは、早くからその存在が知られており、1783年に木内石亭によって書かれた『曲玉問答』（註34）の中に、「常體ニテ筋アリ尤大小アリ」という記載とともに勾玉の図が紹介されている〔木内 1936〕。しかし、木内のとりあげた刻み目が施された勾玉は、いわゆる弥生時代の丁字頭勾玉である。

そのため、本章で取り扱う刻み目勾玉についての研究史の始まりは、1890年代に入り、遺跡から出土した刻み目勾玉の報告が行なわれていく段階まで待たねばならない。この時期から、いくつか報告がなされているが、そのなかに鳥居龍蔵氏の「本邦石器時代ノ曲玉」がある〔鳥居 1894〕。鳥居氏は、貝塚から出土した勾玉と古墳時代の勾玉は異なるものであるとし、前者を「石器時代ノ曲玉」とよんでいる。また、特徴についても述べており、形態に多様性があることや、線刻が施されていることなどをあげている。また、鳥居氏のほかにも、林若吉氏が貝塚から出土した頭部刻み目勾玉の報告を行なっている〔林 1896〕。

このように報告が増加していくことにより、刻み目勾玉の存在が、広く研究者の間で認識されていく。その結果、刻み目勾玉とくに頭部刻み目勾玉について、研究者による考古学的な議論が多く行なわれていくようになる。その研究者の1人である兩角守一氏は、形態の特徴などから分類を行なうことで、縄文時代における勾玉の全体像の把握を試みてい



(大一ノ分四約) 類図第型B 圖五第

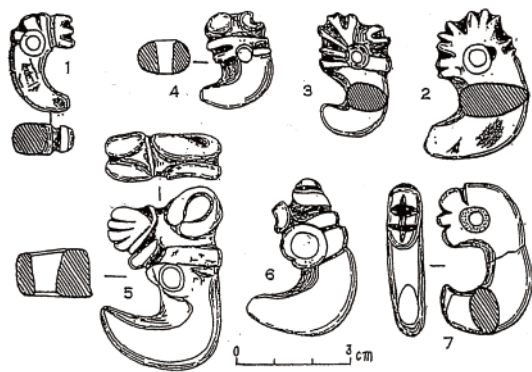


第 24 図 樋口清之氏の分類における「頭部刻み目勾玉」

る〔兩角 1931a〕。兩角氏の分類によると、頭部刻み目勾玉は「第3類 不整形勾玉」と「第4類 異形勾玉」ということになる（註 35）。さらに、兩角氏は、異形勾玉の大きさや材質、穿孔技術、分布圏などに注目することで、発生の要因や縄文時代から弥生時代、古墳時代へと移り変わる際にみられる勾玉の連続・非連続性を明らかにしようとしている〔兩角 1931b〕。さらに、異形勾玉の性格については、「純然たる石器時代勾玉に非ずして己にその発生に於て金属文化の影響ありし中間性の遺物であった」〔兩角守一 1931b ; 39 頁〕可能性を推測している。

そして、樋口清之氏も出土する垂玉について形態分類を行なっており〔樋口 1940〕、樋口分類におけるB型第4類3形に刻み目勾玉がみられる（第24図）。このB型第4類3形については、古墳時代の勾玉に類似する2形と密接な関わり合いをもちながら、古墳時代の勾玉の先駆けもしくは影響を与えた可能性を指摘している。

次に梅原末治氏は、列島の中部以北から出土した頭部刻み目勾玉7点（東京都下沼部貝塚1点・神奈川県寸嵐1点・出土地不明1点・千葉県左山町1点・茨城県土浦町1点・宮城県気仙郡1点・青森県田子町1点）を紹介し〔梅原 1969〕、それらを禽獣首形勾玉とよんでいる（第25図）。梅原氏の研究では、先述した兩角氏や樋口氏のような類型の抽出と



第 25 図 梅原末治氏の禽獸首形勾玉

- 1. 東京都下沼部貝塚出土 2. 神奈川県寸嵐出土
- 3. 細見氏所蔵 4. 千葉県佐山町出土
- 5. 茨城県土浦町出土 6. 宮城県気仙郡出土
- 7. 青森県田子町出土

その連続性の解明は行なわれず、頭部刻み目勾玉について具体的な名称設定を行なうに留めている。

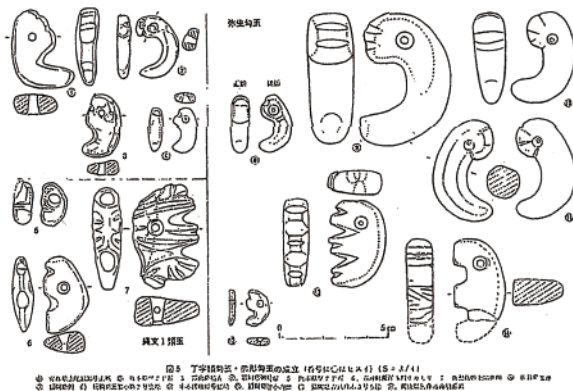
また、水野祐氏は、古墳時代にみられる勾玉の「丁字頭（註 36）」の原型が、日本中部以北における縄文時代中期から晩期の遺跡でみられる「頭部に隆節をつけて、瘤節状を呈」〔水野 1969 ; 173 頁〕する硬玉製の勾玉であると推測している〔水野 1969〕。この水野氏の推測は、頭部刻み目勾玉と古墳時代における丁字頭勾玉との連続性を示唆するものであり、樋口氏の考えと同様な立場をとっている。

一方、藤田富士夫氏は、丁字頭勾玉について、頭部に刻み目を有し、縄文時代晩期的なもの大陸文化的なもの2つがあると説明している〔藤田 1989〕。これらのうち、縄文時代晩期的なものが、本章で取り上げる頭部刻み目勾玉にあたる。ここから藤田氏が、頭部刻み目勾玉と丁字頭勾玉との間に何かしらの関係性を推測していることが読み取れる。

この頭部刻み目勾玉から丁字頭勾玉への変遷について、より考古学的に考察を行なったのが、河村好光氏である。河村氏は、勾玉の厚さを含む形態的特徴や製作技術などを詳細に観察し、弥生時代の玉に縄文時代の玉の系譜を見出すことを試みている〔河村 2000〕。分析を行なう上で、縄文時代の玉について分類がなされ、そのうちの縄文 I a 類にあたるのが本章でいう頭部刻み目勾玉である（第 26 図）。そして、河村氏は縄文時代晩期から弥生時代早期にかけて、すでに北陸の玉が北部九州地域周辺に運ばれ、それが弥生時代の玉に影響を与えたことを推測し、弥生時代のいわゆる丁字頭勾玉が、縄文 I a 類の系譜をひくことを指摘している。

これに対して、木下尚子氏は、縄文時代にみられる牙玉に穿たれた孔の周囲に刻み目を施すことについて、「結縛」の性格が玉類に込められていることを推測している〔木下 2000〕。これは、人びとが玉に刻み目を施す行為の意味を考える上で重要な指摘であり、刻み目勾玉の性格を推測する際にも大きな意味をもつと考える。

さらに、鈴木克彦氏は、北日本の縄文時代後期から晩期にみられる勾玉に



第 26 図 河村好光氏のカテゴリにおける「頭部刻み目勾玉」

ついて分類を行ない〔鈴木 2004・2006〕、そのなかに頭部に刻み目が施されているものや、全体に複数の刻み目を有するものがみられることを明らかにしている。さらに鈴木氏は、頭部に刻み目を施した「く」の字形の勾玉が、北日本では基本形のものであることも述べており、頭部刻み目勾玉の地域性について言及している。

近年の研究では、関雅之氏が新潟県から出土する縄文時代のヒスイ製勾玉を集成しており、そのなかに頭部刻み目勾玉も数多く取り上げられている〔関 2013〕。しかし、関氏の研究は、集成作業に重点が置かれているため、形態ごとの変遷などについての考察は行なわれていない。

以上、研究史を概観してきたが、これらからもわかるように刻み目勾玉を主体的に取り上げて研究を行なったものは、ほとんど無いといってよいであろう。すなわち、従来の刻み目勾玉についての研究は、出土する勾玉の全体像を把握していく過程で注目される、いわば間接的な研究に留まっていることがいえるであろう。さらには、取り扱う材質や地域も限定的な研究がほとんどである。断片的な刻み目勾玉の研究をまとめると、とくに頭部刻み目勾玉については、東北地域や北陸地域に多く出土することや、ヒスイ製のものがあることなどが、研究者の間で大まかな情報として共有されているようである。

また、河村氏のように縄文時代の勾玉から弥生時代の勾玉へ、あるいは水野氏のように古墳時代の勾玉への繋がりの有無を考えるうえで、頭部刻み目勾玉が重要な遺物の1つであるという認識は、筆者も妥当と考える。

そこで本章では、こうした研究史をふまえ、縄文時代からみられる刻み目勾玉の全国的な集成を行ない（註 37）、分類し、類型ごとに分布を把握していくことにする。また、時期的変遷や地域性を考えていくことにより、列島にみられる刻み目勾玉の基礎的情報の提示も行ないたい。さらには、刻み目勾玉から丁字頭勾玉への連続性の有無についても、考察を加えていくことにする。

## 第2節 「刻み目勾玉」の分類

今回、筆者は計 200 点の刻み目勾玉の集成を行なったが、類型ごとに分ける際に取り扱ったものは、そのうちの 84 遺跡 131 点である（第 9 表（註 38））。集成した勾玉すべてを類型別に振り分けることができないことについては、大半の刻み目勾玉が縄文時代から確認されており、その時期における勾玉の形態の多様性が大きく影響していると思われる。

分類作業にあたっては、刻み目の施され方と勾玉の平面形態を組み合わせることで分類の基準を設定したが、IV類に関しては、刻み目の施され方と孔の穿たれ方で分類を行なった。その結果、頭部刻み目勾玉を含む、刻み目勾玉は I 類から IV 類まで分類し、各類型はさらに細かく分けている。また、IV類以外の I 類・II類・III類は、頭部刻み目勾玉に含まれる。

まず、I 類についてみていく。I a 類は、平面形態が L 字形もしくは J 字形を呈し、や

第9表 「刻み目勾玉」出土一覧

● I a類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ (cm)	重さ (g)	文献
1	高砂	北海道江別市	縄文時代晩期 ～続縄文時代初頭	ヒスイ	土壌P1327	不			1
2	港大照寺	北海道磯谷郡	縄文時代晩期 ～続縄文時代初頭	ヒスイ	9号土壌		2.75		2
3			縄文時代晩期 ～続縄文時代初頭	ヒスイ	包含層		3.71		
4			朝日山(2)	青森県青森市	縄文時代	ヒスイ	865号土壌	片	
5	泉山	青森県三戸郡	縄文時代	緑色細粒 凝灰岩	包含層	両	2.3	4.1	4
6	大日向Ⅱ	岩手県九戸郡	縄文時代	ヒスイ	包含層	両	3.7	16.9	5
7	馬場野Ⅱ	岩手県九戸郡	縄文時代～弥生時代	土製	包含層	不	2.12	24	6
8	向様田D	秋田県北秋田市	縄文時代晩期	ヒスイ	SM60盛土遺構	片		16	7
9	地方	秋田県秋田市	縄文時代晩期	不明石材	300号土壌墓	片	2.7		8
10			縄文時代晩期	不明石材	492号土壌墓	片	2.6		
11			縄文時代晩期	不明石材	557号土壌墓	不	2.8		
12			縄文時代晩期	不明石材		不	2.1		
13	宮の前	山形県村山市	縄文時代晩期以前	ヒスイ	捨て場	両			9
14	中谷津	茨城県つくば市	縄文時代晩期前葉	土製	第10号住居跡 (竪穴)覆土	不	2.2	3	10
15	馬場 (小室山)	埼玉県さいたま市	縄文時代中期中葉 ～縄文時代晩期	蛇紋岩	第71号土壌	両	2.5		11
16	沓掛貝塚	千葉県大網白里市	縄文時代	ヒスイ	包含層	両	4.2	25	12
17	下太田貝塚	千葉県茂原市	縄文時代中期 ～縄文時代晩期	ヒスイ	包含層	両	4.6	3.4	13
18	三輪山貝塚	千葉県流山市	縄文時代晩期	ヒスイ	中央窪地	不			14
19	元屋敷Ⅱ (上段)	新潟県村上市	縄文時代後期	ヒスイ	配石墓4160	片	2.4	3.7	15
20			縄文時代後期	ヒスイ	配石墓4503	片	2.6	5.45	
21	朝日	新潟県長岡市	縄文時代晩期末葉	ヒスイ	トレンチ覆土				16
22			縄文時代晩期末葉	不明石材					
23	前原	新潟県上越市	縄文時代晩期	蛇紋岩	包含層		2	2.3	17
24	境A	富山県下新川郡	縄文時代中期前葉 ～縄文時代後期前葉	蛇紋岩	包含層		2.36	2.42	18
25	桜町	富山県小矢部市	縄文時代後期末葉 ～縄文時代晩期	土製	包含層	片	2.15	2.1	19
26	御経塚	石川県野々市市	縄文時代晩期 ～弥生時代	含硬玉 珪質岩	包含層		2.14	1.7	20
27	一津	長野県大町市	縄文時代早期末 ～縄文時代晩期	滑石	B地区				21
28	番屋	岐阜県郡上市	不明	不明石材	包含層				22
29	梶子北	静岡県浜松市	縄文時代	滑石	SD204北肩 溝		3.1	7	23
30	半田山古墳群 A支群・半田山Ⅲ	静岡県浜松市	古墳時代終末期 (追葬2回)	ヒスイ	A3号墳 玄室				24
31	朝日	愛知県清須市	弥生時代中期中葉	ヒスイ	SD103 貝層上溝		2.8		25
32	天白	三重県松阪市	縄文時代	土製	J10グリッド		5.1	16.7	26
33	半田	京都府福知山市	弥生時代～古墳時代	碧玉	Bトレンチ				27
34	川平Ⅰ	島根県雲南市	縄文時代～古墳時代	結晶片岩 様緑色岩	遺構外		1.5	0.84	28
35	柳田	高知県高知市	縄文時代晩期	含クロム 白雲母	ⅢJ区B層群				29
36	田隈石沸	福岡県大牟田市	弥生時代	硬玉 or碧玉	土器だめB				30
37	柏崎松本	佐賀県唐津市	弥生時代中期後半	硬玉	3号甕棺		3		31 ・ 32
38	中原	佐賀県唐津市	弥生時代中期後半	ヒスイ	SJ13206 甕棺墓 棺内	片	2.25		33

● I b類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献
39	大川	北海道余市郡	縄文時代晩期	ヒスイ	土壌GP493	片	4.4	25.6	34
40			続縄文時代前半	ヒスイ	土壌GP355	不	5	32.6	

41	港大照寺	北海道磯谷郡	縄文時代晩期 ～続縄文時代初頭	ヒスイ	9号土壌	片	4.23		2
42	野脇	青森県弘前市	縄文時代以降	ヒスイ	SD02(溝)覆土	両	3.55	8.4	35
43	雨滝	岩手県二戸市	縄文時代晩期	ヒスイ	不明		2.07	3.9	36
44	牡丹畑	岩手県上市	縄文時代晩期中葉	ヒスイ	包含層	不	4.3	17.9	37
45	上新城中学校	秋田県秋田市	不明	不明石材	不明	片	3.9	0.8	8
46	地方	秋田県秋田市	縄文時代晩期	不明石材	212号土壌墓	不	4.1		
47			縄文時代	不明石材	遺構外	両			
48	砂川A	山形県鶴岡市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	閃緑岩	包含層	無	2.93	(3.5)	38
49	乙女不動原 北浦	栃木県小山市	縄文時代晩期?	不明	包含層	両			39
50	矢瀬	群馬県利根郡	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	碧玉	16号住居跡 (竪穴)	不	1.9	0.7	40
51	内野第1	千葉県千葉市	縄文時代	ヒスイ	包含層	片			41
52	加曾利南	千葉県千葉市	縄文時代晩期	硬玉	包含層	不			42
53	元屋敷 (上段)	新潟県村上市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	滑石	配石墓7180	片	2.5	2.74	15
54			縄文時代後期 ～縄文時代晩期	ヒスイ	配石9012	片	2.4	1.74	
55	山口	新潟県阿賀野市	弥生時代前期 ～弥生時代中期前半	蛇紋岩	包含層				43
56	境A	富山県下新川郡	縄文時代中期前葉 ～縄文時代後期前葉	蛇紋岩	包含層		2.72	4.86	18
57	一津	長野県大町市	縄文時代早期末 ～縄文時代晩期	滑石	B地区				21
58	吉野ヶ里	佐賀県神埼郡	弥生時代中期初頭 ～弥生時代中期前半	ヒスイ	土壌				44

● II a類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献
59	大川	北海道余市郡	縄文時代晩期	ヒスイ	土壌GP462	不	4.5	20.2	34
60	虫内皿	秋田県横手市	縄文時代晩期	ヒスイ	SK91土坑墓	片	3.6	12.4	45
61	乙女不動原 北浦	栃木県小山市	縄文時代晩期?	硬玉	包含層	片			39
62	藤岡神社	栃木市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	不明石材	包含層	両	3.01	13.5	46
63	後谷	埼玉県桶川市	縄文時代後期	ヒスイ	包含層	不	2.75	7.8	47
64			縄文時代晩期	ヒスイ		片	3.05	10.8	
65	石神貝塚	埼玉県川口市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	硬玉	包含層	不	2.74	6.13	48
66	赤城	埼玉県北埼玉郡	縄文時代後期前葉 ～縄文時代晩期	蛇紋岩	祭祀遺物 集中地点	片	3.5		49
67	石神台	千葉県市原市	縄文時代後期末葉 ～縄文時代晩期初頭	ヒスイ	SI003(竪穴)	片			50
68	元屋敷 (上段)	新潟県村上市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	凝灰岩	包含層	片	3.4	7.59	15
69	布尻	富山県富山市	縄文時代	蛇紋岩	不明	片			51
70	桜町	富山県小矢部市	縄文時代後期末葉 ～縄文時代晩期	土製	包含層	両	1.95	1.1	19
71				土製		両	3.6	9.2	
72	金生	山梨県北杜市	縄文時代晩期前半 ～縄文時代	硬玉	14号住居(竪穴) 包含層				52
73									
74	西田	岐阜県高山市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	蛇紋岩	包含層		3.31	7.7	53
75	田治米宮内	大阪府岸和田市	不明	ヒスイ?	包含層				54

● II b類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献
76	釈迦才仏	茨城県古河市	縄文時代後期	滑石	第18号住居跡 (竪穴)	不	2.8	(4.5)	55
77	藤岡神社	栃木県栃木市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	不明石材	包含層	両	3.23	11.7	46
78	上敷免北	埼玉県深谷市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	滑石	包含層	両	4.8	26.3	56
79	南方	さいたま市	縄文時代晩期初頭	ヒスイ	第5号土壌	片	4.3	24.1	57
80	三直貝塚	千葉県君津市	縄文時代	滑石?	包含層	両			58

81	渡浮根	東京都新島若郷 渡浮根港西岸	不明	不明石材	個人蔵	両	4.76		59
82	天白	三重県松阪市	縄文時代	土製	包含層 Nグリッド		3.8	10.4	26
83	雀居	福岡県福岡市	弥生時代前期 ～弥生時代中期	滑石	SG02 土器群				60
84	後迫	大分県日田市	弥生時代～奈良時代	土製	包含層	未貫	5.7		61
85	中ノ丸	鹿児島県鹿屋市	弥生時代前期末葉 ～弥生時代中期後半	土製	住居址1号 床面 竪穴住居		2.7	3.1	62
86				土製			2.3	2.3	

● III a類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献	
87	馬場野Ⅱ	岩手県九戸郡	弥生時代	土製	LVI-03住居 (竪穴)	不	3.3		6	
88			縄文時代～弥生時代	土製	包含層	不	3.23	2.35		
89				土製		不	2.9			
90				土製		不	2.87	5.05		
91	中高瀬観音山	群馬県富岡市	古墳時代中期	不明	160土坑	両			63	
92	杉の木	埼玉県東松山市	古墳時代後期?	土製	周溝跡	不	2.3			64
93	釜台町上星川	神奈川県横浜市	弥生時代後期	土製	第2号住居址 (竪穴)	不				65
94	川崎市宮前 区平風久保	神奈川県川崎市	弥生時代中期 ～弥生時代後期	土製	A地点3号住居址 (竪穴)床面	不	3.2		66	
95			弥生時代中期 ～弥生時代後期	土製	A地点4号住居址 (竪穴)覆土	両	2.9			
96	塚田	長野県埴科郡坂城町	弥生時代後期後半	不明石材	D13orD21号 土坑					67
97	七瀬	長野県中野市	弥生時代後期	土製	G-23グリッド		8.4	110		68
98	百間川原尾島	岡山県岡山市	弥生時代後期	頁岩	竪穴住居8 外周溝		2.75	4.9		69
99	原1号	広島県東広島市	古墳時代前期	土製	SB04号遺構 竪穴住居		4.7		70	
100				土製			4.2			
101	堂畑	福岡県うきは市	弥生時代～奈良時代	土製	遺構検出面		3.2			71
102	祇園山古墳群	福岡県久留米市	弥生時代終末期	硬玉	裾部外周 第1号甕棺墓		4.86			72
103	方保田東原	熊本県山鹿市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	土製	2区6号住居跡 竪穴住居		4.8			73
104			弥生時代後期 ～古墳時代	土製	110-2番地 遺構外					74

● III b類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献	
105	泉山	青森県三戸郡	不明	土製	遺構外	不	2.8	5	75	
106	長松	新潟県村上市	弥生時代中期	土製	SK38(土坑)				76	
107	桜町	富山県小矢部市	縄文時代後期末葉	土製	包含層	片		2.5	19	
108	南谷大山	鳥取県東伯郡	弥生時代後期後半	流紋岩質 凝灰岩	A区S101 (竪穴建物)					77
109	大畑	岡山県津山市	弥生時代後期	土製	住居址16 竪穴住居		4.3			78
110	二塚山	佐賀県神埼市	弥生時代後期中頃	土製	60号土壇墓					79

● III c類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献
111	九年橋	岩手県北上市	縄文時代晩期中葉	不石	包含層	両	4.3		80
112	大日ノ木	長野県上田市	古墳時代前期 ～平安時代	滑石	2号自然流路		5.2		81
113	荒城神社	岐阜県高山市	縄文時代	千枚岩	包含層		7.1	30.8	82

● IV a類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献
114	美沢2	北海道苫小牧市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	土製	包含層	不	5.4		83
115				土製		不	(2.9)		
116	大川	北海道余市郡余	縄文時代	土製	JH-11竪穴住居 覆土	不			34
117				土製		不			
118	風張(1)	青森県八戸市	縄文時代後期中葉 ～縄文時代後期後葉	土製	遺構外	不	3.5		84
119				土製		不	4.2		
120	雨滝	岩手県二戸市	縄文時代晩期	凝灰岩	不明		4.03	8.8	36
121				凝灰岩			4.3	6.8	

122	藤岡神社	栃木県栃木市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	不明石材	包含層	両	3.82	5.9	46
123	南方	埼玉県さいたま市	縄文時代後期 安行1式期	不明石材	第17号住居跡 (竪穴建物)	両	2.7		85
124	雀居	福岡県福岡市	弥生時代前期 ～弥生時代後期	滑石	SX08 不定形土坑		3.65	16.5	86
125	草野貝塚	鹿児島県鹿児島市	縄文時代後期	軽石	包含層		4.8	5	87
126				軽石			7.3	18	

●IVb類

	遺跡名	所在地	時代	材質	出土遺構	穿孔	大きさ	重さ	文献
127	吉武高木	福岡県福岡市	弥生時代前期末 ～弥生時代中期初頭	ヒスイ	第2号木棺墓		3.5		88
128	宇木汲田	佐賀県唐津市	弥生時代中期前半	ヒスイ	24号壺棺墓	両	4.3		32
129				ヒスイ	50号壺棺墓	両	1.9		
130				ヒスイ	表採	両	2.4		
131	中原	佐賀県唐津市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	ヒスイ	SP13231 木棺墓		2.492		89

や膨れる頭部正面に1か所抉りが施されているものである（第27図の1）。頭部に施された抉りは、側面に穿たれた孔には達していない。

次にIb類については、Ia類と同様な平面形態をしているが、やや膨れる頭部正面への抉りが2カ所以上と増加しているものとする（第27図の2）。この類型も同様に、頭部に施された抉りは側面にある孔へ達していない。これらIa・Ib類は、樋口分類のB型第4類の一部〔樋口 1940〕、河村分類の縄文I類玉などに相当する〔河村 2000〕。

IIa類は、平面形態がL字形もしくはJ字形を呈し、やや膨れる頭部側面に穿たれた孔を中心として、放射状に刻み目が施されているものとする（第27図の3）。また、IIb類については、IIa類と同様な平面形態ではあるが、やや膨れる頭部に穿たれている孔に対して、意識的に横方向への刻みを施しているものとする（第27図の4）。IIa・IIb類については、樋口分類のB型第4類の一部〔樋口 1940〕、梅原氏のいう禽獣首形勾玉のなかに含まれる〔梅原 1969〕。

続いてIIIa類は、平面形態が丸みを帯びたC字形もしくは「く」の字形を呈し、頭部正面において細かな刻み目が部分的に複数条施されているものとする（第27図の5）。施された刻み目の多くは、側面に穿たれた孔へは達していない。

そして、IIIb類は、IIIa類と同様に頭部正面において部分的に細かい刻み目が複数条施され、やや細長いJ字を呈する平面形態をしているものとする（第27図の6）。

IIIc類については、他のIIIa類とIIIb類と同様に、頭部正面に細かな刻み目が部分的に複数条施されている。また、平面形態が縦に伸びたC字を呈し、孔が穿たれている側面は平坦になっているため、断面がやや板状になっているものである（第27図の7）。この類型においても、施された刻み目は孔へは達していない。

IV類は、頭部以外に抉りもしくは刻み目が施されているものとする。とくに、側面の形態がC字やE字を呈しているものをIV類aとし（第27図の8・9）する。

また、IV類bは、頭部側面に穿たれた孔以外に、勾玉の縦方向にも穿孔が施されているものとする（第27図の10・11）。これは、いわゆる緒締め形勾玉とよばれているものもあ





第27図 「刻み目勾玉」の種類 (1/2)

1. 新潟県朝日遺跡 2. 北海道大川遺跡 3. 山梨県金生遺跡 4・9 埼玉県南方遺跡  
 5. 神奈川県釜台町上星川遺跡 6. 新潟県長松遺跡 7. 岩手県九年橋遺跡  
 8. 北海道美沢2遺跡 10. 福岡県吉武高木遺跡 11. 佐賀県宇木汲田遺跡

る。このIVa・IVb類は、樋口分類のB型第4類の一部〔樋口 1940〕に相当する。

### 第3節 各類型の材質および出土点数(第28図、第9表)

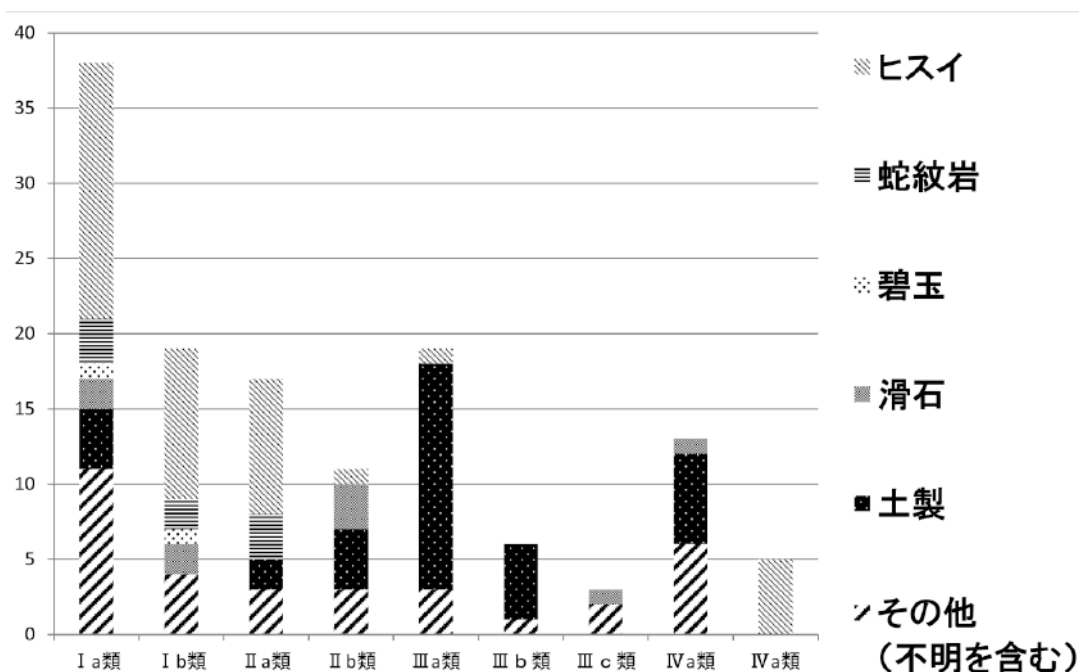
まず、I類aは、ヒスイ(硬玉を含む)17点、蛇紋岩3点、碧玉1点、滑石2点、含クロム白雲母1点、含硬玉珪質岩1点、結晶片岩様緑色岩1点、土製4点、その他(不明を含む)8点の計38点あり、用いられた材質の主体はヒスイである。また、出土点数は縄文時代晩期が最も多く、弥生時代前期にはみられなく、中期になると少量確認される。

次のIb類は、ヒスイ(硬玉を含む)10点、蛇紋岩2点、碧玉1点、滑石2点、閃緑岩1点、その他(不明を含む)4点の計20点が確認されており、主体となる材質はヒスイである。そして、出土点数は縄文時代晩期に最も多く、弥生時代前期にはみられなくなり、中期に少量確認される。

IIa類は、ヒスイ(硬玉を含む)9点、蛇紋岩3点、凝灰岩1点、土製2点、その他(不明を含む)2点の計17点が出土しており、ヒスイ製のものが多くみられる。また、出土点数は、縄文時代後期から晩期が最も多い。

また、IIb類は、ヒスイ1点、滑石3点、土製4点、その他(不明を含む)3点の計11点あり、滑石と土製のものが多くみられる。この類型は、縄文時代後期から晩期、弥生時代にかけて確認されているが、明確な最盛期を見出すことはできない。

次のIIIa類は、ヒスイ(硬玉を含む)1点、頁岩1点、土製15点、その他(不明を含む)2点の計18点が確認されており、土製のものが多く。出土点数は、弥生時代後期に最も多く



第28図 各類型における材質の割合

なる。Ⅲb 類は、流紋岩質凝灰岩 1 点、土製 5 点の計 6 点あり、土製のものが多い。また、この類型は弥生時代中期から後期にかけて、最も多く出土する傾向がみられる。

Ⅲc 類は、滑石 1 点、千枚岩 1 点、その他(不明を含む) 1 点の計 3 点が確認されている。この類型の主体となる材質や出土点数の変遷については、現状では資料が少なく明確にしがたい。

Ⅳa 類は、滑石 1 点、凝灰岩 2 点、軽石 2 点、土製 6 点、その他(不明を含む) 2 点の計 13 点が確認されており、土製のものが多い。また、出土点数については、縄文時代後期に最盛期をむかえる。

そして、Ⅳb 類は、5 点確認されており、全てがヒスイを用いたものである。この類型の出土事例は、弥生時代前期から終末期にかけて確認されている。

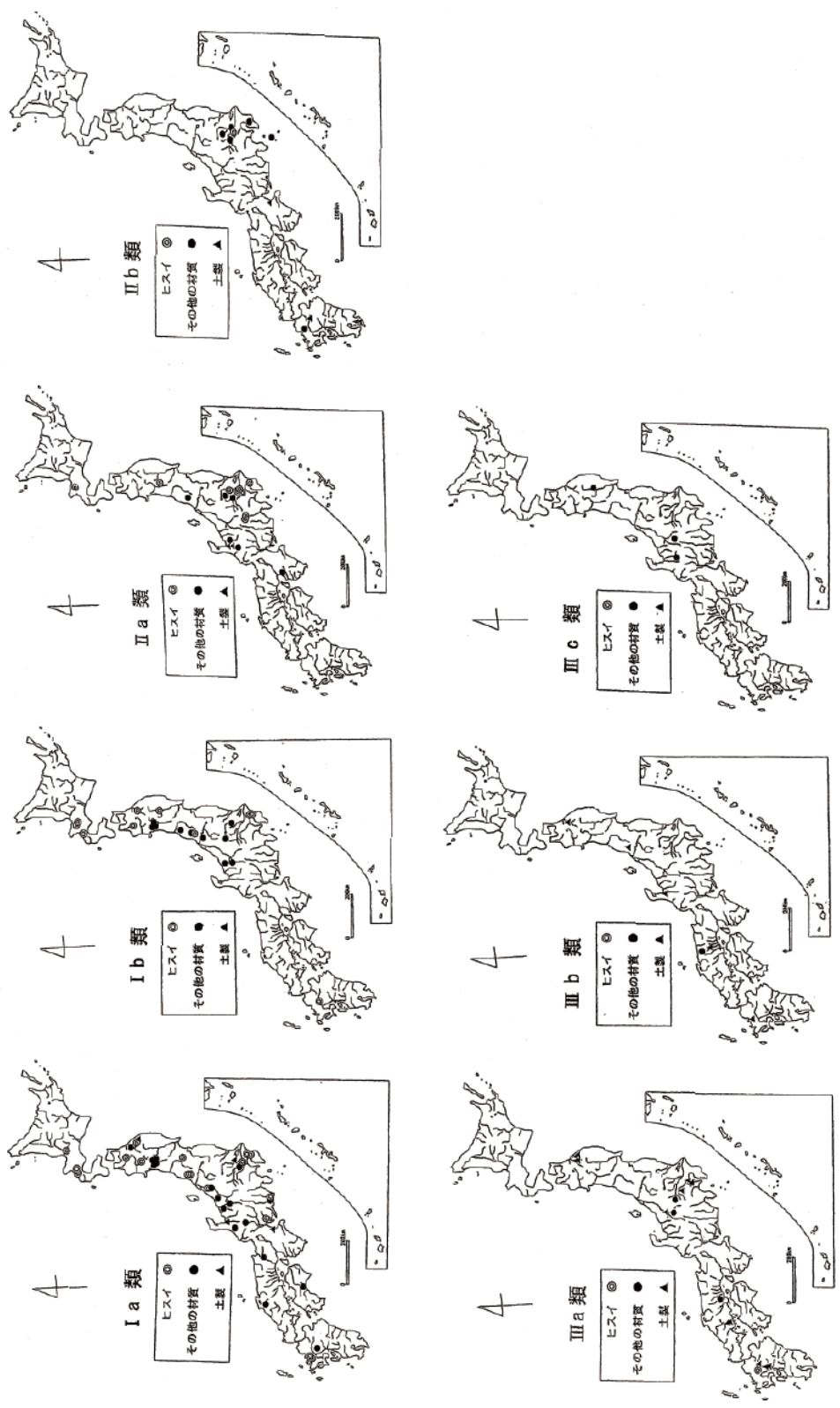
#### 第 4 節 各類型における分布とその地域性

I a 類は、縄文時代後期から晩期にかけて、東北地域や関東地域、北陸地域に多く分布する傾向がみられる。また、北海道高砂遺跡や同港大照寺遺跡、三重県天白遺跡、京都府半田遺跡、島根県川平 I 遺跡、高知県柳田遺跡、福岡県田隈石沸遺跡、佐賀県柏崎松本遺跡、同中原遺跡などからもこの類型の勾玉が出土しており、出土点数は少ないが中国地域・四国地域・九州地域といった西日本への分布の広がりもみてとれる(第 29 図の I a 類)。この西日本への分布の広がり、とくに弥生時代中期になると、出土する遺跡が九州地域に集中的にみられるようになる。

また、注目したいのは、I a 類が縄文時代の玉作り遺跡である富山県境 A 遺跡や長野県一津遺跡と弥生時代の玉作り遺跡である愛知県朝日遺跡からの出土が確認されていることである。このことから、縄文時代中期から晩期にかけては北陸地域や長野県で、弥生時代中期前葉には愛知県で I a 類の勾玉が生産されていた可能性が高いと思われる。しかしながら、弥生時代にみられる I a 類は、北陸地域などで生産されたものが後の時期に流入した可能性も考慮すべきであろう。

I b 類は、北海道大川遺跡や同港大照寺遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡でも出土が確認されているが、出土遺跡が集中するのは東北地域・関東地域・北陸地域である(第 29 図 I b 類)。すなわち、I b 類の分布の特徴については、縄文時代後期から晩期における北陸地域を含めた東日本を中心に分布しており、西日本への分布的広がりはいささか少ないといえるであろう。

また、I b 類は、縄文時代の玉作り遺跡である富山県境 A 遺跡や長野県一津遺跡からの出土が確認されている。このことから、縄文時代中期から晩期における I b 類の生産は、当該時期における I a 類と同様な地域で行なわれていたことが考えられる。また、管見では弥生時代の玉作り遺跡から出土する I b 類の資料が無く、弥生時代においても I a 類と同



第 29 図 各類型の分布状況①

様に愛知県で生産が行なわれていたのかについては、明確にはできない。

次のⅡa類については、北海道大川遺跡や山梨県金生遺跡、岐阜県西田遺跡、大阪府田治米宮内遺跡での出土が確認されているが、分布の中心は、縄文時代後期から晩期にかけての関東地域や北陸地域である(第29図Ⅱa類)。また、Ⅰa類とは異なり、九州地域への分布の広がりは見られない。

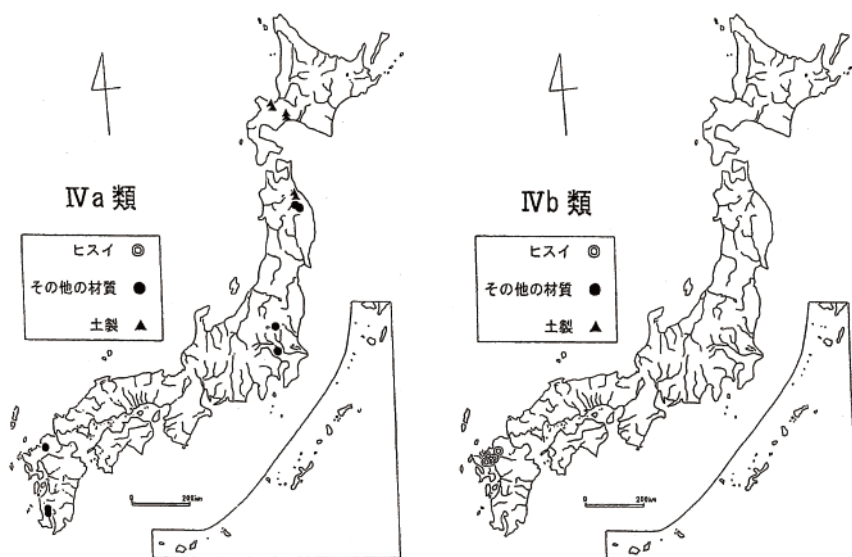
Ⅱb類は、縄文時代後期から晩期にかけての関東地域に分布が集中する。そして、弥生時代になると、Ⅱb類の勾玉が、福岡県雀居遺跡や大分県後迫遺跡、鹿児島県中ノ丸遺跡で確認されている。すなわち、分布の集中地点が時代の変遷と共に、関東地域から九州地域へと移り変わっていくといえるであろう(第29図Ⅱb類)。

Ⅲa類については、弥生時代中期から後期にかけての関東地域と九州地域に出土する遺跡が多く確認されている(第29図Ⅲa類)。その他には、岩手県馬場野Ⅱ遺跡や長野県塚田遺跡、同県七瀬遺跡、岡山県百間川原尾島遺跡、広島県原1号墳などでも出土が確認されている。

次のⅢb類については、新潟県長松遺跡や富山県桜町遺跡、鳥取県南谷大山遺跡などの日本海側の地域に出土する遺跡が多くみられる(第29図Ⅲb類)。そして、時期については、弥生時代中期から後期が中心である。

Ⅲc類は、岩手県九年橋遺跡や長野県大日ノ木遺跡、岐阜県荒城神社遺跡で出土が確認されている(第29図Ⅲc類)。しかしながら、出土点数が少ないため、この類型における分布の広がりについては、明確に述べることはできない。

そして、Ⅳa類については、福岡県雀居遺跡や鹿児島県草野貝塚でも出土が確認されているが、縄文時代後期から晩期にかけての北海道を含めた東日本に、出土遺跡の分布が集中していることがいえよう(第30図Ⅳa類)。



第30図 各類型の分布状況②

また、IVb 類は、福岡県吉武高木遺跡や佐賀県宇木汲田遺跡、同県中原遺跡で出土が確認されている。このことから、IVb 類の分布は、弥生時代前期末葉から古墳時代初頭にかけて、北部九州地域を中心としていると思われる(第 30 図IVb 類)。

## 第 5 節 各類型の出土遺構とその時期的変遷

刻み目勾玉の出土状況は、包含層や遺構外など、遺構に伴わないことが多い。そこで、ここでは明確な遺構に伴ったことが確認されている I a 類；15 遺跡 19 遺構、I b 類；7 遺跡 10 遺構、II a 類；5 遺跡 5 遺構、II b 類；4 遺跡 4 遺構、III a 遺跡；10 遺跡 11 遺構、III b 類；4 遺跡 4 遺構、III c 類；1 遺跡 1 遺構、IV a 類；3 遺跡 3 遺構、IV b 類 3 遺跡 3 遺構を取り扱う(第 9 表)。

まず、I a 類は、縄文時代後期から晩期を中心として、土坑墓 6 件、配石墓 2 件、竪穴建物 1 件、盛土遺構 1 件、捨て場 1 件、溝 1 件が確認されている。また、続縄文時代前半の土坑墓 2 件に加えて、弥生時代中期の甕棺墓 2 件と溝 1 件、そして弥生時代の土器だめ 1 件も確認されている。さらには、静岡県浜松市にある半田山古墳群 A 支群に属する A 3 号墳の玄室からも、ヒスイ製の I a 類が出土している(註 39)。この類型は、縄文時代から続縄文時代から弥生時代、そして古墳時代を通して、墓に伴う傾向が強いように思われる(第 10 表の I a 類)。

I b 類については、縄文時代後期から晩期にかけて土坑墓 3 件、配石墓 1 件、竪穴建物 1 件、溝 1 点、配石遺構 1 件、加えて、続縄文時代前半の土坑墓 2 件、そして弥生時代中期の土坑墓 1 件が確認されている。この類型も I a 類と同様で、縄文時代から続縄文時代、

第 10 表 類型ごとの出土遺構

※ は、墓に関する遺構

	I a 類	I b 類	II a 類	II b 類	III a 類	III b 類	III c 類	IV a 類	IV b 類
土坑墓	8	6	2	1		1			
配石墓	2	1							
甕棺墓	2				1				1
木棺墓									2
古墳	1								
竪穴建物	1	1	2	3	7	2		2	
土坑					2	1		1	
配石遺構		1							
盛土遺構	1								
捨て場	1								
土器群				1					
土器だめ	1								
溝	2	1							
周溝					1				
自然流路							1		
祭祀遺物 集中地点			1						
合計	19	10	5	4	11	4	1	3	3

弥生時代にかけての墓に伴う傾向が強いといえる（第10表のⅠb類）。

続いてⅡa類は、縄文時代後期から晩期にかけて土坑墓2件、竪穴建物2件、祭祀遺物集中地点1件が確認されている。また、Ⅱb類は、縄文時代後期から晩期にかけて土坑墓1件、竪穴建物1件、弥生時代前期から中期にかけては竪穴建物1件、土器群1件が確認されている。このことから、Ⅱa類及びⅡb類の特徴については、墓だけではなく墓以外の遺構からも出土することがあげられ、墓から出土する傾向が強いⅠ類とは様相を異にしている（第10表のⅡa・b類）。

Ⅲa類は、弥生時代中期から終末期にかけて、甕棺墓1件、土坑1件、竪穴建物5件、加えて、古墳時代前期から後期にかけては、周溝1件、土坑1件、竪穴建物2件が確認されている。このことから、Ⅲa類については、墓以外の遺構である竪穴建物によく伴って出土する特徴があるといえる（第10表のⅢa類）。

そして、Ⅲb類は、弥生時代中期から後期にかけて、土坑墓1件、竪穴建物2件、土坑1件が確認されている（第10表のⅢb類）。また、Ⅲc類は、古墳時代前期から平安時代の自然流路で1点出土したのみである（第10表のⅢc類）。

Ⅳa類は、縄文時代において竪穴建物2件、土坑1件が確認されており、墓以外の遺構に伴う傾向が強いと思われる（第10表のⅣa類）。そして、Ⅳb類は、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけて甕棺墓1件、木棺墓2件が確認されており、全てが墓に伴っている（第10表のⅣb類）。

## 第6節 小結

以上、日本列島から出土する刻み目勾玉を集成し、それらの分類を行なって、類型ごとに材質や出土点数からみた時期的変遷や分布圏の把握を行なった。さらに、出土遺構の特徴についても考察を試みた。それらをふまえ、刻み目勾玉について結論を述べることにする。

まず、遺跡から出土する刻み目勾玉は、4つの類型に分類することができる。さらに、これらの4つの類型は、平面形態や刻み目の施され方などの違いによって、Ⅰ類をa・b、Ⅱ類をa・b、Ⅲ類をa・b・c、Ⅳ類をa・bに細かく分けることができる。

こうした分類とは別に、見方を変えると刻み目勾玉には、大きく2つのグループが存在することもいえるであろう。すなわち、1つ目は頭に刻み目が施されるもの（Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類）であり、2つ目は勾玉全体に刻み目が施されるもの（Ⅳ類）である。

これらの類型からは、主体となる材質や出土遺構、分布圏の時期的変遷などから、特徴的な性格を読み取ることができる。

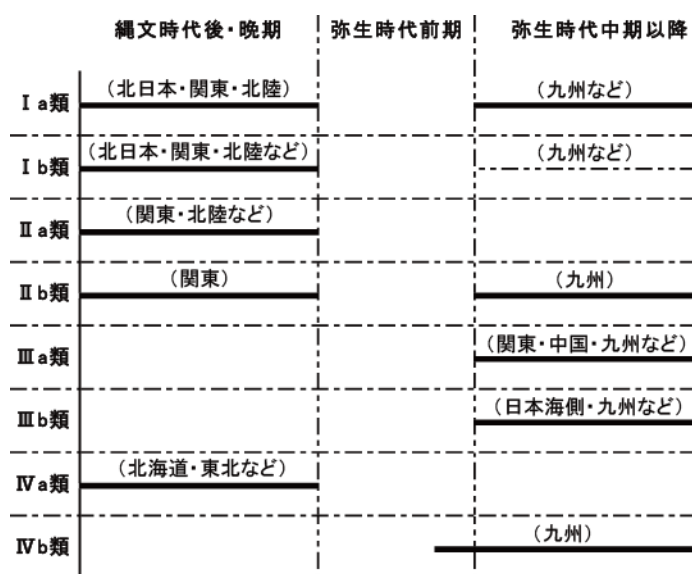
まず、主体となる材質は、Ⅰa類・Ⅰb類・Ⅱa類・Ⅳb類がヒスイで、Ⅲa類・Ⅲb類・Ⅳa類が土製である。そして、出土する遺構の種類については、Ⅰa類・Ⅰb類・Ⅳb類が墓に関係する遺構、Ⅲa類は竪穴建物、Ⅳa類は墓以外の遺構に多いと思われる。

これらのことから、主体となる材質と出土する遺構の種類において、密接な関係性が窺える。すなわち、II a 類のようにヒスイが材質の主体をなし、墓と墓以外の遺構の両方に出土が確認される事例もあるが、大まかにみてヒスイ製の刻み目勾玉は墓から出土する一方で、土製の刻み目勾玉は墓以外の遺構で確認される傾向が強いことがいえるであろう。つまり、縄文時代や弥生時代の人びとが、勾玉自体に抉りや刻み目をいれることよりも、まず材質の希少性などによって、用いる場面を変えていたことが考えられる。

次に類型ごとの分布圏および時期的変遷についてである。I a 類は、縄文時代後期から晩期にかけての東北地域・関東地域・北陸地域で分布が集中してみられる。そして、弥生時代中期になると縄文時代にみられた地域では出土しなくなる一方で、西日本とくに九州地域での出土が多く確認されていく。そして、I b 類は、縄文時代後期から晩期にかけて I a 類と同様な地域に分布が集中していくが、弥生時代になると佐賀県吉野ヶ里遺跡からの出土例のみとなり、出土点数が極端に減少していく。また、I 類に関しては、玉作り遺跡からの出土が確認されており、縄文時代では北陸地域や長野県、弥生時代になると愛知県に生産地があったと考えられる。しかしながら、弥生時代における I 類の刻み目勾玉については、縄文時代に作られたものが時期を経て他地域で出土することも十分に考えられることから、すぐに生産地と消費地を直接的に結びつけていくことはできない。

次の II a 類は、縄文時代後期から晩期の関東地域・北陸地域で多く出土が確認された後、続く弥生時代にはみられなくなる。また、II b 類については、縄文時代後期から晩期の関東地域に分布が集中した後、弥生時代になると九州地域を中心として分布するようになる。

III 類については、資料の少ない III c 類を除いて、弥生時代中期から後期になり出土が確認されるようになり、III a 類は関東地域・九州地域、III b 類は日本海側の地域と九州地域にも分布がみられる。



第 31 図 各類型における分布の時期的変遷

そして、IV a 類は縄文時代後期から晩期にかけての北海道を含む東日本でみられた後、弥生時代にはみられなくなる。また、IV b 類は、弥生時代前期末以降になって出土が確認されてくる。

つまり、日本列島から出土する刻み目勾玉のなかには、縄文時代後・晩期に出現し、弥生時代中期以降にはいると、九州地域を中心とした西日本で出土し続けるものと、弥生時代にはいるとみられなくなるものがあるということが考えられる(第 31



図)。前者はⅠa類やⅡb類のことであり、後者はⅠb類やⅡa類、Ⅳa類のことである。その他には、弥生時代中期以降から確認され始めるⅢa・b類や弥生時代前期末葉から出現してくるⅣb類などもある。また、全体に刻み目が施されるⅣ類は、頭部に刻み目が施されるⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類と比べると、出土地点の偏りや刻みの施され方の多様性などから、より在地的性格が強い類型であると考えられる。

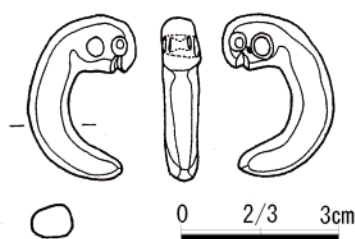
また、流通の問題に関しては、小林行雄氏〔小林 1967〕や森貞次郎氏〔森 1980〕、寺村光晴氏〔寺村 1995〕、河村好光氏〔河村 2000〕らが、縄文時代における北陸地域を含めた東日本から出土するヒスイ製勾玉が、北部九州地域における弥生時代の墓から出土する要因について検討を行なっている。

それぞれの研究者の考察をまとめていくと、小林氏は近畿地域と九州地域との交流を考えており、近畿地域の人びとが銅鐸の原料になる輸入された銅器を九州地域から得る見返りに、ヒスイと色調が類似するガラス勾玉を墓の中に入れていた九州地域の人びとが、縄文時代の東日本でみられたヒスイ製勾玉を求めたことを推測している〔小林 1967〕。また、森氏は、九州地域における伝世説と他地域からの収集説という、2つの仮説を推測している〔森 1980〕。他地域からの収集説は、同時期において東日本の縄文時代の勾玉が、いまだ流通品の1つとしてみることを前提としている。

一方、寺村氏は、小林氏や森氏のような前時代に作られた勾玉の流入という立場はとらず、あくまで弥生時代の北部九州地域でみられる縄文的な勾玉は、同時代の北陸地域からもたらされたものであることを述べている。この主張の根拠は、弥生時代前期に属する新潟県大塚遺跡の事例であり、寺村氏は「ヒスイ産地の地元ではそのころ縄文時代よりの伝統的な作りかたで、ヒスイの玉を作っていた」〔寺村 1995 ; 160 頁〕と述べている。

さらに、河村氏は、寺村氏による同じ時代の玉の移動という考えを評価しながらも、縄文的な特徴を有する勾玉が、弥生時代の北部九州地域へ運ばれることについて、まず「さきだつ縄文晩期におこり、ついでヒスイが運ばれるようになった」〔河村 2000 ; 59 頁〕と述べている。

これらの流通に関する検討は、それぞれが多くを示唆を含んでいるが、さらに、この点については、本章で得られた分類の1つである刻み目勾玉のⅠa類の特徴から、いくつかのことを述べることができる。



第 32 図 熊本県ワクド石遺跡  
出土の「頭部刻み目勾玉」

まず、寺村氏のいう同時代の勾玉の流通については、確かに、新潟県大塚遺跡 A 沢から遠賀川式系土器の出土が確認されており〔寺崎 1988〕、弥生時代前期に北陸地域と北部九州との間で交流が行なわれていたことは明らかであろう。

しかしながら、縄文時代後・晩期における九州地域から、類似する遺物がなく類型に含めることができなかったもの(第 32 図)を除くとしても(註 40)、ヒスイ製刻み目勾玉のⅠa類が確認されないのは明らかである。すなわち、弥

生時代における九州地域のヒスイ製勾玉は、縄文時代後・晩期に北陸地域などで作られたものであり、それが時期を経て運ばれてきたと考えるのが穏当であろう。

次に、縄文時代の勾玉が九州に運び込まれる時期についてである。河村氏の縄文時代晩期に流入の先駆的なものがあるという指摘や、先にあげた弥生時代前期の大塚遺跡の事例などにより、北陸地域を中心とした東日本と九州地域は、継続的にももの行き来が行なわれていたことは、事実であろう。しかしながら、刻み目勾玉の分布における時期的変遷からみた場合には、弥生時代前期はいわば交流の空白の時期になっている（第31図）。このことをふまえて、弥生時代の九州地域に東日本で作られた縄文時代の勾玉が、本格的に流入してくるのは、弥生時代中期からと考えられる。

そして、類型ごと、とくにヒスイ製Ⅰ類やⅡa類における分布の時期的変遷をふまえて、推測を加えるならば、弥生時代における九州地域の人びとは、東日本でみられた縄文時代の勾玉全てを欲していたのではなかったことが、考えられる。すなわち、そこには抉りあるいは刻み目が施されたヒスイ製勾玉に対して、一種の選択性がはたらいていたことを考えることができるのではなかろうか。

以上が本章から得られた結論であるが、最後に、いくつかの問題点をあげ、今後の課題を提示することにした。

まず、刻み目勾玉がみられなくなる、あるいは、時期を経て他地域でみられるという現象には、その地域ごとで密接に結びついた政治的・社会的要因が容易に想定できるが、そのことについて明確に述べることはできなかった。なぜならば、この点を明らかにするためには、刻み目勾玉だけではなく、その周辺も含めた多角的な視野をもった議論が必要不可欠だからである。

そのほかにも、北部九州地域の弥生時代中期頃に成立する、いわゆる丁字頭勾玉との関係性についても、当然、議論されるべき大きな課題の1つであろう。そのことについては、丁字頭勾玉成立の前段階と考えられている、いわゆる菜畑型勾玉のなかに（註41）、1条抉りが施されているものがあるのは興味深い〔木下 1987〕。しかし、現段階では、類似する資料が少ないことから、系譜についての議論は、出土点数の増加を待ったうで行なう必要がある。これらのことを心に留めてひとまず擱筆することにした。

## 註

註 33 この頭部刻み目勾玉という名称は、縄文時代の勾玉を種類別に大まかに分ける際に、関雅之氏が用いているものである〔関 2013〕。

註 34 『石之長者 木内石亭全集』巻1の中に収められている「曲玉問答」の書き始めには、「曲玉問答は天明三年六月の奥書により其著作年代を明にす」〔木内石亭 1936；21頁〕とある。

註 35 両角氏は、第4類の類例として、出雲國伯耆國境1点、信濃國上伊那郡中箕輪村1点、上野國吾妻郡原町字山根組1点、信濃國下諏訪町高木1点、計4点あげており、材質は全て硬玉としてい

る。また、第5類は、弥生時代にみられるいわゆる丁字頭勾玉のことである。

註 36 水野氏は『勾玉』のなかで、丁字頭という名称は使わず、T字頭という単語を用いている。

註 37 集成は、各都道府県、市町村で刊行されている発掘調査報告書と、日本玉文化研究会による雑誌『玉文化』を主に用いて行なった。

註 38 表のなかの材質と出土遺構の項目に関しては、引用文献に記載されている名称をそのまま用いている。また、出土遺構の「(堅穴)」は、筆者による追記である。表内の文献番号は、下に記した通し番号と対応している。

1. 北海道江別市教育委員会 1999『高砂遺跡(16)』
2. 北海道磯谷郡蘭越町教育委員会 1973『港大照寺遺跡調査報告書』
3. 青森県教育委員会 2004『朝日山(2)遺跡IX』
4. 青森県埋蔵文化財センター 1996『泉山遺跡III』
5. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995『大日向II遺跡発掘調査報告』
6. 北上市立埋蔵文化財センター 1986『馬場野II遺跡発掘調査報告書』
7. 秋田県教育委員会 2005『向様田D遺跡』
8. 秋田県教育委員会 1987『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
9. 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1995『宮の前遺跡第2次発掘調査報告書』
10. 財団法人茨城県教育財団 1998『(仮称)中根・金田台地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書I』
11. 浦和市教育委員会ほか 1983『馬場(小室山)遺跡(第5次)』
12. 千葉県土木部 1987『沓掛貝塚』
13. 茂原市ほか 2003『下太田貝塚』
14. 流山市教育委員会 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』
15. 新潟県 ほか 2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元屋敷遺跡II(上段)』
16. 越路町教育委員会 1965『朝日遺跡』
17. 新潟県教育委員会 ほか 2004『上信越自動車道関係発掘調査報告書VII 前原遺跡 丸山遺跡』
18. 富山県教育委員会 1990『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編5-1』
19. 学生社 2001『北陸の縄文遺跡 桜町遺跡調査概報』
20. 石川県野々市町教育委員会 1989『御経塚遺跡II』
21. 大町市教育委員会 1990『一津』
22. 白鳥町教育委員会 1974『白鳥町の遺跡』
23. (財)浜松市文化協会 2005『梶子北(三永)・中村遺跡—弥生時代編—』
24. 浜松市遺跡調査会 1984『半田山古墳群A支群・半田山III遺跡』
25. 愛知県埋蔵文化財センター ほか 2000『朝日遺跡VI』
26. 三重県埋蔵文化財センター 1995『天白遺跡』
27. 福知山市教育委員会 1994『福知山市文化財調査報告書第26集』
28. 島根県教育委員会 ほか 2003『尾白I遺跡 尾白II遺跡 家ノ脇カII遺跡3区 川平I遺跡』

29. 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994『柳田遺跡』
30. 大牟田市教育委員会 2002『田隈柿添遺跡』
31. 唐津市教育委員会 1980『柏崎松本遺跡』
32. 六興出版 1982『末蘆国』
33. 佐賀県教育委員会 2010『中原遺跡群Ⅳ 11区・13区の弥生時代甕棺墓の調査』
34. 北海道余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ』
35. 青森県教育委員会 1993『野脇遺跡発掘調査報告書』
36. 鈴木克彦 2012「岩手県二戸市雨滝遺跡出土の縄文勾玉」『玉文化』第9号 43-45頁
37. 北上市立埋蔵文化財センター 2003『牡丹畑遺跡』
38. 山形県朝日村教育委員会 1984『砂川A遺跡発掘調査報告書』
39. 小山市教育委員会 1982『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』
40. 月夜野町教育委員会 2005『上組北部遺跡群Ⅱ』
41. 財団法人千葉市文化財調査協会ほか 2001『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』
42. 中央公論美術出版 1976『加曾利南貝塚』
43. 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平20年度』
44. 佐賀県教育委員会 1997『吉野ヶ里遺跡』
45. 秋田県教育委員会 1994『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書17』
46. 栃木県教育委員会 2001『藤岡神社遺跡』
47. 桶川市教育委員会 2007『後谷遺跡』
48. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『石神貝塚』
49. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988『赤城遺跡』
50. 財団法人千葉県文化財センターほか 2005『市原市石神台遺跡』
51. 大沢野町教育委員会 1977『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』
52. 山梨県教育委員会 1989『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』
53. 岐阜県土木部 1997『西田遺跡』
54. 岸和田市教育委員会 1999『田治米宮内遺跡』
55. 財団法人茨城県教育財団 1998『主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書』
56. 深谷市教育委員会 1997『深谷市内遺跡Ⅸ』
57. さいたま市遺跡調査会 2005『榎谷遺跡（15次）・南方遺跡（第9次）』
58. 財団法人千葉県教育振興財団ほか 2006『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書7』
59. 東京都島嶼地域遺跡分布調査団 1981『東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書』
60. 福岡市教育委員会 2003『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第747集 雀居 8』
61. 大分県教育委員会 2002『後迫遺跡』
62. 鹿児島県教育委員会 1989『中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡（第3分冊）』

63. 群馬県教育委員会ほか 1995『中高瀬観音山遺跡』
64. 東松山市教育委員会 2003『杉の木遺跡（第3次）』
65. 相武考古学研究所 1985『釜台町上星川遺跡』
66. 高津図書館友の会郷土史研究部 1988『東泉寺上』
67. 坂城町教育委員会 ほか 1995『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』
68. 長野県道路公社 ほか 1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡 七瀬遺跡』
69. 岡山県教育委員会 ほか 1994『百間川原尾島遺跡3』
70. 東広島市教育委員会 1994『原1号遺跡発掘調査報告書』
71. 福岡県教育委員会 2004『堂畑遺跡Ⅱ』
72. 福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXVII—』
73. 熊本県山鹿市教育委員会 2004『方保田東原遺跡（5）』
74. 熊本県山鹿市教育委員会 2007『方保田東原遺跡（8）』
75. 青森県教育委員会 1995『泉山遺跡発掘調査報告書』
76. 新潟県岩船郡神林村教育委員会 1991『長松遺跡発掘調査報告書』
77. 鳥取県教育文化財団 ほか 1993『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24～28号墳』
78. 津山市教育委員会 ほか 1993『大畑遺跡』
79. 佐賀県教育委員会 1979『二塚山』
80. 北上市教育委員会 1980『九年橋遺跡第6次調査報告』
81. 日本道路公団 ほか 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 21 大日ノ木 宮平 東平古墳群 七ツ塚古墳群 上原古墳群 土井ノ入窯跡 染屋台条理 山崎古墳群 観音平経塚 陣場塚古墳 山崎 山崎北 小山製鉄』
82. 財団法人 岐阜県文化財保護センター 1993『荒城神社遺跡』
83. 北海道埋蔵文化財センター 1982『美沢川流域の遺跡群』
84. 八戸市教育委員会 1991『八戸市内遺跡発掘調査報告2 風張（1）遺跡』
85. 埼玉県さいたま市遺跡調査会 2002『櫛谷遺跡（第9・10次）・南方遺跡（第5・6次）・南方西台遺跡（第2次）・行谷遺跡（第3次）』
86. 福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡2』
87. 鹿児島市教育委員会 1988『草野貝塚』
88. 福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群Ⅷ』
89. 佐賀県教育委員会 2012『中原遺跡群Ⅵ 12区・13区の古墳時代初頭前後の墳墓群の調査』

註 39 静岡県浜松市にある半田山古墳群A支群に属するA3号墳は、7世紀中葉に築造された方墳で、追葬は2回行なわれている（第9表）。玄室から出土した遺物は、Ia類のヒスイ製勾玉以外に、鉄鏃や鏝、瑪瑙製勾玉2点、切子玉、ガラス玉などが確認されている。

註 40 頭部刻み目勾玉のなかには、九州地域における縄文時代晩期の遺跡から出土しているが、ほかに類似するものが無く、1つの類型として分けることができなかつたものがいくつかある。そのう

この1つに、熊本県菊池郡にあるワクド石遺跡で確認されたヒスイ製の勾玉がある(古森 1994)。  
この勾玉は、頭部2カ所に穿孔され、1条の刻み目も施されている。また、材質については、藁科哲男氏と東村武信氏による分析により、糸魚川産であることが明らかにされている(藁科・東村 1994)。

註 41 菜畑型勾玉は、佐賀県唐津市の菜畑遺跡から出土した長崎ヒスイ産の勾玉が、基準となっている勾玉のことをいう(唐津市 1982)。

### 第3章 丁字頭勾玉の展開過程と地域性

#### 第1節 問題の所在

日本列島から出土する勾玉をみると、弥生時代中期中頃に頭部に穿たれた孔から放射状に数条の線刻が施された、いわゆる丁字頭勾玉の出現を確認することができる〔森 1980、木下 1987〕。また、これらの丁字頭勾玉の材質には、ヒスイ・碧玉・瑪瑙・コハク・土製など多様性がみられ、分布も北海道から沖縄県まで広範囲にわたって確認される。

丁字頭勾玉は、はやくからその存在が知られており、木内石亭の『曲玉問答』のなかで「常體ニテ筋アリ尤大小アリ」と記されている（註42）。

また、「丁字頭」という名称については、高橋健自氏が「頭に孔から三本の線が刻まれである」〔高橋 1913 ; 117 頁〕ものに対して用いた名称であり、その由来については、「恰度丁子のそれに似ている」〔高橋 1929 ; 146 頁〕からであるとしている。この点について斎藤忠氏は、この由来について、高橋氏が『類聚名物考』〔山岡 編 1904〕のなかの装飾部に収録されている「丁字透かし」（註43）をふまえたうえの用語であると推測しており〔斎藤 1984〕、元来は植物の丁子に由来すると思われる。

丁字頭勾玉を対象とした研究は、20世紀に入り本格化する。その大きな要因としては、坪井正五郎氏による「表面の彫刻には頭部に在つて孔の所から放射状に作られたのが有ります」〔坪井 1908 ; 295 頁〕という指摘や、前述した高橋氏〔高橋 1913〕に加え、大場磐雄氏〔大場 1935〕なども「丁字頭」についての紹介を行なったことがあげられる。これによって研究者たちの間に「丁字頭勾玉」という名称とその存在が浸透し始めた。

当初の研究においては、古墳時代にみられる丁字頭勾玉の起源やその祖形について議論されたものが多い。「丁字頭」の起源については、朝鮮半島南部から出土する勾玉の金冠帽にみられる緊縛被覆の表現から派生し、それが時間の経過と共に単なる孔を起点とする放射状の線刻となることが指摘されている〔樋口 1962〕。また、丁字頭勾玉の祖形については、前代である弥生時代、さらには縄文時代にまで遡って考えられていた〔樋口 1940、八幡 1940、水野 1969〕。

こうした研究を経て 1980 年代以降になると、出土点数の増加とともに丁字頭勾玉に関してより精密な考古学的アプローチが行なわれるようになっていく。まず、弥生時代の丁字頭勾玉に関する研究をみるならば、森貞次郎氏は膨大な量におよぶ弥生時代の勾玉を集成したうえで、定形化する弥生時代の勾玉のなかに丁字頭勾玉がみられること、さらに、それが弥生時代中期中頃の北部九州地域を中心に分布していることを明らかにした〔森 1980〕。

また、木下尚子氏は、森氏の考えを継承しつつ、「丁字頭」の系譜が、縄文時代の勾玉の一型式である緒締型勾玉につながる可能性を述べ、弥生時代の丁字頭勾玉に縄文的要素

が内在していることを推測した〔木下 1987〕。そして、「丁字頭」の性格については、時代により勾玉に込められた象徴性も異なることを述べたうえで、緊縛・結びの呪術性が込められていたことを指摘し〔木下 2000〕、弥生時代における「丁字頭」については「繁褥な勾玉を覆っていた溝や縦孔のルジメント」〔木下 2011；298 頁〕であると述べている。

この「丁字頭」が形成される背景については、勾玉を装飾するためという考えや〔寺村 1995〕、頭部が丸く磨き込まれていく過程で正面の刻みが孔に達したとする考え〔河村 2000〕、そして、孔に通した紐を固定するために施したとする研究者もいる〔小松 2011〕。

また、弥生時代における丁字頭勾玉の性格については、法量や共伴遺物などの比較から、丁字頭勾玉が「丁字頭」を施されていない勾玉よりも優品であるという認識とともに、一種の階層的な装身具の 1 つとして機能していたことが推測されている〔木下 2000・2011〕。小山雅人氏は、丁字頭勾玉を優品とする考えを継承しながらも、長崎県根獅子遺跡で検出された王妃墓・三雲 2 号墓の事例をとりあげ、熟年女性に大形の丁字頭勾玉が伴うことを根拠に、政治的権力者本人よりも、その傍らにいた宗教的権威を有する女性に多く使用された可能性を指摘している〔小山 1992〕。

さらに、流通に関しては、弥生時代後期後半以降に北部九州地域から瀬戸内海を經由し、大阪湾沿いへと運ばれてきたことが主張されている〔河村 2000・2010〕。

次に、古墳時代の丁字頭勾玉の研究について整理するならば、古墳時代前期に丁字頭勾玉が多いことは、すでに知られているところであり〔寺村 1984〕、当該期の丁字頭勾玉についての議論もいくつかなされている。

まず、注目されるのは前期古墳から出土するヒスイ製丁字頭勾玉のなかには、弥生時代にはみられない新しい種類が出現してくることが指摘されている〔大賀 2012〕。これは、大賀克彦氏によるヒスイ製勾玉の分類でいうと O 型（註 44）にあたる。大賀氏は、この類型について、弥生時代中期頃の北部九州地域で製作されたものが、瀬戸内海経由で近畿地域に運ばれ、伝世し、祖形として採用されたことを推測している。また、古墳時代のヒスイ製丁字頭勾玉と三角縁神獣鏡の分布に類似性がみられることを述べたうえで、生産地についての明言は避けてはいるが、前期のヒスイ製丁字頭勾玉がヤマト政権主導のもと生産され、それをヤマト政権が他地域との繋がりを円滑に進めるために配布した可能性を推測している。

さらに、大賀氏は、滑石製丁字頭勾玉の出現を前期末葉から中期前葉頃とし、その分布は近畿地域を中心とした西日本に偏ること、加えて、大型のものが多くことや丁字頭の多条化など、多様性がみられることを指摘している〔大賀 2008〕。

これらから、丁字頭勾玉に関する従来の研究は、地域や時期を限定した研究が主であったことがわかる。すなわち、成立期からその後の展開を俯瞰するといった研究や、確認されている材質を網羅的に取り扱い、展開を明らかにするという研究はいまだなされていない。

以上のことをふまえて、本章ではまず、丁字頭勾玉の地域的展開を理解するため、出現



が確認される弥生時代中期から奈良時代までを範囲とする長期的な視野のもと、日本列島の各時期における出土遺跡の分布や遺跡数の把握を行ない、その時期的変遷を明らかにする。また、材質ごとに出現・展開・消失の検討を試みるとともに、出土状況からみた時期差や地域性を明確にするため、遺構の種類や出土状況の変遷についてもみていく。そして、これらを基にして古代社会における丁字頭勾玉の展開の把握を行ない、そこから読みとることができる地域性を明らかにしたい。

## 第2節 分布・出土遺跡数にみる時期的変遷

はじめに、筆者の集成によって得られた 230 遺跡 468 点の情報をもとに（第 11 表、第 12 表）、それぞれの時期ごとに分布と出土遺跡数の把握を行なうことにする（註 45）。第 33 図は出土遺跡の分布を示したものである（註 46）。

これをみると弥生時代中期には、10 遺跡が確認することができ、北部九州地域に分布の中心がみられる。また、弥生時代後期・終末期になると出土遺跡数が増加の傾向を示し、合計 22 遺跡が確認できる。分布の中心は中期と同様で北部九州地域といえる。注目すべき点は、日本海沿岸の地域である鳥取県や島根県、さらには瀬戸内海沿岸地域である岡山県・広島県でも出土が多く確認され始めることである。東日本では、玉作遺跡の新潟県後生山遺跡や長野県檀田遺跡から丁字頭勾玉が出土しているが、数量は少ない。

次に、古墳時代前期は、出土遺跡数が 70 遺跡と急激に増加する。弥生時代から分布が確認されていた九州地域は 12 遺跡から 17 遺跡、中国地域では 8 遺跡から 11 遺跡と増加しており、これらから継続性を読みとることができる。この時期の大きな変化としては、京都府・大阪府・奈良県を中心とした近畿地域での出土遺跡数が、急激に増加することがあげられる。具体的に述べるならば、弥生時代中期に 1 遺跡みられるのみであった近畿地域で 29 遺跡が確認され、全国的にみても分布が最も集中する（第 33 図）。

その他の地域としては、山口県の瀬戸内海側の地域に加えて、四国地域でも出土が確認されている。また、この時期になると、中部地域や関東地域でも丁字頭勾玉の出土が確認できるようになる。その分布の特徴は、西日本のようにある程度、全体にわたって分布するのではなく、遺跡は散在して出土量も多くはない。

古墳時代中期に入ると、合計 61 遺跡が確認できる。前期に引き続き近畿地域に分布の中心がみられるが、いぜんとして九州地域や中国地域でもある程度まとまった量の出土が確認される。他の地域をみると、南九州地域や北陸地域の一部、東海地域に加え、北関東地域にも分布の広がりを確認することができる。

これが古墳時代後期になると、出土遺跡数は大幅に減って 40 遺跡となり、減少傾向がみられる。前期・中期において、分布が最も集中していた近畿地域の遺跡数が、30 遺跡から 11 遺跡へと急激に減り、かわって九州地域の 15 遺跡が最も多くなる。また、瀬戸内海沿岸地域からも丁字頭勾玉が出土している。東日本では、南関東地域に加え、太平洋側沿

第11表 出土遺跡一覧

※類型の項目は(類型;点数)。また、設定した材質・類型に含まれない、あるいは実測図・写真が報告されていない場合は除く。

No.	遺跡名	所在地	時代	材質;点数	類型※	出土遺構	文献
1	青苗遺跡	北海道虻田郡	縄文時代	ヒスイ:1	ヒI:1	山本台地 墳墓	函館土木現業所 虻田町教育委員会1979
2	丹後平古墳群	青森県八戸市	古墳時代終末~奈良時代	碧玉:1	へII:1	16号墳 主体部	八戸市教育委員会1991
				ヒスイ:1	ヒII:1	21号墳 主体部	
				碧玉:1	へII:1	23号墳 主体部	
3	五条丸古墳群	岩手県江上市	古墳時代終末期	碧玉:1	へII:1	SO-083古墳 主体部	岩手県江釣子村教育委員会1990
4	藤沢秋森古墳群	岩手県紫波郡	古墳時代終末期	ヒスイ:1	ヒI:1	5号墳・主体部	岩手県紫波郡矢巾町教育委員会1986
5	鹿角枯草坂古墳	秋田県鹿角市	奈良・平安時代	碧玉:1	へII:1	不明	秋田県1960
6	北柳1遺跡	山形県山形市	縄文時代末期~古墳時代	蛇紋岩:1	—	遺物集中ブロック	山形県埋蔵文化財センター1997
7	師山遺跡	福島県相馬郡	不明	滑石:1	—	包含層	福島県文化センター1990
8	塚山5号墳	栃木県宇都宮市	古墳時代中期	瑪瑙:1	—	埋葬施設	宇都宮市教育委員会1996
9	新保田中村前遺跡	群馬県高崎市	古墳時代前期以降	蛇紋岩:1	—	1号河川跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団1990
10	上野岡角古墳 (軍配山古墳)	群馬県伊勢崎市	古墳時代前期	ヒスイ:2 コハク:1	ヒI:1 ヒIII:1 コII:1	埋葬施設	岩出貞夫1980
11	十二塚北古墳	群馬県藤岡市	古墳時代中期	凝灰岩:1	—	4Bトレンチ 礎石	群馬県藤岡市教育委員会1988
12	白石福寿山古墳	群馬県藤岡市	古墳時代中期	滑石:1	滑I:1	西櫓	群馬県1936
13	熊野神社古墳	埼玉県北足立郡	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	石室	福川町教育委員会1967
14	千葉市城の腰遺跡	千葉県千葉市	古墳時代	滑石:1	—	100号跡 古墳 石室	千葉県文化財センターほか1979
15	神明社裏遺跡	千葉県千葉市	古墳時代後期~終末期	ガラス:1	—	6号墳・第1埋葬施設	千葉県教育振興財団ほか2008
16	稲荷谷遺跡	千葉県東金市	不明	瑪瑙:1	—	包含層	山武郡市文化財センターほか2002
17	ばあ山遺跡	千葉県市原市	不明	滑石:1	—	表探	千葉県文化財センターほか1980
18	草刈遺跡	千葉県市原市	不明	頁岩:1	—	包含層	千葉県文化財センターほか2007
19	姉崎二子塚古墳	千葉県市原市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒII:1	後円部	土師書院刊1967
20	総世寺裏古墳	神奈川県小田原市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒII:1	石室	神奈川県教育委員会1998
21	雨崎洞穴遺跡	神奈川県三浦市	古墳時代前期末葉~後期初頭	滑石:1	滑II:1	T33 埋葬施設内	赤星直忠博士文化財資料館 雨崎洞穴行会 2015
			古墳時代前期末葉~後期初頭	ヒスイ:1	ヒII:1	T36 埋葬施設内	
22	後生山遺跡	新潟県糸魚川市	弥生時代後期後半	透角閃石:1	—	5号竪穴住居跡	高橋2012
23	中名II遺跡	富山県山市	中世	ヒスイ:1	—	包含層	埋蔵文化財調査事務所ほか2002
24	畷田・寺中遺跡	石川県金沢市	古墳時代~平安時代	変質凝灰岩:1	—	2区SD244 河川跡	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2013
25	龍ヶ岡古墳	福井県福井市	古墳時代中期初頭	ヒスイ:1	ヒII:1	埋葬施設	福井県郷土誌懇談会1960
26	西塚古墳	福井県三方上中郡	古墳時代中期	ガラス:1	ガII:1	石室	福井県立若狭歴史民俗資料館1991
27	十善ノ森古墳	福井県三方上中郡	古墳時代後期	ガラス:1	ガII:1	石室内	福井県教育委員会1997
28	平林2号墳	山梨県笛吹市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒIII:1	石室内	山梨県教育委員会ほか2000
29	石川泉理遺跡	長野県長野市	古墳時代前期	不明:1	—	検出面	長野県教育委員会ほか1997b
30	川柳村將軍塚古墳	長野県長野市	古墳時代前期	不明石材:2	—	表探	森本六爾1929
31	樋田遺跡	長野県長野市	弥生時代後期	ヒスイ:1	ヒII:1	48①区2号円形固溝墓	長野市教育委員会 2005
32	牛出古瀬遺跡	長野県中野市	古墳時代前期	不明:1	—	5号竪穴住居址	長野県教育委員会ほか1997a
33	森將軍塚古墳	長野県千曲市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	主体部	長野県埋蔵文化財センター1992
34	熊田山北古墳群	岐阜県各務原市	古墳時代後期	碧玉:1	へII:1	1号墳第1主体部	各務原市埋蔵文化財調査センター 2008
35	尾崎遺跡	岐阜県美濃加茂市	弥生時代中期 ~奈良時代・中世	ヒスイ:1	—	包含層	岐阜県文化財保護センターほか1994
36	長良権門寺古墳	岐阜県岐阜市	古墳時代中期前半	碧玉:2	へII:2	主体部	岐阜市教育委員会1962
37	兜塚古墳	静岡県磐田市	古墳時代中期	碧玉:1	へII:1	石室	平野和男1960
38	蓮城寺(新貝17)5号墳	静岡県磐田市	古墳時代中期前半	ヒスイ:2	ヒIII:2	石室	静岡県教育委員会1965
39	松林山古墳	静岡県磐田市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	石室内	静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会 1939
40	大屋敷A古墳群	静岡県浜松市	古墳時代後期~終末期	蛇紋岩:1	—	A~10号墳 石室	静岡県埋蔵文化財調査研究所2008
41	高草7号墳	静岡県藤枝市	古墳時代終末期~奈良時代	蛇紋岩:1	—	玄室	静岡県教育委員会ほか1981
42	雄鹿塚遺跡	静岡県沼津市	古墳時代	滑石:1	—	包含層	沼津市教育委員会1990
43	長塚古墳	静岡県沼津市	古墳時代後期	ヒスイ:1	—	石室	足立敏太郎1927
44	日野遺跡	静岡県賀茂郡	古墳時代後期~終末期	碧玉:1	へII:1	SC03-04 配石遺構	南伊豆町教育委員会1987
45	高木遺跡	愛知県岡崎市	古墳時代中期	緑色片岩:1	—	50号住居跡(竪穴)	岡崎市教育委員会2003
46	東之宮古墳	愛知県犬山市	古墳時代前期	ヒスイ:2	ヒIII:2	棺内	犬山市教育委員会2005
47	朝日遺跡	愛知県清須市	弥生時代中期前半	不明石材:1	—	0009 SD05(旧)溝跡	愛知県埋蔵文化財センター1993
48	飯田遺跡	三重県津市	古墳時代	滑石:1	—	包含層	三重県埋蔵文化財センター1999
49	小谷13号墳	三重県松阪市	古墳時代中期~後期	緑色凝灰岩:1	—	埋葬施設2	三重県埋蔵文化財センター2005
50	上椎ノ木古墳群	三重県亀山市	古墳時代前期~中期	ヒスイ:1	ヒI:1	1号墳 主体部	三重県埋蔵文化財センター1992
51	森庵遺跡	三重県伊賀市	古墳時代中期	緑色凝灰岩:1	—	SX32(古墳) 棺内	三重県埋蔵文化財センター2008
52	東条1号墳	三重県伊賀市	古墳時代後期前半	ヒスイ:1	ヒII:1	埋葬施設2	三重県埋蔵文化財センター2015

53	志岳神社古墳	三重県四日市市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	石室	関西大学文学部考古学研究室編1992
54	近江大塚山古墳	滋賀県大津市	古墳時代前期中葉～後半	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	石室?	日本古文化研究所1974a
55	大塚越古墳	滋賀県栗東市	古墳時代中期	滑石:3 ガラス:1	滑Ⅱ:3 ガⅠ:1	埋葬施設	東東歴史民俗博物館ほか2003
56	安土福原山古墳	滋賀県近江八幡市	古墳時代前期	コハク:1	コⅡ:1	前方部第1号箱式棺内	梅原末治1974 日本古文化研究所1974a
57	千歳下遺跡	京都府舞鶴市	古墳時代前期末～中期前葉	緑色凝灰岩:1	—	土坑状遺構	広島大学大学院文学研究科ほか2009
58	私市円山古墳	京都府綾部市	古墳時代中期中葉	流紋岩質 溶結凝灰岩:1	—	第2主体部	京都府埋蔵文化財調査研究 センター1989b 綾部市教育委員会1994
59	奈良谷遺跡	京都府京丹後市	弥生時代中期後半以降	アブライト:1	—	SD01 流路	京都府埋蔵文化財調査研究 センター1994
60	有明7号墳	京都府京丹後市	古墳時代中期以降	碧玉:1	—	主体部	大宮町教育委員会1998
61	團部垣内古墳	京都府南丹市	古墳時代前期	ヒスイ:2	ヒⅢ:2	棺内	同志社大学文学部文化学科1990
62	岸ヶ前2号墳	京都府南丹市	古墳時代中期	碧玉:1	へⅡ:1	埋葬施設3棺内	佛光大学校地調査委員会2001
63	水垂遺跡	京都府京都市	古墳時代	滑石:1	—	E1区 SD101上層 溝跡	京都府埋蔵文化財研究所1998
64	宇治瓦塚古墳	京都府宇治市	古墳時代中期	ヒスイ:1	ヒⅠ:1	盗掘坑	宇治市教育委員会1988
65	宇治二子山古墳	京都府宇治市	古墳時代中期	ヒスイ:2	ヒⅡ:1 ヒⅢ:1	南墳 棺内	宇治市教育委員会1991
66	久津川草塚古墳	京都府城陽市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	石室内	梅原末治1920
67	青塚古墳	京都府城陽市	古墳時代中期	碧玉:3	へⅡ:3	埋葬施設内	京都府教育委員会1964
68	長岡京跡	京都府向日市	古墳時代	滑石:1	—	土壇SK27132	向日市教育委員会1988
69	長法寺南原古墳	京都府長岡京市	古墳時代前期	ヒスイ:2	ヒⅠ:2	後方部整穴式石室内	大阪大学南原古墳調査団1992
70	帯羅坂古墳	京都府木津川市	古墳時代中期	不明石材:2	—	埋葬施設	京都府埋蔵文化財調査研究 センター1989a
71	平尾城山古墳	京都府木津川市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	石室	山口大学文学部考古学 研究室1990
72	山城国府跡	京都府乙訓郡	古墳時代～室町時代	碧玉:1	—	道路敷	大山崎町教育委員会 1980
73	鳥居前古墳	京都府乙訓郡	古墳時代前期末～中期初頭	ヒスイ:3	ヒⅠ:1 ヒⅡ:2	主体部	京都府教育委員会1970
74	大阪城跡	大阪府大阪市	不明	ヒスイ:1	—	第2a層 包含層	大阪市文化財協会1999b
75	細工谷遺跡	大阪府大阪市	古墳時代中期～後期	滑石:1	—	5層 包含層	大阪市文化財協会1999a
76	堂山古墳群	大阪府大阪市	古墳時代中期	ヒスイ:1	ヒⅠ:1	第1号墳 主体部	大阪府教育委員会 1994
77	カトンプ山古墳	大阪府堺市	古墳時代中期	滑石:1	滑Ⅱ:1	主体部	古代学研究会1953
78	伝百舌鳥古墳群	大阪府堺市	古墳時代	碧玉:1	—	堺市博物館寄託・所蔵	七観古墳研究会2014
79	塚廻古墳	大阪府堺市	古墳時代中期	ヒスイ:2	ヒⅡ:2	埋葬施設	木下尚子2005
80	大塚古墳	大阪府豊中市	古墳時代中期	グリーンタフ:1	—	埋葬施設	豊中市教育委員会1987
81	紫金山古墳	大阪府茨木市	古墳時代前期	ヒスイ:3	ヒⅡ:1 ヒⅢ:2	埋葬施設内 棺内	京都大学大学院文学研究科2005
82	弁天山C1号墳	大阪府高槻市	古墳時代前期中葉～末葉	ヒスイ:2	ヒⅡ:2	整穴式石室棺内	大阪府教育委員会1967
83	園分ヌク谷北塚古墳	大阪府柏原市	古墳時代前期～中期	ヒスイ:3	ヒⅢ:3	粘土棚内 木棺内	大阪大学1964
84	安堂遺跡	大阪府柏原市	不明	滑石:1	—	溝状遺構	柏原市教育委員会1988
85	北玉山古墳	大阪府柏原市	古墳時代中期前葉	ヒスイ:5	ヒⅠ:3 ヒⅡ:2	石室	関西大学文学部1963
86	狐塚古墳	大阪府柏原市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	石室	柏原市教育委員会2004
87	河内松岳山古墳	大阪府柏原市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	石室 棺内	大阪府教育委員会1957
88	和泉黄金塚古墳	大阪府和泉市	古墳時代前期末葉	ヒスイ:7 滑石:9 ヒスイ:3	ヒⅡ:7 滑Ⅰ:3 滑Ⅱ:6 ヒⅡ:1 ヒⅢ:2	中央柳 東柳	日本考古学協会1954
				ヒスイ:2 滑石:1	ヒⅠ:1 ヒⅢ:1 滑Ⅱ:1	西柳	
89	風吹山古墳	大阪府岸和田市	古墳時代中期	ヒスイ:5	ヒⅠ:1 ヒⅡ:3 ヒⅢ:1	北柳	岸和田市教育委員会1995
90	大和川今池遺跡	大阪府松原市	古墳時代終末期	碧玉:1	へⅡ:1	SB02 掘立柱建物	大阪府教育委員会1990
91	庭島塚古墳	大阪府羽曳野市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	埋葬施設内 棺内	羽曳野市教育委員会2006
92	駒ヶ谷宮山古墳	大阪府羽曳野市	古墳時代中期初頭	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	後円部整穴式石室内	大阪大学1964
93	厩塚古墳	大阪府藤井寺市	古墳時代中期前葉	碧玉:2 緑色凝灰岩:1	へⅡ:2	棺内	末永雅雄1991
94	珠金塚古墳	大阪府藤井寺市	古墳時代中期後半	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	北柳	末永雅雄1991
95	寛弘寺12号墳	大阪府南河内郡	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	主体部	大阪府教育委員会1986

96	白水羅塚古墳	兵庫県神戸市	古墳時代前期中頃	ヒスイ:4	ヒⅠ:2 ヒⅡ:1 ヒⅢ:1	第1主体部 棺内	神戸市教育委員会2008
97	田能遺跡	兵庫県尾崎市	弥生時代中期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	第4調査区 第6溝	尾崎市教育委員会1982
98	長越遺跡	兵庫県姫路市	古墳時代前期～中期	滑石:1	滑Ⅱ:1	大溝	兵庫県教育委員会1978
99	富山古墳	兵庫県姫路市	古墳時代後期	ヒスイ:3	ヒⅡ:1	石室	兵庫県姫路市教育委員会1970 姫路市教育委員会2016
100	人見塚古墳	兵庫県姫路市	古墳時代後期	碧玉:2	へⅡ:2	石室	姫路市2010
101	山崎山古墳群	兵庫県姫路市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒⅠ:1	3号墳	姫路市2010
102	小見塚古墳	兵庫県豊岡市	古墳時代前期	滑石:1	滑Ⅱ:1	石室	兵庫県1925
103	森尾古墳	兵庫県豊岡市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅢ:1	埋葬施設	豊岡市教育委員会1980
104	田多地3号墳	兵庫県豊岡市	古墳時代中期	不明石材:1	—	第13主体	出石町教育委員会1985
105	茶すり山古墳	兵庫県朝来市	古墳時代中期前半	緑色凝灰岩 風石:2	—	第2主体部	兵庫県教育委員会2010
106	城の山古墳	兵庫県朝来市	古墳時代前期	コハク:1	コⅡ:1	木棺内	和田山町・和田山町教育 委員会1972
107	伊和中山古墳群	兵庫県宍粟市	古墳時代後期末葉	碧玉:1	—	1号墳 棺内	兵庫県宍粟郡一宮町教育 委員会1986
108	西野山第3号墳	兵庫県赤穂郡	古墳時代中期前半	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	粘土棚内 主体部	有年考古館1952
109	丸山古墳	奈良県奈良市	古墳時代後期	ガラス:1	ガⅠ:1	攪乱土内	奈良県教育委員会1959a
110	奈良元興寺	奈良県奈良市	奈良時代	ヒスイ:1	ヒⅢ:1	塔跡心礎周辺	福森賢次1930 木下尚子2005
111	石上神宮禁足地遺跡 (仮)	奈良県天理市	古墳時代中期前半	ヒスイ:10	ヒⅠ:8 ヒⅡ:2	石室	大場磐雄1930
112	株本市場遺跡	奈良県天理市	不明	ヒスイ:1	—	包舎層	奈良県教育委員会1966
113	下池山古墳	奈良県天理市	古墳時代前期	グリーンタフ:2	—	石室内	奈良県立権原考古学研究所2008
114	新沢千塚古墳群	奈良県橿原市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	126号墳 棺内	奈良県教育委員会1977
			古墳時代前期後半	ヒスイ:1 不明石材:1	ヒⅠ:1	500号墳 主柳 後円部 主体部	奈良県教育委員会1981
			古墳時代中期	不明:1	—	48号墳 石室	
			古墳時代前期後半～中期	ヒスイ:3	ヒⅡ:3	213号(棺内)	
115	池ノ内5号墳	奈良県桜井市	古墳時代中期	滑石:1	滑Ⅱ:1	第3棺	奈良県教育委員会1973
116	桜井南部(壺余)古墳群	奈良県桜井市	古墳時代前期中頃	ヒスイ:1	ヒⅠ:1	メス山古墳 主室	奈良県教育委員会ほか1977
			古墳時代前期前半	ヒスイ:1	ヒⅠ:1	桜井茶臼山古墳 石室	奈良県教育委員会1961
117	赤尾熊ヶ谷2号墳	奈良県桜井市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒⅢ:1	1号棺	桜井市文化財協会2008
118	外山谷1号墳	奈良県桜井市	古墳時代後期	滑石:2	滑Ⅱ:2	第1埋葬施設 棺内	奈良県立権原考古学研究所編1978
			古墳時代後期	滑石:1	—	探査	
119	石光山8号墳	奈良県御所市	古墳時代後期後葉～末葉	ガラス:1	ガⅠ:1	堅穴式石室	奈良県教育委員会1976
120	巨勢山2号墳	奈良県御所市	古墳時代中期	不明石材:1	—	北棺	奈良県教育委員会1974
121	室宮山古墳	奈良県御所市	古墳時代中期前葉	碧玉:2	へⅡ:2	石室	奈良県教育委員会1959b
122	鴨部波1号墳	奈良県御所市	古墳時代前期中葉	ヒスイ:2	ヒⅢ:2	棺内	御所市教育委員会 編2001
123	後出2号墳	奈良県宇陀市	古墳時代後期	コハク:1	コⅠ:1	棺内	奈良県立権原考古学研究所2003
124	鳥の山古墳	奈良県磯城郡	古墳時代後期末葉	滑石:1	滑Ⅱ:1	粘土棚内	奈良県立権原考古学研究所編1997
125	市尾墓山古墳	奈良県高市郡	古墳時代後期	不明石材:1	—	5-2トレンチ	高取町教育委員会2007
126	飛鳥寺	奈良県高市郡	古墳時代終末期	ヒスイ:1	ヒⅢ:1	舍利埋納物	奈良国立文化財研究所1958
127	佐味田塚古墳	奈良県北葛城郡	古墳時代前期	滑石:1	滑Ⅱ:1	Bトレンチ 第1主体部	奈良県立権原考古学研究所2002a
128	馬見古墳群	奈良県北葛城郡	古墳時代中期	不明石材:1	—	新木山古墳 石室	奈良県立権原考古学研究所2002b
			古墳時代中期	滑石:1	滑Ⅰ:1	黒山古墳 石室	広陵町教育委員会1989 奈良県立権原考古学研究所2002b
			古墳時代前期後半	ヒスイ:6	ヒⅠ:1 ヒⅡ:1 ヒⅢ:4	宝塚古墳 石室 (=貝吹山古墳)	梅原末治1921 奈良県立権原考古学研究所2002b
			古墳時代前期中葉	滑石?:2	—	新山古墳 石室	奈良県立権原考古学研究所2002b
			古墳時代前期後半	不明石材:1	—	黒石5号墳? 黒石東2号墳?	奈良県立権原考古学研究所2002b
129	鹿島遺跡	和歌山県有田郡	古墳時代	滑石:1	—	包舎層	南紀考古同好会1969
130	面影山90号墳	鳥取県鳥取市	古墳時代前期後半頃	ヒスイ:1	ヒⅡ:1	埋葬施設内木棺内	鳥取市教育委員会ほか1991
131	横枝73号墳	鳥取県鳥取市	古墳時代前期中葉	コハク:2	コⅡ:2	第1主体部	鳥取市文化財団 2003

132	長瀬高浜遺跡	鳥取県東伯郡	古墳時代前期～中期	滑石:1	滑石:1	SI221(竪穴住居)	鳥取県教育文化財団1997
			古墳時代前期～中期	滑石:1	滑石:1	SI01(竪穴住居)	鳥取県教育文化財団ほか1980
			古墳時代中期	不明石材:1	—	SI107(竪穴住居)	鳥取県教育文化財団ほか1982
			古墳時代後期	滑石:1	滑石:1	SX02 2号墳 墳丘内	
133	馬山4号墳	鳥取県東伯郡	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	第1主体部	山陰考古学研究所1978
134	北山1号墳	鳥取県東伯郡	古墳時代中期	ヒスイ:1	ヒII:1	第2主体部	山陰考古学研究所1978
135	南谷大山遺跡	鳥取県東伯郡	弥生時代後期後半	流紋岩質 凝灰岩:1	—	A区SI01(竪穴住居)	鳥取県教育文化財団ほか1993
136	前立山遺跡	鳥取県鹿足郡	弥生時代後期末	不明石材:1	—	SI17(竪穴住居)	鳥取県教育委員会 1980
137	金蔵山古墳	岡山県岡山市	古墳時代前期末葉～中期初頭	滑石:72	滑I:11 滑II:31	南石室	倉敷考古館1959
138	雲山鳥打1号墳丘墓	岡山県岡山市	弥生時代後期	ヒスイ:1	ヒI:1	第1主体部	岡山県1986
139	高塚遺跡	岡山県岡山市	古墳時代	蛇紋岩:1	—	フロヤ調査区 遺構外	岡山県教育委員会ほか2000
		岡山県岡山市	弥生時代後期	土製:1	土I:1	角田調査区 方形土壇107	岡山県教育委員会ほか2000
140	一宮天神山2号墳	岡山県岡山市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒII:1	第2主体部外?	木下尚子2005
141	猿山古墳	岡山県瀬戸内市	古墳時代中期	ガラス:1	ガI:1	石室	岡山県1986
142	橋築弥生墳丘墓	岡山県倉敷市	弥生時代後期後葉	ヒスイ:1	ヒI:1	中心主体部 墳丘墓	近藤義郎 編 1992
				土製:2	土I:1 土II:1	円礫堆出土 墳丘墓	
143	鐘物師谷1号 弥生墳丘墓	岡山県総社市	弥生時代後期後葉	ヒスイ:1	ヒII:1	石室	春成秀爾・葛原克人・ 小野一臣・中田啓司1969
144	鶴山丸山古墳	岡山県和気郡	古墳時代前期後半	ロウ石:2	—	石室 北東隅	日本古文化研究所1974b
145	月の輪古墳	岡山県久米郡	古墳時代中期	碧玉:1	へII:1	南棺Ⅲ	月の輪古墳刊行会1960
146	奥の前1号墳	岡山県津山市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	組合式石棺	久米開発事業に伴う文化財調 査委員会1979
147	恵下1号墳	広島県広島市	古墳時代中期	ヒスイ:1	ヒII:1	埋葬施設内	広島県教育委員会1977
148	新宮古墳	広島県広島市	古墳時代後期	ヒスイ:1	—	石室	広島市役所1981
149	中小田第1号墳	広島県広島市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	石室	瀬見浩編1982
150	毘沙門台東遺跡	広島県広島市	弥生時代後期	土製:1	土I:1	第25号住居跡 周辺地山面	広島市教育委員会1990
			弥生時代後期?	土製:1	土II:1	B地点東側斜面	
151	千人塚古墳	広島県東広島市	古墳時代中期	ヒスイ:2	ヒII:2	1号墳 石室	広島県1979
152	京野遺跡	広島県山形郡	弥生時代後期	土製:1	土I:1	SX20 段状遺構	広島県埋蔵文化財調査センター1998
153	松崎古墳	山口県宇部市	古墳時代前期	コハク:1	コI:1	石室	宇部市教育委員会1981
154	柳井茶臼山古墳	山口県柳井市	古墳時代前期	ヒスイ:2	ヒI:2	竪穴式石櫛	柳井市教育委員会編1999
155	妙徳山古墳	山口県山陽小野田市	古墳時代前期	緑色凝灰岩:3	—	主体部	建設省山口工務事務所 山口県教育委員会1991
156	岩崎山4号墳	香川県さぬき市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	竪穴式石櫛	津田町教育委員会 2002
157	快天山古墳	香川県丸亀市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	竪穴式石櫛 1号石棺	綾歌町教育委員会2002
158	大浦浜遺跡	香川県坂出市穂石島	古墳時代	碧玉?:1	—	包含層	香川県教育委員会ほか1988
159	乃万の墓遺跡	愛媛県松山市	古代～中世	ヒスイ:1	—	SD11 溝跡	松山市教育委員会ほか1999
160	正光寺山古墳群	愛媛県新居浜市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒIII:1	1号墳 主体部	新居浜市教育委員会2012
161	高岡山古墳群	高知県宿毛市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒII:1	1号墳 主体部	高知県教育委員会1985
162	岡遺跡	福岡県北九州市	弥生時代中期中頃～後半	ヒスイ:1	ヒII:1	谷地Ⅲ層	北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室1989
163	蒲生寺中遺跡	福岡県北九州市	古墳時代中期	碧玉:2	へI:1 へII:1	4区蒲生寺中古墳	北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室2002
164	広石南4号墳	福岡県福岡市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒII:1	羨道中央	福岡市教育委員会1999
165	クエノ遺跡	福岡県福岡市	古墳時代後期	緑泥炭岩:1	—	1号墳 第2主体部	福岡市教育委員会1995
166	丸隈山古墳	福岡県福岡市	古墳時代中期	ヒスイ:2	ヒI:1 ヒII:1	石室	福岡市教育委員会1986
167	三吉遺跡群	福岡県福岡市	古墳時代後期	滑石:1	滑II:1	SC1005 竪穴住居	福岡市教育委員会1996
168	野方久保遺跡	福岡県福岡市	弥生時代後期後半	ヒスイ:1	ヒI:1	SC-17 A地点 竪穴住居	福岡市教育委員会1993
169	野多目括渡遺跡	福岡県福岡市	古墳時代後期	碧玉?:1	—	第23号住居址 壁溝	福岡市教育委員会1983
170	老司古墳	福岡県福岡市	古墳時代中期	ヒスイ:5	ヒI:3 ヒII:2	3号石室	福岡市教育委員会1989

171	鶴崎古墳	福岡県福岡市	古墳時代前期	ヒスイ:3	ヒI:1 ヒII:1 ヒIII:1	主室 1号棺	福岡市教育委員会2002
172	高田遺跡	福岡県福岡市	弥生時代後期後半～末葉	土製:1	土I:1	溝1	福岡県教育委員会1984
173	五島山古墳	福岡県福岡市	古墳時代前期前半	ヒスイ:1	ヒII:1	石室	亀井明徳1970
174	城の谷古墳	福岡県八女市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒI:1	棺内	八女市教育委員会1983
175	稲室古墳群	福岡県行橋市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒII:1	稲室15号墳 石室	行橋市教育委員会2005
			古墳時代中期後半	ヒスイ:5	ヒI:1 ヒII:3 ヒIII:1	稲室21号墳 石室	
176	以来尺遺跡	福岡県筑紫野市	弥生時代後期	蛇紋岩:1	—	84号住居 竪穴住居	福岡県教育委員会1997
177	上高宮古墳	福岡県宗像市	古墳時代中期	ヒスイ:1	ヒI:1	埋葬施設内	宗像大社復興期成会1979
178	宗像神社沖津宮祭祀遺跡	福岡県宗像市	古墳時代中期	ヒスイ:2 碧玉:2	ヒI:2 ヘI:2	16号遺跡 岩上祭祀遺構	吉川弘文館1958 吉川弘文館1961
			古墳時代中期	碧玉:1 滑石:2	ヘI:1 滑I:1 滑II:1	19号遺跡 岩上祭祀遺構	吉川弘文館1961
179	東郷高塚古墳	福岡県宗像市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒI:1	盗掘墳	宗像市教育委員会1989
180	中津宮境内付近遺跡(仮)	福岡県宗像市	不明	ヒスイ:1	—	不明 (大島小学校校庭より)	大島村1985
181	古野第19号墳	福岡県古賀市	古墳時代終末期	碧玉:1	ヘII:1	玄室	福岡県教育委員会1978
182	奴山正圓古墳	福岡県福津市	古墳時代中期	ヒスイ:1 碧玉:2	ヒIII:1 ヘI:1 ヘII:1	埋葬施設 棺外側の盗掘坑	津屋崎町教育委員会1978 福津市教育委員会2013
183	勝浦峯ノ畑古墳	福岡県福津市	古墳時代後期	コハク:1	コII:1	石室	福津市教育委員会2011
184	柿原遺跡群(D地区)	福岡県朝倉市	古墳時代終末期～奈良時代	瑪瑙:1	—	13号墳 石室	福岡県教育委員会1990
185	竹海校東遺跡	福岡県みやま市	縄文時代晩期～古墳時代	ヒスイ:1	—	P-137 ビット	高田町教育委員会2003
186	鏡子塚古墳	福岡県糸島市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒI:1	竪穴式石室	日本考古学協会古墳調査 特別委員会1952
187	三雲南小路遺跡	福岡県糸島市	弥生時代中期後半	ヒスイ:1 ガラス:1	ヒI:1 ガII:1	2号壘形墓	福岡県教育委員会1976 福岡県教育委員会1985
188	平原遺跡	福岡県糸島市	弥生時代後期後半～末葉	ガラス:3	ガI:3	平原1号墓 主体部	平原弥生古墳調査報告書 編集委員会1991 前原市教育委員会2000
189	須玖岡本 D地点	福岡県春日市	不明	ガラス:1	—	表探	京都帝国大学1930
190	岩長浦古墳群	福岡県糟屋郡	古墳時代終末期	ヒスイ:1	ヒII:1	IWI1号墳 石室	宇美町教育委員会1981
191	夜臼・三代地区遺跡群	福岡県糟屋郡	古墳時代	不明石材:1	—	包含層	新宮町教育委員会1994
192	箕田丸山古墳	福岡県京都郡	古墳時代後期	不明石材:1	—	前方部 石室	福岡大学人文学部考古学 研究室2004
193	番塚古墳	福岡県京都郡	古墳時代後期	コハク:4	コII:3	南棺	九州大学文学部考古学研 究室1993
194	御所山古墳	福岡県京都郡	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒII:1	石室	苅田町教育委員会1976
195	穴ヶ葉山遺跡	福岡県築上郡	弥生時代後期後葉	ヒスイ:1	ヒI:1	23号墓 石室土壇墓	大平村教育委員会1993
196	梅白遺跡	佐賀県唐津市	古墳時代	蛇紋岩:1	—	包含層	佐賀県教育委員会2003
197	宇木汲田遺跡	佐賀県唐津市	弥生時代中期前半	ヒスイ:1	ヒI:1	11号壘形墓	六興出版1982
			弥生時代中期前半	ヒスイ:1	ヒI:1	47号壘形墓	
198	谷口古墳	佐賀県唐津市	古墳時代前期後半	ヒスイ:2	ヒI:1 ヒII:1	後円部 東石棺内	佐賀県教育委員会1948 六興出版1982
199	中原遺跡	佐賀県唐津市	弥生時代終末期 ～古墳時代初葉	ヒスイ:1	ヒI:1	SP13231 木棺墓	佐賀県教育委員会2012
200	蓮和古墳	佐賀県唐津市	古墳時代中期	滑石:1	—	石室	六興出版1982
201	牛原原田遺跡	佐賀県鳥栖市	古墳時代終末期	ヒスイ:1	ヒII:1	ST05古墳	鳥栖市教育委員会1994
202	大久保遺跡	佐賀県鳥栖市	弥生時代中期後葉	不明石材:1	—	SH2028 竪穴住居	佐賀県教育委員会2001
203	東福寺遺跡	佐賀県武雄市	古墳時代終末期	碧玉:1	ヘII:1	ST014古墳 石室	佐賀県教育委員会1994b
204	猿嶽〇遺跡	佐賀県神埼市	古墳時代後期～終末期	不明石材:1	—	ST026 古墳 石室	佐賀県教育委員会1993
205	吉野ヶ里遺跡	佐賀県神埼郡	弥生時代後期	碧玉:1	ヘII:1	志波屋四の坪地区 SP0859 土壇墓	佐賀県教育委員会1994a
206	高下古墳	長崎県島原市	古墳時代後期	ヒスイ:1	ヒI:1	埋葬施設	小田富士雄1979

207	勝負田古墳	長崎県平戸市	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒI:1	石室 箱式石棺	長崎県教育委員会1992
208	根獅子遺跡	長崎県平戸市	弥生時代中期	ヒスイ:1	ヒI:1	遺構内	京都大学平戸学術調査団1951 木下尚子2005
209	田助古墳	長崎県平戸市	古墳時代前期	碧玉:1	へI:1	箱式石棺墓	京都大学平戸学術調査団1951
210	古里遺跡	長崎県対馬市	古墳時代後期	頁岩:1	—	箱式石棺	長崎県教育委員会1996
211	保床山古墳	長崎県対馬市	古墳時代	滑石:1	—	伝世品	小田富士雄1972
212	神ノ崎遺跡	長崎県北松浦郡	弥生時代中期末葉	ヒスイ:1	ヒI:1	20号石棺	長崎県北松浦郡小値賀町 教育委員会1984
213	方保田東原遺跡	熊本県山鹿市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	土製:1	土II:1	15号住居跡 竪穴住居	山鹿市教育委員会1984
			弥生時代 ～平安時代・中世	土製:1	—	4区 遺構外	熊本県山鹿市教育委員会2004
214	向野田古墳	熊本県宇土市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒI:1	棺内	熊本県宇土市教育委員会1978
215	桐ノ木尾ばね古墳	熊本県上天草市	古墳時代中期前半	碧玉:2	へI:1 へII:1	石室	熊本大学文学部考古学研究室2007
216	江田船山古墳	熊本県玉名郡	古墳時代後期	ヒスイ:2	ヒI:2	石室	菊水町史編纂委員会2007
217	上ノ坊古墳	大分県大分市	古墳時代前期後半	ヒスイ:1	ヒI:1	石棺	大分県前方後円墳研究会1990
218	草場第2遺跡	大分県日田市	古墳時代中期	泥岩:2	—	13号方形墓 第1主体部	大分県教育委員会1989
219	免ヶ平古墳	大分県宇佐市	古墳時代前期	ヒスイ:2	ヒI:2	棺内	大分県立宇佐風土記の丘歴史 民俗資料館1986
220	川辺遺跡	大分県宇佐市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	ヒスイ:1	ヒI:1	1号方周溝墓 2号石棺内	宇佐市教育委員会1998 大分県教育委員会1999
221	種尻遺跡	大分県宇佐市	弥生時代中期中葉～後期後半	土製:8	土II:8	10号墓及びその周辺 失蓋土壌墓	宇佐市教育委員会1981 宇佐市教育委員会1986
222	高添遺跡	大分県豊後大野市	弥生時代後期～古墳時代前期	不明石材:1	—	20号竪穴 竪穴住居	大分県教育庁埋蔵文化財 センター2007
223	下北方古墳群	宮崎県宮崎市	古墳時代後期	ヒスイ:2	ヒI:2	5号地下式横穴墓 玄室	宮崎市教育委員会1977 宮崎県教育委員会1987
224	ズクノ山第1遺跡	宮崎県宮崎市	弥生時代中期後半～後期初頭	土製:1	土I:1	SA-10 竪穴住居	宮崎県田野町教育委員会 2003
			弥生時代中期～後期	土製:1	土I:1	SA-29 竪穴住居	
225	六野原古墳群	宮崎県東諸県郡	古墳時代中期～後期	ヒスイ:1	ヒI:1	地下式古墳 第8号墳	宮崎縣1944
226	持田古墳群	宮崎県児湯郡	古墳時代前期	ヒスイ:1	ヒIII:1	計塚 第1号墳 石室	宮崎県教育委員会1969
			古墳時代後期	ヒスイ:2	ヒI:2	14号墳 石室	
			古墳時代後期	ガラス:3	ガII:3	山の神塚(第26号墳)	
			古墳時代	ヒスイ:11	—	個人蔵	
227	首里城跡	沖縄県那覇市	中世～現代	不明石材:1	—	二階殿地区 盛土	沖縄県立埋蔵文化財センター2005
228	仲筋貝塚	沖縄県石垣市	グスク時代	不明石材:1	—	表塚	仲筋貝塚発掘調査団1981
229	里東原遺跡	沖縄県糸満市	グスク時代?	ガラス:1	—	包含層	糸満市教育委員会1995
230	齋場御嶽	沖縄県南城市	中世～近世	ヒスイ:1	ヒI:1	三庫理地区(イビスメー) 第1層テストピット2	知念村教育委員会1999

岸地域に多く出土が確認できる。

古墳時代終末期の出土遺跡数は 16 遺跡となり、後期に比べさらに減少する傾向が確認できる。遺跡の数からみると分布の中心は北部九州地域になる。また、近畿地域や静岡県、太平洋沿岸地域などでも出土が確認できる。この時期の特徴として注目されるのは、古墳時代前期から後期にかけて、分布がみられなかった北海道や東北地域で出土が確認され始めることである。

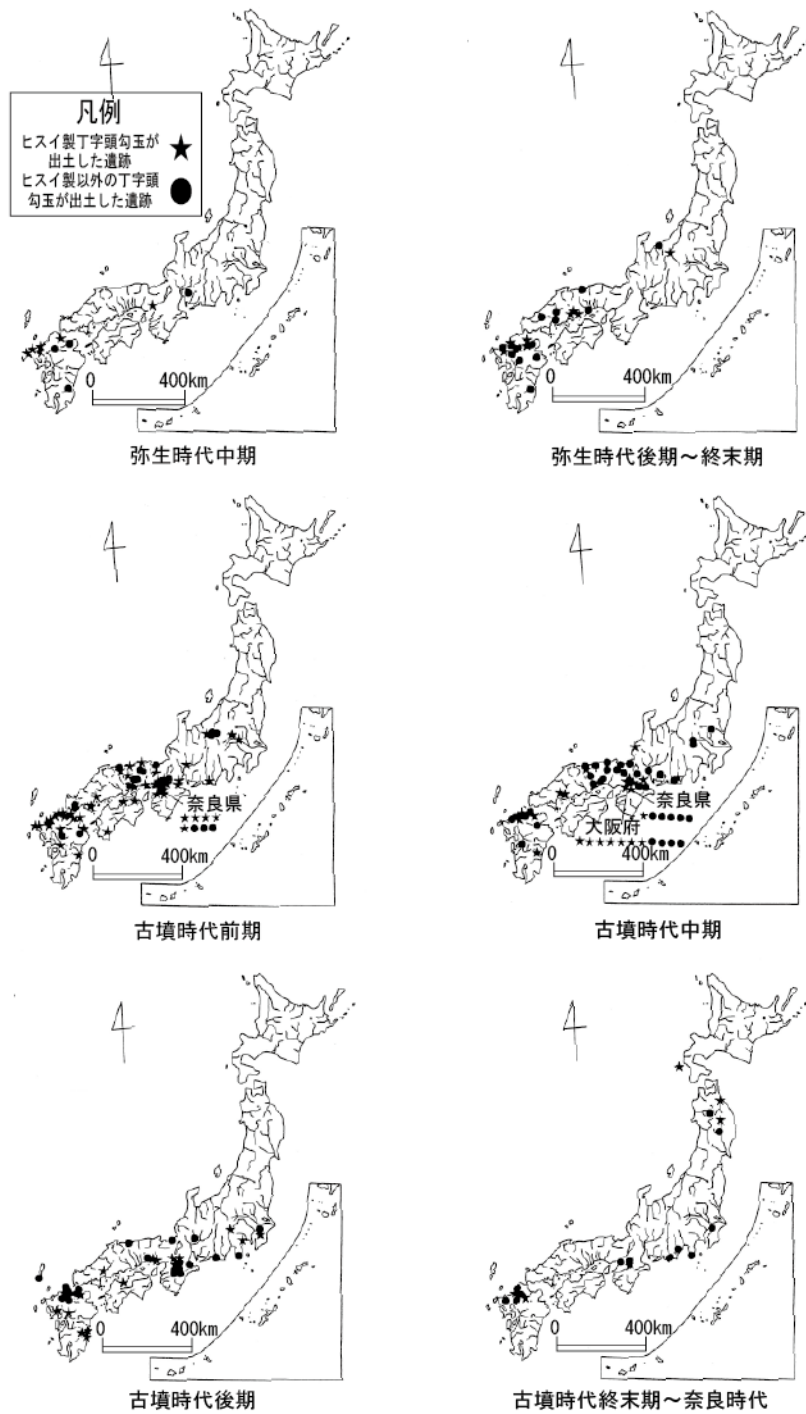
奈良時代は、遺跡数が6遺跡となる。また、分布の様相は終末期と大差はないが、それ以降、沖縄県を除く全ての地域で丁字頭勾玉がほとんどみられなくなる（註47）。

これまで得たことを整理するならば、分布の変遷からは、①弥生時代後期、②古墳時代前期、③古墳時代終末期で、それぞれ大きく変化していることが指摘できる。すなわち、①は北部九州地域から瀬戸内海を介して、広島県・岡山県の海岸沿いの地域に分布圏が広がりはじめの時期であり、②は近畿地域に最も分布が集中する時期、そして、③は近畿地

第12表 県別にみた出土遺跡数の変遷 ※(ヒ；(遺跡数))=ヒスイ製丁字頭勾玉を伴う遺跡数

	北海道	東北地域	関東地域	中部地域	近畿地域	中国地域	四国地域	九州地域	計
弥生時代中期	—	—	—	愛知：1遺跡	兵庫：1遺跡(ヒ；1遺跡)	—	—	福岡：2遺跡(ヒ；2遺跡) 佐賀：2遺跡(ヒ；1遺跡) 長崎：2遺跡(ヒ；2遺跡) 大分：1遺跡 宮崎：1遺跡 8遺跡(5遺跡にヒスイ)	10
弥生時代後期 ～終末期	—	—	—	新潟：1遺跡 長野：1遺跡(ヒ；1遺跡)	1遺跡(1遺跡にヒスイ)	鳥取：1遺跡 島根：1遺跡 岡山：4遺跡(ヒ；3遺跡) 広島：2遺跡 8遺跡(3遺跡にヒスイ)	—	福岡：5遺跡(ヒ；2遺跡) 佐賀：2遺跡(ヒ；1遺跡) 熊本：1遺跡 大分：3遺跡(ヒ；1遺跡) 宮崎：1遺跡 12遺跡(4遺跡にヒスイ)	22
古墳時代前期	—	群馬：1遺跡 (ヒ；1遺跡) 埼玉：1遺跡 埼玉：1遺跡 (ヒ；1遺跡)	群馬：1遺跡 (ヒ；1遺跡) 埼玉：1遺跡 埼玉：1遺跡 (ヒ；1遺跡)	長野：4遺跡(ヒ；1遺跡) 静岡：1遺跡(ヒ；1遺跡) 愛知：1遺跡(ヒ；1遺跡) 三重：2遺跡(ヒ；2遺跡) 8遺跡(5遺跡にヒスイ)	滋賀：2遺跡(ヒ；1遺跡) 京都：5遺跡(ヒ；4遺跡) 大阪：8遺跡(ヒ；8遺跡) 兵庫：6遺跡(ヒ；2遺跡) 奈良：8遺跡(ヒ；5遺跡) 29遺跡(20遺跡にヒスイ)	鳥取：3遺跡(ヒ；2遺跡) 岡山：4遺跡(ヒ；2遺跡) 広島：1遺跡(ヒ；1遺跡) 山口：3遺跡(ヒ；1遺跡) 11遺跡(6遺跡にヒスイ)	香川：2遺跡(ヒ；2遺跡) 高知：1遺跡(ヒ；1遺跡)	福岡：6遺跡(ヒ；6遺跡) 佐賀：2遺跡(ヒ；2遺跡) 長崎：2遺跡(ヒ；1遺跡) 熊本：2遺跡(ヒ；1遺跡) 大分：4遺跡(ヒ；3遺跡) 宮崎：1遺跡(ヒ；1遺跡) 17遺跡(14遺跡にヒスイ)	70
古墳時代中期	—	—	栃木：1遺跡 群馬：2遺跡	福井：2遺跡(ヒ；1遺跡) 岐阜：1遺跡 静岡：2遺跡(ヒ；1遺跡) 愛知：1遺跡 三重：3遺跡(ヒ；1遺跡) 9遺跡(3遺跡にヒスイ)	滋賀：1遺跡 京都：8遺跡(ヒ；3遺跡) 大阪：11遺跡(ヒ；7遺跡) 兵庫：4遺跡(ヒ；1遺跡) 奈良：6遺跡(ヒ；1遺跡) 30遺跡(12遺跡にヒスイ)	鳥取：3遺跡(ヒ；1遺跡) 岡山：3遺跡 広島：2遺跡(ヒ；2遺跡) 8遺跡(3遺跡にヒスイ)	—	福岡：7遺跡(ヒ；6遺跡) 佐賀：1遺跡 熊本：1遺跡 大分：1遺跡 宮崎：1遺跡(ヒ；1遺跡) 11遺跡(7遺跡にヒスイ)	61
古墳時代後期	—	千葉：2遺跡 (ヒ；1遺跡) 神奈川：1遺跡 (ヒ；1遺跡)	千葉：2遺跡 (ヒ；1遺跡) 神奈川：1遺跡 (ヒ；1遺跡) 3遺跡(2遺跡にヒスイ)	福井：1遺跡 山梨：1遺跡(ヒ；1遺跡) 岐阜：1遺跡 静岡：3遺跡(ヒ；1遺跡) 三重：2遺跡(ヒ；1遺跡) 8遺跡(3遺跡にヒスイ)	京都：1遺跡(ヒ；1遺跡) 大阪：1遺跡 兵庫：3遺跡(ヒ；2遺跡) 奈良：6遺跡(ヒ；1遺跡) 11遺跡(4遺跡にヒスイ)	鳥取：1遺跡 広島：1遺跡(ヒ；1遺跡)	愛媛：1遺跡(ヒ；1遺跡)	福岡：8遺跡(ヒ；2遺跡) 佐賀：1遺跡 長崎：2遺跡(ヒ；1遺跡) 熊本：1遺跡(ヒ；1遺跡) 宮崎：3遺跡(ヒ；3遺跡) 15遺跡(7遺跡にヒスイ)	40
古墳時代終末期	北海道：1遺跡 (ヒ；1遺跡) 1遺跡 (1遺跡にヒスイ)	青森：1遺跡(ヒ；1遺跡) 岩手：2遺跡(ヒ；1遺跡) 3遺跡(2遺跡にヒスイ)	千葉：1遺跡 1遺跡	静岡：3遺跡 3遺跡	大阪：1遺跡 奈良：1遺跡(ヒ；1遺跡) 2遺跡(1遺跡にヒスイ)	—	—	福岡：3遺跡(ヒ；1遺跡) 佐賀：3遺跡(ヒ；1遺跡) 6遺跡(2遺跡にヒスイ)	16
奈良時代以降	1遺跡 (1遺跡にヒスイ)	青森：1遺跡(ヒ；1遺跡) 秋田：1遺跡 2遺跡(1遺跡にヒスイ)	—	静岡：1遺跡 1遺跡	奈良：1遺跡(1遺跡にヒスイ)	—	—	福岡：1遺跡 1遺跡	6





第 33 図 出土遺跡の分布とその変遷

域で丁字頭勾玉がほとんどみられなくなり、かわって新しく北海道や東北地域で出土が確認される時期である。

次いで遺跡数からは、古墳時代前期に急激な増加がみられる近畿地域に対して、九州地

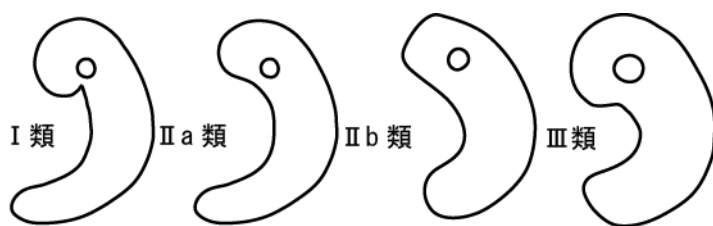
域では全時代を通して、それほど大きな増減はみられない、という点が注目される。すなわち、九州地域では、近畿地域や東日本とは異なり、弥生時代から古墳時代に社会が移り変わるなかでも、継続して丁字頭勾玉が用いられていたと指摘できる。

以上、弥生時代中期から時期を追って丁字頭勾玉の分布および出土遺跡数の変化を述べ、各時期の特徴について検討を加えた。このことによって丁字頭勾玉が時期の変遷によって、いかなる変容をとげているかがより明確になったと考えられる。

### 第3節 材質からみた消長

次に材質に注目して分類を行ない、変遷を明らかにする。尚、分類に関しては、すでに木下氏の研究がある〔木下 1987〕。しかし、木下氏の分類は、材質に特化せず、勾玉全体を形態の面から分類したものである。したがって、材質ごとに分類したものとはいえない。しかし、各材質の出現・展開・消失に時期的な差異が認められることを考慮するならば、材質の相違を意識した上での形態分類が不可欠と考える。

以下、材質ごとの分類を行なうが（第34図）、そこで用いる形態分類のうちⅠ類とⅡ類は、それぞれ木下氏のいう定形勾玉と亜定形勾玉に含まれる〔木下 1987〕。特徴をあげるならば、まず、Ⅰ類は頭部側面の形が丸みを帯び、そこから屈曲した胴部が形成されることにより、頭部と胴部間の正面側に括れができ、それぞれを区別することができるものである。それに対して、Ⅱ類はその区別ができないものである。Ⅲ類は、大賀分類〇型〔大賀 2012〕と重なる部分はあるが、埼玉県熊野神社古墳〔桶川町教育委員会 1967〕の例を含めないなど、対象とする範囲は異なるものである。その特徴は背部の湾曲が強いため、Ⅰ・Ⅱ類とは異なり、胴部が縦に間延びしていないという特徴を有している。また、全長に対して頭部と胴部側面の幅が大きいため、ややずんぐりとした外見的特徴もあげられる。



第34図 Ⅰ類・Ⅱa類・Ⅱb類・Ⅲ類における形態差

第13表は、材質ごとの類型が時間の経過と共にどのような広がり方をみせるのかを示したものである。以下、第13表をもとに説明する。

#### 1) ヒスイ製

ヒスイ製丁字頭勾玉は、形態的にみてⅠ類（第35図の1）からⅢ類の3つに分類することができる。Ⅱ類（第35図の2）のなかには、類例は少ないが次の特徴を有するものもある。すなわち、Ⅱ類には、大阪府河内松岳山古墳〔大阪府教育委員会 1957〕から出土した勾玉のような「丁字頭」に加えて、頭部から尾部にかけて数条の刻み目が施されるものが見られる（第36図の4）。また、Ⅲ類については、他の材質ではみることができないため、ヒスイ製がもつ大きな特徴の一つといえる（第35図の3）。

第13表 各地域における類型ごとの変遷

材質名(ヒはヒスイ/へは碧玉/滑は滑石/コはコハク/ガはガラス/土は土製)/類型:点数

	弥生		古墳				奈良
	中	後・終	前	中	後	終	
北海道						ヒI;1	ヒI;1
東北						ヒI;1 ヒII;1 へII;3	ヒII;1 へII;3
関東			ヒI;2 ヒIII;1 コII;1	滑I;1	ヒII;2		
中部		ヒII;1	ヒI;3 ヒII;1 ヒIII;2	ヒI;1 ヒII;1 ヒIII;2 へII;3 ガII;1	ヒII;1 ヒIII;1 へII;2 ガII;1	へII;1	
近畿	ヒII;1		ヒI;10 ヒII;24 ヒIII;19 滑I;3 滑II;11 コII;2	ヒI;15 ヒII;18 ヒIII;5 へII;8 滑I;1 滑II;6 ガI;1	ヒI;1 ヒII;3 へII;2 滑II;2 ガI;1 ガII;1 コI;1	ヒIII;1 へII;1	ヒIII;1
中国		ヒI;2 ヒII;1 土IIa;4 土IIb;1	ヒI;5 ヒII;2 滑I;11 滑II;33 コI;1	ヒII;4 へII;1 滑I;11 滑II;33 ガI;1 コII;2	滑II;1		
四国			ヒI;2 ヒII;1		ヒIII;1		
九州	ヒI;5 ヒII;1 ガII;1 土IIa;2 土IIb;8	ヒI;4 へII;1 ガI;3 土IIa;3 土IIb;9	ヒI;12 ヒII;4 ヒIII;2 へI;1 土IIb;1	ヒI;9 ヒII;6 ヒIII;2 へII;6 へII;3 滑I;1 滑II;1	ヒI;8 ヒII;2 滑II;1 コII;4 ガII;3	ヒII;2 へII;2	

※神奈川県雨崎洞穴遺跡からは、古墳時代前期末葉から後期初頭のヒIIと滑石IIが各々1点出土しているが、対象となる時間幅が広すぎるため除いている。また、実測図や写真で報告されていないものは入っていない。

これら類型にみられる時期的変遷と地域性について考察を加えるならば、I類・II類は弥生時代中期には九州地域、後期・終末期には九州地域に加え中国地域でも多くみられる。しかし、ヒスイの産出地である北陸地域での出土はみられない。また、九州地域では古墳時代を通じて、I類・II類がある程度まとまって出土している。他地域については、まず古墳時代前期には出土量が最も多い近畿地域や中国地域・四国地域といった西日本での出土が目立つ。しかし、少量ながらも群馬県・埼玉県・長野県・静岡県・三

重県（註48）といった東日本でも出土がみられる。

中期・後期になると、近畿地域では継続して多くの出土事例が確認できる一方で、中国地域・四国地域での出土数は減少していく。東日本は、千葉県・神奈川県・福井県・三重県で出土がみられるがやはり出土量は少ない。終末期に入ると、新しく北海道や東北地域での出土が確認できるようになるが、他は、北部九州地域で少量みられるのみとなる。

I類・II類における出土の割合を述べるならば、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての九州地域では、I類が多くみられる傾向が確認できる。また、古墳時代前期以降の近畿地域では、I類とII類が混在あるいはII類の方が多くみられる傾向を示す。

III類は、古墳時代前期の大阪府と奈良県を中心とした近畿地域で多く出土が確認できる。また、福岡県・宮崎県といった九州でも出土を確認することができるが、I・II類と比べ



第35図 各材質における丁字頭勾玉の種類

- 1 福岡県三雲南小路遺跡 2 福岡県野方久保遺跡 3 大阪府紫金山古墳  
 4 福岡県宗像神社沖津宮祭祀遺跡 5 福岡県古野古墳群 6 群馬県白石稻荷山古墳  
 7 鳥取県長瀬高浜遺跡 8 奈良県後出古墳群 9 兵庫県の山古墳  
 10 福岡県平原遺跡 11 奈良県丸山古墳 12 福岡県高田遺跡 13 熊本県方保田東原遺跡

たどるといことは明らかである。

古墳時代終末期と奈良時代には、奈良県から各々1事例が確認されている。

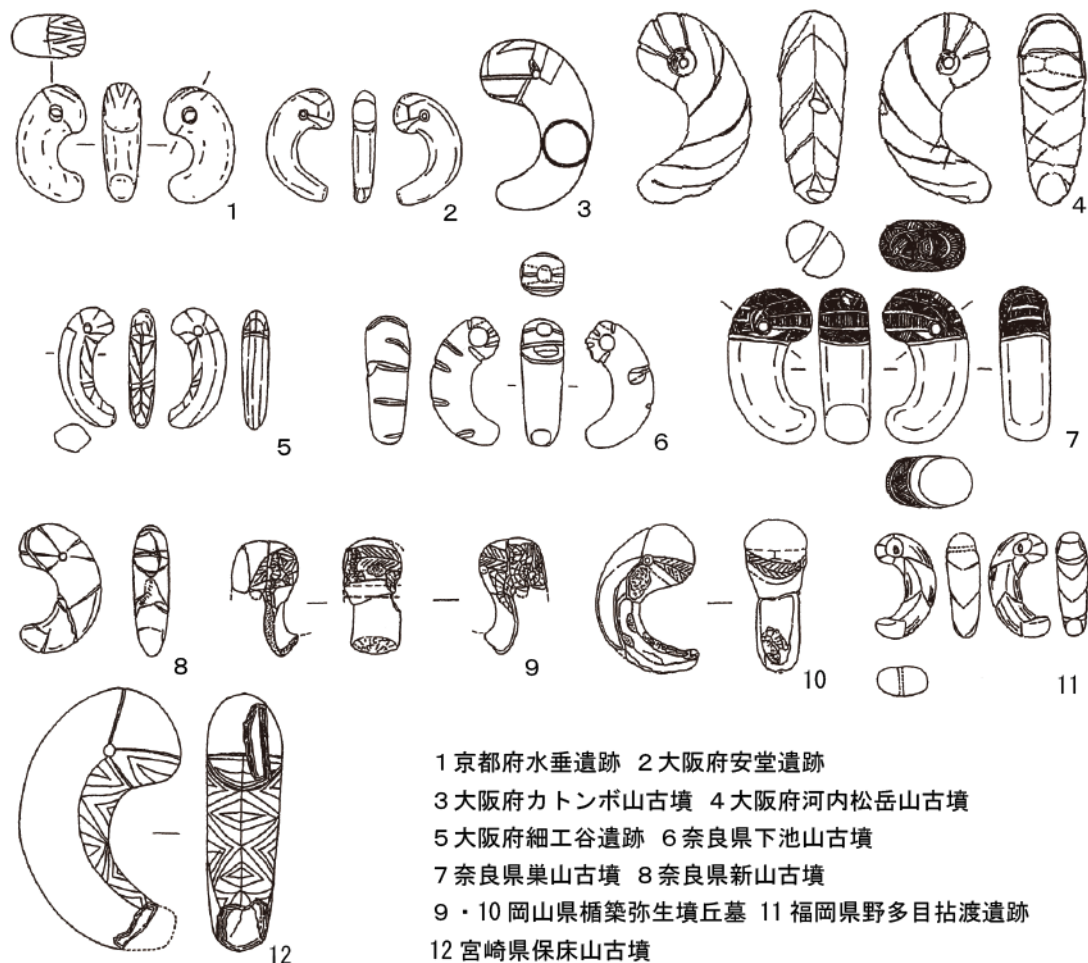
これらから、Ⅲ類は古墳時代前期の近畿で出土点数が大幅に増加するということが指摘できる。その一方で、古墳時代を通して九州からは、Ⅲ類の出土量が明らかに少ない。この点はⅠ類・Ⅱ類とは異なる大きな特徴といえることができる。

また、ヒスイ製丁字頭勾玉における「丁字頭」の多条化については、出土する大半が3本を基準とするという特徴がみられ、時期による変遷はみられない。

## 2) 碧玉製

碧玉製丁字頭勾玉については、その形態を大きくⅠ類(第35図の4)・Ⅱ類(第35図の5)の2つに分けることができる。碧玉製丁字頭は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての出土量は極めて少なく、古墳時代前期末葉以降から徐々に確認されはじめて、奈良時代まで継続的にみられる。また、出土量からみた最盛期は、古墳時代中期である。特に、Ⅰ類は福岡県を中心とした北部九州地域、Ⅱ類は京都府・大阪府・奈良県などの近畿地域

ると数は明らかに少ない。さらに注目されることは、Ⅲ類が前期の段階からすでに東日本で確認できることである。古墳時代中期・後期になると、近畿地域でⅢ類の出土点数が減少していく。他の地域に目をむけると、山梨県や静岡県・愛媛県・福岡県で出土がみられる。しかし、出土量からみると、前期を最盛期とし、それ以降、減少傾向を



1 京都府水垂遺跡 2 大阪府安堂遺跡  
 3 大阪府カトンボ山古墳 4 大阪府河内松岳山古墳  
 5 大阪府細工谷遺跡 6 奈良県下池山古墳  
 7 奈良県巢山古墳 8 奈良県新山古墳  
 9・10 岡山県楯築弥生墳丘墓 11 福岡県野多目拈渡遺跡  
 12 宮崎県保床山古墳

第36図 頭部および体部に文様や刻み目が施されている丁字頭勾玉 ※縮尺不同

で多く出土している。古墳時代後期以降になると、出土点数は減少していき、確認される丁字頭勾玉は全てⅡ類になる。

また、碧玉製丁字頭勾玉における「丁字頭」の多条化について述べるならば、古墳時代中期の福岡県宗像神社沖津宮祭祀遺跡と、古墳時代終末期の岩手県五条丸古墳群から、刻みが4条施されている勾玉が確認されているが、それ以外はすべて刻みが3条のものである。このことから、時期差や地域差による「丁字頭」の多条化は、碧玉製丁字頭勾玉にはみられないと考えられる。

### 3) 滑石製

滑石製丁字頭勾玉は、Ⅰ類（第35図の6）とⅡ類（第35図の7）とに大別することが可能である。これらのうちⅡ類のなかには、「丁字頭」と共に頭部や背部・挟り部、あるいは勾玉全体に直線・屈曲線・曲線を組み合わせた文様を施したものもある（第36図の2・3・5～8・12）（註49）。

I類・II類は、古墳時代前期から中期までの近畿地域・中国地域で多くみられ、群馬県・福岡県でも少量確認できることから、この時期を最盛期と捉えることができる。後期に入ると奈良県・鳥取県・福岡県で出土事例はみられるものの、全体的に数が減少していき、出土はII類のみとなる。そして、終末期に出土が確認できなくなる。

また、滑石製丁字頭勾玉は軟質であるため、文様が容易に施せることから、他の石材を用いた勾玉よりも「丁字頭」の多条化が顕著にみられるが、時期差による変遷はみられない。

#### 4) コハク製

コハク製丁字頭勾玉は、I類（第35図の8）とII類（第35図の9）の2つの形態に分けられる。I類には奈良県後出古墳群〔奈良県立橿原考古学研究所 2003〕の事例などがあるが、大半はII類に含まれる。

時期的変遷は、I・II類ともに弥生時代には確認されず、古墳時代前期に入り群馬県・滋賀県・兵庫県・山口県で確認されるようになる。中期には鳥取県、さらに後期では奈良県・福岡県で出土が確認できる。これらの分布のあらわれ方は、コハク製丁字頭勾玉が時代を通じて同じ地域で継続的に用いられるものではない、ということをものがたっていると思われる。

「丁字頭」の多条化については、そのほとんどが2から3条の刻み目が施されているものであり、ヒスイ製・碧玉製・滑石製の丁字頭勾玉と同様に時期的変遷はみられない。

#### 5) ガラス製

ガラス製丁字頭勾玉は、I類（第35図の10）とII類（第35図の11）の2つに大別できる（註50）。

I類・II類ともに弥生時代中期から終末期にかけては、福岡県でのみ出土が確認される。その後、古墳時代前期に入ると一度みられなくなるが、中期の福井県・滋賀県・岡山県で出土が確認されはじめる。後期は、福井県・奈良県・宮崎県の後期古墳で確認でき、その大半がII類となる。そして、終末期になると、出土がみられなくなる。

「丁字頭」の多条化については、時代を通して3から4条のものが散見されるが、やはり時期差による変化は見いだせない。

#### 6) 土製

土製丁字頭勾玉は全てII類に含まれる。但し、さらに頭部側面の形が丸みを帯びるII類aと、頭頂部が直線的になるII類bに細分することができる（第34図、第35図の12・13）。特異な例として、岡山県楯築弥生墳丘墓では、3条の刻み目とともに綾杉文様が施されたII類のa・bが確認されているが（第36図の9・10）、他に類似する事例は見当たらない。

変遷については、弥生時代中期に大分県・宮崎県、後期・終末期には岡山県・広島県・

福岡県・熊本県でも出土が確認されている。そして、古墳時代初頭の事例を最後にして、出土はみられなくなる（註 51）。また、1つの遺跡で複数の出土が確認される場合、岡山県楯築弥生墳丘墓〔近藤 編 1992〕ではⅡ類 a・b が混在してみられるが、多くの遺跡では同じ類型のものに限って出土する傾向が強い。

土製における「丁字頭」の多条化については、材質的特徴から他の材質のものとは比べると、刻線が多く施される傾向はあるが、時期差による変化は、これまでのさまざまな材質の丁字頭勾玉と同じようにみることができない。

### 7) その他の材質

その他の材質としては、蛇紋岩や緑色凝灰岩を用いたものが多くみられ、栃木県塚山 5 号墳〔宇都宮市教育委員会 1996〕や福岡県柿原 13 号墳〔福岡県教育委員会 1990〕からは、瑪瑙製のものも出土している。それ以外の材質としては、泥岩や透角閃石、頁岩を用いたものもある。これらは、木下分類の垂定形・不定形勾玉を素材にしたものが大半を占める〔木下 1987〕。また、丁字とともに体部全体に屈曲線が施されているものが、福岡県野多目拈渡遺跡〔福岡市教育委員会 1983〕から出土している（第 36 図の 11）（註 52）。

これらの材質における変遷を大まかにみていくと、弥生時代には中部地域・中国地域・九州地域で少量みられ、古墳時代に入ると近畿地域や東日本でも確認されるようになる。出土点数は、弥生時代から古墳時代になるにしたがい増加していく。

以上、材質ごとに丁字頭勾玉の形態やその変遷をみてみた。これによって、時期や地域ごとでいくつかの特徴的な様相が具体的に明らかになった（第 37 図）。また、形態的特質について述べるならば、Ⅰ類は定形勾玉に含まれることはすでに述べた。このタイプは北部九州地域で成立したとする説がある〔木下 1987〕。その説によるならば、定形勾玉は縄文時代以来の勾玉が大陸の影響を受けて成立したものである。また、垂定形勾玉に含まれるⅡ類は、Ⅰ類の影響を受けたものとされる。私も九州地域でⅠ類がいち早くみられること、そしてⅡ類も確認できるなかでⅠ類が主体的に用いられていることから、この説は十分に首肯できると考えている。これに対して、Ⅲ類は近畿地域で成立して他地域へ配布されたと推定できる。

	弥生		古墳			奈良
	中	後～終	前	中	後	
ヒスイⅠ・Ⅱ類						
ヒスイⅢ類						
碧玉Ⅰ・Ⅱ類						
滑石Ⅰ・Ⅱ類						
コハクⅠ・Ⅱ類						
ガラスⅠ・Ⅱ類						
土製Ⅱa・Ⅱb類						

第 37 図 材質ごとの消長

と、そしてⅡ類も確認できるなかでⅠ類が主体的に用いられていることから、この説は十分に首肯できると考えている。これに対して、Ⅲ類は近畿地域で成立して他地域へ配布されたと推定できる。

## 第 4 節 出土状況の特徴と地域性

次に出土状況に注目して、分析を試みることにする。

## 1) 弥生時代

弥生時代にみられる遺構は、甕棺墓や石棺などの墓に関係するものと、竪穴建物や溝跡・流路・谷・段状遺構などの墓以外の遺構があげられる。

これらのうち、まず、墓に関係する遺構についてみていきたい。弥生時代中期には、福岡県三雲南小路遺跡〔福岡県教育委員会 1985〕の甕棺墓からヒスイ製とガラス製の丁字頭勾玉が各々1点ずつと、ガラス製勾玉11点が出土している。この他に、佐賀県宇木汲田遺跡〔六興出版 1982〕の甕棺墓では細形銅剣と共にヒスイ製丁字頭勾玉、長崎県神ノ崎遺跡〔長崎県北松浦郡小値賀町教育委員会 1984〕で検出された石棺からは、板状鉄斧や碧玉製管玉に伴ってヒスイ製のものが確認されている。

弥生時代後期・終末期になると、長野県檀田遺跡〔長野市教育委員会 2005〕で検出された48①区2号円形周溝墓からガラス製小玉とヒスイ製丁字頭勾玉を組み合わせた首飾りが、被葬者に装着された状態で出土している。また、岡山県楯築弥生墳丘墓〔近藤 編 1992〕では埋葬施設にヒスイ製丁字頭勾玉1点、埋葬祭祀に関連する遺構と考えられている円礫堆からは土製丁字頭勾玉2点を確認されている。同県鑄物師谷1号墓〔春成・葛原・小野・中田 1969〕では、ヒスイ製丁字頭勾玉1点と共伴して、爬龍文鏡やヒスイ製勾玉3点が出土している。さらに、福岡県平原1号墓〔前原市教育委員会 2000〕の割竹形木棺の中からは、銅鏡40面やガラス製玉類1900点以上と共にガラス製丁字頭勾玉3点を確認されている。その他では、佐賀県中原遺跡〔佐賀県教育委員会 2012〕の木棺墓から緒締形勾玉と一緒にヒスイ製丁字頭勾玉が1点、大分県川辺遺跡〔大分県教育委員会 1999〕で検出された1号方形周溝墓からは、鏡や鉄剣、ガラス玉に伴ってヒスイ製丁字頭勾玉1点が出土している。同県樋尻道遺跡〔宇佐市教育委員会 1981、宇佐市教育委員会 1986〕では、土坑墓に関連した祭祀遺構から土製丁字頭勾玉8点に加え、丁字が施されていない土製勾玉5点を確認されている。

以上、墓から出土する丁字頭勾玉については、中期の北部九州地域でヒスイ製・ガラス製のものを単独で副葬している例が多いが、複数の丁字頭勾玉を副葬している例もみられる。それが後期・終末期に入ると、北部九州地域・吉備地域を中心とした瀬戸内海の北部沿岸地域において、複数の丁字頭勾玉のみ、あるいは丁字頭勾玉1点と丁字が施されていない複数の勾玉が副葬されていく。

次に墓以外の遺構についてみるならば、弥生時代中期のものとして、京都府奈良谷遺跡〔京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994〕で検出された流路からは、アプライトを材質として用いた丁字頭勾玉1点と共に、流紋岩製の勾玉1点や大型石包丁、磨製石斧などが出土している。この流路は、水田関連遺構の可能性が考えられている。そこから水稲耕作に関わる儀礼行為に丁字頭勾玉が用いられた可能性を示す事例として注目される。また、弥生時代後期・終末期には、新潟県や島根県・福岡県・熊本県・宮崎県の竪穴建物から丁字頭勾玉が確認されている。



以上、墓以外の遺構から出土する丁字頭勾玉については、遺構の種類と材質との間に規則性を見出すことができない。つまり、弥生時代の墓以外の遺構では、それぞれの地域の人びとが、独自に材質を選択していたと思われる。

## 2) 古墳時代以降

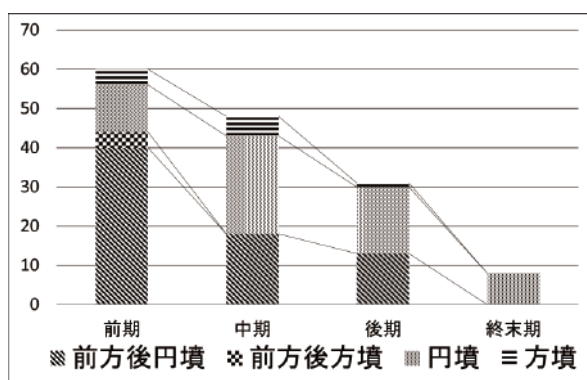
古墳時代における出土状況としては、古墳や方形墓・箱式石棺墓・洞穴内埋葬施設といった墓に関係する遺構と、竪穴建物や祭祀遺構・大溝・配石遺構・掘立柱建物・寺院跡など墓以外の遺構からの出土という2つに大別できる。

そのうちまず、墓に関係する遺構については、さらに①丁字頭勾玉と他の玉類との関係性、②共伴遺物、③墳形の3つの観点から検討を加えることにしたい。まず①については、古墳時代前期から中期にかけての特徴には、1つの埋葬施設に複数の丁字頭勾玉を副葬する例や丁字頭勾玉1点と丁字が施されていない複数の勾玉が共に副葬される例が、近畿地域を中心として全国的に展開することがあげられる。このような用いられ方は、古墳以外の埋葬施設でもみることができる。事例をあげるならば、神奈川県三浦市の雨崎洞穴遺跡〔赤星直忠博士文化財資料館・雨崎洞穴刊行会 2015〕では、古墳時代前期末葉から後期初頭に属する2つの埋葬施設が検出されており、それぞれにヒスイ製・滑石製の丁字頭勾玉が各々1点と丁字が施されていない複数の勾玉が共に確認されている。

古墳時代後期になると、九州地域を除き、複数の丁字頭勾玉を副葬する古墳は減少の傾向をみせる。それに対して、丁字が施されていない勾玉と組み合わせて副葬する古墳は逆に増加する。

古墳時代終末期以降に入ると、西日本において、出土が確認できる古墳は九州地域のみとなり、さらに複数の丁字頭勾玉を副葬することは行なわれなくなる。また、この時期を契機として、北海道・青森県・秋田県では、丁字頭勾玉1点と複数の丁字が施されていない勾玉を組み合わせて副葬する古墳が多くみられるようになる。

次に、②の共伴遺物に関してみるならば、前期古墳では、鏡や石製腕飾類と共に出土する事例が多いことがあげられる。共伴遺物である舶載・国産鏡〔大賀 2012〕や石製腕飾類〔小林 1968〕は、近畿地域に集中して分布がみられる。



第38図 丁字頭勾玉が出土する古墳の墳形

また、中期古墳では、丁字頭勾玉と鏡や甲冑・馬具が共に出土することが多く、また他の古墳ではあまりみられない遺物と共伴する場合もある。具体的には、金製垂飾付耳飾や巴形銅器・筒形銅器などがあげられる。これらは、列島内外の交流によってもたらされた品々と考えられている。後期古墳では、中期と同様に鏡や甲冑類・馬具類、終末期古墳では馬具

第 14 表 近畿地域・九州地域における古墳時代以降の出土遺構

	古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期	古墳時代終末期	奈良時代
近畿	古墳;31、大溝;1、 土坑状遺構;1	古墳;29、大溝;1、 土坑状遺構;1	古墳;10	掘立柱建物;1、 寺院;1	寺院;1
九州	古墳;13、方形周溝墓;1、 木棺墓;1、竪穴住居;2	古墳;9、方形墓;1、 祭祀遺構;2	古墳;12、横穴墓;1、 箱式石棺;1、竪穴住居;2	古墳;6	古墳;1

※遺構の種類;数

類や玉類が共伴遺物としてみられる。

③の古墳の墳形について述べるならば、全国的にみて前期では前方後円墳での副葬が大半を占めていたのに対して、中期になると円墳に副葬される割合が高くなる（第 38 図）。

以上、墓から出土する丁字頭勾玉については、古墳時代前期の近畿地域で出土遺跡数が急激に増加していき、そこで行なわれていた複数の丁字頭勾玉を副葬する例、あるいは丁字頭勾玉 1 点と丁字が施されていない勾玉を複数個合わせて副葬品とする例が、関東地域から九州地域まで共通性をもって確認できるようになる。また、共伴遺物には近畿地域の特色が強くみられる場合が多く、その様相は後期古墳まで継続してみられる。

古墳時代中期に入ると、出土する古墳の大勢が前方後円墳から円墳へ変化する。古墳時代後期には、九州地域を除き、複数の丁字頭勾玉を副葬する事例は減少していく。そして、古墳時代終末期・奈良時代に入ると、丁字頭勾玉の副葬が、近畿地域ではみられなくなるのに対して、九州地域では継続して確認できる（第 14 表）。また、新しく蝦夷地域（註 53）の古墳に丁字頭勾玉が副葬され始める（註 54）。

次に、墓以外の遺構について、出土場所に注目して考察を加える。まず、長野県や鳥取県では竪穴建物、大阪府では掘立柱建物から丁字頭勾玉が確認されている。また、静岡県では水に関する配石遺構、福岡県では祭祀遺構での出土が確認されている。他に古墳時代終末期の事例では、奈良県飛鳥寺〔奈良国立文化財研究所 1958〕から銀製空玉・ガラス玉・金環・杏葉形金具などと共にヒスイ製丁字頭勾玉 1 点の出土が確認されており、丁字頭勾玉が舎利埋納物の 1 つであったことが推測されている（註 55）。

また、奈良時代の事例としては、同県元興寺〔稻森 1930〕の塔跡心礎周辺からガラス玉・水晶玉・純金延板などに伴ってヒスイ製丁字頭勾玉 1 点と、丁字が施されていない勾玉を含む多くの玉類が確認されている（註 56）。

以上、墓以外の遺構から出土する丁字頭勾玉については、古墳時代終末期に入ると寺院で確認され始め、奈良時代以降、全国的に丁字頭勾玉はほとんどみられなくなる。

## 第 5 節 丁字頭勾玉の展開過程

これまで、丁字頭勾玉の展開の指標として、分布と遺跡数の変遷、各材質の特徴、出土状況に着目して、その様相を明らかにしてきた。これらをふまえ、丁字頭勾玉の展開について考察を試みることにする。

まず、弥生時代に関していうならば、丁字頭勾玉が出現する中期の北部九州地域を中心に、ヒスイ製・ガラス製のものが単独で副葬されていく。後期・終末期になると、北部九州地域・吉備地域に分布が集中していき、両地域では副葬されるヒスイ製丁字頭勾玉に共通性をみることができる。それは、複数の丁字頭勾玉が副葬されているか、もしくは丁字頭勾玉1点と丁字のない複数の勾玉が副葬されているかのいずれかである。このことから、北部九州地域と吉備地域との間に瀬戸内海を媒介とした交流を想定することができよう。そう考えて大過ないならば、両地域間にはヒスイ製丁字頭勾玉の副葬について、共通の認識があったことが考えられる。

次に、古墳時代の丁字頭勾玉についてみていくことにする。まず、前期の出土遺跡が、瀬戸内海の海岸線沿いに集中して分布すること、さらに、そのなかでも吉備地域と讃岐地域で出土事例が多くみられることをふまえるならば、瀬戸内海を媒介とした北部九州地域と近畿地域間の交流に加え、備讃瀬戸を舞台とした地域間交流も想定することができよう(第33図、第12表)。

また、前節をふまえて述べるならば、古墳時代前期、中期、終末期に様相が変化していることが指摘できる。そこで、これらの時期に注目して考察を加えていくことにする。まず、古墳時代前期の近畿地域における出土量の急激な増加について考えるならば、すでに大賀氏も指摘しているように、ヤマト政権との関わりがみてとれる[大賀 2012]。しかし、さらに、ふみこむならば、社会背景の変化が考えられるであろう。

このことについて断定的に述べることは容易ではないが、1つの仮説を述べるならば、次の2つのことがいえるのではなかろうか。すなわち、①弥生時代後期・終末期の北部九州地域や吉備地域でみられた丁字頭勾玉を用いた風習をヤマト政権が採り入れ、さらに、②各地の首長層が丁字頭勾玉を副葬品とすることに規範を課し、丁字頭勾玉を副葬することでヤマト政権下に属することの象徴としたことが想定される。とくに②に関して留意すべきことは、ヤマト政権から丁字頭勾玉それ自体を各地域へ配布されたというのではなく、あくまでも丁字頭勾玉を副葬する際の規範をヤマト政権が各地域へ課したのではないかということである。つまり、丁字頭勾玉自体は、各地域がそれぞれ生産地から入手していたことが考えられる。

これら想定した①・②についての根拠をあげるならば、まず、①については、前期の近畿地域では、弥生時代後期・終末期の北部九州地域や吉備地域でみられたヒスイⅠ類・Ⅱ類について量的に確認することができ(第11表、第13表)、さらに副葬方法に関しても共通点がみられる。②については、まず、前期の近畿地域で成立するヒスイⅢ類は、ヤマト政権から他の地域への配布が考えられる。しかし、他のものについては、土製を除くと第13表からわかるように、すべてをヤマト政権から配布されたものとは考えにくい。

このように考えて大過ないとするならば、次に北部九州地域・吉備地域の習俗をなぜヤマト政権が採り入れ、その後、どうして規範として各地域に課したのかということが問題となつてこよう。このことに関しては、丁字頭勾玉のもつ宗教的性格が密接に関わってい

と思われる。すでに研究史で述べたが、弥生時代にみられる「丁字頭」の性格については、緊縛・結びの呪術性が込められていたといわれる〔木下 2000〕。

また、古墳時代の勾玉については、多数の研究者らが呪的な性格を想定している。例えば、後藤守一氏は、京都府久津川車塚古墳からヒスイ製丁字頭勾玉1点と、丁字が施されていないヒスイ製勾玉1点・滑石製勾玉4087点以上が確認された事例から、勾玉に被葬者の服飾品以外の性格を指摘し、そこに靈威があることを推測しているし〔後藤 1940〕、辰巳和弘氏も勾玉を「たまふり」の呪物とみなしている〔辰巳 2006〕。

これらから、弥生・古墳時代の丁字頭勾玉には、魂との関わりや呪術といった宗教的性格が考えられる。また、弥生時代では宗教的性格を帯びた共通のものを用いて儀礼を行なうこと、古墳時代では三角縁神獸鏡などの権力を示すものを他地域に分配することで社会的集団の結束の強化を図っていた可能性が指摘されている〔石村 2008、福永 2005〕。これらのことから、ヤマト政権は宗教的性格を有する丁字頭勾玉を用いることで、弥生時代から各地域に浸透していた習俗を利用し、他地域との円滑な繋がりを図ったと考えられる。さらに、他地域が独自に丁字頭勾玉を用いることを規制することで、地域間の繋がりを妨げるねらいがあったと思われる。

次に古墳時代中期に丁字頭勾玉の副葬がみられる古墳の多くが、前方後円墳から円墳へと推移することについて考えてみたい。この現象は結論的にいうならば、全国的にみられる古墳への副葬品の変化と関係しているといえる。すなわち、前期から中期になると、古墳への副葬品が呪的・宗教的性格のものから武器・武具などの軍事的性格を帯びたものへと移り変わっていく。さらに、都出比呂志氏の前方後円墳体制による政治的秩序をふまえるならば〔都出 1991〕、前期に有力者層（前方後円墳）の間で、宗教性をもつものを副葬品として採用するようになり、その1つに丁字頭勾玉も含まれていた。中期になると、軍事的性格を有する武器・武具類が副葬されるようになり、前方後円墳にいち早く採り入れられていく。このことはとりもなおさず、ヤマト政権によって主導的になされていた副葬する際の規範が変化したと考えることもできる。その結果、前期には用いることができなかった在地の首長層を含む人びと（円墳）も丁字頭勾玉を副葬することができるようになったと思われる。すなわち、丁字頭勾玉の性格がこの時期を境に変化したというのではなく、丁字頭勾玉をとりまく当時の社会背景、つまり、ヤマト政権下に属することを示すための規範が宗教性から軍事性へと移ったことが変化の大きな要因と考えられる。

そして、古墳時代終末期になると、近畿地域では丁字頭勾玉は副葬されなくなるのに対して、九州地域では継続的に確認できる（第14表）。さらに、蝦夷地域でも副葬がみられるようになる。これらをもとに、丁字頭勾玉を副葬する意味の変化について考えてみたい。この時期に九州地域の遺跡数が最も多くなることもふまえて述べるならば（第33図、第12表）、やはりヤマト政権に属することの象徴という性格を古墳時代終末期の丁字頭勾玉に想定することは難しい。さらに、副葬品以外の丁字頭勾玉についても、古墳時代終末期から奈良時代にかけて、地鎮に関わる道具や舍利埋納具の1つとして用いられるようにな

ることから、性格の変化が指摘できる。そして、本来的には古墳時代終末期と奈良時代との様相の差というものを明確にしたうえで、終焉期の設定を行なうべきであろう。しかし、ここでは東北地域の終末期古墳の年代が奈良時代までといったように時間幅をもって捉えられていることから、暫定的に古墳時代終末期から奈良時代までを丁字頭勾玉の終焉期と評価しておきたい。

## 第6節 展開過程からみた地域性

以上、丁字頭勾玉の展開過程の把握を試みてきた。そのなかで特に古墳時代において、いくつかの特徴的な地域を確認することができる。ここでは地域に視点を移して考察を加えることにしたい。

古墳時代前期から後期の古墳における丁字頭勾玉が、近畿地域を中心に分布することはすでに述べた（第14表）。しかし、例外ともいえる地域を2例指摘することができる。

1つ目の地域は、分布の空白地域である出雲地域である。出雲地域では前期の前方後円墳は4基確認されている〔松本 2015〕。そのうち、勾玉が出土した出雲市の大寺1号墳は、前期後葉に築造された前方後円墳であり、後円部埋葬施設から出土した遺物から、ヤマト政権との関わりがいわれている〔仁木 2005〕。出土した勾玉は碧玉製のもので、丁字は施されていない。

管見では、出雲地域における、古墳時代前期から終末期にかけてみられる古墳や横穴墓からは、合計188点の勾玉が確認されているが〔瀧音 2012〕、これらのいずれにも丁字は施されていない。この現象は、他地域におけるヒスイ製・碧玉製丁字頭勾玉の展開過程とは異なっている。出雲地域では、前期から徐々に花仙山産の碧玉を用いた勾玉生産がみられ、中期に最盛期を迎える〔深田 2004〕。つまり、勾玉の生産地であり消費地でもある出雲地域から、丁字頭勾玉の出土が確認されないということは、ヤマト政権によって主導的に行なわれた副葬のさいの規範の共有が、全国的なものではなかったといえる。このことは、見方を変えると、出雲地域の自立性と読みとることもできる。

2つ目の地域は、北部九州地域である。この地域は、弥生時代中期から古墳時代終末期まで継続的に丁字頭勾玉を副葬している。また、出土が確認される後期古墳の墳形をみると、近畿地域では円墳が主流なのに対して、北部九州地域では前方後円墳が多い（第15表）。さらには、近畿地域で丁字頭勾玉の副葬が確認できなくなる古墳時代終末期においても、当該地域では副葬がみられる（第14表）。これらから、古墳時代の北部九州地域

第15表 出土が確認される近畿地域・北部九州地域の後期古墳

近畿	前方後円墳:3、円墳:5、方墳:1
北部九州	前方後円墳:5、円墳:2

※墳形:基数

は、ヤマト政権による丁字頭勾玉の規範を受容しつつも、その一方で弥生時代以来の習俗も残していると考えられる。ここから、丁字頭勾玉における規範の共有を行な

わなかった出雲地域とは異なる意味での自立性を読みとることができる。

## 第7節 小結

本章では、丁字頭勾玉について従来、行なわれてこなかった長期的かつ複眼的な見方を軸にして、展開過程の把握を行ない、そこからみえた地域性についても考察を試みた。

その結果、まず古墳時代前期、中期、終末期の3つの時期が画期となることを明らかにした。さらに、古墳時代前期には、丁字頭勾玉の分布や材質・出土状況で大きな変化がみられることを指摘した。その理由は、弥生時代後期・終末期の段階において北部九州地域や吉備地域でみられた丁字頭勾玉を副葬するといった風習を、古墳時代前期に入りヤマト政権が採り入れたためと考えられる。その後、ヤマト政権は各地の首長層が丁字頭勾玉を副葬することに規範を課し、それを守ることがヤマト政権に属することの象徴とみなしたのではと想定した。これは、従来の見解である大賀氏によるヒスイ製丁字頭勾玉がヤマト政権主導のもとで生産されて配布されたものという一元的な理解に対して新しい考えを提示した。

さらに、ヤマト政権が宗教的性格をもつ丁字頭勾玉を用いることで、各地にみられた習俗を利用し、他地域との関係を強めようとした可能性を指摘し、規制した背景にヤマト政権が他地域同士の連関を妨げようとしたことをあげた。

次いで、中期に入ると、出土が確認される古墳の多くが、前方後円墳から円墳へと変化していき、この様相は後期まで続く。これは、ヤマト政権に属することを表す規範の変化が大きな要因と考えられる。その結果、より幅広い階層が丁字頭勾玉を副葬できるようになったことを指摘した。

古墳時代終末期になると、丁字頭勾玉の副葬が近畿地域では衰退するにもかかわらず、九州地域では継続的にみられ（第14表）、蝦夷地域の古墳でも確認され始める。この現象から、丁字頭勾玉の性格の変化を考えた。加えて、墓以外の遺構から出土するものについても性格が変化することを指摘した。そして、東北地域の終末期古墳の年代幅に関する資料的制約を考慮して、暫定的に古墳時代終末期から奈良時代までを弥生時代からみられる丁字頭勾玉の終焉期と位置づけた。

また、古墳時代前期から後期にかけて、近畿地域を中心に丁字頭勾玉が副葬されるなかで、出雲地域・北部九州地域では異なった様相が確認できるとした。すなわち、ヤマト政権が列島内に向けて、丁字頭勾玉の副葬に関する規範の共有を課していたとするならば、それを行なわなかった出雲地域と、規範を受容しつつも弥生時代以来の習俗も残している北部九州地域の2つの地域には、各々の自立性をよみとれると考えた。

本章では、弥生時代中期から奈良時代という長い時間のなかで、古代の人びとがどのような背景のもと、丁字頭勾玉を用い続けていたのかを浮き彫りにしようとした。そして、丁字頭勾玉の展開過程にみられる地域性の抽出も行なった。こうした長期間を対象とした

考察は従来なされてこなかったが、ものの変遷を通して社会の変容を明らかにするには欠くことのできない重要な1つの方法論と考えられる。

## 註

註 42 『石之長者 木内石亭全集』巻1の中に収められている「曲玉問答」の書き始めには、「曲玉問答は天明三年六月の奥書により其著作年代を明にす」〔木内 1936 ; 21 頁〕とある。

註 43 「丁字透かし」は、扇の親骨の透かしの一種である。

註 44 O型に含まれる丁字頭勾玉の特徴には、近畿地域周辺に多く、原石産出地周辺にはみられないことや、石錐による穿孔が行なわれること、法量の変異が大きく、形状も不安定になること、良質のヒスイを選択的に利用することを除けば、丁字頭を刻むことのみを唯一の規範としたことなどがあげられる〔大賀 2012〕。

註 45 本集成では、複数の溝が孔へ向かって放射状に刻まれている勾玉を対象に行なった。孔に向かって、あるいは達しているが、1条の刻み目しか施されていない勾玉や、頭部正面のみに刻み目が施され、孔のある側面まではその刻み目が達していない勾玉などは、集成の対象から除いている。事例を1つあげるならば、宮城県入の沢遺跡の堅穴建物（S I 13）からコハク製の定形勾玉が出土している〔宮城県教育委員会・国土交通省東北地方整備局 2016〕。時代は古墳時代前期である。この勾玉の頭部には2条の線刻が確認できる。1条は正面にのみに、他の1条は側面まで線刻がみられるものの、孔には達していない。このことをふまえて、本集成では入の沢遺跡の事例を除いている。

註 46 明確な遺構に伴い、且つ時期が判明しているものをとりあげている。また、遺構の時期が2つの時期にわたっている場合は、それぞれの時期に点数を加算している。

註 47 中世以降の状況を述べるならば、沖縄県で4点確認されているが、これらは全て明確な遺構に伴っていない。

註 48 地理的な条件を考慮して、三重県は東海地域に含めることとし、大きな地域区分では中部地域に入れておくことにする。

註 49 丁字と文様が組合わされる勾玉については、まず古墳時代前期の近畿地域で確認されるようになり、中期には大坂府に集中してみられる。後期になると、近畿地域での出土が確認されなくなる一方で、福岡県や宮崎県で出土する傾向がみられる。また、静岡県東坂古墳〔吉原市教育委員会 1958〕や京都府水垂遺跡〔京都市埋蔵文化財研究所 1998〕からは（第36図の1）、曲線や屈曲線のみ施されている勾玉が確認されている。これらをふまえると、まず、近畿地域の人びとが、勾玉に文様を施し始めたことが想定できる。また、丁字が施されていない勾玉にも文様が確認できることから、丁字と共に用いることができ、且つ文様のみでも成立する意味が込められていたことが推測できる。

註 50 千葉県神明社裏遺跡〔千葉県教育振興財団 ほか 2008〕の出土例は、古墳時代後期・終末期のものと考えられているが、他に類似する例がみられないため、分類対象からは除いている。

- 註 51 埼玉県東松山市にある杉の木遺跡からは、頭部に細かな刻み目が施されている土製勾玉が出土している〔東松山市教育委員会 2003〕。しかし、杉の木遺跡から出土したものは、勾玉頭部正面の一部分に細かい線刻が施されており、古墳時代の丁字頭勾玉でよくみられる、頭部の面積に対して比較的均等に且つ、放射状に線刻を施すものとは様相を異にしている。そのため、本章においては、杉の木遺跡から出土したものを丁字頭勾玉には含んでいない。
- 註 52 材質は明確にされていないが、報告書では碧玉に類似するものと表記されている〔福岡市教育委員会 1983〕。
- 註 53 本章では、古墳時代終末期から奈良時代の東北地域を蝦夷地域と呼ぶことにしたい。
- 註 54 青森県丹後平 16 号墳〔八戸市教育委員会 1991〕では、碧玉製丁字頭勾玉 1 点と丁字が施されていないヒスイ製勾玉 2 点、碧玉製勾玉 2 点、瑪瑙製勾玉 31 点、水晶製勾玉 1 点、21 号墳ではヒスイ製丁字頭勾玉 1 点とヒスイ製勾玉 2 点、碧玉製勾玉 3 点、瑪瑙製勾玉 42 点、23 号墳では碧玉製丁字頭勾玉 1 点とヒスイ製勾玉 2 点、碧玉製勾玉 1 点、瑪瑙製勾玉 29 点、そして、岩手県藤沢狄森 5 号墳〔岩手県紫波郡矢巾町教育委員会 1986〕からは、ヒスイ製丁字頭勾玉 1 点と共にヒスイ製勾玉 5 点、碧玉製勾玉 2 点、瑪瑙製勾玉 48 点、水晶製勾玉 2 点、滑石製勾玉 1 点、ガラス製勾玉 1 点が出土している。
- 註 55 奈良県飛鳥寺からは、推古天皇元年正月十五日埋納物として、勾玉（ヒスイ 1 点、瑪瑙 1 点、ガラス 1 点）や管玉、銀製空玉、トンボ玉、ガラス玉、金環、金銅製打出金具、杏葉形金具、金銅鈴、刀子などと共に確認されている。
- 註 56 奈良県元興寺では、勾玉（ヒスイ 1 点、碧玉 3 点、瑪瑙 5 点）や水晶玉、ガラス玉、金小塊、純金延板、金箔及文字附着などと共に確認されている。



## 第4章 背合わせ勾玉についての一考察

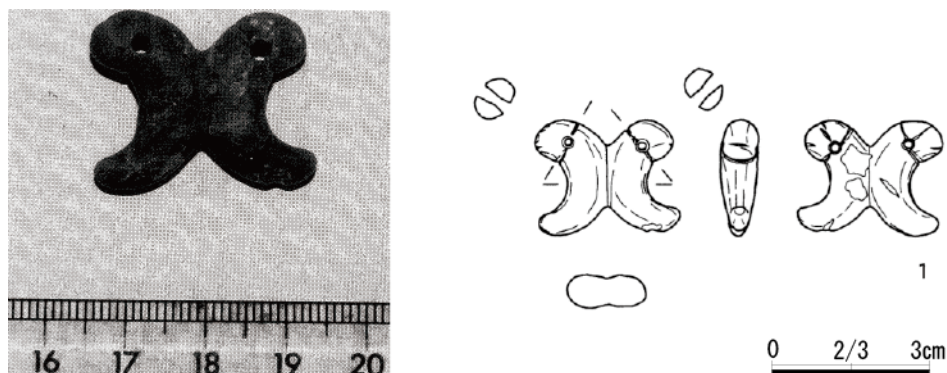
### 第1節 名称設定

米子市博労町遺跡において、平成19年から本調査をおこなった米子市教育委員会は、翌年の平成20年、勾玉を2個背中合わせにしたような形態の遺物を確認した。その情報は、「背中合わせの勾玉出土」や「左右対称は国内初？」といったタイトルで、山陰中央新報(註57)によって大きく取り上げられた。

この記事の中で、発掘担当者や研究者(註58)などが、出土した背中合わせの勾玉に対して、事実確認を含むいくつかのことを発言している。それは、大まかにまとめると以下のようになる。①遺物は、4世紀代いわゆる古墳時代前期の遺物であること。②関東地域によく出土が確認されている祭祀系遺物である立花との関係性。③勾玉の意味を魂と関連付け、出土した背中合わせの勾玉が魂の結びつきの強化という働きをもっていたと推定することができる。これら3点が、発表された段階において考えられていたことである。

筆者も、初めてこの遺物と対面したとき、小さい遺物ながらも丁寧に作り上げられ、確実に2個の勾玉を結びつける、あるいは対にするといった意図のもとに作られた遺物であるのではないか、といったことを感じとった(第39図)。確かに、関東地域では、古くから茨城県に在る鏡塚古墳[大場・佐野 1956]や同県浮島で確認された祭祀遺跡[亀井 1958]から、類似した遺物が確認されていることはよく知られている。しかし、これらと博労町遺跡から出土したものとは、受ける印象が異なると思われる。それは、博労町遺跡からの出土遺物の方が、より勾玉を写實的に捉えていることに起因するかもしれない。

今回の博労町遺跡での発見によって、2個の勾玉を背合わせ状にした遺物が、当時の人々の中で用いられていたことは確実になった。しかし、この遺物における使用場面や使用法さらには、遺物に対する当時の人々の意識についても、いまだ明らかにされていないのが現状である。



第39図 鳥取県博労町遺跡出土の背合わせ勾玉

そこで、本研究にはいる前に2個の勾玉を背中合わせにしたような形の遺物に対しての名称設定をおこないたい。まず、どのような名称が、当遺物において用いられてきたのかについてまとめておくことにする。最初に発掘調査報告書を見るならば、小さな名称の差こそあれ、おおかた「異形石製品」という名称が使用されている。

次に、研究者の間で用いられた名称を見ていきたい。研究者の中にも、異形石製品と称している場合もあるが、個別に名称設定を行っている場合もみられる。梅原末治氏は、ガラス製の勾玉が2個背中合わせ状になっているものに対して、「背合せ双形玻璃勾玉」という名称を与えており〔梅原 1971 b〕、大場磐雄氏は、子持勾玉の発生を考えていく中で2個の勾玉が背合わせになっているものの存在を取り上げ、それを「勾玉接続品」と呼んでいる〔大場 1962〕。そのほかにも、立花と形態的特徴が類似することから、立花状石製品や立花形石製品などと呼ばれる場合もある。

このようにみていくと、梅原氏と大場氏の設定した名称の根底にあるものは、あくまでも、この奇妙な形をしている遺物が、勾玉の一種であるという考えの上で成り立っていることが読み取れる。つまり、勾玉と勾玉の組み合わせによって、この遺物が構成されており、持っていたであろう歴史的な性格の根底には、当時における勾玉の意味合いが厳然と存在しているということになる。

名称設定にもどると、まず、2個の勾玉を背中合わせ状にするという表現をすでに何回も用いてしまっているが、そもそも「背」などの部分名称から考えていく必要がある。これに関しては、今回取り扱う遺物を筆者自身、勾玉の範疇で捉えているため、勾玉の部分名称と重なる形で当遺物の名称も設定していこうと考えている。勾玉の部分名称については、坪井正五郎氏や藤田富士夫氏によって、明快に図案化、説明されているのでそれを参照されたい〔坪井 1908、藤田 1989〕。

さらに、当遺物において、勾玉と勾玉を接続した遺物であることが、第一義の特徴であることは先に述べた。この観点からすれば、大場氏が設定した勾玉接続品でもよいのだが、それでは、ただ単に勾玉と勾玉とが接続しているもの全般を総称した名称になってしまう。それを避けるため、接続部位に注目し、もう一段階踏み込んだ名称の設定をしておく必要がある。なぜなら、奈良県宇陀郡榛原町に在る澤ノ坊2号墳から、ヒスイ製勾玉が2つ上下の向きを同じくして重なるように接続している遺物が、出土しているからである(註59)。すなわち、2個の勾玉が接続している遺物には、形態差が生じており、また、包含していたであろう歴史的意味合いについても、当然違いが見られる可能性がある。そのため、なるべく名称を細かく分けて設定しておく必要があると考える。

これらを総合的にふまえた上で、米子市博労町遺跡から出土したような、2個の勾玉を背中合わせ状に接続した遺物について、「背合わせ勾玉」と呼び、これ以降この用語を用いて論を進めていくことにする。

そのほかの名称に関しては、2個の勾玉を接続したものの総称として「合わせ勾玉」という名称を設定する。また、奈良県宇陀郡榛原町の澤ノ坊2号墳から出土したもの、すな

わち、側面に2個の勾玉が重なるように接続されているものを「横合わせ勾玉」と呼ぶことにする。

## 第2節 先行研究の整理

背合わせ勾玉はもちろんのこと、合わせ勾玉についてでさえ、先行研究というもの自体ほぼ皆無の状況である。しかし、まったくないわけではない。また、別の遺物に関する研究において、間接的な事例としてとりあげられている場合も見受けられる。今回は、それらのことをまとめて、先行研究として取り扱うことにする。

まず、考古学の研究において初めて、背合わせ勾玉を紹介したのは、小林行雄氏である〔小林 1952〕。小林氏は、福岡県銚子塚古墳の後円部石室内から、出土した2個の硬玉製勾玉のうち1個の形態が、通常我々が想像する勾玉の形とは遠くかけ離れた、珍しい形をしていることを報告している。出土した異形の勾玉は、長さ1.77cmの緑色半透明の硬玉製であった。形態的特徴としては、勾玉の頭部と尾部が連結した形状に形作られているため、平面形は、ドーナツのような形をしている。また、一般的な勾玉にみられる、頭部への穿孔は、両面からおこなってはいるが未貫のままになっている。

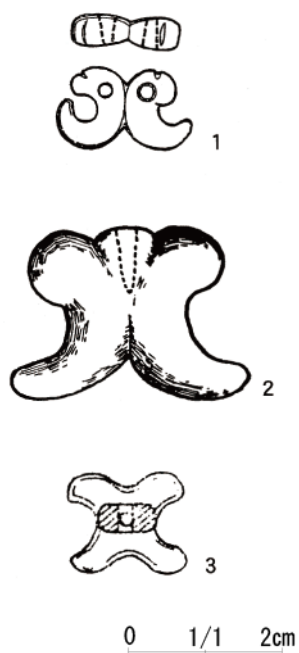
このような、異形の勾玉について考えるさい、小林氏は、個人や博物館が所蔵している従来の異形勾玉などを掻き集め、計4点の異形勾玉の実測図を参考資料としてあげている。そのうちの1点が、今回とりあげようとしている背合わせ勾玉である（第40図の1）。この遺物は、佐伯理一郎氏が所蔵しており、材質は硬玉製で、大和國葛下郡傳丘付近から出土したといわれているものである。掲載されている実測図を

みてみると、両方の勾玉の頭部に刻み目を確認することができ、2個の丁字頭の勾玉を背合わせ状に接続していることが読み取れる。

また、穿孔については、実測図から判断すると、左右両方の勾玉とも片面穿孔と考えられる。この小林氏の紹介した4点の異形勾玉の実測図および情報が、それ以降の梅原末治氏の異形勾玉や大場磐雄氏の子持勾玉に関する研究で引用されていく。このことから考えて、この小林氏の業績は、まさに異形石製品研究における先駆的なものであったといえよう。

次に、亀井正道氏が、茨城県浮島で背合わせ勾玉を表採している〔亀井 1958〕。亀井氏は、表採した背合わせ勾玉に関して、先に確認されている常陸鏡塚古墳出土の遺物との類似性を指摘している。また、遺物の中央に穿たれた孔に紐を通して使用したことも推定している。

大場磐雄氏は、子持勾玉の系譜を明らかにしていく過程で、



第40図 先行研究における背合わせ勾玉と立花

小林行雄氏が紹介した背合わせ勾玉についても、相互の関係性が検討できるような時間的座標軸および系譜上にのせる試みをおこなっている〔大場 1962〕。大場氏が、想定した子持勾玉における系譜の構成要素として欠かせないことは、勾玉と勾玉が付着していること、もしくは勾玉を2個以上用いていることである。この結果、想定された系譜は、玉杖—勾玉接続品—立花形品という変遷過程である。そして、同じく玉杖から勾玉接続品へと移行するのに並列して子持勾玉が派生するとしている。ここにみられる系譜上の勾玉接続品とは、常陸鏡塚古墳〔大場・佐野 1956〕（註60）出土のもの（第40図の2）や、常陸浮島の祭祀遺跡〔亀井 1958〕から出土したもの（第40図の3）を指している。

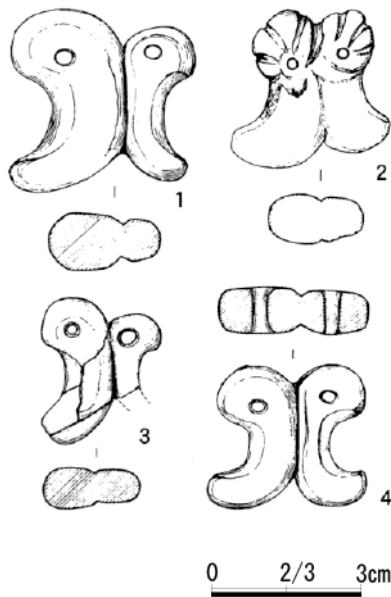
そして、伝丘出土の背合わせ勾玉（第40図の1）については、おおかた玉杖との時間の同時性を述べている。また、玉杖から派生はしているものの、立花形品や子持勾玉への時間的変遷からは、逸脱するよう系譜図に配置されている。しかし、どのような解釈のもとに、その様な配置を示したのかについては詳しく述べられてはいない。おそらく、伝来している背合わせ勾玉の材質が硬玉であったため、後の子持勾玉や立花などの滑石製品への系譜的変遷図には載せることができなかつたと思われる。

さらに、子持勾玉と背合わせ勾玉の歴史的 성격の違いについても言及している。大場氏は、玉に込められた呪力の存在については、両者とも共通しているとした上で、子持勾玉については、「強い信仰観念に結びついて広く永く流布使用されたもの」〔大場 1962 ; 105 頁〕とし、背合わせ勾玉のように関東地域に分布が偏っているものとは、歴史的意義が当然異なっていたと指摘している。

加えて、当時の人々が、勾玉と勾玉を接続する行為に対して、玉の有する呪力を倍加しようとしていた可能性も推定している。これ以降、玉と玉を結ぶことによる呪力の強化という見解は、子持勾玉の性格を理解する上で欠かせない考え方の1つになっていく。

続いて、梅原末治氏の研究を見ていくことにする。梅原氏は、一般的に我々が想像する勾玉の形態とは異質な勾玉、いわゆる異形勾玉にも考察を加えている。その集大成が、昭和46年に発刊された『日本古玉器雑攷』である〔梅原 1971a〕。しかし、この書籍に掲載されている異形の玉類の多くは、個人や研究所のコレクションであり、明確な出土地点および出土遺跡名などの詳細が不明である。そのため、この書籍の評価は著しく低いといわざるを得ない。たとえば、末永雅雄氏は、考古学的研究に関して、「考古學が實證の學問として生きる場所のものは、もちろん物質資料がもつ絶対性にあるが、その絶対性を支持するのは出土環境である」〔末永 1952 ; 30 頁〕と述べている。つまり、出土状況という要素を失い、さらには共存関係と遊離している梅原氏のあげた異形勾玉は、もはや考古学的資料価値が低いということになる。

しかし、現在においても異形石製品の出土数がごく僅かなことからわかるように、当時の研究環境としては、個人蔵のものや伝来品に頼らざるを得なかつたことも事実であろう。また、これほど多くの異形勾玉および異形石製品を収集し掲載したこの書籍からは、多大な苦勞を感じられずにいられない。



第41図 梅原末治氏のいう  
「背合せ双形玻璃勾玉」

そのような、いわばいわくつきの『日本古玉器雑攷』の中をみても、背合わせ勾玉がいくつか紹介されている（第41図）。書籍内に紹介されているものには、ガラス製のものが多いが、硬玉製のものも写真で紹介されている。また、紹介のさいガラス製の異形品に対しては、「背合せ双形玻璃勾玉」と呼んでおり、硬玉製のものについては、「背合わせの遺品」と記載されている。紹介されているガラス製のものを見てみると、2個の丁字頭の勾玉で構成されている背合わせ勾玉が確認できる（第41図の2）。色は、不透明な淡青色である。

また、梅原氏は、ガラスの成分の観点から中国との関係が深いことも述べている。取り扱っているものが、考古学の資料として価値が低く、またガラスの成分からの見解であることを考慮しなければなら

ないが、背合わせ勾玉を中国との関係性でとらえられたことは、新しい研究の視点であるといってもよいであろう。しかし、これ以降、背合わせ勾玉に焦点をあて、論じていった研究者は皆無であった。

これらをまとめると、滑石を用いた背合わせ勾玉は、子持勾玉と同じ祖形（玉杖）から派生はしているが、常陸鏡塚古墳が造営された時期の5世紀中葉頃（註61）を境に、子持勾玉とは別の遺物として存在し、それ以降、背合わせ勾玉から派生する形で立花が出現すると想定できる。つまり、大場氏の想定する背合わせ勾玉は、子持勾玉と歴史的 성격が異なり、立花の一段階はやい時期に成立していたものと考えられることができる。

また、背合わせ勾玉から立花への移行時期に関しては、かなり短かったことも系譜図からは読み取ることができる。

以上、背合わせ勾玉についての先行研究を述べた。背合わせ勾玉の研究は、いまだ資料提供の段階でとどまっており、考古学的研究はおこなわれていないといってもよからう。また、背合わせ勾玉と立花および子持勾玉との関係性は指摘されてはいるが、具体的なことまでは言及されていない。

かろうじて、大場氏の子持勾玉研究を別の角度からみることにより、背合わせ勾玉像がぼんやりとみえてくる程度というのが実状である。こうした研究状況の要因としては、資料的制約が大きいことがあげられ、現在にいたっても参考資料の不足は否めない。しかし、今回、出土した鳥取県博労町遺跡の背合わせ勾玉などを加えて検討することにより、背合わせ勾玉の実像を少しでも明らかにしたいと考えている。

### 第3節 分布状況

まず、背合わせ勾玉が、出土した遺跡および遺構などについてみていくことにする。また、横合わせ勾玉の出土遺跡についても、参考資料としてまとめておく。

#### 1) 鳥取県 博労町遺跡〔米子市教育文化事業団 2011〕

鳥取県米子市博労町4丁目220番地に所在している遺跡である。立地の特徴としては、砂丘上に形成されていることがあげられ、海浜砂丘地における集落形成について大変有意義な情報を多数提示してくれる遺跡である。発掘調査の結果、博労町遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代前期、古墳時代後期から奈良・平安時代、中世、近世末から明治時代と空白時期を含みはするものの、ある程度時間的に幅広く営まれていたことが明らかにされている。また、古墳時代において最も集落が盛行したのが、前期中葉から後葉であることもわかっている。

遺跡の最盛期であり、背合わせ勾玉が見つかった(註62)古墳時代前期を中心に遺跡の様相を大まかにみるならば、検出された遺構は、掘立柱建物1棟、竪穴住居跡29棟、土坑2基、大型の溝状遺構1条などが主なものである。

出土遺物に関しては、まず、背合わせ勾玉があげられる(第39図)。出土地点は、残念ながら明確な遺構からの出土ではなく、1区の包含層(Ⅲ-②層)から出土している。材質は滑石を用いており、長さは2.3cm、重量が5.3gを測る。また、特徴としては、全面が丁寧に磨かれていることがあげられる。そして、両方の孔には2条の刻み目がそれぞれ確認でき、いわゆる丁字頭の勾玉を2個背合わせにした形態を呈している。左右の勾玉の大きさについては、ほぼ同等である。この遺物の色彩に関しては、出土した直後の写真を見る限り、濃い緑色をしていたようであるが、筆者が実見したときには、淡く青みがかった灰色をしていた。

他には、土師器類や多数の土錘、石錘、包含層からは製塩土器なども数点出土が確認されており、遺跡に住んでいた人々と海との関係が深かったことが容易に想像つく。さらに、包含層からの出土ではあるが、舟形の土製品片2点も出土している。これらの舟形土製品は、形態の特徴から準構造船を模したものであるとされている。

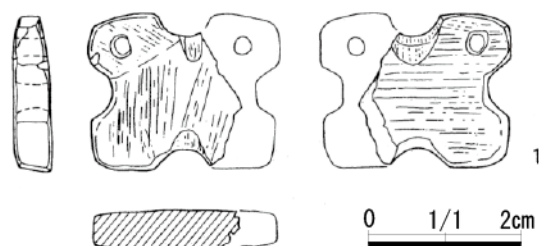
濱野氏は、集落を区画していたと考えられる溝の東側から布掘り掘立柱建物を含む大型住居群が検出されたことなどから、この遺跡が拠点集落という一面を持っていた可能性を想定している。また、大型区画溝状遺構からの完形土器が大量に廃棄されていることや背合わせ勾玉や舟形土製品などの特殊な遺物が確認されたことから、遺跡における集落内祭祀の存在も指摘している。

さらに、出土した在地の土器の中に畿内系土器の要素を見出せるが、畿内系土器群自体の搬入品は、ほとんど無いことなどを根拠にあげ、この集落に住んでいる人々は、積極的に畿内の文化要素を生活に取り入れようとしていたことも述べている。

## 2) 千葉県 高部古墳群〔木更津市教育委員会 2002〕

木更津市に在り、下総台地南部と上総丘陵北端の境界付近の丘陵状に、約 60 基の古墳の造営が確認されている遺跡である。また、君津地域における最古級に位置づけられている前方後方墳があることでも有名である。発掘調査によって、古墳時代前期に属する前方後方墳の墳丘下から畝状遺構も検出されている。古墳時代中期になると、一旦古墳が造られなくなり、集落が形成されるようになる。また、当期において集落の南端に大規模な祭祀場と考えられる遺構 2カ所が検出されている。そこからは、鏡や刀子形石製模造品、鉄製模造品など、祭祀色の強い遺物が出土している。5世紀後葉以降になると、再び古墳が造営されていくようになる。

出土した背合わせ勾玉は、32号墳の周溝内で出土が確認されているが(第42図)、古墳に伴わない遺物とされている。所属時期は、古墳時代中期としている。この遺物は、約3分の1が欠損しているが、残りの部分から、当初は勾玉2個を背合わせ状にした形態をしていた遺物である可能性が高いとされている。残存している勾玉の頭部には、孔が両面から穿ってある。また、材質はチャート質の石材が用いられており、色は乳白色で、長さは2.15cm、重量が3.69gを測る。形態上の特徴としては、断面が扁平板状を呈している



第42図 千葉県高部古墳群出土の背合わせ勾玉

点があげられ、全面には研磨が施されていることがあげられる。

遺跡の特徴として、高部32号墳の墳頂から、在地で生産された東海系の特徴をもつ高坏が確認されており、3世紀後半頃には、他地域間で人や物を介した交流がおこなわれていたことが明らかにされている。

## 3) 茨城県 尾島祭祀遺跡〔亀井 1958、斎藤 ほか 2005〕

茨城県南端に近い戸根川下流域に位置する霞ヶ浦の南東に在る浮島において、亀井正道氏が、祭祀遺物の散布地を確認し報告したことで有名な遺跡である。また、この亀井氏の報告以前の浮島では、すでに確認されていた縄文時代後期の貝塚を取り扱った研究が中心であった。

亀井氏は、祭祀遺物の散布地について、浮島の東側にある尾島神社の拝殿前面の左右の地点をあげている。採集された祭祀遺物は、立花形品1、勾玉1、大形有孔円板8、無孔円板1、剣形品4点が確認されており、すべて滑石を用いて作られている。また、表採資料のため、出土状況及び明確な出土地点は不明となっている。

これらの出土品として記載されている立花形品が、今回取り上げている背合わせ勾玉の一種と考えられる(第40図の3)。平面形は2個の勾玉を背合わせにした形態をしているが、孔に関して状況がやや異なっている。それは、通常勾玉の頭部に施されているような孔は見当たらず、勾玉と勾玉とが接続されている中央部分に側面から1カ所穿孔が施され

ている。出土した背合わせ勾玉に対して、亀井氏は、常陸鏡塚古墳から出土した立花状石製品に著しく近似するとしたが、用途については全く異なったものであろうと推定している。

背合わせ勾玉を含んだ遺跡の年代については、祭祀遺物の表採地点周辺で確認できた和泉式土器と併行する時期のものである可能性が高いとしながらも、やや幅を持たせるかたちをとり古墳時代後期までを遺跡の年代幅としている。

また、亀井氏は、浮島における祭祀行為の存在、そして、砂岩製の砥石の出土が確認されていることから、島内での祭祀具の製作についても推定している。さらに、『常陸国風土記』などの史料もふまえ、浮島内で確認されている古墳群の築造者を製塩および漁業集団であった可能性も指摘している。

これ以降、多くの研究者たちが、古墳時代における茨城県浮島に対する歴史的意味づけを試みていくようになる。茨城県浮島における、現段階の研究をまとめるならば、古墳時代の浮島内での祭祀は、中期には確実に存在していたようである。これは、島内に在る前浦祭祀遺跡から和泉式期に相当する壺や小型丸底埴とともに、有孔円盤・剣形・小型の勾玉などの滑石製模造品が出土している〔坂詰 1974〕ことからわかる。

また、浮島内の人々の特徴として漁業集団の一面を持っていたことは、土錘などの出土からも揺るがないと思われるが、亀井氏が指摘した製塩集団としての一面については、未だ慎重に成るべきであろう(註 63)。ほかには、尾島神宮の北東裏側境外付近から、和泉Ⅱ期に相当する石製模造品の工房跡が確認された〔茨城県教育財団 1988〕ことから、亀井氏が指摘したように、祭祀具製作も島内でおこなわれていたと考えられる。

浮島における祭祀の形態および祭祀の執行者、それにとりなう歴史的評価については、浮島の人々における在地的な祭祀という従来の考えに対して、田中広明氏〔田中 1990〕や茂木正博氏〔茂木 1994〕、森田喜久男氏〔森田 2000〕、中尾麻由美氏〔中尾 2005〕などが積極的に再検討を試みている。まず田中氏は、浮島での祭祀が、古霞ヶ浦周辺一帯に広まりを見せる大規模なものであったことを指摘し、確認された考古資料などを根拠に祭祀の執行の中心に在地の首長層の存在があった可能性を述べている。茂木氏は浮島全体が祭場であったとし、島内の祭祀遺跡が、ヤマト政権の公的祭祀遺跡として機能していた可能性を指摘している。

森田氏は、『常陸国風土記』にある9つの社が、常陸と下総の国造にゆかりがあるとし、8世紀前葉前後においてではあるが、浮島に住んでいた人びとは、常陸と下総の国造によって移住させられた人びとであるとした。また、浮島内での祭祀については、古代王権への貢納儀礼であった可能性を指摘している。

田中氏、茂木氏、森田氏の意見を総合し、中尾氏は、浮島内で確認される土器の特徴が一樣であることなどを根拠に、森田氏のいう浮島に住んでいる人びとが周辺地域から移住させられたという説に対しては否定的であり、祭祀の執行には、浮島の在地首長層が大きくかかわっていると田中氏の説を肯定的に考えている。



#### 4) 奈良県 澤ノ坊2号墳

[奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1997、河上 2001、玉城 2004]

この古墳は、宇陀郡榛原町に在る前方後円墳である。すでに上述したが、この古墳から横合わせ勾玉の出土が確認されている。古墳の墳丘自体は、中世の段階で大半が失われており、出土遺物はほとんど攪乱土内からのものである。

出土したものは、画文帯神獸鏡片やヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス玉など多量の玉類、他にも銅鏃や須恵器などが主なものとしてあげられる。出土したヒスイ製勾玉の中には、丁字頭のを複数確認されている。古墳築造時期については、4世紀末葉から5世紀初頭とされている。

以上、合わせ勾玉の出土が確認されている遺跡をまとめみた。出土遺跡を見比べてみると、背合わせ勾玉の特徴がいくつか見えてくる。まず、背合わせ勾玉の出現期は、4世紀後半から5世紀初頭の中の山陰地域で認められ、5世紀中頃、いわゆる中期古墳文化(註64)になると茨城県や千葉といった東日本で出土が確認されてくる傾向が見てとれる。

背合わせ勾玉における形態的变化についてみていくと、出現当時は、勾玉の断面も楕円形を呈しており、より写実的に勾玉が表現されている。しかし、5世紀中葉から確認されるものは、明確に勾玉を表現しているとはいえないものや断面が板状を呈しており、石製模造品の範疇に含まれる可能性が高いものなども確認できる。これらをふまえると、時代が新しくなるにつれ、作りが粗雑になっていくと思われる。

材質については、滑石など比較的やわらかい石材を選択して作られていることが共通点としてあげられる。これに関しては、硬玉を用いて作られている横合わせ勾玉とは一線を画する。また、出土遺跡の性格については、祭祀に関係する遺跡から出土する傾向が強いことが考えられる。これについても、古墳から出土する横合わせ勾玉とは、内在していた歴史的意義が、背合わせ勾玉と異なっていた可能性が指摘できるのではないかと。他にも出土遺跡の特徴から背合わせ勾玉についていえることはある。それは、出土した遺跡はみな積極的に他地域との交流をおこなっており、特に近畿地域との関係性が深い可能性があることである。

今回取り扱った背合わせ勾玉には、時期差および形態差がみられるため、鳥取県博労町遺跡から出土したものを背合わせ勾玉Aグループとし、常総地域にみられるものをBグループというように区分することが可能である。

#### 第4節 背合わせ勾玉の成立

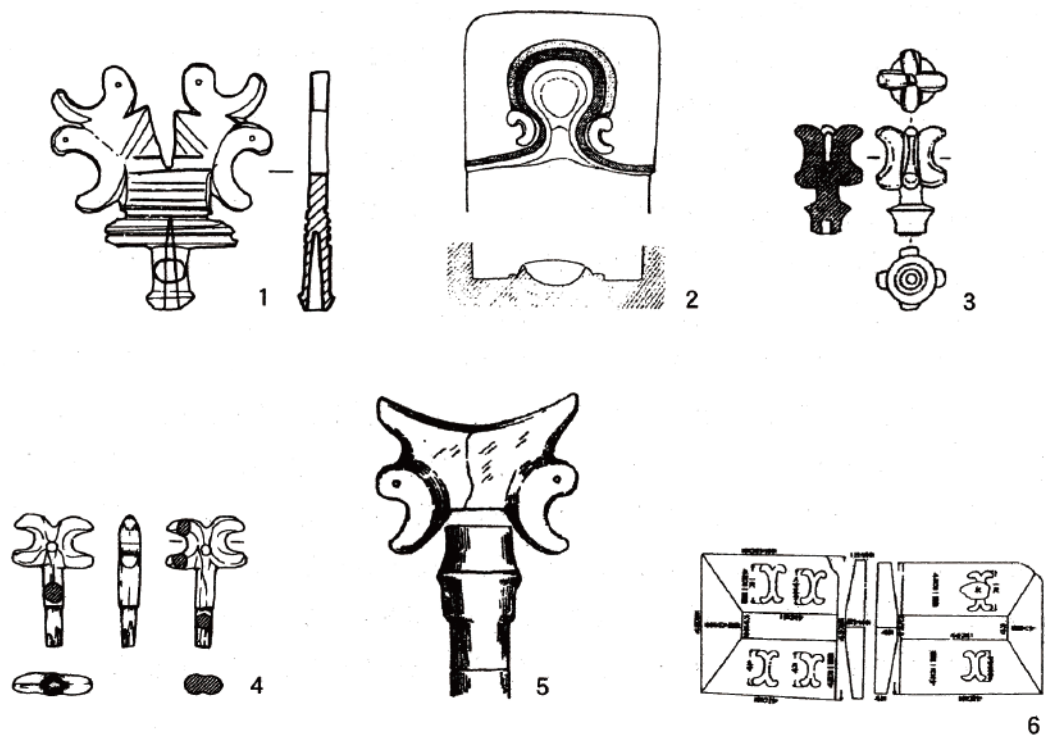
背合わせ勾玉における分布や出土遺跡の性格などを比較することにより、背合わせ勾玉像を概観することができた。

次に、背合わせ勾玉の成立過程について考えていくことにする。現段階において、一番古い背合わせ勾玉は、鳥取県博労町遺跡のもの（グループA）であり、時代は古墳時代前期後半頃である。その後は、分布圏を東日本へ移し、茨城県尾島祭祀遺跡と千葉県高部古墳群から出土が確認されている（グループB）。時代は、古墳時代中期である。

このように、出土した背合わせ勾玉のみを見ていくだけでは、あまりの出土点数の少なから、点的な成立過程しか見えてこない。そこで、背合わせ勾玉の形態的特徴を包含した遺物、たとえば、玉杖や琴柱形石製品、立花などを参考資料とした上で、あらためて背合わせ勾玉の成立過程をみていくことにより、ある程度、面的に系譜がみえてくる。以降、背合わせ勾玉の形態的特徴を包含した遺物に対しては、背合わせ勾玉関連遺物と仮称する。

まず、最初に確認される背合わせ勾玉関連遺物は、奈良県富雄丸山古墳から出土した琴柱形石製品〔京都国立博物館 1982〕である（第43図の1）。これは、亀井氏〔亀井 1973〕によって8つに型式分類されたうちの松林山型に属するものである。この遺物は、全長6.1cmを測り、暗緑色の滑石を用いて形作られている。遺物自体扁平なもので、その遺物の上端に計4点の勾玉を2対の背合わせ勾玉とし、左右に配置する形をとっている。

続いてほぼ同時期に確認されるのが、茨城県常陸鏡塚古墳出土の滑石製立花である〔大場・佐野 1956〕（第40図の2）。形態は、2個の勾玉形を背合わせ状に連結したような形をしているが、連結された中間には、瘤状に突出している部分が確認でき、そこへ垂直に未貫の孔がほどこされている。この遺物は、4世紀後半の年代が与えられており、立花の初現と考えられている〔白井 1991〕。そして、それ以降の常総地域では、6世紀前半頃ま



第43図 成立過程の参考資料（縮尺不同）

で立花が継続して古墳から確認されていく。また、鏡塚古墳は、奈良県富雄丸山古墳などの近畿地域における古墳の内容と近似することから、ヤマト政権の勢力圏拡大に伴って構築されたといわれている〔小林 1961〕。

4世紀末葉から5世紀初頭にかけては、鳥取県博労町遺跡から背合わせ勾玉が確認されることは、すでに述べた。他にも、勾玉を2個背合わせ状にしている事例がみられるものとして、香川県善通寺市にある磨臼山古墳で確認された刳抜式の舟形石棺があげられる〔香川県教育委員会 1984、白井 1991〕。棺には、造付石枕が確認されており、その石枕に死者の頭をのせた場合、耳の後ろから両肩の部分にあたる位置に、長さ7.5cmの勾玉を背中合わせに陽刻している（第43図の2）。

他にも、千葉県佐原市に在る山之辺手ひろがり3号墳から出土した滑石製立花は、4個の勾玉を倒立した形で背中合わせに接続している（第43図の3）〔白井 1991〕。また、亀井氏が分類した琴柱形石製品の中に、背合わせ勾玉のような形状を取り入れている遺物がある。それが、本村型に分類されているものである。この類型は垂飾の用途が強く、出土も古墳からではなく集落内から、単独もしくは他の玉類を伴って出土することが多いものである。出土が確認される年代幅は、4世紀後半から6世紀代とされている〔亀井 1973〕。また、この型式の遺物が4世紀末から5世紀初頭の間において、群馬県下佐野遺跡でつくられていることが発掘調査で明らかにされている〔高野 2007〕。検出された工房跡と考えられている第24号住居からは、約7万点の玉類未製品とともに、17点の琴柱形石製未製品が確認されている。

次いで5世紀前半、いわゆる古墳時代中期にはいと、茨城県尾島祭祀遺跡や千葉県高部古墳群から、背合わせ勾玉の出土が確認されている。また、尾島祭祀遺跡で確認されたものと、形態上酷似する立花が、千葉県香取郡下総町に在る猫作・栗山古墳群の中の16号墳（註65）から出土している（第43図の4）〔香取郡市文化財センター 1995〕。

次に、年代が詳細に特定できない背合わせ勾玉および関連遺物について、見ていくことにする。まず、先行研究史にすでにあげている小林氏が紹介している大和伝来と記載されている硬玉製の背合わせ勾玉があげられる（第40図の1）。末永雅雄氏は、東京国立博物館所蔵の玉杖を紹介している〔末永 1952〕。出土地は不明で、田澤静雄氏より購入とされている。杖の頭部には、勾玉2個、左右対称に背中を合わせるような形がみられる（第43図の5）。

他の背合わせ関連遺物としては、現姫路市飾磨区白浜町松原で発見された特異な組み合わせ式家形石棺があげられるであろう。この石棺の特徴について、和田千吉氏は、蓋石の上に勾玉を2個合わせた形の突起が、計6個確認できると述べている（第43図の6）。また、この特殊な形をした突起について、下総香取郡出土の立花3点を参考資料として取り上げ、立花との関係が深い可能性があることを言及している〔和田 1903〕。この資料は、播磨地域にみられる縄掛突起の形態と比較しても類似するものがなく、大変珍しい資料であるが、現在は行方不明となっている〔姫路市教育委員会 1995〕。

以上、背合わせ勾玉とその関連遺物についてみてきた。これらの資料をふまえ、背合わせ勾玉の成立過程について考えることにする。また、グループAとグループBとの間には、時期差や地域差が認められることから、成立過程においても個別に考えていくことにする。

まず、グループAの成立過程についてみていく。現段階において背合わせ勾玉の出現は、古墳時代前期後葉の山陰地域で確認される。しかし、背合わせ勾玉を形成する要素は、背合わせ勾玉が成立する以前の近畿地域で発生したものであると考えることができる。その根拠となるのが、年代的に先行する奈良県富雄丸山古墳から出土した琴柱形石製品である。古墳時代前期の石製品である琴柱形石製品の形態変遷の過程で、2個の勾玉を背合わせ状、もしくは対にするという人々の強い思考を組み入れた結果、この遺物が作られたのはいか。そう考えることによって、2個の勾玉を連想させるようなものが、玉杖や琴柱形石製品、石枕など、遺物の一部に積極的に採用されていくことについても、無理なく理解することができると思われる。

そのように考えていくと、グループAの背合わせ勾玉の成立には、近畿地域との関係が深いことが考えられる。それは、博労町遺跡が近畿地域の文化を積極的に取り入れようとしていたことから、矛盾はしていないと考える。

次に、常総地域でみられる背合わせ勾玉（Bグループ）の成立過程をみていくことにする。このBグループの成立過程は、Aグループと異なりやや複雑であるといえよう。なぜなら、背合わせ勾玉の発生地域と考えられる近畿地域や山陰地域において、背合わせ勾玉が、4世紀末葉から5世紀初頭あたりで確認できなくなり、5世紀中葉には、子持勾玉が出現してくるからである。それに対して、グループBの背合わせ勾玉は、5世紀中葉頃になって出土が確認されており、両グループ間には出土の時期差がみられる。

そこで、いくつか疑問点が考えられる。1つ目は、なぜ常総地域において、背合わせ勾玉が時期差を伴って出現してくるのか、ということである。これは、常総地域を構成する両県、特に茨城県で多くの子持勾玉の流入が確認されている事実からも、より一層不可思議な現象としてみえてくるであろう。ふたつ目は、常総地域出土の背合わせ勾玉の中にも形態差がみられることである。この、2つの疑問について考えていきながら常総地域における背合わせ勾玉の成立過程をみていくことにする。

まず、1つ目の疑問についてである。これは、常総地域が、立花を中心とした独自の葬送様式を文化基盤とし、展開している地域であったこと〔白井 1991〕が、重要な意味をもってくると思われる。すなわち、伝統的な立花が、流入してきた子持勾玉と同等もしくは、それ以上の信仰的価値を見出されていたとするならば、近畿地域からの子持勾玉の流入を受け入れる一方で、形態上類似する立花の形をしたものを、新しく作り出すこともあったのではないだろうか。そのように考えると、立花に影響を受けた形で、背合わせ勾玉が出現したと考えてもよいのであろう。

尾島祭祀遺跡や高部古墳群から出土した背合わせ勾玉は、あくまで立花から派生したものと仮定した場合、常総地域の背合わせ勾玉の根底にある意義は、Aグループのものと同

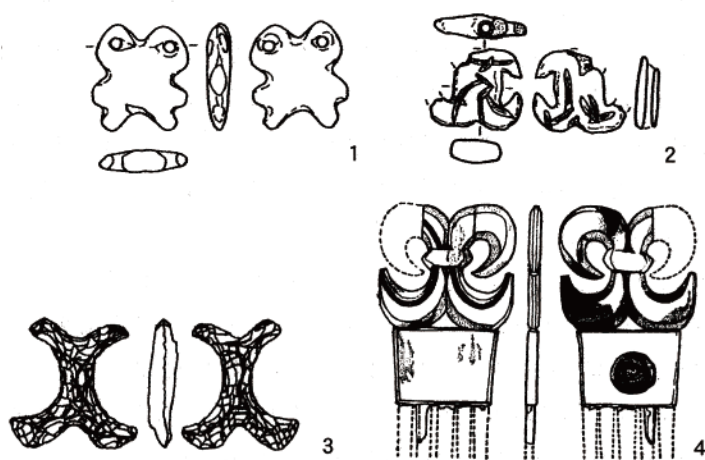
じではあっても、系譜上では直接的には繋がらないといえるであろう。

続いて、Bグループ内における形態差の要因について考えてみたい。まず、高部古墳群から出土したものは、断面の形態が板状になっていることから、石製模造品製作過程でつくられたものである可能性が高いと考えてよいであろう。一方、尾島祭祀遺跡出土の背合わせ勾玉（第40図の3）に関しては、千葉県香取郡の猫作・栗山16号墳出土の立花（第43図の4）と形態的特徴が酷似していることから、より立花に似させた意思が強く感じられる。これは、立花から背合わせ勾玉（Bグループ）が発生するという仮説を支持する事例ではないだろうか。

このように、Bグループの背合わせ勾玉の成立には、立花からの形態および信仰に影響があると考えられる。

最後に、古墳時代以前に確認されている、左右対称に同形のものを接続しているものや平面形態が類似しているものを見ていくことにする。北海道江別市に在る七丁目沢6遺跡からは、蛇紋岩製の異形石製品が、縄文時代晩期末葉の土坑墓から出土している（註66）（第44図の1）。また、同じく北海道のキウス4遺跡では、縄文時代後期後半の盛土遺構から三日月を背合わせにしたような形の土製品が確認されている〔北海道埋蔵文化財センター2003〕（第44図の2）。山形県押出遺跡〔山形県教育委員会1990〕（第44図の3）からは、平面形態が類似する異形の石器が出土している。他には、滋賀県守山市に在る服部遺跡から、弥生時代後期の木製の飾り櫛が確認されている〔滋賀県教育委員会ほか1979、木下1987a〕（第44図の4）。この飾り櫛は、遺物中央部に帯状のようなものも確認でき、あたかも背合わせ状にしたものを結び合わせることを強調しているかのようにも受け取れる遺物である。

このように、遺物の形態だけをみていくと、類似するものがいくつか存在しているようである。しかし、鳥取県博労町遺跡で見られたような背合わせ勾玉が、古墳時代前期における石製品の変遷の上で、当時の人々の思想を組み込むことによって成立した可能性が高い



第44図 古墳時代以前の参考類例（縮尺不同）

ことはすでに述べたとおりである。すなわち、古墳時代以前の平面形態が類似する遺物とは、歴史的な出現過程が異なっており、直接的には結びつかないことは当然のことである。

しかし、滋賀県服部遺跡から出土した弥生時代後期の木製の飾り櫛に見られる結ぶことを強調した事例、さらには、三日月を背合わせにしたよう

な平面形態を持つ遺物に対して時代を越えて人々が特別視し続けていたことはいえるのではなかろうか。そのように考えていくと、推測の域は出ないが、古墳時代の人々が勾玉と勾玉を接続させる意匠を石製品に組み込む過程で、平面形態の類似性から2個の勾玉を背中合わせ状にしたものにするという選択肢を人々が想定・採用しやすかったのではなかろうか。

## 第5節 子持勾玉との関係性について

5世紀中葉以降の近畿地域および山陰地域では、背合わせ勾玉（Aグループ）の消失とつながるような形で子持勾玉の成立が確認できるようになる。そこで、子持勾玉と背合わせ勾玉との関係性を中心にみていくことによって、系譜上の継続性がどのレベルにおけるものであったのかを考えてみることにする。

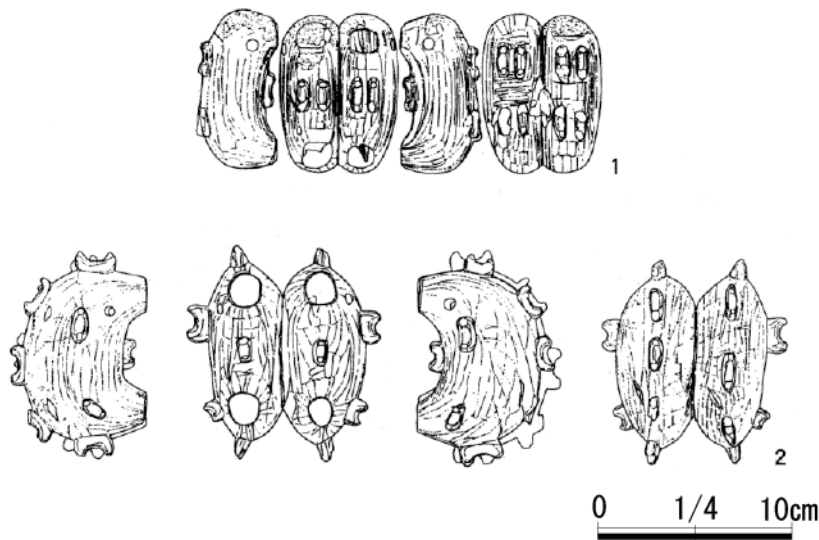
まず、背合わせ勾玉と子持勾玉における共通点としては、勾玉状のものが接続し合っているといった形態的特徴を有している点があげられる。しかし、共通点としてあげられるのはそのぐらいで、むしろ異なる点のほうが多いように思われる。大きな相違点を3つあげるならば、1つ目の違いについては、接続している勾玉の大きさについてである。背合わせ勾玉は、同等であるのに対して、子持勾玉は親勾玉と子勾玉といったように、接続し合っている勾玉状のもののが大きさが、均一ではないことである。2つ目としては、表面の調整方法（註67）が相違点としてあげられよう。これについては、5世紀頃からの滑石を用いた石製模造品の製作技術の活発化および分布の拡大と深い関係性が起因している可能性が高い〔佐々木 1986〕。

1つ目の違いについては、遺物における性格の違いにまで発展していく可能性がある。なぜなら、同じ大きさのものを接続したものと大きさが異なるものが接続しているのを見た場合、受ける印象が明らかに異なるからである。また、時代的変遷の中において同じ性格を込めたものを用い続けていく場合、わざわざ背合わせ勾玉と形態上異なるものをつくりだす必要性を見出すことが想像しにくい。つまり、意味も含めた系譜的変遷が両遺物間からは、読み取ることが難しいといえる。

そのほかには、子持ち勾玉にみられる出土遺跡の多様性〔佐々木 1986〕が、背合わせ勾玉にはみることができないことがあげられる。しかし、これに関して横合わせ勾玉を含む「合わせ勾玉」として見た場合、出土遺跡の多様性がみてとれ、子持勾玉との関係性が考えられる。

そこで、横合わせ勾玉から子持勾玉への系譜上の変遷についてもみていく。両者には、材質の違いは確認できるが、そのほかについて共通することが多いように思われる。ここでは、とくに大場氏〔大場 1962〕が設定したD型式の子持勾玉を取り扱いながら考えていくことにする。

この型式における形態的特徴は、親勾玉が2個側面で接続していることがあげられ、大



第45図 接続された子持勾玉

阪府堺市のカトンボ山古墳〔森・宮川1953〕(第45図の1)や、鳥取県東伯郡に在る高辻遺跡〔國學院大學日本文化研究所2002〕(第45図の2)から出土しているものが代表例である。この型式の子持勾玉は、全体の出土量からみても稀なものであったことは

いうまでもないが、出土している地域が近畿地域や山陰地域、なかでも鳥取県といった、合わせ勾玉の分布圏と重なり合っていることは偶然ではないであろう。すなわち、形態の特徴が類似することなどを考えると、特定の型式の子持勾玉からは、横合わせ勾玉の要素をみることができるといえるであろう。

次は、両者の使用例の共通点についてみていく。古墳からの出土例に限られるが、多くの勾玉を含む玉類と共伴していることから、類似した性格が込められていた可能性が高いと考える。また、勾玉を多数用いる行為と勾玉が接続しているものを使用する場合の意味合いが、古代において異なっていたこともいえるようである。

以上のことから、相違点が多いため背合わせ勾玉と子持勾玉を別の系統として取り扱うことができる一方で、勾玉と勾玉を接続するという観点からは、系譜的つながりが見てとれるのではないか。また、D型式のものが、他の型式の子持勾玉と同様に用いられているカトンボ山古墳のような事例をふまえると、横合わせ勾玉と子持勾玉において込められていた歴史的意味が完全に異なっていたともいえることはできないであろう。

また、古代の人々が、勾玉と勾玉を接続させたものを用いることに対して、特別な力を期待していたことは間違いないであろう。そう仮定すると、背合わせ勾玉や横合わせ勾玉と子持勾玉との間において、直接的では無いにしても同様な意味合いが強弱の差こそあれ、込められていた可能性が指摘でき、意味における系譜も見出すことができるのではないか。

## 第6節 背合わせ勾玉における歴史的意義

背合わせ勾玉の使用、ことさら勾玉を2個対にして用いることに、古墳時代の人々は、いったいどのような思いや効力を期待していたのであろうか。ここでは、①出土状況からみた性格、②形態からみた性格、③背合わせ勾玉関連遺物の意味との比較からみた性格、

といった3つの観点から、歴史的意義を考えていくことにする。

### ① 出土状況からみた性格

まず、出土状況からみてみると、全ての背合わせ勾玉は明確な遺構から出土してはいないため、断定することができない状況である。しかし、背合わせ勾玉は、祭祀遺跡に付随する遺物と考えてよさそうである。

また、Bグループの背合わせ勾玉に関してではあるが、滑石製の勾玉模造品と共に出土が確認されているため、単独の勾玉とは別の性格を帯びていた可能性も考えられる。しかし、具体的な性格については、祭祀の対象が不明確であり、推測することができない。

そして、香川県に在る磨臼山古墳の勾玉2個を造付石枕に陽刻している事例や、姫路市の蓋石の部分で確認された背合わせ勾玉状の突起などを見る限り、勾玉と勾玉とを接続することによって生じる効力に関しては、遺跡の種類に限定されることなく様々な場面で期待されていたと考えてもよいであろう。

### ② 形態からみた性格

ここでは、背合わせ勾玉の形態的特徴から、性格を考えていくことにする。まず、性格と関係性が深いと考えられる特徴として、背中合わせにされている勾玉の大きさが同等であることがあげられる。やはり、同じ大きさのものから同等の大きさのものが生まれるというのは、考えにくい。つまり、後述する子持勾玉の意味合いのような玉が魂を産む〔大場1970〕というものではなく、同じものが「分裂」する意味の方が強かったのではないだろうか。

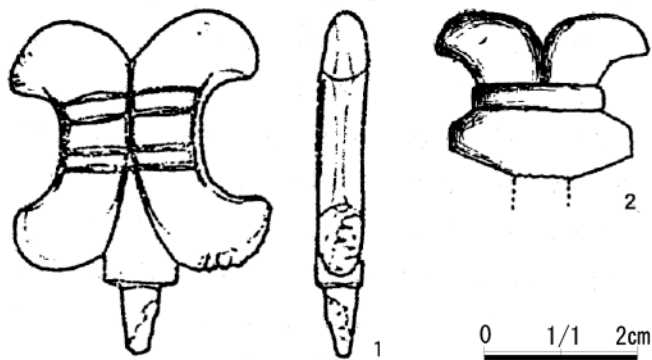
次にあげる形態的特徴としては、孔のまわりに溝を施すいわゆる丁字頭の勾玉を用いている点である。時代は異なるが、弥生時代の丁字頭勾玉について、木下尚子氏は、何かを縛り込めることによって呪術性を高める意味合いが根底にあると推測している〔木下1987b〕。そのことをふまえ、鳥取県博労町遺跡から出土した背合わせ勾玉に関していえば、内在する呪力を高めた勾玉を分裂させることにより、さらなる呪力の強化を図っているとも考えることができるのではないか。

### ③ 背合わせ勾玉関連遺物の意味との比較からみた性格

続いて、背合わせ勾玉関連遺物の機能や意味合いについてまとめ、それらをふまえ、背合わせ勾玉の性格をみていくことにする。まず、玉杖や琴柱形石製品、とくに恵解山型について、主に死者の頭部付近から出土することが多いことから、呪術性の強い護符もしくは辟邪の機能を想定している〔亀井1973〕。また、権威や宗教的、呪術的権威の象徴とする研究者もいる〔杉山1998〕。

立花は、死者の頭部を飾るという機能はもっていたとは思われるが、その本義は、死者の死が確定するまでの間、いわゆるモガリの期間で用いられていた道具の1つであると考





第46図 刻み目が施されている立花

えられている〔沼沢 1977a・1980〕。和田萃氏は、モガリ儀礼について、首長権の継承などの政治的側面の存在を認めながら、土俗的な意義にタマフリやタマシズメが含まれているとしている〔和田 1973〕。それを受け、杉山晋作氏は、千葉県石神2号墳の埋葬過程からモガリ期の復原を試みて

いる。その結果、モガリ期間内における各遺物に時間差を見出し、立花にはタマフリ、石製模造品の刀子や鎌にはタマシズメの機能が込められていると指摘している〔杉山 1985・1991〕。このような、タマフリやタマシズメの機能を立花に求めることのできる背景には、人の魂とは遊離しやすく、さらに、靈魂を具現化したものが玉であると理解されているためであろう〔折口 1996a〕。

さらに、杉山氏は、立花について勾玉を緊縛したものと考え、死者の魂が黄泉の国へ去るのをとどめる機能も備えていたとしている。実際に、2個の勾玉を緊縛しているような刻み目が施されている立花が、千葉県東寺山石神2号墳で確認されている〔沼沢 1977b〕（第46図の1）。また、出土地が不明ではあるものの、2個の勾玉を結ぶように突帯が形成されている立花も確認されている〔亀井 1951〕（第46図の2）。

子持勾玉について、大場磐雄氏は玉を魂と関連させて、玉が魂を産む思想の具現化によって作り出された祭祀遺物であり、玉の有する呪力の増幅装置としている〔大場 1962〕。それをふまえて、佐々木幹雄氏は呪力の増殖から一歩踏み込み、子持ち勾玉に豊穡や多産などの意味あいを想定している〔佐々木 1985〕。また、子持勾玉は、出土場面によって意味合いが異なるとして、古墳においては鎮魂、住居や集落からの出土には、日常の安定や外域から集落を守る意味を想定している。

これらをふまえ背合わせ勾玉の性格の抽出を試みてみたい。まず、Aグループの背合わせ勾玉については、子持勾玉とは主体となる意味付けが異なっていたと考えてよいであろう。つまり、祭祀場における背合わせ勾玉の機能および性格は、子持勾玉のようなそれ自体に豊穡や多産といった具体的な性格は持ち合わせてはいなく、「分裂」することにより呪力を高めることを第一義とし、あくまで祭祀行為を円滑におこなうための付属の道具であったということができる。

また、Bグループの背合わせ勾玉は、立花の持つ性格が少なからず反映されていると思われる。すなわち、「緊縛」や「結びつける」といった意味合いを込め、祭祀行為に必要な呪力の強化をおこなう道具として用いられていたと考えられる。

次いで、古墳でみられる事例の意味付けをするならば、まず、勾玉を2個背中合わせ、

もしくは対として用いることによって生じる効力は、いうまでもなく被葬者へ向けられたものであろう。石枕や石棺の蓋にみられた事例などから、単に呪力の強化といった抽象的な機能というよりは、魂が身体から遊離することを防ぐと同時に外部からの悪霊の侵入を止めるストッパーのような役割などの具体的な機能が付与されていた可能性を想定してもよいのではなかろうか。また、埋葬後は、魂を鎮める効力や本義ではないにしろ装飾性も少なからず期待されていたのであろう。

以上、背合わせ勾玉の性格について3つの視点から考えてみた。全体的にまとめると、背合わせ勾玉は、祭祀行為を円滑にこなすために必要な道具の1つであり、性格も呪力の増大・強化といった抽象的なものであったことが考えられる。また、Aグループは「分裂」であり、Bグループは「緊縛・結びつける」といったように、若干の意味合いの違いもみられると考える。

次に、考古学からみた背合わせ勾玉研究の意義について考えるならば、大場磐雄氏は「古墳時代中期に滑石製遺物の一群中から、祭祀用品が分離した時、勾玉に対する呪力を強化して同形の子を附着させたものがその発想であったと見たい」〔大場 1962 ; 105 頁〕と、子持勾玉の出現過程について説かれている。

それを受け、寺村光晴氏は、古墳時代前期から中期への移行期について、玉の性格が変化していくことを指摘している〔寺村 1980〕。それは、前期の玉類における宝的・呪的性格が中期になると、宝的性格には色彩や材質・形状の多様性が見えてくるとしている。また、呪的性格は、呪的性と祭性へと分化していくとし、祭性には滑石製模造品の出現があげられ、残存した呪的性格を帯びたものを子持勾玉としている。これをふまえて、背合わせ勾玉の成立を見ていくと、従来よりも早い段階、すなわち4世紀後半頃には、近畿地域を中心とした地域において宝的・呪的な碧玉石製品から祭祀的性格を帯びた滑石製品の分化を確認できる貴重な事例といえるのではないか。

## 第7節 小結

以上、背合わせ勾玉の分布状況や成立過程、そして包含していたと考えられる意味などについて述べてきた。ここであらためて、背合わせ勾玉像についてまとめておくことにする。

まず、鳥取県博労町遺跡から出土した背合わせ勾玉（Aグループ）と、尾島祭祀遺跡や高部古墳群といった常総地域内で確認されたもの（Bグループ）の間には、出現時期や形態的特徴に差が見出せることから、成立過程が異なることを明らかにした。前者を初期的（Aグループ）とし、古墳時代前期における碧玉製石製品と当時の人々の思想を組み込む形で成立したと考えた。

また、後者（Bグループ）の成立は、立花と石製模造品生産技術の組み合わせによって

作り出されている可能性が高いことを指摘した。背合わせ勾玉と子持勾玉の間には、間接的なつながりは認められるとしたが、性格の大部分は異なるとし、両者における系譜的つながりは薄いと考えられる。そして、背合わせ勾玉の出現期が4世紀後半から5世紀初頭であることから、石製品からの滑石製の祭祀品が分化していくと考えられている従来の時期観よりも、僅かではあるが早まると考えられる。

さらに、背合わせ勾玉からは、具体的な人々の願いや要求が読み取ることができないことから、祭祀の場における道具の1つであったとした。機能について、Aグループは、勾玉が「分裂」することによる呪力の増強を第一義とし、祭祀行為を補強する役割を担っていたと考えた。また、Bグループに関しては、立花の性格をふまえ「緊縛・結びつけ」を意味し、Aグループと同じく呪力の強化を意図したものと考えた。

そして、古墳からも勾玉を2個対にして用いた事例があることを述べ、これらについては、祭祀遺跡の場合とは別の性格が込められていた可能性があることも指摘した。しかし、多様な意義の分化が読み取れる場合であっても、根底には勾玉の意味合いが確実に存在していることは言うまでもないであろう。

最後に、いくつか問題点をあげ、今後の課題を提示することにしたい。これまで背合わせ勾玉について考察を加えてきたが、明確にその実像に迫りきれたとは言い難い。その理由としては、筆者の力量不足とあいまって、圧倒的な参考資料の不足があげられる。とくに、Bグループの成立に関して、理論的立証が未だ不十分であり、あくまで成立過程の可能性を提示するにとどまってしまったと思われる。

玉と玉を合わせる意味について述べるならば、子持勾玉などの先学からある程度は予想することができるかもしれない。しかし、どのようにして玉と玉をむすぶという信仰が生まれたのかといった初現的な理由は不明確であり、考古学的に立証するには困難を極めるであろう。そのほかにも、なぜ背中合わせにする必要があったのかについても、未だ明確な結論を出すまでには至っていない。

後者の疑問については、古墳時代以前に呪的な力が込められていた可能性が高い同様な平面形態を有する遺物は存在している。しかし、形態的特徴をそのまま継続的に受け入れたとしてよいものではないであろう。そこには当然、各時代の社会・政治・地域性といったものを考慮したうえで考えなければならない問題であろう。

また、背合わせ勾玉が祭祀遺跡、横合わせ勾玉は古墳から主に出土しており、勾玉を連接する部位の違いによって、出土遺跡の性格の違いが見てとれる。民俗の事例で、田の神への供え物の中に、2匹の魚を腹合わせにして供えるという記事がある〔池上 1953〕。残念ながら、腹合わせにする意味は述べられていないが、わざわざ魚の供えられた状況について書き留めていることから、そこには重大な意味が潜んでいたと考えてもよいであろう。魚を腹合わせにしている遺物としては、奈良県に在る藤ノ木古墳などから出土している魚佩が直ぐに思いつくであろう。

このように考えていくと、背合わせ勾玉は、古代における人々の思考の一端を垣間見る

ことができる良質の資料であることがいえる。しかし、出土数が絶対的に不足しており、多角的な視点からの研究が困難である。今後は、出土件数の増加を期待しつつ、共伴遺物や祭祀形態、祭祀行為の対象などを考慮した総合的な視野からのアプローチが必要であろう。

## 付記

本章の脱稿後、未報告ではあるが石川県の古墳からも背合わせ勾玉状の玉製品が出土していることを河村好光先生と伊藤雅文先生のご教示によって知った。その古墳は、石川県七尾市にある国分尼塚1号墳で、古墳時代前期後葉に築造された前方後円墳である〔橋本1989〕。また、発掘調査によって、埋葬施設からは、夔鳳鏡・直刀・管玉・鉄剣・鉄槍・銅鏃・鉄鍬・鉄斧・鉈・鉄鑿・箆・鞞・漆製品などと共にヒスイを材質とした背合わせ勾玉状の玉製品が確認されている。

この玉製品について述べるならば、1箇所しか孔が無く、形態も古墳時代に多くみられるC字あるいはコの字を呈する勾玉2個を背合わせにしたものではない。そのため、本章で設定した背合わせ勾玉に含むことには、やや躊躇を覚える。これらのことを考え合わせて述べるならば、現段階においては、背合わせ勾玉に含まない、としておいたほうがよいであろう。また、仮に、この玉製品が背合わせ勾玉に関連した遺物の1つとして考えるとすれば、Aグループの背合わせ勾玉との関係性が考えられる。

出土が確認された古墳については、副葬品の様相などから近畿地域とのつながりが考えられていることをふまえて述べるならば〔七尾市史編さん専門委員会 編 2002〕、第4節で述べたように、やはり背合わせ勾玉を形成する要素が、近畿地域で発生したことを想定することはできるのではなかろうか。

## 註

註 57 背合わせ勾玉の記事は、2008年4月4日金曜日に掲載されている。

註 58 記事の中で、元島根県古代文化センター特任研究員の大賀克彦氏や発掘調査を担当した統括調査員である平木祐子氏が、コメントをよせている。

註 59 今回、例にあげた奈良県榛原町に在る澤ノ坊2号墳から出土が確認された、勾玉が2個同じ方向で接続した勾玉は、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に収蔵されている〔玉城 2004〕。

註 60 常陸鏡塚古墳出土のものを取り扱うさい、大場氏は、常陸鏡塚古墳から出土した異形の滑石製品について、使用法によっては、立花形石製品になることも想定している。しかし、この異形滑石製品が、多数の滑石製白玉類を伴う形で出土していたため、白玉類と共に懸垂して用いた可能性が高いとし、勾玉接続品の1つに加えて考えているようである。また現在の研究段階において、常陸鏡塚古墳からの出土遺物は、一般的に立花と考えられている。そのため、大場氏のいう立花形石製品に含まれると考えられる。

- 註 61 現在の常陸鏡塚古墳の造営時期は、4世紀後葉とされ、時代でいうと古墳時代前期の後半から末葉になる。
- 註 62 2009年に行われた福市考古学資料館講座「博労町遺跡最新報告―地下3m、砂丘遺跡が語る米子の歴史―」に筆者が参加した際、米子市教育文化事業団間御像文化財調査室の濱野浩美氏にご教示いただいた。
- 註 63 寺門義範 1975「前浦遺跡」の中に、前浦遺跡から縄文時代晩期の製塩址が確認されている。また、古墳時代の窯址も確認されており、これを古墳時代製塩窯の可能性が高いとしているが、明確な根拠は類似資料による裏付け中としている〔寺門 1975〕。
- 註 64 ここでいう中期古墳文化とは、いわゆる小林行雄氏のいう、古墳における石製模造品の同種多量化傾向という特徴をもち始める時期のことをいう〔小林 1961a〕。
- 註 65 16号墳は、古墳群の栗山南支群に属する円墳である。また、古墳群の中で独立した台地上に単独で造営されている点などから、他の古墳とは性格が異なった古墳であると考えられている。そして、主体内部からは、石枕3、滑石製立花15、滑石製品（斧1・刀子5・鎌1）、瑪瑙製勾玉2、滑石製勾玉37、緑泥岩製管玉21、碧玉製管玉1、緑泥岩製円柱状石製品2、白玉2529、ガラス玉9、鉄剣2、鉄刀子1、石製模造品形鉄刀子1と石片1が出土している。築造年代は、5世紀中葉頃である。出土状況に関しては、木棺直葬の主体部から3点もの石枕が出土しており、立花は各石枕周辺に蒔かれた状態で出土が確認されている。
- 註 66 この遺物は、同市七丁目沢2遺跡出土の岩偶と合わせて、同市大麻3遺跡から出土した土偶の形態的特徴が近似していることから、この土偶と関係性が深いことが言われている〔江別市教育委員会 2004・1996・1986〕。
- 註 67 背合わせ勾玉の表面は研磨されているが、子持勾玉はケズリによって仕上げられており、研磨痕は通常みることができない。

## 第5章 土製勾玉に関する基礎的研究

### 第1節 問題の所在

従来、勾玉研究が対象としてきた材質には、石や金属・ガラス・コハクがあげられる。しかし、出土する勾玉のなかには、これらの他に捏ねた土を用いて作られたものも確認されている。この土製の勾玉は、縄文時代早期から中世にかけて、日本列島のほぼ全域で出土が確認されている。つまり、土製勾玉は他の材質の勾玉と同様に列島社会のなかで広く、且つ長期的に用いられ続けたものの1つといえるであろう。

とするならば、土製勾玉を通して原始から古代・中世といった時間的変遷のなかで、人びとの勾玉に対する認識がどのように変化したのかを考えていくことが可能であり、このことは興味深いテーマと思われる。そのためにはまず、土製勾玉に関する基礎的情報の構築が必要であろう。

しかし、従来の研究をみると、このことは十分になされているとはいえないように思われる。そこで、本章では従来の勾玉研究においてあまり研究対象とはされてこなかったこの土製勾玉に焦点をあて、その変遷を中心に考察を試みることにしたい。考察にあたって、はじめに土製勾玉の研究史の整理を行ない、問題点を把握することにする。

土製勾玉の研究については、対象とする時代により①縄文時代、②弥生時代、③古墳時代から平安時代、そして④確認できる全時代の4つに大別することができる。

まず、縄文時代の土製勾玉について述べるならば、青森県〔青森県埋蔵文化財調査センター 2006、2007〕・愛知県〔伊藤 2005〕・九州地域〔九州縄文研究会・沖縄大会実行委員会 2005〕に関しては、すでに集成され報告がなされている。また、川添和暁氏は、愛知県の集成作業を行なった伊藤正人氏の研究をふまえて、縄文時代後・晩期における東海地域の土製玉類の集成を行なっている（註 68）〔川添 2015〕。金子昭彦氏は、津軽海峡圏における土製勾玉は、後期に出現が確認され、晩期に出土量が増加すること、さらに当該地域から出土する土製勾玉のなかには、頭部と尾部の両端に刻み目が施されたもの（註 69）が確認できることを指摘している〔金子昭 2016〕。

次に、弥生時代の土製勾玉については、藤森栄一氏が長野県天白遺跡と岡山県津雲貝塚〔清野 1925〕をとりあげて、弥生時代の遺跡から出土する土製勾玉について言及している〔藤森 1931〕。しかしながら、これは個別事例の紹介で止まっており、土製勾玉の形態的特徴や時期的変遷・地域性などについての議論が行なわれ始めるのは、1970年以降になってから東日本と西日本のそれぞれの地域で土製勾玉の研究が行なわれていくことになる。

東日本における土製勾玉に関しては、合田芳正氏が19遺跡を取り扱い、関東地域における土製勾玉の様相を明らかにしようと試みている〔合田 1974〕。合田氏は、出土遺跡が多摩川下流域流右岸から鶴見河域沿いにいたる地域集中することや出土数が弥生時代後期

に最盛期をむかえること、さらに、古墳時代の土製勾玉との連続性が見出しにくいことなどを指摘している。これらのうち、古墳時代の土製勾玉との非連続性については、弥生時代では竪穴建物、古墳時代では祭祀遺跡から土製勾玉が多く出土していることに注目し、性格的に繋がりがみえないことを根拠としている。

西日本における土製勾玉に関しては、森貞次郎氏〔森 1980〕と木下尚子氏〔木下 1987〕の研究がある。森氏は、弥生時代の土製勾玉と縄文時代の土製勾玉との間に連続性があることを述べ、木下氏は弥生時代後期の土製勾玉が、瀬戸内海沿岸地域に集中することなどを明らかにしている。森氏・木下氏の両氏が共通して指摘していることは、土製勾玉が弥生時代後期に増加することである。合田氏・森氏・木下氏の研究は、弥生時代における土製勾玉の変遷の把握に加え、前後の時代との系譜的繋がりにまで言及したものとして画期的といえる。

古墳時代以降における土製勾玉の研究について述べるならば、研究当初から土製模造品研究の一環として行なわれることが少なくなかった（註 70）。高橋健自氏のいうように「型式のみを具備せる仮器」で、「一種の模型（雛形）」であるものを模造品とよぶならば〔高橋 1919；1 頁〕、研究者の多くは、土製勾玉が石製勾玉を模造したものであるという認識のもとに議論が進められてきたといえる。これについては、出土した土製勾玉の多くが土製模造品の項目内で報告されていることや〔後藤 1930、大場 1943・1967・1970〕、斎藤忠氏が著した『日本考古学用語辞典』に収録されている土製勾玉の解説の冒頭に「土製模造品の一」〔斎藤 1992；325 頁〕と記されていることから容易に想像がつく。

一般に土製模造品は、出土状況などから祭祀遺物としての性格が考えられており、『神道考古学講座』の発刊以降〔大場 編 1972～1981〕、全国あるいは県単位での集成作業が行なわれている。その結果、土製勾玉の情報が急速に蓄積されていくことになる。具体例には、椛山林繼氏による関東地域における土製模造品の出土遺跡の整理や〔椛山 1972〕、金子裕之氏による奈良・平安時代における祭祀遺物の集成〔金子裕 1988〕、さらに、亀井正道氏や東日本埋蔵文化財研究会が行なった祭祀に係る遺跡と遺物の全国集成などがよく知られている〔亀井 1985、東日本埋蔵文化財研究会 1993〕。

しかし、土製勾玉の情報が蓄積されていくにつれて、多くの研究者の興味は土製模造品を用いた祭祀行為の解明に集中するようになり、その研究の視角は土製模造品の組成を比較・検討することに重点がおかれるようになり〔竹内 2001・2002、山梨県考古学協会 編 2008〕、個々の土製模造品に対しての研究は少ない。そして、その傾向は現在にまでいたっていると思われる。

土製模造品研究の成果をみると、まず、遺跡数の変遷については、古墳時代後期に出土数の最盛期をむかえ、終末期に一端減少し、奈良時代に入ると増加していくという傾向がみられる〔篠原 2008〕。このことについては、古墳時代から律令国家体制への転換期を境にして土製模造品を用いた祭祀の内容が変化したと考えられている〔入江 2009〕。地域性については、亀井氏が古墳時代中期において近畿地域よりも関東地域や北部九州地域

に色濃く分布することを指摘し、土製模造品は在地的な色彩が強くみられる遺物であると性格づけている〔亀井 1985〕。この亀井氏の指摘に対し、鈴木敏則氏は古墳時代中期には多種多様な土製品を用いる祭祀が汎列島的に行なわれた可能性が高いことを述べ、土製模造品を用いた祭祀自体は地域性の強いものとは言い切れないことを主張している〔鈴木 2008〕。これらの指摘は、土製模造品全体に対して行なわれたものであり、これらをもって直接的に土製勾玉の変遷や地域性を考えることはできないが、それでもある程度の共通点はみられるものとして評価できるであろう。

そして、全時代を通じて土製勾玉の様相を明らかにしようと試みたのが、的野善行氏である〔的野 2005〕。的野氏は、関東地域における縄文時代から平安時代にかけての土製勾玉を集成し、分布・遺物の特徴・出土遺構に注目しながら、それぞれの変遷を長期的な視野のもと概観している。

以上、研究史を概観した。あらためて研究史を総括するならば、まず、縄文時代における土製勾玉の研究については、変遷の把握といった視点でみた場合、現状では集成段階に留まっており、その集成データについても空白地域が多くみられる。

次いで、弥生時代の土製勾玉については、分布の変遷や時期差による遺跡数の増減についての議論は行なわれてはいるが、対象地域が関東地域あるいは北部九州を中心とした西日本というように限定的であるため、その他の地域の様相も把握する必要があると考えられる。

古墳時代以降の土製勾玉については、縄文時代と同様に土製勾玉に焦点をあて、その変遷などの議論は行なわれていない。また、この時期の土製勾玉については、土製模造品研究の成果を用いることによって、分布の広がりや時期差から生じる遺跡数の変化をある程度、推測できることをすでに述べたが、それだけでは不十分と考えられる。なぜならば、古墳の石室や土坑墓から土製勾玉が出土している事例が確認されているにもかかわらず、従来の土製模造品研究は、いわゆる祭祀遺構から出土した遺物のみを対象としており、埋葬施設内からの出土事例を含めての議論は積極的に行なわれてはいないからである。つまり、古墳時代以降の土製勾玉の様相を明らかにするためには、まず、出土場所が多岐にわたる土製勾玉の全体像を見通す必要があると考えられる。

さらに、研究史をみてもわかるように、土製勾玉の出現・発展・消滅を俯瞰するといった研究もいまだなされていないため、時代を跨いだ系譜の問題についても不明な点が多いことが指摘できる。

そして、土製勾玉について全時代の様相を明らかにしようとした研究は、的野氏の成果のみであり、それも対象地域が限定されている。

以上のことをふまえて、本章では土製勾玉の変遷については、対象とする時代・地域の枠組みをとりはずして、出土遺跡の分布と遺跡数によって時期区分を設定するとともに、土製勾玉自体の特徴や遺構の種類と出土状況といった視点からの把握も行ない、設定した時期区分の妥当性についての検討を行なう。そして、日本列島における土製勾玉の変遷過



程を明らかにし、その系譜的繋がりについて考察を加えることにする。これらのことを通して、原始・古代社会における土製勾玉の変遷を列島規模で明らかにし、その系譜的つながりの有無を追求することにしたい。

## 第2節 出土遺跡の分布とその変遷

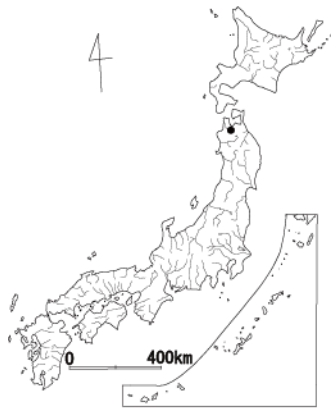
まず、集成した1,102遺跡から時期が明確なものを抽出し（註71）、出土遺跡の分布と遺跡数の変遷を検討する。第47・48図は出土遺跡の分布を面的に示したもので、第16表は各地域の出土遺跡数を時期ごとに整理したものであり（註72）、これらを基に分析を加えることにする。

第1期（縄文時代早期から縄文時代中期）は、土製勾玉の出現期にあたり、北海道や北東北地域で出土が確認されるものの、遺跡数は少ない時期である。最も古い事例としては、青森県三内沢部遺跡から早期中葉とみられる土製勾玉が出土しており、前期には北海道と岩手県で各々1例を数えるのみである。中期には9遺跡で土製勾玉が出土している。分布について述べるならば、早期・前期でみられた地域に加え、埼玉県や栃木県・長野県で出土が確認できる。南東北地域での出土が確認できないため、いわば飛び火した形で分布圏が広がるのが指摘できる。

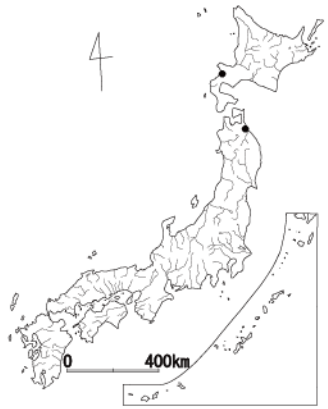
第2期（縄文時代後期から縄文時代晩期）は、遺跡数が増加すると共に九州地域で土製勾玉の使用が開始される時期である。詳しくみていくと、後期になると、出土遺跡は33遺跡に増加する。まず、東日本での分布については、中期にみられた地域に加え、北陸地域・東山地域での出土が確認でき、分布圏が西方へ広がりを見せるのが指摘できる。一方、西日本は、大阪府馬場川遺跡の事例を除くと近畿地域・中国地域・四国地域からの出土はみられず、福岡県や熊本県といった九州地域で土製勾玉が確認できる。九州地域について、さらに細かく遺跡の年代をみると、縄文時代後期後葉以降の遺跡から出土が多くみられる。

晩期には縄文時代を通して最も出土遺跡が多くなり、その数は59遺跡を数える。分布状況は、東海地域や南九州地域での出土が確認できることを除くと、後期の分布と比較してそれほど大差はなく、遺跡数は後期から継続的に増加していったことが考えられる。

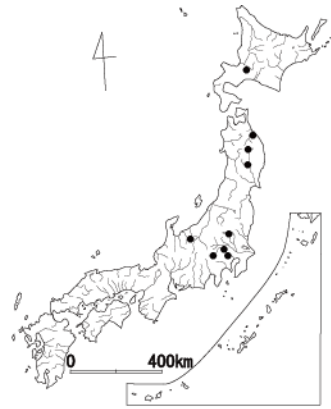
第3期（弥生時代前期から古墳時代中期）は、遺跡数が急激に減少し、東北地域・関東地域における土製勾玉が一度消滅の途をたどる。その後、急激に遺跡数が大幅に増加していき、関東地域を中心とした東日本では、一度終焉をむかえた土製勾玉の使用が再確認できる時期である。具体的には、前期になると、出土遺跡数は縄文時代晩期の59遺跡に比べ大幅に減って11遺跡となる。この時期の分布については、北海道や九州地域でのみ土製勾玉が出土している。また、中期になると出土遺跡が増加の傾向を示し、全部で59遺跡が確認できる。この時期の東日本は、埼玉県・千葉県・神奈川県といった関東地域で土製勾玉が集中して確認できるが、縄文時代や弥生時代前期とは異なり、北海道や北東北地域での



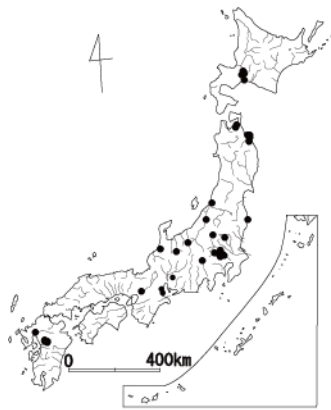
縄文時代早期



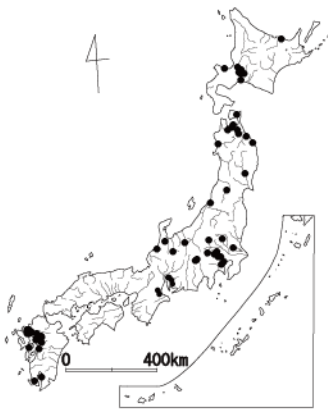
縄文時代前期



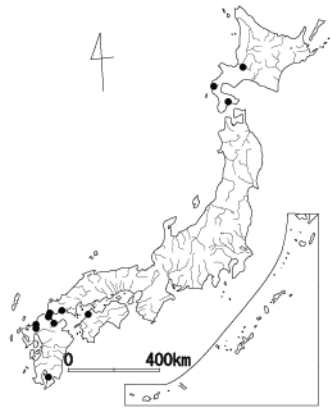
縄文時代中期



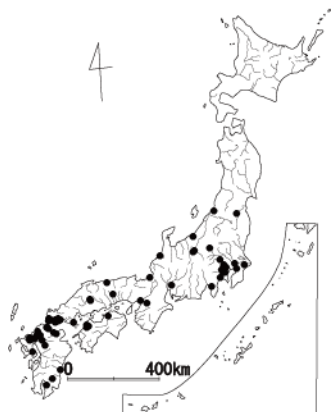
縄文時代後期



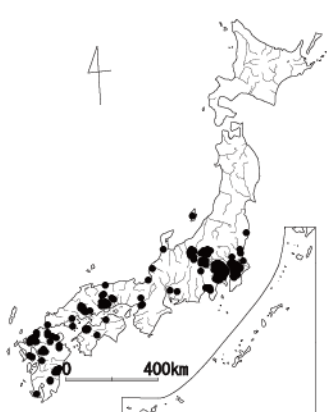
縄文時代晩期



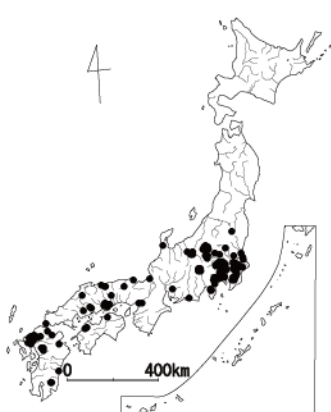
弥生時代前期



弥生時代中期

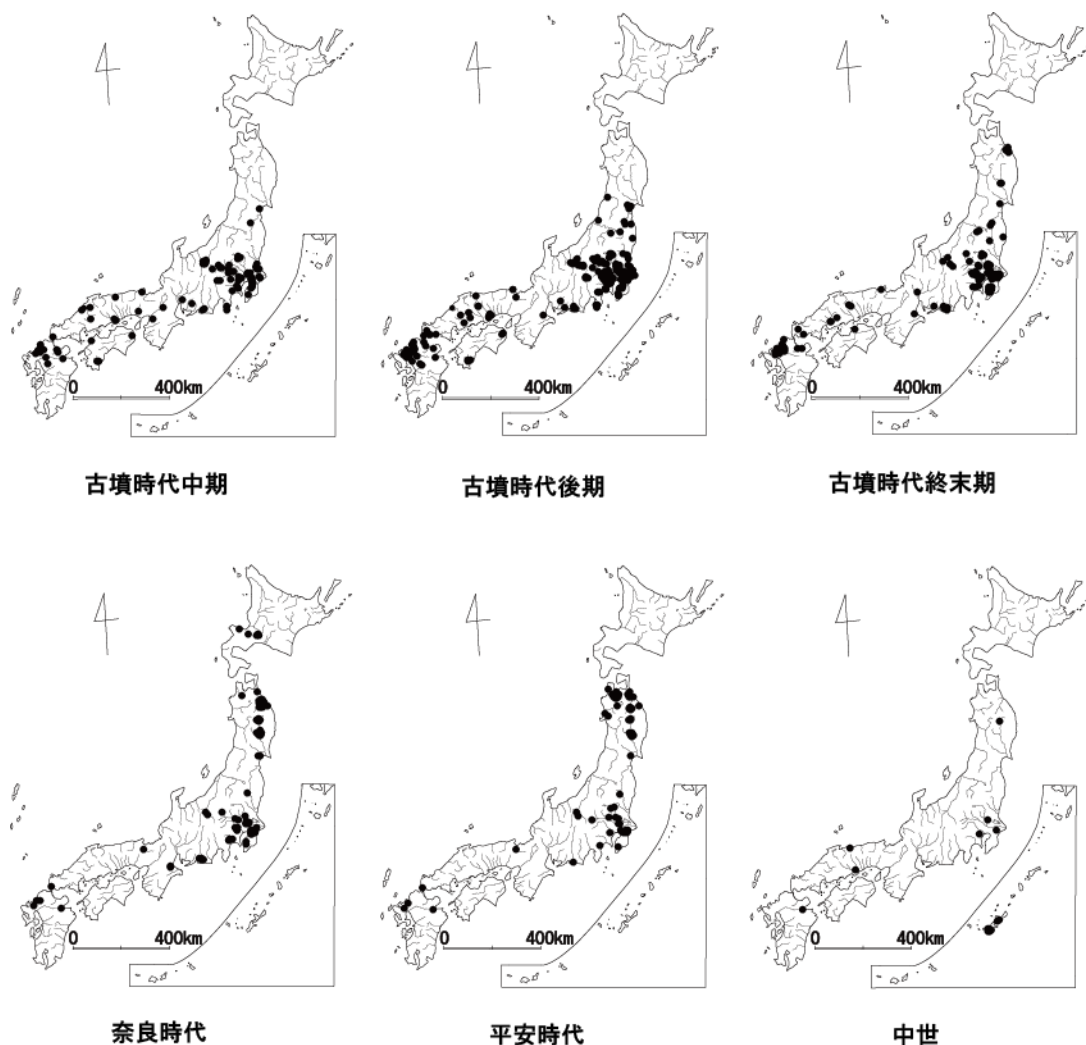


弥生時代後・終末期



古墳時代前期

第 47 図 出土遺跡の分布①



第 48 図 出土遺跡の分布②

出土はみられない。一方、西日本については、山口県と福岡県が出土遺跡数の多い地域となり、その他にも近畿地域や中国地域に加えて、香川県や愛媛県といった瀬戸内海沿岸地域にも分布が確認できる。

後期・終末期になると、さらに出土遺跡数の急激な増加がみられ、合計 222 遺跡が確認できる。分布については、中期の分布状況と比較して大差はなく、遺跡数は中期から継続的に増加していったと考えられるが、とくに関東地域や長野県・岡山県・広島県で大幅な増加がみられる。

古墳時代前期の出土遺跡数としては、163 遺跡が確認できる。この時期の土製勾玉は、関東地域と北部九州地域に最も密集して分布がみられるが同時に、中部地域・中国地域や香川県・愛媛県の瀬戸内海沿岸地域でも出土遺跡がまとまって確認できる。

次いで、中期になると出土遺跡数は 85 遺跡となり、前期に比べ大きく減少の傾向を示

第 16 表 各県における出土遺跡数の変遷

	縄文時代					弥生時代			古墳時代				奈良時代	平安時代	中世
	早	前	中	後	晩	前	中	後・終末	前	中	後	終末			
北海道	—	1	1	3	9	3	—	—	—	—	—	—	5	—	—
青森	1	—	1	5	7	—	—	—	—	—	—	5	10	18	—
岩手	—	1	2	1	2	—	—	—	—	—	—	2	27	15	1
宮城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	1	2	1	—
秋田	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—
山形	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
福島	—	—	—	1	—	—	1	1	1	1	6	6	1	1	—
茨城	—	—	—	—	1	—	—	10	7	7	22	5	3	2	1
栃木	—	—	1	1	1	—	—	—	2	3	9	4	—	2	—
群馬	—	—	—	1	1	—	1	15	14	4	14	2	1	1	—
埼玉	—	—	3	6	5	—	4	23	16	5	16	4	2	—	—
千葉	—	—	—	—	—	—	3	20	34	15	78	48	20	14	1
東京	—	—	—	—	1	—	1	20	12	3	18	7	3	1	1
神奈川	—	—	—	—	1	—	3	24	11	3	7	3	3	1	—
新潟	—	—	—	2	1	—	2	1	—	—	1	—	—	—	—
富山	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石川	—	—	—	1	1	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—
福井	—	—	—	—	—	—	1	2	1	—	—	—	—	—	—
山梨	—	—	—	1	1	—	—	1	6	2	3	—	—	—	—
長野	—	—	1	1	1	—	2	13	4	7	8	4	2	2	—
岐阜	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
静岡	—	—	—	—	—	—	1	6	4	4	6	4	4	1	—
愛知	—	—	—	1	4	—	1	2	1	2	2	1	—	—	—
三重	—	—	—	2	2	—	—	—	—	—	1	1	2	—	—
滋賀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
京都	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	2	1	1	1	—
大阪	—	—	—	1	—	—	1	2	2	1	—	—	—	—	—
兵庫	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—
奈良	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
和歌山	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鳥取	—	—	—	—	—	—	1	1	3	1	1	—	—	—	1
島根	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	1	—	—	—	—
岡山	—	—	—	—	—	—	1	21	7	2	6	2	—	—	1
広島	—	—	—	—	—	—	2	13	3	1	4	3	—	—	—
山口	—	—	—	—	—	2	9	3	1	1	4	2	1	1	—
徳島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	—
香川	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	—	1	—	—	—
愛媛	—	—	—	—	—	—	1	3	5	2	1	—	—	—	—
高知	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	3	—	—	—	—
福岡	—	—	—	1	1	3	13	12	17	7	28	20	2	1	—
佐賀	—	—	—	—	5	1	—	4	3	2	11	4	1	1	—
長崎	—	—	—	—	1	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—
熊本	—	—	—	4	8	—	1	5	3	1	2	—	—	—	—
大分	—	—	—	—	—	—	1	4	1	2	2	1	1	1	1
宮崎	—	—	—	—	—	—	2	7	3	—	—	—	—	—	—
鹿児島	—	—	—	—	2	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—
沖縄	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
合計	1	2	9	33	59	11	59	222	163	85	261	132	91	67	14

す。出土遺跡の分布は、前期の分布と比較して大きな変化はなく、全体的に遺跡数が減少しているといえる。特に、中国地域では前期よりも分布密度が低く、出土遺跡が散在していることが指摘できる。

第4期(古墳時代後期から古墳時代終末期)は、遺跡数が全時代を通して最も多くなり、関東地域を中心とした土製勾玉の分布圏が、北進しながら広がりを見せ始める時期である。詳しくみていくと、中期から後期になると、出土遺跡数は261遺跡と再び急激に増加していることが確認できる。分布は、大方、中期の分布と同様な状況を示しており、遺跡数は地域ごとに増加していることが確認できる。中期との違いをあげるならば、宮城県や山形

県・福島県で出土遺跡数の増加がみられることから、東北地域への分布の広がりがみられる。

終末期に入ると、出土遺跡数は132遺跡と減少する。分布については、まず、東日本では千葉県を中心とした関東地域に分布の中心地がみられ、その他にも東山地域・東海地域でも出土が確認できる。後期にみられた東北地域への分布の広がりは、青森県や岩手県まで確認できるようになる。西日本へ目をむけると、中国地域では出土遺跡数が半減し、四国地域にいたっては出土が確認できなくなり、分布が集中してみられるのが北部九州地域のみとなる。

第5期（奈良時代から平安時代）は、全体的に出土遺跡数が減少し、西日本での出土事例が大幅に減る時期である。詳しくいっていくと、奈良時代に入ると、遺跡数はさらに減少し、その数は91遺跡となる。この時期は、古墳時代を通して分布が集中してみられた北部九州地域でさえ、出土遺跡数が3遺跡となり、西日本全域で土製勾玉の出土がほとんど確認できなくなる。それに対して、東日本では、遺跡数は全体的に減少してはいるものの、千葉県を中心とした関東地域で継続して土製勾玉が出土している。関東地域よりも出土遺跡数が多く確認されるのが、岩手県を中心とした北東北地域であり、さらに、古墳時代を通して分布がみられなかった北海道でも土製勾玉がみられるようになる。

次いで、平安時代になると出土遺跡数は67遺跡を数える。分布については、奈良時代の分布と比較して大差ないが、新しく秋田県でも土製勾玉が確認されるなど、北東北地域では継続して多くの土製勾玉が使用されていることが指摘できる。

第6期（中世）は、土製勾玉の出土事例が全国的にごく僅かとなり、出土遺跡数の約半数がそれまでみられなかった沖縄県で確認され始める時期である。遺跡数などを詳しくみると、中世における出土遺跡は14遺跡と急激に減少し、そのうちの7遺跡は、いままで出土事例がみられなかった沖縄県で確認できる。他の地域については、岩手県・茨城県・千葉県・東京都・鳥取県・岡山県・大分県から1遺跡ずつ確認することができる。

これまで得たことをふまえて分析を加えるならば、日本列島で土製勾玉を最初に確認できるのは、縄文時代早・前期における北海道や北東北地域である。それ以降、提示した6つの時期と時期との間には、時間の経過と共に分布や出土遺跡の数が大きく変化していることが確認できた。

また、分布の変遷を全体的にみた場合、古墳時代の近畿地域での出土事例がほとんどみられないことは、土製勾玉の大きな特徴の1つといえる。さらに、土製勾玉の出土遺跡数が古墳時代後期以降、増加することなく減少し続けることが明らかになった。これは、奈良時代にはいると増加の傾向を示すとする従来の見解とは逆であり、興味深い結果といえよう（註73）。

以上、土製勾玉の変遷を第1期は縄文時代早期から中期、第2期を縄文時代後期から縄文時代晩期、第3期は弥生時代前期から古墳時代中期、第4期を古墳時代後期から古墳時代終末期、第5期を奈良時代から平安時代、第6期を中世といった6つの時期に区分して

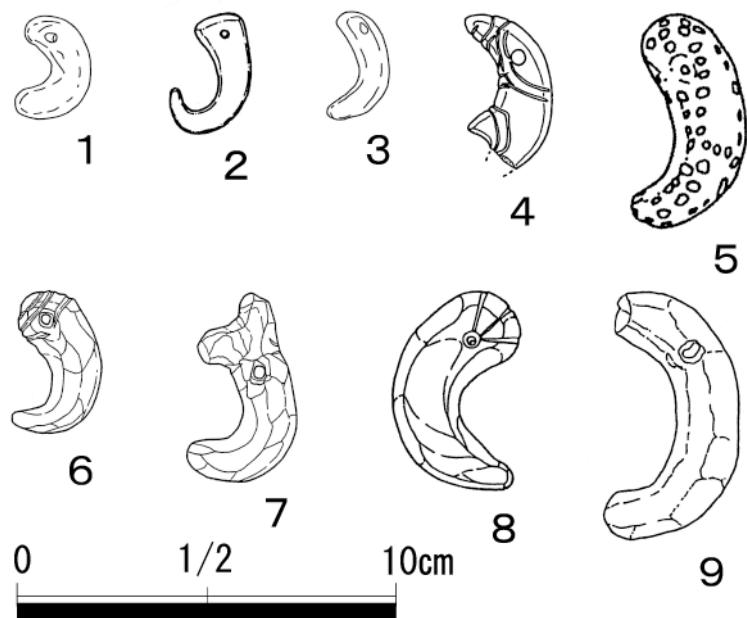
分布および出土遺跡数の変化を述べ、各時期の特徴について検討を加えた。時代を追っての叙述ということから、事実の羅列に終始したきらいはみられるが、これによって土製勾玉の分布や遺跡数が時期の変遷によっていかなる変化をみせるのかが具体的に明らかになったと思う。

### 第3節 土製勾玉の特徴からみた時期差・地域差

次に、集成した2,967点の土製勾玉に注目して、そこから出土する土製勾玉の特徴からみた時期差や地域差を明らかにし、それらが提示した時期区分と対応するの否か、検討を加える。

出土する土製勾玉は、軟質という材質の特徴からバラエティーに富んでいること、そして、時期をまたいで全国的に分布が確認できるものや、逆に類似する事例が少ないものが多くみられることが特徴としてあげることができる(註74)。

こうした状況のなか時期差や地域差がみられる土製勾玉もある。まず、縄文時代後・晩期には、土製勾玉の体部全体に線刻を施されたもの(第49図の4)や、体部全体あるいは一部に棒状の工具による刺突文が確認できるもの(第49図の5)、頭部に刻み目や抉りが施されているもの(第49図の6・7)が確認できるが、同時期の九州地域では、こうした形態の土製勾玉の出土は確認できない。これは、第2期(縄文時代後期から縄文時代晩期)における地域性の1つの特徴としてあげられる。



第49図 土製勾玉の種類

1. 埼玉県真鏡寺後遺跡 2. 宮崎県八幡上遺跡 3. 長野県榎田遺跡  
4. 青森県風張(1)遺跡 5. 栃木県松の木遺跡 6・7. 三重県天白遺跡  
8. 福岡県高田遺跡 9. 千葉県東長田谷遺跡

また、弥生時代中期になると、第49図の8で示したような頭部に穿たれた孔から放射状に数条の線刻が施された、いわゆる丁字頭勾玉が西日本でのみ出土するようになる(第17表)(註75)。この土製丁字頭勾玉は、のちの古墳時代になるとみられなくなるということも1つの特徴としてあげられる。これは、第3期(弥生時代前期から古墳時代中期)のうちの弥生時代中期から終末期における地域性の1つとして

第 17 表 土製丁字頭勾玉の出土遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	点数	出土遺構	文献
1	高塚遺跡	岡山県岡山市	弥生時代後期	1	角田調査区 方形土壇107	1
2	楯築弥生墳丘墓	岡山県倉敷市	弥生時代後期後葉	2	円礫堆出土 墳丘墓	2
3	毘沙門台東遺跡	広島県広島市	弥生時代後期	1	第25号住居跡 周辺地山面	3
			弥生時代後期?	1		
4	京野遺跡	広島県山形郡	弥生時代後期	1	SX20 段状遺構	4
5	高田遺跡	福岡県福岡市	弥生時代後期後半～末葉	1	溝1	5
6	方保田東原遺跡	熊本県山鹿市	弥生時代終末期～古墳時代初頭	1	15号住居跡 竪穴住居	6
			弥生時代～平安時代・中世	1		4区 遺構外
7	樋尻道遺跡	大分県宇佐市	弥生時代中期中葉～後期後半	8	10号墓及びその周辺 失蓋土壇墓	8
8	ズクノ山第1遺跡	宮崎県宮崎市	弥生時代中期後半～後期初頭	1	SA-10 竪穴住居	9
			弥生時代中期～後期	1		

捉えることができる。

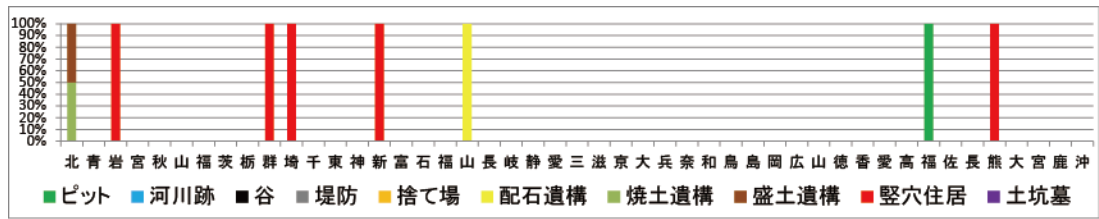
古墳時代後期以降には、第 49 図の 9 のような細めの粘土紐を用いて、体部がやや縦方向に間延びし、挟りの部分は他の土製勾玉と比べてより大きめな「C」字あるいは「コ」の字形を呈したものが、関東地域を中心とした東日本で集中して出土するようになる。この現象は、第 4 期（古墳時代後期から古墳時代終末期）以降になると確認できる特徴の 1 つといえる。

以上、土製勾玉の特徴を整理し、時期差などについても検討を試みた。土製勾玉は石製勾玉のように明確な基準のもとに分類し時期差や地域性を把握することが困難であり、そのため土製勾玉の断片的な情報を組み合わせて述べざるを得なかったが、時期や地域ごとでいくつかの特徴的な様相が具体的に明らかになったと考えられる。

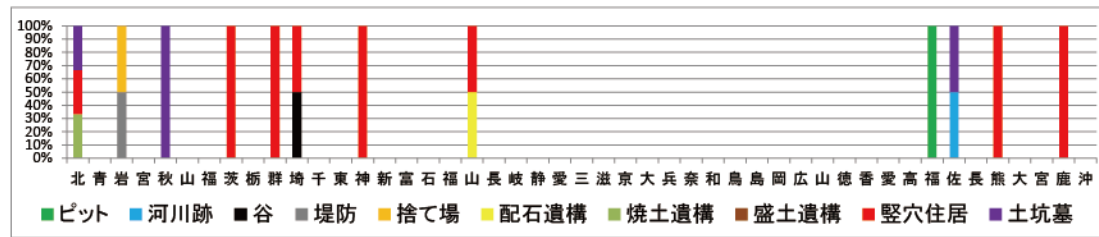
また、すべての時期区分との対応性はみることはできないものの、土製勾玉の特徴からみた場合であっても、第 4 期（古墳時代後期から古墳時代終末期）に様相の変化がみられることを指摘することができる。

#### 第 4 節 遺構の種類および出土状況の変遷

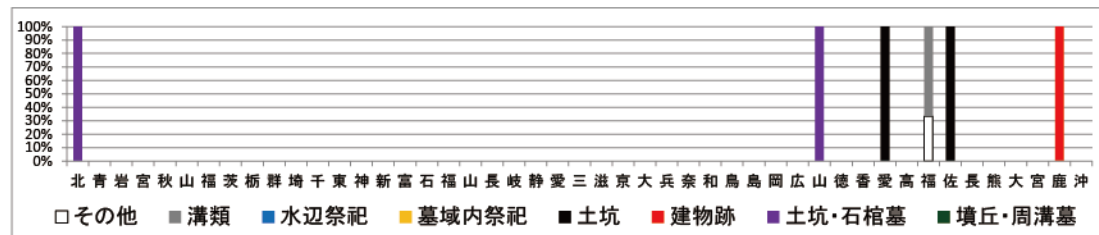
土製勾玉が出土する遺構の種類は多岐にわたる。具体例をあげるならば、竪穴建物や掘立柱建物、墓に加え、谷や河川跡・水田跡・焼土遺構・遺物集中地点、さらに、事例が少ないものでは窯址灰原周辺や土師器焼成土坑などでも土製勾玉の出土が確認されている（註 76）。加えて、竪穴建物では炉やカマドの内部あるいはその周辺・貯蔵穴・ピット・周溝、古墳では石室・古墳封土・周溝といったように、1 つの遺構のなかにおいても出土場所に関しては多様性がみられる。これらのことをふまえて、出土遺構の種類や出土場所がどのような変遷をたどるのかを明らかにすると共に、提示した時期区分との対応性を考えていく。まずは、出土遺構の種類について、6 つの時期に対応させながらみていきたい。



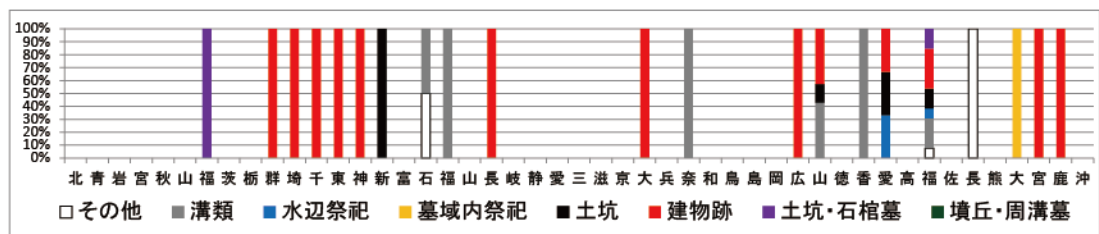
縄文時代後期



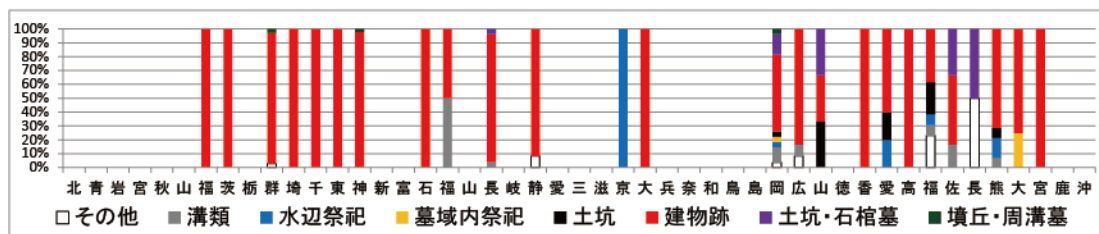
縄文時代晩期



弥生時代前期



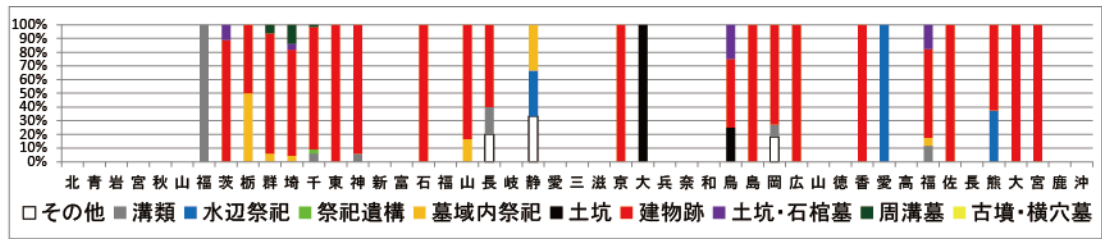
弥生時代中期



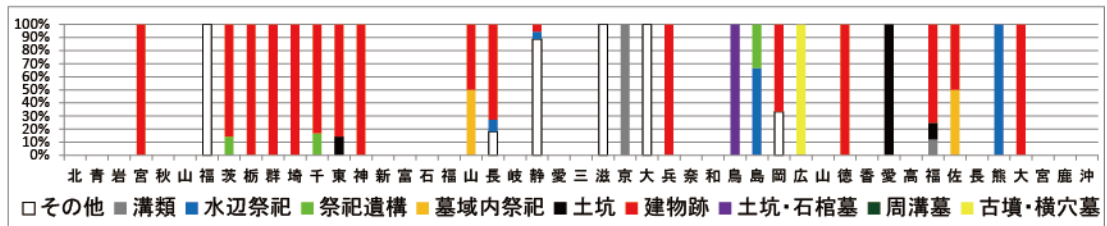
弥生時代後・終末期

第50図 出土遺構の変遷①

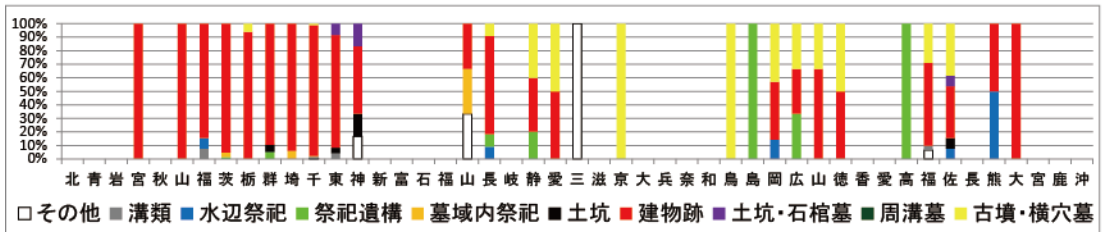




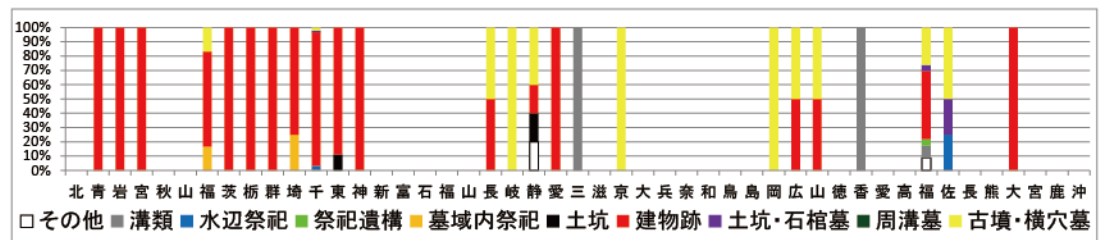
古墳時代前期



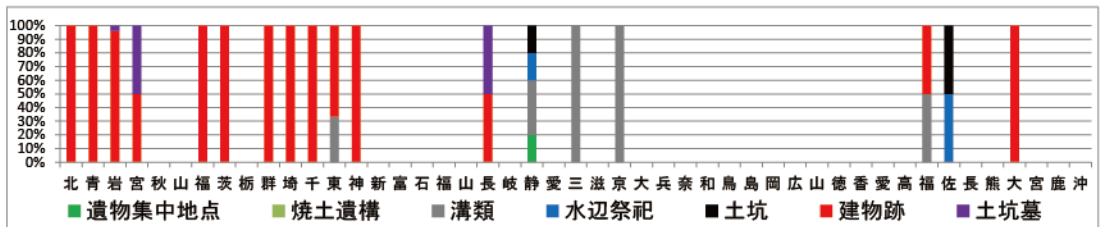
古墳時代中期



古墳時代後期



古墳時代終末期



奈良時代

第51図 出土遺構の変遷②

第 50～52 図は、集成した 1,502 遺構をもとにして、時期ごとに出土遺構の種類を県別に示したものである（註 77）。

第 1 期（縄文時代早期から縄文時代中期）では、縄文時代早期の青森県、縄文時代中期の岩手県・関東地域における土製勾玉は、すべて竪穴建物から出土している。

第 2 期（縄文時代後期から縄文時代晩期）になると、中期の様相とは異なり、出土遺構に多様性がみられる地域が確認できるようになり、晩期には墓からの出土事例もみられるようになる。また、九州地域の北部は出土遺構が多様であるが、南部は竪穴建物が多い傾向を示す。詳しくみていくと、後期に入ると、竪穴建物からの出土事例が多い岩手県や関東地域・新潟県・熊本県に対して、北海道では盛土遺構・焼土遺構、山梨県では配石遺構、福岡県ではピットから土製勾玉の出土が確認することができる。九州地域について、福岡県ではピット、熊本県では竪穴建物からの出土が確認できる。

縄文時代晩期になると、関東地域や熊本県・鹿児島県といった南九州地域の土製勾玉は、竪穴建物から出土する割合が高くなる傾向を示す一方で、北海道や東北地域・北部九州地域では、竪穴建物以外の遺構からの出土が多くなる。縄文時代後期とは異なる点を述べるならば、北海道や秋田県・佐賀県における墓から、土製勾玉が出土する遺跡が確認できるようになる。九州地域をみると、福岡県ではピット、佐賀県では土坑墓・河川、熊本県・鹿児島県では竪穴建物からの出土事例がみられる。

第 3 期（弥生時代前期から古墳時代中期）になると、前期には、関東地域における竪穴建物からの出土事例が確認できなくなる。そして、中期以降になると、時期や地域によって出土遺構の種類は異なりをみせるものの、列島規模でみた場合には、竪穴建物からの出土が多い東日本と、比較的、出土遺構の種類に多様性がみられる西日本といった地域性が確認できるようになる。

地域ごとに様相を詳しく述べるならば、弥生時代前期に入ると、竪穴建物からの出土事例は鹿児島県の 1 例のみとなり、縄文時代では全ての出土事例が竪穴建物からであった関東地域では、土製勾玉の使用が確認できなくなる。その他の地域については、北海道や山口県では土坑墓、愛媛県や佐賀県では土坑、福岡県では溝跡からそれぞれ土製勾玉が出土しているが、量的にごく僅かである。そして、弥生時代中期になると、竪穴建物からの出土事例が列島各地でみられるようになり、その中でも集成した関東地域のすべての土製勾玉が、竪穴建物から出土していることは注目される。

その他の地域について述べるならば、出土遺構の種類は 1 から 2 種類で、種類の割合はそれぞれの地域で様相を異にする。このようななか、福岡県の場合、土坑墓・竪穴建物・溝跡・貯水遺構・土坑というように、さまざまな遺構から土製勾玉の出土が確認されており、他の県とは異なった地域性をみせている。また、南九州地域では、竪穴建物からの出土が多いことも指定できる。

弥生時代後・終末期になると、東日本における土製勾玉の多くは、竪穴建物から出土している。それに対して西日本でも、やはり各地で竪穴建物からの出土が多いものの、東日

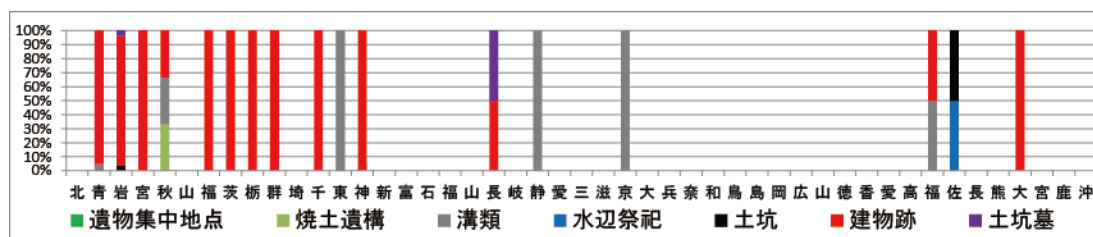
本とは異なり、周溝墓・土坑墓・石棺墓・流路・貯水遺構・土器溜まりなど、竪穴建物以外の遺構からの出土もある程度の数みることができる。そのうち、南九州地域では、継続して竪穴建物が多くみられることは、注目できる。

古墳時代前期の東日本の土製勾玉についてみると、関東地域や中部地域では、継続して竪穴建物が出土遺構の主体を成しており、他にも方形周溝墓や土坑墓・溝跡・井戸・墓域内の祭祀遺構なども確認できるが、事例数は少ない。一方、西日本では竪穴建物からのみ、あるいは竪穴建物から出土する割合が高い地域が多くなり、弥生時代後・終末期に比べて出土遺構の種類に多様性がそれほどみられなくなる。

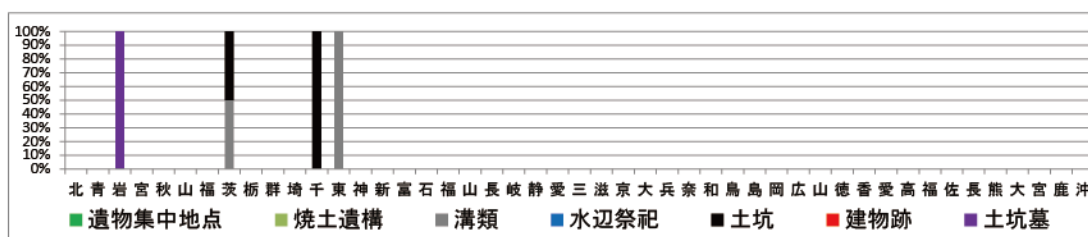
中期になっても、東日本の土製勾玉の多くは竪穴建物から出土している。これに対して、西日本は、京都府では溝跡、島根県では土器溜まりや取水堤付近、広島県では古墳の石室、愛媛県では土坑、熊本県では排水路から土製勾玉が出土しており、これらの地域からは竪穴建物からの出土事例が確認できない。すなわち、西日本全体でみた場合、竪穴建物から出土する割合は、古墳時代前期と比べて低くなる傾向がみられる。

第4期（古墳時代後期から古墳時代終末期）になると、関東地域と中部地域との間を境として東と西で出土遺構の様相が大きく異なることが指摘できる。具体的には、まず、後期に入ると、東北地域や関東地域では、土製勾玉の大半が竪穴建物から出土しており、中期から継続していることが指摘できる。しかし、東海地域や西日本では、竪穴建物や掘立柱建物からの出土事例は確認できるものの、古墳や横穴墓の埋葬施設内からの出土事例が増加する傾向がみられ、出土遺構の様相に変化がみられる。

終末期になると、その傾向がさらに強くみられ、東北地域や関東地域では継続して竪穴建物が出土遺構の主体を成しているのに対して、中部地域より西の地域では、出土する土製勾玉の多くが、古墳・横穴墓・土坑墓などの埋葬施設内から出土している。



平安時代



中世

第 52 図 出土遺構の変遷③

第5期（奈良時代から平安時代）は、中部地域以西の地域において、墓からの出土事例がほとんど確認できなくなる時期である。詳しくみていくと、奈良時代になると、集成した北海道・東北地域・関東地域の土製勾玉のほぼ全ては、竪穴建物から出土している。一方、中部地域以西の地域は、古墳時代終末期の様相とは異なり、埋葬施設内からの出土事例はごく僅かとなる。それに代わり、多くは溝跡や流路・土坑・土器集中地点といった竪穴建物や墓以外の遺構から出土するようになる。

平安時代に入っても、奈良時代の様相と大差はなく、東北地域や関東地域における土製勾玉の多くは竪穴建物から出土している。他の地域は、長野県では竪穴建物・土坑墓、静岡県や京都府では溝跡、福岡県では竪穴建物・溝跡、佐賀県では土坑・流路、大分県では掘立柱建物から土製勾玉が確認されている。

第6期（中世）になると、平安時代の様相とは大きく異なり、竪穴建物からの出土事例がみられなくなる。詳しく述べるならば、中世になると、岩手県では土坑墓、関東地域では溝跡や土坑から土製勾玉の出土が確認される。つまりは、平安時代の東北地域や関東地域において、出土遺構の主体を成していた竪穴建物からの出土事例がみられなくなる。

次に、出土場所に焦点を合わせて分析を試みることにしたい。ここでは、縄文時代から平安時代までの長期間にわたり出土がみられ、且つ、ある程度の量の事例が確認できる竪穴建物に焦点をあて、その時期差をみていくことにする。第18表は、竪穴建物における土製勾玉の出土場所を時期や地域ごとに分けて示したものである。ここから、様相が2つの時期で大きく変化していることが読みとれる。すなわち、第3期（弥生時代中期から古墳時代前期）と第4期（古墳時代後期から古墳時代終末期）である。

まず、第3期（弥生時代前期から古墳時代中期）は、関東地域を中心として、中部地域・山口県・香川県・九州地域といった各地の竪穴建物において、特定の場所から土製が確認されるようになり、弥生時代後・終末期が最盛期となる。また、事例数からみた場合、関東地域では、他の地域よりも積極的に炉跡を中心とした特定の場所で土製勾玉の使用が確認できる。

次いで、第4期（古墳時代後期から古墳時代終末期）について述べるならば、古墳時代中期では九州地域を除き、特定の場所からの出土事例が全国的に確認できなくなり（註78）、それが古墳時代後期に入ると、東北地域・関東地域・中部地域・中国地域・九州地域とい

第18表 竪穴建物における土製勾玉の出土場所の変遷

	弥生時代		古墳時代				奈良時代	平安時代
	中	後・終末	前	中	後	終末		
東北	—	—	—	—	カマド:1	カマド:4	カマド:7、ピット:1、周溝:1	カマド:4
関東	炉:2	炉:10、貯蔵穴:5、ピット:2、周溝:1	炉:8、周溝:1	—	カマド:21	カマド:6	カマド:1	カマド:2
中部	—	炉:1、ピット:2	—	—	カマド:1、貯蔵穴:1	—	—	—
中国	—	屋内土坑墓:1	—	—	カマド:1	—	—	—
四国	—	周溝:1	—	—	—	—	—	—
九州	—	炉:1、周溝:3	カマド:1	カマド:1	カマド:5	カマド:3	—	—

※(出土場所):(遺構数)、炉やカマドは内部あるいはその周辺から出土。

った広い地域でカマドからの出土事例が確認されるようになる。事例数をみると、関東地域の21例が最も多く、次に九州地域の5例、そして東北地域・中部地域・中国地域では1例ずつとなり、特に関東地域の様相は注目できる。このようななか、九州地域におけるカマド出土例については、古墳時代前期から継続的にみられることから、その他の地域と区別する必要があると思われる。

以上のことから、出土遺構の種類と出土場所の変遷過程が明らかとなったと考えられ、これらと想定した時期区分には対応性がみられるといえる。また、関東地域において、土製勾玉の出土遺構の様相が弥生時代と古墳時代とで大きく異なるといった合田氏の見解〔合田 1974〕について述べるならば、それほど明確に時期差が確認できるとはいい難い。これは従来、いわれてきたこととは異なった見解といわざるをえない。

## 第5節 土製勾玉の系譜の検討

いままで、土製勾玉の変遷の指標として、分布と遺跡数や土製勾玉の形態的特徴、出土状況に着目してその様相を明らかにすると共に、提示した時期区分への妥当性を検討した。時期区分への検討では、想定した時期と時期との間には、先にあげた3つの視点からみた場合、各々、様相の変化を確認することができることから、ある程度の妥当性をもっているものと考えられる。そして、この時期区分は土製勾玉の系譜と密接に関わるものと思われる。こうした認識に立脚し、土製勾玉の系譜について考察を試みることにする。

土製勾玉の変遷は、5つの時期に区分することができることはすでに述べた。この変遷過程を明らかにしたことにより、従来、それほど行なわれてこなかった土製勾玉の系譜について、議論が可能になったと考えられる。すなわち、時期が区分できるということは見方を変えると、土製勾玉の系譜が始まる、あるいは断絶していると捉えることができよう。

まず、第2期（縄文時代後期から縄文時代晩期）、すなわち、九州地域の人びとが土製勾玉を使い始める時期について述べるならば、九州地域において土製勾玉の出土事例が確認されはじめるのは、縄文時代後期後葉である。九州地域において縄文時代後期後葉は、石製装身具の様相が大きく変化する時期であり〔大坪 2003・2005〕、それにともない、人びとの装身具への認識も変化した可能性が高い。

また、最近の研究によって、縄文時代後期後葉の九州地域では、クロム白雲母製玉類が確認され始めることが明らかにされており、当期について大坪氏は、九州ブランドの萌芽

と成立の時期としている〔大坪 2015〕。

さらに、管見では、縄文時代の九州地域から石製勾玉が154点出土しており、これらの時期的変遷をみていくと、縄文時代後期から急激に石

第19表 九州地域の縄文時代における石製勾玉の消長

		福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島
縄文時代	草創							
	前		○		○			
	中							○
	後	●	○		●	●	●	●
	晩	●	○	●	●	●	●	●

※出土点数が○は4点以下、●は5点以上。

製勾玉が普及している（第19表）。これらをふまえるならば、従来の縄文時代後期後葉になると九州地域の人びとの石製玉類への認識が変化したとする考えに加えて、さらに、当期になると土製玉類への認識も同様に変化したことが考えられる。

そう捉えて大過ないとするならば、縄文時代後期後葉は九州地域における玉の性格が大きく変化するという点で画期とみることができ、九州地域における土製勾玉の系譜の出発点となる時期といえる。

次いで、第3期（弥生時代前期から古墳時代中期）と第6期（中世）では、出土事例が確認できなくなる、あるいは、出土量が急激に減少するとともに、使用する遺構の種類も大きく変化するという現象が汎列島規模で見られる。これらのことから、列島規模でみた場合、両時期に入る前と後とで土製勾玉の系譜的繋がり断絶を推測することができる。

そして、第4期（古墳時代後期から古墳時代終末期）は、関東地域を中心とした地域の土製勾玉の系譜を考えるうえで重要な画期として捉えることができよう。まず、当該期に入り、細めの粘土紐を用い、体部は縦方向に間延びすることにより、袂りの部分が同時期に出土する土製勾玉と比べてより大きめな「C」字あるいは「コ」の字形を呈するといった新しい形態の土製勾玉が確認できるようになる（第49図の9）。このことから、この形態の土製勾玉に関しては当期を系譜の出発点として考えることができる。

次いで、竪穴建物での土製勾玉の使用方法についても系譜の始まりが確認できるのではなかろうか。これについては、カマドからの出土事例が増加することと関連させながら（第18表）、もう少し説明しておく必要があるであろう。

金子裕之氏は、関東地域と中部地域における屋内祭祀の様相をみていくなかで、古墳時代後期におけるカマドを対象とした祭祀行為が、カマドの普及に加えて、それまでの炉の火に対する信仰が素地となっていることを推測している〔金子裕 1971〕。この指摘からは、前の時期からの連続性を間接的にはあるが、想定していることが読みとれる。確かに、古墳時代前期においては、炉跡からの出土事例が確認できるが、古墳時代中期になると、出土事例が確認されなくなることは看過できない。つまり、古墳時代後期のカマドで土製勾玉を使用する行為に、古墳時代前期の炉で土製勾玉を使用する行為からの連続性は見出し難い。それがたとえ同じ火処（註79）で土製勾玉を使用する行為が、ある種の記憶となっていたとしても、古墳時代中期に出土事例の空白期間が確認できる以上、系譜の繋がりを想定することには躊躇を覚える。

これらをふまえて、第4期（古墳時代後期から平安時代）に入ると、関東地域を中心とした地域では、竪穴建物での土製勾玉の使用方法における新しい系譜が始まると考えてよいのではなかろうか。

また、第5期（奈良時代から平安時代）になると、中部地域から西方の地域では、埋葬施設内で土製勾玉を用いるという使用面での系譜が、途絶えていくことを指摘できる。

## 第6節 小結

本章では、土製勾玉について従来行なわれてこなかった長期的かつ複眼的な見方を軸にして、分布と遺跡数や土製勾玉の形態的特徴、出土状況のといった視点から変遷過程を明らかにし、その系譜的繋がりについて考察を試みた。その結果、土製勾玉は時期的変遷のなかで時期や地域で差異がみられることから、汎列島規模で統一した文化の形成は考えることができない。土製勾玉の変遷過程については、6つの時期に区分し、各時期の様相については分布と遺跡数や土製勾玉の形態的特徴、出土状況といった視点から把握を試みた。視点が多岐にわたるので、それらをふまえて土製勾玉の変遷過程の要点をまとめる。

まず、第1期（縄文時代早期から中期）を土製勾玉の発生期と捉え、縄文時代早・前期における北海道・北東北地域の人びとが最も早く土製勾玉を用い始めた。

第2期（縄文時代後期から縄文時代晩期）になると、東日本に加え、九州地域でも土製勾玉の使用が開始される。分布といった観点でみるならば、本州西部の地域で出土事例がほとんど確認できない。さらに、九州地域では、東日本でみられるような土製勾玉の体部に線刻や刺突文が確認できる、あるいは頭部に刻み目や抉りが施されているといった特徴をもつ土製勾玉を確認することができない（第49図の4～7）。つまり、九州地域で土製勾玉が使用されはじめる要因には、同時期の東日本にみられた土製勾玉の文化の影響は見出し難く、縄文時代後・晩期における九州地域の社会の中で、独自に土製勾玉の使用が開始されたと思われる。

また、東日本と九州地域では大きく出土遺構の様相が異なり、さらに細かくみていくと、北海道および北東北地域と関東地域と中部地域、九州地域の北部と南部との間でも出土遺構の割合に多様性がみられる。これらをふまえるならば、縄文時代においては東日本と九州地域との間に大きな文化の差を想定することができ、土製勾玉を使用する場所については、それぞれの地域の人びとが独自に選択していたと思われる。

そして、第3期（弥生時代前期から古墳時代中期）には、関東地域を中心とした東日本と九州地域を中心とした西日本では、異なった様相が確認できる。すなわち、一度、使用が途絶えたのち、再確認される東日本に対して、西日本では出土遺跡が僅かながら確認することができることから、使用が途絶えることはなく、緩やかに第2期（縄文時代後期から縄文時代晩期）から第3期へ移行していったことが指摘できる。

また、当該期の様相については、関東地域を中心とした東日本では、竪穴建物が出土遺構の大半を占めているのに対して、西日本では竪穴建物以外の遺構から出土する土製勾玉も多く確認することができる。さらに、土製丁字頭勾玉が弥生時代中期から終末期にかけて西日本でのみ出土していることなども合わせて考えると（第17表）、弥生時代中期から後・終末期において、東日本と西日本との間で大きな文化の違いが想定できよう。こうした傾向は、古墳時代前期にやや薄れるものの、列島規模でみた場合、古墳時代中期まで継続してみることができる。

第4期（古墳時代後期から古墳時代終末期）になると、東北地域・関東地域と中部地域

以西の地域との間で出土遺構の様相が大きく異なることが指摘できる。当期においては、カマドからの出土事例が、関東地域を中心に増加する傾向が確認できるようになる（第18表）。さらに、関東地域においては、細めの粘土紐を素材とし、体部は縦方向に間延びすることにより、抉りの部分が同時代にみられる土製勾玉と比較すると大きめな「C」字もしくは「コ」の字形をなすといった（第49図の9）、それまではみることのできなかった新しい形態の土製勾玉が集中してみられるようになる。関東地域に関わるこれらの現象には、東日本におけるカマドの普及が大きな要因として考えられる（註80）。これらを考え合わせて述べるならば、関東地域以北の地域と中部地域以西の地域との間で土製勾玉を使う際の認識の違いがあったことが推測される。

第5期（奈良時代から平安時代）に入ると、西日本における土製勾玉の出土事例が減少し、中部地域よりも西の地域で見られた埋葬施設での土製勾玉の使用がほとんど確認できなくなる。

第6期（中世）は、出土遺跡数の大幅な減少に加え、分布や出土状況が第5期（奈良時代から平安時代）と比べ大きく変化していることが指摘でき、日本列島における土製勾玉の終焉期と考えられる。

以上の考察から変遷過程が明らかとなったと考えられる。また、的野氏の研究と関連させて述べるならば、関東地域でみられた古墳時代後期に出土数が増加するという現象は〔的野2005〕、北部九州地域でも顕著にみられ、その他の地域では東海地域、そして、岡山県・広島県・山口県といった中国地域のなかでも、瀬戸内海沿岸地域で同様な状況を確認することができる。

これをふまえてさらに、この変遷過程と土製勾玉の系譜との関わりといった観点で考察を行なうことにしたい。合田氏や森氏らは、すでに土製勾玉の系譜について見解を述べられているものの、その主たる根拠の提示については示されていない。本章では複数の具体的な事象の変化点を提示し、日本列島における土製勾玉の系譜の出発・断絶といった視点で考察を試みた。その結果、4つの点を指摘した。

第1点目として、第2期（縄文時代後期から縄文時代晩期）は、土製勾玉の発生が、縄文時代後期後葉の九州地域においてみられる玉類をとりまく社会の変化の一端として捉えることができることを指摘し、その発生についての考察も行なった。モノが発生する、あるいは、使用するといった場合、その背景にはきわめて複雑な要因を想定することができる。そして、それは、当時の人びとの思想的・宗教的観念を媒介としてはじめて現象として捉えることができると考える。考古学的研究から当時の人びとの精神文化的な考察が困難であることはいままでもないが、その思想的背景を可能な限り追求することは、勾玉の実像に迫る必須の作業であると思われる。

しかしながら、この問題については、勾玉の様相だけではなく、土製品からの視点も合わせて考える必要があるだろう。そのため、本章では大坪氏の研究を受けて〔大坪2015〕、縄文時代後期後葉になると九州地域の人びとの石製と土製の玉類への認識が変化したことを



指摘するに留めておくことにしたい。

第2点目として、第3期（弥生時代前期から古墳時代中期）と第6期（中世）にはいる前と後とで列島規模でみた場合、土製勾玉の系譜が断絶していることを指摘した。

第3点目として、第4期（古墳時代後期から古墳時代終末期）には、関東地域で新しい系譜をもった土製勾玉が確認できることや、関東地域を中心とした地域では、竪穴建物での使用方法において新しい系譜が始まることを指摘した。

そして、4点目として、第5期（奈良時代から平安時代）になると、中部地域よりも西方の地域において、埋葬施設内で土製勾玉を用いるといった使用方法からみた系譜が途絶えていくことを想定した。

これらの点のうち注目すべきは、稲作をはじめとした農耕社会が成立して以降、古墳時代中期まで継続性がみられ、後期に入ると新しい系譜が確認できることである。このことについて、いまして視野を広げて述べるならば、政治的区分という枠組みを土製勾玉の系譜にそのまま当てはめることはできないということが指摘できよう。

以上、本章では、土製勾玉の変遷過程および系譜に関して述べた。そこから、これらに関する従来の研究のうち、いくつかについては再検討する必要があることを指摘することができたと思う。

本章は土製勾玉に関する研究の第1段階であり、この基礎的な考察によって、今後、土製勾玉の意味や土製品の使用を受容した社会の一端を理解するうえでのより深い内容の研究が可能となったと考えられる。このことを今後の課題として研究を進めていきたいと考えている。考察対象が長期間にわたったことや資料的制約もあって、論旨がわかりにくいところもあったかと思うがひとまず擱筆することにした。

## 註

註 68 川添氏は土製玉類を分類も行っており、土製勾玉のなかに獣類牙と形態が近似するものがみられることを述べ、土製勾玉と男性あるいは狩猟との関係性を推測している。獣類牙に形態が近似するものとしては、岐阜県西田遺跡ではイノシシ雄犬歯、愛知県玉ノ井遺跡出土ではイヌ犬歯を模した土製勾玉の事例をあげている。本章で行なった集成によっても、獣牙類に形態的特徴が類似しているものが確認できた。事例をあげるならば、香川県砂入遺跡から出土した土製勾玉は、イノシシの牙を模している可能性が考えられる〔香川県教育委員会 ほか 2007〕。

註 69 金子昭彦氏が、両端刻目長形土製勾玉と仮称しているものである。

註 70 梅原末治氏は、現状では遺跡からの出土はみられない施釉の勾玉を紹介しており〔梅原 1965〕、白木原和美氏は、沖縄県竹富町黒島で確認されたパナリ焼きに類似する焼成方法で作られたといわれている土製勾玉3点を取り上げている〔白木原 1985〕。これら両氏の業績については、模造品としての土製勾玉といった認識の外で行われたものとする。

註 71 岩手県大館町遺跡と新潟県大清水遺跡から出土したものは、土製勾玉に含むか否か議論が分かれ

るところではあるが、本章では平面形態がC字形で頭部と尾部があり、孔が穿たれているものを集成対象としているため、これら2例も点数に加えている。

- 註 72 第 47・48 図・第 16 表では、遺構の時期が2つの時期にわたっている場合、それぞれの時期に点数を加算している。また、今回対象とする遺構の年代について、本来ならば、研究対象とした地域で共通した年代観のもと、時期区分を行なうべきである。しかしながら、本章では、取り扱う地域が日本列島全域と広域にわたり、各地域間の並行関係を把握することは困難であることから、各報告書などで報告者が想定した編年や年代観を基本的にはそのまま採用することとした。
- 註 73 さらに、土製丸玉が古墳時代前期の遺跡から多く出土することは、すでに指摘がなされており〔瓦吹 2006〕、同じ土製の玉類であっても変遷の様相には差異がみられることも考えられる。
- 註 74 形態に多様性がみられるものの、出土が多くみられる形態がある。まず、第 49 図の 1 のような平面形態が「C」字を呈するものや、第 49 図の 2 のように平面形態が「J」字状のものは、縄文時代以降、継続的に各地でみられる。また、第 49 図の 3 のように体部の中央で折り曲げられ、平面形態が「く」の字を呈するものも多く確認されており、それは弥生時代中期から古墳時代にかけての幅広い地域で出土が確認されている。特異なものとしては、頭部と尾部あるいは、背部に刻み目が施されているものもあるが、これらは継続的な出土はみられない。さらに、時期や地域を跨いで確認されるもののなかには、勾玉の表面に赤色顔料が塗布されているものも確認できる。このような勾玉は、弥生時代中期後半の千葉県大厩遺跡〔財団法人千葉県開発公社 1974、〕の事例をはじめとして、それ以降、広い地域で出土するようになり、関東地域にいたっては、出土量は少ないながらも中世まで確認することができる。また、勾玉の表面に赤色顔料以外のものが、塗布された土製勾玉もある。それは、福島県弘法山古墳群の 2 号横穴から出土したもので〔福島県教育委員会 ほか 2000〕、勾玉の表面には漆が施されている。この漆が塗布された土製勾玉については、他に類似する事例は見当たらない。
- 註 75 第 17 表を作成するにあたり、孔に向かって、あるいは達しているが 1 条の刻み目しか施されていない土製勾玉や、頭部正面のみに刻み目が施され、孔のある側面まではその刻み目が達していない土製勾玉は、集成の対象から除いている。
- 註 76 福岡県船迫窯跡群〔築城町教育委員会 1998〕では 6 世紀後半に属する茶白山東 1 号窯跡灰原周辺、東京都落合遺跡〔学校法人目白学園 ほか 2004〕では 7 世紀中葉～後葉の土師器焼成土坑から、それぞれ土製勾玉が確認されている。
- 註 77 第 50～52 図のグラフを作成するにあたり、出土位置が遺物包含層や表採であるものは除いている。そのため、本章で行なった集成において、土製勾玉の全てが明確な遺構に伴わなかった縄文時代前期の北日本に加えて、本州では中世にあたるグスク時代の沖縄県に関して、グラフ化を省いている。また、グラフの項目については、報告書のなかで出土遺構の名称が多岐にわたる為、類似する性格が推測できるものをまとめている。たとえば、弥生時代では、建物跡に竪穴建物・掘立柱建物、水辺祭祀に水路・流路・波止場・河道・貯水遺構、溝類に溝・環濠・外濠、その他に土器溜まり・段状遺構・竪穴状遺構・方形周溝状遺構・ピット・谷、古墳時代では、建物跡に竪穴建物・掘立柱建物、墓域内祭祀に古墳確認面・古墳封土・周溝・方形周溝墓前祭祀跡、水辺祭祀に水辺・川跡・流

路・排水路・沼址・取水堤付近・水田跡・井戸、溝類に溝・環濠・外濠、その他にピット・堅穴状遺構・削り出し遺構・遺物集中地点・落ち込み状遺構・土壇状遺構・周溝状遺構・円形低墳台状部・方形台状遺構・窯址灰原周辺、奈良時代から中世では、建物跡に堅穴建物・掘立柱建物、水辺祭祀に旧河道・流路・水田、溝類に溝跡・濠跡、というようにまとめて記載している。

註 78 焼失建物からも土製勾玉は出土している。管見では、17 軒の焼失建物から土製勾玉の出土が確認できる。時期ごとの内訳は、弥生時代後期は関東地域 5 軒、静岡県 1 軒、九州地域 2 軒、古墳時代前期は関東地域 4 軒、古墳時代後期 2 軒、奈良時代は青森県 1 軒、千葉県 1 軒、平安時代は千葉県 1 軒となる。つまり、焼失建物の様相からみても、古墳時代中期は出土事例が確認できなくなる時期といえる。

註 79 本章では、炉とカマドを総称する語句として使用している。

註 80 本章では、東日本における堅穴建物にカマドが普及する時期を 5 世紀末葉から 6 世紀前半頃と考えている〔渡辺 1993〕。

## 結論 日本列島における勾玉の消費が及ぼす文化的作用

### 第1節 各時期区分の整合性とその意義

本研究では、出土勾玉が日本列島のなかでどのように消費されていたのか、そして、それが時間の経過と共にいかなる変遷過程をたどるのかについて、全国的な視野をもって把握することを一貫して行なってきた。

具体的には、第1章では土製以外の全ての勾玉、第2章では縄文時代から弥生時代にかけて確認できる刻み目勾玉、第3章では弥生時代から奈良時代にかけて出土する丁字頭勾玉、第4章では古墳時代にみられる背合わせ勾玉、そして、第5章では土製勾玉といったそれぞれ異なった視点でもって、人びとによる勾玉の消費形態の移り変わりについて分析を加えた。

ここでは、まず、第1章で設定した8つの時期区分（第1期（縄文時代早期から中期）、第2期（縄文時代後期から晩期）、第3期（弥生時代前期から弥生時代後・終末期）、第4期（古墳時代前期から中期）、第5期（古墳時代後期から終末期）、第6期（奈良時代から平安時代）、第7期（中世）、第8期（近世以降））と、第2章から第5章で述べたそれぞれの時期差との間に整合性がみられるか否かについて考えていく。以下、第1章で設定した8つの時期区分に沿って述べていくが、この時期区分と第5章で述べた土製勾玉の時期区分との間にはずれが生じている（第53図）。そのため、まずは、第2章から第4章でみられた時期差と、それに関係する第2期（縄文時代後期から晩期）から第5期（古墳時代後期から終末期）にかけての区分が、それぞれ対応しているのかをみていきたい。

まず、第2期（縄文時代後期から晩期）をみていくと、全国的に遺跡数が増加し、北海道・東北地域では墓への出土が多くなる時期に、東北地域・関東地域・北陸地域では、I類を中心とした刻み目勾玉が確認されるようになる。

第3期（弥生時代前期から後・終末期）について述べるならば、弥生時代中期から後・終末期にかけて、九州地域を中心とした西日本では、新しくガラス製・天河石製勾玉が確認できたり、丁字頭勾玉の使用が開始される。また、当該期には、縄文時代後・晩期の東日本で作られた刻み目勾玉を、九州地域の人びとが一種の選択性をもって手に入れていく



第53図 石製を中心とした勾玉と土製勾玉との時期区分の差

現象が確認でき、加えて、Ⅲ類という新しいタイプの刻み目勾玉が各地で出現してくる。

その他にも、弥生時代中期の北九州地域でみられた勾玉の副葬事例が、後・終末期になると、中国地域でもよくみられるようになる。この変化点に関しては、丁字頭勾玉の展開からも述べることができる。それは、まず、中期の北部九州地域で行なわれていた丁字頭勾玉の副葬が、後・終末期の段階で、中国地域へ波及する。そして、後・終末期の北部九州地域と中国地域との間には、丁字頭勾玉の副葬形態に共通性がみられるようになる。

第4期（古墳時代前期から中期）をみていくと、前期の近畿地域で勾玉の出土遺跡数が急激に増加し、消費形態も全国的にみて墓への副葬が多くなる。この時期は、丁字頭勾玉の分布・材質・出土状況においても大きく変化することが確認できた。また、中期は、時期の区分はしてはいないが、出土勾玉の主となる材質がヒスイから滑石へと変化する時期であり、丁字頭勾玉の副葬が確認される古墳の多くが、前方後円墳から円墳へと変化していく時期でもある。そして、同時期には、近畿地域の石製品の文化に影響を受けて成立したと考えられる背合わせ勾玉が、作られ始めることが確認できた。

第5期（古墳時代後期から終末期）では、全国的に瑪瑙製勾玉の出土数が増加し、墓への出土も継続してみられる。そのようななか、終末期になると、東北地域では出土点数が増加し、墓への副葬事例も多くなる。加えて、奈良県では、新しく寺院跡から勾玉の出土事例が確認されはじめる。この時期の丁字頭勾玉をみてみると、古墳への副葬が近畿地域では衰退していく一方で、九州地域では継続して、そして、東北地域では新しく古墳への副葬事例が確認されていくことが、明らかになっている。

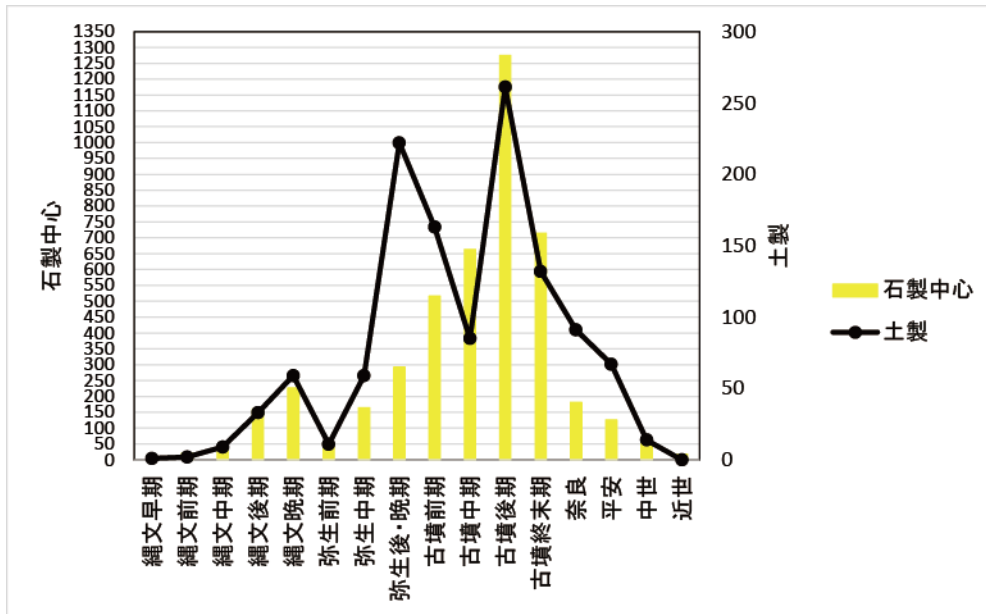
このようにみていくと、第1章で設定した8つの時期区分と、大方、整合性をもっていることが指摘できる。

次に、その第1章で設定した8つの時期区分、すなわち、石製を中心とした勾玉の時期区分と、第5章で設定した土製勾玉の時期区分との対応性についてみていきたい。

まず、第1期（縄文時代早期から中期）は、石製勾玉と土製勾玉の出現期として位置づけられる。

第2期（縄文時代後期から晩期）になると、九州地域で土製勾玉の消費が開始されていくが、これは石製勾玉の変遷においても同様な変化点としてみることができる。

第3期（弥生時代前期から後・終末期）と第4期（古墳時代前期から中期）にあたる時期を、土製勾玉では第3期（弥生時代前期から古墳時代中期）というように1つの時期としている。石製を中心とした勾玉と土製勾玉はともに前期になると、急激に出土遺跡が減少し、中期になり、増加する傾向を示すことは共通点としてあげられる。しかしながら、土製勾玉からみた場合、石製勾玉などでみられたような古墳時代前期での大きな変化というものは確認することができない。さらには、全国的な傾向として、古墳時代前期から中期へと移りゆくなかで、石製を中心とした勾玉では出土遺跡数が増加していくのに対して、土製勾玉の出土遺跡数は減少していく点も両者の変遷における相違点として捉えることができる（第54図）。



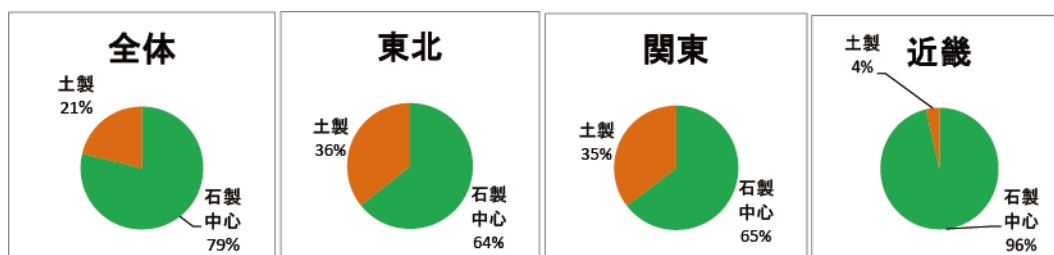
第54図 石製を中心とした勾玉と土製勾玉の出土遺跡数の変遷

第5期（古墳時代後期から終末期）は、土製勾玉の時期区分では第4期にあたる。古墳時代後期における土製勾玉の変化点としては、中部地域から以西の地域で埋葬施設からの出土事例が増加することや、関東地域でカマドからの出土事例が増加したり、新しいタイプの土製勾玉が出現することなどを確認した。このことから、石製を中心とした勾玉と土製勾玉の両者とも、古墳時代後期になると様相が変化することが指摘できるものの、その要因・背景は異なる可能性が高い。すなわち、前者における変化は近畿地域、ひいてはヤマト政権との何らかの関わりが要因となっている可能性を指摘することができ、一方、後者における変化は、たとえば、関東地域といったように、様相の変化がみられる各地域の社会がそれぞれ変容していくなかの1つの現象と捉えるべきであろう。この考えについては、他の地域と比べて近畿地域では、土製勾玉の出土する割合が極端に低いことも根拠の1つとなる（第55図）。

第6期（奈良時代から平安時代）は、土製勾玉の時期区分でいうと第5期にあたる。土製勾玉の様相の変化としては、東北地域における出土遺跡数が増加すること、関東地域よりも以北の地域では出土遺構の様相が前代から継続してみられること、西日本での出土事例が大幅に減り、埋葬施設での使用がほとんどみられなくなることが指摘できる。これらの変化は、石製を中心とした勾玉でもみられる現象である。

第7期（中世）は、土製勾玉の時期区分では第6期にあたる。この時期の土製勾玉をみると、出土遺跡数が各地域で大幅に減少するなか、沖縄県では新しく出土事例が確認できるようになる。また、沖縄県においては、石製を中心とした勾玉の出土遺跡数が、この時期になると増加していき、その数は最も多くなることがわかっている。

これらをふまえて述べるならば、土製勾玉の時期区分のうち、第3期（弥生時代前期か



第 55 図 各地域における石製を中心とした勾玉と土製勾玉の出土の割合

ら古墳時代中期)と第4期(古墳時代後期から終末期)を除いた、第1期(縄文時代早期から中期)・第2期(縄文時代後期から晩期)・第5期(奈良時代から平安時代)・第6期(中世)は、それぞれ石製を中心とした勾玉の時期区分と整合性がみてとれる。しかしながら、第3期(弥生時代前期から古墳時代中期)は区分した時間幅が異なり、そして、第4期(古墳時代後期から終末期)は区分した時間幅は同じものの、その要因・背景について、石製を中心とした勾玉との関連性を見出し難いことが指摘できる。このことから、土製勾玉の時期区分のうち、第3期・第4期に関しては、石製を中心とした勾玉の8つの時期区分と整合性をもっているとはいえない。

以上、第1章から第5章で提示した時期区分や時期差について、それぞれが整合性をもっているのかについて分析を試みた。これらをふまえて述べるならば、日本列島の消費地における勾玉の時期区分といった場合には、石製を中心とした勾玉の時期区分と、土製勾玉の時期区分といった2つの軸を想定することができる。そして、それぞれの軸は、時期によっては影響しあったり、あるいは、しなかったり、といったように複雑な関係性をもって存在していることが考えられる。また、別の視点から述べるならば、2つの軸とした時期区分は、いずれも縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代などの政治的区分というフレームにそのまま全てあてはめて考えることはできない。この点は、勾玉の本質的な意味を考えるうえで重要なことといえる。

## 第2節 消費地からみた出土勾玉の文化的作用

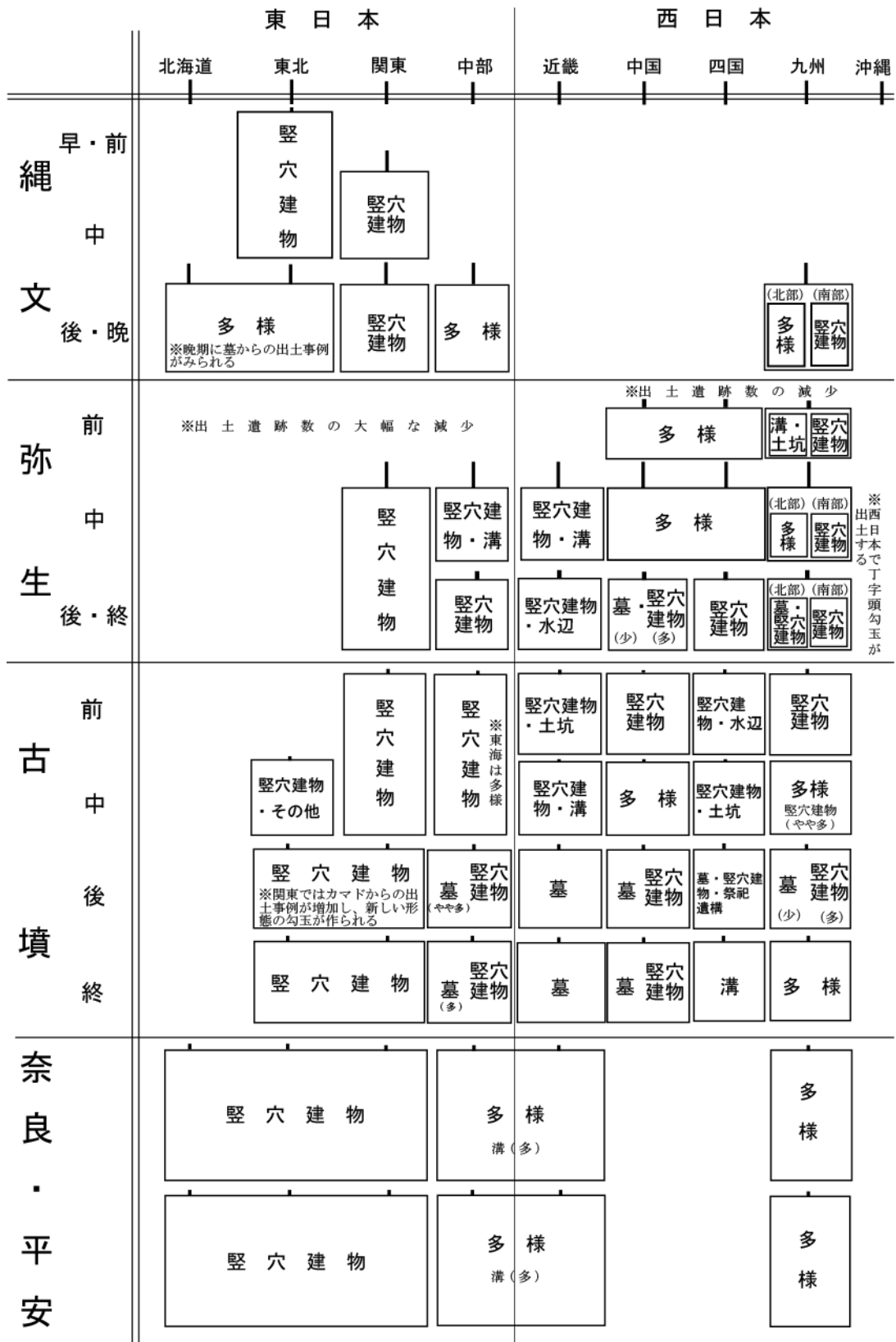
前節では、消費地における勾玉が、石製を中心とした勾玉と土製勾玉といった2つの時期区分のもと、政治的な要因だけではなく、地域ごとのさまざまな社会的要因が複雑に影響しあいながら、変遷していることを明らかにした。

本節では、第1章から第5章で得られた情報に基づいて、勾玉の使用が時間の経過とともに変化していく過程を大まかに確認したうえで、変化しないものがあるとしたら、どのようなものであるのかについて、検討を加えていきたい。検討するにあたっては、出土遺構の情報が比較的多く得られる縄文時代から平安時代までを対象にして、石製を中心とした勾玉と土製勾玉という2つの視点から記述を行なっていきたい。第56図と第57図は、本研究で明らかにした出土遺構の変遷に、各時期の勾玉の変化や特徴を組み込んだもので

		東 日 本				西 日 本				
		北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄
縄 文	早・前	竪穴建物								
	中 後・晩	墓  ※後・晩期の東日本で刻み目勾玉が出現する	竪穴建物	多様					土坑墓・竪穴建物・溝  ※晩期の九州では、北部は墓、南部は竪穴建物が多い	
弥 生	前	※出土遺跡数の大幅な減少				※出土遺跡数の減少				
	中 後・終	墓	竪穴建物	墓・竪穴建物		多様 (多; 溝)	多様 (多; 竪穴建物)	墓 (北) 竪穴建物 (南)	墓 (北) 竪穴建物 (南)	墓 (北) 竪穴建物 (南)
古 墳	前	墓	竪穴建物	竪穴建物	墓	墓	墓	墓	墓	墓
	中					※近畿でヒスイ製丁字頭勾玉Ⅲ類と丁字+文様の勾玉が出現	※主体となる材質が変化するヒスイ(前)	※近畿の影響のもと背合わせ勾玉が成立する	※近畿でヒスイ製丁字頭勾玉Ⅲ類と丁字+文様の勾玉が出現	※近畿の影響のもと背合わせ勾玉が成立する
	後 終	墓・竪穴建物	竪穴建物	墓	墓	墓	滑石(中)	円墳	墓	墓
奈良 ・ 平安	前	墓・竪穴建物  ※終末期の東北で副葬事例が増加する	竪穴建物	墓・竪穴建物・掘立柱建物・溝	墓	掘立柱建物・溝・寺院	墓	墓	墓・溝・掘立柱建物	
	中 後 終	竪穴建物	竪穴建物	竪穴建物・掘立柱建物・溝	墓	溝・水辺	墓・溝	多様		

第 56 図 使用形態からみた石製を中心とした勾玉の大まかな流れ  
(事例数が少ない、あるいは性格が不明確な遺構からの出土事例は省いている)





第 57 図 使用形態からみた土製勾玉の大まかな流れ  
(事例数が少ない、あるいは性格が不明確な遺構からの出土事例は省いている)

ある。これらの図によって、日本列島における勾玉の使用方法が、およそどのように移り変わっていったのかを、列島規模で俯瞰することができる。以下、これらの図をみながら記述を進めていきたい。

まず、日本列島で石製勾玉が確認され始めるのは、縄文時代早・前期からであり、当初は主に北海道・東北地域・関東地域の人びとによって堅穴建物で使用されていく。北海道・東北地域は、縄文時代中期以降、晩期に至るまで、墓からの出土が多い。一方、関東地域は、縄文時代晩期に若干、その傾向が弱まるものの、一貫して堅穴建物での出土が多く、中部地域では出土遺構は多様である。これら東日本の各地域をまたぐかたちで、刻み目勾玉の出土が確認されている。一方、それに対して、九州地域の人びとが、土坑墓・堅穴建物・溝跡で石製勾玉を使用し始めるのは、主に縄文時代後・晩期になってからである。そのうち、晩期の九州地域に注目すると、北部では墓、南部では堅穴建物といったような地域差が若干確認することができる。

東日本と西日本とに区分できるという観点は材質からもみられ、ヒスイを主体的に用いていく東日本と、ヒスイを受け入れながらもクロム白雲母を主体的に用いていく西日本とといったように、主体となる勾玉の材質からもみられる現象である。

弥生時代前期に入ると、東日本での使用がほとんどみられなくなるのに対して、福岡県では、出土遺跡のある程度の数をもって確認することができ、そこでは甕棺墓などの墓での出土事例が多い。そして、中期から終末期になると、全国的に出土が確認できるようになり、勾玉の出土する場所は、大方、北海道・東北地域では墓、関東地域では堅穴建物、中部地域では墓・堅穴建物、加えて、西日本では全体的にみて、堅穴建物が多くなる。

そのようななか、中期の北部九州地域では、前期から継続して、墓での出土が主体を占め、そこではヒスイ製・ガラス製丁字頭勾玉が単独で副葬されている。墓での使用が目立つという傾向は、弥生時代後・終末期の中国地域でも確認でき、そこでは複数の丁字頭勾玉を副葬するか、もしくは丁字頭勾玉1点と丁字のない複数の勾玉を副葬している。この副葬形態は、同時期の北部九州地域でも共通してみることができる。

また、弥生時代における西日本の勾玉は、縄文時代の時に多くみられたクロム白雲母の割合が低くなり、代わってヒスイの割合が高くなる。加えて、新しくガラス製勾玉が確認できるようになる。

古墳時代前期になると、近畿地域を中心として、全国各地で古墳や横穴墓に石製勾玉を副葬する事例が大幅に増加する。丁字頭勾玉に着目して、副葬形態をみると、近畿地域を中心とした各地域では、1つの埋葬施設に複数の丁字頭勾玉を副葬している事例や、丁字頭勾玉1点と丁字が施されていない複数の勾玉が共に副葬されている事例が確認できるようになる。

墓への副葬が全国的に高くなるという傾向は、大方、前期から終末期まで継続的に続くが、細かなところで変化あるいは異なる点がみられる。そのことについて述べるならば、後期になると、東北地域では古墳への副葬事例が増加することや、終末期に入ると、奈良

県では墓からの出土がみられなくなり、代わって寺院からの出土事例が確認できるようになることがあげられる。後・終末期にみられるこれらの変化と丁字頭勾玉の展開とを関連させて述べるならば、終末期になると丁字頭勾玉の副葬が近畿地域では衰退し、九州地域では継続的にみられ、東北地域では新しく副葬が始まるといった現象を確認することができる。また、丁字頭勾玉の使用方法においては、出雲地域と北部九州地域でそれぞれ独自性がみられることも見逃すことができない。

その他には、関東地域では古墳時代を通して、墓からの出土もみられるが、それ以上に、堅穴建物での出土が多くみられることも、全国的な傾向とは異なる点である。

古墳時代のなかでは、主体となる材質に変化がみられ、前期にはヒスイ、中期には滑石、後・終末期には瑪瑙が多くなるといった傾向が汎列島規模でみられる。

奈良時代には、北海道・東北地域・中国地域で継続して古墳への副葬が多くみられる。それに対して、近畿地域では墓からの出土事例がみられなくなり、その他の地域でも出土はかなり少なくなる。平安時代になると、東北地域や中国地域でも墓からの出土が減少していく。そのようななか、関東地域の勾玉は、奈良時代から継続して、堅穴建物から多く出土している。

以上、石製を中心とした勾玉が、時代ごとにどのように用いられてきたのかを概観した(第56図)。これらをふまえて、大きく4点に着目しながら、消費地における石製を中心とした勾玉の文化的作用について考えていくことにする。

① 縄文時代後・晩期の東日本では、勾玉の使用方法が各地域で異なるなか、同じタイプの刻み目勾玉が用いられていく。加えて、同じ時期にみられる九州地域では、東日本とは様相が異なったかたちで、勾玉が使用されていく。

② 弥生時代の北部九州地域では、縄文時代と比べて、ヒスイの割合が高くなり、墓からの出土が増加していく。さらに、九州地域の人々が縄文時代における東日本の勾玉を求めていく現象を確認することができる。このことから、勾玉をとりまく状況が変化したことが推測できる。そして、中期の北部九州地域でみられた墓での使用形態が、後・終末期の中国地域へと波及していく。このことは、丁字頭勾玉の使用形態が両地域間で共通してみられることから確認することができる。さらに、このように弥生時代になり、北部九州地域を中心とした西日本でみられるようになる新しい使用形態の根底には、勾玉を墓へ副葬するという認識があったことが考えられる。その観点からみれば、弥生時代になって急に新しい使用形態が形成されたのではなく、その萌芽は、北部九州地域で墓への副葬が確認できるようになる縄文時代晩期の段階にはすでにみることができたといえる。しかしながら、縄文時代晩期の段階はあくまでも新しい使用形態が形成されていく過程であり、それが成立する時期は、やはり弥生時代になってからとした方が妥当と考える。

また、見方を変えて、縄文時代の勾玉と弥生時代の勾玉という大きな枠組みから述べるならば、北部九州地域を中心とした西日本における弥生時代の勾玉は、縄文時代晩期からその萌芽がみられるとしても、縄文時代の勾玉とは区別することができると考えられる。

それに対して、東日本では、弥生時代前期に一度、出土がみられなくなり、中期以降、使用が再確認されてくるが、東北地域では墓、関東地域では竪穴建物といったように、使用場所が縄文時代の時と同様な地域が多くみられる。さらには、縄文時代も弥生時代も主体となる材質はヒスイである。すなわち、使用形態や材質からは、西日本のように縄文時代の勾玉と弥生時代の勾玉とを明確に区分することはできないことが指摘できる。そう考えて大過が無いとするならば、東日本における弥生時代の勾玉は、西日本とは異なり、縄文時代の勾玉と徐々に複合しながら成立していったことが推測できる。そうすると、次にこの現象の要因・背景について考えなければならないが、その解明を行なうには、残念ながら勾玉からの視点だけでは難しく、玉類、あるいはその他の考古資料の変遷とあわせて議論を行なう必要があると考える。この問題点は、今後の課題としたい。

③ 古墳時代になると、汎列島規模で勾玉の使用方法や材質・形態などに共通性がみられるようになり、その変化は近畿地域が中心となって起こったものと考えられる。これに関連して述べるならば、ヤマト政権が、弥生時代後・終末期の北部九州地域や吉備地域の人びとが行っていた丁字頭勾玉を用いた風習を採り入れたうえで、各地域の首長層たちが丁字頭勾玉を副葬することに対して規範を課していく。そして、丁字頭勾玉を副葬品とすることでヤマト政権下に属することの象徴としたことが考えられる。すなわち、そこには石製を中心とした勾玉と国家との関わりがみてとれる。しかし、その関係性は、終末期に入ると弱まっていき、奈良時代には終焉を迎える。

ヤマト政権と勾玉との関わりが強くみられた前期から後期にかけては、出雲地域や北部九州地域では、それぞれ自律性をもって丁字頭勾玉を使用していたことも注目できる。

④ 関東地域では弥生時代中期から平安時代まで、継続して竪穴建物からの出土が多くみられることについて述べるならば、関東地域では、石製を中心とした勾玉は副葬されるよりも集落のなかで使用することが多い。これは、関東地域の人びとが、石製を中心とした勾玉を古墳に副葬することを重要視していないということを物語っていると考えられる。この傾向は、縄文時代を通してみてもいえる。とくに、古墳時代の関東地域について述べるならば、第1章で明らかにしたように、汎列島規模で古墳時代前期にはヒスイ、中期には滑石、後期には瑪瑙というように出土勾玉の主体となる材質が変化する。この傾向は、関東地域でもみられることを考え合わせると、関東地域の人びとは、材質は全国的な傾向を受け入れているにもかかわらず、使用に関してはそれまで行っていた方法を一貫してとる姿勢を崩さなかったことが推測できる。この④に関しては、やはり見逃すことができない興味深い問題と思われるが、その要因・背景の究明については今後の課題としたいと思う。

次に、土製勾玉がどのように用いられてきたのかをみていくことにする。日本列島で土製勾玉の出土が確認されるのは、縄文時代早・前期からであり、最初は東北地域の人びとによって竪穴建物で使用されていく。中期になると、関東地域の竪穴建物からも勾玉の出土が確認されるようになる。

縄文時代後・晩期になると、北海道・北東北地域は土坑墓・竪穴建物・焼土遺構・盛土遺構、中部地域は竪穴建物・配石遺構といったように、これらの地域では出土遺構に多様性がみられる。とくに、北海道・東北地域の人びとは、晩期に入ると、墓で土製勾玉を使用するようになることは、変化点として注目できる。それに対して、関東地域では竪穴建物からの出土が多い。この時期になると、九州地域でも土製勾玉の出土が確認できるようになり、北部九州地域では土坑墓・河川跡・ピットと多様性がみられるが、中部地域で見られる出土遺構の様相とは異なる。また、南九州地域では、竪穴建物からの出土が多い傾向が確認できる。その他の地域を述べるならば、後・晩期の近畿地域・中国地域・四国地域では、出土事例が確認できない。

弥生時代に入ると、東日本では一度、使用が途絶えたのち、中期になると使用が再確認されていく。関東地域を中心として、東日本では竪穴建物からの出土事例が多くみられる。それに対して、途絶えずに使用が確認できる西日本では、竪穴建物からの出土事例が多くみられるが、その他にも土坑墓・土坑・水辺など、さまざまな場所から土製勾玉が出土する。これらの傾向は、古墳時代中期まで継続して確認できる。また、弥生時代において、丁字頭勾玉の出土が西日本に偏って分布することや、古墳時代前期から中期にかけて、石製勾玉は近畿地域で増加する傾向がみられたが、近畿地域から出土する土製勾玉の数は極めて少ないことも明らかとなっている。

古墳時代後・終末期になると、東北地域・関東地域では竪穴建物での出土が多くみられる。また、関東地域を中心とした地域では、カマドから出土する土製勾玉の事例が増加する。一方、中部地域以西の地域では、竪穴建物からの出土は多くみられるが、それと同じくらい古墳・横穴墓からの出土も確認することができる。

奈良時代には、北海道・東北地域・関東地域では、竪穴建物からの出土が多くみられる。それに対して、中部地域以西の地域では、古墳・横穴墓からの出土が確認できなくなり、溝跡や流路・土坑・土器集中地点からの出土が多くなる。平安時代に入っても、大方、奈良時代の様相を継続してみることができる。

以上、土製勾玉が、時代ごとにどのように用いられてきたのかを概観した（第 57 図）。これらをふまえて、大きく 4 点に着目しながら、消費地における土製勾玉の文化的作用について考えていくことにする。

① 縄文時代後・晩期になると、九州地域では土製勾玉の使用が開始されるが、そこでの出土遺構の構成要素は東日本とは異なる。さらには、本州西部での出土遺跡が確認できないことを考え合わせると、九州地域の人びとが土製勾玉を用い始めるに至った要因として、東日本の影響は考えにくい。すなわち、その変化は、後・晩期における九州地域の社会が、独自に変容していく過程の一端と捉えることができる。

② 弥生時代前期から古墳時代中期にかけて、東日本と西日本で大きく勾玉の出土遺構の様相が異なる。この現象について、言葉を換えて述べるならば、弥生時代に入り、古墳時代中期まで、土製勾玉を用いる文化において、東日本的なもの、西日本的なもの、2 つ

の文化圏が存在していた可能性を指摘できる。また、弥生時代に入ると、2つの文化圏が形成されるという点では、縄文時代の土製勾玉と弥生時代の土製勾玉を区別することができるが、石製を中心とした勾玉で見られた、使用方法の変化というのは土製勾玉からは見出すことができない。

③ 古墳時代前期から中期における土製勾玉には、石製勾玉でみられたヤマト政権との関わりが見出し難い。すなわち、福島県弘法山古墳群から出土した全体に漆が塗られた事例など、特殊な事例は除くとして、多くの土製勾玉は、国家との関係性、あるいは権力を表すための道具ではない、ということが考えられる。これらを合わせて考えると、土製勾玉は、より地域の人びとの生活に密着するかたちで使用されたものといえるであろう。

④ 弥生時代中期から平安時代まで、関東地域では継続して竪穴建物からの出土事例が多い。このことについて述べるならば、関東地域の人びとは、石製勾玉のときと同様に、土製勾玉を集落内で用いる姿勢を、長い間、継続して持ち続けていたことが指摘できる。但し、石製勾玉の出土遺構と比べて、土製勾玉の出土遺構が、ほぼ一貫して竪穴建物が占めている。これらのことを考え合わせて述べるならば、石製勾玉を使用するときよりも強い志向性を読みとることができよう。また、後期の関東地域では、第5章で述べたように新しいタイプの土製勾玉が出現したり、東日本に普及していくカマドにすぐに対応するかたちで、竪穴建物内での使用方法を変えたりしている。これらの変化も、関東地域の人びとが土製勾玉の使用に関して重きをおいていたことが考えられる。また、関東地域の人びとにみられる使用方法への強い志向性に関連させて述べるならば、縄文時代から弥生時代に社会が変わるなかで、弥生時代前期に使用が一端、途絶える。そして、中期になると縄文時代のときと同様に、竪穴建物での使用が再度開始される。この共通性も興味深い問題といえる。しかし、石製勾玉の時にも述べたが、その強い志向性をもつに至った要因や背景の解明については、土製勾玉からのアプローチだけでは不十分である。これらの点は、石製勾玉と共に今後の課題としたいと思う。

以上、本研究では、消費地における出土勾玉の変遷を汎列島規模で把握を行なった。序論の第2節でも述べたように、勾玉には多様な側面があり、それぞれの要素が絡み合いながら成り立っている考古資料であることを再認識することになった。本研究によって、日本列島における消費地から見た勾玉の大きな流れというものが明らかになったと考える。

\*

本研究を作成するにあたり、谷川章雄先生や蔵持不三也先生、原知章先生に多くのご教示を頂きました。また、五十嵐睦氏、一山典氏、伊藤雅文氏、大坪志子氏、大村紀久子氏、河村好光氏、木島勉氏、木下尚子氏、小松譲氏、佐伯純也氏、斎藤あや氏、佐藤浩司氏、田海義正氏、下濱貴子氏、濱野浩美氏、廣瀬時習氏、深田浩氏、藤田富士夫氏、松本岩雄

氏、三原翔吾氏、三宅博士氏、森山高氏、米田克彦氏（五十音順）にも大変お世話になりました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

〔序論〕

- 秋山浩三 2007『日本古代社会と物質文化』青木書店。
- 浅野良治 2003「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『蜃気楼』秋山進午先生古稀記念論文集 71-83頁。
- 麻生 優 1953「勾玉の始源について」『マイクロリス』研究発表会要旨 明治大学考古学研究会 14-15頁。
- 李 仁淑 1987「韓国先史曲玉に関する小考」『三佛金元龍教授天然退任記念論叢—考古学編』一志社 357-369頁。(※タイトルの「に関する」はハングル。川崎 保氏によって翻訳されたものが『古文化談叢』第36集に収録されている。)
- 李 殷昌 1991「韓国の玉文化—特に曲玉の起源・生産・利用を中心に—」森 浩一 編『古代王権と玉の謎』新人物往来社 129-148頁。
- 李 相吉 高田貫太 訳 2007「装身具からみた細形銅剣文化期の特徴」『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会 第5回 合同考古学大会資料集 195-212頁。
- 池上 悟 1993「古墳出土の琥珀玉」『立正大学文学部論叢』97 1-26頁。
- 李 健茂 1991「8 装身具」『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』171-177頁。
- 石川県埋蔵文化財センター 2003『石川県埋蔵文化財情報』第10号。
- 石川考古学研究会 1995『装身具Ⅰ』石川県考古資料調査・集成事業報告書。
- 石川考古学研究会 2000『装身具Ⅱ（玉つくり）』石川県考古資料調査・集成事業報告書。
- 石川考古学研究会 2001『補遺編』石川県考古資料調査・集成事業報告書。
- 石川県小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』第2分冊（遺物報告編）。
- 石川県小松市教育委員会 2014『八日市地方遺跡Ⅱ—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』第3部 製玉編 第4部 木器編。
- 石神孝子 1994「古墳出土玉類の基礎的把握—甲府盆地を中心として」『山梨考古学論集Ⅲ—山梨県考古学協会15周年記念論文集—』193-211頁。
- 石田茂作 1940「奈良時代に於ける玉の種類と用途」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』吉川弘文館 345-365頁。
- 遺跡発行会 2016「愛媛県古代装身具出土遺跡一覧」『遺跡』第50号 埋蔵文化財の保護と考古学研究の発展のために』 83-118頁。
- 糸魚川市教育委員会 1974『細池遺跡』。
- 伊藤圭介 1830「Beschryving van de Magatama, of gebogene Iuweel, door den Japaner, H. B. MS」
- 伊藤圭介 1936「Beschrijving der magatama, de schatten der oudsten bewoner van Japan, do or Ito Keiskue. —勾玉考」『施福多先生文献聚影』第6冊 シーボルト文献研究室。
- 井上 巖 2005「滑石の科学特性と産地分布」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 3-22頁。



- 井上 巖 2012『玉類の分析法と原産地対比法 京都府・大阪府・兵庫県・岐阜県の各遺跡より出土した滑石製玉類、塩基性凝灰岩製玉類の岩質の共通性について』 第四紀地質研究所。
- 今西 龍 1908「朝鮮にて発見せる曲玉及金環等」『東京人類學雜誌』第 23 卷第 263 號 東京人類學會 199-201 頁。
- 乾 芳宏 2007「山岸コレクションの勾玉と大川遺跡」『玉文化』第 4 号 63-67 頁。
- 入田整三 1940「所謂「玉」について」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』吉川弘文館 367-376 頁。
- 上野修一・川又隆一郎 2015「北関東地方における古墳時代前期玉作遺跡の一事例－栃木県真岡市市ノ塚遺跡－」『玉文化研究』創刊号 日本玉文化学会 19-31 頁。
- 上野 誠 2008「タマとヒスイの古典学－神と人を魅了したもの－」ヒスイ文化フォーラム 2007 スナカワとヒスイ－講演記録－ 糸魚川市 61 - 67 頁。
- 宇野慎敏 2015「宗像および周辺地域出土勾玉の地域性とその歴史的意義－宗像市・福津市・古賀市・新宮町を中心として－」『法政考古学』第 41 集 1-15 頁。
- 梅原末治 1920『久津川古墳研究』。
- 梅原末治 1922『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第 1 冊 鳥取縣。
- 梅原末治 1947『朝鮮の文化』高桐書院。
- 梅原末治 1950「東大寺三月堂本尊寶冠垂下の勾玉に就いて」『史迹と美術』史迹美術同友會 2-9 頁。
- 梅原末治 1960「日本上古の玻璃」『史林』第 43 卷第 1 号。
- 梅原末治 1969「上古の禽獸魚形勾玉」の補説 附 史前の大珠に就いて『史學』第 42 卷第 1 号 三田史学会 1-30 頁。
- 梅原末治 1971『日本古玉器雜攷』吉川弘文館。
- 会下和宏 2001「弥生時代の玉類副葬－西日本～関東地域を中心にして－」『日本考古学の基礎研究－茨城大学人文学部考古学研究報告第 4 冊－』145-167 頁。
- 江坂輝彌 1989「切子玉 管玉 勾玉の起源を探る」『松阪大学紀要』第 7 号 松島博教授退職記念号 45-49 頁。
- 青海町教育委員会 1979『大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房跡－』。
- 青海町役場 1970『寺地硬玉遺跡－第 2 次調査概要－』
- 大賀克彦 2002「弥生・古墳の玉」『弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』考古資料大観第 9 卷 313-320 頁。
- 大賀克彦 2005「(4) 稲童古墳群の玉類について－古墳時代中期後半における玉の伝世－」『稲童古墳群』行橋市教育委員会 286-297 頁。
- 大賀克彦 2008a「玉生産研究の現状と課題」『考古学ジャーナル 特集 玉生産研究の現状』No. 567 1 月号 ニューサイエンス社 3-8 頁。
- 大賀克彦 2008b「古墳時代後期における玉作の拡散」『古代文化研究』第 16 号 41-64 頁。
- 大賀克彦 2008c「4 成塚向山 1 号墳出土の玉類 ～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～」『成塚向山古墳群』499-540 頁。
- 大賀克彦 2009a「弥生時代後期の玉作」『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集 89-102 頁。

- 大賀克彦 2009b「第2章 山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』9-62頁。
- 大賀克彦 2011「六 弥生時代における玉類の生産と流通」甲元眞之 寺沢薫 編『弥生時代(上)』講座日本の考古学5 青木書店 707-730頁。
- 大賀克彦 2012「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』平成21~23年度科学研究費補助金 若手研究(B)研究成果報告書 49-60頁。
- 大賀克彦 2013「2玉と石製品の型式学的研究 ①玉類」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社 147-159頁。
- 大賀克彦 2017「玉類の流通から見た古墳時代前期の東北地方」『古代倭国北縁の軋轢と交流—入の沢遺跡で何が起きたのか—』季刊考古学・別冊24 45-58頁。
- 大田区立郷土博物館 編 2001『ものづくりの考古学—原始・古代の人々の知恵と工夫—』東京美術。
- 大坪志子 2001「朝鮮半島の石製装身具」『文学部論叢』73 129-153頁。
- 大坪志子 2003「縄文の玉から弥生の玉へ—朝鮮半島との比較をとおして—」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室総説30周年記念論文集 415-436頁。
- 大坪志子 2004「九州地方の玉文化」『季刊考古学 縄文時代の玉文化』第89号 雄山閣 59-62頁。
- 大坪志子 2007「九州地方の石製装身具—後晩期の玉類を中心とした石材同定—」『石川県埋蔵文化財情報』第17号 財団法人石川県埋蔵文化財センター 18-20頁。
- 大坪志子 2011「九州における縄文時代後晩期の石製装身具の様相」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国—王(墓)と翡翠玉—』第9回日本玉文化研究会北部九州地方大会資料集4-10頁。
- 大坪志子 2013「九州の玉生産と流通—四国との関係を中心に—」『玉の魅力に迫る—四国と周辺の玉生産と玉文化—』開館15周年記念特別企画展記念シンポジウム資料集 21-30頁。
- 大坪志子 2015『縄文玉文化の研究—九州ブランドから縄文文化の多様性を探る—』雄山閣。
- 大坪志子 2016「弥生時代における九州のヒスイ製勾玉の系譜」『日・韓の装身具』嶺南考古學會・九州考古学会 第12回合同考古学大会 資料集 204-218頁。
- 大西 修・土肥俊郎・黒河周平 2010「磨製出土品における砥粒加工技術—翡翠を用いた勾玉とその製作過程—」『砥粒加工学会誌』第54巻 第12号 2-5頁。
- 大野雲外 1916「原始勾玉の研究」『人類学雑誌』第31巻第1号 東京人類學會 3-6頁。
- 大野雲外 1924「土中の日本 第3章 先住民遺物の部」『中央史壇 土中の日本』第9巻第4号 通巻第55号 臨時増刊 144-282頁。
- 大野延太郎 1896「曲玉ニ就テ」『東京人類學會雑誌』第12巻第129号 東京人類學會 112-114頁。
- 大野延太郎 1898「羽後麻生発見ノ玉類」『東京人類學會雑誌』第13巻第147号 東京人類學會 374-378頁。
- 大野延太郎 1904「第八版 装飾品」『先史考古圖譜』嵩山房 6-8頁。
- 大野延太郎 1930「先史時代の部解説1 第3版 土製假面、装身具」『考古学大観』春陽堂 3-7頁。
- 大場磐雄 1943a「考古学上から見た我が古代文化の特質 2日本民族性の一考察」『日本古文化序説』

- 317-328 頁。
- 大場磐雄 1943b 「歴史時代 鏡と剣と玉」『日本古文化序説』131-133 頁。
- 大場磐雄 1962 『武蔵伊興』 国学院大学研究報告第 2 冊 文功社。
- 大道弘雄 1909 「曲玉砥石につきて」『考古界』第 8 編第 3 號 141-145 頁。
- 大森敬一 1939 「本邦産翡翠の光學性質」『岩石鑛物鑛床學』第 22 卷第 5 号 帝国大学理学部岩石鈹物鈹床学教室 225-236 頁。
- 小川敬吉 1927 「梁山夫婦塚と其遺物」『古蹟調査特別報告 第 5 冊 梁山夫婦塚と其遺物 図版』朝鮮總督府 1-86 頁。
- 小川敬養 1895 「豊前ニ存スル曲玉ノ種類」『東京人類學會雜誌』第 10 卷第 107 號 210-211 頁。
- 乙益重隆 1987 「壺に埋納した玉」『考古学資料館紀要』樋口清之博士喜寿記念 第 3 輯：39 - 44. 國學院大學考古学資料館。
- 折口信夫 1996 「剣と玉」『折口信夫全集』19：23 - 35. 中央公論社。(初出は 1931 年, 上代文化研究会開講演会筆記)
- 角田徳幸 米田克彦 1999 「島根県松江市大角山遺跡の再検討ー古墳時代中期の玉作遺跡の一例ー」『島根考古学会誌』第 16 集 1-28 頁。
- 堅田 直 1995 「勾玉の計量分析への試み」『考古学における計量分析ー計量考古学への道ー (V)』62-74 頁。
- 勝部 衛・渡辺暉夫 1983a 「布志名狐廻遺跡出土の結晶片岩製内磨砥石」『山陰文化研究紀要』第 23 号 15-21 頁
- 金関丈夫 1975 「魂の色ーまが玉の起り」『発掘から推理する』朝日選書 40 朝日新聞社 34 - 40 頁。
- 河野義禮 1939 「本邦に於ける翡翠の新産出及びその科学性質」『岩石鑛物鑛床學』第 22 卷第 5 号 帝国大学理学部岩石鈹物鈹床学教室 219-225 頁。
- 河村好光 1986 「10 玉生産の展開と流通」『岩波講座 日本考古学 3』305-334 頁。
- 河村好光 1992a 「攻玉技術の革新と出雲玉づくり」『島根考古学会誌』第 9 集 15-30 頁。
- 河村好光 1992b 「姫川・出雲・玉づくりー日本海交流の一視点ー」高澤裕一 編『北陸社会の歴史的展開』9-32 頁。
- 河村好光 2000 「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』第 47 卷第 3 号 44-62 頁。
- 河村好光 2008 「ヒスイ勾玉の誕生と変遷」『ヒスイ文化フォーラム 2007 ヌナカワとヒスイー講演記録ー』糸魚川市 46-50 頁。
- 河村好光 2010 「第 5 章 一つの大きな倭の形成」『倭の玉器ー玉づくりと倭国の時代』 青木書店 128-155 頁。
- 河村好光 2014 「日本考古学史における自民族認識」『日本考古学』日本考古学協会 19-36 頁。
- 瓦吹 堅 1998 「第八編 縄文時代翡翠製勾玉書一七社宮遺跡の資料を中心にー」『七社宮 福島県浪江町七社宮における縄文時代晩期の動物祭祀遺跡』浪江町教育委員会 287-291 頁。
- 木内石亭 1936 「曲玉問答」中川泉三編『木内石亭全集』卷 1 下郷共済会 21 - 41 頁。
- 菊池 寛 1927 『日本建國童話集 (初級用)』小學生全集 第 6 卷 興文社・文藝春秋社 19-33 頁。

- 菊池照夫 山岡邦章 2007「島根県内玉作遺跡より出土する紅簾石片岩製内磨砥石の石材産出地の検討」『古代文化研究』第15号 27-40頁。
- 岸川清信 1930「硝子製勾玉の一例」『考古學雜誌』第20巻第12號 考古學會 861-864頁。
- 岸本竹美 2003「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『紀要 沖縄埋文研究1』 55-72頁。
- 岸本竹美 2011「第4章 考古資料解説（論考・資料一覧） 沖縄県出土の玉類に関する考察」『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会 158-164頁。
- 北山峰生 2007「北近畿における墳墓出土玉類の検討」『玉文化』第4号 日本玉文化研究会 1-39頁。
- 喜田貞吉 1933「八坂瓊之曲玉考」『歴史地理』61-1 日本歴史地理學會 1-19頁。
- 木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会 541-591頁。
- 木下尚子 2000「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』 古代史の論点② 小学館 187-212頁。
- 木下尚子 2001「双口土器と獣形勾玉」『鹿児島考古』第35号 75-84頁。
- 木下尚子 2003「農民的装身具の成立—弥生時代開始期における北部九州装身具の動向—」『先史学・考古学論究IV』考古学研究室総説30周年記念論文集 437-460頁。
- 木下尚子 2005「階級社会の垂飾 ヒスイ勾玉の誕生と展開—弥生時代から奈良時代まで—」『ヒスイ文化フォーラム2005 神秘の勾玉—弥生・古墳時代の翡翠文化』資料集 16-21頁。
- 木下尚子 2011「第六章 威信財と祭器 四 装身具」甲元眞之・寺沢薫 編『講座日本の考古学6 弥生時代（下）』 青木書店 296-315頁。
- 木下尚子 2013「弥生時代の管玉と勾玉—消費地からみた生産と流通」『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流を探る～』青谷上寺地遺跡フォーラム2013資料集 26-35頁。
- 九州縄文研究会・沖縄大会実行委員会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回 九州縄文研究会沖縄大会資料集。
- 京都大学大学院文学研究科 2005『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書。
- 金 元龍 1986「韓国考古学概説」第3版 一志社。
- 国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所・佐賀県教育委員会 2005『古代の中原遺跡～解き明かされる鏡の渡し～』。
- 国立文化財機構 1988『鳥山遺跡』。
- 国立文化財機構・奈良文化財研究所 2011『古代の玉—最新の保存科学的研究の動向—』。
- 小瀬康行 1989「古墳時代ガラス勾玉の成形法について—内部気泡の観察を中心として—」『考古學雜誌』第75巻第1号 40-59頁。
- 小瀬康行 1994「勾玉鎔范の構造と系譜」岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 編『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣出版 216-225頁。
- 小瀬康行 1997「鋳型によるガラス勾玉の復元と考察」『東京家政学院生活文化博物館年報』第5号 61-70頁。
- 小寺智津子 2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化談叢』第55集 47-79頁。

頁。

小寺智津子 2016『古代東アジアとガラスの考古学』同成社。

後藤守一 1927a「第3章 先史時代の遺物 6 装身具」『日本考古學』四海書房 89-96 頁。

後藤守一 1927b「第4章 餘説 ち 胸飾・頸飾等の用としての玉類」『日本考古學』四海書房 181-188 頁。

後藤守一 1930「第3 玉・石工藝附ガラス ハ勾玉」『考古学講座 上古の工藝』第25巻 雄山閣 171-196 頁。

後藤守一 1940「古墳副葬の玉の用途に就いて」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』吉川弘文館 279-315 頁。

後藤守一 1946「三種の神器の考古學的検討」『あんとろぼす』創刊號 3-13 頁。

後藤守一 1947『日本古代史の考古学的検討』山岡書店。

小林清隆 2017「房総における縄文時代後晩期の石製玉類概観」『千葉縄文研究』7 千葉縄文研究会 103-112 頁。

小林達夫 1967「縄文晩期における〈土版・岩版〉研究の前提」『物質文化』第10号 物質文化研究会 1-8 頁。

小林行雄 1932a「彌生式土器聚成圖 武藏相模之部」『考古學』第3巻第4號 第二彌生式號 東京考古學會 口絵。

小林行雄 1932b「第二編 吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」『考古學』第3巻第5號 東京考古學會 159-156 頁。

小林行雄 1932c「彌生式土器聚成圖 畿内之部 其一」『考古學』第3巻第7號 東京考古學會 197 頁。

小林行雄 1933a「彌生式土器聚成圖稿 畿内之部 其二」『考古學』第4巻第8號 東京考古學會 243 頁。

小林行雄 1933b「彌生式土器聚成圖 遠賀川系土器之部」『考古學』第4巻第8號 東京考古學會 244 頁。

小林行雄 1933c「先史考古學に於ける様式問題」『考古學』第4巻第8號 東京考古學會 223-238 頁。

小林行雄 1959「集成 corpus」水野清一・小林行雄 編『図解 考古学辞典』東京創元社 436-437 頁。

小林行雄 1978「弥生古墳時代のガラス工芸」『MUSEUM』no.324 4-13 頁。

小松 譲 2011「唐津地域の弥生時代石製装身具—弥生時代中期・後期の玉作りの可能性」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国—王(墓)と翡翠玉—』第9回日本玉文化研究会北部九州地方大会資料集 11-40 頁。

小山雅人 1992a「弥生勾玉の分布とその変遷」『究班』埋蔵文化財研究会 15周年記念論文集 埋蔵文化財研究会 25-32 頁。

小山雅人 1992b「近畿地方の弥生勾玉」『京都府埋蔵文化財情報』第46号 12-26 頁。

小山雅人 1996「超大型の弥生勾玉」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査センター 137-144 頁。

斎藤あや 2011「付編2 大原遺跡2号方形周溝墓出土の玉類について」『大原遺跡』横浜市ふるさと歴史財団 195-205 頁。

- 斎藤 忠 1940「南鮮古墳発見の玉類とその佩用に就いて」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』吉川弘文館 377-406 頁。
- 斎藤 忠 1943『朝鮮古代文化の研究』 地人書院。
- 斎藤 忠 1966『古墳文化と古代国家』 至文堂。
- 斎藤 忠 1977「勾玉に関する記述」『シーボルト『日本』の研究と解説』講談社 168-171 頁。
- 斎藤 忠 1990a「第3章 遺跡・遺物に対する学史上の諸問題 第3節 学術用語の中の廃絶語と伝統語」『日本考古学史の展開』日本考古学研究3 学生社 420-447 頁。
- 斎藤 忠 1990b「第5節 シーボルトの曲玉の研究」『日本考古学史の展開』日本考古学研究3 学生社 471-481 頁。
- 斎藤 忠 1992『集成図』『日本考古学用語辞典』学生社 202-203 頁。
- 斎藤義弘 1998「弥生時代中期の勾玉製作技法とアメリカ式石鏃製作について」『福島考古』第39号 37-56 頁。
- 早乙女雅博・早川泰弘 1997「日韓硬玉製勾玉の自然科学的分析」『朝鮮学報』第162輯 21-42 頁。
- 酒井英一 2007「縄文勾玉に対する江戸時代の人の考え方—安倍親任著『筆濃餘理』より—」『玉文化』第4号 日本玉文化研究会 46-49 頁。
- 佐賀県教育委員会 2010『中原遺跡Ⅳ 11区・13区の弥生時代甕棺墓の調査』。
- 山陰考古学研究集会事務局 2008『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究集会資料集。
- P. F. von シーボルト 著 中井晶夫 妹尾守雄 末木文美士 石山禎一 訳 1978「第6編 勾玉(原題 考古学—古代日本島住民の宝物である勾玉)」『シーボルト『日本』』第4巻 雄松堂書店 1-12 頁。
- 潮見 浩 1988「Ⅵ ガラス」『図解 技術の考古学』有斐閣 95-102 頁。
- 鹿持雅澄 1946「玉蜻考」『万葉集古義』8 目黒書店 452 - 457 頁。
- 篠原祐一 2009「勾玉の規格性に関する一考察」『栃木県考古学会誌』第30集 記念特大号 139-146 頁。
- 篠原祐一 2010「勾玉腹部弧の数値化に関する一考察」『日本基層文化論叢』椋山林継先生古稀記念論集 雄山閣 186-196 頁。
- 柴田常恵 1910a「出雲雑記(二)」東京人類學會雑誌』第25巻 第293号 東京人類學會 420-423 頁。
- 柴田常恵 1910b「出雲雑記(三)」東京人類學會雑誌』第25巻 第294号 東京人類學會 460-465 頁。
- 柴田常恵 1916「各種の勾玉」『人類學雑誌』第31巻第1號 東京人類學會 1-3 頁。
- 柴田常恵 1924a「先史時代 先住氏族(1) 石製品 勾玉」『日本考古學』國史講習會 41-43 頁。
- 柴田常恵 1924b「歴史時代 遺物(1) 身體裝飾品 勾玉」『日本考古學』國史講習會 83-85 頁。
- 島田貞彦 小泉顯夫 1927「日本及朝鮮発見玉製勾玉類比重測定統計」『出雲上代玉作遺物の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告 第10冊 臨川書店 79-102 頁。
- 島田貞彦 1933「琉球勾玉考」『歴史と地理』31巻第1号 30-43 頁。
- 島田貞彦 1940「勾玉雑考」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』吉川弘文館 317-328 頁。
- 島田貞彦 1941「日本発見の硬玉に就いて」『考古學雑誌』第31巻第5號 75-76 頁。

- 島根県教育委員会 1987『島根県生産遺跡分布調査報告Ⅳ－玉作関係遺跡－』。
- 島根県古代文化センター 2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ－中国地方の玉作関連遺跡集成－』。
- 島根県古代文化センター 2005『古代出雲における玉作の研究Ⅱ－中国地方の玉製品出土遺跡集成－』。
- 清水邦彦 2015「ガラス勾玉生産と銅鐸生産の関係性－東奈良遺跡の事例とその系譜から－」『森浩一先生に学ぶ－森浩一先生追悼論集－』同志社大学考古学シリーズ XI 235-244 頁。
- 下垣仁志 2016「論考 集成の概要と活用」『日本列島出土鏡集成』同成社 529-551 頁。
- 下地 馨 1944「宮古曲玉の研究」『南島』第2輯 96-135 頁。
- 城陽市教育委員会 2015『久津川車塚古墳 2015 年度発掘調査の概要』現地説明会資料。
- 新人物往来社 1990『歴史読本』4月号(第35巻第7号)。
- 新人物往来社 2008『歴史読本』6月号(第53巻第6号)。
- 末永雅雄・嶋田 暁・森浩一 1954『和泉黄金塚古墳』東京堂出版。
- 菅原康夫 1988「吉野川上流の勾玉製作－徳島県稲持遺跡の攻玉形態について－」森 浩一 編『考古学  
と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ 259-272 頁。
- 菅原康夫 2013「蛇紋岩性勾玉の生産と流通」『玉の魅力に迫る－四国と周辺玉生産と玉文化－』開館  
15周年記念特別企画展記念シンポジウム資料集 31-47 頁。
- 菅原康夫 2015「蛇紋岩性弥生勾玉の拡散」『森浩一先生に学ぶ－森浩一先生追悼論集－』同志社大学考  
古学シリーズ XI 219-234 頁。
- 椙山林継 2015「たまと玉作－玉作り遺跡調査の回顧とまつりの玉－」『古墳時代の玉作りと神まつり』  
古代歴史文化協議会 1-8 頁。
- 鈴木克彦 2004「縄文勾玉－曲玉から勾玉へ－」『季刊考古学 縄文時代の玉文化』第 89 号 雄山閣  
25-27 頁。
- 鈴木克彦 2005「現状と課題 3 北日本における硬玉の変遷と特質－特に、ヒスイ勾玉の起源と発展－」  
『日本玉文化研究会第3回北海道大会研究発表会要旨・資料集』152-172 頁。
- 鈴木克彦 2006「縄文勾玉の起源に関する考証」『玉文化』第3号 日本玉文化研究会 1-22 頁。
- 鈴木克彦 2013「縄文勾玉研究の展望」『玉文化』第10号 日本玉文化研究会 45-56 頁。
- 鈴木真実子 2012「縄文勾玉の終焉と再生」『玉文化』第9号 日本玉文化研究会 1-32 頁。
- 関 雅之 2013「新潟県における縄文・弥生時代ヒスイ勾玉の一考察－縄文勾玉の形態と弥生勾玉の生産  
及びヒスイ産地の玉問題－」『新潟考古』第24号 61-80 頁。
- 大門一樹 1967「昭和時代」『物価の百年』早川書房 235-256 頁。
- 高木市之助・五味智英・大野 晋 校注 1960『万葉集三』日本古典文学大系6 岩波書店。
- 高木市之助・五味智英・大野 晋 校注 1962『万葉集四』日本古典文学大系7 岩波書店。
- 高橋 勇 1933「五、アイヌの墓より出た玉類」『考古學雑誌』第23巻 第1号 57-58 頁。
- 高橋健自 1911「第4章 各論 甲 勾玉」『鏡と剣と玉』富山房 188 - 193 頁。
- 高橋健自 1916「石器時代の勾玉について」『人類學雑誌』第31巻第1号 東京人類學會 26-28 頁。
- 高橋健自 1928「勾玉と鈴に就いて」『考古學雑誌』第18巻第7号 考古學會 373 - 384 頁。
- 高橋浩二 2008「弥生時代における翡翠勾玉の製作技術と生産の様相」『北陸における弥生・古墳時代玉

- 作の変革』第6回日本玉文化研究会 石川大会 発表要旨集 28-38頁。
- 高橋浩二 2010「翡翠半球形勾玉の製作技術と地域性の背景」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』 215-230頁。
- 高橋浩二 2012a「翡翠半球形勾玉の製作技術と地域性の背景」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』平成21～23年度科学研究費補助金 若手研究（B）研究成果報告書 富山大学人文学部 5-20頁。
- 高橋浩二 2012b「翡翠定形勾玉の製作技術と流通過程、および北陸における製作開始時期の検討」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』平成21～23年度科学研究費補助金 若手研究（B）研究成果報告書 富山大学人文学部 21-33頁。
- 高橋浩二 2012c「味雛王陵地区古墳群および皇吾洞34号墳出土の翡翠勾玉」『韓半島出土翡翠勾玉集成—釜山・金海編—』平成21年～23年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書 24-39頁。
- 高橋浩二 編 2016『韓半島出土翡翠勾玉集成 忠清道・全羅道編』平成24年～27年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書。
- 高橋進一 1992「21 玉作遺跡と玉製品」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社 79-100頁。
- 竹内理三・井上辰雄・江坂輝彌・加藤晋平・小林達雄・坂詰秀一・佐々木銀彌・佐原眞・平川紀一 編 1983『考古遺跡・遺物地名表』日本歴史地図〈原始・古代編〉別巻 柏書房。
- 辰巳和弘 2004「勾玉、そのシンボリズム」『地域と古文化』『地域と古文化』刊行会 370-379頁。
- 辰巳和弘 2011a「Ⅲ 古代人の他界観 第2章 魂のなびき、他界へのわたり」『他界へ翔る舟—「黄泉の国」の考古学』新泉社 309-314頁。
- 辰巳和弘 2011b「Ⅲ 古代人の他界観 第3章 勾玉のシンボリズム」『他界へ翔る舟—「黄泉の国」の考古学』新泉社 315-320頁。
- 谷川章雄 2008「沖縄の玉とその交易」『日琉交易の黎明—ヤマトからの衝撃』叢書・文化学の越境 17 森話社 285-303頁。
- 谷川士清 1774『勾玉考』。
- 谷澤亜里 2014a「弥生時代後期・終末期の勾玉からみた地域間関係とその変容—西日本の墓出土資料を中心に—」『考古学研究』第61巻第2号 65-84頁。
- 谷澤亜里 2014b「玉類からみた古墳時代の地域間関係—前期の北部九州地域を中心に—」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会 大分大会資料 49-68頁。
- 谷 千生 1888「曲玉用法考」『東京人類學會雑誌』第3巻第28號 東京人類學會 275-278頁。
- 田原本町教育委員会 2008『唐古・鍵遺跡Ⅰ』。
- 田平徳栄 2008「九州における弥生時代ヒスイ勾玉の製作と流通について」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』第14集。
- 玉城一枝 1990「弥生・古墳時代における硬玉の拡がり」森浩一 編『古代翡翠道の謎』新人物往来社 141-159頁。
- 玉元陽子 2011「古墳時代からの勾玉や管玉・石笛を数え、その年の吉凶を占う玉依比売命神社（長野県）の「児玉石神事」」『ミネラ（MINERA）』no.12 44-47頁。



- 玉湯町教育委員会 1972『史跡出雲玉作跡 発掘調査概報』。
- 田村晃一 1986「手工業製品の対外流通」『岩波講座 日本考古学3 生産と流通』岩波書店。
- 淡 厓 1888「曲玉の有無如何」『東京人類學會雜誌』第3巻第26號 東京人類學會 178-179頁。
- 崔 恩珠 1986「韓国曲玉の研究」『崇実史学』第4輯。(※論題の「の」はハングル表記)。
- 茅原一也 1964「長者ヶ原遺跡のヒスイ(翡翠)について(概報)」『長者ヶ原』新潟県糸魚川市教育委員会 63-73頁。
- 茅原一也 1987『ヒスイの科学』茅原一也教授退官記念会。
- 千葉県文化財センター 1979『研究紀要』4 考古学から見た房総文化—古墳時代—(墓制の基礎資料)。
- 千葉県文化財センター 1992『研究紀要』13 生産遺跡の研究2—玉—。
- 土田孝雄 1982『翠の古代史 ヒスイ文化の源流をさぐる』奴奈川文化叢書① 奴奈川郷土文化研究会。
- 坪井正五郎 1886「管玉曲玉ノ新説 坪井正五郎曰」『東京人類學會報告』第1巻第8號 東京人類學會 160-164頁。
- 坪井正五郎 1889「パリ通信」『東京人類學會雜誌』第5巻第44號 東京人類學會 17-27頁。
- 坪井正五郎 1890「曲玉に關する羽柴、三宅二氏の説を讀み再び思ふ所を述ぶ」『東京人類學會雜誌』第5巻第54號 東京人類學會 371-374頁。
- 坪井正五郎 1891a「ロンドン通信」『東京人類學會雜誌』第6巻第62號 東京人類學會 263-273頁。
- 坪井正五郎 1891b「ロンドン通信」『東京人類學會雜誌』第6巻第66號 東京人類學會 412-416頁。
- 坪井正五郎 1891c「ロンドン通信」『東京人類學會雜誌』第7巻第69號 東京人類學會 102-103頁
- 坪井正五郎 1904「曲玉製造法」『集古會誌』卷之3 集古會。
- 坪井正五郎 1908「曲玉の形状種類」『東京人類學會雜誌』第23巻第266號 東京人類學會 287-296頁。
- 坪井正五郎 1910「管玉曲玉の未製品」『東京人類學會雜誌』第25巻第294號 東京人類學會 454-458頁。
- 鶴岡市史編纂会 編 1977『鶴岡市史資料編 上巻』荘内史料集2。
- 鶴岡市史編纂会 編 1978『鶴岡市史資料編 下巻』荘内史料集3。
- 寺泊町 1991『寺泊町史 資料編1』。
- 寺村光晴 1964「古代攻玉技術とその復元的考察」『國學院雜誌』第65巻第6號 57-85頁。
- 寺村光晴 1966『古代玉作の研究』国学院大学考古学研究報告第3冊 吉川弘文館。
- 寺村光晴 1968a「ヒスイ転変」『翡翠(ひすい) —日本のヒスイとその謎を探る—』養神書店 109-126頁。
- 寺村光晴 1968b「魏志倭人伝「青大句珠」をめぐる諸問題—邪馬台国の所在論に關連して」『國史學』第77号 21-44頁。
- 寺村光晴 1970「編集後記」『日本玉研究会会誌』第1号 日本玉研究会 11頁。
- 寺村光晴 1972「「たま」の系譜—古代玉概念の再検討—」『和洋国文研究』8号 和洋女子大学国文学会 56-63頁。
- 寺村光晴 1974『下総国の玉作遺跡』雄山閣。
- 寺村光晴 1980a『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館。
- 寺村光晴 1980b「第一章 研究の基礎的前提 二 玉の性格と変遷」『古代玉作形成史の研究』吉川弘

- 文館 43 - 56 頁。
- 寺村光晴 1984「日韓古代のヒスイと玉」森 浩一 編『シンポジウム 東アジアと日本海文化』小学館 173-196 頁。
- 寺村光晴・谷川健一 1984「対談 古代日本人の信仰－タマをめぐって－」『東アジアの古代文化』第 39 号 大和書房 2-34 頁。
- 寺村光晴 1985「日本先史時代の琥珀－出現と様相－」『学部創業三十五周年 記念論文集』125-149 頁。
- 寺村光晴 1995『日本の翡翠－その謎を探る－』吉川弘文館。
- 寺村光晴 1998「65 日本の硬玉（翡翠）製玉類の生産」鄧 聰 編『東亜玉器』vol. II 中國考古藝術研究中心 297-311 頁。
- 寺村光晴 編 2004a『日本玉作大観』吉川弘文館。
- 寺村光晴 2004b「巻頭言－創刊にあたって－」『玉文化』創刊号 日本玉文化研究会。
- 寺村光晴 2015「巻頭言－日本玉文化学会の発足にあたって－」『玉文化研究』創刊号 日本玉文化学会 i 頁。
- 徳田誠志 2015「関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」について－大形丁字頭勾玉出現の一考察」『関西大学博物館紀要』21 1-21 頁。
- 都市再生機構・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012『反町遺跡Ⅲ』。
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013『青谷上寺遺跡出土品調査研究報告 9 玉・玉作関連資料』。
- 戸根比呂子 2008「「東海系」の玉の流通」『玉文化』第 5 号 日本玉文化研究会 45-64 頁。
- 戸根比呂子 2014「7 七観古墳出土の玉」『七観古墳の研究－1947 年・1952 年出土遺物の再検討－』七観古墳研究会 295-305 頁。
- 戸根与八郎 1975「新潟県新発田市堂ノ前遺跡発見の勾玉」『日本玉研究会会誌』第 4 号 日本玉研究会 8-9 頁。
- 富山県教育委員会 1965『極楽寺遺跡発掘調査報告書』。
- 鳥居龍蔵 1894a「本邦石器時代ノ曲玉」『東京人類学会報』第 9 卷第 96 号 東京人類学会 225-227 頁。
- 鳥居龍蔵 1894b「琉球諸島女子現用ノはけだま及比同地方掘出ノ曲玉」『東京人類学会雑誌』第 9 卷第 96 号 232-236 頁。
- 鳥居龍蔵 1895「曲玉形状の比較」『東京人類学会雑誌』第 10 卷第 107 号 東京人類学会 209-210 頁。
- 仲原弘哲 2011「ノロ祭祀具の中の玉製品」『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会 43-55 頁。
- 内藤武義 1970「古代勾玉製作の実験的研究」『日本玉研究会会誌』第 1 号 日本玉研究会 7-9 頁。
- 中井伊與太 1895「琉球諸島発見ノ曲玉ト阿波國発見ノ曲玉」『東京人類学会雑誌』第 10 卷第 107 号 211-212 頁。
- 中川成夫 1957「魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈」『史苑』18-1 立教大学 85-90 頁。
- 中村大介・藁科哲男・田村朋美・小泉裕司 2014「玉類の流通と芝ヶ原古墳」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 50 卷第 1 号 埼玉大学教養部 121-134 頁。
- 中山浩彦 2000「埼玉県内古墳出土の勾玉（I）」『調査研究報告』第 13 号 埼玉県立さきたま資料館

- 15-20 頁。
- 中山浩彦 2001「埼玉県内古墳出土の勾玉（Ⅱ）」『調査研究報告』第 14 号 埼玉県立さきたま資料館 15-24 頁。
- 中山太郎 1930「第 4 章 巫女の呪術に用ゐし材料 第 2 節 呪術の為に発達した器具」『日本巫女史』パルトス社 162 - 171 頁。
- 成澤孝治 土肥俊郎 2000「古代磨製出土品の勾玉とその再現加工・製作に関する研究」『埼玉大学紀要（教育学部）数学・自然科学』第 49 巻第 1 号 59-69 頁。
- 新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会 2006『吹上遺跡—主要地方道上越新井線関係発掘調査報告書 I—』。
- 西岡虎之助・服部之総 監修 1956『日本歴史地図』 全国教育図書株式会社。
- 西谷 正 1982「朝鮮先史時代の勾玉」『古文化論集』上巻 森貞次郎博士古希記念 187-202 頁。
- 日本玉研究会 1975「「タマツクリ」名の採録（1）」『日本玉研究会会誌』第 4 号 12 頁。
- 日本玉文化研究会 2004～2006「縄文時代ヒスイ玉集成」『玉文化』創刊号～第 3 号。
- 日本玉文化研究会 2008～2010「縄文時代翡翠玉集成」『玉文化』第 5 号～第 7 号。
- 日本玉文化研究会 2012「翡翠玉集成」『玉文化』第 9 号。
- ニューサイエンス社 2008『考古学ジャーナル 特集 玉生産研究の現状』No. 567 1 月号。
- 野津左馬之助 1925「第二節 古墳の著しき発掘物と其比較研究 一、玉類」島根縣内務部島根縣史編『島根縣史 四 古墳』島根縣 388-394 頁。
- 野村 崇 2005「北海道出土のヒスイ製装飾品」『地域と文化の考古学 I』六一書房 531-546 頁。
- 野本寛一 1975「玉と砂と 1 玉の伝承」『石の民俗』日本の民俗学シリーズ 1 雄山閣 239 - 262 頁。
- 朴 天秀 2016「古代韓半島にける硬玉製勾玉の移入とその歴史的背景」『玉から古代日韓交流を探る』第 2 回古代歴史文化協議会講演会資料集 古代歴史文化協議会 1 - 8 頁。
- 羽柴雄輔 1886「管玉曲玉ノ新説」『東京人類學會報告』第 1 巻第 8 號 東京人類學會 160-164 頁。
- 羽柴雄輔 1890a「曲玉に就きて」『人類學會雜誌』第 5 巻第 50 號 東京人類學會 219-222 頁。
- 羽柴雄輔 1890b「坪井君の曲玉定義に就き黙するを得ず」『東京人類學會雜誌』第 6 巻第 55 號 東京人類學會 22-24 頁。
- 橋本増吉 1932『東洋史上より觀たる日本上古史研究』1 大岡山書店。
- 長谷部言人 1930「結縛崇拜`Obligoisimus`」『人類學雜誌』第 45 巻第 10 號 東京人類學會 385 - 391 頁。
- 濱田耕作 1919「彌生土器型式分類聚成圖録」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第 3 冊 京都帝國大學 57-62 頁。
- 濱田耕作 1922「第四編 研究 第 1 章 資料の整理鑑別 六八、「集成」の必要」『通論考古學』大鏡閣 140-142 頁。
- 濱田耕作 1927「(ロ) 古代の攻玉法 (一)」『出雲上代玉作遺物の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告 第 10 冊 臨川書店 42-53 頁。
- 濱田耕作 1928「支那の古玉器と日本の勾玉」『東亞考古學論叢』NO. 1 26-32 頁。

- 林 若吉 1896「予が得たる石器時代曲玉」『東京人類学会報』第 11 卷第 126 號 東京人類學會 504-506 頁。
- 原田淑人 1940「我國の硬玉問題に就いて」『考古學雜誌』第 30 卷第 6 號 421-428 頁。
- 樋口清之 1940「垂玉考」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』吉川弘文館 243-277 頁。
- 韓 炳三 1976「曲玉の起源」『考古美術』129・130 合併号 222-228 頁。(※タイトルの「の」はハンゲル表記。この研究は、鈴木真実子氏によって翻訳され、2012 年刊行の『玉文化』第 9 号に収録されている)。
- 樋口清之 1948「日本の硬玉問題」『上代文化』第 18 輯 國學院大學考古學會 11-24 頁。
- 廣瀬時習 2003「弥生玉類の地域色—東北南部の勾玉生産と製品の流通—」『考古学に学ぶ(Ⅱ)』同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 157-166 頁。
- 廣瀬時習 2006「弥生時代玉類の地域性」『季刊考古学 弥生・古墳時代の玉文化』第 94 号 雄山閣 30-33 頁。
- 廣瀬時習 2009「⑦玉生産と流通」『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学 6 同成社 86-96 頁。
- 深田 浩 2006「瑪瑙製玉類の展開—島根県の様相を中心に—」『季刊考古学 弥生・古墳時代の玉文化』第 94 号 雄山閣 40-43 頁。
- 藤下昌信 1975「千葉県成田市郷部出土の硬玉製大形勾玉—川辺敏氏所蔵品について—」『日本玉研究会会誌』第 4 号 日本玉研究会 7-8 頁。
- 藤田 等 1977「弥生時代のガラス」松崎寿和先生退官記念事業会 編『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』145-180 頁。
- 藤田 等 1994『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—』名著出版。
- 藤田富士夫 1972「攻玉遺跡の勾玉状石製品について—その発生と予察—」『日本玉研究会会誌』第 3 号 日本玉研究会 1-4 頁。
- 藤田富士夫 1988「ヒスイと古代人の心」森 浩一 編『古代翡翠文化の謎』新人物往来社 121-135 頁。
- 藤田富士夫 1989「Ⅱ各時代の玉文化の特色」『玉』考古学ライブラリー52 ニュー・サイエンス社 14-105 頁。
- 藤田富士夫 1992「第 3 章日本ヒスイ文化の特質 第 2 節最後の勾玉文化」『玉とヒスイ—環日本海の交流をめぐって』同朋舎 122 - 138 頁。
- 藤田富士夫 2000「魏志倭人伝の「白珠五千孔青大句珠二枚」をめぐる若干の考察」『考古学論究』第 7 号 94-104 頁。
- 藤田富士夫 2001「翡翠製勾玉」『季刊 文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 特集 宝石と装身』第 18 卷第 2 号 3-10 頁。
- 藤田富士夫 2013「玉文化研究の現状と課題—主に縄文勾玉とその起源について—」『玉の魅力に迫る—四国と周辺玉生産と玉文化—』開館 15 周年記念特別企画展記念シンポジウム資料集 1-12 頁。
- 藤田亮策 1957「硬玉問題の再検討」『古代』第 25・26 号合併号 早稲田大学考古学会 1-11 頁。
- 藤田亮策 1960「硬玉の勾玉」『日本古代史論叢』吉川弘文館 605-618 頁。

- 藤原秀樹 2006「北海道における縄文時代後期・晩期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』第3号 玉文化研究会 23-90頁。
- 埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 2005『古墳時代の滑石製品―その生産と消費―』発表要旨・資料集。
- 前原市教育委員会 2005『潤地頭給遺跡―福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要―』前原市文化財調査報告書第89集。
- 松浦有一郎 2009「中国新石器時代の勾玉」『玉文化』第6号 日本玉文化研究会 45-47頁。
- 松浦有一郎 2015「オルドスの勾玉―中国内モンゴル自治区碾房渠窖藏遺跡出土資料―」『玉文化研究』創刊号 日本玉文化学会 7-12頁。
- 松岡静雄 1916「子の観念 Chiismに就て」『社會學雜誌』25 日本社會學會 22-29頁。
- 松原 聰 2004「第Ⅱ部 翡翠の科学 第1章 翡翠とは何か?」『特別展 翡翠展 東洋の至宝』国立科学博物館企画展図録 毎日新聞社 38-41頁。
- 松山義通 1905「一種の勾玉」『考古界』606-609頁。
- 三浦 清 渡辺貞幸 1988「山陰地方における弥生墳丘墓出土玉材について―西谷3号墓出土品を中心に―」『島根考古学会誌』第5集 45-63頁。
- 水野 祐 1952『日本古代王朝史論序説』日本古代史研究叢書 第1冊 謄写版。
- 水野 祐 1969a「八 勾玉の謎」『勾玉』学生社 210-222頁。
- 水野 祐 1969b「七 勾玉の道」『勾玉』学生社 165-209頁。
- 水野 祐 1969c「三 三種の神器と勾玉」『勾玉』学生社 62-102頁。
- 水野 祐 1983「第11章 古代出雲の佩玉文化 第3節「三種の神器」と出雲の勾玉」『出雲國風土記論攷』東京白川書院 582-616頁。
- 水野裕之 1999「弥生勾玉からみた朝日遺跡とその周辺―愛知県の出土資料から―」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第1号 1-10頁。
- 宮城弘樹 2005「今帰仁阿応理屋恵勾玉について」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ―今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』今帰仁村教育委員会。
- 三宅米吉 1889「曲玉カ」『東京人類學會雜誌』第5巻第45號 東京人類學會 55-56頁。
- 宮島 宏 2004『とっておきのひすいの話 増補改訂版』フォッサマグナミュージアム。
- 村上恭道 2000「Ⅲ 遼寧式銅劍・細形銅劍文化と燕」村上恭道 編『東夷世界の考古学』青木書店 55-77頁。
- 村上 隆 1995「研究余録 金製勾玉の製作工程」『文化財論叢Ⅱ』64頁。
- 望月信成 1961「鏡と曲玉と劍」『古代文化』第7巻第1号 古代學協會 1-4頁。
- 本居宣長 1764-1798「おひつぎの考」『古事記傳』15-3 神代一三之巻(本居宣長 1968「おひつぎの考」大野 晋 編『本居宣長全集』第十巻 筑摩書房 201-202頁に所収)。
- 森 浩一 1992「連載 神話と伝説の考古学」『月刊 Asahi』朝日新聞社 86-91頁。
- 森 浩一 1993「第6章 八坂瓊勾玉」『日本神話の考古学』朝日新聞社 99-113頁。
- 森 貞成 1940「古墳出土玉類の研究に就て―其の名稱と分類に對する考察―」考古學會 編『鏡劍及玉

- の研究』吉川弘文館 329-343 頁。
- 森貞次郎 1980 「弥生勾玉考」『古文化論攷』鏡山猛先生古稀祈念論文集刊行会 307-882 頁。
- 森本六爾 1932 「彌生式土器聚成圖と彌生式時代地名表」『考古學』第 3 卷第 4 號 第二彌生式號 東京考古學會 109-110 頁。
- 森本六爾 1933 「時評 日本考古學に於ける聚成圖の問題」『考古學』第 4 卷第 2 號 東京考古學會 53-54 頁。
- 森山 高 2012 「縄文時代後・晩期の北日本出土勾玉の系統と傾向」『千葉大学文学部考古学研究室 考古学論攷 I』 361-384 頁。
- 森山 高 2015 「縄文時代後・晩期の北日本出土勾玉の形態別特徴」『千葉大学文学部考古学研究室 考古学論攷 II』 141-182 頁。
- 兩角守一 1931a 「石器時代勾玉の研究」『考古學』第 2 卷第 3 號 37-46 頁。
- 兩角守一 1931b 「石器時代勾玉の研究（下）」『考古學』第 2 卷第 5・6 號 33-40 頁。
- 門田誠一 1988 「古代韓国の玉文化」『第 2 回翡翠と日本文化を考えるシンポジウムーヒスイは語る 越の大地にー』資料集 36-41 頁。
- 門田誠一 1989 「日本と韓国における硬玉製勾玉についての再吟味」『日本海文化研究』49-86 頁。
- 門田誠一 1990 「古代韓国の玉文化」森浩一 編『古代翡翠道の謎』新人物往来社 161-181 頁。
- 門田誠一 2005 「朝鮮半島の勾玉ーヒスイ勾玉の出現から消滅ー」『ヒスイ文化フォーラム 2005 神秘の勾玉ー弥生・古墳時代の翡翠文化』資料集 22-27 頁。
- 八木棗三郎 1898 「第 2 節 裝飾品」『日本考古學』後編 愛善社 228-342 頁。
- 八幡一郎 1940 「硬玉製大珠の問題」『考古學雑誌』第 30 卷第 5 号號 考古學會 344-355 頁。
- 八幡一郎 1941 「硬玉の礦脈」『ひだびと』第 9 年第 6 號 飛騨考古土俗学界 9-11 頁。
- 山田琴子 2015 「埼玉県の玉作り遺跡について」『古墳時代の玉作りと神まつり』第 1 回古代歴史文化協議会講演会 資料集 9-12 頁。
- 雄山閣 2004 『季刊考古学 縄文時代の玉文化』第 89 号。
- 雄山閣 2006 『季刊考古学 弥生・古墳時代の玉文化』第 94 号。
- 湯尾和弘 2003 「日本列島における勾玉の生産と流通」『金大考古』第 41 号 金沢大学考古学研究室 1-2 頁。
- ユニー株式会社・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011 『反町遺跡 II』。
- 由水常雄 1978 「東洋古代ガラスの技法」『MUSEUM』no. 324 14-23 頁。
- 横山 学 1971 「沖縄・波照間島の勾玉」『古代研究』創刊号 22-28 頁。
- 米田克彦 1998 「出雲における古墳時代の玉生産」『島根考古学会誌』第 15 集 21-51 頁。
- 米田克彦 2008 「古墳時代玉生産の変革と終焉」『月刊考古学ジャーナル』No. 567 1 月号 ニューサイエンス社 18-23 頁。
- 米田克彦 2009 「勾玉祭祀の波及ー弥生時代の中国地方を中心にー」一山典選暦記念論集刊行会 編『考古学と地域文化』103-122 頁。
- 米田克彦 2011 「四国地方における弥生時代勾玉祭祀の波及」『玉文化』第 8 号 23-40 頁。

- 米田克彦 2013a「環瀬戸内海の勾玉祭祀」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』考古学研究会例会シンポジウム記録9 129-155頁。
- 米田克彦 2013b「瀬戸内海沿岸の弥生勾玉」『玉の魅力に迫るー四国と周辺の玉生産と玉文化ー』開館15周年記念特別企画展記念シンポジウム資料集 48-65頁。
- 米田克彦 2014「中四国地方における前期古墳の玉類副葬に関する予察」『前期古墳編年を再考するー広域編年再構築の試みー』中国四国前方後円墳研究会 第17回研究集会 発表要旨集・資料集 23-40頁。
- 盧 希淑 2009「韓国の玉文化」『玉と王権』西都原考古博物館 国際交流展 図録 94-106頁。
- 渡辺暉夫・勝部 衛 1983b「島根県玉湯町出土の結晶片岩内磨砥石の原石供給地に関する考察」『考古学と自然科学』第16号 日本文化財科学会 43-57頁。
- 渡辺暉夫 1984「出雲玉作遺跡出土の内磨砥石中の紅レン石の鉱物化学的特徴」『山陰文化研究紀要』第24号 11-18頁。
- 和田千吉 1916「異形の勾玉」『人類学雑誌』第31巻第2号 43-47頁。
- 藁科哲男 1988「ヒスイの原産地を探る」森 浩一 編『古代翡翠文化の謎』136-160頁。
- 藁科哲男 1990「ヒスイを科学するーその後の成果ー」森浩一 編『古代翡翠道の謎』 新人物往来社 183-210頁。
- 藁科哲男 1994『玉類の原材産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』平成5年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書。
- 藁科哲男 1997「宇木汲田遺跡出土のヒスイ製勾玉、碧玉製管玉の産地分析」『佐賀県立博物館・佐賀県立美術館調査研究書』第22集。
- 藁科哲男 1998a『石器、玉類の原材産地分析から考察する石器、玉類の分布圏の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書。
- 藁科哲男 1998b「勝負遺跡出土の玉材剥片の産地分析」『勝負遺跡・堂床古墳』 183-195頁。
- 藁科哲男 1999「第5章 産地同定」『自然科学と考古学-④ 考古学と年代測定学・地球科学』 同成社 259-293頁。
- 藁科哲男 2009「附編 自然科学分析 米坂古墳群出土玉類・造山3号墳出土玉類の産地分析」『出雲玉作の特質に関する研究ー古代出雲における玉作の研究Ⅲー』 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 165-185頁。
- 藁科哲男 2013a「第4章 自然科学分析の成果 第3項 ヒスイ」144-151頁。
- 藁科哲男 2013b「第4章 自然科学分析の成果 第4項 石鋸素材」152-158頁。

〔第1章〕

- 井上 巖 2012『玉類の分析法と原産地対比法 京都府・大阪府・兵庫県・岐阜県の各遺跡より出土した滑石製玉類、塩基性凝灰岩製玉類の岩質の共通性について』 第四紀地質研究所。
- 大賀克彦 2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館 313-320頁。

- 大賀克彦 2008 「4 成塚向山 1 号墳出土の玉類～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～」『成塚向山古墳群』499-516 頁。
- 大賀克彦 2009 「第 2 章 山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』 島根県古代文化センター 島根県埋蔵文化財調査センター 9-62 頁。
- 大坪志子 2015a 「第Ⅵ章 九州ブランドの実態－九州縄文時代後晩期のクロム白雲母製玉－」『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』 雄山閣 97-109 頁。
- 大坪志子 2015b 「第Ⅶ章 九州ブランドの展開－九州周辺における縄文時代後晩期の玉－」『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』 雄山閣 111-130 頁。
- 折口信夫 1996 「剣と玉」『折口信夫全集』19 中央公論社 23 - 35 頁。
- 金関丈夫 1975 「魂の色一まが玉の起り」『発掘から推理する』朝日選書 40 朝日新聞社 34 - 40 頁。
- 河村好光 1992 「攻玉技術の革新と出雲玉づくり」『島根考古学会誌』第 9 集 島根考古学会 15-30 頁。
- 河村好光 2004 「初期倭政権と玉づくり集団」『考古学研究』第 50 巻第 4 号 考古学研究会 55-75 頁。
- 木内石亭 1936 「曲玉問答」中川泉三編『木内石亭全集』巻 1 下郷共済会 21 - 41 頁。
- 喜田貞吉 1933 「八坂瓊之曲玉考」『歴史地理』61 - 1 日本歴史地理學會 1 - 19 頁。
- 木下尚子 2000 「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点② 小学館 187 - 212 頁。
- 九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会 2005 『九州の縄文時代装身具』第 15 回九州縄文研究会沖縄大会資料集。
- 九州縄文研究会 南九州縄文研究会 2012 『縄文時代における九州の精神文化』第 22 回九州縄文研究会鹿児島大会資料集。
- 古代歴史文化協議会 2015 『古墳時代の玉作りと神まつり』シンポジウム資料。
- 古代歴史文化協議会 2016 『玉から子台日韓交流を探る』シンポジウム資料。
- 山陰考古学研究集会 2008 『山陰における弥生時代の鉄器と玉』。
- 島根県古代文化センター 2005 『古代出雲における玉作の研究Ⅱ－中国地方の玉製品出土遺跡集成－』。
- 谷川士清 1774 『勾玉考』。
- 谷澤亜里 2014 「弥生時代後期・終末期の勾玉からみた地域間関係とその変容－西日本の墓出土資料を中心に－」『考古学研究』第 61 巻第 2 号 考古学研究会 65-84 頁
- 坪井正五郎 1891 「曲玉考材料」『東京人類學會報告』7 - 69 東京人類學會 102 - 103 頁。
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』 吉川弘文館。
- 寺村光晴 編 2004 『日本玉作大観』 吉川弘文館。
- 中山浩彦 2000 「埼玉県内古墳出土の勾玉（Ⅰ）」『調査研究報告』第 13 号 埼玉県立さきたま資料館 15-20 頁。
- 中山浩彦 2001 「埼玉県内古墳出土の勾玉（Ⅱ）」『調査研究報告』第 14 号 埼玉県立さきたま資料館 15-24 頁。
- 日本玉文化研究会 2004～2010 「縄文時代ヒスイ玉集成」『玉文化』創刊号～第 7 号。
- 深田 浩 2004 「第 2 章第 1 節 島根県の玉作関連遺跡」『古代出雲における玉作の研究Ⅰ－中国地方の玉作関連遺跡集成－』 島根県古代文化センター 8-19 頁。



- 埋蔵文化財研究会 2005『古墳時代の滑石製品—その生産と消費』。
- 水野 祐 1969「八 勾玉の謎」『勾玉』 学生社 210 - 222 頁。
- 米田克彦 2009「第3節 穿孔技術から見た出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』 島根県古代文化センター 島根県埋蔵文化財調査センター 93-126 頁。
- 米田克彦 2015「出雲玉作研究の論点—古墳時代を中心に—」『古墳時代社会と出雲の玉』平成 27 年度 日本玉文化学会 島根大会資料集 11-20 頁。
- 藁科哲男 1994『玉類の原材産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』平成 5 年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書。
- 藁科哲男 1998『石器、玉類の原材産地分析から考察する石器、玉類の分布圏の研究』平成 7 年度～平成 9 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書。
- 藁科哲男 2002『原材産地分析による石器、玉類の分布圏および黒曜石製遺物の水和層分析の研究』平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書。
- 藁科哲男 2005「第4章第2節 島根県内遺跡出土玉類・玉材剥片などの原材産地分析」『古代出雲における玉作の研究Ⅱ—中国地方の玉製品出土遺跡集成—』164-194 頁。

〔第2章〕

- 梅原末治 1969「上古の禽獣魚形勾玉」の補説 附 史前の大珠に就いて」『史學』第 42 卷 第 1 号 三田史学会 1-30 頁。
- 唐津市 1982『菜畑』。
- 河村好光 2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』第 47 卷 第 3 号 44-62 頁。
- 木内石亭 1936「曲玉問答」『石之長者 木内石亭全集』巻 1 下郷共済會。
- 木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会 541-591 頁。
- 木下尚子 2000「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点② 小学館 187-212 頁。
- 熊本県教育委員会 1994『ワクド石遺跡』。
- 小林行雄 1967 「銅鐸を祭る人びと」『女王国の出現』国民の歴史 1 文英堂 208-235 頁。
- 古森政次 1994「第Ⅶ章 総括」『ワクド石遺跡』 熊本県教育委員会 230-238 頁。
- 鈴木克彦 2004「縄文勾玉—曲玉から勾玉へ—」『季刊 考古学』第 89 号 25-27 頁。
- 鈴木克彦 2006「縄文勾玉の起源に関する考証」『玉文化』第 3 号 日本玉文化研究会 1-22 頁。
- 関 雅之 2013「新潟県における縄文・弥生時代ヒスイ勾玉の一考察—縄文勾玉の形態と弥生勾玉の生産及びヒスイ産地の玉問題—」『新潟考古』第 24 号 新潟考古学会 61-80 頁。
- 高橋健自 1913『考古學』 聚精堂。
- 高橋浩二 2012「翡翠定形勾玉の製作技術と流通過程、および北陸における製作開始時期の検討」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』 富山大学人文学部 21-33 頁。
- 坪井正五郎 1908「曲玉の形状種類」『東京人類學會雜誌』第 23 卷 第 266 号 東京人類學會 287-296

頁。

寺崎祐助 1988「第VI章 まとめ」『糸魚川地区発掘調査報告書IV 原山遺跡 大塚遺跡』新潟県教育委員会 128-135 頁。

寺村光晴 1995「六 ヒスイ転変—縄文時代から弥生時代へ—」『日本の翡翠 その謎を探る』吉川弘文館 140-161 頁。

鳥居龍蔵 1894「本邦石器時代ノ曲玉」『東京人類學會報』第9巻 第96號 東京人類學會 225-227 頁。

林 若吉 1896「予が得たる石器時代曲玉」『東京人類學會報』第11巻 第126號 東京人類學會 504-506 頁。

樋口清之 1940「垂玉考」考古學會 編『鏡劔及玉の研究』 吉川弘文館 243-277 頁。

藤田富士夫 1989「II 各時代の玉文化の特色」『玉』考古学ライブラリー 52 ニュー・サイエンス社 14-105 頁。

水野 祐 1969「七 勾玉の道」『勾玉』 學生社 165-209 頁。

森貞次郎 1980「弥生勾玉考」『古文化論攷』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 307-882 頁。

兩角守一 1931a「石器時代勾玉の研究」『考古學』第2巻 第3號 東京考古學會 37-46 頁。

兩角守一 1931b「石器時代勾玉の研究（下）」『考古學』第二巻 第5・6號 東京考古學會 33-40 頁。

藁科哲男・東村武信 1994「第VI章 自然科学分析 1 ワクド石遺跡出土の硬玉製勾玉の産地分析」『ワクド石遺跡』 熊本県教育委員会 208-215 頁。

### 〔第3章〕

愛知県埋蔵文化財センター 1993『朝日遺跡IV』。

赤星直忠博士文化財資料館・雨崎洞穴刊行会 2015『雨崎洞穴—三浦半島最古の弥生時代海蝕洞穴遺跡—』。

秋田県 1960『秋田県史 考古編』。

足立鉄太郎 1927「最近に調査したる駿東富士の古墳につきて」『静岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第三集 静岡縣。

綾歌町教育委員会 2002『快天山古墳発掘調査報告書』。

綾部市教育委員会 1994『史跡 私市円山古墳整備事業報告』。

石村 智 2008「③威信財交換と儀礼」『儀礼と権力』弥生時代の考古学7 同成社 127-139 頁。

出石町教育委員会 1985『田多地古墳群 田多地経塚群 I』。

糸満市教育委員会 1995『里東原遺跡』。

稲森賢次 1930『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十一冊』。

犬山市教育委員会 2005『史跡 東之宮古墳調査報告書』。

岩手県江釣子村教育委員会 1990『江釣子遺跡群』。

岩手県紫波郡矢巾町教育委員会 1986『徳田遺跡群詳細分布調査報告書』。

岩出貞夫 1980『古墳発掘品調査報告』東京堂出版。

宇佐市教育委員会 1981『宇佐地区圃場整備関係発掘調査概報』。

宇佐市教育委員会 1986『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書I』。

- 宇佐市教育委員会 1998 『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』。
- 宇治市教育委員会 1988 『宇治遺跡群Ⅰ』。
- 宇治市教育委員会 1991 『宇治二子山古墳発掘調査報告』。
- 宇都宮市教育委員会 1996 『塚山古墳群』。
- 有年考古館 1952 『兵庫縣赤穂郡西野山第三號墳』。
- 宇部市教育委員会 1981 『松崎古墳』。
- 宇美町教育委員会 1981 『宇美観音浦一上巻一』。
- 梅原末治 1920 『久津川古墳研究』。
- 梅原末治 1921 『佐味田及新山古墳研究』。
- 梅原末治 1974 「安土瓢箪山古墳」滋賀県編『滋賀県史蹟調査報告』第7冊 名著出版。
- 大分県教育委員会 1989 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(1) 草場第二遺跡』。
- 大分県教育委員会 1999 『大分県埋蔵文化財年報7』。
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007 『一般国道57号中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)』。
- 大分県前方後円墳研究会 1990 「大分県前方後円墳集成Ⅱ—大分市市尾上ノ坊古墳の測量調査—」『おおいいた考古』第3集 30—69頁。
- 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986 『免ヶ平古墳発掘調査報告書』。
- 大賀克彦 2008 「4 成塚向山1号墳出土の玉類 ～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～」『成塚向山古墳群』499—540頁。
- 大賀克彦 2012 「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』富山大学人文学部 49—60頁。
- 大阪市文化財協会 1999a 『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』。
- 大阪市文化財協会 1999b 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1996年度』。
- 大阪大学 1964 『河内における古墳の調査』。
- 大阪大学南原古墳調査団 1992 『長法寺南原古墳の研究』。
- 大阪府教育委員会 1957 『河内松岳山古墳の調査』。
- 大阪府教育委員会 1967 『弁天山古墳群の調査』。
- 大阪府教育委員会 1986 『寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ』。
- 大阪府教育委員会 1990 『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅶ』。
- 大阪府教育委員会 1994 『堂山古墳群』。
- 大島村教育委員会編 1985 『大島村史』。
- 大場磐雄 1930 『石上神宮宝物誌』。
- 大場磐雄 1935 『考古學』哲学全集第16巻 建設社。
- 大平村教育委員会 1993 『穴ヶ葉山遺跡』。
- 大宮町教育委員会 1998 『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』。
- 大山崎町教育委員会 1980 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第1集。

- 岡崎市教育委員会 2003『高木・神明遺跡』。
- 岡山県 1986 『岡山県史』第18巻 考古資料編。
- 岡山県教育委員会 ほか 2000『高塚遺跡 三手遺跡2』。
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡』。
- 桶川町教育委員会 1967『桶川町文化財調査報告Ⅰ』。
- 尾崎市教育委員会 1982『田能遺跡発掘調査報告書』。
- 小田富士雄 1972「九州」『神道考古学講座』第2巻 原始神道期 雄山閣 225-257頁。
- 小田富士雄 1979『九州考古学研究 古墳時代篇』 學生社。
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 2008『熊田山北古墳群発掘調査報告書』。
- 香川県教育委員会 ほか 1988『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』。
- 柏原市教育委員会 1988『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1987年度』。
- 柏原市教育委員会 2004『玉手山古墳群の研究Ⅳ-副葬品編-』。
- 神奈川県教育委員会 1998『埋蔵文化財分布調査報告40』。
- 神奈川県県民部県史編集室 1979『神奈川県史 資料20 考古資料』。
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2013『畝田・寺中遺跡Ⅷ』。
- 亀井明德 1970「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」『九州考古学』38 九州考古学会 10-17頁。
- 苅田町教育委員会 1976『史跡 御所山古墳保存管理計画策定報告書』。
- 河村好光 2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』第47巻 第3号 44-62頁。
- 河好光村 2004「初期倭政権と玉つくり集団」『考古学研究』第50巻第4号 55-77頁。
- 河村好光 2010『倭の玉器 玉つくりと倭国の時代』青木書店。
- 関西大学文学部 1963『北玉山古墳』。
- 関西大学文学部考古学研究室編 1992『紀伊半島の文化史的研究-考古学編-』。
- 木内石亭 1936「曲玉問答」『石之長者 木内石亭全集』巻1 下郷共済會。
- 菊水町史編纂委員会 2007『菊水町史 江田船山古墳編』。
- 岸和田市教育委員会 1995『久米田古墳群発掘調査概要Ⅱ』。
- 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989『岡遺跡』。
- 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2002『蒲生寺中遺跡1』。
- 木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会 541-591頁。
- 木下尚子 2000「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点2 小学館 185-212頁。
- 木下尚子 2005「階級社会の垂飾 ヒスイ勾玉の誕生と展開-弥生時代から奈良時代まで」『ヒスイ文化フォーラム 2005』シンポジウム資料 16-21頁。
- 木下尚子 2011「四 装身具」『講座日本の考古学6 弥生時代(下)』同成社 296-315頁。
- 岐阜県文化財保護センター ほか 1994『尾崎遺跡』。
- 岐阜市教育委員会 1962『岐阜市長良龍門寺古墳』。
- 九州大学文学部考古学研究室 1993『番塚古墳』。

- 京都市埋蔵文化財研究所 1998『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』。
- 京都大学大学院文学研究科 2005『紫金山古墳の研究』。
- 京都大学平戸学術調査団 1951『平戸学術調査報告』。
- 京都帝國大學 1930『京都帝國大學部考古學研究報告』。
- 京都府教育委員会 1964『埋蔵文化財発掘調査概報』。
- 京都府教育委員会 1970『埋蔵文化財発掘調査概報』。
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989a『京都府遺跡調査概報第35冊』。
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989b『京都府遺跡調査概報第36冊』。
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994「奈具谷遺跡」『京都府遺跡調査概報第60冊』。
- 熊本県宇土市教育委員会 1978『向野田古墳』。
- 熊本県山鹿市教育委員会 2004『方保田東原遺跡(5)』。
- 熊本大学文学部考古学研究室 2007『考古学研究室報告第42集』。
- 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979『椽山遺跡群I』。
- 倉敷考古館 1959『金蔵山古墳』。
- 黒坂勝美 編 1981『新訂増補国史大系 日本書紀』 吉川弘文館。
- 群馬縣 1936『多野郡平井村白石稻荷山古墳』。
- 群馬県藤岡市教育委員会 1988『伊勢塚古墳 十二天塚古墳』。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『新保田中村前遺跡I』。
- 県宮崎郡田野町教育委員会 2003『鹿村野地区遺跡』。
- 建設省山口工事事務所 山口県教育委員会 1991『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・栗遺跡』。
- 高知県教育委員会 1985『高岡山古墳群発掘調査報告書』。
- 神戸市教育委員会 2008『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』。
- 広陵町教育委員会 1989『広陵町遺跡分布調査概報』。
- 御所市教育委員会 編 2001『鴨都波1号墳調査概報-葛城の前期古墳』。
- 古代學研究会 1953『堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の研究』。
- 後藤守一 1940「古墳副葬の玉の用途に就いて」『鏡劔及玉の研究』 吉川弘文館 279-315頁。
- 小林行雄 1968「古墳文化とその伝播」『帝塚山考古学』No. 1 31-42頁。
- 小松譲 2011「唐津地域の弥生時代石製装身具-弥生時代中期・後期の玉作りの可能性-」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国-王(墓)と翡翠玉-』第9回日本玉文化研究会北部九州大会 資料集 11-40頁。
- 小山雅人 1992「弥生勾玉の分布とその変遷」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 埋蔵文化財研究会 25-32頁。
- 近藤義郎 編 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』 楯築刊行会。
- 斎藤 忠 1984『日本考古学史辞典』 三秀舎。
- 阪口英毅 2005「6鉄製品(3)農耕具」『紫金山古墳の研究』 京都大学大学院文学研究科。
- 佐賀縣教育委員会 1948『佐賀縣文化財調査報告書(第二輯)』。
- 佐賀県教育委員会 1993『切畑遺跡』。

- 佐賀県教育委員会 1994a 『吉野ヶ里』。
- 佐賀県教育委員会 1994b 『東福寺遺跡』。
- 佐賀県教育委員会 2001 『柚比遺跡群1 第3分冊』。
- 佐賀県教育委員会 2003 『梅白遺跡』。
- 佐賀県教育委員会 2012 『中原遺跡群VI 12区・13区 of 古墳時代初頭前後の墳墓群の調査』。
- 桜井市文化財協会 2008 『赤尾熊ヶ谷古墳群』。
- 山陰考古学研究所 1978 『山陰の前期古墳文化の研究 I』。
- 山武郡市文化財センター ほか 2002 『小野山田遺跡群IV』。
- 潮見浩編 1982 『中小田古墳群—広島市高陽町所在—』 広島の文化財 第16集 広島市教育委員会。
- 静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会 1939 『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』。
- 静岡県教育委員会 1965 『東海道新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』。
- 静岡県教育委員会 ほか 1981 『原古墳群谷稲葉支群 高草地区』。
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『大屋敷 A 古墳群』。
- 七観古墳研究会 2014 『七観古墳の研究—1947年・1952年出土遺物の再検討—』。
- 島根県教育委員会 1980 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』。
- 島根県教育庁古代文化センターほか 2005 『大寺1号墳発掘調査報告書』。
- 新宮町教育委員会 1994 『夜臼・三代地区遺跡群』。
- 末永雅雄 1991 『盾塚鞍塚 珠金塚古墳』。
- 高田町教育委員会 2003 『竹海校東遺跡』。
- 高取町教育委員会 2007 『市尾墓山古墳 整備事業報告書』。
- 高橋健自 1913 『考古學』 聚精堂。
- 高橋健自 1929 『考古学講座 埴輪及び装身具』 第拾貳卷 雄山閣。
- 高橋浩二 2012 「翡翠定形勾玉の製作技術と流通過程、および北陸における製作開始時期の検討」 『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』 富山大学人文学部 21-33頁。
- 田川市教育委員会 1984 『セストノ古墳』。
- 瀧音 大 2012 「勾玉の宗教的性格について」 『国際経営・文化研究』 Vol.17 No.1 13-28頁。
- 辰巳和弘 2006 『新古代学の視点』 小学館。
- 谷澤亜里 2014 「玉類からみた古墳時代の地域間関係—前期の北部九州地域を中心に—」 『古墳時代の地域間交流2』 第17回九州前方後円墳研究会 大分大会資料集 九州前方後円墳研究会 49-68頁。
- 知念村教育委員会 1999 『齋場御嶽 整備事業報告書（発掘調査・資料編）』。
- 千葉県教育振興財団 ほか 2008 『千葉東南部ニュータウン38』。
- 千葉県文化財センターほか 1979 『千葉市城の腰遺跡』。
- 千葉県文化財センターほか 1980 『千原台ニュータウン1』。
- 千葉県文化財センターほか 2007 『千原台ニュータウンXIX』。
- 月の輪古墳刊行会 1960 『月の輪古墳』。
- 津田町教育委員会 2002 『岩崎山4号古墳発掘調査報告書』。

- 都出 比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343 5-39頁。
- 都出 比呂志 編 1989『古代史復元6』古墳時代の王と民衆 講談社。
- 坪井正五郎 1908「曲玉の形状種類」『東京人類學會雜誌』第23巻 第266号 東京人類學會 287-296頁。
- 寺村光晴 1984「古代日本人の信仰—タマをめぐる—」『東アジアの古代文化』39号 古代学研究所 2-34頁。
- 寺村光晴 1995『日本の翡翠—その謎を探る—』 吉川弘文館。
- 同志社大学文学部文化学科 1990『園部垣内古墳』。
- 鳥取県教育文化財団 1997『長瀬高浜遺跡VII』。
- 鳥取県教育文化財団 ほか 1980『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書I』。
- 鳥取県教育文化財団 ほか 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV』。
- 鳥取県教育文化財団 ほか 1993『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24~28号墳』。
- 鳥取市教育委員会 ほか 1991『面影山古墳群発掘調査概報』。
- 鳥取市文化財団 2003『横枕古墳群II』。
- 豊岡市教育委員会 1980『北浦古墳群』。
- 豊中市教育委員会 1987『摂津豊中大塚古墳』。
- 鳥栖市教育委員会 1994『牛原原田遺跡』。
- 長崎県北松浦郡小値賀町教育委員会 1984『神ノ崎遺跡』。
- 長崎県教育委員会 1992『長崎県埋蔵文化財調査集報XV』。
- 長崎県教育委員会 1996『原始・古代の長崎県 資料編I』。
- 仲筋貝塚発掘調査団 1981『沖縄・石垣島 仲筋貝塚発掘調査報告』。
- 長野県教育委員会 ほか 1997a『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 清水山窯跡 池田端跡 牛出古窯遺跡』。
- 長野県教育委員会 ほか 1997b『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡』。
- 長野県更埴市教育委員会 1992『史跡森将軍塚古墳』。
- 長野市教育委員会 2005『浅川扇状地遺跡群檀田遺跡(2)』。
- 奈良県教育委員会 1959a『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第十一輯』。
- 奈良県教育委員会 1959b『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第十八冊』。
- 奈良県教育委員会 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』。
- 奈良県教育委員会 1966『奈良県文化財調査報告書第9集』。
- 奈良県教育委員会 1973『磐余・池ノ内古墳群』。
- 奈良県教育委員会 1974『大和巨勢山古墳群(境谷支群) —昭48年度発掘調査概報』。
- 奈良県教育委員会 1976『葛城・石光山古墳群』。
- 奈良県教育委員会 1977『新沢千塚 126号墳』。
- 奈良県教育委員会 1981『新沢千塚古墳群』。
- 奈良県教育委員会 ほか 1977『メスリ山古墳』。

- 奈良県立橿原考古学研究所 2002a 『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）』。
- 奈良県立橿原考古学研究所 2002b 『馬見古墳群の基礎資料』。
- 奈良県立橿原考古学研究所 2003 『後出古墳群』。
- 奈良県立橿原考古学研究所 2008 『下池山古墳の研究』。
- 奈良県立橿原考古学研究所 編 1978 『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』。
- 奈良県立橿原考古学研究所 編 1997 『島の山古墳』。
- 奈良国立文化財研究所 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』真陽社。
- 南紀考古同好会 1969 『鷹島』。
- 新居浜市教育委員会 2012 『正光寺山古墳群』。
- 仁木 聡 2005 「第3章 山本清氏の調査について」『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 20-33頁。
- 日本考古学協会 1954 『和泉黄金塚古墳』。
- 日本考古学協会古墳調査特別委員会 1952 『銚子塚古墳研究』。
- 日本古文化研究所 1974a 『近畿地方古墳墓の調査 二 上野國総社二子山古墳の調査』。
- 日本古文化研究所 1974b 『近畿地方古墳墓の調査 三』。
- 沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ』。
- 函館土木現業所・奥尻町教育委員会 1979 『奥尻島青苗遺跡』。
- 土師書院刊 1967 『市原市周辺地域の調査』。
- 八戸市教育委員会 1991 『丹後平古墳』。
- 羽曳野市教育委員会 2006 『古市遺跡群 XXVII』。
- 春成秀爾・葛原克人・小野一臣・中田啓司 1969 「備中清音村鋳物師谷1号墳墓調査報告」『古代吉備』第6集。
- 東松山市教育委員会 2003 『杉の木遺跡（第3次）』。
- 樋口清之 1940 「垂玉考」『鏡劔及玉の研究』考古學會 243-277頁。
- 樋口清之 1962 「丁字頭」藤田亮策 監修『日本考古学辞典』東京堂出版。
- 姫路市 2010 『姫路市史』第7巻下 資料編 考古。
- 姫路市教育委員会 2016 『国指定重要文化財 宮山古墳出土品』。
- 兵庫県 1925 『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第二輯。
- 兵庫県教育委員会 1978 『播磨・長越遺跡』。
- 兵庫県教育委員会 2010 『史跡 茶すり山古墳』。
- 兵庫県宍粟郡一宮町教育委員会 1986 『伊和中山古墳群Ⅰ』。
- 兵庫県姫路市教育委員会 1970 『宮山古墳発掘調査概報』。
- 平野和男 1960 「磐田市 一本松 かぶと塚古墳出土遺物について」『古代学研究』26 古代学研究会。
- 平原弥生古墳調査報告書編集委員会 1991 『平原弥生古墳 大日靈貴の墓 上巻』。
- 広島県 1979 『広島県史 考古編』。
- 広島県教育委員会 1977 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』。



- 広島県埋蔵文化財調査センター 1998『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)』。
- 広島市教育委員会 1990『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』。
- 広島市役所 1981『船越町史』。
- 広島大学大学院文学研究科 ほか 2009『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報 XXIII』。
- 深田 浩 2004「第2章 中国地方の玉作関連遺跡 第1節 島根県の玉作関連遺跡」『古代出雲における玉作の研究Ⅰ－中国地方の玉作関連遺跡集成－』 島根県古代文化センター 7-19頁。
- 福井県教育委員会 1997『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』。
- 福井県郷土誌懇談会 1960『越前福井市 足羽山の古墳』。
- 福井県立若狭歴史民俗資料館 1991『躍動する若狭の王者たち－前方後円墳の時代－』。
- 福岡県教育委員会 1976『井原・三雲遺跡発掘調査概報』。
- 福岡県教育委員会 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XXI－』。
- 福岡県教育委員会 1984『今宿高田遺跡』。
- 福岡県教育委員会 1985『三雲遺跡 南小路地区編』。
- 福岡県教育委員会 1990『九州横断自動車道関連埋蔵文化財調査報告－19－』。
- 福岡県教育委員会 1997『以来尺遺跡Ⅰ 中巻』。
- 福岡市教育委員会 1983『野多目拈渡遺跡』。
- 福岡市教育委員会 1986『丸隈山古墳Ⅱ』。
- 福岡市教育委員会 1989『老司古墳』。
- 福岡市教育委員会 1993『野方久保遺跡』。
- 福岡市教育委員会 1995『クエゾノ遺跡』。
- 福岡市教育委員会 1996『三苦遺跡群2』。
- 福岡市教育委員会 1999『広石南古墳群A群』。
- 福岡市教育委員会 2002『鋤崎古墳』。
- 福岡大学人文学部考古学研究室 2004『長崎県・景華園遺跡の研究 福岡県京都郡における二古墳の調査 佐賀県・東十郎古墳群の研究』。
- 福島県文化センター 1990『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』。
- 福津市教育委員会 2011『津屋崎古墳群Ⅱ』。
- 福津市教育委員会 2013『奴山正園古墳』。
- 福永伸哉 2005『三角縁神獸鏡の研究』 大阪大学出版会。
- 佛教大学校地調査委員会 2001『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』。
- 北條芳隆 2002「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』9 弥生・古墳時代 石器・石製品 骨角器 小学館 321-330頁。
- 埋蔵文化財調査事務所 ほか 2002『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』。
- 前原市教育委員会 2000『平原遺跡』。
- 松本岩雄 2015「出雲の古墳と玉生産」『古墳時代社会と出雲の玉』 日本玉文化学会 21-26頁。
- 松山市教育委員会ほか 1999『乃万の裏遺跡』。

- 三重県埋蔵文化財センター 1992『上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群・正知浦遺跡』。
- 三重県埋蔵文化財センター 1999『蔵田遺跡発掘調査報告』。
- 三重県埋蔵文化財センター 2005『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VI』。
- 三重県埋蔵文化財センター 2008『森庵遺跡発掘調査報告』。
- 三重県埋蔵文化財センター 2015『東条1号墳・屋敷の下遺跡』。
- 水野 裕 1969『勾玉』 學生社。
- 南伊豆町教育委員会 1987『日野遺跡 発掘調査報告書』。
- 宮城県教育委員会・国土交通省東北地方整備局 2016『入の沢遺跡—一般国道4号築館バイパス関連遺跡 調査報告書IV—』。
- 宮崎県 1944『宮崎県史蹟名勝天然紀念物調査報告』 第13輯。
- 宮崎県教育委員会 1969『持田古墳群』。
- 宮崎県教育委員会 1987『船塚遺跡』。
- 宮崎市教育委員会 1977『下北方地下式横穴第5号 緊急発掘調査報告書』。
- 向日市教育委員会 1988『向日市埋蔵文化財調査報告書第24集』。
- 宗像市教育委員会 1989『東郷高塚I』。
- 宗像大社復興期成会 1979『宗像 沖ノ島』。
- 森貞次郎 1980「弥生勾玉考」『古文化論攷』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 307-882頁。
- 森本六爾 1929『川柳村將軍塚の研究』。
- 柳井市教育委員会編 1999『史跡柳井茶臼山古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』。
- 八幡一郎 1940「硬玉製大珠の問題」『考古學雑誌』第30巻 第5号 考古學會 344-355頁。
- 山岡俊明 編 1904『類聚名物考』238巻 裝飾部二 扇 近藤活版所。
- 山鹿市教育委員会 1984『方保田東原遺跡(2)』。
- 山形県埋蔵文化財センター 1997『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』。
- 山梨県教育委員会 ほか 2000『平林2号墳』。
- 山口大学人文学部考古学研究室 1990『京都府平尾城山古墳』第6集。
- 八女市教育委員会 1983『城の谷遺跡』。
- 行橋市教育委員会 2005『稻童古墳群』。
- 吉川弘文館 1958『沖ノ島』。
- 吉川弘文館 1961『続沖ノ島』。
- 吉原市教育委員会 1958『吉原市の古墳』。
- 栗東歴史民俗博物館 ほか 2003『古墳時代の装飾品』平成14年度企画展』。
- 六興出版 1982『末蘆国』。
- 和田山町・和田山町教育委員会 1972『城の山、池田古墳』。

〔第4章〕

- 池上廣正 1953「田の神行事」『新嘗の研究』 創元社 235-242頁。

- 茨城県教育財団 1988『一般県道新川・江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書尾島貝塚外2遺跡』茨城県教育財団。
- 梅原未治 1932「慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告」『大正十三年度古蹟調査報告』第一冊 朝鮮總督府。
- 梅原未治 1971a『日本古玉器雑攷』吉川弘文館。
- 梅原未治 1971b「七 玻璃の勾玉」『日本古玉器雑攷』吉川弘文館 150-179頁。
- 江別市教育委員会 1986『大麻3遺跡』。
- 江別市教育委員会 1996『7丁目沢2遺跡(3)・元野幌5遺跡(3)』。
- 江別市教育委員会 2004『七丁目沢6遺跡(10)』。
- 大形 徹 2000a「第一章 魂のありか」『魂のありか—中国古代の靈魂観』角川選書 315 角川書店 11-83頁。
- 大形 徹 2000b「第二章 肉体をぬけだす魂」『魂のありか—中国古代の靈魂観』角川選書 315 角川書店 85-179頁。
- 大場磐雄 1943『神道考古学論攷』葦牙書房。
- 大場磐雄 佐野大和 1956『常陸鏡塚』国学院大学考古学研究报告第一冊 綜芸舎人。
- 大場磐雄 1962『武蔵伊興』国学院大学考古学研究报告第2冊 文功社。
- 大場磐雄 1970『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』角川書店。
- 大場磐雄 1979「原始信仰 序論」『新版考古学講座』第8巻 有山閣出版 1-52頁。
- 岡田精司 1992「8 神と神まつり」『古墳時代の研究』第12巻 雄山閣出版株式会社 125-142頁。
- 岡田裕之 2005「祭祀遺跡における滑石製品」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費』発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会ほか 181-194頁。
- 岡寺 良 2005「琴柱形石製品の型式学的研究」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』真陽社 485-500頁。
- 小田富士夫 1979「報告編 第4章 沖ノ島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態」『宗像 沖ノ島 I 本文』宗像大社復興期成会 254-266頁。
- 折口信夫 1952「民族史観における他界観念」『古典の新研究』角川書店 314-360頁。
- 折口信夫 1996a「剣と玉」『折口信夫全集』19 中央公論社 23-35頁。
- 折口信夫 1996b「原始信仰」『折口信夫全集』19 中央公論社 9-22頁。
- 香川県教育委員会 1984『香川県埋蔵文化財概報 昭和58年度』。
- 香取郡市文化財センター 1995『猫作・栗山16号墳』。
- 金関丈夫 1975「魂の色—まが玉の起り」『発掘から推理する』朝日選書40 朝日新聞社 34-40頁。
- 亀井正道 1951「古墳出土の石枕について」『上代文化』第20輯 国学院大学考古学会 29-36頁。
- 亀井正道 1958「常陸浮島の祭祀遺跡」『國學院雑誌』59巻7号 國學院 23-31頁。
- 亀井正道 1973「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8巻 東京国立博物館 31-170頁。
- 河上邦彦 2001「311 澤ノ坊2号墳」『大和前方後円墳集成』橿原考古学研究所研究成果 第4冊 奈良県立橿原考古学研究所 406-407頁。
- 河野一隆 2002「石製模造品」『考古資料大観』第9巻 小学館 331-340頁。

- 木更津教育委員会 2002『高部古墳群Ⅰ－前期古墳の調査－』。
- 木下尚子 1987a「装身具 1. 頭飾り」『弥生文化の研究』第8巻 雄山閣出版株式会社 175-181頁。
- 木下尚子 1987b「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古学と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集 同朋舎出版 541-591頁。
- 北山峰生 2005「古墳出土の石製模造品」『古墳時代の滑石製品－その生産と消費』発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会 ほか 157-180頁。
- 京都国立博物館 1982『富雄丸山古墳 西宮山古墳 出土遺物』 便利堂。
- 小出義治 1966「祭祀」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代(下)』 河出書房 276-314頁。
- 國學院大學日本文化研究所 2002『子持勾玉資料集成』。
- 小林行雄 1951「第二十六章 古墳時代の習俗」『日本考古學概説』創元社 217-223頁。
- 小林行雄 1952『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』 便利堂。
- 小林行雄 1961a「第七章 中期古墳文化とその伝播」『古墳時代の研究』 青木書店 225-260頁。
- 小林行雄 1961b「第六章 初期大和政権の勢力圏」『古墳時代の研究』 青木書店 190-223頁。
- 斎藤瑞穂 ほか 2005「常陸浮島の考古学的検討」『茨城県考古学協会誌』第17号 茨城県考古学協会 145-191頁。
- 坂詰秀一 1974「80 前浦祭祀遺跡」『茨城県史料＝考古資料編 古墳時代』 茨城県史編さん原始古代史部会 192-194頁。
- 佐々木幹雄 1985「子持勾玉私考」『古代探叢Ⅱ－早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集－』 早稲田大学出版部 319-352頁。
- 佐野大和 1981「子持勾玉」『神道考古学講座 原始神道期Ⅱ』第3巻 雄山閣 109-157頁。
- 滋賀県教育委員会 ほか 1979『服部遺跡発掘調査概報』。
- 篠原祐一 1995「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 栃木県文化振興事業団 17-49頁。
- 篠原祐一 2002「子持勾玉小考」『子持勾玉資料集成』付録 國學院大學日本文化研究所。
- 白井久美子 1991「石製立花と石枕の出現－枕造り付け木棺考－」『古代探叢Ⅲ』 早稲田大学出版部 335-354頁。
- 白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀 古墳出土の石製模造品を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 79-114頁。
- 末永雅雄 1952「玉杖」『大和文華』第六號 大和文華館出版部 29-37頁。
- 杉山林継 1965「古代祭祀遺跡の分布私考」『上代文化』35輯 国学院大学考古学会 53-67頁。
- 杉山林継 1998「玉と魂－石製品の祭り」『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所学報 第57冊 奈良国立文化財研究所 157-174頁。
- 杉山晋作 1985「石製刀子とその用途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 115-133頁。
- 杉山晋作 1991「石枕・立花と死者の送り」『古代探叢Ⅲ』 早稲田大学出版部 355-378頁。
- 鈴木克彦 2005「石偶に関する研究－石偶, 異形石製品」『葛西勵先生還暦記念論集 北奥の考古学』 葛西勵先生還暦記念論集刊行会 337-375頁。

- 高野裕璽 2007『下河原崎谷中台遺跡 島名ツバタ遺跡』茨城県教育財団。
- 辰巳和弘 2011a「Ⅲ 古代人の他界観 第2章 魂のなびき、他界へのわたり」『他界へ翔る舟—「黄泉の国」の考古学』新泉社 309-314頁。
- 辰巳和弘 2011b「Ⅲ 古代人の他界観 第3章 勾玉のシンボリズム」『他界へ翔る舟—「黄泉の国」の考古学』新泉社 315-320頁。
- 田中広明 1990「もう一つの豪族居館—常陸国信太郡浮島の尾島遺跡群にみられる構造的変化」『婆良岐考古』第12号 婆良岐考古同人会 1-21頁。
- 玉城一枝 2004「第Ⅲ部 古代の翡翠文化 第2章 弥生時代から古墳時代にみる翡翠文化」『特別展 翡翠展 東洋の至宝』国立科学博物館企画展図録 毎日新聞社 94-105頁。
- 千葉県教育振興財団 2011『古墳に眠る石枕』平成23年度出土遺物巡回展—房総発掘ものがたり 図録。
- 坪井正五郎 1908「曲玉の形状種類」『東京人類學會雜誌』第23巻 第266号 東京人類學會 287-296頁。
- 寺村光晴 1972「『たま』の系譜—古代玉概念の再検討」『和洋国文研究』第8号 和洋女子大学国文学会 52-63頁。
- 寺村光晴 1980「第一章 研究の基礎的前提」『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 35-85頁。
- 寺門義範 1975「前浦遺跡」『日本考古学年報』26（1973年版）日本考古学協会 43頁。
- 中尾麻由美 2005「常陸浮島の考古学的検討」『茨城県考古学協会誌』第17号 145-191頁。
- 七尾市史編纂専門委員会 編 2002『新修 七尾市史』1 考古編。
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1997『大和の考古学』常設展示図録。
- 沼沢 豊 1977a「第一部 古墳篇 第三章 石神2号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』日本道路公団 ほか 118-154頁。
- 沼沢 豊 1977b「第一部 古墳篇 第一章 石神2号墳の調査」『東寺山石神遺跡』日本道路公団ほか 27-101頁。
- 沼沢 豊 1980「東国の石枕」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』早稲田大学出版部 207-220頁。
- 橋本澄夫 1989「尼塚古墳群」『日本古墳大辞典』東京堂出版 32頁。
- 姫路市教育委員会 1995『御旅山13号墳』。
- 藤田富士夫 1989「Ⅱ 各時代の玉文化の特色」『玉』考古学ライブラリー 52 ニュー・サイエンス社 14-105頁。
- 北條芳隆 1996「15 雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究 考察篇』八日市市教育委員会 ほか 309-350頁。
- 北條芳隆 2002「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』第9巻 小学館 321-330頁。
- 北海道埋蔵文化財センター 2003『キウス4遺跡（9）』第1分冊。
- 茂木正博 1994「浮島の祭祀遺跡」『風土記の考古学1 常陸国風土記の巻』同成社 195-219頁。
- 森浩一 宮川渉 1953『堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の研究』古代学研究会。
- 森田喜久男 2000「古代王権と浮島」『歴史評論』No.597 校倉書房 37-50頁。

- 山形県教育委員会 1990『押出遺跡発掘調査報告書』。
- 米子市教育文化事業団 2011『鳥取県 博労町遺跡』第1分冊 第2分冊。
- 和田 萃 1973「殯の基礎的考察」『論集終末期古墳』 塙書房 285-385頁。
- 和田千吉 1903「播磨國に於ける珍しき石棺の発見に就て」『考古会』 第2篇8號 考古學會 10-15頁。
- 〔第5章〕
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2006「青森県における装身具の集成 縄文時代編」『研究紀要』第11号。
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2007「青森県における装身具の集成 弥生時代～平安時代編（付・縄文時代追加編）」『研究紀要』第12号。
- 伊藤正人 2005「愛知県縄文時代の非翡翠石製玉類集成」『三河考古』第18号 21-32頁。
- 入江俊行 2008「古墳時代の「土製模造品」研究について」『帝京大学山梨文化財研究所所報』第50号 6-8頁。
- 入江俊行 2009「古墳時代祭祀における土製模造品の出現と展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第13集 111-123頁。
- 宇佐市教育委員会 1986『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』。
- 梅原末治 1965「施釉の勾玉」『史迹と美術』355号 史迹美術同友會。
- 大坪志子 2003「縄文の玉から弥生の玉へ」『先史学・考古学論攷』Ⅳ 415-436頁。
- 大坪志子 2005「縄文時代後晩期の石製装身具」『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖繩大会 九州縄文研究会 沖繩大会実行委員会 30-34頁。
- 大坪志子 2015『縄文玉文化の研究—九州ブランドから縄文文化の多様性を探る—』 雄山閣。
- 大場磐雄 1943「十四 南豆洗田の祭祀遺跡」『神道考古学論攷』 葦牙書房 420-469頁。
- 大場磐雄 1967「一 はじめて祭祀跡をさぐる」『まつり』 學生社 1-14頁。
- 大場磐雄 1970「第三章 祭祀遺物の考察」『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』 角川書店 97-142頁。
- 大場磐雄 編 1972～1981『神道考古学講座』第1巻～第6巻 雄山閣出版株式会社。
- 岡山県教育委員会 ほか 2000『高塚遺跡 三手遺跡2』。
- 香川県教育委員会ほか 2007『砂入遺跡』。
- 学校法人目白学園 ほか 2004『落合遺跡Ⅳ』。
- 金関丈夫 1975「魂の色—まが玉の起り」『発掘から推理する』朝日選書40 朝日新聞社 34-40頁。
- 金子昭彦 2016「津軽海峡圏の装身具の変遷—青森県を中心として—」『第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』一般社団法人日本考古学協会 2016年度弘前大会資料集 日本考古学協会 2016年度弘前大会実行委員会 223-244頁。
- 金子裕之 1971「古墳時代屋内祭祀の一考察—関東・中部地方を中心として—」『国史学』第84号 87-98頁。

- 金子裕之 1988『律令期祭祀遺物集成』昭和61年～63年度文部省科学研究補助金総合研究A研究成果報告書Ⅱ。
- 亀井正道 1985「浜松市坂上遺跡の土製模造品」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 本編、135-164頁。
- 川添和暁 2015「縄文時代後晩期の土製垂飾類（玉類）について」『研究紀要』第16号 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 1-16頁。
- 瓦吹堅 2006「土の玉覚書」『史峰』第34号 29-44頁。
- 木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』（中） 542-591頁。
- 木下尚子 2000「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点② 小学館 187-212頁。
- 九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会 2005『第15回九州縄文研究会沖縄大会 九州の縄文時代装身具』。
- 清野謙次 1925『日本原人の研究』 岡書院。
- 熊本県山鹿市教育委員会 2004『方保田東原遺跡（5）』。
- 県宮崎郡田野町教育委員会 2003『鹿村野地区遺跡』。
- 合田芳正 1974「関東地方弥生時代の土製勾玉について」『史友』第6号 16-21頁。
- 後藤守一 1930「石製品 第4節 土製模造品」『考古学講座』第29巻 雄山閣 52-69頁。
- 近藤義郎 編 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』 楯築刊行会。
- 埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 1988『真鏡寺後遺跡Ⅱ』。
- 斎藤 忠 1992「土製勾玉」『日本考古学用語辞典』学生社 325頁。
- 財団法人千葉県開発公社 1974『市原市大厩遺跡』。
- 佐藤政則 1982「家屋内出土の祭祀遺物」『日立市郷土博物館紀要』第2号、1-20頁。
- 篠原祐一 2008「マツリで使われる石製模造品と土製模造品」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』9-18頁。
- 白木原和美 1985「南島二題—古墳文化に関連して—」『論集 日本原史』吉川弘文館 649-675頁。
- 椚山林繼 1972「関東」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣出版株式会社 33-68頁。
- 鈴木敏則 2008「静岡県の土製模造品」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』山梨考古学協会 40-53頁。
- 高橋健自 1919『古墳発見石製模造器具の研究』 皇室博物館学報第1冊 1頁。
- 高橋浩二 2012「翡翠定形勾玉の製作技術と流通過程、および北陸における製作開始時期の検討」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』 21-33頁。
- 竹内直文 2001「土製模造品研究の現状と課題」『静岡県考古学研究—特集 静岡県の古墳時代後期—』 33 65-80頁。
- 竹内直文 2002「土製模造品祭祀の源流—天竜川と太田川流域の遺跡」『第10回記念春日井シンポジウム 資料集』 215-230頁。
- 築城町教育委員会 1998『船迫窯跡群』。
- 千葉県 2002『千葉県古墳時代関係資料』。
- 坪井正五郎 1908「曲玉の形状種類」『東京人類學會雑誌』第23巻 第266号 287-296頁。

- 長野県教育委員会 ほか 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡』。
- 八戸市教育委員会 1991『八戸市内遺跡発掘調査報告2 風張(1)遺跡』。
- 東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』第I～III分冊。
- 桜の木遺跡調査団 2005『桜の木遺跡調査報告書1』。
- 広島県埋蔵文化財調査センター 1998『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(II)』。
- 広島市教育委員会 1990『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』。
- 福岡県教育委員会 1984『今宿高田遺跡』。
- 福島県教育委員会 ほか 2000『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書8』。
- 藤森栄一 1931「彌生式遺跡発見の土製勾玉」『考古學』第2巻第1号 47-48頁。
- 的野善行 2005「関東地方出土の土製勾玉について」『埼玉考古』第40号 45-66頁。
- 三重県埋蔵文化財センター 1995『天白遺跡』。
- 宮崎県新富町教育委員会 1992『七又木地区遺跡』。
- 森貞次郎 1980「弥生勾玉考」『古文化論攷』 307-341頁。
- 山鹿市教育委員会 1984『方保田東原遺跡(2)』。
- 山梨県考古学協会 編 2008『土製模造品から見た古墳時代の神まつり』 山梨県考古学協会。
- 渡辺康弘 1993「竈神の祭祀」『二十一世紀への考古学』 雄山閣出版株式会社 173-182頁。

〔結論〕



## 挿図出典

### 〔序論〕

- 第1図 坪井 1889 から転載。  
第2図 坪井 1891a から転載。  
第3図 坪井 1891c から転載。  
第4図 野津 1925 から転載（但し、アルファベットを筆者が打ち直した）。  
第5図 筆者撮影。  
第6図 藤田富 1989 を一部改変。  
第7図 1；村上 2000、2；大坪 2001 から転載。  
第8・9図 筆者撮影。  
第10・11図 筆者作成。

### 〔第1章〕

- 第12～14図 各資料から抽出・作成。  
第15図 第8表をもとに筆者作成。  
第16～18図 各資料から抽出・作成。  
第19～23図 各資料から抽出・作成。

### 〔第2章〕

- 第24図 樋口 1940 を一部加筆・修正。  
第25図 梅原 1969 から転載。  
第26図 河村 2000 から転載。  
第27図 1；第9表文献-15 2；第9表文献-33 3；第9表文献-51 4；第9表文献-56  
5；第9表文献-64 6；第9表文献-75 7；第9表文献-79 8；第9表文献-82  
9；第9表文献-84 10；第9表文献-87 11；第9表文献-31 から転載。  
第28～31図 第9表をもとに筆者作成。  
第32図 熊本県教育委員会 1994 から転載。

### 〔第3章〕

- 第33図 第11表をもとに筆者作成。  
第34図 筆者作成。  
第35図 1；福岡県教育委員会 1967 2；福岡市教育委員会 1993 3；京都大学大学院文学研究科 2005  
4；吉川弘文館 1958 5；福岡県教育委員会 1978 6；群馬縣 1936 7；鳥取県教育文化財団  
1997 8；奈良県立橿原考古学研究所 2003 9；和田山町・和田山町教育委員会 1972 10；平原  
弥生古墳調査報告書編集委員会 1991 11；奈良県教育委員会 1959 12；福岡県教育委員会  
1984 13；山鹿市教育委員会 1984 から転載。

第 36 図 1 ;京都市埋蔵文化財研究所 1998 2 ;柏原市教育委員会 1988 3 ;古代學研究會 1953 4 ;大阪府教育委員会 1957 5 ;大阪市文化財協会 1999 6 ;奈良県立橿原考古学研究所 2008 7・8 ;奈良県立橿原考古学研究所 2002 9・10 ;近藤 編 1992 11 ; 福岡市教育委員会 1983 12 ;小田 1972 から転載。

第 37 図 第 11 表をもとに筆者作成。

第 38 図 各資料から抽出・作成。

#### 〔第 4 章〕

第 39 図 写真 ; 大村紀久子氏提供、実測図 ; 米子市教育文化事業団 2011 から転載。

第 40 図 1 ; 小林 1952 2 ; 大場・佐野 1956 3 ; 亀井 1958 から転載。

第 41 図 梅原 1971 を一部加筆・修正。

第 42 図 木更津教育委員会 2002 から転載。

第 43 図 1 ; 京都国立博物館 1982 2・3 ; 白井 1991 4 ; 香取郡市文化財センター 1995 5 ; 大場・佐野 1956 6 ; 姫路市教育委員会 1995 から転載。

第 44 図 1 ; 江別市教育委員会 2004 2 ; 北海道埋蔵文化財センター 2003 3 ; 山形県教育委員会 1990 4 ; 木下尚子 1987a から転載。

第 45 図 1・2 ; 國學院大學日本文化研究所 2002 から転載。

第 46 図 1 ; 沼沢 1977b、2 ; 亀井 1951 から転載。

#### 〔第 5 章〕

第 47～48 図 付篇 日本列島出土土製勾玉集成をもとに筆者作成。

第 49 図 1 ; 埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 1988 2 ; 宮崎県新富町教育委員会 1992 3 ; 長野県教育委員会 ほか 1999 4 ; 八戸市教育委員会 1991 5 ; 桜の木遺跡調査団 2005 6・7 ; 三重県埋蔵文化財センター 1995 8 ; 福岡県教育委員会 1984 9 ; 千葉県 2002 から転載。

第 50～52 図 付篇 日本列島出土土製勾玉集成をもとに筆者作成。

#### 〔結論〕

第 53 図 第 1 章と第 5 章をもとに筆者作成。

第 54～55 図 第 8 表と第 16 表をもとに筆者作成。

第 56 図 第 1 章から第 4 章をもとに筆者作成。

第 57 図 第 5 章をもとに筆者作成。

## 表出典

### 〔序論〕

第1表 坪井 1890 より転載（但し、表自体は筆者が打ち直した）。

第2～6表 各資料から抽出・作成。

### 〔第1章〕

第7表 第2表～第4表をもとに筆者作成。

第8表 各資料から抽出・作成。

### 〔第2章〕

第9表 各報告書をもとに筆者作成。

第10表 第9表をもとに筆者作成。

### 〔第3章〕

第11表 各資料から抽出・作成。

第12～14表 第11表をもとに筆者作成。

第15表 各資料から抽出・作成。

### 〔第4章〕

### 〔第5章〕

第16表 付篇 日本列島出土土製勾玉集成をもとに筆者作成。

第17表 文献1；岡山県教育委員会 ほか 2000 文献2；近藤 編 1992 文献3；広島市教育委員会 1990 文献4；広島県埋蔵文化財調査センター 1998 文献5；福岡県教育委員会 1984 文献6；山鹿市教育委員会 1984 文献7；熊本県山鹿市教育委員会 2004 文献8；宇佐市教育委員会 1986 文献9；県宮崎郡田野町教育委員会 2003 から抽出・作成。

第18～19表 付篇 日本列島出土土製勾玉集成をもとに筆者作成。

### 〔結論〕

## 初出一覧

本研究の各章のもとになった論文の初出は、以下の通りである。

### 序論

第1節 「勾玉の宗教的性格について」『国際経営・文化研究』vol. 17 No. 1、2012年の第1節と、「日本における勾玉研究の意義」飯島武次 編『中華文明の考古学』、同成社、2014年の第2節をふまえながら、大幅な加筆を行なった。

### 第2節 書き下ろし

第1章 「北海道出土の勾玉について」『駒澤考古』第34号、2009年と、「日本列島における勾玉の分布・遺跡数・材質からみた時期的変遷」蔵持不三也・嶋内博愛 監修『文化の遠近法 エコ・イマジネールⅡ』、言叢社、2017年をふまえながら、大幅に加筆・修正を行なった。

第2章 「刻み目を有する勾玉について」『玉文化研究』第2号 寺村光晴先生卒寿記念号、2016年。また、要旨は「論文展望 刻み目を有する勾玉について 玉文化研究 第2号 寺村光晴先生卒寿記念号」設楽博己 編『季刊 考古学』第138号 特集 弥生文化のはじまり、雄山閣、2017年に収録されている。

第3章 「丁字頭勾玉の展開と地域性」『地方史研究』（印刷中）に新しく図・表を加えるなど、大幅に加筆・修正を行なった。

第4章 「背合わせ勾玉についての一考察」『古代』第131号、2013年に新しく付記などを加えた。

### 第5章 書き下ろし

結論 書き下ろし

付篇

日本列島出土土製勾玉集成

No.	遺跡名	所在地		時代	点数	出土遺構	備考	文献
1	二ツ岩遺跡	北海道	網走市	縄文時代晩期以降	1	1号住居址	土器、石器	1
2	東山遺跡	北海道	岩内郡	縄文時代前期	1	第1地点・第3層	円筒下層式	2
3	カリンバ3遺跡	北海道	恵庭市	不明	2	包含層		3
4	西野幌14遺跡	北海道	江別市	縄文時代中期～続縄文時代	1	包含層		4
5	対雁2遺跡	北海道	江別市	縄文時代晩期後葉 ～続縄文時代前葉	1	包含層	沈線・刺突	5
6	対雁3遺跡	北海道	江別市	縄文時代晩期後葉	5	包含層・焼土		6
7	泉沢2遺跡・A地点	北海道	上磯郡	縄文時代早期～晩期	1	包含層		7
8	南川遺跡	北海道	久遠郡	続縄文時代前期	1	土壌108号	瑪瑙錐が多数出土	8
9	C504遺跡	北海道	札幌市	擦文時代前期	3	包含層(11層)	全面にミガキ	9
10	朱太川右岸6遺跡	北海道	寿都郡	縄文時代中期～擦紋時代	1	包含層	頭部に二条の刻み	10
11	有珠4遺跡	北海道	伊達市	不明	1	遺構外		11
12	キウス4遺跡	北海道	千歳市	縄文時代早期～擦紋時代	3	盛土遺構	縄文時代後期後葉中心	12
				縄文時代～擦文時代	2	包含層		13
13	キウス5遺跡	北海道	千歳市	縄文時代～続縄文時代	2	包含層		14
				縄文時代晩期	2	A-5地区 包含層		15
14	キウス7遺跡	北海道	千歳市	縄文時代後期前葉 ～縄文時代晩期	1	焼土・LF-57出土		16
15	キウス9遺跡	北海道	千歳市	擦文時代	1	包含層	全面にミガキ	17
16	丸子山遺跡	北海道	千歳市	続縄文時代晩期 ～擦文時代初頭 8世紀前半	11	IH竪穴住居 第I黒色土層		18
17	ママチ遺跡	北海道	千歳市	縄文時代中期～晩期後葉	1	包含層・I黒層		19
18	祝梅三角山D遺跡	北海道	千歳市	擦紋時代	14	4号竪穴住居		20
19	平和1遺跡	北海道	千歳市	不明	1	包含層 第2黒色土層		21
20	梅川3遺跡	北海道	千歳市	縄文時代晩期	2	包含層		22
21	柏原5遺跡	北海道	苫小牧市	縄文時代早期・中期 ～擦紋時代	1	包含層2B層		23
22	静川8遺跡	北海道	苫小牧市	不明	1	包含層B地区		24
				縄文時代早期～続縄文時代	1	包含層A地区	縄文時代晩期が中心	26
23	美沢2遺跡	北海道	苫小牧市	縄文時代後期・晩期	2	包含層		27
24	石川1遺跡	北海道	函館市	縄文時代	1	包含層・II層		28
25	茂別遺跡	北海道	北斗市	続縄文時代前半	1	包含層・III層上部	黄褐色、恵山期、土製管玉ほか	29
26	大川遺跡	北海道	余市郡	縄文時代	2	JH-11 竪穴住居	覆土、刻み目、押引	30
				擦紋時代	1	SH69 竪穴住居	ミガキ	
				縄文時代晩期後半	1	土壌GP126		31

27	朝日山(2)遺跡	青森	青森市	不明	1	遺構外		32
				平安時代 9世紀後半	1	205号竪穴住居跡	頭部欠損 土師器(坏・甕・壺?・鉢?)	33
28	三内沢部(3)遺跡	青森	青森市	不明	1	遺構外	黒色、孔未貫通	34
				縄文時代早期中葉	1	第11号竪穴住居跡	黒色	
29	野木遺跡	青森	青森市	平安時代	1	507H住居内・覆土		35
				平安時代	2	533H住居内・覆土		
30	野尻(1)遺跡	青森	青森市	平安時代	1	第503号建物	黒色	36
				平安時代	1	第518号建物 外周溝	黒色	
				平安時代	2	第10号建物・外周溝		
31	野尻(3)遺跡	青森	青森市	平安時代 9世紀後半	1	第4号竪穴住居跡		38
32	安田(2)遺跡	青森	青森市	平安時代	1	第32号住居跡 (竪穴)	須恵器壺、砥石、ほか	39
33	中平遺跡 農道10号	青森	青森市	平安時代	1	第73号建物跡 竪穴住居	土師器(坏・ミニチュア鉢・甕・小甕) 須恵器(坏・壺・ミニチュア外耳土器)土馬 土玉 台石 石製品 ほか	40
34	山元(2)遺跡	青森	青森市	平安時代	1	J-49 包含層		41
35	山元(3)遺跡	青森	青森市	平安時代 10世紀前半	1	第40号住居跡 (竪穴)壁溝内覆土	土師器(坏・甕)須恵器(坏・長頸壺)鉄器	42
36	高屋敷館遺跡	青森	青森市	平安時代	1	第9号住居跡(竪穴)	土師器(小型甕・坏)須恵器壺羽口 鉄鏃 ほか	43
37	長森遺跡	青森	青森市	縄文時代晩期	1	包含層	頭部に沈線	44
38	赤平(3)遺跡	青森	上北郡	平安時代	1	13号竪穴住居	周溝覆土	45
39	ふくべ(4)遺跡	青森	上北郡	古墳時代終末～平安時代	3	遺構外		46
40	中野平遺跡	青森	上北郡	奈良時代～平安時代前期	1	第14号住居跡 (竪穴)・床直	土師器(坏・甕)	47
				奈良時代 8世紀後半	1	第34号住居跡 (竪穴)・床直	土師器(甕)、須恵器片、鉄製品 ほか	
				奈良時代	1	第32号竪穴住居跡	土師器(甕・坏) 板状鉄器 石斧 焼成前穿孔	48
41	上尾駸(2)遺跡	青森	上北郡	平安時代	1	第6号竪穴住居跡 床直	カメ形土器 坏形土器 白砂式製 塩土器 羽口 鉄滓 須恵器片 砥石 炭化物 鉄斧 刀子 手づくね 土器	49
42	甲里見(2)遺跡	青森	黒石市	平安時代	1	第2号竪穴住居跡	土師器(坏・甕・埴・壺)須恵器(坏・ 長頸瓶・壺・甕)羽口 手づくね土器 土馬 鉄製刀子 全身ヘラムガキ	50

43	隠川(12)遺跡	青森	五所川原市	平安時代	3	2号住居跡(竪穴)	黒色、外面ミガキ、海面骨針混入	51
44	隈無(6)遺跡	青森	五所川原市	不明	1	表採		52
45	泉山遺跡	青森	三戸郡	不明	5	遺構外		53
46	滝端遺跡	青森	三戸郡	縄文時代晩期	3	包含層		54
47	明戸遺跡	青森	十和田市	縄文時代晩期	1	遺構外	2条刻み目	55
48	人首沢遺跡	青森	八戸市	古墳時代終末～奈良時代	1	6号竪穴住居跡	土師器(坏・甕)	56
49	林ノ前遺跡	青森	八戸市	平安時代	1	A-SI-01 竪穴住居		57
				平安時代	1	壕跡SD-2		
				不明	1	包含層		
50	風張(1)遺跡	青森	八戸市	縄文時代後期中葉～後葉	3	遺構外		58
51	櫛引遺跡	青森	八戸市	縄文時代	1	第23号竪穴住居跡	深鉢、打製石斧、石匙、玉	59
52	是川中居遺跡	青森	八戸市	縄文時代	1	遺構外		60
53	盲堤沢(3)遺跡	青森	八戸市	古墳時代終末～奈良時代	1	SI-8竪穴住居跡・床直	土師器(坏・甕)、土玉	61
				古墳時代終末～奈良時代	1	SI-22竪穴住居跡・床直	土師器(坏・甕)、鎌	
54	根岸山添遺跡	青森	八戸市	奈良時代	2	包含層		62
55	境沢頭遺跡	青森	八戸市	奈良時代	1	SI4竪穴住居跡 覆土	土師器(坏・甕)	63
56	田代遺跡	青森	八戸市	縄文時代中期末～後期初頭	1	遺構外		64
57	田向冷水遺跡	青森	八戸市	飛鳥～平安時代	1	SI-25(竪穴住居)		65
58	鶉窪遺跡	青森	八戸市	奈良時代	1	第2号竪穴住居跡	土師器(甕)、石製品、砥石ほか	66
59	上野遺跡	青森	八戸市	平安時代 9世紀後半～10世紀前半	1	第6号竪穴住居跡 カマド周辺	黒色処理、土師器(甕・坏)ほか	67
60	丹後谷地遺跡	青森	八戸市	不明	1	包含層		68
61	渦野遺跡	青森	八戸市	古墳時代終末期～奈良時代	1	第15号竪穴住居跡	表面ミガキ	69
62	市子林遺跡	青森	八戸市	古墳時代終末期	1	SI38(竪穴住居)	土師器(坏・甕・壺)土製紡錘車 丸玉ほか	70
63	田面木遺跡	青森	八戸市	奈良時代	1	第1号住居跡 床面	土玉	71
64	赤御堂遺跡	青森	八戸市	奈良時代	1	第5号住居跡 (竪穴)床面	土師器(坏・長胴甕・珠胴甕)すり石 鉄釘	72
65	根城跡遺跡	青森	八戸市	古墳時代終末期～奈良時代	1	95号住居跡(竪穴)床面	土師器	73
66	石郷遺跡	青森	八戸市	縄文時代後期末葉～晩期	1	第1地点M-10区 第IV層		74
67	今津遺跡	青森	東津軽郡	縄文時代後期～晩期	7	包含層	頭部と尾部に刻み目	75
68	宇鉄遺跡	青森	東津軽郡	縄文時代後期～晩期	1	包含層		76
69	大光寺新城跡	青森	平川市	奈良時代	4	SI-172竪穴住居	土師器球胴甕 青磁碗 焼失家屋の可能性あり。	77



				不明	1	遺構外		
70	永野遺跡	青森	平川市	平安時代	1	土師 13 号 竪穴住居跡 覆土	黒色、表面にミガキ	78
71	堀合Ⅲ号遺跡	青森	平川市	縄文時代	1	遺構外		79
72	二枚橋(2)遺跡	青森	むつ市	縄文時代晩期	2	包含層	先端部に装飾突起 大洞A'式?	80
73	塚遺跡	岩手	北上市	奈良時代	1	SI018 竪穴住居跡	荒いヘラミガキ、土師器(坏・高坏・ 甕・壺・盤)須恵器坏、土製紡錘車	81
74	藤沢遺跡	岩手	北上市	奈良時代	6	SI008 竪穴住居跡	ミガキ、土師器(坏・高坏)、須恵器 (坏・横瓶) ほか	82
				奈良時代	1	SK12 土壌	ミガキ	
75	山川岸Ⅱ遺跡	岩手	北上市	平安時代	1	VⅢE-2住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・甕)、鉄製品ほか	83
76	下江釣子羽場遺跡	岩手	北上市	平安時代	4	包含層		84
77	立花南遺跡	岩手	北上市	奈良・平安時代	1	SI006 竪穴住居跡	土師器(坏・甕)須恵器(甕・壺)、鉄 製品	85
				奈良・平安時代	1	SI007 竪穴住居跡	土師器(坏・甕)	
78	滝の沢地区遺跡	岩手	北上市	縄文時代前期末～中期初頭	1	遺構外	大木6式期	86
79	馬場野Ⅱ遺跡	岩手	九戸郡	縄文時代後期中葉	1	LVI-04 住居(竪穴)		87
				弥生時代	1	LVI-03 住居(竪穴)	両側面にキザミ	
				縄文時代～弥生時代	4	包含層	両側面にキザミ	
80	駒板遺跡	岩手	九戸郡	奈良・平安時代	2	IVD39 住居址(竪穴)床 面	土師器(坏・甕・甗)、鉄製鎌	88
81	大日向Ⅱ遺跡	岩手	九戸郡	縄文時代	1	包含層		89
82	河崎の柵擬定地	岩手	一関市	縄文時代中葉～後葉	1	ⅡC54e 堤防		90
				縄文時代晩期前葉～中葉	1	ⅢC17c 堤防		
83	小十文字遺跡	岩手	奥州市	奈良時代	4	東区2号住居跡 (竪穴)東側溝内	丸玉 他土製勾玉片4点	91
84	熊之堂遺跡	岩手	奥州市	奈良時代後期 ～平安時代前期	1	SI12 竪穴住居跡	外面ヘラケズリ、土師器(坏・甕)、 須恵器坏	92
85	大清水上遺跡	岩手	奥州市	不明	1	攪乱層		93
86	小屋畑遺跡	岩手	久慈市	不明	2	遺構外		94
87	中長内遺跡	岩手	久慈市	奈良・平安時代	1	RD538 土壌 検出面	古代の琥珀の加工工房を行って いた集落。	96
				奈良時代	3	RA510 竪穴住居 ピット2	土師器(坏身・甕)ミニチュア土器 砥石 古代+A165:M177 の琥珀の 加工工房を行っていた集落。ヘラ ミガキ調整	
				奈良時代	1	RA512 竪穴住居 4区C層	土師器(甕・甗) 須恵器坏身 土製 紡錘車 敲き石 刀子 琥珀片 古	

							代の琥珀の加工工房を行っていた集落。ヘラミガキ調整	
				平安時代	2	RA513 竪穴住居 1区床面	土師器(坏・甕・鉢) 須恵器坏身 砥石 刀子土玉 土製紡錘車 琥珀製珠類未製品古代の琥珀の加工工房を行っていた集落。 ヘラミガキ調整	
				奈良・平安時代	1	RA522 竪穴住居 カマド左床面	土師器(坏・甕) 小型甕 磨石 盛土から琥珀片出土。古代の琥珀の加工工房を行っていた集落。黒色処理 ヘラミガキ調整	
				平安時代	1	RA524 竪穴住居 西区A層	土師器坏 磨石 古代の琥珀の加工工房を行っていた集落。	
88	大芦Ⅰ遺跡	岩手	久慈市	縄文時代晩期	2	C区捨て場	子持ち勾玉の形状	97
89	稲村Ⅱ遺跡	岩手	紫波郡	奈良時代	1	1号住居(竪穴)	外面ミガキ、土師器(坏・甕)、砥石、土製紡錘車	98
				奈良時代～平安時代	1	4号住居(竪穴) 覆土	外面ミガキ、土師器(坏・甕)、砥石、鉄製品、土製紡錘車	
				奈良時代～平安時代	8	23号住居(竪穴)	土師器(坏・甕)、砥石、鉄製品、土製品	
				奈良時代～平安時代	2	24号住居(竪穴)覆土	土師器(坏・甕・鉢)	
				奈良時代～平安時代	1	遺構外		
90	徳丹城跡遺跡	岩手	紫波郡	奈良時代	3	SI795 竪穴住居跡	土師器(坏・甕・壺)、土製紡垂車	99
91	一戸城遺跡	岩手	二戸郡	奈良時代～平安時代	1	SI105 住居跡(竪穴) 覆土	C字	100
				奈良時代～平安時代	1	SI113 住居跡(竪穴) カマド	C字、土師器(坏・甕)	
92	北館A遺跡	岩手	二戸郡	歴史時代	8	AJ50 竪穴住居跡	土師器(坏・甕・壺・鉢)、土製紡錘車	101
93	上野遺跡	岩手	二戸郡	奈良時代	1	E地点 2号址(竪穴住居)	土師器(坏・甕・壺)、刀子、土製紡錘車	102
				奈良時代	1	E地点 3号址(竪穴住居)	土師器甕、砥石、土製紡錘車、土錘	
				平安時代	1	ⅡE5a 土坑 覆土	奈良期の玉、土師器(坏・甕)	103
				不明	1	遺構外	縄文時代	
94	田中遺跡	岩手	二戸郡	奈良時代～平安時代	1	SI02 竪穴住居跡	土師器(坏・甕・甗)、鉄製品	104
95	青ノ久保遺跡	岩手	二戸市	奈良時代	1	CⅡO2住居跡 (竪穴)	土師器、石器	105

96	浅石遺跡	岩手	二戸市	不明	1	遺構外	縄文時代後期・晩期に見られる遺物	106
97	長瀬A遺跡	岩手	二戸市	古代	1	Db03 住居跡(竪穴)	土器片、石器、鉄器、土製品	107
98	門松遺跡	岩手	二戸市	奈良時代	1	B II h6住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)須恵器坏、土製紡錘車他	108
99	上杉沢遺跡	岩手	二戸市	縄文時代	1	包含層IV区		109
100	上田面遺跡	岩手	二戸市	古代	7	B29 住居址(竪穴)	全面黒色、土師器(坏・甕・壺)	110
				古代	5	C33 号住居址(竪穴)	土師器(坏・甕)、小玉、土玉ほか	
				古代	1	B34 号住居址(竪穴)	土師器甕、土製勾玉片	
				古代	1	E34 号住居址(竪穴)	土師器(甕・甌)、土玉	
				古代	6	C41 号住居址(竪穴)	土師器(坏・甕)、土製紡錘車、土製勾玉片多数	
				古代	2	D41 号住居址(竪穴)	土師器坏、土製勾玉片	
				古代	1	B36 号住居址(竪穴)	土師器甕他	
101	火行塚遺跡	岩手	二戸市	縄文時代～平安時代	1	遺構外		
102	長瀬C遺跡	岩手	二戸市	奈良時代	1	21B住居址(竪穴)	土師器(坏・甕・高台付坏)、鉄製品	111
				奈良時代	1	34B住居址(竪穴)	土器	
				奈良時代	1	34D住居址(竪穴)	土師器(坏・甕)、石製品	
103	下村遺跡	岩手	二戸市	縄文時代～中世	1	4号溝跡		112
104	中曽根II遺跡	岩手	二戸市	奈良時代	1	147号住居跡(竪穴) 竈の焚口下ないし焚口 正面近くの焼土内	土製丸玉 他44棟から土製勾玉計 50点出土。カマド祭祀 手づくね土器	113
105	竈堂遺跡	岩手	水沢市	古墳時代終末 ～奈良時代初頭	8	Bio3 住居址(竪穴)	ミガキ、土製小玉、国分寺下層式併行期	114
106	東大畑遺跡	岩手	水沢市	奈良時代	3	6号住居址(竪穴) 床面		
107	中半入遺跡	岩手	水沢市	平安時代	1	遺構外		115
108	杉の堂遺跡	岩手	水沢市	平安時代	1	SI01 竪穴住居跡 カマド内	ナデ、土師器(坏・甕)	116
109	玉貴遺跡	岩手	水沢市	奈良時代	1	A-0-1 住居址(竪穴)	土師器(坏・甕・壺・鉢)石製紡錘車	117
110	膳性遺跡	岩手	水沢市	古墳時代終末 ～奈良時代初頭	1	B-5住居址(竪穴) カマド付近	土師器(坏・高坏・甕・鉢・甌)、土製品、鉄製品ほか	118
				古墳時代終末 ～奈良時代初頭	1	C-3住居址(竪穴) 覆土	土師器(坏・高坏・甕・甌)、土玉、鉄製品ほか	
				古墳時代終末 ～奈良時代初頭	10	G-8住居址(竪穴) カマド付近 床直	黒色、土師器(坏・甕・鉢・甌)	

111	台太郎遺跡	岩手	盛岡市	平安時代	1	RA513 竪穴住居跡		119
				奈良時代	2	RA447 竪穴住居跡 覆土	土師器(坏・高坏・壺)、土製紡錘車	120
				中世	1	土壇RD379 埋土上層		121
				奈良時代	1	RA581 竪穴住居跡 新期カマド床面		122
				奈良時代	1	RA625 竪穴住居跡 カマド付近	土師器長胴甕	123
112	百目木遺跡	岩手	盛岡市	奈良時代～平安時代	3	No26 住居跡(竪穴) 覆土		124
113	細谷地遺跡	岩手	盛岡市	奈良時代・8世紀中～後半	1	17号竪穴住居 RA057 覆土	土師器(坏・甕)、砥石	125
114	本宮熊堂B遺跡	岩手	盛岡市	奈良時代	1	RA098(竪穴住居)	ミガキ、土師器(坏・甕・鉢)	126
				奈良時代	2	RA061(竪穴住居)	赤色顔料塗布、土師器(坏・高台付甕)	127
115	大館町遺跡	岩手	盛岡市	縄文時代中期	1	RA102 竪穴住居跡・覆土	土器、石器	128
116	萩内遺跡	岩手	盛岡市	不明	1	礫群中		129
117	色麻古墳群	宮城	加美郡	古墳時代	1	遺物包含層		130
118	鴻ノ巣遺跡	宮城	仙台市	古墳時代中期～後期	1	SI-12 竪穴住居跡	紡錘車ほか	131
				古墳時代～近世	1	包含層		
119	栗遺跡	宮城	仙台市	奈良時代	1	第6土坑 土坑墓	黒色	132
120	長町駅東遺跡	宮城	仙台市	古墳時代終末	1	SI143(竪穴住居) 床直	土師器(坏・甕)、土製品	133
				古墳時代終末～奈良時代	1	SI249(竪穴住居) 覆土	土師器(坏・高坏・甕)	
121	市川橋遺跡	宮城	多賀城市	奈良・平安時代	1	SI-5316(竪穴住居)・ 覆土		134
				不明	1	遺構外		
122	山王遺跡	宮城	多賀城市	古墳時代後期	1	包含層	外面ナデ	135
123	清水遺跡	宮城	名取市	不明	1	62 住居(竪穴)床直	朱有、ミガキ、土師器、須恵器ほか	136
				不明	1	70 住居(竪穴)掘り方	ミガキ、土師器、須恵器	
				古墳時代後期後半	2	73 住居(竪穴)覆土	ミガキ、土師器(坏・甕・甗)ほか	
				古墳時代～平安時代	1	包含層	ミガキ	
124	はりま館遺跡	秋田	鹿角郡	平安時代	1	SI005 竪穴住居跡 カマド覆土	土師器甕、刀子、土玉	137
125	杉沢台遺跡	秋田	能代市	縄文時代晚期	1	SK11 土坑墓		138
126	開坊遺跡	秋田	南秋田郡	平安時代	1	SD5 溝跡	土師器坏	139
127	小林遺跡	秋田	山本郡	平安時代	1	SN3676 焼土遺構	土師器(坏・甕)	140

128	山田遺跡	山形	鶴岡市	古墳時代後期	1	ST8117(竪穴住居)	黒色、紐通しの痕跡無し、土師器 甕、土製管玉	141
				古墳時代～近世	2	包含層	黒色、紐通しの痕跡無し	
				古墳時代後期 MT15～TK10	1	ST7271(竪穴住居)	黒色処理、外面ケズリ、ミガキ土師 器甕	142
129	宮の前遺跡	山形	村山市	縄文時代晩期	1	包含層		143
130	駒板新田横穴群	福島	会津若松市	古墳時代終末期～奈良時代	1	16号横穴墓・墓前域	土師器、刀子、鉄鏃、耳環、ガラス 小玉 ほか	144
				不明	1	遺構外		
131	山王川原遺跡	福島	安達郡	古墳時代終末期	2	6号住居跡(竪穴)カマド 堆積土内	土師器(坏・甕・壺・甔)、鉄製品ほ か	145
132	高木遺跡	福島	安達郡	古墳時代後期 栗圀式期	1	26号住居跡(竪穴)	土師器(高坏・甔)、須恵器壺、臼 玉、砥石	146
				古墳時代後期 栗圀式期上限	1	99号住居跡(竪穴)	黒色、ヘラミガキ、土師器坏、須恵 器坏蓋	
				古墳時代後期～終末期 栗圀式後半 ～国分寺下層式前半	1	108号住居跡(竪穴) カマド底面	黒色処理、ナデ	
				古墳時代後期・栗圀式期	2	2号溝跡		
				古墳時代後期・栗圀式期	6	1号遺物包含層	黒色処理、ヘラミガキ	
				不明	3	遺構外		
133	北ノ脇遺跡	福島	安達郡	古墳時代後期・栗圀式期	3	3号住居跡(竪穴)	黒色処理、ヘラミガキ、土師器(坏・ 甕・甔)	147
				古墳時代後期・栗圀式期	1	10号住居跡(竪穴)堀形 埋土	土師器(坏・甕)、土鈴、土製支脚ほ か	
				古墳時代後期・栗圀式期	1	41号住居跡(竪穴)床面	土師器(坏・甕・甔)須恵器坏身、石 製品ほか	
				不明	1	遺構外		
134	岩代陣場遺跡	福島	安達郡	弥生時代中期	1	E地点 第2号土壇	弥生土器 焼成前に穿孔。表面は、 ある種の黒色処理。	147
135	朝日長者遺跡	福島	いわき市	弥生時代後期	1	18住居(竪穴)		148
136	夕日長者遺跡	福島	いわき市	古墳時代後期	2	5号住居(竪穴)	土師器(坏・高坏)、滑石単孔板、滑 石双孔板、紡錘車、土製鏡など	
				不明	1	44住居(竪穴)		
				古墳時代後期	1	19住居(竪穴)		
				古墳時代後期	1	63住居(竪穴)		
137	荒田目条理遺構 ・砂畑遺跡	福島	いわき市	縄文時代～近世	1	包含層Ⅲ層		149
138	郡遺跡	福島	いわき市	縄文時代後期前葉	1	包含層		150

139	根岸遺跡	福島	いわき市	古墳時代終末期	1	第38号竪穴住居跡	土師器(坏・甕・甔・高坏)、円面硯、 土製支脚	151
140	山崎遺跡	福島	岩瀬郡	古墳時代後期	4	32号住居跡 (竪穴)側壁際に堆積し た焼土内	手づくね土器 土師器坏	152
141	油田遺跡	福島	大沼郡	古墳時代後期	8	105号竪穴住居跡 覆土	外面にナデ、土師器、土製品、石器 など	153
142	十五壇遺跡	福島	大沼郡	古墳時代終末期	1	2号住居跡(竪穴) 壁際	手づくね土器	154
143	清水内遺跡	福島	郡山市	不明	1	ピット162	古墳時代中期か	155
				古墳時代前期	1	6区2号溝跡		156
144	金畑遺跡	福島	郡山市	不明	2	採集 谷部		157
145	七斗蒔遺跡	福島	白河市	古墳・奈良・平安時代	1	1号住居跡(竪穴)	コの字 甕 壺 坏 鉄鏃	158
146	中丸東遺跡	福島	相馬郡	古墳時代～近世	1	遺構外	両面穿孔未貫通	159
147	大森A遺跡	福島	相馬市	古墳時代後期	1	Ⅲb層水田跡		160
148	桐ノ木遺跡	福島	伊達市	古墳時代中期	1	19号竪穴遺構	手づくね土器 土製丸玉	161
				古墳時代	1	表採		
149	岩谷遺跡	福島	伊達市	不明	1	表採		162
150	弘法山古墳群	福島	西白河郡	古墳時代終末期	4	2号横穴・玄室	ガラス小玉、土製小玉 全体に漆 が施されている	163
151	孫六橋遺跡	福島	福島市	弥生・平安・江戸時代	1	遺構外		164
152	石岡別所遺跡	茨城	石岡市	弥生時代後期後半	1	4号住居跡(竪穴) 床面	ナデ、弥生時代壺、磨石、敲き石、 窪み石	165
153	根本遺跡	茨城	稲敷郡	古墳時代中期前葉	1	第8a号住居跡 (竪穴)	土師器甕ほか	166
				古墳時代	1	第34号住居跡 (竪穴)	土師器、土錘ほか、陸平遺跡群古 墳時代第Ⅲ期	
				古墳時代後期前半	1	第2号墳・周溝内	陸平遺跡群古墳時代第Ⅳ期	
154	常陸笹山遺跡	茨城	稲敷郡	弥生時代終末 十王台式期	1	4号住居址(竪穴)		167
155	尾島遺跡	茨城	稲敷市	古墳時代中期～後期	2	祭祀跡		168
156	猪ノ子遺跡	茨城	岩井市	古墳時代後期	1	包含層		169
157	行人田遺跡	茨城	牛久市	不明	2	遺構外		170
158	東山遺跡	茨城	牛久市	古墳時代中期後半	6	12号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・甕・ハソウ)、小玉	171
159	ナギ山遺跡	茨城	牛久市	古墳時代後期	1	第16号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・甕・甔・埴)、須恵器 (坏・蓋・高坏)、土玉、土錘	172
				古墳時代後期	2	第22号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、小玉、敲き石、工 房?	
160	姥神遺跡	茨城	牛久市	古墳時代後期	1	79号住居跡(竪穴)		173

161	厨台遺跡	茨城	鹿嶋市	古墳時代後期	1	SB43(竪穴住居)	土師器(坏・甗・甕)	174
162	鹿島町内(国神) No27	茨城	鹿嶋市	古墳時代後期・鬼高期	1	SB20(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、須恵器甕	175
163	国神遺跡	茨城	鹿嶋市	古墳時代後期	1	SB-020(竪穴住居)		176
164	西平遺跡	茨城	鹿嶋市	古墳時代後期・6世紀代	1	第29号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・高坏・甕)、土錘	177
165	戸崎中山遺跡	茨城	かすみがうら 市	古墳時代前期～中期	1	第52号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(甕・壺)、土玉	178
166	神岡上古墳群	茨城	北茨城市	古墳時代後期	120	3号墳・墳丘上	円墳、玄室(ガラス玉、七鈴鏡、直刀、 刀子鉄鏃、耳環、金銅製品)、墳丘上 (須恵器、土師器、土製模造品)ほか	179
167	羽黒遺跡	茨城	古河市	平安時代	1	第37号住居跡 (竪穴)	全面摩滅、土師器(坏・蓋・甕)、須 恵器(坏・皿・蓋・壺・甕)、鉄製品、 銅製品ほか	180
168	辰海道遺跡	茨城	桜川市	古墳時代前期中葉	2	第711号住居跡 (竪穴)	土師器(壺・埴・器台)、管玉、土玉 ほか	181
				古墳時代前期後葉	1	第719号住居跡 (竪穴)	土師器(甕・甗・埴・器台)、算盤玉、 双孔円板	
				古墳時代前期中葉	1	第734号住居跡 (竪穴)	土師器(甕・壺・埴・鉢)	
169	犬田神社前遺跡	茨城	桜川市	弥生時代後期	1	175号住居跡(竪穴)	ナデ、弥生土器壺、紡錘車	182
				弥生時代後期	1	193号住居跡(竪穴)	ナデ、弥生土器壺、紡錘車	
				古墳時代終末期	1	109号住居跡(竪穴)	ナデ、土師器(坏・高坏・甕)、土製 品	
170	八幡前遺跡	茨城	桜川市	古墳時代後期	1	31号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)、土鈴	183
171	裏山遺跡	茨城	桜川市	古墳時代後期	1	第12号住居跡 (竪穴)床面	土師器(甕・坏)ほか	184
				古墳時代後期	2	第20号住居跡 (竪穴)床面	土師器(甕・坏)ほか	
				古墳時代中期	1	第19号住居跡(竪穴) 床面	土師器(坏・甕・埴・器台)ほか	
172	下栗野方台遺跡	茨城	下妻市	古墳時代～中世	2	SI-111a (竪穴住居)覆土	土師器(甕・高坏)	185
173	熊の山遺跡	茨城	つくば市	古墳時代後期	1	第1号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)	186
				古墳時代後期	1	第64号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・甕・甗)、切子玉、丸 玉、臼玉ほか	

			古墳時代以降	1	第 23 号住居跡 (竪穴)覆土	土師器片、土製品	
			古墳時代後期	1	第 388 号住居跡 (竪穴) カマド西側覆土	土師器(坏・甕・鉢)、土玉ほか	187
			古墳時代終末期	1	第 658 号住居跡 (竪穴) カマド前覆土	土師器(坏・甕)	
			古墳時代後期	1	第 794 号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・甕)	188
			古墳時代後期	1	第 801 号住居跡 (竪穴)・覆土	土師器(坏・甕)、須恵器平瓶ほか	
			古墳時代後期	1	第 845 号住居跡 (竪穴)カマド内覆土	土師器坏、土玉ほか	
			古墳時代後期～終末期	2	第 876 号住居跡 (竪穴)	土師器坏ほか	
			古墳時代後期	2	第 1445B 号住居跡 (竪穴)壁溝内	土師器坏	189
			古墳時代後期	1	第 1503 号住居跡 (竪穴)・覆土	土師器(坏・甕・甗)ほか	190
			古墳時代後期	1	第 1517 号住居跡 (竪穴)・覆土	土師器(坏・甕)	
			古墳時代後期	1	第 16 号住居跡 (竪穴)床面	土師器甕、土錘	191
			古墳時代後期～終末期	1	第 1006 号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・甕)	
			古墳時代後期	2	第 2609 号住居跡 (竪穴)床面覆土	土師器(坏・甕・甗)、切子玉、 紡錘車ほか	
			古墳時代終末期	1	第 2010 号住居跡 (竪穴)床面	土師器(坏・甗)、臼玉、耳環、鎌? ほか	192
			古墳時代後期	3	第 2015 号住居跡 (竪穴)	土師器坏	
			古墳時代終末	2	第 2052 号住居跡 (竪穴)・覆土	土師器坏、小玉、勾玉? 1点	
			古墳時代後期	1	第 2193 号住居跡 (竪穴)床面	土師器坏、小玉、臼玉ほか	
			古墳時代後期	1	第 2196 号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・高坏・甕)	
			古墳時代後期以前	1	第 2197 号住居跡	土師器坏	



			(竪穴)覆土	
		古墳時代後期	第 2220 号住居跡 (竪穴)床面	土師器 坏
		古墳時代終末期	第 2221 号住居跡 (竪穴)壁溝覆土	土師器(甕・埴)、支脚
		古墳時代後期	第 2241 号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・埴)、小玉ほか
		古墳時代終末期	第 2262 号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・甕・甗)、鎌、敲き石ほか
		古墳時代後期	第 2491 号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・甕・高坏・鉢)、小玉、白 玉、砥石
		平安時代	SI-2359 (竪穴住居)	土師器(坏・甕・高台付皿)、須恵器
		平安時代	SI-2362 (竪穴住居)	土師器小形甕、須恵器(甕・瓶類) ほか
		古墳時代後期	第 2309A号住居跡 (竪穴)	砥石 土師器坏・高坏・甕 手づく ね土器 土製支脚 鉄釘 桃種
		古墳時代後期	第 2888 号住居跡 (竪穴)	土師器坏・鉢・甗 白玉 竈祭祀の 可能性
		古墳時代終末期	第 2902 号住居跡 (竪穴)	土師器坏・高坏・甕・甗 須恵器坏・ 壺・甕 砥石
		古墳時代後期	第 2918 号住居跡 (竪穴)	土師器坏・小形甕・椀・高坏 須恵 器甗・器台 ミニチュア土器 土製 小玉 ほか
		古墳時代後期	第 2572 号住居跡 (竪穴)竈付近	土師器坏・椀・甕・甗 手づくね土器 須恵器坏・甕 埴砥石 土玉 鋤先 形土製品 鏡形土製品 竈神信仰 に関わる祭祀の可能性
		古墳時代終末期	第 3011 号住居跡 (竪穴)	土師器坏・高坏・鉢・小形甕・甕 須 恵器坏
		古墳時代後期	第 3012 号住居跡 (竪穴)	土師器坏・鉢・甕 須恵器坏蓋
		古墳時代後期	第 2835 号竪穴建物 竈前から中央部	土師器坏・椀・高坏・壺・甕・甗 手 づくね土器 須恵器坏・蓋・高坏・ 甕・瓶類 土玉 鉄滓
		古墳時代後期	第 2838 号竪穴建物	土師器坏・高坏・壺・甕・小形甕・甗 須恵器坏・瓶類 甕・土玉 支脚 鉸具 シジミ貝

193

194

195

196

				古墳時代後期	1	第 2851 号 竪穴建物	土師器 坏・椀・鉢・甕 須恵器 坏	
				古墳時代後期	1	第 2856 号 竪穴建物	土師器 坏・椀・高坏・鉢・甕 土製 支脚 鉄滓	
				古墳時代後期	1	第 2022 号 竪穴建物	土師器 坏・高坏・鉢・甕・小形甕 須恵器 甕 土玉 刀子 鉄釘 鉄滓	197
				古墳時代後期	10	第 3044 号 竪穴建物 竈周辺・竈内	土師器 坏・椀・高坏・甕・小形甕 ミニチュア土器 須恵器 坏・甕 管状土錘 鉄滓 桃種 竈祭祀の可能性	
				古墳時代終末期	2	第 3037 号 竪穴建物	土師器 甕・小形甕 土製 支脚 鉄製 手鎌	
				古墳時代後期	1	第 3167 号 竪穴建物 竈火床部	土師器 坏・椀・高坏・甕・甌 手づくね土器 須恵器 甕 土玉 管状土錘 土製 支脚 竈神に關係する祭祀の可能性	
				古墳時代後期	2	第 2387 号 住居跡 (竪穴)	土師器 (坏・甌)、小玉、白玉ほか	198
174	島名前野東遺跡	茨城	つくば市	古墳時代後期	3	第 124 号 住居跡 (竪穴)	土師器 (坏・甕)	199
				古墳時代後期 ~古墳時代終末期	1	第 10 号 住居跡 (竪穴)	土師器 (坏・埴・甕・鉢・高坏・埴・壺・甌) 須恵器 甕、土製品ほか	
				中世	1	SK7・土坑・覆土		
				中世	1	SD3.溝跡・覆土	赤彩	
				古墳時代後期	2	第 98 号 住居跡 (竪穴)	土師器 (坏・高坏)、土製品ほか	200
				古墳時代終末期	3	第 104 号 住居跡 (竪穴) カマド内・カマド前覆土	土師器 (坏・埴)、白玉、土玉ほか	
				古墳時代後期	2	第 73 号 住居跡(竪穴)	土師器 (杯・甕)	201
				不明	1	第 82 号 住居跡(竪穴) 覆土		
175	中台遺跡	茨城	つくば市	古墳時代以降	1	第 7 号 住居跡(竪穴)	土師器 坏、穴未貫通	202
				不明	1	SK8土坑		
176	中谷津遺跡	茨城	つくば市	縄文時代晩期前葉	1	第 10 号 住居跡 (竪穴)・覆土	縄文土器、土偶、土盤、石皿、ほか	203
177	根崎遺跡	茨城	つくば市	古墳時代中期	1	第 10 号 住居跡 (竪穴)	土師器 (坏・埴・甕)	204
178	下郷古墳群	茨城	土浦市	弥生時代後期前半	1	第 13 号 住居跡 (竪穴)覆土	弥生土器 広口壺、土錘、石鏃、紡錘車ほか	205
179	弁才天遺跡	茨城	土浦市	古墳時代終末期	1	第 7 号 住居跡(竪穴)	土師器 (坏・甕・甌)、土製 紡錘車、	206

							土製支脚	
180	原出口遺跡	茨城	土浦市	弥生時代後期後半	1	第17号住居跡 (竪穴)・覆土	弥生土器(壺・広口壺)	207
181	原田北遺跡	茨城	土浦市	弥生時代後期後半	1	第5号住居跡 (竪穴)・覆土	弥生土器(甕・壺)、磨石、紡錘車	208
				古墳時代中期	1	第61号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(高坏・甕・埴)、石製模造品 ほか	
182	東山団地遺跡	茨城	土浦市	弥生時代後期初頭～前半	1	8号住居跡(竪穴)	黄褐色、弥生土器壺など	209
183	刑部遺跡	茨城	土浦市	古墳時代後期	1	第2号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)	210
				古墳時代後期	1	第3号住居跡(竪穴)	黒褐色、土師器(坏・甕・鉢・甗)	
184	木田余台遺跡群	茨城	土浦市	古墳時代	1	SI-122(竪穴住居)		211
				古墳時代	1	SI-101(竪穴住居)		
				古墳時代	1	SI-105(竪穴住居)		
				古墳時代	1	SI-97(竪穴住居)		
				古墳時代	1	SI-4(竪穴住居)		
				奈良時代	1	SI-107(竪穴住居)・カ マド内		
185	大宮前遺跡	茨城	土浦市	古墳時代前期	1	第6号住居跡(竪穴)	土師器(高坏・甕・壺・埴)ほか	212
186	木工台遺跡	茨城	行方市	古墳時代後期	1	15号住居跡 (竪穴)・床面	土師器(坏・高坏・甕)、小玉、土 玉、砥石	213
				奈良時代	1	156号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕・坏 蓋)、刀子、砥石ほか	214
187	内宿井戸作城跡 遺跡	茨城	行方市	古墳時代後期	1	第12号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏・鉢)、紡錘車	215
				古墳時代後期	1	第15号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)	
188	南小割遺跡	茨城	東茨城郡	古墳時代前期	1	第86号住居跡 (竪穴)出入り口部床面	土師器高坏	216
189	矢倉遺跡	茨城	東茨城郡	弥生時代後期後半	1	第29号住居跡 (竪穴)床面	高坏ほか	217
190	権現峯遺跡	茨城	東茨城郡	古墳時代後期	1	第1号住居跡(竪穴)	坏 ほか	218
191	羽黒山遺跡	茨城	東茨城郡	奈良時代	1	第57号住居跡 (竪穴)床面	ナデ、土師器坏、須恵器(坏・蓋)、 鎌、釘、台石ほか	219
192	上岩瀬富士山遺跡	茨城	常陸大宮市	弥生時代後期後半 十王台式期	1	2号住居跡(竪穴)	外面ナデ、弥生土器(高坏・広口 壺)、紡錘車ほか	220
193	武田西塙遺跡	茨城	ひたちなか市	弥生時代後期	1	第157B号住居跡 (竪穴)	高坏ほか	221
194	山崎遺跡	茨城	ひたちなか市	古墳時代前期	1	第6号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(坏・高坏・壺・甕)	222
195	鷹ノ巣遺跡	茨城	ひたちなか市	古墳時代後期	1	第49号住居跡 (竪穴)	土師器坏ほか	223

				古墳時代後期	1	第 50 号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・甕・高坏)ほか	
196	畑田川波遺跡	茨城	銚田市	古墳時代後期	1	SI-1(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕)	224
				古墳時代後期	1	SI-6(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕・壺)、須恵器 坏	
197	坂戸遺跡	茨城	銚田市	古墳時代	24	包含層		225
198	木滝台遺跡	茨城	銚田市	古墳時代前期	6	土坑墓 003	土製臼玉 土製丸玉	226
				古墳時代前期	1	044-A区	良く磨かれ、赤色顔料の塗布あり。	
				古墳時代前期	1	002 包含層	良く磨かれ、赤色顔料の塗布あり。	
199	大塚新地遺跡	茨城	水戸市	古墳時代後期	1	SI9 竪穴住居	臼玉	227
				古墳時代後期	1	SI17 竪穴住居		
200	長峰遺跡	茨城	龍ヶ崎市	古墳時代前期	1	第 124 号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・高坏・甕・壺・器台・坩)	228
201	屋代 A 遺跡	茨城	龍ヶ崎市	弥生時代	1	第 31 号住居跡 (竪穴)覆土	弥生土器(甕・壺)ほか	229
202	屋代 B 遺跡	茨城	龍ヶ崎市	不明	1	包含層		230
203	南三島遺跡	茨城	龍ヶ崎市	古墳時代後期	1	39 号住居跡(竪穴)		231
204	成願寺遺跡	栃木	宇都宮市	古墳時代後期	4	第 29 号住居跡 (竪穴)	土玉	232
			宇都宮市	古墳時代後期	1	第 88 号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・高坏・鉢・甕・甔)、土製 紡錘車ほか	
205	立野遺跡	栃木	宇都宮市	古墳時代後期前葉～中葉	1	5 区 SI-8 (竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕・鉢・壺)	233
206	花の木町遺跡	栃木	宇都宮市	古墳時代前期	1	SI-07(竪穴住居) 中央北炉	火災住居 壺 小型坩 椀 器台 高坏 甔 甕	234
207	金山遺跡	栃木	小山市	古墳時代終末期～平安時代	3	SI-142D (竪穴住居)	土師器(坏・甕)	235
208	寺野東遺跡	栃木	小山市	縄文時代中期後半 加曾利 E I ~ E II	1	SI-233(竪穴住居)	縄文土器	236
				縄文時代草創 ～縄文時代晩期	3	谷東	他に土製勾玉片多数	
				縄文時代	1	包含層	他に土製勾玉片多数(頭が平坦な 物あり)	237
				縄文時代	3	包含層		238
209	八幡根東遺跡	栃木	小山市	平安時代	1	SI-20(竪穴住居)	須恵器坏ほか	239
				古墳時代終末期	1	SI-09(竪穴住居)	土師器(坏・高坏)	240
				古墳時代終末期	1	SI-14A(竪穴住居)	土師器甔、鉄鉢、支脚、	
				平安時代	1	SI-45(竪穴住居)	土師器坏、、須恵器(鉢・甕・甔)砥 石ほか、焼成前穿孔	

				古墳時代～平安時代	2	遺構外	焼成前に穿孔	
210	下台原南遺跡	栃木	鹿沼市	古墳時代中期	1	第2号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、礫ほか	241
				古墳時代中期	1	第3号住居(竪穴)	土師器(坏・甕・埴)、礫	
211	磯岡遺跡	栃木	河内郡	古墳時代後期	1	5区 SI-48(竪穴住居)	表面にスサ状の痕跡有、土師器(坏・甕・甗)	242
212	薄市遺跡	栃木	河内郡	古墳時代中期	1	3K-51 住居跡		243
213	松山古墳	栃木	佐野市	古墳時代前期	1	SZ-1古墳・確認面	前方後円墳、土製品ほか	244
214	野木Ⅲ遺跡	栃木	下都賀郡	古墳時代後期	1	SI-08(竪穴住居) 覆土	土師器(甕・甗・坏)	245
				古墳時代後期	1	SI-14(竪穴住居) 覆土	土師器(坏・鉢・台付甕)、須恵器ほか	
215	清六Ⅲ遺跡	栃木	下都賀郡	古墳時代後期	1	SI-36(竪穴住居)	穿孔後焼成、土師器(坏・高坏・甕)	246
				古墳時代後期 TK10	1	SI-90(竪穴住居)	土師器甕、臼玉、円面硯、管玉	
				古墳時代後期	1	SI-220(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、紡錘車、鉄製品ほか	
				古墳時代後期	1	SI-256(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕)	
				古墳時代後期	1	SI-259(竪穴住居)	土師器(坏・鉢・甕)、臼玉、鉄製品ほか	
				古墳時代後期	2	SI-451(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、土玉、臼玉	247
216	八剣遺跡	栃木	下都賀郡	縄文時代	2	遺構外	牙形、頭が平ら	248
217	下野国分寺跡	栃木	下野市	古墳時代後期	1	SI-1075(竪穴住居)	土師器坏、紡錘車	249
218	赤羽根遺跡	栃木	栃木市	古墳時代中期	1	59号住居 (竪穴)・覆土		250
				古墳時代後期	1	26号住居(竪穴住居)・ 覆土		
219	藤岡神社遺跡	栃木	栃木市	縄文時代後期～晩期	20	包含層		251
220	北原遺跡	栃木	那須烏山市	古墳時代後期	3	SI-549(竪穴住居)	焼成前に穿孔、土師器甗ほか	252
				古墳時代後期	2	SI-555(竪穴住居)	土師器(甕・甗)、土製円板、石製紡錘車ほか	
221	大和久古墳群	栃木	那須烏山市	古墳時代後期	2	第2号墳・玄室	黒褐色直刀、管玉、切子玉、素玉、金環ほか	253
222	桧の木遺跡	栃木	芳賀郡	縄文時代	1	遺構外	前面に刺突文	254
223	伊勢崎遺跡	栃木	真岡市	平安時代前期前葉	1	SI-23(竪穴住居) 覆土	土師器(坏・甕・壺・高台坏)	255
224	鶴田 A 遺跡	栃木	真岡市	古墳時代終末期	1	SI-01(竪穴住居) 覆土	土師器(坏・甕)	256
225	吹上遺跡	群馬	安中市	縄文時代～平安時代	1	包含層	円墳、鏡、石製刀子、石製斧頭、鉄鏃、短甲	257
226	舞台遺跡	群馬	伊勢崎市	古墳時代後期	2	D-214号住居跡	土師器(坏・鉢)、紡錘車	258

						(竪穴)カマド埋土		
				古墳時代後期	2	D-195 土坑	土師器(坏・鉢・甕)、土錘、他に土製勾玉片3点有	
				古墳時代	1	6号周溝墓	土師器(甕・鉢・高坏)、土玉ほか	
227	伊勢崎・東流通団地遺跡	群馬	伊勢崎市	古墳時代後期～終末期	1	1-20-1号住居跡 (竪穴)		259
				古墳時代後期～終末期	1	1-20-5号住居跡(竪穴)		
228	三和工業団地 I 遺跡	群馬	伊勢崎市	古墳時代前期前葉	1	45号住居(竪穴)	土師器(壺・埴・台付甕)	260
229	伊勢ノ木遺跡	群馬	邑楽郡	古墳時代後期	1	トレンチ内		261
230	歌舞伎遺跡	群馬	太田市	古墳時代中期後半	1	A18号住居跡(竪穴)	土師器(壺・甕・埴・高坏)	262
231	反丸遺跡	群馬	太田市	古墳時代後期	1	祭祀遺構	土製鏡 土製玉 ほか	263
232	天引狐崎遺跡	群馬	甘楽郡	弥生時代後期	1	36号遺構 (竪穴住居)	弥生土器(甕・壺・高坏)	264
				弥生時代後期	1	40号遺構 (竪穴住居)	弥生土器、石器	
				弥生時代後期	2	71号遺構 (竪穴住居)	弥生土器(甕・高坏・壺)、石鏃ほか	
				弥生時代後期	1	100号遺構 (竪穴住居)	弥生土器(甕・高坏・壺)、石鏃、砥石ほか	
233	天引向原遺跡	群馬	甘楽郡	弥生時代後期	4	第153号住居址 (竪穴)		265
234	福島駒形遺跡	群馬	甘楽郡	古墳時代	1	15号住居 (竪穴)・覆土	高坏・壺・埴・台付甕・	266
235	千網谷戸遺跡	群馬	桐生市	不明	1	包含層		267
236	有馬遺跡	群馬	渋川市	弥生時代後期後葉	1	217号住居(竪穴)	土師器(甕・高坏)ほか	268
				弥生時代後期後葉	1	249号住居(竪穴)	石製勾玉未成品有り、高坏、石器ほか	
				弥生時代以降	4	包含層		
237	北町遺跡	群馬	渋川市	弥生時代末葉 ～古墳時代前期	2	H-4号住居跡(竪穴)	土師器(壺・甕・高坏)、砥石	269
				弥生時代末葉 ～古墳時代前期	1	H-6号住居跡(竪穴)	土師器(器台・高坏・台付甕・大型壺)、管玉ほか	
				弥生時代末葉 ～古墳時代前期	1	H-10号住居跡 (竪穴)	土師器(甕・壺・高坏)、砥石	
				弥生時代末葉 ～古墳時代前期	1	H-12号住居跡 (竪穴)	土師器(高坏・甕)、鉄製品、砥石	
238	中郷田尻遺跡	群馬	渋川市	古墳時代後期	1	Ⅲ区 38号住居 (竪穴)		270

				古墳時代後期	1	Ⅲ区 40号住居 (竪穴)		
239	瀧沢石器時代遺跡	群馬	渋川市	縄文時代～平安時代	1	包含層	赤彩	271
240	見立相好遺跡	群馬	渋川市	弥生時代後期	1	Y-12 住居跡(竪穴)	土師器(甕・鉢)	272
				弥生時代後期	1	Y-19 住居跡 (竪穴)覆土	弥生土器(甕・台付甕)	
				弥生時代後期	1	Y-26 住居跡 (竪穴)覆土	弥生土器(壺・甕・台付甕・高坏)ほか	
				弥生時代後期	1	Y-30 住居跡(竪穴)・ 覆土	弥生土器(壺・甕・高坏)	
				弥生時代～古墳時代	1	遺構外		
241	下遠原遺跡	群馬	渋川市	弥生時代～古墳時代前期	1	C区 Y-3号住居跡 (竪穴)	甕・台付甕、土製管玉	273
242	日高遺跡	群馬	高崎市	弥生時代後期～平安時代	1	15区Ⅳ面		274
				弥生時代後期～平安時代	1	27区Ⅳ面		
				弥生時代後期～平安時代	1	19区		
243	井出村東遺跡	群馬	高崎市	古墳時代後期	1	第26号住居址 (竪穴)	土師器(甕・埴)	275
244	三ツ寺Ⅱ遺跡	群馬	高崎市	古墳時代後期	1	2区 39号住居跡 (竪穴)覆土	土師器(甕・坏・丸胴甕)	276
245	小八木志志貝戸遺跡	群馬	高崎市	弥生時代後期 樽2期	2	KS1-14・15号遺構 土器集中地域	石鏃、土師器	277
246	下斉田・滝川 A 遺跡	群馬	高崎市	不明	1	包含層		278
247	新保田中村前遺跡	群馬	高崎市	古墳時代前期	1	243号住居(竪穴)	土師器(壺・甕・高坏)ほか	279
				弥生時代後期	1	262号住居(竪穴)・覆土	甕	
				不明	1	166号住居(竪穴)・床面	弥生土器甕	280
				不明	1	包含層	古墳時代前期?	281
248	新保遺跡	群馬	高崎市	弥生時代中期後半	1	162号住居(竪穴)	壺・甕ほか	282
				弥生時代後期	1	126号住居(竪穴)	甕・壺、紡錘車	
				弥生時代後期	1	156号住居(竪穴)	大甕	
				弥生時代後期	1	287号住居(竪穴)	鉢・台付甕	
				弥生時代後期	1	9号周溝墓	石器、小玉、土器	
				不明	5	包含層		
				弥生時代中期～古墳時代	11	大溝	管玉、小玉、銅釧ほか	283
249	多比良追部野遺跡	群馬	高崎市	古墳時代後期	2	H-188号(竪穴住居)	土師器(坏・甕・甗)、石器	284
250	高崎情報団地Ⅱ遺跡	群馬	高崎市	古墳時代	1	遺構外		285
251	綿貫堀米前Ⅱ遺跡	群馬	高崎市	古墳時代後期	1	10号住居跡 (竪穴)・床面	土師器(坏・高坏)	286
252	熊野堂遺跡	群馬	高崎市	弥生時代後期後葉	1	15号住居址	甕・高坏・鉢	287

				～古墳時代初頭		(竪穴)・炉跡内		
				弥生時代後期中葉前後	1	36号住居址(竪穴)	壺・台付甕	
				古墳時代後期	1	185号住居址(竪穴)	土師器(坏・高坏・鉢)、有孔円板ほか	288
				古墳時代後期	1	197号住居址(竪穴)	石器	
				古墳時代後期	1	215号住居址(竪穴)	甕・坏	
				弥生時代後期	1	240号住居址(竪穴)	甕・高坏・注口土器・台付甕・、石器ほか	
				奈良時代	1	4区27号住居址(竪穴)	甕ほか	
				古墳時代前期	2	4区1号方形周溝墓	土師器高坏ほか	
				不明	1	4号溝		
253	西浦北遺跡	群馬	高崎市	弥生時代後期	1	D1号住居跡(竪穴)	土器片	
254	後田遺跡	群馬	利根郡	古墳時代後期～終末期	1	SJ117(竪穴住居)		290
				古墳時代後期～終末期	1	包含層		
255	矢瀬遺跡	群馬	利根郡	縄文時代後期～代晚期	1	20号住居跡(竪穴)	鉢・壺	291
				不明	1	遺構外		
256	古立中村遺跡	群馬	富岡市	弥生時代	1	遺構外		292
257	阿曾岡・権現堂遺跡	群馬	富岡市	平安時代	1	45号住居跡(竪穴)	土師器(壺・甕・鉢)ほか	293
				古墳時代前期	1	1号墳後方部遺構 検出面	前方後円墳、部分的に赤彩、土師器(壺・甕)	
				古墳時代前期	1	Ⅲ区141号住居跡(竪穴)	土師器(甕・高坏・器台)	
258	一ノ宮押出遺跡	群馬	富岡市	弥生時代後期	1	31号住居跡 (竪穴)・床面	土師器(甕・壺)ほか	294
259	上丹生市子塚 山ノ上遺跡	群馬	富岡市	古墳時代中期	1	山ノ上8号住居(竪穴)	黒褐色、土師器(碗・甑)、土製品	295
260	中高瀬観音山遺跡	群馬	富岡市	古墳時代中期	1	205竪穴住居	弥生土器壺、石斧	296
				弥生時代後期	1	113竪穴住居	甕・壺・鉢、石鍬未成品ほか	
261	南蛇井増光寺遺跡	群馬	富岡市	弥生時代後期	1	C71号住居跡(竪穴)	壺・甕・高坏ほか	297
				弥生時代後期	1	C116号住居跡(竪穴)	壺・甕・台付甕	
				弥生時代後期	1	DS103号住居跡(竪穴)	甕・鉢・高坏ほか	
				古墳時代後期	1	DS97号住居跡(竪穴)	土師器甕	298
262	日影平遺跡	群馬	沼田市	弥生時代後期	1	4号住居(竪穴)・覆土	弥生土器甕	299
				弥生時代後期	1	6号住居(竪穴)・床面	弥生土器(鉢・甕)、石器、土製紡錘車	
				弥生時代後期	1	26号住居(竪穴) 貯蔵穴内	弥生土器注口鉢ほか	
263	石墨遺跡	群馬	沼田市	古墳時代前期	1	B区19号住居址 (竪穴)・覆土	土師器(甕・鉢・甑)ほか、焼失住居	300



				不明	2	遺構外		
264	向田遺跡	群馬	沼田市	古墳時代	1	4号住居跡(竪穴) 覆土	赤彩、土師器(埴・器台)ほか	301
265	下川田平井遺跡	群馬	沼田市	弥生時代後期 樽式期	2	12号住居跡(竪穴)	弥生土器壺、土玉ほか	302
				弥生時代後期 樽式期	1	27号住居跡(竪穴)	弥生土器(甕・台付甕)	
266	下清水遺跡	群馬	沼田市	古墳時代前半以前	1	包含層	縄文時代中期の竪穴住居に流れ込んでいる	303
267	戸神諏訪遺跡	群馬	沼田市	古墳時代前期	1	31号住居跡(竪穴)	土師器(鉢・高坏・甕)ほか	304
268	諏訪平遺跡	群馬	沼田市	古墳時代	1	包含層		305
269	上落合岡遺跡	群馬	藤岡市	古墳時代後期	1	H-55号住居 (竪穴)・床面	土師器(坏・高坏・鉢・甕)、 須恵器(坏蓋・坏身・高坏)、鉄鎌	306
270	緑埜地区遺跡群	群馬	藤岡市	古墳時代中期・和泉期後半	1	LH-14(竪穴住居)	高坏・壺・甕・甎・坏ほか	307
				不明	1	37トレンチ		
271	荒砥諏訪西遺跡	群馬	前橋市	古墳時代前期	1	3区 48号住居 (竪穴)・覆土	土師器(鉢・甕・高坏・壺・S字甕)	308
272	内堀遺跡群	群馬	前橋市	古墳時代後期	1	B区 H-12 (竪穴住居)・覆土	土師器(坏・甎)	309
				古墳時代後期	1	B区 H-14 (竪穴住居)・覆土	土師器(甕・坏・高坏)	
				古墳時代前期前後 As-C 降下前後	1	H-45号住居址(竪穴)	土師器(高坏・甕・壺)	310
273	横俵遺跡群	群馬	前橋市	古墳時代前期	1	H-19(竪穴住居)	高坏・鉢	311
274	下縄引遺跡	群馬	前橋市	古墳時代前期	2	包含層		312
275	B-22号遺跡 (土呂陣屋跡)	埼玉	大宮市	縄文時代後期	1	1号住居跡(竪穴)	鉢	313
276	三崎台遺跡	埼玉	大宮市	弥生時代後期	1	第37号住居跡 (竪穴)・貯蔵穴	壺、台付甕、小形甕	314
277	大宮市B-105号 遺跡	埼玉	大宮市	古墳時代後期	1	12号住居(竪穴)	土玉	315
278	大宮公園内遺跡	埼玉	大宮市	古墳時代中期	1	2号住居址(竪穴)		316
279	後谷遺跡	埼玉	桶川市	縄文時代後期～晩期	4	包含層		317
280	坊荒句北遺跡	埼玉	春日部市	縄文時代	1	包含層		318
281	猿貝北遺跡	埼玉	川口市	不明	1	包含層		319
282	戸崎前遺跡	埼玉	北足立郡	古墳時代前期	1	第67号住居跡(竪穴)		320
283	築道下遺跡	埼玉	行田市	古墳時代後期～奈良時代	1	第150号住居跡 (竪穴)	坏、ハソウ、甕	321
				古墳時代後期～奈良時代	1	AD-19G包含層		
284	下田町遺跡	埼玉	熊谷市	古墳時代終末	1	第32号住居跡(竪穴)	土師器(坏・鉢・甕)	322
				奈良時代	1	第85号住居跡(竪穴)	土師器(坏・皿・甕)須恵器(坏・壺)	323

				古墳時代後期	1	第173号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・甑)、腕輪形石製品、白 玉	324
				古墳時代前期	1	第174号住居跡 (竪穴)	土師器(器台・台付甕)	
285	前原遺跡	埼玉	熊谷市	不明	1	包含層		325
286	用土・平遺跡	埼玉	熊谷市	弥生時代中期	1	7号竪穴住居跡	磨石 石鏃 石錘 土器	326
287	木村遺跡	埼玉	さいたま市	古墳時代後期	1	7号住(竪穴住居)	坏、高坏	327
				不明	1	包含層		328
288	上大久保新田遺跡	埼玉	さいたま市	古墳時代前期 五領式期	1	第20号住居跡(竪穴)	壺、高坏、器台、紡錘車ほか	329
289	上野田西台遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代中期 宮ノ台式期	1	第15号住居址(竪穴)	壺	330
				弥生時代後期 弥生町式期	1	第16号住居址(竪穴)	壺	
290	北宿遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期	1	第97号住居跡(竪穴)	土製円板	331
291	馬場北遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代	1	第81号住居跡・貯蔵穴	壺、台付甕、矢柄研磨器、窪み石	332
				弥生時代後期	1	第5号住居跡(竪穴)	壺	333
				弥生時代後期	1	第9号住居跡 (竪穴)床面	壺	
292	前窪遺跡	埼玉	さいたま市	縄文時代後半	1	包含層		334
				縄文時代晩期中葉	2	谷		335
293	水深西遺跡	埼玉	さいたま市	縄文時代中期～後期	1	第4号住居跡(竪穴)	勾玉? 深鉢、打製石斧ほか	336
				不明	1	遺構外		
294	子野上遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期後葉	1	第8号住居跡(竪穴)	甕、壺	337
295	稻荷原遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期	1	第1号住居跡(竪穴)	壺、台付甕	338
296	須黒神社遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代	2	包含層		339
297	宮前遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	第7号住居跡(竪穴)	甕、高坏、壺	340
298	下野田本村遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期	1	第5号住居跡(竪穴)	甕、高坏、壺ほか	341
299	白幡中学校校庭内 遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	第1号住居跡(竪穴)	土製丸玉 手づくね土器手づくね土 器(皿)が、炉跡から出土しているた め炉の祭祀に関わる可能性あり。	342
300	大北遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代中期	1	第6号住居跡 (竪穴)炉跡内	壺、石器	343
301	大谷場小池下遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期後半	1	第2号住居跡(竪穴)	赤彩、壺、甕、高坏	344
302	下野田稻荷原遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期	1	第75号住居跡(竪穴)	壺、台付甕	345
303	側ヶ谷戸貝塚	埼玉	さいたま市	古墳時代前期前半	1	12号方墳跡・周溝		346
304	上野遺跡	埼玉	さいたま市	古墳時代後期	1	1号住(竪穴)	土玉と一緒にカマドに流入した状態 で出土。	347
305	馬込遺跡	埼玉	さいたま市	弥生時代後期後半	1	第6号住居跡址(竪穴)	土器	348
306	中小坂市駅	埼玉	坂戸市	古墳時代後期	1	B遺構(竪穴建物)	土器	349
307	稻荷前遺跡	埼玉	坂戸市	古墳時代前期	1	C区4号住居跡	表面赤彩、甕、高坏、壺、鉢、坏	350

						(竪穴)・周溝		
308	桑原遺跡	埼玉	坂戸市	古墳時代後期	1	第 80 号住居跡(竪穴)	坏、甕	351
309	木曾免遺跡	埼玉	坂戸市	不明	1	包含層		352
310	西原大塚遺跡	埼玉	志木市	弥生時代末葉	1	182 号住居跡(竪穴)	壺、甕	353
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	190 号住居跡(竪穴)	土器、土錘	
				古墳時代初頭	1	17 号方形周溝墓	土器ほか	
				弥生時代後期後半 ～古墳時代前期前半	1	33 号住居跡(竪穴)	甕、壺	354
311	城山遺跡 第 60 地点	埼玉	志木市	古墳時代後期	3	224 号住居跡 竪穴住居	土製鏡 土師器(坏身・高坏・甕)須 恵器甕 他土製勾玉片 1 点出土。	355
312	東池総田遺跡	埼玉	草加市	古墳時代前期	1	包含層		356
313	下平遺跡	埼玉	秩父郡	縄文時代中期～晩期	3	A区包含層		357
314	鍛冶谷・新田口遺跡	埼玉	戸田市	古墳時代前期 五領式期	1	第 21 号方形周溝墓	鉢	358
				古墳時代前期	1	第 70 号土坑		
315	久台遺跡	埼玉	蓮田市	古墳時代前期	1	SR-1 方形周溝墓	壺	359
				不明	1	I-5 包含層		
316	雅楽谷遺跡	埼玉	蓮田市	縄文時代後期 ～縄文時代晩期	1	包含層		360
317	代正寺遺跡	埼玉	東松山市	古墳時代前期	1	第 26 号住居跡	壺、高坏	361
				古墳時代前期	1	第 55 号住居跡	壺、高坏、台付甕ほか	
				不明	1	包含層		
318	大西遺跡	埼玉	東松山市	弥生時代～古墳時代	1	第 8・9 号住居跡(竪穴)	高坏、甕、壺	
319	岩鼻遺跡	埼玉	東松山市	古墳時代前期	1	3 号住居跡(竪穴)	壺、高坏、石錘、他に土製勾玉片 1 点有り	362
				古墳時代前期	1	5 号住居跡(竪穴)	壺、甕、石鏃	
				古墳時代前期	1	7 号住居跡(竪穴)	壺、鉢、台付甕、小形壺、高坏、石 鏃ほか	
				古墳時代前期	1	9 号住居跡(竪穴)	甕、壺	
320	杉の木遺跡	埼玉	東松山市	弥生時代後期	1	第 4 号住居跡(竪穴)	壺、甕	363
				弥生時代後期	2	第 8 号住居跡(竪穴)	甕	
				古墳時代後期	1	周溝跡		364
321	船川遺跡	埼玉	比企郡	弥生時代後期	2	3 号住居址(竪穴)	弥生土器(甕・台付甕・高坏)	365
				弥生時代後期	1	4 号住居址(竪穴)	弥生土器甕	
322	蟹沢遺跡	埼玉	比企郡	弥生時代後期 吉ヶ谷式期	2	第 13 号住居跡(竪穴) ・P5	壺、高坏	366
323	大野田西遺跡	埼玉	比企郡	弥生時代後期	1	第 15 号住居跡(竪穴) ・貯蔵穴内	甕、高坏、鉢、壺	367
				弥生時代後期	4	第 19 号住居跡(竪穴)・	甕、壺、高坏、鉢ほか	

						覆土				
						弥生時代後期		2	第 20 号住居跡(竪穴)	壺、甕、高坏
						弥生時代後期		3	第 22 号住居跡(竪穴)・ 床面	甕、壺、高坏
324	月輪古墳群	埼玉	比企郡	古墳時代終末	1	6号墳・周溝	368			
325	尾田遺跡	埼玉	比企郡	古墳時代前期～中期	1	第 3 号住居跡(竪穴)床 面	壺、鉢、高坏	369		
326	屋田遺跡	埼玉	比企郡	古墳時代前期	1	第 3 号住居跡(竪穴)床 面	両耳壺	370		
327	砂田前遺跡	埼玉	深谷市	古墳時代後期	2	第 67 号住居跡(竪穴)	坏、埴、甕、鉢、壺、支脚、土錘	371		
328	新屋敷東遺跡	埼玉	深谷市	縄文時代晩期前葉	1	5号住居跡(竪穴)	深鉢	372		
329	柳町遺跡	埼玉	深谷市	古墳時代後期～平安時代	1	第 77 号住居跡(竪穴)	甕、鉢、坏	373		
330	砂田前遺跡	埼玉	深谷市	古墳時代後期	1	第 86 号住居跡(竪穴)	鉢、甕、甕	374		
331	堀東遺跡	埼玉	深谷市	縄文時代中期～後期	1	遺構外		375		
332	上敷免遺跡	埼玉	深谷市	古墳時代中期～平安時代	1	第 92 号住居跡(竪穴)		376		
333	焼谷遺跡	埼玉	深谷市	弥生時代後期	1	第 4 号住居跡(竪穴)	甕、壺、鉢、甕	377		
334	宮西遺跡	埼玉	深谷市	古墳時代中期～後期	1	第 1 号住居跡(竪穴)	土師器(高坏・壺・甕・小型壺)、紡 錘車ほか	378		
335	如意遺跡	埼玉	深谷市	古墳時代後期	1	第 128 号住居跡(竪 穴)・カマド内	坏、甕、壺、甕	379		
336	南通遺跡	埼玉	富士見市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	8号住居址(竪穴)	土器(台付甕・埴)、鉄鎌	380		
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	18号住居址(竪穴)	土器(台付甕・高坏)			
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	第 3 地点 239号住居址(竪穴)・復 土		381		
337	古井戸遺跡	埼玉	本庄市	縄文時代	1	包含層		382		
338	社具路遺跡	埼玉	本庄市	古墳時代後期	1	91号住(竪穴)		383		
339	今井川越田遺跡	埼玉	本庄市	古墳時代後期	1	247号住居跡(竪穴)	坏、甕、鉢、臼玉、土錘	384		
				古墳時代後期	1	322号住居跡(竪穴)	坏、埴、鉢、高坏、甕、小型甕、小 型壺、小型甕ほか			
340	夏目西遺跡	埼玉	本庄市	古墳時代後期	1	第 14 号住居跡(竪穴)	土師器(坏・鉢・高坏・壺・甕)、臼 玉、有孔円板	385		
341	九反田遺跡	埼玉	本庄市	古墳時代中期	1	1号住居跡(竪穴)	土師器(埴・高坏・小型甕)、土製管 玉	386		
342	真鏡寺後遺跡	埼玉	本庄市	古墳時代中期 和泉式期	1	第 11 号住居址(竪穴)	埴、高坏、甕、壺	387		
343	札之辻遺跡	埼玉	与野市	弥生時代後期	1	1号住居跡(竪穴)	台付甕、壺	388		
				弥生時代後期	1	18号住居跡(竪穴)	広口壺、壺			

				弥生時代後期	2	23号住居跡(竪穴)	壺、高坏、鉢	
				弥生時代後期	1	45号住居跡(竪穴)	壺	
344	午正山遺跡	埼玉	和光市	弥生時代中期末～後期初頭	1	第97号住居跡(竪穴)	弥生時代(甕・壺・台付甕)	389
				弥生時代後期末葉	1	第100号住居跡(竪穴)・床面	壺、甕、台付甕	
345	清和乙遺跡	千葉	旭市	古墳時代中期～後期	1	包含層		390
346	別当地遺跡	千葉	我孫子市	古墳時代後期	1	8号竪穴建物	土師器(坏・甕・甎)、棗玉ほか	391
347	日秀西遺跡	千葉	我孫子市	古墳時代後期	2	003A住居跡(竪穴)	紡錘車、土錘、鎌、小札ほか	392
				古墳時代後期	1	008住居跡(竪穴)	土器、鎌ほか	
				古墳時代後期	2	010住居跡(竪穴)	坏、蓋、切子玉ほか	
				古墳時代後期	1	017住居跡(竪穴)	坏、甕、釘、他に土製勾玉片有り 背に刻み目ある土製勾玉片有り	
				古墳時代後期	1	019B住居跡(竪穴)	土器、鎌、有孔円板	
				古墳時代後期	1	021住居跡(竪穴)	土器、鎌ほか	
				古墳時代後期	1	031F住居跡(竪穴)	坏、甕刀子、鎌、紡錘車、白玉、砥石ほか	
				古墳時代後期	2	037B住居跡(竪穴)	甕、鎌ほか	
				古墳時代後期	6	041D住居跡(竪穴)	土器、刀子、土錘ほか、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代後期	4	045B住居跡(竪穴)	甕、坏、土錘ほか	
				古墳時代後期	1	082C住居跡(竪穴)	土器ほか	
				古墳時代後期	3	087C住居跡(竪穴)	土器、他に土製勾玉片有り	
			不明	1	遺構外	他に土製勾玉片有り		
348	西台北遺跡	千葉	我孫子市	古墳時代終末期	3	5号住居跡(竪穴)	黒褐色、土師器(坏・埴・甕・甎)、刀子、支脚、他に土製勾玉片有り、精錬炉有り	393
349	大久保遺跡	千葉	我孫子市	不明	1	包含層		394
350	チアミ遺跡	千葉	我孫子市	古墳時代終末期～奈良時代	1	1号竪穴建物(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、須恵器(蓋・坏)、瓦、刀子、他に土製勾玉片有り	395
351	小滝涼源寺遺跡	千葉	安房郡	古墳時代前期～中期	2	SX01地点 祭祀遺構	湯簿、甕、高坏、器台、骨、剣形製品、管玉ほか	396
				古墳時代前期～中期	1	SX012地点 祭祀遺構	甕、壺、高坏、器台、鉄製品、管玉、石錘ほか	
352	長平台遺跡	千葉	市原市	弥生時代後期前半	1	37号竪穴住居跡	土器、砥石	397
353	叶台遺跡	千葉	市原市	古墳時代後期 鬼高式期	2	41(竪穴住居) 貯蔵穴内	土師器(甕・埴・坏・高坏)	398
354	加茂遺跡	千葉	市原市	古墳時代終末期 TK217～TK46	1	150号住居跡(竪穴)・床面	土師器(甕・坏)	399
355	唐崎台遺跡	千葉	市原市	古代以降	1	第9号溝状遺構	高台付坏、甕、土製管玉ほか	400

				不明	2	遺構外		
356	今富新山遺跡	千葉	市原市	不明	1	遺構外		401
357	片又木遺跡	千葉	市原市	古墳時代前期	1	第18号住居址 (竪穴)床面	土師器(甕・壺)	402
358	南岩崎遺跡	千葉	市原市	古墳時代中期	1	SI-64(竪穴住居)	高坏	403
359	草刈遺跡	千葉	市原市	不明	1	C144(不明遺構)	土師器(壺・埴・鉢)	404
				不明	2	C220(不明遺構)	土師器(坏・埴・高坏・甕)、須恵器 坏蓋、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代前期	1	E016(竪穴住居)	坏、鉢、高坏、甕、壺、臼玉ほか	405
				古墳時代前期	1	E009(竪穴住居)	高坏、台付甕、砥石	
				古墳時代後期	1	E042(竪穴住居)	坏、鉢、甕、刀子	
				古墳時代前期	2	E045(竪穴住居)	砥石、鉄鏃	
				不明	1	E099A・土坑	臼玉	
				古墳時代前期	1	E084(竪穴住居)	鉢、埴、高坏、甕、壺器台、高坏ほか	
				古墳時代	1	53号墳・掘り方	円墳	406
				古墳時代中期	1	G078(竪穴住居)	坏、高坏、甕、臼玉	
				古墳時代後期	1	G160(竪穴住居)	土師器坏、須恵器(坏・甕)	
				古墳時代後期	1	G034(竪穴住居)	鉢、高坏、甕、鉄鏃、紡錘車ほか	
				古墳時代中期	1	G217(竪穴住居)	高坏、甕、臼玉、丸玉、紡錘車	
				古墳時代後期	1	J011(竪穴住居)	坏、高坏、甕	407
				古墳時代前期	1	J214(竪穴住居)	焼失住居、壺、鉢	408
				弥生時代後半	1	K026(竪穴住居)	甕、壺、埴	
				古墳時代前期	1	K027(竪穴住居)	壺、埴、高坏、甕	
				古墳時代前期	1	K039A(竪穴住居)	鉢、壺、埴、高坏、埴、管玉ほか	
				古墳時代前期	1	K053(竪穴住居)	鉢、壺、甕、高坏、	
				古墳時代後期	3	K073(竪穴住居)	須恵器坏、土師器(坏・鉢)	
				弥生時代後半	1	K181(竪穴住居)	壺、甕	
				古墳時代後期	1	K324(竪穴住居)	高坏	
				古墳時代前期	1	K325(竪穴住居)	甕	
				弥生時代後期	1	K403(竪穴住居)	壺、甕	
				弥生時代後期	1	K486(竪穴住居)	焼失住居、壺、甕、高坏	
				弥生時代後期	1	K532(竪穴住居)	焼失住居、壺、甕、高坏	
				弥生時代後期	1	K537(竪穴住居)	壺、鉢、甕	
				弥生時代後期	1	K544(竪穴住居)	鉢	
				古墳時代後期	1	K591(竪穴住居)	焼失住居、須恵器(高坏・坏)、土師器(坏・甕)ほか	
				古墳時代前期	1	70号跡(竪穴住居) 炉跡内	土師器(甕・埴・器台)	409

				弥生時代後期	1	236A 号址(竪穴)	甕	410
				弥生時代後期	1	443 号址(竪穴)	壺	
				古墳時代	1	265 号址(竪穴)	甕、鉢、高坏	
				古墳時代前期	1	24 号方形周溝墓	埴 二重口縁壺	411
360	中永谷遺跡	千葉	市原市	古墳時代	1	42 号住居跡(竪穴)	土器	412
361	大厩遺跡	千葉	市原市	弥生時代中期後半	1	Y-14 号址(竪穴住居)	弥生土器(壺・深鉢・甕)、石器	413
				弥生時代中期後半	1	Y-17 号址(竪穴住居)	矢予時(甕・深鉢)	
				弥生時代中期後半	1	Y-38 号址(竪穴住居)	土製円板 土製支脚 壺 鉢 ミニチュア土器	414
362	御林跡遺跡	千葉	市原市	古墳時代初頭 庄内式期	1	246 号遺構(竪穴住居)	土師器(甕・埴・高坏・鉢)、弥生土器 ほか	415
363	菊間深道	千葉	市原市	古墳時代～平安時代	2	トレンチ内		416
364	市原条理制遺跡	千葉	市原市	古代～中世	1	包含層		417
365	村上遺跡	千葉	市原市	不明	1	包含層		418
366	山田橋大山台遺跡	千葉	市原市	弥生時代後期	2	33 号竪穴(竪穴住居)	壺、高坏ほか	419
				弥生時代後期	1	64 号竪穴(竪穴住居)	壺、甕	
				弥生時代後期	1	115 号竪穴(竪穴住居)	壺、甕、高坏、埴、他に土製勾玉片有り	
367	山田橋表通遺跡	千葉	市原市	弥生時代後期後半	1	030 号跡(竪穴住居)	壺、鉢ほか	420
				弥生時代後期後半	1	033 号跡(竪穴住居)	他に土製勾玉片有り	
				弥生時代～古墳時代	1	包含層		
368	小田向原遺跡	千葉	市原市	古墳時代前期	1	16 号遺構(竪穴住居)	坏	421
369	松崎Ⅱ遺跡	千葉	印西市	古墳時代前期	1	SI-034(竪穴住居)	甕、台付甕、壺、高坏	422
				古墳時代前期	1	SI-035(竪穴住居)	甕、台付甕、壺、鉢	
370	駒形北遺跡	千葉	印西市	古墳時代中期～後期前半	3	3 号住居跡(竪穴)	黒色処理?土師器(坏・甕)、土玉	423
371	式卜込遺跡	千葉	印西市	古墳時代	1	SI001(竪穴住居)	土師器甕、砥石	424
				古墳時代	1	SI003(竪穴住居)	土師器(壺・高坏・坏)	
372	宮内遺跡	千葉	印西市	弥生時代後期	2	1号住居跡(竪穴)・床面	小形甕、甕、小形壺、壺、土玉ほか	425
				奈良時代	1	26 号住居跡(竪穴)・覆土	土師器(小形甕・坏)	
373	古高浅間古墳	千葉	印西市	弥生時代後期	1	4 号住居跡(竪穴)	弥生土器(甕・壺)	426
				不明	1	遺構外		
374	油作第1遺跡	千葉	印西市	古墳時代後期	3	16 号住居址 竪穴住居	坏 鉢 甕 土製管玉 臼玉ほか	427
				古墳時代後期	2	17 号住居址 竪穴住居	壺 甕 土製紡錘車 丸小玉 釘 刀子 鉄滓	
375	駒込遺跡	千葉	印旛郡	古墳時代後期	4	第 21 号住居址(竪穴)	土師器(坏小形甕)、土玉、臼玉	428
				古墳時代後期	2	第 29 号住居址(竪穴)・床面	土師器(坏・鉢)、土玉、紡錘車ほか	
				古墳時代後期	1	第 36 号住居址	土師器(坏・甕)、須恵器蓋、石鏃ほか	

						(竪穴)・覆土	か	
				古墳時代後期	2	第41号住居址 (竪穴)・覆土	土師器高坏、土玉ほか	
				古墳時代後期	1	第55号住居址 (竪穴)・覆土	子持ち勾玉の一部?土師器(甕・ 坏)ほか	
				古墳時代後期	3	第60号住居址 (竪穴)・床面	土師器坏、土玉	
376	油作第2遺跡	千葉	印旛郡	古墳時代後期	1	第43号住居址(竪穴)	土師器坏、臼玉	
				古墳時代後期	1	第89号住居址 (竪穴)・床面	土師器(坏・甕・鉢・高坏)	
				古墳時代後期	1	第115号住居址 (竪穴)・覆土	土師器坏ほか	
377	大畑I遺跡	千葉	印旛郡	古墳時代終末期	1	SI-9(竪穴住居)	坏、高坏、甕、甌	429
				古墳時代終末期	7	SI-13(竪穴住居)	坏、甌	
				古墳時代終末期	1	SI-49(竪穴住居)	坏、高坏、埴、埴、甕ほか	
				古墳時代終末期	1	SI-54(竪穴住居)	土師器(甕・坏)、須恵器(つき・ 蓋)、支脚、	
378	酒直遺跡	千葉	印旛郡	古墳時代後期	2	第2地点 031号住居址 (竪穴)	坏 壺 土玉 鉄器	430
				古墳時代後期	3	第2地点 061号住居址 (竪穴)カマド	坏 甕 土玉	
				古墳時代後期	1	第2地点 062号住居址 (竪穴)	坏 手づくね土器 土玉	
				古墳時代後期	1	第2地点 063号住居址 (竪穴)	坏 土玉	
				古墳時代後期	3	第2地点 067号住居址 (竪穴)	坏 壺 甕 高坏 手づくね土器 管 玉土玉	
				古墳時代後期	1	第3地点 007号住居址 (竪穴)	坏 甌 甕 手づくね土器 土玉 臼 玉	
				古墳時代後期	1	第3地点 064号住居址 (竪穴)	坏 高坏 壺 紡錘車 土玉	
379	尾上藤木遺跡	千葉	印旛郡	古墳時代後期	2	包含層		431
380	一本松遺跡	千葉	大網白里市	古墳時代後期～終末期	1	SI-19(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕)	432
				不明	1	遺構外		
381	台前遺跡	千葉	大網白里市	奈良時代～平安時代	1	H-019(竪穴住居)	土師器甕、須恵器長頸壺、刀子、 砥石ほか	433
382	池田丸山遺跡	千葉	大網白里市	古墳時代終末期	1	H-028(竪穴住居)	土師器(坏・甕・高坏)	434
383	猪ヶ崎遺跡	千葉	大網白里市	古墳時代後期～終末期	6	H-014(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、須恵器坏	435
384	大網山田台遺跡群	千葉	大網白里市	古墳時代後期～終末期	1	H-170(竪穴住居)	土師器(坏・高坏)、須恵器甕	436



				古墳時代後期～終末期	1	H-173(竪穴住居)	土師器(坏・埴・高坏・甕)、須恵器 坏	
				不明	1	H-174B(竪穴住居)		
				古墳時代後期～終末期	1	H-054(竪穴住居)	土師器(坏・鉢・埴・甕)	
				古墳時代後期～終末期	1	H-069(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・鉢・甕)	
385	大井東山遺跡	千葉	柏市	不明	1	包含層		437
				古墳時代後期	1	031(竪穴住居)	鉢、坏、甕、甌	
				古墳時代後期	1	034(竪穴住居)	土師器(坏・甕・壺・鉢)	
386	呼塚遺跡	千葉	柏市	古墳時代前期	1	24号住居跡 竪穴住居	器台 銅鏃 二次焼成あり。	438
				古墳時代前期	1	25号住居跡 竪穴住居	ミニチュア土器 壺 高坏 土玉 鉄鏃 軽石製品 鞆羽口 ほか	
				古墳時代前期	1	29号住居跡 竪穴住居	土玉 ミニチュア土器 土師器(甕 高坏・器台 埴)	
387	多古台遺跡群 No.3 地点	千葉	香取郡	不明	1	表採		439
388	高部宮ノ前遺跡	千葉	香取郡	古墳時代以降	1	包含層		440
389	小座ふちき遺跡	千葉	香取郡	古墳時代後期後半	1	9号跡(竪穴住居)	土師器坏	
390	境原遺跡	千葉	香取市	古墳時代後期	2	SI-7(竪穴住居)	土師器(坏・鉢・甕)、須恵器(高坏・ ハソウ)、他に勾玉片有り	441
				古墳時代後期	2	SI-33(竪穴住居)	坏、甕、高坏	
				古墳時代後期	1	SI-41(竪穴住居)	坏、鉢、甕、	
				古墳時代後期	1	SI-323(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、紡錘車、土錘	
391	地々免遺跡	千葉	香取市	古墳時代後期	1	SI-10(竪穴住居)	土師器(坏・甕・高坏)	442
				古墳時代後期	1	SI-41(竪穴住居)	土師器	
				古墳時代後期	1	SI-179(竪穴住居)	土師器(坏・甕・高坏)	
				古墳時代終末	2	SI-210(竪穴住居)	土師器	
				古墳時代後期	4	SI-227(竪穴住居)	土師器	
				古墳時代後期	1	SI-436(竪穴住居)	土師器(坏・甕・鉢・高坏)	
				古墳時代後期	2	SI-338(竪穴住居)	土師器	
				不明	1	表採		
392	中ノ台遺跡	千葉	香取市	古墳時代後期以降	1	SI-5(竪穴住居)・覆土	土師器坏、紡錘車	443
393	阿玉台北遺跡	千葉	香取市	古墳時代後期	1	A 地点 006 号墳	方墳、刀装具、土師器(甕・高坏)、 須恵器長頸壺、紡錘車ほか	444
394	吉原三王遺跡	千葉	香取市	古墳時代終末期	1	016号住居(竪穴)	土師器坏	445
395	二重山遺跡	千葉	木更津市	古墳時代中期	1	SI-1(竪穴住居)	高坏、埴、小形壺ほか	446
396	諏訪谷横穴墓群	千葉	木更津市	古墳時代後期～終末期	1	4号墓	管玉、ガラス玉、切子玉ほか	447
397	鹿島塚A遺跡	千葉	木更津市	古墳時代前期	1	130号址 (竪穴住居)・覆土	埴	448

398	中郷谷遺跡	千葉	木更津市	古墳時代前期	1	011号址(竪穴住居)	壺、甕、砥石	449
399	マミヤク遺跡	千葉	木更津市	古墳時代後期	1	北西斜面部土器集積	土師器(甕・鉢)、須恵器(ハソウ・甕)、鉄製品、ほか	450
400	東谷古墳群	千葉	木更津市	古墳時代終末期	1	第4号墳 周溝内土壇内	円墳	451
401	東谷遺跡	千葉	木更津市	古墳時代中期	1	SI239(竪穴住居)	土師器(坏・甕・甗)、ガラス玉	452
				弥生時代後期	1	81号住居址(竪穴)	土器	
				弥生時代後期	1	301号住居址(竪穴)		
				弥生時代後期	1	204号住居址(竪穴)		453
				古墳時代前期	1	357号住居址(竪穴)	土器	
				古墳時代前期	1	64号住居址(竪穴)	土器、鏡片、土玉、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代前期	1	55号住居址(竪穴)	高坏ほか	454
				古墳時代前期	1	167号住居址(竪穴)	高坏ほか	
402	銭賦遺跡	千葉	木更津市	古墳時代後期	2	012号住居(竪穴) カマド・柱穴付近	土師器(坏・鉢・甕・甗)、須恵器(坏・甕)、支脚	455
				古墳時代後期	1	026号住居(竪穴)	土師器(坏・高坏・鉢・甕)、刀子、支脚ほか	
403	蓮華寺遺跡	千葉	木更津市	古墳時代前期	1	054号址(竪穴住居)	土師器(壺、甕、器台)	456
404	千束台遺跡	千葉	木更津市	古墳時代中期	1	祭祀遺構	坏、甕、埴、高坏、ハソウ、鉢、鉄鏃、鉄鎌、刀子、管玉、臼玉、剣形製品、双孔円板、土製鏡 ほか	457
405	塚原古墳群	千葉	木更津市	古墳時代後期	1	22号墳・周溝	円墳、ガラス大玉、刀子	458
406	山神遺跡	千葉	木更津市	弥生時代後期	1	SI-53(竪穴住居)	大形甕、壺	459
407	寺沢出戸遺跡	千葉	君津市	古墳時代後期	5	SI013(竪穴住居)	土師器坏、土製鏡	460
408	郡遺跡群	千葉	君津市	古墳時代後期～平安時代	1	SD71 川跡	土器 木製品 金属類 種子類 動物遺体 ほか 祭祀の可能性。	461
				古墳時代後期～中世	1	SD469 川跡	ミニチュア土器 手づくね土器 木製品 紡錘車 剣形遺物 砥石 須恵器坏 土師器、須恵器 ほか 祭祀の可能性。	
409	泉遺跡	千葉	君津市	古墳時代後期	1	1号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・壺)、須恵器甕、臼玉ほか	462
410	江原台第1遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代	1	44住(竪穴住居)	坏、甕、甗、臼玉	463
				古墳時代	1	39住(竪穴住居)	坏、甕、支脚、丸玉	
				古墳時代	1	69住(竪穴住居)	土師器(埴・高坏・甕・坏)、須恵器蓋、素玉、臼玉	
411	飯合作遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	2	包含層		464

412	飯重新畑遺跡	千葉	佐倉市	弥生時代後期前半	1	8号住居址(竪穴)・床面	土器	465
413	城次郎丸遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	011号住居址(竪穴)	土師器(坏・小形甕・甑)、須恵器ハ ソウ ほか 他に土製勾玉片が、カマド覆土から 出土	466
				弥生時代末葉	1	013号住居址(竪穴)	土師器(坏・埴・甑)、須恵器高台付 盤支脚ほか	
414	上座矢橋遺跡	千葉	佐倉市	弥生時代～古墳時代	1	包含層		467
				弥生時代～古墳時代	1	030号住居址・覆土		
415	鎌木諏訪尾余遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	KI-3(17号住居址(竪 穴))	坏、有孔円板	468
416	木野子大山遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代終末期	1	35号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、刀子、石製品	469
417	間野台遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	3号住居址(竪穴)	坏、甑	470
				弥生時代後期	1	16号住居址(竪穴)	甕、臼玉、紡錘車	
				不明	1	住居(竪穴)		
				古墳時代後期～終末期	1	25号住居址(竪穴)		
				古墳時代後期～終末期	2	46号住居址(竪穴)	土師器(坏・高坏・小形甕)、須恵器 坏、支脚ほか	
418	南広遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	竪穴住居 001	土師器坏、管玉、鉄鎌ほか	471
				古墳時代後期～終末期	7	竪穴住居 025	坏、甑、鉄鎌ほか	
				平安時代	1	竪穴住居 026	土師器(坏・高台付坏・甕)須恵器 (坏・壺)、鉄鎌、砥石 ほか	
419	高岡大山遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	228号住居址(竪穴)・床 面	土師器(甕・甑)、須恵器蓋、紡錘 車、鉄製穂積み具	472
				古墳時代後期	1	242号住居址(竪穴)	土師器(坏・甕)	
				奈良時代	1	442号住居(竪穴)・覆土	須恵器坏、土師器甕、刀子、釘	473
420	タル力作遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後 鬼高式期	1	第4号住居跡(竪穴)	埴、坏、紡錘車、支脚	474
				古墳時代後期 鬼高式期	3	第43号住居跡(竪穴)	甕、坏	
421	太田長作遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	6号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏・甕)、紡錘車ほ か、他に土製勾玉片有り	475
422	大崎台遺跡	千葉	佐倉市	弥生時代中期後半	1	第18号住居址(竪穴)	黒色、土器(甕・坏)、砥石	476
423	吉見台遺跡 A 地点	千葉	佐倉市	縄文時代	1	包含層		477
424	臼井南遺跡	千葉	佐倉市	弥生時代後期	1	第1号住居址 (竪穴)・床面	鎌、土器、土製紡錘車	478
425	内田端山越遺跡	千葉	佐倉市	古墳時代後期	1	4号住居・8HA(竪穴)	土師器(坏・高坏・甕)、 須恵器(坏・高台付坏)	479
426	岩富漆谷津遺跡	千葉	佐原市	古墳時代後期	1	003住(竪穴住居)	土玉、	480
				古墳時代後期	1	032住(竪穴住居)	臼玉、剣形製品、紡錘車	

				古墳時代後期	1	066 住(竪穴住居)	他に土製勾玉片有り	
				古墳時代中期	3	073 住(竪穴住居)	工房? 有孔円板、剣形製品、棗玉、他に勾玉片有り	
				古墳時代後期	2	078 住(竪穴住居)	鉄鏃、刀子、臼玉	
				古墳時代後期	1	089 住(竪穴住居)	工房? 剣形製品、臼玉、棗玉、土玉	
				古墳時代後期	1	114 住(竪穴住居)	刀子、臼玉、棗玉、他に勾玉片有り	
				古墳時代後期	1	114 住(竪穴住居)	鉄鏃、臼玉、有孔円板、鎌、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代後期	4	120 住(竪穴住居)	鉄鏃、臼玉、有孔円板、鎌、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代後期	3	134 住(竪穴住居)	刀子、有孔円板、剣形製品、管玉、砥石、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代後期	1	144 住(竪穴住居)	刀子ほか	
				古墳時代後期 鬼高式期	2	155 住(竪穴住居)	鉄鏃、土玉	
				古墳時代後期 鬼高式期	1	161 住(竪穴住居)	鎌、土玉	
				奈良・平安時代	1	150 住(竪穴住居)	刀子、有孔円板	
				古墳時代	1	01 号溝状遺構		
				不明	1	包含層		
427	伊地山遺跡	千葉	佐原市	古墳時代終末期	1	SI-46(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕)、須恵器(蓋、横瓶・甕)	481
428	古内遺跡	千葉	山武郡	古墳時代終末期	2	H-004(竪穴住居)・覆土	土師器(坏・埴・甕)、砥石	482
429	右京塚遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期～平安時代	1	H009(竪穴住居)	土師器(坏・埴・甕)	483
430	井森戸遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期	1	SI006(竪穴住居)・覆土	土師器(坏・甕・高坏)、須恵器坏ほか	484
				古墳時代後期	1	SI007(竪穴住居)・覆土	土師器(坏・高坏・甕)	
				古墳時代後期	1	SI009(竪穴住居)・覆土	土師器(坏・甕)、支脚	
431	御田台遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期～終末期	1	H-004(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、鉄製品	485
				古墳時代後期～終末期	1	004 号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・高坏)、支脚	486
432	三田遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期～終末期	1	009 号址(竪穴住居)・覆土	坏、高坏、双孔円板、砥石	487
				古墳時代後期～終末期	1	055 号址(竪穴住居)	高坏、坏、甕、有孔円板、砥石	
				古墳時代後期～終末期	1	060 号址(竪穴住居)	立て替え有り、高坏、坏、甕、紡錘車、管玉、支脚	
				古墳時代後期～終末期	1	084 号址(竪穴住居)	坏、甕	
				古墳時代後期～終末期	1	092 号址(竪穴住居)	坏、高坏、甕、土玉	
				古墳時代後期～終末期	2	103 号址(竪穴住居)	坏、甕、甌	
433	仲ノ台遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期	2	5 号住居址(竪穴)	甕、高坏、甌、敲き石ほか	488

				古墳時代後期	1	13号住居址(竪穴)	高坏、坏、甕ほか	
434	小原子遺跡群	千葉	山武郡	奈良時代	1	11号住居址(竪穴)	高坏、坏、甕	489
				古墳時代後期 鬼高式期	3	29号住居址(竪穴)	坏、甕、須恵器甕、支脚、紡錘車、刀子	
				古墳時代後期 鬼高式期	1	180号住居址(竪穴)	坏、高坏、甕、支脚	
				古墳時代後期 鬼高式期	1	180号住居址(竪穴)	坏、高坏、甕、支脚	
435	田向城跡	千葉	山武郡	古墳時代終末期	1	004住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)	490
436	神山谷遺跡	千葉	山武郡	平安時代	1	SI-25B(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、支脚	491
437	長倉宮ノ前遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期～終末期	2	H054(竪穴住居)	土師器(甕・坏)、刀子ほか	492
				古墳時代後期～終末期	1	H117(竪穴住居)	土師器(坏・埴・甕)、白玉ほか	
438	長倉鍛冶屋台遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期	1	H-007(竪穴住居)	土師器(坏蓋・甕・埴)、支脚、廃絶後焼却	493
				古墳時代終末期	1	H-047(竪穴住居)	土師器(坏・甕・甗)、鉄製品ほか	
				古墳時代後期	2	H-088(竪穴住居)	土師器(坏・甕・高坏)	
				古墳時代後期	1	H-093(竪穴住居)	土師器(坏・鉢・甕)、支脚ほか	
				中世	1	D-211・土坑	土師器(鉢・甕・壺・甗)、陶器ほか	
439	遠山爪ヶ作谷遺跡	千葉	山武郡	古墳時代後期	2	H-003(竪穴住居)	土師器(坏・甕・甗)	494
440	久保谷遺跡	千葉	山武市	古墳時代中期～後期	4	003住居跡(竪穴)	土師器坏、須恵器蓋坏	495
				古墳時代中期～後期	1	075住居跡(竪穴)	土師器甕、須恵器甕	
441	栗焼棒遺跡	千葉	山武市	古墳時代終末期	7	8号住居跡(竪穴)	土師器(高坏・甕・坏)	496
				古墳時代終末期	4	9号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏)	
				古墳時代終末期	1	11号住居跡(竪穴)	高坏、甗	
				古墳時代終末期	1	16号住居跡(竪穴)	須恵器高坏、鉄鏃、金環	
				古墳時代終末期	2	27号住居跡(竪穴)	高坏、坏ほか	
				古墳時代終末期	2	36号住居跡(竪穴)	埴ほか	
442	08004 神々廻東発込遺跡	千葉	白井市	弥生時代後期	1	001号住居跡(竪穴)	甕	497
				不明	1	遺構外		
443	復山谷遺跡	千葉	白井市	古墳時代後期	4	044(竪穴住居)	甕、支脚	498
				古墳時代	1	060(竪穴住居)		
444	柳台遺跡	千葉	匝瑳市	古墳時代後期 鬼高期	5	166号址(竪穴住居)	土製鏡 土製管玉 土製紡錘車 坏 ミニチュア土器	499
				奈良・平安時代	1	137号址(竪穴住居)	土製丸玉 土器	
445	美生遺跡群	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期	1	91号住居跡(竪穴)	甕、高坏、器台	500
				古墳時代前期	1	203号住居址(竪穴)	壺、鉢、台付甕	
				古墳時代前期	1	第7号住居跡(竪穴)	甕、壺	501
446	文脇遺跡	千葉	袖ヶ浦市	弥生時代後期 ～古墳時代初頭	2	58号住居址(竪穴)	埴、甕、壺	502
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	161号住居址 (竪穴)・床面	鉢、壺	

				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	183号住居址 (竪穴)・床面	甕、鉢	
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	6号方形周溝墓・覆土	壺、甕ほか	
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	36号溝		
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	21号溝		
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	26号溝・覆土		
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	46号溝・覆土		
				弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	包含層		
				古墳時代前期	1	408号住居址	鉢 広口壺 甕 鉄製品 ほか	
447	東上泉遺跡	千葉	袖ヶ浦市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	SI-045(竪穴住居)	土師器壺	503
448	金井崎遺跡	千葉	袖ヶ浦市	不明	4	包含層		504
449	上大城遺跡	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期	1	87号住居(竪穴)	甕、壺、鉢、高坏、器台ほか、	505
				古墳時代前期	1	SI-144(竪穴住居)	甕、壺	
				古墳時代前期	1	SI-146A(竪穴住居)	甕	506
				不明	1	遺構外		
450	三ツ田台遺跡	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期	1	SI013号遺構 (竪穴住居)	壺、器台	507
451	二又堀遺跡	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期～中期	1	SI027(竪穴住居)	土師器(壺・甕・高坏)	508
452	尾畑台遺跡	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期～中期	1	SI036(竪穴住居)	土師器(高坏・壺)ほか	509
453	境遺跡	千葉	袖ヶ浦市	弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	第11号住居址(竪穴)	壺、埴、甕、高坏ほか	510
454	境No2遺跡	千葉	袖ヶ浦市	弥生時代後期前葉	1	242号址(竪穴住居)	甕、壺ほか	511
455	寒沢遺跡	千葉	袖ヶ浦市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	SI028(竪穴住居)	他に、勾玉片有り	512
456	下向山遺跡	千葉	袖ヶ浦市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	28号住居址 (竪穴)・床層	焼失住居、はち、甕	513
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	4	42号住居址(竪穴)・床 面	壺、甕、鉢、土製管玉	
457	関畑遺跡	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期	1	1-057(竪穴住居)	壺、鉢	514
458	谷ノ台遺跡	千葉	袖ヶ浦市	古墳時代前期	1	SI001(竪穴住居)	廃絶後に火使用、甕、高坏、鳥形 土製品	515
459	東田遺跡	千葉	館山市	古墳時代後期	1	ASH-1A(竪穴住居)	土師器小形甕、刀子ほか	516

				古墳時代後期	1	A区遺構外		
				古墳時代後期	4	BSI-2(竪穴住居)	土師器甕、土玉、円板、鉄鏃、 他に土製勾玉片あり	
				古墳時代後期	2	BSI-8(竪穴住居)	土師器(高坏・甕)、刀子ほか	
				奈良時代	3	BSB-3(掘立柱建物)	土師器(高坏・甕)、刀子ほか	
				古墳時代後期～終末期	9	BSD-2・溝状遺構	他に土製勾玉片有り	
				古墳時代	1	CSD-7・溝状遺構	土師器甕	
460	つるとば遺跡	千葉	館山市	不明	1	不明		517
461	東長田谷遺跡	千葉	館山市	古墳時代終末期	18	包含層		
462	魚尾山遺跡	千葉	館山市	不明	4	不明		
463	長須賀条里制遺跡	千葉	館山市	古墳時代	1	CSD-2a・2b・3 溝状遺構	祭祀、土器、紡錘車	518
				古墳時代	1	包含層		
				不明	1	E区遺構外		
464	沼つとるば遺跡	千葉	館山市	古墳時代終末期	1	トレンチ内	臼玉 鐸鈴 ほか	519
465	荒久遺跡	千葉	千葉市	古墳時代前期～中期	1	住居跡 108(竪穴)	坏、器台、高坏、壺ほか	520
				古墳時代前期～中期	2	住居跡 109(竪穴)	高坏、坏、壺、鉄鏃ほか	
466	榎作遺跡	千葉	千葉市	古墳時代終末期	1	竪穴住居 036C	土師器(坏・甕)	521
				古墳時代終末期	4	竪穴住居 075	土師器(坏・甕・鉢)、紡錘車、支脚 ほか	
				不明	1	遺構外		
467	芳賀輪遺跡	千葉	千葉市	奈良時代・8世紀前半	1	第5号竪穴住居跡	土師器(坏・甕・鉢)、須恵器坏、支脚	522
468	東寺山石神遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期	1	59号住居址(竪穴)	坏・高坏	523
469	台畑遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期	1	24号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)	524
470	貝殻塚遺跡	千葉	千葉市	古代	1	A-005 (竪穴住居)・覆土	土師器(坏・甕)、土玉	525
				古代	1	A-009(竪穴住居)・覆土	土師器(坏・甕・甗)、刀子	
				縄文時代	1	C-028・土坑	土師器(坏・甕)	
471	牛尾外遺跡	千葉	千葉市	古墳時代	6	50号住居跡(竪穴)	坏、鉢、甕、須恵器蓋、鉄製品ほか	526
472	西屋敷遺跡	千葉	千葉市	古墳時代	1	021号跡(竪穴住居)	壺、甕、鉢、坏蓋	527
473	仁戸名遺跡	千葉	千葉市	古墳時代終末期	1	竪穴住居 003 カマド右袖付近	土師器甕、支脚、土錘	528
474	下田遺跡	千葉	千葉市	古墳時代終末期	1	第25号竪穴住居跡	須恵器坏、土師器(坏・甕)、鉄鏃ほか	529
				古墳時代終末期	1	第27号竪穴住居跡	須恵器蓋、土師器(坏・高坏・甕)、 刀子、 土玉 ほか 他に土製勾玉片有り	
				古墳時代終末期	1	第33号竪穴住居跡	土師器坏、支脚	

475	上谷津第1遺跡	千葉	千葉市	古墳時代前期	1	12号住居跡(竪穴)	甕、壺、高坏	530
476	高品白跡遺跡	千葉	千葉市	古墳時代	1	3号住居跡(竪穴)	土師器(甕・坏)	531
				古墳時代	2	8号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏)、砥石ほか	
477	大戸作遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期 鬼高式期	1	12(010)号址(竪穴住居)	坏、甕、鉢	532
478	御塚台遺跡	千葉	千葉市	奈良時代	1	112号住居跡(竪穴)	土師器甕、須恵器高台坏、鉄製鎌	533
479	今台遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期	1	058号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏・甕)、管玉、丸玉、刀子、紡錘車	534
480	伯父名台遺跡	千葉	千葉市	古墳時代終末期	1	SB031(竪穴住居)	土師器(坏・甕)	535
				古墳時代終末期	1	SB032(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、須恵器坏蓋、紡錘車ほか	
481	南二重堀遺跡	千葉	千葉市	古墳時代終末期 ～奈良時代 真間式期	1	38号住居址(竪穴)	土器(器台・高坏)ほか	536
482	馬ノ口遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期～終末期	1	3号墳	方墳、壺、器台、土玉	537
483	有吉貝塚遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期～終末期	1	SB008 (竪穴住居)・床面	黒褐色、土師器(坏・高坏・甕・鉢)、 須恵器(坏・蓋)、砥石、支脚	538
				古墳時代後期	1	SB163 (竪穴住居)・床面	赤彩土師器(甕・高坏・甕・鉢)、 須恵器(坏・蓋)、刀子、鉄鏃	
				古墳時代終末期	1	SB202 (竪穴住居)・覆土	土師器(坏・壺・甕)、支脚	
				古墳時代後期	1	SB221 (竪穴住居)・覆土	黒褐色、土師器(坏・壺)、須恵器 蓋、支脚	
				古墳時代後期	1	SB222 (竪穴住居)・カマド内	赤彩、土師器(坏・甕・鉢)、鉄鏃、 支脚	
				古墳時代終末期	1	SB230 (竪穴住居)・床面	土師器(坏・鉢・甕)、須恵器(坏・ 蓋)、支脚	
				不明	1	遺構外	黒褐色	
484	高沢遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期	2	184号住居跡(竪穴)	坏、甕、支脚、砥石、ほか、 他に土製勾玉片有り	539
				古墳時代後期・	1	194号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)、須恵器甕	
				古墳時代後期	1	195号住居跡(竪穴) カマド内	坏	
				古墳時代後期	1	251号住居跡 (竪穴)・床面	須恵器坏蓋	
				古墳時代後期・6世紀代?	1	255号住居跡 (竪穴)・床面		
485	海老遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期	1	4号住居址跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)、土玉、紡錘車	540
486	奥房台遺跡	千葉	千葉市	古墳時代終末期～奈良時代	1	SI-11(竪穴住居)	土師器(甕・坏)、須恵器坏	541
				平安時代	1	SI-24(竪穴住居)	土師器(甕・坏)、須恵器(坏・甗)	



				平安時代	2	SI-37(竪穴住居)	土師器 坏	
				不明	1	SK-82・SX-1・不明遺構		
				不明	3	SX-2・不明遺構	土師器(坏・甕)、須恵器 甕	
487	上ノ台遺跡	千葉	千葉市	古墳時代後期～終末期	1	T-53 I・II 住居址 (竪穴)床面	土師器(甕・高坏・坏・埴)、白玉、紡 錘車、砥石 ほか	542
				古墳時代後期～終末期	4	W-46 住居址(竪穴)	土師器(坏・甕・壺)、耳環、支脚	
				古墳時代後期～終末期	1	2A-53 住居址 (竪穴)・復土	土師器(坏・壺・甕)、剣形製品、他 に勾玉片有り	543
				古墳時代後期～終末期	4	2A-53 住居址(竪穴) カマド東炭層	土師器(坏・壺・甕)、剣形製品、他 に勾玉片有り	
488	内野第1遺跡	千葉	千葉市	縄文時代	1	包含層		544
489	椎柴小学校遺跡	千葉	銚子市	古墳時代後期	1	SI-8(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、白玉 ほか	545
490	根畑遺跡	千葉	長生郡	弥生時代中期後半	1	10号住居跡(竪穴)	坏、甕、高坏、壺、土製品	546
				古墳時代前期～中期	1	12号住居跡(竪穴)	壺、高坏、甕、土製円板ほか	
				弥生時代中期後半	1	20号住居跡(竪穴)	甕、壺	
491	平蔵台遺跡	千葉	東金市	古墳時代	1	表採		547
492	久我台遺跡	千葉	東金市	古墳時代後期	1	SI63 住居(竪穴)	土師器(坏・甕)	548
				古墳時代後期	2	SI114 住居(竪穴)	土師器(埴・壺・甕)、須恵器坏、鉄 製品	
				古墳時代後期	1	SI157 住居(竪穴)	土師器(坏・埴)	
				奈良時代	1	SI9 住居(竪穴)	土師器(坏・甕)、須恵器坏、釘	
				平安時代	2	SI69 住居 (竪穴)・カマド周辺	土師器坏、須恵器坏	
				不明	1	SK498 土壌	中世?	
493	妙経遺跡	千葉	東金市	古墳時代後期	2	SI022(竪穴住居)	土師器(坏・甕・高坏)、支脚甕・高 坏・鉢)、須恵器大甕 ほか	549
				古墳時代後期～終末期	3	SI100(竪穴住居)	土師器(坏・高坏)、支脚	
				古墳時代後期	2	SI103(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・甕)、支脚	
				古墳時代終末期	2	SI107(竪穴住居)	土師器(坏蓋・坏・埴・鉢・高坏)、須 恵器坏蓋、支脚ほか	
494	尾亭遺跡	千葉	東金市	古墳時代終末期～平安時代	2	第 87 号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・高坏)、土製鏡、支 脚 ほか	
495	稲荷谷遺跡	千葉	東金市	古墳時代後期～平安時代	1	第 164(A・B)号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・高坏・鉢・甕)、鉄鎌、火 床有り	550
				古墳時代後期～平安時代	1	第 184(A・B・C)号住居 跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)、支脚、火床有 り、他に土製勾玉片有り	
				古墳時代後期～平安時代	1	第 186(A・B)号住居跡 (竪穴)	土師器(坏・埴・高坏・甕)、支脚	
				古墳時代後期～平安時代	1	第 188(A・B)号住居跡	土師器(坏・高坏・甕・甗)	

						(竪穴)	
				古墳時代後期～平安時代	1	第 374 号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・高坏・甑)ほか
				古墳時代後期～平安時代	1	第 370 号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏・甕)、須恵器(坏・ハソウ)、砥石ほか
496	滝東台遺跡	千葉	東金市	古墳時代後期～平安時代	1	H-118(竪穴住居)	土師器坏、須恵器蓋、他に土製勾玉片有り
				古墳時代後期～平安時代	1	H-138(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、土玉
497	油井古塚原遺跡	千葉	東金市	古墳時代後期～平安時代	1	H-034(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、焼失住居
				古墳時代後期～平安時代	2	H-058(竪穴住居)	土師器(坏・鉢・高坏・甕)、須恵器蓋、土玉
				奈良時代～平安時代	1	4号住居跡(竪穴)	坏、甕、甑、高台付坏ほか
498	稲荷谷津遺跡	千葉	富里市	古墳時代後期～終末期	3	5号竪穴住居跡・覆土	土師器(坏・高坏)
499	松ノ木台遺跡	千葉	富里市	古墳時代後期	3	3住(竪穴住居)・カマド内	土師器(甕・坏・高坏)、被熱を受けている。
500	市野谷宮尻遺跡	千葉	流山市	古墳時代前期	1	SI049(竪穴住居)	土師器(台付甕・器台・甕)
				古墳時代前期	1	SI087(竪穴住居)	土師器(器台・甕・台付甕・鉢)
501	上貝塚貝塚遺跡	千葉	流山市	不明	1	包含層	
502	三輪野山Ⅱ遺跡	千葉	流山市	古墳時代後期～終末期	1	004C号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、土玉、臼玉、鉄鎌
				古墳時代後期～終末期	1	014B号住居跡(竪穴)	須恵器(ハソウ・埴・坏身)
				古墳時代後期～終末期	2	045号住居跡(竪穴)	須恵器(台付甕・甕・坏)
503	町畑遺跡	千葉	流山市	奈良・平安時代	1	235号(竪穴住居)	土師器(坏・台付甕)
504	江地山遺跡	千葉	成田市	古墳時代	1	2区93号住居址	土師器(坏・甕)、須恵器坏
505	台方下平Ⅰ遺跡	千葉	成田市	不明	1	確認面	
				古墳時代後期	1	34号住居(竪穴)	土師器(坏・高坏・埴・甕)
				古墳時代後期～終末期	6	212号住居(竪穴)	紡錘車、有孔円板ほか
				古墳時代後期	9	234号住居(竪穴)	土師器(坏・高坏・甕)、須恵器高坏ほか
506	不光寺遺跡	千葉	成田市	古墳時代～中世	1	包含層	
507	畑ヶ田花山遺跡	千葉	成田市	古墳時代後期	1	D005号跡(竪穴住居)	土師器(坏・高坏・小形甕)、石鏃
508	菊水城主郭部	千葉	成田市	古墳時代後期	1	第17号住居址(竪穴住居)覆土	土師器甕
509	川栗館跡	千葉	成田市	古墳時代終末期	1	140号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・鉢)
				古墳時代	1	160号住居跡(竪穴)	全面赤彩、土師器(坏・高坏)、臼玉
				古墳時代終末期	1	187号住居跡(竪穴)	土師器(坏・高坏・甕)、須恵器坏
				古墳時代終末期	1	210号住居跡(竪穴)	土師器(坏・埴・甕)、管玉
				古墳時代終末期	1	253号住居跡(竪穴)	黒色処理、土師器(坏・甑)
				古墳時代	1	遺構外	
510	吉倉大久保遺跡	千葉	成田市	古墳時代終末期	1	4号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、石器

511	公津原Ⅱ遺跡	千葉	成田市	古墳時代前期	2	LoC40・016A 号址 (竪穴住居)・床面	甕、壺、埴、管玉ほか	565
512	小菅三ツ塚遺跡	千葉	成田市	古墳時代前期	1	4号住居跡(竪穴)・覆土	壺	566
513	南羽鳥中岫第1遺跡	千葉	成田市	古墳時代後期	1	38号住居跡(竪穴)	坏、高坏、甌	567
				古墳時代後期	1	57号住居跡(竪穴)	坏、甕、紡錘車、管玉	
				古墳時代後期	1	59号住居跡(竪穴)	坏、埴、高坏、甕、鉄鎌	
				古墳時代後期	1	150号住居跡(竪穴)	坏、甕、甌、土玉	
514	下方内野南遺跡	千葉	成田市	古墳時代終末期	1	52号建物跡(竪穴)	土師器(坏・甌)、土玉	568
				古墳時代終末期	2	54号建物跡(竪穴)	土師器(坏・甕・鉢)、須恵器高坏、 鉄製品、土玉 ほか	
515	名木大台遺跡	千葉	成田市	古墳時代後期	3	SI27(竪穴住居)・カマド 内	黒色処理?、土師器(甕・甌)、石鏝 ほか	569
516	名木不光寺遺跡	千葉	成田市	古墳時代後期	1	SI-12(竪穴住居)	坏、甕、高付	570
517	困護台遺跡群	千葉	成田市	古墳時代終末期	1	068号住居(竪穴)	土師器(坏・甕)	571
				古墳時代後期	1	072号住居(竪穴)	土師器(坏・甕・甌)	
				古墳時代後期～終末期	2	107号住居(竪穴)	土師器坏	
				古墳時代後期～終末期	1	218号住居(竪穴)	高坏、甕、甌	
518	関戸遺跡	千葉	成田市	古墳時代終末期	1	061号跡(竪穴住居)	甌、坏、甕、他に土製勾玉片有り	572
				弥生時代	1	70号跡(竪穴住居)	土器	
519	岩坂大台遺跡	千葉	富津市	弥生時代後期	1	第13号住居址(竪穴) 炉中出土	甕、高坏、壺、紡錘車	573
520	川島遺跡	千葉	富津市	弥生時代後期	1	SI-35(竪穴住居)		574
521	植ノ台遺跡	千葉	富津市	不明	1	包含層		575
522	打越遺跡	千葉	富津市	古墳時代前期	1	193号住(竪穴)	壺、鉢、高坏、器台、銅釧?	576
				古墳時代前期	1	203号住(竪穴)	焼失住居、甕、壺、鉢、高坏	
				古墳時代	1	包含層		
523	白井先D地点	千葉	船橋市	古墳時代?	1	包含層		577
524	稔台遺跡	千葉	松戸市	古墳時代前期	2	3号住居跡(竪穴)	高坏、埴、甕	578
525	沢辺遺跡	千葉	南房総市	古墳時代～平安時代	1	B051溝		579
526	国府関遺跡群	千葉	茂原市	不明	1	自然流路		580
527	中原遺跡	千葉	茂原市	奈良時代	1	6号住居跡(竪穴)	土師器(甕・坏)	581
528	浅間内遺跡	千葉	八千代市	古墳時代後期	1	D27住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕)、須恵器蓋、支脚	582
				古墳時代後期	1	D49住居跡(竪穴)	坏の中から出土、土師器(坏・鉢・ 甌)	
				古墳時代後期	1	D55住居跡(竪穴)・ カマド内	赤彩?、土師器(坏・鉢・甕)、棗玉	
				古墳時代後期	4	D72住居跡(竪穴)・ カマド内	土師器(坏・鉢・甌)、土製管玉、他 に土製勾玉片有	
529	井戸向遺跡	千葉	八千代市	弥生時代	1	D018号遺構(竪穴住	甕、石製品、砥石	583

						居)		
				弥生時代	2	D079号遺構 (竪穴住居)	甕、壺、鉢、土錘	
530	川崎山遺跡	千葉	八千代市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	第06号住居跡 (竪穴)・炉跡脇出土	火災住居、壺、甕、埴、鉢	584
				古墳時代中期	1	第10号B住居跡(竪穴)	壺、埴、埴	
531	内込遺跡	千葉	八千代市	古墳時代後期 ～古墳時代終末期	1	14BD遺構(竪穴住居)	土師器(甕・坏・甗)、須恵器	585
				古墳時代後期～終末期	1	15D遺構(竪穴住居)	土師器(坏・甕・高坏)、丸玉、 他に土製勾玉片有り	
532	郷野遺跡	千葉	四街道市	古墳時代後期～平安時代	4	8号住居跡(竪穴)	土師器(甕・高坏・甗)ほか	586
				古墳時代後期	1	50号住居跡(竪穴)	土師器(坏・埴・高坏・甕)	
533	権現堂遺跡	千葉	四街道市	弥生時代後期 ～古墳時代初頭	1	85号住居(竪穴)	高坏、器台、埴、甕ほか	587
534	入ノ台第2遺跡	千葉	四街道市	古墳時代後期	1	第77号住居址(竪穴)	坏、ハソウ、有孔円板、建て替えあり	588
535	千代田遺跡	千葉	四街道市	古墳時代前期末	1	4号住居址(竪穴)・床面		589
536	宮ヶ谷戸遺跡	東京	あきる野市	古墳時代後期～終末期	3	4号住居址(竪穴) カマド脇	土師器(長胴甕・坏)、臼玉、紡錘 車、石器、刀子ほか	590
537	雨間地区遺跡群	東京	あきる野市	古墳時代後期	1	9号住居址(竪穴)	土師器(甕・甗・坏・鉢)、支脚、石器 ほか	591
538	花畑遺跡	東京	足立区	古墳時代中期末葉～後期	1	H区12G-1号土坑	黒斑、土師器(壺・甕・甗・坏・高 坏)、剣形製品、管玉、臼玉ほか、 祭祀遺構	592
539	伊興遺跡	東京	足立区	古墳時代	1	SK064土坑		593
				古墳時代	2	包含層		
				古墳時代～平安時代	1	包含層		
540	菅原神社台地上遺跡	東京	板橋区	弥生時代	1	46号住居跡(竪穴)床面	弥生土器(甕・壺・台付甕)	594
				弥生時代	1	75号住居跡(竪穴)覆土	弥生土器(壺・甕・鉢)、礫	
541	成増一丁目	東京	板橋区	弥生時代終末期	1	第30号住居址(竪穴)		595
542	成増天神脇遺跡	東京	板橋区	弥生時代	1	Y5号住居跡(竪穴)	土師器(甕・高坏)	596
543	五反田遺跡	東京	板橋区	弥生時代後期後半	1	13号住居跡(竪穴) 覆土	弥生土器(壺・台付甕)ほか	597
544	志村坂上遺跡	東京	板橋区	弥生時代～古墳時代前期	1	6号住居跡(竪穴)・覆土	壺・甕、4方向から穿孔された、小 孔が2箇所	598
				弥生時代～古墳時代前期	1	2号a住居跡(竪穴) 覆土	壺	
				弥生時代	1	2号溝D区		599
				弥生時代後期	1	SI-4竪穴住居跡	弥生土器壺	600

						床面		
				弥生時代後期後半	1	F地点 SI-14 (竪穴住居) 貯蔵穴テラス部	壺	601
545	中台畠中遺跡	東京	板橋区	古墳時代?平安時代?	1	106号住居(竪穴) 覆土	土師器甕ほか	602
				弥生時代後期	1	4号住居(竪穴)・覆土	弥生土器(甕・壺)、土師器台付甕	
				不明	1	表土		
				古墳時代後期	1	36号住居(竪穴)・覆土	土師器(坏・甕)	
546	徳丸東遺跡	東京	板橋区	古墳時代後期	1	1号住居址(竪穴)・覆土	甕、鉢、土玉	603
547	加賀一丁目遺跡	東京	板橋区	奈良時代後期	1	Si-3(竪穴住居)・覆土	土師器(長胴甕・坏)、須恵器坏、鉄製品	604
548	四葉地区遺跡	東京	板橋区	弥生時代~古墳時代前期	1	124号住居跡(竪穴)	土師器(甕・台付甕・埴・壺)	605
				弥生時代	1	131号住居跡(竪穴)	土師器(壺・埴)	
				弥生時代	1	213号住居跡(竪穴)	土師器壺	
549	西原遺跡	東京	板橋区	弥生時代後期後半	1	Y1号住居址(竪穴)	壺、小型壺	606
				弥生時代後期後半	1	Y6号住居址(竪穴) 炉跡	壺、甕、高坏、鉢	
				弥生時代後期後半	1	Y14号住居址(竪穴) 炉跡掘り方	甕、壺、高坏、石器土製円板(炉址 燃烧部出土)軽石製品 イネ オオ ムギイネ(炉址内) ブドウ属種子 (P3)ほか	
550	西台遺跡	東京	板橋区	不明	1	包含層	北野高校所蔵	607
551	西台後藤田遺跡	東京	板橋区	旧石器時代~近世	3	遺構外		608
552	下戸塚遺跡	東京	新宿区	弥生時代	1	9号住居跡(竪穴)	壺、甕、木製品、石器、ガラス玉ほか	609
553	赤塚氷川神社北方遺跡	東京	板橋区	古墳時代前期	1	LN-126号住居址 (竪穴)		610
				古墳時代中期	1	H-59号住居(竪穴)		
				古墳時代終末期	1	H-18号住居(竪穴)		
554	中台三丁目東丘陵遺跡	東京	板橋区	古墳時代前期	1	H-4号住居(竪穴)		611
555	上小岩遺跡	東京	江戸川区	不明	1	304番地・天祖神社境内	中村進氏収蔵	612
				古墳時代前期	1	包含層		613
556	環8光明寺地区遺跡	東京	大田区	弥生時代中期末葉 宮ノ台式期	1	1号住居址(竪穴)	土器片	614
557	久ヶ原遺跡	東京	大田区	弥生時代後期 ~古墳時代前期	1	第41号住居址(竪穴)	土師器(壺・甕・高坏・台付甕)ほか	615
558	飛鳥山遺跡	東京	北区	弥生時代後期	1	SI09・竪穴住居	弥生土器壺、砥石	616

				～古墳時代初頭				
				古墳時代後期	1	SK103・土壙 石棺墓		617
559	田端不動坂遺跡	東京	北区	弥生時代後期	1	第 32 号竪穴住居址 覆土	弥生土器(壺・鉢)	618
				弥生時代後期	1	第 59 号竪穴住居址	弥生土器(甕・壺・高坏)	
560	御殿前遺跡	東京	北区	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	SI13・竪穴住居	土器、壺	619
561	赤羽台遺跡	東京	北区	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	YK91 号住居址(竪穴)	土師器(壺・高坏・台付甕)ほか	620
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	YK95 号住居址(竪穴)	土師器(壺・台付甕・高坏)ほか	
562	中里峠上遺跡	東京	北区	古墳時代終末期	1	第 2 号竪穴住居址	土師器(坏・甕・甗)、須恵器坏、砥石、土玉ほか	621
				古墳時代後期	1	第 16 号竪穴住居址	土師器(坏・甕・鉢・甗・高坏)須恵器(坏蓋・坏身・甕・壺・瓶類)、紡錘車ほか	
563	中里遺跡	東京	北区	古墳時代後期	1	21 号遺構・溝跡		622
564	垵上遺跡	東京	狛江市	縄文時代晩期～古墳時代	1	包含層		623
565	北新宿二丁目遺跡	東京	新宿区	弥生時代後期	1	第 1 号住居跡(竪穴)	弥生土器(壺・埴)	625
				弥生時代後期	1	第 20 号住居跡(竪穴)	弥生土器(壺・鉢・甕・高坏)ほか	
				弥生時代後期	1	第 33 号住居跡(竪穴)	弥生土器(壺・甕・高坏)ほか	
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	第 40 号住居跡(竪穴)	弥生土器(壺・鉢・高坏)ほか	
566	百人町三丁目西遺跡	東京	新宿区	弥生時代後期	2	第 2 号住居跡(竪穴)	弥生土器(壺・甕・高坏)ほか、烧成前の穿孔	626
567	落合遺跡	東京	新宿区	奈良時代	1	SI29(竪穴住居)	土師器(坏・甕)、須恵器ほか	628
				古墳時代終末期	1	7 号土坑	土師器焼成土坑	
				古代	2	遺構外		
568	戸山遺跡	東京	新宿区	弥生時代後期	1	28 号住居跡(竪穴) 覆土	甕	629
569	堂ヶ谷戸遺跡	東京	世田谷区	古墳時代前期	1	H5号住居址(竪穴)	銅鏃、刀子	630
				古墳時代前期	2	80 住居址(竪穴)		631
				弥生時代後期	1	113 号住居址(竪穴)	石皿 土器	632
570	和田・百草遺跡群	東京	多摩市	古墳時代前期	1	21 号住居址(竪穴)貼り 床中		633
				古墳時代後期	1	SK40 土壙・覆土		634
571	下布田遺跡	東京	調布市	不明	1	包含層	縄文時代晩期の遺跡	635
572	江戸城址 北丸竹橋門地区	東京	千代田区	弥生時代	1	包含層		636

573	駒込一丁目	東京	豊島区	弥生時代後期後半	1	5号住居址(竪穴)	甕・壺・鉢、消失住居	637
574	新井三丁目遺跡	東京	中野区	弥生時代後期後半	1	Y126号住居址(竪穴)	弥生土器(壺・甕・高坏)	638
575	向田遺跡	東京	中野区	古墳時代後期 鬼高式期	2	2号竪穴式住居址 貯蔵穴内覆土	甕、鉢、甗、坏、須恵器(坏・ハン ウ)、支脚	639
576	もみじ山遺跡	東京	練馬区	弥生時代終末期	1	住居跡15号(竪穴)	壺・高坏・台付甕	640
577	中田遺跡	東京	八王子市	古墳時代中期～後期	3	A地区8号住居址 (竪穴)	壺、甕、甗、高坏、坏ほか	641
				古墳時代中期～後期	2	A地区12号住居址 (竪穴)	土師器(甕・甗)	
				古墳時代中期～後期	2	B地区1号住居址 (竪穴)		642
				古墳時代中期～後期	1	C地区2号住居址 (竪穴)	土製鏡	
				古墳時代中期～後期	1	D地区6号住居址 (竪穴)	土製切り子玉	
				古墳時代後期末葉	1	D地区15号住居址 (竪穴)	土師器(甕・坏)	643
				古墳時代後期 鬼高式期	1	E地区11号住居址 (竪穴)	土師器(甕・甗・高坏)、須恵器、鉄 釘、砥石 ほか	
578	弁天池北遺跡	東京	八王子市	不明	1	表採	縄文時代後期・晩期?	644
579	西中野遺跡	東京	八王子市	古墳時代後期	1	3号住居址(竪穴)覆土	土師器(甕・甗・坏)	645
				古墳時代後期～終末期	1	7号住居址(竪穴)	黒褐色、土師器(坏・甕・坪)、土製 支脚	
580	宇津木台遺跡群	東京	八王子市	古墳時代後期	1	J地区SI17(竪穴住居)	土師器(甕・坏)	646
581	中郷遺跡	東京	八王子市	弥生時代後期後半	1	第3号住居址(竪穴 )覆土	壺・台付甕、焼成前に穿孔	647
582	神谷原遺跡	東京	八王子市	不明	1	SB42(竪穴住居) 貯蔵穴内	焼失家屋、砥石	648
				古墳時代初頭	1	SB117(竪穴住居)	台付甕、甕、埴	
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	SB174(竪穴住居) 炉跡内覆土	甕、埴、高坏	649
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	SB186(竪穴住居) 貯蔵穴内覆土	壺、埴、甕	
583	No. 11 遺跡	東京	八王子市	弥生時代	1	Y-5号住居址(竪穴)		650
584	中野甲の原遺跡	東京	八王子市	古墳時代後期 鬼高式期	1	30号住居跡(竪穴)	坏、埴、甗、支脚、他に土製勾 玉片有り	651
585	船田遺跡	東京	八王子市	古墳時代後期	1	D-63号住居址(竪穴)		652
586	姥久保遺跡	東京	日野市	古墳時代後期～終末期	3	18号住居址(竪穴)	土製勾玉はカマド右裾の前にまか れるような形で出土、廃絶の際の	653

							祭祀、土師器(甕・埴・高坏・坏)ほか	
587	武蔵国府関連遺跡 740 次調査	東京	府中市	縄文時代晩期	1	SX9・性格不明遺構		654
588	東京大学本郷構内の遺跡	東京	文京区	古墳時代	1	1号住居址(竪穴)	土師器(甕・坏・埴・小形甗)、須恵器坏、土鈴、土錘	655
589	多摩ニュータウン No.920 遺跡	東京	町田市	弥生時代～古墳時代	1	包含層		656
590	多摩ニュータウン No.327・329・330 遺跡	東京	町田市	古墳時代後期～終末期	1	15号住居跡(竪穴)	土師器(坏・甕・甗)	657
				古墳時代終末期	1	20号住居跡(竪穴)	土師器(鉢・甗・坏)	
				古墳時代終末期	1	31号住居跡(竪穴) カマド内	土師器(坏・高坏・甕)、須恵器(坏・小形甗)	
591	多摩ニュータウン No.339 遺跡	東京	町田市	古代～中世	1	74号溝跡・覆土上層	黒色、焼成前穿孔	658
592	多摩ニュータウン No.918 遺跡	東京	町田市	古墳時代後期	1	包含層		659
593	武蔵岡遺跡	東京	町田市	不明	1	包含層		660
				古墳時代後期?	1	S-143住居址(竪穴)	坏、甕、甗	661
				不明	3	遺構外		662
594	土器塚遺跡	東京	目黒区	弥生時代後期	1	51号遺構(竪穴住居)	弥生土器(壺・甕・小形壺・高坏?)、石鏃	663
595	下古沢駒飼遺跡	神奈川	厚木市	奈良時代	1	H-12号住居址(竪穴)・ 覆土	土師器(坏・甕)	664
596	比々多遺跡群	神奈川	伊勢原市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	SI-04(竪穴住居)		665
597	咳止橋遺跡	神奈川	伊勢原市	古墳時代	1	21号溝・覆土		666
598	上ノ在家遺跡	神奈川	伊勢原市	古墳時代前期	1	SI-04 竪穴住居	台付甕 高坏	667
599	河原口坊中遺跡	神奈川	海老名市	弥生時代～古墳時代前期	1	P22 地区遺構外		668
600	千代北町遺跡	神奈川	小田原市	古墳時代後期	1	第1号土坑	壺、台付甕ほか	669
601	千代仲ノ町遺跡	神奈川	小田原市	弥生時代～古墳時代初頭	1	6号溝	土器、石器	670
602	三ツ俣遺跡	神奈川	小田原市	古墳時代後期	1	H1号周溝状遺構		671
				平安時代	1	SI046(竪穴住居) カマド内	赤彩、窪み石、土錘	672
603	犬蔵地区遺跡群	神奈川	川崎市	弥生時代後期前半	2	YT-3(竪穴住居)	弥生土器(壺・甕・鉢・台付甕)、紡錘車 ほか	673
				弥生時代後期前半	3	YT-5(竪穴住居)	弥生土器(壺・甕・高坏・台付甕)	
604	末長遺跡	神奈川	川崎市	古墳時代後期前半	1	第6号土壇	甕	674
605	長尾台遺跡	神奈川	川崎市	古墳時代中期～平安時代	1	2号住居跡(竪穴)	弥生土器甕、土師器(坏・甕・埴)	675
606	長尾台北遺跡	神奈川	川崎市	弥生時代後期	2	9号住居跡(竪穴)貯蔵	壺	676



						穴内		
				弥生時代後期	1	10号住居跡(竪穴)	甕、壺、高坏、他に土製勾玉片有	
				弥生時代後期	1	11号住居跡(竪穴)	壺、甕、石器	
				古墳時代前期	2	13号住居跡(竪穴)	赤彩、甕、壺、高坏、他土製勾玉片有。	
				弥生時代後期	1	19号住居跡(竪穴)	甕、壺。坏、高坏、鉢、土製品	
607	下原遺跡	神奈川	川崎市	縄文時代晩期中葉	1	第2号住居址(竪穴)・覆土	注口土器、鉢類、石鏃、石剣、砥石、紡錘車、土版ほか	677
				弥生時代後期 弥生町式・朝光寺原式期	1	第6号B住居址・床面	土器	
608	千年伊勢山遺跡	神奈川	川崎市	古墳時代後期	1	SK105(竪穴住居)		678
609	黒川地区 No.17 遺跡	神奈川	川崎市	不明	1	遺構外		679
610	平風久保遺跡	神奈川	川崎市	弥生時代後期前葉 ～弥生時代後期中葉初頭	1	高津区 第1号住居址(竪穴)	高坏、壺、甕、台付鉢、石器	680
				弥生時代中期～後期	1	宮前区 A地点3号住居址 (竪穴)床面	建て替えあり、甕、石器、 頭部に刻み目	
				弥生時代中期～後期	1	宮前区 A地点4号住居址 (竪穴)覆土	甕ほか	
				弥生時代中期～後期	1	宮前区 B地点1号住居址 (竪穴)炉址床面	甕	
				弥生時代中期～後期	1	宮前区 C地点1号住居址 (竪穴)床面	壺、石器	
611	東神庭遺跡	神奈川	川崎市	弥生時代後期	1	住居跡(竪穴)	土器	682
612	新作小高台遺跡	神奈川	川崎市	古墳時代中期	1	8号住居址(竪穴)		683
				古墳時代中期	1	38号住居址(竪穴)		
613	末長遺跡 第2地点	神奈川	川崎市	古墳時代中期 和泉式期	1	1号住居址(竪穴)	土師器高坏・鉢・甕・甕・椀 管玉	684
				弥生時代後期	1	7号住居址(竪穴)	土師器高坏・鉢・甕・甕	
				弥生時代後期	3	8号住居址(竪穴)	壺 甕 台付き甕 鉢 高坏 石器	
				弥生時代後期	1	10号住居址(竪穴)	甕 台付き甕 壺 甕 高坏 紡錘車 敲き石	
				弥生時代中期 宮二台式期	1	12号住居址(竪穴)	壺 甕 台付き甕 敲き石	
614	川尻遺跡	神奈川	相模原市	古墳時代終末期 ～奈良時代初頭	1	H2号住居址(竪穴)	土師器(坏、甕)ほか	685
615	池子遺跡群	神奈川	逗子市	弥生時代～古墳時代	1	1号溝状遺構		686
616	原口遺跡	神奈川	平塚市	古墳時代終末期	1	YH24号住居址	甕・台付甕・鉢・壺ほか	687

				～奈良時代初頭		(竪穴)・覆土		
617	王子ノ台遺跡	神奈川	平塚市	古墳時代前期	1	YK66号住居址(竪穴)	壺、甕、鉢、高坏ほか	688
618	北金目塚越遺跡	神奈川	平塚市	弥生時代後期中葉	1	A区SI07(竪穴住居)	銅環 甕 壺 甕 勾玉は赤彩・ミガキ	689
619	真田・北金目遺跡群	神奈川	平塚市	古墳時代前期	1	36B区 SI1030 (竪穴住居)	甕 壺 高坏 鉢 ミニチュア土器	690
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	58B区 SI034 (竪穴住居)	焼成前に穿孔 台付き甕 鉢 壺	691
				弥生時代後期	1	54A区 SI014 (竪穴住居)	台付き甕 甕 壺 高坏 椀 ミニチュア土器 浮子 ほか	692
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	54A区遺構外	焼成前に穿孔	
				古墳時代前期	1	55B2区 SI0030 (竪穴住居)	台付き甕 甕 壺 埴	693
				古墳時代前期	1	55B2区 SI0036 (竪穴住居)	台付き甕 甕 鉢 高坏 器台 ミニチュア土器 砥石 軽石製品	
				古墳時代中期	1	60A区 SI040 (竪穴住居)	台付き甕 甕 埴 壺 高坏 甌 管玉	694
620	池の辺遺跡	神奈川	藤沢市	不明	1	包含層	古墳時代?	695
621	高倉滝ノ上遺跡	神奈川	藤沢市	弥生時代後期 ～古墳時代前期前半	1	第306号竪穴住居址 炉跡内	高坏、壺、埴、甕、小形鉢、鉄製品 ほか	696
				古墳時代後期～終末期	2	第108a号竪穴住居址	高坏、坏、甕、鉢、壺、刀子、砥石	
622	住吉遺跡	神奈川	横須賀市	弥生時代後期	1	包含層		697
623	なたぎり遺跡	神奈川	横須賀市	古墳時代後期	2	A地点		698
624	赤田地区遺跡群	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	YT-2(竪穴住居)	他に土製勾玉片あり	699
				弥生時代後期	5	YT-4(竪穴住居)・覆土	他に土製勾玉片あり	
625	上品濃遺跡群	神奈川	横浜市	古墳時代前期	1	A区6号住居址 (竪穴)・床面	台付き甕、壺、鉢、高坏	700
				古墳時代前期	1	A区16号住居址 (竪穴)・床面	甕、壺、鉢ほか	
				古墳時代前期	1	A区25号住居址 (竪穴)・床面	甕、鉢、壺、高坏ほか	
626	上谷本第二遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代	1	A地区34号址 (竪穴住居)	甕、鉢、他に勾玉片有	701
627	釜台町上星川遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	第2号住居址(竪穴)	土器	702
				弥生時代後期	1	第3号住居址 (竪穴)・覆土	土器、他に勾玉片有	
				弥生時代後期	1	第4号住居址 (竪穴)・覆土	土器、他に勾玉片有	

				弥生時代後期	1	第5号住居址 (竪穴)・覆土	土器	
				弥生時代後期	1	第8号住居址 (竪穴)・覆土	土器	
				弥生時代後期	1	第12号住居址 (竪穴)・覆土	土器、他に勾玉片有	
628	関耕地遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期後半	2	11号住居址 (竪穴)・床面	甕、壺、台付甕、石器	703
				弥生時代中期後葉	1	25号住居址 (竪穴)・覆土	赤彩?甕、高坏、台付甕、壺、土製 円板ほか	
				弥生時代後期前葉～中葉	1	46号住居址(竪穴) 覆土	壺、甕、高坏、台付甕、石器ほか	
				弥生時代中期後半	1	61号住居址 (竪穴)・覆土	甕、壺、高坏、片口小鉢	
629	明神台遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	A-6号住居址(竪穴)	壺、甕	704
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	A-9号住居址(竪穴)	壺、甕、高坏	
				弥生時代後期	1	A-23号住居址(竪穴)	壺、甕、高坏、石器	
630	明神台北遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代～古墳時代	2	NY11号住居(竪穴)	壺、甕、台付甕、石鏃ほか	705
				弥生時代～古墳時代	1	NY15号住居(竪穴)	甕、高坏、壺、鉢、ガラス玉、石器、 砥石、他に勾玉片有	
631	受地だいやま遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	第20号住居跡(竪穴)	甕	706
632	新羽大竹遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	2	21号竪穴住居址	壺、甕、高坏ほか	707
				弥生時代後期	2	29号竪穴住居址	壺、甕	
				弥生時代後期	1	32号竪穴住居址	壺、台付甕、高坏ほか	
633	山王山遺跡	神奈川	横浜市	古墳時代前期	1	72号住居址 (竪穴)炉内出土	台付甕、壺、鉢、高坏、石器 ほか	708
				古墳時代前期	1	76号住居址 (竪穴)・床面	甕、鉢、壺、高坏	
				古墳時代前期	1	95号住居址(竪穴)	甕、台付甕、壺、高坏、鉢、台石 ほか	
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	2	包含層		
634	三枚町遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	10号住居址(竪穴)・床 面	坏、壺、埴、高坏	709
635	宿根北遺跡	神奈川	横浜市	古墳時代後期	2	H-21号住居址 (竪穴)カマド裾部	土師器(坏・甕・甗)、須恵器甕 ほか	710
636	殿屋敷遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	第12号住居址 (竪穴)炉覆土	壺、高坏、甕	711

637	寺谷戸遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期後半	2	第49号住居址 (竪穴)・覆土	甕、壺、高坏、石製品	712
				弥生時代後期	1	第50号住居址(竪穴)・ 床面	甕、壺	
				弥生時代後期末葉	1	第54号住居址(竪穴)・ 覆土	坏、壺	
638	中里遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期	1	B地点2号住居址 (竪穴)床面	台付甕、甕	713
639	大原遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期後半	1	Y5a・b号住居 竪穴	装飾壺片 刀子片	714
				弥生時代後期	1	1号方形周溝墓 埋葬施設 覆土	壺片 土製勾玉自体が行方不明。	
640	稻荷前古墳群	神奈川	横浜市	古墳時代	4	1号墳 覆土 or 横穴前庭部	前方後円墳 銅鏃 管玉 ガラス製小玉 土製鐸 土製紡錘 車	715
641	権田原遺跡	神奈川	横浜市	弥生時代後期後半 朝光寺原式	1	BY15号住居址(竪穴)	石器 甕 焼失住居の可能性	716
642	大清水遺跡	新潟	魚沼市	縄文時代後期中葉	1	SI-02 ピット 02(竪穴 住居)	スタンプ型土製品 縄文土器(壺・ 注口土器) ほか	717
643	晝場遺跡	新潟	佐渡市	古墳時代～中世	1	C区グリッド 包含層		718
644	千種遺跡	新潟	佐渡市	弥生時代後期	1	遺物包含層		719
645	籠峰遺跡	新潟	上越市	縄文時代後期・晩期?	1	包含層		720
646	吹上遺跡	新潟	上越市	弥生時代中期	1	土坑?	玉作遺跡	721
647	屋敷遺跡	新潟	胎内市	古墳時代後期	1	第12号遺構 (竪穴住居?)		722
648	野地遺跡	新潟	胎内市	縄文時代後期中葉 ～晩期中葉	1	包含層		723
649	長松遺跡	新潟	村上市	弥生時代中期 宇津ノ台式土器	1	SK38(土坑)	頂部付近に5本の刻み 深鉢	724
650	桜町遺跡	富山	小矢部市	縄文時代晩期前葉 ～晩期中葉	5	包含層		725
651	戸水B遺跡	石川	金沢市	弥生時代?	1	SD12035 溝	上層炭層より上	726
652	八日市地方遺跡	石川	小松市	弥生時代中期中葉～後葉	2	埋積浅谷	弥生時代中期の玉作遺跡	727
				弥生時代中期	2	溝	弥生時代中期の玉作遺跡	
				弥生時代中期	1	包含層	弥生時代中期の玉作遺跡	
653	御経塚遺跡	石川	野々市市	縄文時代後期～晩期	1	包含層		728
654	滝谷八幡社遺跡	石川	羽咋市	弥生時代末期 ～古墳時代初頭	1	SB24 (竪穴式建物)	土器 削平が激しく、遺物と 遺構の結びつきが不明。	729
655	浜瀬遺跡	福井	大飯郡	古墳時代	1	包含層	古代製塩遺跡	730
656	吉河遺跡	福井	敦賀市	弥生時代中期～後期	1	溝		731

657	林・藤島遺跡	福井	福井市	弥生時代後期	3	竪穴住居	玉作遺跡 管玉	732
658	田名遺跡	福井	三方上中郡	古墳時代前期	1	東西トレンチ GH19 5層		733
659	東山期田遺跡	山梨	甲府市	古墳時代前期	4	第2号方形周溝墓 周 溝内		734
660	岩清水遺跡	山梨	甲府市	古墳時代後期	1	3号円形低墳 台状部	土器片	735
661	西田遺跡	山梨	塩山市	古墳時代前期～中期	1	8号住居跡(竪穴)	5世紀前葉が主体 土師器甕	736
662	新田遺跡	山梨	韮崎市	弥生時代後半 ～古墳時代初頭	1	グリッド内	赤褐色	737
663	坂井南遺跡	山梨	韮崎市	古墳時代前期	1	12号住居址(竪穴)	壺 高坏 器台 片口鉢 石製紡錘 車 ほか	738
				古墳時代前期	1	17号住居址(竪穴)	甕 高坏 甌 壺	
664	松本塚ノ越遺跡	山梨	笛吹市	古墳時代後期	1	18号住居址(竪穴)	暗褐色 須恵器蓋 土師器(坏・高 坏)ほか	739
665	二之宮遺跡	山梨	笛吹市	弥生時代末葉～平安時代	1	表採		740
666	諏訪尻遺跡	山梨	笛吹市	古墳時代前期	1	第11号住居跡(竪穴)	小形甕 壺 ミニチュア土器	741
				古墳時代中期～後期	2	第1号墳 周溝	円墳	
667	金生遺跡	山梨	北杜市	縄文時代	2	包含層		742
				縄文時代晩期前半	1	18号住居(竪穴)	壺 台付土器 鉢	
				縄文時代後期後半 ～晩期前半	1	1号配石		
668	六科丘遺跡	山梨	南アルプス市	古墳時代前期	1	15号住居 (竪穴)焼土溜まり	焼土溜まりは、炉跡か 住居内祭 祀の痕跡か 覆土から鉄環(指 輪?)が出土。	743
669	岳の鼻遺跡	長野	上田市	弥生時代後期後半 箱清水式期	1	A-26号住居址(竪穴)	弥生土器(蓋・高坏・鉢・甌・壺・甕) 匙	744
				弥生時代後期後半 箱清水式期	1	A-34号住居址(竪穴)	弥生土器(蓋・高坏・甕)	
				弥生時代後期後半 箱清水式期	1	A-46号住居址(竪穴)	弥生土器(高坏・甕)	
				弥生時代後期後半 箱清水式期	1	A-403号住居址 (竪穴)	弥生土器(壺・鉢・甌・高坏)ほか	
				弥生時代後期後半 箱清水式期	1	A-420号住居址 (竪穴)	弥生土器(壺・甕・高坏・蓋)	
670	和手遺跡	長野	上田市	弥生時代後期後半	2	包含層 C区		745
				弥生時代後期後半	1	第12号住居(竪穴)		
				弥生時代後期後半	1	第4号住居址(竪穴)		
671	琵琶塚遺跡	長野	上田市	古墳時代後期	1	第27号住居跡 カマド右側(竪穴)	石灰岩製白玉が、カマド前部より出 土。土師器甕・臼玉 刀子	746

672	法楽寺遺跡	長野	上田市	古墳時代後期	1	SB152(竪穴住居)	747	
				奈良・平安時代	1	SB406(竪穴住居)		
673	一津遺跡	長野	大田市	縄文時代中期～晩期	2	A地区	玉作遺跡	748
674	中原遺跡群	長野	小諸市	古墳時代後期～平安時代	2	SX51 (性格不明遺構)	749	
				古墳時代終末期	1	SB124(竪穴住居)		坏
675	芝宮遺跡群	長野	佐久市	古墳時代終末期	1	173号竪穴住居跡	土師器(坏(内黒)・甕) 臼玉ほか	750
676	北西ノ久保遺跡	長野	佐久市	弥生時代	1	包含層		
677	円正坊遺跡	長野	佐久市	弥生時代後期	1	H9号住居(竪穴建物)	弥生土器(鉢・甕・壺)、台石	751
				弥生時代後期	1	H22号住居(竪穴建物)	弥生土器(高坏・甕・壺)、砥石	
				弥生時代後期	1	H24号住居(竪穴建物)	弥生土器(鉢・高坏・甕・壺)、砥石、磨製石鏃、磨石、敲石、剥片	
				弥生時代後期	1	H25号住居(竪穴建物)	弥生土器(鉢・高坏・甕・壺・甑)、砥石磨製石鏃、打製石鏃、軽石製品、磨石、敲石不石は、板状であるが、作りは丁寧で、所謂「石製模造品」ではなく、石質も明らかに異なる。	
				古墳時代後期	1	H27号住居(竪穴建物)	土師器(坏・高坏・甕・壺・甑・手づくね)、須恵器(ハソウ)、磨石、敲石、磨製石鏃用の石材	
				弥生時代後期	1	H28号住居(竪穴建物)	弥生土器(鉢・台付鉢・高坏・甕・無頭壺壺)、砥石、打製石斧、磨製石斧、磨製石鏃、打製石鏃、スクレイパー、編物石、磨石、敲石、剥片、鉄製刀子	
				弥生時代後期	1	H37号住居(竪穴建物)	弥生土器(鉢・台付鉢・高坏・甕・壺・甑)、磨製石鏃、編物石、磨石、敲石、剥片、鉄鏃、鉄剣	
678	下聖端遺跡	長野	佐久市	古墳時代中期後葉	1	H-17号住居(竪穴)	臼玉 剣形石製品 管玉 土製丸玉 ガラス製小玉 屋内祭祀	752
679	市道遺跡	長野	佐久市	古墳時代後期	1	7号住居(竪穴)	臼玉 手づくね土器 須恵器ハソウ ウ・坏 角製品	753
680	周防畑遺跡群	長野	佐久市	弥生時代後期	1	SB522床面 (竪穴住居)	754	
681	城の内遺跡	長野	千曲市	古墳時代後期	2	祭祀遺構	土製鏡 土製釧 小型丸底壺	755
				古墳時代	1	包含層	756	

682	森將軍塚古墳	長野	千曲市	古墳時代終末期	2	14号墳 石室内	円墳 直刀 刀装具 鉄鏃 耳環 管玉 切子玉 白玉 ガラス玉	757
683	屋代遺跡群	長野	千曲市	古墳時代	1	大宮地区 3号住居址(竪穴)	土師器(坏・甕) 管玉 白玉 刀子 ほか	758
684	がまん淵遺跡	長野	中野市	弥生時代後期 箱清水期	1	SD01 (溝)	甕・壺ほか	759
685	七瀬遺跡	長野	中野市	弥生時代後期	1	G-23グリッド	丁字頭	760
				弥生時代後期	1	L-03グリッド		
				弥生時代後期	1	L-09グリッド		
686	本村東沖遺跡	長野	長野市	弥生時代後期?	1	49号住居跡(竪穴)	土器などが無い。 同遺跡で子持ち勾玉	761
687	榎田遺跡	長野	長野市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	SB81(竪穴住居)	鹿骨 ミニチュア土器	762
				古墳時代中期～後期	1	SB558(竪穴住居)		
				古墳時代中期～後期	1	SB139(竪穴住居)		
				不明	1	SD65(溝跡)		
				古墳時代中期～後期	1	SB108(竪穴住居)		
				古墳時代中期～後期	1	SB1436(竪穴住居)		
				古墳時代中期～後期	1	SG3 (沼址)		
688	石川条里遺跡	長野	長野市	弥生時代	1	遺構検出面		763
				古墳時代前期	1	SD1016 (溝)		764
				古墳時代前期	1	SQ2016(VR001)遺物 集中地点		
689	長野吉田高校 グラウンド遺跡	長野	長野市	弥生時代中期後半～後期	1	3号住居址(竪穴)	赤色塗料 土器 ミニチュア土器敲 き石	765
				弥生時代	1	検出面		
690	水内坐一元神社 遺跡	長野	長野市	弥生時代後期 箱清水式期	1	D-SB3(竪穴住居)床 面		766
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	YB-SB22 ピット内 (竪穴住居)	石包丁 甕片	
				弥生時代中期 ～古墳時代後期	1	検出面		767
691	篠ノ井遺跡群	長野	長野市	弥生時代後期	1	SB7566 (竪穴住居)		768
				弥生時代後期	1	SB7577 (竪穴住居)	赤色塗料	
				不明	1	2-1区第1 検出面	赤色塗料	
				古代	1	SK7732 (土壙)		769
				弥生時代後期 箱清水期	1	SB003 (竪穴住居)	鉢 台付き甕 ガラス玉ほか	
				弥生時代～古墳時代	1	検出面		
				弥生時代後期	1	SB374(竪穴住居)	高坏 壺 紡錘車 ミニチュア土器	

				～古墳時代中期			ガラス玉	
692	高野遺跡	長野	長野市	弥生時代後期	1	ASK八 土壇	赤色塗彩	771
693	檀田遺跡	長野	長野市	弥生時代後期	1	C②SA4 覆土竪穴住居	赤彩 石斧	772
				古墳時代中期	1	56①SA1 覆土竪穴住居		
694	駒沢新町遺跡	長野	長野市	古墳時代中期	1	3号址 遺物集中地点	壺 甕 埴 小型丸底壺 高坏 器 台臼玉 剣形石製品 有孔円板 土製鏡土製丸玉 水に關した農耕 祭祀か	773
695	出川南遺跡	長野	松本市	弥生時代後期前半	1	第4号住居址(竪穴)	壺・甕・台付き甕・高坏 石鏃 紡錘車	774
696	向畑遺跡	長野	松本市	古墳時代前期	1	第12号住居址(竪穴) 床面	土師器器台	775
697	高宮遺跡	長野	松本市	古墳時代中期	1	第1号土器集中区		776
698	山影遺跡	長野	松本市	古墳時代中期	1	34住(竪穴)	土師器(坏・高坏・小形甕) 双穴円板	777
699	中山古墳群	長野	松本市	古墳時代後期～終末期	1	55号墳 石室内	円墳 武具 鉄鏃 金環 双孔円板 管玉 丸玉	778
700	船来山古墳群	岐阜	岐阜市	古墳時代終末期	2	K支群 106号墳 玄室	耳環 ガラス製丸玉・小玉 刀装具 刀子 高坏 蓋坏 管玉 土師器甕 切子玉 棗玉 臼玉 土製丸玉	779
701	西田遺跡	岐阜	高山市	縄文時代後期・晩期	2	包含層	攪乱層多い	780
702	韮山城内遺跡	静岡	伊豆の国市	弥生時代後期～古墳時代	1	包含層		781
				古墳時代前期	1	土器集中地点3	石製品 土器 ガラス製品 他に勾玉片1点。	
703	明ヶ島古墳群	静岡	磐田市	古墳時代中期	1	上層遺構外	古墳より下層の土層 チキリ形土製品 赤色を呈する。	782
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 下層ブロックS4	古墳より下層の土層 チキリ形土製品 黒赤色を呈する。有溝棒状土製品板状土製品 他土製品多数	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 下層ブロックS6	古墳より下層の土層 赤色を呈する。弓形土製品 管玉形土製品	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 下層ブロックS9	古墳より下層の土層 細長い板状土製品	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブロックA15	古墳より下層の土層	
				古墳時代中期	2	削り出し遺構 最下層ブロックA9	古墳より下層の土層	



				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブロックA54	古墳より下層の土層 他土製勾玉 片多数。	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブロックA52	古墳より下層の土層	
				古墳時代中期	3	削り出し遺構 最下層ブロックA22	古墳より下層の土層	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブロックA202	古墳より下層の土層 環状土製品	
				古墳時代中期	2	削り出し遺構 最下層ブロックA203	古墳より下層の土層 土製(鏡・環 状・小玉)	
				古墳時代中期	6	削り出し遺構 最下層ブロックA26	古墳より下層の土層 土製(管玉・ 鏡・小玉・鍬・杵・工具の柄)ほか	
				古墳時代中期	3	削り出し遺構 最下層ブロックA27	古墳より下層の土層 黒褐色 他土製品多数	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブ ロックA28	古墳より下層の土層 土錘形土製 品ほか	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブロックA29	古墳より下層の土層	
				古墳時代中期	2	削り出し遺構 最下層ブロックA30	古墳より下層の土層 黒褐色 土製(船・鍬・管玉・有溝棒状)ほか	
				古墳時代中期	1	削り出し遺構 最下層ブロックB3	古墳より下層の土層 黒赤色 土製(板状・腕輪・有溝棒状)ほか	
				古墳時代中期	2	最下層遺構外	古墳より下層の土層 セピア色 土製(鏡・盾・杵・琴)ほか	
				古墳時代中期	1	南東部トレンチ	古墳より下層の土層	
704	屋敷山古墳群	静岡	磐田市	古墳時代後期	1	屋敷山1号墳 第2埋葬施設	前方後円墳 管玉 切子玉 霰玉 ガラス製小玉・臼玉 練玉(土玉) 直刀	783
705	日詰遺跡	静岡	賀茂郡	古墳時代中期～後期	1	SC 108 竪穴住居	土師器 須恵器 手づくね土器 土 製鏡 有孔円板 鏡形石製品	784
				古墳時代後期	3	SC103 竪穴住居	手づくね土器 須恵器 土製鏡 土 玉 周囲に焼けた石あり。	
706	下条遺跡	静岡	賀茂郡	古墳時代後期	4	敷石遺構 祭祀跡	土製鏡 土製丸玉 手づくね土器	785
707	田京山遺跡	静岡	下田市	古墳時代後期	1	採集		786
708	宮ノ尾遺跡	静岡	下田市	古墳時代	1	採集		
709	洗田遺跡	静岡	下田市	古墳時代中期～後期	7	遺物包含層	手づくね土器 有孔円板 白玉素 文鏡 ほか 神奈備型祭祀 他土製 勾玉 43点以上出土。	787
710	八兵衛洞遺跡群	静岡	沼津市	弥生時代後期	1	A-1号住居址(竪穴)	壺形土器	788

				弥生時代後期	1	B-41号住居址(竪穴)	甕形土器ほか 全面ヘラミガキ	
711	植出遺跡	静岡	沼津市	弥生時代後期末葉	1	SB122(竪穴住居)床面	小型壺 甕 壺	789
				弥生時代後期末葉	1	SB138(竪穴住居)覆土	小型壺 甕	
				弥生時代後期末葉	1	SB224(竪穴住居)覆土		
				弥生時代後期末葉	1	SB445(竪穴住居)ベルト表土	鉢 甕 壺 ほか	
				弥生時代後期末葉	3	SB475(竪穴住居)炉跡覆土	壺 甕	
				弥生時代後期末葉	1	SB517(竪穴住居)覆土	壺 甕	
				弥生時代後期末葉	1	SH103 柱穴2		
				弥生時代後期末葉	1	R-25 南 包含層		
712	屋上Ⅲ橋西遺跡	静岡	沼津市	古墳時代前期	1	第1号方形周溝墓前祭祀址	甕 鉢	790
				弥生時代後期後葉	1	第1号住居址	甕 壺	
713	雌鹿塚遺跡	静岡	沼津市	弥生時代～古墳時代	5	包含層	ヘラミガキ	791
714	北神馬土手遺跡	静岡	沼津市	弥生時代末期	12	包含層		792
715	八兵衛屋敷遺跡	静岡	沼津市	弥生時代	1	包含層		793
716	大曲遺跡	静岡	沼津市	弥生時代	1	包含層		
717	半田山B古墳群	静岡	浜松市	古墳時代終末期	1	B14号墳 玄室	円墳 丸玉 鉄鏃 須恵器坏蓋	794
718	東前遺跡	静岡	浜松市	古墳時代中期	1	湿地(水辺)	祭祀	795
719	梶子北遺跡	静岡	浜松市	奈良時代	2	旧河道		796
720	舞阪町天白遺跡	静岡	浜松市	古墳時代終末期	3	SB28(竪穴住居)	須恵器(無台碗・高坏)製塩土器 土錘	797
721	村西遺跡	静岡	浜松市	奈良時代～平安時代	3	包含層		798
				奈良時代～平安時代	3	SD54(溝)		
722	西大久保・奈良橋向遺跡	静岡	浜松市	弥生時代～古墳時代	2	包含層		799
723	西畑屋遺跡	静岡	浜松市	古墳時代終末期～奈良時代	1	西区 SX19 土坑	数回のたき火が行なわれている。	800
				古墳時代終末期～奈良時代	4	S10 土器集積	須恵器瓶類 土師器甕・竈片	
724	中村遺跡	静岡	浜松市	古墳時代～奈良時代	1	n1区SD02 溝	土師器 須恵器 木製品	801
725	下滝遺跡	静岡	浜松市	古墳時代後期～古墳時代終末	1	6-KF05 主体部	円墳 大刀 鏃	802
726	坂上遺跡	静岡	浜松市	古墳時代後期	10	包含層		803
727	新堀遺跡	静岡	袋井市	古墳時代前期	1	4区SE403 井戸	小型丸底壺	804
728	月の輪上遺跡	静岡	富士宮市	弥生時代後期後半	1	竪穴住居跡 04	土器片	805
				弥生時代後期	1	竪穴住居 53	火災家屋の可能性。甕 壺 小型土器 砥石 ほか	
729	鶴喰前田遺跡	静岡	三島市	弥生時代中期	1	包含層	山岸で祭祀の可能性。壺 坏 高	807

				～古墳時代前期			坏 埴 管玉	
730	源平山遺跡	静岡	三島市	古墳時代	1	遺構外		808
731	下懸遺跡	愛知	安城市	弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	E区遺構外		809
732	宇頭北部古墳群	愛知	岡崎市	古墳時代中期	1	宇頭大塚古墳 (薬王寺古墳)石室?個 人蔵	前方後円墳 乳文鏡 鉄刀	810
733	勝川遺跡	愛知	春日井市	弥生時代後期～鎌倉時代	1	62FNRO1 遺物集中地点IV		811
734	八王子神社 第2号貝塚	愛知	刈谷市	弥生時代	1	貝層	土器	812
735	朝日遺跡	愛知	清須市	弥生時代中期～古墳時代	1	包含層	弥生時代中期前葉の玉作遺跡 凝灰岩も使用。勾玉・管玉作り。	813
				古墳時代中期	1	包含層		814
736	朝日遺跡群	愛知	清須市	弥生時代～古墳時代	1	包含層	土器を打ちかいて作る	815
737	惣作・鐘場遺跡	愛知	瀬戸市	古墳時代?	1	遺構外		816
738	天間遺跡	愛知	豊川市	古墳時代後期～終末期 TK43～209	2	SH001 北東覆土 (竪穴住居)	須恵器(蓋・短頸壺)	817
739	神郷下遺跡	愛知	豊田市	縄文時代晩期前半	1	包含層		818
740	高根一号墳	愛知	豊田市	古墳時代後期	4	石室内	円墳 赤色 鉄器 金環 ガラス玉 短刀 刀子 鉄鏃 石錘 土師器 須恵器 ほか	819
741	竪三蔵通遺跡	愛知	名古屋市	古墳時代～古代	1	P1271 ピット		820
742	玉ノ井遺跡	愛知	名古屋市	縄文時代晩期前半	1	土壌墓8付近	牙製飾土製品模造品と記載。付近 の土壌は、縄文時代晩期前半～中 葉。土壌と直接関係があるか不 明。	821
743	牛牧遺跡	愛知	名古屋市	縄文時代後期末葉 ～晩期末葉	1	包含層		822
744	枯木宮貝塚	愛知	西尾市	縄文時代晩期前葉	1	包含層		823
745	若宮西遺跡	愛知	西尾市	弥生時代～中世	1	包含層		824
746	羽根中島遺跡	三重	伊賀市	縄文時代～中世	1	D39 トレンチ		825
				縄文時代～中世	1	L37 包含層		
747	橋垣内遺跡	三重	津市	飛鳥時代～奈良時代	1	SD22 溝	土師器(甕・鍋)須恵器(坏・蓋・高 坏・平瓶)	826
748	琵琶垣内遺跡	三重	松阪市	奈良時代中期	1	SD577 溝	土師器(埴・蓋)ミニチュア土器 鏡 形土製品	827
749	草山遺跡	三重	松阪市	古墳時代後期	3	方形台状遺構	人形形土製品 獸形土製品 円板 形土製品 ミニチュア土器 須恵器	828

							ハソウ ほか	
750	天白遺跡	三重	松阪市	縄文時代後期後葉 ～縄文時代晩期初頭	2	包含層	2条刻目目 角状	829
751	森添遺跡	三重	度会郡	縄文時代後期後葉 ～晩期末葉	1	包含層		823
752	鴨田遺跡	滋賀	長浜市	古墳時代以降	1	SD5-3層 溝	3層の須恵器は6世紀土師器(器台・壺)	830
753	桜内遺跡	滋賀	長浜市	不明	2	包含層	鉄芯とおもわれる軸に白色の漆喰状のものをまきつけているように観察される。	831
754	赤野井湾遺跡	滋賀	守山市	縄文時代晩期～古墳時代	1	SD1 溝	土器 人形土製品 木製品須恵器	832
				古墳時代中期	2	SX1中層 落ち込み状遺構		
755	湯ノ部遺跡	滋賀	野洲市	弥生時代	1	C-4区 T34 包含層	土坑SK34201・34202からの出土の可能性あり。	833
756	神宮谷古墳群	京都	綾部市	古墳時代後期	2	4号墳 石室	銀環 切子玉 管玉 鉄鏃 刀子須恵器(提瓶・ハソウ・高坏・蓋・壺)土製練玉ほか	834
757	三宅遺跡	京都	綾部市	歴史時代	1	12E区SD15 溝		835
758	林遺跡	京都	京丹後市	古墳時代前期	1	4号住居址(竪穴住居)	土器(壺・甕・高坏・器台)	836
759	浅後谷南遺跡	京都	京丹後市	古墳時代中期後半 TK23～47	1	溝SD2010(新)	竪杵 木槌 田下駄 直柄横鏃 大型甕 壺 須恵器高坏ほか	837
760	畑大塚古墳群	京都	京丹後市	古墳時代後期～終末期	1	2号墳 石室内	直刀 刀子 鉄斧 轡 須恵器(坏蓋・坏身) 耳環 管玉 ほか	838
761	志高遺跡	京都	舞鶴市	不明	1	包含層		839
				古墳時代	1	船戸南地区 包含層		840
762	大垣遺跡・一の宮遺跡	京都	宮津市	古墳時代	1	包含層	SX200に関係ある可能性	841
763	難波野遺跡	京都	宮津市	古墳時代以降	1	包含層		842
764	森本遺跡	京都	向日市	弥生時代後期	1	水路周辺		843
765	池上遺跡	大阪	和泉市	不明	1	包含層		844
				古墳時代以降	1	M地区採集		845
766	長原遺跡	大阪	大阪市	古墳時代中期	1	SX701 土壇状遺構	弥生土器壺 須恵器甕 製塩土器 臼玉 木製品ミニチュア土器 土師器(甕・壺・高坏)	846
767	新免遺跡	大阪	豊中市	弥生時代中期～後期	1	SH-10(竪穴住居)	高坏 大型器台 ほか	847
768	佐堂遺跡	大阪	東大阪市	古墳時代前期	1	SK6008 土坑	全体朱塗り。高坏 小型丸底壺	848

769	馬場川遺跡	大阪	東大阪市	縄文時代後期末葉	4	包含層	土偶 動物土偶 土製丸玉	849
				弥生時代末期 ～古墳時代初頭	1	包含層		850
770	久宝寺遺跡	大阪	八尾市	弥生時代以降	1	05421 流路 自然流路	壺 鉢 甕	851
771	片引遺跡	兵庫	朝来市	古墳時代前期	1	A地区 包含層		852
772	月若遺跡	兵庫	芦屋市	弥生時代～江戸時代	1	第3包含層		853
773	河高・上ノ池遺跡	兵庫	加東市	古墳時代中期	4	2号住居跡(竪穴)	土製鏡 人形 楯 短甲	854
774	七日市遺跡	兵庫	丹波市	不明	1	O地区柱穴内		855
775	唐古・鍵遺跡	奈良	磯城郡	弥生時代中期前半 大和様式Ⅲ-1	1	SD-153 溝		856
776	上神宮ノ前遺跡	鳥取	倉吉市	古墳時代～奈良時代	1	祭祀遺物廃棄場所		857
777	青谷上寺地遺跡	鳥取	鳥取市	古墳時代前期	4	SK207 土坑	甕 土玉	858
				弥生時代中期～古墳時代	1	県道調査区	釣針形 or 牙形	859
				古墳時代前期～後期	1	I-1層 包含層		860
778	秋里遺跡	鳥取	鳥取市	古墳時代前期～中期	1	A・7 第1遺構(棺周 辺)		861
779	吉川古墳群	鳥取	鳥取市	古墳時代	1	31号墳 石室	円墳	862
780	長瀬高浜遺跡	鳥取	東伯郡	古墳時代中期～後期?	2	7号墳上のSK01 土坑	円墳 鉄鏃 小型鉢 古墳の上に 切り合っている。	863
				古墳時代前期	1	SI117(竪穴住居)	棒状鉄製品 小型器台 高坏 小型 丸底壺 長頸壺 甕形土器壺 甕 土錘 釣り針 管玉 白玉ほか	864
				古墳時代前期	1	SI85(竪穴住居)	小型丸底壺 棒状鉄製品 土錘 甕 高坏	865
				中世	1	包含層	黒斑あり	866
781	梅田萱峯遺跡	鳥取	東伯郡	弥生時代～奈良時代	1	遺構外	焼成前穿孔	867
782	青木遺跡	鳥取	米子市	古墳時代後期	2	B SX06(古墳)	円墳 土製鏡 手づくね土器	868
783	長砂第3遺跡	鳥取	米子市	弥生時代～中世	1	包含層		869
784	古市六反田遺跡	鳥取	米子市	弥生時代～古墳時代	1	包含層		870
785	森遺跡	島根	飯石郡	古墳時代前期	1	SI25(竪穴住居)	他、遺跡内から2点あり。	871
786	中野清水遺跡Ⅱ区	島根	出雲市	古墳時代後期～平安時代	1	Ⅱ区包含層 2層	祭祀遺跡	872
787	鳥井南遺跡	島根	大田市	古墳時代中期～後期	2	丘陵上	土製模造品(人形・鏡・臼・器台・紡 織具・匙・丸玉・刀・靱・短甲・手づく ね)数千点の土製品が畳6畳ほど の空間に密集して確認。定まった神 祭り空間がある。	873
788	大家八反田遺跡	島根	大田市	古墳時代中期後半	8	旧河川・取水堤付近	湯孔円板 ガラス製小玉 モモ種 クルミ トチの実河川・堤、導水にお ける祭祀。	874

				古墳時代中期後半	1	SD03 土器溜まり 溝周辺	有孔円板 手づくね土器3点を重ねた中に土製勾玉出土。小型丸底壺 甕 高杯 河川・堤、導水における祭祀。	
789	落子遺跡	島根	邑智郡邑南町	古墳時代中期	2	包含層	有孔円板 石製有孔円板 手づくね土器 土師器高坏 川の水を引き入れて貯水する堤状の施設に伴う祭祀の痕跡の可能性あり。	875
790	高津遺跡	島根	江津市	弥生時代後期～古墳時代	1	AⅡ区2層 包含層		876
791	谷の前遺跡	岡山	赤磐市	弥生時代後期	1	竪穴住居 31	弥生土器片	877
792	馬屋遺跡	岡山	赤磐市	奈良時代～室町時代	1	包含層		878
793	斎富遺跡	岡山	赤磐市	古墳時代前期中葉	1	竪穴住居 34	土師器(壺・甕・高坏) 磨石	879
				古墳時代後期前葉 TK208	1	井戸6	土師器鉢 紡錘車 須恵器(高坏・蓋・甕)	
				古墳時代	1	遺構外		
794	足守川加茂B遺跡	岡山	岡山市	古墳時代前半	1	竪穴住居 73B	壺 甕 高坏 鉢 製塩土器 土錘	880
				古墳時代前半	1	竪穴住居 92	壺 甕 鉢 蓋 匏	
				古墳時代前半	1	包含層		
				弥生時代後期後半	1	竪穴住居 44	管玉 高坏 ほか	
795	黒住・雲山遺跡	岡山	岡山市	弥生時代	1	包含層		881
796	百間川米田遺跡	岡山	岡山市	古墳時代	1	遺構外		882
797	百間川原尾島遺跡	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	竪穴住居 7	直口壺 甕 鉢 高坏 手培形土器 製塩土器 鉄鍬 鉄器 土製紡錘車ガラス滓 ほか	883
				弥生時代後期	1	竪穴式住居 13	鉢 壺 甕 高坏 製塩土器 小玉	
798	伊福定国前遺跡	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	竪穴住居 17	弥生土器甕 錐状鉄器 ほか	884
				古墳時代前期	1	竪穴住居 36	管玉 砥石 壺 甕 高坏 製塩土器 小型丸底壺	
				弥生時代後期～古墳時代前期	1	柱穴9		885
799	加茂政所遺跡	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	竪穴住居 30	壺 甕 鉢	886
				弥生時代後期	1	竪穴住居 36	甕 鉢 石包丁 分銅形土製品	
				弥生時代後期	1	溝 17	壺 甕 高坏 鉢	
800	川入・中撫川遺跡	岡山	岡山市	古墳時代前期初頭	5	溝4	手づくね土器 土器(壺・鉢・高坏・甕)製塩土器 ほか	887
				中世	1	大道西H区 水田層	手あぶり土器 ほか	
801	高下遺跡	岡山	岡山市	弥生時代～古代	1	遺構外	焼成後穿孔	888
802	高塚遺跡 フロヤ調査区	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	袋状土壇 11	円盤状土製品 長頸壺	889
				弥生時代	1	方形土壇 107	丁字頭 甕 壺 高坏	

803	津島遺跡	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	竪穴住居 16	壺 甕 高坏 鉢 台付鉢 脚付直口壺 土玉 紡錘車 管玉 砥石	890
				古墳時代前期	1	竪穴住居 26	小型器台	
				古墳時代中期	4	土器溜り1	小型丸底壺 土錘 高坏 鏡型土製品 土製円板未成品 水辺の祭祀が行われた可能性	
				古墳時代後期	1	竪穴住居 71	須恵器坏身 製塩土器	
				古墳時代後期	1	竪穴住居 81	管玉 鉄鏃	
				古墳時代	1	河道1		
804	津寺遺跡	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	土壇-234	分銅形土製品 土器 ほか	891
				古墳時代前期	1	竪穴住居-150 覆土	壺 甕 高坏 埴 器台	
				古墳時代前期	1	竪穴住居-152・153	壺 坏 管玉 鉢 砥石 ほか	
				古墳時代前期	1	土器溜り-5	甕 高坏 鉢	
				古墳時代前期	1	遺構外		892
805	雄町遺跡	岡山	岡山市	弥生時代後期	1	土壇	高島新屋敷調査地区	893
806	弥平治遺跡	岡山	勝田郡	弥生時代後期後半 ~古墳時代初頭	1	5号住居址		894
807	上東遺跡	岡山	倉敷市	弥生時代後期	1	波止場・河道		895
808	岩倉遺跡	岡山	倉敷市	弥生時代後期	1	溝8	須恵器(高坏・壺) 製塩土器 土師器皿ほか	896
809	上東遺跡	岡山	倉敷市	弥生時代後期	1	H-8 竪穴住居	壺形土器 高坏 鉄器 製塩土器 ほか	897
				弥生時代後期	1	東鬼川市H-8	土玉	898
810	楯築弥生墳丘墓	岡山	倉敷市	弥生時代後期後葉	8	円礫堆出土 墳丘墓	土壇の埋め戻した跡、礫を円状に積んだもの	899
				弥生時代後期後葉	2	墳丘墓 南西突出部西くびれ付近	手づくね土器円礫堆出土とは、異なる祭祀形態で土製勾玉を使用の可能性	
811	女男岩遺跡	岡山	倉敷市	弥生時代後期末葉	2	穴状遺構(二)	台付小壺形土器、他出土の壺・甕と同じ土を使用。	900
812	辻山田遺跡	岡山	倉敷市	弥生時代後期	3	溝-L		
813	二万大塚古墳	岡山	倉敷市	古墳時代後期	1	石室	前方後円墳 管玉 算盤玉 切子玉 琥珀製薬玉 白玉 トンボ玉 ガラス製丸玉・小玉 銀製空玉	901
814	板井砂遺跡	岡山	総社市	弥生時代後期初頭	1	2号住居 竪穴住居	弥生土器片	902
815	窪木遺跡	岡山	総社市	弥生時代後期前葉	1	竪穴住居 12 柱穴	土器片	903
				弥生時代後期前葉	1	袋状土壇 27	土器片	
				古墳時代後期 TK23~47	1	竪穴住居 11 カマド?	須恵器 鹿角製鉤状製品ほか 焼失住居	904

816	大開遺跡	岡山	津山市	弥生時代後期後半	1	住居址1	ミニチュア土器 甕 小型埴形土器 高坏	905
				弥生時代後期前半	3	住居址16 竪穴住居	壺 甕 器台 高坏 砥石 ほか 頭部刻み目	906
817	横田東1号墳	岡山	新見市	古墳時代後期～終末期	2	石室	円墳 追葬あり 管玉 切子玉 ガ ラス製小玉 土玉 ほか	907
818	安信古墳群	岡山	新見市	古墳時代後期～終末期	1	2号墳 石室	切子玉 ガラス製小玉・丸玉 土玉 丸玉	908
819	下湯原B遺跡	岡山	真庭市	古墳時代後半	1	包含層		909
820	谷尻遺跡	岡山	真庭市	弥生時代後期後半	1	No. 190 住居址		910
821	才地遺跡	岡山	和気郡	弥生時代中期～後期	1	遺構外 包含層		911
822	名広遺跡	広島	安芸高田市	弥生時代後期中葉	1	SB5(竪穴住居)		912
823	境ヶ谷遺跡群	広島	庄原市	弥生時代中期中葉	1	SB31 竪穴住居	石器製作遺構 高坏	913
				古墳時代後期	1	SB49 竪穴住居	須恵器坏蓋 土師器甕	
824	和田原D地点遺跡	広島	庄原市	弥生時代中期後半	1	SB3 竪穴住居	土製円板 鈿 弥生土器(高坏・甕)	914
825	近森遺跡	広島	世羅郡	古墳時代初頭	1	SB1 床面 竪穴住居	土製紡錘車 甕 高坏 砥石 台石石包丁	915
826	宇山遺跡	広島	世羅郡	古墳時代後期～終末期	2	包含層	円板状土製品 土製(丸玉・棗玉・ 管玉)手づくね土器	916
827	龍王2号遺跡	広島	世羅郡	弥生時代後期～古墳時代初 頭	1	A42区 包含層		917
828	榎迫遺跡	広島	豊田郡	不明	1	包含層		918
829	原1号遺跡	広島	東広島市	古墳時代前期	2	SB04号遺構 竪穴住 居	土師器(甕・壺・鉢)頭部に刻み目	919
830	西本6号遺跡	広島	東広島市	弥生時代後期後葉	1	SB29 覆土 竪穴住居	敲き石 砥石 鉄鏃 弥生土器 ほ か	920
				弥生時代後期中葉	1	SB35 覆土 竪穴住居	土器片	
831	助平3号遺跡	広島	東広島市	古墳時代	1	包含層		921
832	中屋遺跡B地点	広島	東広島市	弥生時代後期前葉～末葉	1	SX1 性格不明遺構	石斧 楔形石器 壺 甕 鉢 石鏃 砥石 高坏 ガラス滓 ほか	922
833	諏訪神社周辺遺跡	広島	東広島市	弥生時代後期	1	SB1a 竪穴住居	弥生土器 鉢 蓋 石鏃	923
834	吉光谷遺跡	広島	東広島市	古墳時代終末期	1	SB41 竪穴住居	鉄鏃 石字鏃離 大型甕 須恵器 (高坏・坏蓋)土師器(坏・短頭壺・ 埴) ほか	924
				弥生時代～近代	1	SX08 性格不明遺構	甕 土製品 坏 蓋 ほか	
835	石佛遺跡	広島	東広島市	弥生時代後期前半	1	SS3 貯蔵穴		925
836	成重古墳群	広島	東広島市	古墳時代後期～終末期	1	3号墳 石室	円墳 管玉	926
837	大谷遺跡	広島	広島市	弥生時代	2	B地点 包含層		927
				弥生時代後期後半	1	4号住居跡竪穴住居	土器片 住居跡内で祭祀	



				弥生時代	1	B地点 包含層		
838	畳谷遺跡	広島	広島市	弥生時代後期後葉	1	SK30 貯蔵穴	鉈 甕	928
839	西尾古墳	広島	広島市	古墳時代中期	1	石室	ガラス製小玉 短甲 銚 直刀 鉄 鍬 鋤 鉤形金メッキ製品	929
840	毘沙門台東遺跡	広島	広島市	弥生時代後期	1	第25号住居跡 周辺地山面	丁字頭	930
				弥生時代後期?	1	B地点東側斜面	丁字頭	
				弥生時代後期	1	第25号住居跡埋土内		
				弥生時代後期?	1	C石室地点東側表土		
841	大明地遺跡	広島	広島市	弥生時代後期中葉	1	SB12(竪穴住居)		931
				不明	1	12区 包含層		
842	西山258m貝塚遺跡	広島	広島市	弥生時代後期	1	不明		932
843	上朝枝遺跡	広島	山県郡	弥生時代後期後半	1	SB1 竪穴住居	弥生土器甕 不明鉄器 ほか	933
844	岡の段C地点遺跡	広島	山県郡	古墳時代後期	20	SX3 祭祀跡	須恵器(坏蓋・坏身・高坏・ハソウ・ 壺)土師器(壺・甕・埴・高坏・甗) 白玉石製(鏡・管玉・丸玉)手づくね 土器他土製勾玉8点出土	934
845	京野遺跡	広島	山県郡	弥生時代後期	1	SX20 段状遺構	甕 壺 蓋 磨石 砥石 頭部刻み 目	935
				弥生時代後期	1	SD35 溝状遺構		
846	畑岡遺跡	山口	岩国市	弥生時代後期	1	第1地区 竪穴住居跡 屋内土壌内	弥生土器 土製丸玉 炭化木材検 出焼土の中から大型勾玉が出土。 頭部に1条の刻み、表面は丁寧な 丹塗り磨研が施されている。胎土は 背に黒斑がある。	936
847	東岐波波雁力浜遺跡	山口	宇部市	古墳時代後期	2	遺物包含層	祭祀遺跡?	937
848	北迫集落遺跡	山口	宇部市	弥生時代中期後半	1	Ⅱ区1号住居	未成品 紡錘車	938
849	明地遺跡	山口	熊毛郡	弥生時代後期前半	1	SB08(竪穴住居)	石鍬	939
				弥生時代中期	1	遺物包含層		940
850	片瀬遺跡	山口	下関市	古墳時代前期～中期	3	A区遺物包含層		941
851	今宮遺跡	山口	下関市	奈良時代～平安時代	1	0378グリッド 包含層	全体ナデ	942
852	寺ヶ浴遺跡	山口	下関市	弥生時代～中世	1	11区 9087 グリッド包含層		943
				弥生時代～中世	1	SP0674 ビット		
				弥生時代～中世	1	10区東側 包含層		
853	古殿遺跡	山口	下関市	古代～中世	1	1586グリッド 包含層	ナデ	944
854	宮迫神田遺跡	山口	下関市	弥生時代中期～後期	1	A区 SK35 土坑	弥生土器	945
855	宮ノ下遺跡	山口	下関市	古墳時代～中世	1	包含層		946
856	西沢遺跡	山口	下関市	弥生時代～古墳時代	1	Ⅲ層		947

				古墳時代	1	2-3層		
857	高野遺跡	山口	下関市	古墳時代後期	1	SB03004(竪穴住居)		948
				弥生時代前期	1	SK02001(土坑墓)		
858	小谷遺跡	山口	周南市	弥生時代中期後半	1	SB15 竪穴住居跡	甕 鉢 紡錘車 石錐 石鏃 鉄製 品炭化木材検出	949
859	岡山遺跡 (第I地区)	山口	周南市	弥生時代中期後半	1	環濠	土器(壺・鉢・甕) 石鏃 石斧 石 鏃 砥石 紡錘車 管玉 土製 紡錘車 分銅形土製品 刀子不明 鉄製品	950
860	大崎遺跡	山口	防府市	弥生時代中期中葉～後半	1	表採		951
861	真尾猪の山遺跡	山口	防府市	弥生時代～古代	1	IV地区 遺構検出面		952
862	国秀遺跡	山口	美祢市	古墳時代後期～奈良時代	1	SB-84 方形竪穴住居跡	把手付甕SB36から碧玉製チップ が多量に床面から出土。玉作り工 房?時代は8世紀前半～中頃で、 水晶も確認されている。別の遺構 は土製模造品としての指輪も確認 されている。	953
863	朝倉大歳遺跡	山口	山口市	弥生時代中期後半	2	溝状遺構	壺 ほか 方形周溝の可能性もあり	954
864	下東遺跡	山口	山口市	弥生時代中期後半	11	第1号溝状遺構	ガラス玉 石包丁 壺 石製模造品 祭祀遺構	955
865	浦辺古墳群	山口	山口市	古墳時代後期～終末期	1	2号墳 玄室	円墳 有孔石版 管玉 臼玉 鉸具 辻金具 鏡 ほか	956
866	仏供田遺跡	山口	山口市	弥生時代中期	1	SB16 円形竪穴住居跡	丁字頭 高坏 ミニチュア土器 石 鏃 多くの弥生土器	957
867	赤妻遺跡	山口	山口市	弥生時代前期後半	1	SK60 土壇	弥生土器 石製紡錘車未成品	958
868	宮ヶ久保遺跡	山口	山口市	弥生時代	1	B層上層	焼成前穿孔	959
				弥生時代	3	E層上層		
869	国高山古墳	徳島	阿南市	古墳時代後期	1	石室	前方後円墳 内行花文鏡 ガラス 製丸玉 鉄剣 鉄刀 ヤリガンナ 鉄鏃 土師器 短甲 石製刀子	960
870	鮎喰遺跡	徳島	徳島市	古墳時代中期～後期	1	竪穴住居	管玉 有孔円板	
871	砂入遺跡	香川	木田郡	弥生時代?	1	包含層	イノシシの歯牙をモチーフ?	961
872	川津一ノ又遺跡	香川	坂出市	弥生時代中期中葉	1	SD24 溝跡 上層覆土	上層に須恵器と弥生土器、下層に 弥生土器が出土、一括性が強く弥 生時代に土製勾玉があるのか?	962
873	旧練兵場遺跡	香川	善通寺市	古墳時代初頭	1	SH11 竪穴住居		963
				弥生時代終末期	1	7-13区 SH21 壁溝(竪穴住居)	土器 石器 ヘラミガキ	964
				古墳時代終末期	1	SD0817 溝跡	土器 須恵器 土師器 石器	

							白玉 ほか	
				不明	1	6-1区 遺構外		965
874	前田東・中村遺跡	香川	高松市	弥生時代～古墳時代	2	SR01 東・河川	弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物	966
875	成重遺跡	香川	東かがわ市	古墳時代	2	Ⅲ区第1面 SH01 (竪穴住居)	土器(甕・壺)、鉄器	967
876	北内遺跡	香川	丸亀市	縄文時代～弥生・中世	1	包含層		968
877	土居窪遺跡	愛媛	松山市	弥生時代	1	包含層Ⅷ層		969
878	税谷畑中遺跡	愛媛	松山市	弥生時代	2	SD02 溝跡覆土		
879	道後町遺跡	愛媛	松山市	弥生時代前期～中期	1	SK57・土坑	弥生土器(甕・壺)、石器	970
880	松山大学構内遺跡	愛媛	松山市	弥生時代後期前葉～中葉	1	SB3(竪穴居)覆土	甕・高坏・壺、鉄鎌、石器	971
				弥生時代	1	包含層		
				弥生時代中期後葉～後期末	1	SR2 自然流路	支脚 甕 壺 鉢 高坏	972
881	朝美澤遺跡	愛媛	松山市	弥生時代後期	1	B 地区 SK1・土坑	壺	973
882	船ヶ谷遺跡	愛媛	松山市	古墳時代前期	1	SR1-1 流路		974
				古墳時代中期	1	SK24 土坑	弥生土器、須恵器(坏蓋・坏身・高坏)、石包丁 井戸杵 杭 白玉何らかの祭祀行為	
				古墳時代	1	出土地不明排土内採集		
883	東本遺跡	愛媛	松山市	弥生時代～中世	1	SR201・覆土		975
				弥生時代後期末葉	1	SB404(竪穴住居)	弥生土器(甕・壺・鉢)	976
884	斎院烏山遺跡	愛媛	松山市	弥生時代～古墳時代	1	包含層		977
885	大峰ヶ台遺跡	愛媛	松山市	弥生時代中期中葉	1	SB-18(掘立柱建物)	甕・鉢・壺	978
				弥生時代中期	1	包含層	弥生時代、他に勾玉片1点あり	
				弥生時代	1	包含層 B2 区第 9 層	ナデ、背部に刻み目	979
886	北井門遺跡	愛媛	松山市	弥生時代後期	1	1区SI-4 竪穴住居	石包丁 打製石斧 椅子型土製品 壺 甕 鉢 高坏 ミニチュア土器 紡錘車胴部にベンガラによる赤色塗彩(本来は胴部全体に赤彩)	980
887	宮前川北北斎院遺跡	愛媛	松山市北斎院町	古墳時代前期	4	津田Ⅱ地区 西山地区	土製円板 手づくね土器	981
888	具同中山遺跡群	高知	四万十市	古墳時代後期	5	SF1祭祀跡	双孔円板、紡錘車ほか	982
				古墳時代後期	2	SF2祭祀跡	白玉ほか	
				古墳時代後期	4	SF7祭祀跡	他に土製勾玉片あり、須恵器坏蓋 剣形製品ほか	
				古墳時代後期	2	包含層	黒斑	983
				古墳時代後期	1	SF9 祭祀跡	土師器(埴・高坏・壺・甗)ほか	
				古墳時代後期	4	SF11 祭祀跡	土師器(埴・甕)、白玉、土製鏡ほか	

				古墳時代後期	6	SF17 祭祀跡	土師器(埴・甕・高坏・壺)、石器ほか	
				古墳時代後期	1	SF20 祭祀跡	土師器(埴・高坏・甕・壺)、土錘ほか 他に土製勾玉片あり	
				古墳時代	1	包含層		985
889	東神木遺跡	高知	四万十市	古墳時代中期～後期	1	包含層		986
890	舟付場遺跡	高知	四万十市	古墳時代中期～後期	2	包含層	東神木遺跡の土製勾玉と作り方が異なる。	
891	二ノ部遺跡	高知	高岡郡	弥生時代後期後半～終末期	1	ST-203(竪穴住居)	弥生土器(壺・甕・甌・鉢) ほか	987
892	天崎遺跡	高知	土佐市	不明	1	包含層		988
893	居徳遺跡群	高知	土佐市	縄文時代晩期・ 弥生時代中期末～古墳時代	3	包含層		989
894	梨子木遺跡	福岡	朝倉郡	古墳時代後期～終末期	1	72号竪穴住居	カマド祭祀 須恵器 土師器 ミニチュア土器	990
				古墳時代後期～終末期	1	10号掘立柱建物		
				古墳時代後期～終末期	1	ピット		
895	琴ノ宮遺跡	福岡	朝倉郡	弥生時代中期 ～古墳時代初頭	1	Ⅲ区 11号竪穴住居跡	小形支脚 不明土製品 紡錘車 鉄 鏝片ほか	991
				弥生時代中期 ～古墳時代初頭	1	5号祭祀土壇 上層		
896	松延池周辺遺跡	福岡	朝倉郡	弥生時代～古墳時代	1	包含層		992
897	平塚川添遺跡	福岡	朝倉市	古墳時代初頭	1	SH136 竪穴住居		993
				弥生時代～古墳時代	1	包含層		
898	鞍掛遺跡	福岡	朝倉市	古墳時代後期～終末期	2	7号竪穴住居跡 カマド 内と袖内周辺	土師器甕 須恵器坏身 土玉 焼 土塊 ほか	994
899	志波岡本遺跡	福岡	朝倉市	縄文時代～近世 (縄文時代晩期主体)	1	包含層 下層		995
900	上々浦遺跡	福岡	朝倉市	古墳時代前期	2	溝B	土製紡錘車 壺 甕 鉢 高坏鉄斧 ほか 水神信仰の痕跡土製鏡 陶 質土器	996
901	大迫遺跡	福岡	朝倉市	古墳時代後期終末期	1	6号竪穴	須恵器坏蓋 土師器甕 鉄斧 フイ ゴの羽口 ほか	997
902	小田道遺跡	福岡	朝倉市	弥生時代終末期	1	29号 竪穴住居跡 炉跡付近	甕 高坏 坏 鉢	998
903	上の原遺跡	福岡	朝倉市	弥生時代中期	1	35号土壇	甕	999
				弥生時代中期	1	包含層		
904	持丸古墳群	福岡	朝倉市	古墳時代前期	1	第4号墳 封土	地山削土の段階で古墳築造前前に 祭祀を行なった。古墳築造前の祭 祀?円墳 管玉 小玉 耳環	1000

905	金場遺跡	福岡	朝倉市	弥生時代中期初頭	1	第11号竪穴住居 床面	甕 紡錘車 打製石斧	1001
906	立野遺跡	福岡	朝倉市	古墳時代後期	1	41号掘立柱建物ピット1	須恵器坏身 土師器大形甕	1002
907	春田遺跡	福岡	飯塚市	弥生時代中期～中世	1	116号土壌		1003
908	烏尾遺跡	福岡	飯塚市	古墳時代	1	10号竪穴住居跡 南の谷状斜面		1004
909	井原上学遺跡	福岡	糸島市	古墳時代前期～中期	1	21号住居跡（竪穴） ピット1	甗片 広口壺	1005
910	三雲遺跡	福岡	糸島市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	サキノゾ地区 1号住居跡 竪穴住居	祭祀的遺構 手づくね土器 赤色 顔料 壺	1006
				古墳時代中期	1	塚地区 6号住居跡 竪穴住居 住居内南側貯蔵穴底面	土製鏡 甕 高坏 陶質土器ほか	1007
911	潤地頭給遺跡	福岡	糸島市	弥生時代中期前半～後半	1	大溝D区上層	砥石 ガラス製管玉 高坏 投弾形 土製品 石鏃 石包丁ほか	1008
912	三雲・井原遺跡	福岡	糸島市	弥生時代後期中頃～後半	1	1号祭祀土坑	大型壺 甕 ガラス玉 ほか	1009
913	泊リユウサキ遺跡	福岡	糸島市	弥生時代 ～古墳時代後期以降	1	Ⅲ区 ピット 243	壺	1010
914	堂畑遺跡	福岡	うきは市	弥生時代～奈良時代	1	遺構検出面		1011
				古墳時代後期後半	1	213号竪穴住居跡		1012
915	鷹取五反田遺跡	福岡	うきは市	弥生時代中期後半	1	84号竪穴住居跡	土製投弾 甕 壺 高坏 磨製石 剣	1013
916	塚堂遺跡	福岡	うきは市	古墳時代前期	1	D-7号A住 （竪穴）	カマド燃焼部内 カマド西側、 カマド正面ピット内他より出土。	1014
917	仲島遺跡	福岡	大野城市	古墳時代？	1	10区SD13 溝	祭祀関係遺構	1015
918	山添古墳	福岡	大牟田市	古墳時代後期	1	石室内	帆立貝式古墳 金環 管玉 切子 玉 算盤玉 ガラス玉土玉 鉄鏃 刀子 引手 鏡板 須恵器(高坏・ 付・蓋・壺) ほか	1016
919	三沢上棚田遺跡	福岡	小郡市	弥生時代～古墳時代	1	1区 SG 包含層		1017
920	三国の鼻遺跡	福岡	小郡市	弥生時代～古墳時代	1	2号墳南西側表土		1018
921	大板井遺跡	福岡	小郡市	弥生時代	1	P103 ピット		1019
				弥生時代中期前半～中葉	1	1号祭祀土坑	甕 壺 鉄鏃 筒形器台 蓋ほか	1020
				弥生時代～中世	1	包含層	二分の一黒斑	1021
922	大保龍頭遺跡	福岡	小郡市	古墳時代後期～終末期	1	6号住居跡 竪穴住居	須恵器(坏身・高坏・甕・ハソウ)土 師器(甕・坏)不明土製品弥生土器 ほか	1022
923	津古遺跡群	福岡	小郡市	古墳時代後期～終末期	1	29号住居跡（竪穴）	坏身 砥石 鉄片 ガラス玉	1023
924	横隈狐塚遺跡	福岡	小郡市	古墳時代後期～終末期	1	3号住居跡（竪穴）	不明須恵質土製品 須恵器坏蓋 土師器 ほか色調:赤褐色	1024

925	筑前立屋敷遺跡	福岡	遠賀郡	弥生時代	1	採集 新池池畦		1025
926	立屋敷遺跡	福岡	遠賀郡	弥生時代	1	新池畔	石鏃	1026
927	縄手古墳群	福岡	遠賀郡	古墳時代後期～終末期	1	3号墳 玄室	円墳 鉄刀 鉄鏃 刀子 鏢 鋌留 金具	1027
928	トバセ遺跡	福岡	春日市	弥生時代	7	11号溝	甕 器台 高坏 壺 鉢	1028
929	原ノ口遺跡	福岡	春日市	縄文時代～奈良時代	1	包含層		1029
930	九州大学筑紫地区 遺跡群	福岡	春日市	弥生時代中期	1	8B区 SK101 土壌		1030
931	下白水大塚古墳	福岡	春日市	古墳時代後期～終末期	1	石室	帆立貝式前方後円墳土製人形 土 製獣 土製鏡 手づくね土器	1031
932	隈遺跡	福岡	粕屋郡	古墳時代後期～終末期	1	1号墳 石室	円墳 耳環 切子玉 ガラス玉算盤 玉 馬具類 鋸 斧 太刀 鎌 鏃 ほか	1032
933	古川西遺跡	福岡	北九州市	弥生時代終末期～奈良時代	1	2号土坑群	石鏃 須恵器皿 ほか	1033
934	日の出町遺跡	福岡	北九州市	弥生時代・平安時代以降	1	2区4層 灰褐色粘質土層		1034
935	金丸遺跡	福岡	北九州市	古墳時代～近世	1	I区包含層		1035
936	上徳力遺跡	福岡	北九州市	古墳時代後期	1	第1地点 H-3 竪穴住居	臼玉 砥石 有孔円板 敲打器 土師器(壺・甕) ほか	1036
937	中貫ミカンキ遺跡	福岡	北九州市	弥生時代前期 ～弥生時代終末期・古代 ・中世(弥生時代前期主体)	1	1号溝状遺構 自然流路3	土錘 磨製石剣 土器 石包丁砥 石 石斧 ほか 二穴穿孔 縦穿孔 あり	1037
938	長野角屋敷遺跡	福岡	北九州市	弥生時代前期 ～弥生時代中期	1	1号溝	弥生土器	1038
939	長野A遺跡	福岡	北九州市	古墳時代～平安時代	1	V区3層		1039
				古墳時代～室町時代	1	VI区9層		
940	能行遺跡	福岡	北九州市	弥生時代	1	D-5号土壌	土製紡錘車 弥生土器甕 ほか	1040
941	貫・裏ノ谷遺跡	福岡	北九州市	弥生時代終末 ～古墳時代初頭・平安時代 (弥生時代終末～古墳時代初 頭が主体)	1	流路1	スクレイパー 石包丁 瓦質土器土 器(高坏・器台・支脚・甕)ミニチュア 土器 土師器(高坏・坏・壺) ほか	1041
942	貫川遺跡2	福岡	北九州市	縄文時代～古墳時代	1	包含層		1042
943	勝円遺跡	福岡	北九州市	不明	1	A地区 包含層		1043
944	船越高原A遺跡	福岡	久留米市	弥生時代～古墳時代以降	1	10号溝 覆土	甕 鉢 壺	1044
945	隈3号墳	福岡	久留米市	古墳時代後期～終末期	1	隈3号墳	円墳 装飾古墳	1045
946	彼坪遺跡	福岡	久留米市	弥生時代中期中葉～後半	1	204号竪穴式住居	器台 砥石 坪 高坏 甕 円板投 弾 ほか	1046
947	大的遺跡	福岡	久留米市	古墳時代中期中葉	1	4号竪穴住居跡	砥石 鉄製品 土師器(甕・甌・壺・ 高坏)手づくね土器	1047

				古墳時代中期	1	4号土坑	土師器(壺・甕)土製鏡 小札弥生 土器甕ほか	
948	松門寺A遺跡	福岡	久留米市	古墳時代中期～終末期	1	2号溝	土錘 土盤 ほか	1048
949	山川南本村遺跡	福岡	久留米市	弥生時代・中世	1	SP293 ピット		1049
950	東町遺跡	福岡	古賀市	弥生時代後期前半	1	土器溜り		1050
951	楠浦・中里A2号墳	福岡	古賀市	古墳時代後期～終末期	1	A2号墳 石室	刀 耳環 土玉 ガラス製小玉	1051
952	鹿部田添遺跡	福岡	古賀市	古墳時代終末期	6	3次 トレンチA	竹の棒などで片面穿孔。古墳に副 葬される装身具としての土玉のよう な丁寧な作りではない。土玉	1052
953	鹿部井ノ上遺跡	福岡	古賀市	古墳時代終末期	1	1区 包含層		1053
				古墳時代終末期	3	2区 祭祀遺構		
954	浦松遺跡	福岡	田川郡	弥生時代中期後半 ～古墳時代	1	SX036 (黒灰色土流路)	ミニチュア土器 ほか祭祀遺構の可 能性あり。	1054
955	京ノ尾遺跡	福岡	大宰府市	古墳時代後期～終末期	1	1SI020 カマド出土竪 穴住居	須恵器坏身 土師器(坏・壺・鉢甑)	1055
956	宮ノ本遺跡	福岡	大宰府市	古墳時代後期	1	10-2SI035 竪穴住居	土師器 須恵器(坏・壺・坏蓋)金属 滓 ほか	1056
957	成屋形古墳	福岡	太宰府市	古墳時代後期	1	石室	円墳	1031
958	井田下堀越遺跡	福岡	筑後市	縄文時代晩期 ～古墳時代前期	1	SK10 土壇	祭祀遺構 坏 小型丸底壺 甕石 鍬 砥石古墳時代前期が主体。	1057
959	井河遺跡群	福岡	筑紫郡	古墳時代終末期	1	3号住居跡(竪穴)	土製鏡 白玉 土師器(高坏・甑・ 甕・手づくね土器)鉄滓 鉄鋤不明 鉄器 須恵器(坏蓋・坏身・高坏・ハ ソウ・甕・柑)	1058
				古墳時代終末期	2	3号土坑墓	白玉 土製鏡 須恵器(坏身・坏蓋) 土師器甕 ほか	
960	松の木遺跡	福岡	筑紫郡那	古墳時代後期	1	6号住居跡(竪穴)	カマドでは、自然石を利用した支脚 上に坏を置き、そのまわりに土製鏡 土製丸玉 手づくね土器が出土。	1059
961	八隈遺跡	福岡	筑紫野市	弥生時代～古墳時代	1	第1地点		1060
962	堀池遺跡	福岡	筑紫野市	古墳時代初頭	1	1SK022 土壇		1061
963	貝元遺跡	福岡	筑紫野市	古墳時代終末期～平安時代	1	溝 15		1062
				古墳時代後期～古代	1	381号住居跡 竪穴住 居	土器 鉄刀 管玉 石包丁	
				弥生時代～古墳時代	1	ピット 1710		
				古墳時代後期～終末期	1	201号住居跡 竪穴住居	須恵器(坏身・甑・碗)土師器甕	1063
964	仮塚南遺跡	福岡	筑紫野市	古墳時代後期頃	1	19号住居跡 竪穴住居	須恵器(坏身・蓋)土師器甑鉄器 砥石 ほか	1064

965	御笠地区遺跡	福岡	筑紫野市	古墳時代?	1	D地区 溝2	管玉 ほか	1065
966	立明寺地区遺跡	福岡	筑紫野市	弥生時代～古墳時代	2	B地点 環濠13-S0002	壺 高坏 甕 大甕 ほか	1066
967	五穀神山遺跡	福岡	筑紫野市	古墳時代	1	包含層	土製鏡 ほか	1067
968	船迫窯跡群	福岡	築上郡	古墳時代後期～終末期	1	茶臼山東1号窯跡 灰原周辺	ミニチュア土器 石包丁 土錘石戈 ほか 窯跡祭祀 須恵器質	1068
969	築城五反田遺跡	福岡	築上郡	古墳時代前期～中期	1	7号住居跡 (竪穴) カマド左外側	高坏 椀 土製管玉 ほか	1069
970	上唐原遺跡	福岡	築上郡	弥生時代後期～中世	1	20号住居跡 竪穴住居		1070
971	下唐原伊柳遺跡	福岡	築上郡	弥生時代前期末葉 ～後期初頭	1	G区1号竪穴状遺構	弥生土器(壺・高坏・甕)	1071
972	有田遺跡	福岡	福岡市	古墳時代後期～終末期	2	13号住居跡 カマド内 竪穴住居	須恵器 土師器	1072
				弥生時代?	1	遺構検出面		
973	藤崎遺跡	福岡	福岡市	古墳時代～近世	1	SD-01 溝	土師器碗 陶磁器 土錘 硯	1073
974	赤目遺跡	福岡	福岡市	古墳時代前期	1	SK37 土壙	土師器片	1074
975	樋井川B遺跡群	福岡	福岡市	弥生時代～古墳時代	1	I-B区 斜面	丁字頭	1075
				古墳時代前期中葉	1	SC-01 竪穴住居	丸底壺 甕 小型甕	
976	比恵遺跡	福岡	福岡市	弥生時代中期	1	SD01 溝状遺構	壺	1076
977	比恵遺跡群	福岡	福岡市	弥生時代～古墳時代	1	包含層		1077
				古墳時代前期	1	SX-021 竪穴住居?	小鉄斧 弥生土器甕 古式土師器 ほか	1078
978	飯氏二塚古墳	福岡	福岡市	古墳時代	1	第12トレンチ		1079
979	笠拔遺跡	福岡	福岡市	弥生時代中期末葉 ～後期初頭	1	貯水遺構		1080
980	柏原古墳群	福岡	福岡市	古墳時代後期～終末期	2	C-1号墳 石室	円墳 小玉 耳環 ほか	1081
981	警弥郷B遺跡	福岡	福岡市	古墳時代前期 布留式期	1	SD-01 溝	鉄斧 土師器高坏 小型器台 土製 支脚ほか	1082
982	雀居遺跡	福岡	福岡市	弥生時代後期後半?	1	C3包含層 10層		1083
				弥生時代前期前半	1	SD03 C6中層 溝	縦方向に穿孔	
				古墳時代前期	1	6号住居跡 竪穴住居	甕 小型丸底壺 鉢	1084
983	那珂遺跡群	福岡	福岡市	弥生時代後期後葉	1	SD-02 方形周溝状遺構	坪 甕	1085
984	西新町遺跡	福岡	福岡市	弥生時代終末期 ～古墳時代前期	1	116号住居跡 竪穴住居	玉作遺跡	1086
985	野方久保遺跡	福岡	福岡市	古墳時代前期	1	SC-07 A地点 竪穴住居	土器類 ほか	1087
986	野多目前田遺跡	福岡	福岡市	縄文時代後期～古代	2	包含層		1088
987	山王遺跡	福岡	福岡市	古代以前	1	包含層		1089



988	多々良込田遺跡	福岡	福岡市	古墳時代前期	1	SC-30 床面 (竪穴住居)	高坏 埴 壺 砥石 ほか 火災住居	1090
989	高田遺跡	福岡	福岡市	弥生時代後期後半～末葉	1	溝1	石錘 壺 甕 埴 器台 高坏 砥石 丁字頭 胎土は精製。	1091
990	勝浦坂口遺跡	福岡	福津市	弥生時代～古墳時代	1	SC-05 5号住居跡 竪穴住居		1092
				弥生時代～古墳時代	1	A地点包含層		
991	団後遺跡	福岡	豊前市	弥生時代～古墳時代	2	5区土壇3	坏蓋 高坏 埴 長頸壺 ほか	1093
992	町浦遺跡	福岡	三井郡	古墳時代	1	7号住居跡 覆土 (竪穴)	土師器(高坏・坏身・坏蓋)瓦器	1094
993	神手遺跡	福岡	京都郡	弥生時代後期後半 ～古墳時代初頭	1	4号竪穴住居跡	土錘 ほか	1095
994	中州遺跡	福岡	京都郡	弥生時代後期後半	1	5号土坑	甕 壺 台付鉢	1096
995	一の塚古墳	福岡	京都郡	古墳時代	3	石室	円墳 土製鏡 土製丸玉	1031
996	権現塚北遺跡	福岡	みやま市	縄文時代後期後葉 ～晩期初頭	1	17Gピット内		1097
997	海津横馬場遺跡	福岡	みやま市	弥生時代～中世	5	包含層		1098
998	山門北池遺跡	福岡	みやま市	弥生時代～中世	1	4区 表採	細い針金状の棒で穿孔と記載。	1099
999	武丸高田遺跡	福岡	宗像市	古墳時代中期～後期	1	第74号竪穴	小型丸底壺	1100
1000	相原古墳群	福岡	宗像市	古墳時代後期	1	4号墳 石室内	ガラス玉 水晶製玉 切子玉 土玉 金環 須恵器(坏身・壺) 人骨	1101
1001	平原遺跡	福岡	八女郡	古墳時代	1	グリッドH2 2層		1102
1002	割子田遺跡	福岡	八女郡	古墳時代後期	1	16号住居跡(竪穴)	カマド右袖付近から土製勾玉出 土。カマド祭祀。 須恵器(坏蓋・坏 身)土師器坏 ミニチュア土器	1103
1003	下稗田遺跡	福岡	行橋市	弥生時代中期	1	119SP 包含層		1104
1004	久蘇遺跡	佐賀	小城市	弥生時代中期～古墳時代	3	包含層		1105
				弥生時代以降	1	I区 SD06 溝	弥生土器(壺・高坏) 須恵器坏 土 師器皿 青磁片 水の祭祀?	
1005	石木遺跡	佐賀	小城市	古墳時代	1	包含層	古墳時代の川及び堰跡(SX006)三 又鍬 木靴 縦杵 横杵 土器ほか	1107
1006	石木中高遺跡	佐賀	小城市	縄文時代晩期後半～末葉	2	SD01 河川跡	木製品 石器 土器片 土偶 土製 紡錘車 手づくね土器 ほか計8箇 所に1mmの孔あり。獣形勾玉状	1108
1007	生立ヶ里遺跡	佐賀	小城市	弥生時代～平安時代	1	西段落ち	土錘	1109
1008	菜畑遺跡	佐賀	唐津市	縄文時代晩期	2	遺物包含層		1110
1009	菜畑内田遺跡	佐賀	唐津市	弥生時代～室町時代	1	南トレンチ		1111
1010	半田大園遺跡	佐賀	唐津市	弥生時代～中世	1	包含層		1112
1011	森の下遺跡	佐賀	唐津市	古墳時代前期	1	包含層 O区		1113

1012	中原遺跡	佐賀	唐津市	古墳時代中期	1	ST11141 古墳(5号墳) 周溝	土師器(甕・高坏)、白玉、鉄器ほか	1114
1013	梅白遺跡	佐賀	唐津市	古墳時代	2	包含層		1115
1014	柏崎松本遺跡	佐賀	唐津市	古墳時代中期	1	3号住居 床面(竪穴)		1116
1015	鬼塚古墳群	佐賀	唐津市	古墳時代後期～終末期	1	神集島鬼塚1号墳 玄室	耳環 小玉 丸玉 刀 鑿形鉄器刀 子 鍍金具 土師器 須恵器(坏 蓋・坏身・高坏・提瓶)ほか	
1016	田手二本松遺跡	佐賀	神埼郡	縄文時代晩期末葉	1	包含層		1117
1017	二塚山遺跡	佐賀	神埼郡	弥生時代後期	2	25号土墳墓	甕玉	1118
				弥生時代後期中頃	20	60号土墳墓	甕玉 丸玉 高坏	
1018	山崎古墳	佐賀	神埼郡	古墳時代後期	1	玄室	円墳? 刀子 鎌 帯金具 鉸金具 丸玉 耳環 管玉 土師器坏須恵 器(提瓶・高坏)	1119
1019	切畑遺跡	佐賀	神埼市	弥生時代後期前半以前	1	SBO79 竪穴住居跡	甕 壺 高坏 器台 鉢	1120
				古墳時代後期	1	SBO90 竪穴住居跡	土製鏡 甕 壺 碗 坏	
				古墳時代後期～終末期	1	SK077 土墳	土師器(高坏・坏)	
1020	尾崎土生遺跡	佐賀	神埼市	古墳時代	1	SK5004 土墳	須恵器壺 土師器円盤状土製品ほ か	1121
1021	利田柳遺跡	佐賀	神埼市	弥生時代	1	SK9011 土墳	弥生土器(甕・壺)石包丁 砥石 ほ か	1122
				弥生時代	2	12号溝(甕棺を切る)		1123
1022	吉野ヶ里遺跡	佐賀	神埼市ほか	弥生時代	1	出土地未整理		1124
				弥生時代	1	3トレンチ		1125
1023	阿高遺跡	佐賀	佐賀市	古墳時代	3	C地区 SE030井戸	土師器坏蓋 須恵器甕土製円板 子持ち勾玉?井戸を埋める祭祀の 可能性。	1126
				古墳時代～中世	1	C地区 SD002 溝		1127
1024	平屋二本杉遺跡	佐賀	佐賀市	古墳時代後期	1	SK3025 土坑	坏 鉢 甕 高坏 甕 褐色	1128
				弥生時代	1	SK1014 土坑	砥石 磨石 台石 高坏 ほか	1129
				古墳時代	1	SK1278 土坑	須恵器片	
1025	久保泉丸山遺跡	佐賀	佐賀市	古墳時代	3	包含層		1130
1026	鈴熊遺跡	佐賀	佐賀市	古墳時代	1	ST001古墳 周溝内	円墳 須恵器(ハソウ・甕)土師器 坏 ミニチュア土器	1120
1027	牟田寄遺跡	佐賀	佐賀市	弥生時代～奈良時代	2	貝層付近 No3トレンチ	弥生土器(甕・鉢)砥石 土玉 土製 鏡ほか	1131
				古墳時代	3	貝層 2区	土製鏡 土玉 土師器甕 ほか	
				奈良時代～平安時代前半期	1	SK105 土坑	須恵器(坏蓋・坏身・高台付坏) 紡錘車 勾玉は、混入遺物の可能 性。	1132

				古墳時代後期～終末期	18	No.6 サブトレンチ	土製鏡 有孔円板 種子 ほか	1133
				古墳時代以降	2	No.7 サブトレンチ	土器 トレンチ床面に弥生時代後期の土坑状遺構を検出。	
				平安時代中期	2	15区 A トレンチ 9～3層 SX15005	鉢 手づくね土器 ほか 暗褐色	1134
				平安時代中期	3	SX15005 流3 15区流路3	土製鏡 土製人形 管玉 耳環ほか	
				古墳時代	1	16区 SE16038 井戸	土師器(短頸壺・丸底埴・鉢)須恵器壺 指押さえて成形 淡褐色	
				古墳時代後期～奈良時代	1	17区 SX17050流路	手づくね土器 坏 壺 鉢 支脚 ほか	
				弥生時代～中世	1	遺構外 P100198	灰白色	1135
1028	村徳永遺跡	佐賀	佐賀市	弥生時代後期前半	1	SH109 竪穴住居	壺 鉢 甕	1136
				弥生時代後期前半	1	SB201 掘立柱建物 ピット	土製紡錘車 手づくね土器 鉢	
1029	大野原遺跡	佐賀	佐賀市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	SH228 竪穴住居	支脚 削器 手づくね土器 ほか	1137
1030	御手水遺跡	佐賀	佐賀市	古墳時代前期	1	SH103 竪穴住居	甕 鉢 小型丸底壺 小型器台砥石	1138
1031	礫石 A 遺跡	佐賀	佐賀市	縄文時代晩期末	1	SJ54 土壙墓		1139
1032	惣座遺跡	佐賀	佐賀市	弥生時代後期後半	1	SD019 外濠		1140
1033	坪の上遺跡	佐賀	佐賀市	弥生時代初頭～中期初頭	1	SK260 土坑	甕 蓋坏 高坏 尖頭器	1141
1034	大日遺跡2区	佐賀	佐賀市	古墳時代後期	1	ST2001 古墳 玄室	轡 刀 鉢 刀子 鏃 管玉 丸玉 ガラス玉 須恵器(高坏・提瓶)耳環	1142
1035	長尾倉富遺跡	佐賀	多久市	縄文時代晩期前半～末葉	1	包含層		1143
1036	天山開拓遺跡	佐賀	多久市	古墳時代	5	包含層		1144
1037	天山遺跡	佐賀	多久市	古墳時代	1	包含層		
1038	東十郎古墳群	佐賀	鳥栖市	古墳時代終末期	2	5区5号墳	土玉 鏃 刀子 留め金具 ほか	1145
1039	前田遺跡	佐賀	鳥栖市	弥生時代～古墳時代	2	1354区 5号トレンチ		1146
1040	大久保遺跡	佐賀	鳥栖市	古墳時代後期	4	SX3301 不明遺構	手づくね土器 土製(鏡・管玉)鉄さ い 甕 高坏 ほか土製勾玉片1 点出土。	1147
				古墳時代	1	P50 ピット		
1041	梅坂古墳群	佐賀	鳥栖市	古墳時代後期	2	梅坂5号墳 石室	鉄鏃 鐔 引手金具 留め金具耳環 切子玉 ガラス玉 管玉ほか	1148
1042	二塚山遺跡群	佐賀	三養基郡	弥生時代	5	Ⅱ-60号土壙		1149
1043	大塚古墳	佐賀	三養基郡	古墳時代後期	1	玄室	円墳 須恵器 土師器 刀子片 管 玉 ガラス製小玉 ほか 祭祀場と	1150

							して再利用。	
1044	伊勢山遺跡	佐賀	三養基郡	古墳時代後期	1	第1区1号住居跡 (竪穴)	埴 器台	1151
				古墳時代後期	1	第1区3号住居址 (竪穴)	甕 平玉 土玉 ほか	
				古墳時代後期	1	第2区2号住居址 (竪穴)	坏 甕 埴 土鈴 ほか	
				古墳時代後期	2	第3区1号住居跡 (竪穴)	甕 滑石製円板 平玉 ほか	
1045	溝口遺跡	長崎	諫早市	弥生時代終末期	1	1号石棺墓	成人女性1体 肥前型器台片 鉄 鍍ガラス製小玉	1152
1046	肥賀太郎遺跡	長崎	島原市	縄文時代晩期	1	包含層		1153
1047	今福遺跡	長崎	南島原市	弥生時代中期中葉 ～弥生時代後期後葉	1	土器溜	ミニチュア土器 手づくね土器 土 製品 石器 弥生土器 ほか	1154
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭 ～中世～近世	2	B地区1号溝	杓子 ガラス玉 銅鍍 鏡 土玉 ほか	1155
1048	岩瀬・木柑子遺跡	熊本	菊池市	縄文時代後期～晩期	1	包含層		1156
1049	大久保遺跡	熊本	菊池市	縄文時代後期後半 ～晩期初頭	1	1304号住 竪穴住居	浅鉢 深鉢	1157
1050	上高橋高田遺跡	熊本	熊本市	古墳時代前期～後期 4世紀後半～5世紀	6	排水路 D区 IV層	土製模造鏡 小型壺 鏡片	1158
1051	石川遺跡	熊本	熊本市	古墳時代後期 6世紀初頭 TK47	2	10区 7号住居跡 竪 穴住居	ハソウ 甕片 天草式製塩土器 ガ ラス玉ほか	1159
1052	石の本遺跡群	熊本	熊本市	縄文時代後期～晩期	1	42-54号住居址 竪穴 住居	浅鉢 深鉢 打製石斧 磨石ほか	1160
				縄文時代後期～晩期	2	46-02号住居址 竪穴 住居	浅鉢 深鉢 石皿 磨石 石斧ほか	
				縄文時代後期～晩期	1	46-12号住居址 竪穴 住居	浅鉢 深鉢 注口土器 敲き石 焼 土塊 丁字頭?	
				縄文時代後期～晩期	2	49-68号 住居跡 竪 穴住居	敲き石 石鍬 浅鉢 深鉢 石斧 ほか	
				縄文時代後期～晩期	7	包含層		
1053	乾原・迎八反田遺跡群	熊本	熊本市	縄文時代晩期前半	1	住居跡 覆土 竪穴住居(番号不明)	土器	1161
1054	神水遺跡	熊本	熊本市	弥生時代～中世	1	包含層		1162
1055	神園田淵屋敷遺跡	熊本	熊本市	縄文時代晩期前半	2	1号住居 竪穴住居	焼土塊 土偶 深鉢 浅鉢 石錐 打製土掘具 ほか	1163
				弥生時代後期	1	2号土坑	打製土掘具	

1056	沈目遺跡	熊本	熊本市	縄文時代晩期	1	表採		1164
1057	上南部遺跡	熊本	熊本市	縄文時代後期後半 ～晩期前半	4	包含層		1165
1058	上江津湖遺跡	熊本	熊本市	古墳時代	1	包含層		1166
1059	前田遺跡	熊本	玉名市	弥生時代後期前半	1	SO12 竪穴住居	甕 鉢 ミニチュア土器 石鏃	1167
				弥生時代後期前半	1	SO73 竪穴住居	鉢 甕 器台 壺 管玉 石包丁砥石 ほか 他土製勾玉あり。	
				弥生時代後期前半	2	SO77 竪穴住居	甕 壺 砥石 磨製石鏃 ほか	
				弥生時代	1	S094 廃土内		
				弥生時代	1	包含層		
1060	古閑遺跡	熊本	玉名市	弥生時代中期	1	5トレンチ		1168
1061	柳町遺跡	熊本	玉名市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	4号竪穴住居跡	土師器(甕・壺・鉢)小型土製模造品	1169
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	6	包含層		
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	2	2号流路		
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	1号流路		
1062	中堂遺跡	熊本	人吉市	縄文時代晩期初頭	2	包含層		1170
1063	用七遺跡	熊本	八代市	弥生時代後期	1	14号竪穴式住居	大型壺 甕	1171
1064	方保田東原遺跡	熊本	山鹿市	弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	近江工業内第3トレンチ		1172
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	遺構外		
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	鹿本高校調査区域内		
				弥生時代終末期 ～古墳時代初頭	1	15号住居跡 竪穴住居	小形埴 ほか 丁字頭	1173
				弥生時代後期後半	1	1号住居跡 竪穴住居	甕 土玉 不明土製品 ほか表面にベンガラが付着。	1174
				弥生時代～中世	2	遺構外		
				弥生時代後期後半	1	1号溝 上層	甕 鉢 高坏 ほか	
				弥生時代～古代	1	831番地 包含層		
				弥生時代～古代	1	P241 3号溝		
				弥生時代～古代	1	P242 東西第1トレンチ内		
				弥生時代～古代	1	P79 包含層		1175
				弥生時代終末期	1	2号住居跡 竪穴住居	磨製石斧 器台 壺	

				～古墳時代初頭				
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	2区 6号住居跡 竪穴住居	壺 鉢 高坏 小型丸底壺器台 丁 字頭 頭部に三条の沈線 焼失住 居	1176
				弥生時代後期 ～古墳時代前期	1	2区 7号住居跡 竪穴住居	土器片 焼失住居	
				弥生時代～平安時代・中世	7	遺構外		
				弥生時代後期～古墳時代	1	110-2番地 遺構外	弥生時代後期主体。丁字頭？	1177
				弥生時代 ～古墳時代・平安時代	1	遺構外		1178
1065	別府遺跡	大分	宇佐市	古墳時代後期～終末期	1	SH6 竪穴住居	廃棄時に祭祀。	1179
1066	樋尻道遺跡	大分	宇佐市	弥生時代中期中葉 ～後期後半	13	10号墓及びその周辺 失蓋土壙墓	祭祀遺構 文献 27 では、土壙墓5号墓とその 周辺と記載。	1180 ・ 1181
1067	中安遺跡	大分	大分市	古墳時代～古代	1	四脚門 掘立柱建物 SB1255 f掘り方上層		1182
1068	毛井遺跡	大分	大分市	古墳時代後期 小田ⅢA期	1	B地区 SC2 2号竪穴住居跡 カマド周辺	土師器(甕・壺) 須恵器(坏蓋・坏 身・高坏)	1183
1069	下郡遺跡群	大分	大分市	弥生時代終末期 ～古墳時代終末期	1	SH05 5号住居址 竪穴住居	鉄鏃 土器	1184
				古墳時代中期	1	SH06 6号住居跡 竪穴住居	滑石製有孔円板 甕 壺 高坏 管 玉	1185
				縄文時代晩期 ～弥生時代中期	1	18トレンチ 表土	弥生時代中期が主体。	1186
				古墳時代前期前葉	1	SH105 竪穴住居	鉢 台付鉢	1187
1070	玉沢地区条里跡	大分	大分市	中世	1	SO81(水田層)	壺 高坏 水田祭祀	1188
1071	尾崎遺跡	大分	大分市	弥生時代後期後葉～終末期	1	SH-20 床面 (竪穴住居)	頭部に一条の刻み目。全体が赤色 顔料を施されている。	1189
1072	小田遺跡群 西田遺跡	大分	玖珠郡	古墳時代中期	1	18b号竪穴 竪穴住居	甕形土器 甕	1190
1073	真那井中原遺跡	大分	速見郡	弥生時代中期後半？	1	表探		1191
1074	後迫遺跡	大分	日田市	弥生時代～奈良時代	2	包含層	丁字頭	1192
1075	本村遺跡	大分	日田市	弥生時代後期後半～終末期	1	26号住居 竪穴住居		1193
1076	八幡上遺跡	宮崎	児湯郡	弥生時代後期	1	9号竪穴住居址	甕形土器 石鏃	1194
				弥生時代後期前半	4	10号竪穴住居址	甕形土器	
1077	中ノ迫 A 遺跡	宮崎	児湯郡	弥生時代終末期	3	住居跡 竪穴住居	甕 鉢形土器 砥石 高坏 鉄鏃	1195

				～古墳時代初頭			石包丁ほか	
1078	西都原 173 号墳	宮崎	西都市	古墳時代以降	1	表採		1196
1079	西下本庄遺跡	宮崎	東諸県郡	古墳時代	1	包含層		1197
1080	今房遺跡	宮崎	都城市	弥生時代後期～終末期	1	竪穴住居 16 SA16	高坏 甕の取っ手の可能性あり。	1198
1081	下大五郎遺跡	宮崎	都城市	弥生時代後期中葉	1	9号住居跡 竪穴住居	高坏 ミニチュア土器	1199
1082	平田遺跡 A 地点	宮崎	都城市	弥生時代中期後半	4	SA16 竪穴住居	甕	1200
1083	祝吉遺跡	宮崎	都城市	古墳時代前期	1	住居2 (竪穴)	土製丸玉 手づくね土器 土師器 鉄鏃 砥石 鈍	1201
1084	下那珂遺跡	宮崎	宮崎市	弥生時代後期～終末期	1	11号竪穴住居跡	鉢 石包丁	1202
				弥生時代後期～終末期	1	56号竪穴住居跡	鉢 器台 鉄鏃	
1085	山ノ田第1遺跡	宮崎	都城市	古墳時代前期	1	SA6 竪穴住居	砥石 磨石 甕 壺 ミニチュア土器 高坏 鉢	1203
1086	柳迫遺跡	宮崎	宮崎市	古墳時代	1	包含層		1204
1087	浦田遺跡	宮崎	宮崎市	弥生時代後期後半	1	SA7 竪穴住居	壺 高坏	1205
1088	ズクノ山第1遺跡	宮崎	宮崎市	弥生時代中期後半 ～後期初頭	1	SA-10 竪穴住居	丁字頭 甕形土器 壺形土器 磨 製石鏃 軽石製紡錘車 軽石 叩き石 台石	1206
				弥生時代後期	1	SA-16 竪穴住居	花卉状住居 壺形土器 土器片 台石 叩き石 軽石	
				弥生時代中期～後期	1	SA-29 竪穴住居	丁字頭 土器片	
1089	外川江遺跡	鹿児島	薩摩川内市	古墳時代	1	包含層		1207
1090	中ノ丸遺跡	鹿児島	鹿屋市	弥生時代前期末葉 ～中期後半 山ノ口式期	2	住居址1号 床面竪穴住居	石鏃 特殊石器 叩き石 甕 壺 10 本の沈線	1208
1091	中ノ原遺跡	鹿児島	鹿屋市	縄文時代晩期 入佐式土器	1	住居址1号 竪穴住居	深鉢 打製石斧 ほか	1209
1092	市ノ原遺跡	鹿児島	日置市	弥生時代前期?	1	包含層	穿孔痕あり。沈線あり。	1210
1093	尾ヶ原遺跡	鹿児島	日置市	縄文時代晩期	1	包含層	穿孔付近に沈線あり。丁寧なヘラミ ガキ。	1211
1094	祝原遺跡	鹿児島	南さつま市	弥生時代終末期	1	包含層		1212
1095	木落遺跡	鹿児島	南さつま市	縄文時代晩期?	1	5トレンチ III層下部		1213
1096	勝連城跡 北貝塚	沖縄	うるま市	グスク時代～現代	1	B-7グリット 第2層		1214
1097	仲宗根貝塚	沖縄	沖縄市	グスク時代 14世紀前後	1	A地区 第2層	第2次発掘調査2層から総数122 点の玉類出土。(丸玉・小玉)玉類 の素材は、骨・貝・ガラス	1215
1098	破名城古島遺跡	沖縄	島尻郡	グスク時代～近世	1	包含層		1216
1099	我謝遺跡	沖縄	中頭郡	グスク時代 13世紀～14世紀 15世紀～17世紀	1	H地点 包含層	13世紀から14世紀が主体。グスク 系土器、陶磁器、玉、石器ほか	1217
				グスク時代	2	包含層		

1100	首里城跡 (御内原地区)	沖縄	那覇市	グスク時代(中世)～近代	1	包含層		1219
1101	那岐原遺跡	沖縄	那覇市	貝塚時代 (古墳時代～平安時代)	1	すー93 第Ⅲ層	全体的にナデ消しを施す。	1220
1102	糸数城跡	沖縄	南城市	グスク時代 13世紀～15世紀中頃	1	ANM52 表土層		1221



引用・参考文献 ※「付篇 日本列島出土土製勾玉集成」にある文献の番号と、下記の通し番号は対応している。

1. 北海道開拓記念館 1982『二ツ岩 北海道開拓記念館研究報告書第7号』
2. 北海道岩内教育委員会 1958『岩内遺跡』
3. 北海道恵庭市教育委員会 2003『カリンバ3遺跡(2)』
4. 北海道埋蔵文化財センター 1987『西野幌遺跡 11・西野幌遺跡 13・西野幌遺跡 14・下学田遺跡』
5. 北海道埋蔵文化財センター 2006『対雁2遺跡(7)』
6. 北海道埋蔵文化財センター 2003『対雁2遺跡(4)』
7. 木古内町教育委員会 2003『木古内町泉沢2遺跡A地点』
8. 瀬棚町教育委員会 1983『瀬棚南川』
9. 札幌市教育委員会 2005『C504遺跡』
10. 寿都町教育委員会 1985『寿都町文化財調査報告書』
11. 伊達市噴火湾文化研究所 2001『有珠4遺跡発掘調査概要』
12. 北海道埋蔵文化財センター 1997『調査年報9』
13. 北海道埋蔵文化財センター 1996・1997『キウス4遺跡(2)』
14. 北海道埋蔵文化財センター 1994『キウス5遺跡・キウス7遺跡(2)・ケネフチ8遺跡』
15. 北海道埋蔵文化財センター 1998『キウス5遺跡(5)』
16. 北海道埋蔵文化財センター 1996『キウス7遺跡(3)』
17. 北海道埋蔵文化財センター 2008『千歳市キウス9遺跡』
18. 千歳市教育委員会 1994『丸子山遺跡における考古学的調査』
19. 北海道埋蔵文化財センター 1987『ママチ遺跡Ⅲ』
20. 千歳市教育委員会 1978『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』
21. 北海道教育委員会 1976『北海道縦貫自動車道(苫小牧市植苗～千歳市平和)埋蔵文化財包蔵地群発掘調査報告書』
22. 千歳市教育委員会 1986『梅川3遺跡における考古学的調査』
23. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1997『柏原5遺跡』
24. 苫小牧市教育委員会 1980『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』
25. 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』
26. 苫小牧市教育委員会 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ』
27. 北海道埋蔵文化財センター 1982『美沢川流域の遺跡群』
28. 北海道埋蔵文化財センター 1988『石川1遺跡』
29. 北海道埋蔵文化財センター 1998『上磯町茂別遺跡』
30. 北海道余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ』
31. 北海道余市町教育委員会 2001『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』
32. 青森県教育委員会 2003『朝日山(2)遺跡Ⅶ』
33. 青森県教育委員会 2002『朝日山(2)遺跡Ⅴ』
34. 青森県埋蔵文化財調査センター 2008『石江遺跡・三内沢部(3)遺跡Ⅲ』
35. 青森県教育委員会 2000『野木遺跡Ⅲ』
36. 青森県教育委員会 2003『野尻(1)遺跡Ⅴ』
37. 青森県教育委員会 1998『野尻(1)遺跡Ⅰ』
38. 青森県教育委員会 2006『野尻(3)遺跡Ⅱ』
39. 青森県埋蔵文化財センター 2002『安田(2)遺跡Ⅲ』
40. 青森県教育委員会 2010『中平遺跡Ⅱ』
41. 青森県教育委員会 1995『山元(2)遺跡』
42. 青森県教育委員会 1994『山元(3)遺跡』
43. 青森県教育委員会 1998『高屋敷館遺跡』
44. 青森市教育委員会 1985『長森遺跡発掘調査報告書』
45. 青森県埋蔵文化財調査センター 2007『赤平(2)遺跡・赤平(3)遺跡』
46. 青森県教育委員会 2008『ふくべ(3)遺跡Ⅱ・ふくべ(4)遺跡Ⅱ』
47. 青森県教育委員会 1991『中野平遺跡 第2分冊—古代編—』
48. 青森県下田町教育委員会 1997『中野平遺跡』
49. 青森県教育委員会 1988『上尾駸(2)遺跡Ⅱ』
50. 青森県黒石市教育委員会 1989『甲里見(2)遺跡』
51. 青森県教育委員会 1998『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ発掘調査報告書』
52. 青森県埋蔵文化財調査センター 1998『熊無(1)遺跡・熊無(2)遺跡・熊無(6)発掘調査報告書』
53. 青森県教育委員会 1995『泉山遺跡発掘調査報告書』
54. 青森県階上町教育委員会 2000『滝端遺跡発掘調査報告書』
55. 青森県十和田市教育委員会 1984『明戸遺跡発掘調査報告書』
56. 青森県八戸市教育委員会 2000『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』
57. 青森県教育委員会 2006『林ノ前遺跡Ⅱ遺物・自然科学分析編』
58. 八戸市教育委員会 1991『八戸市内遺跡発掘調査報告2 風張(1)遺跡』
59. 青森県埋蔵文化財調査センター 1999『櫛引遺跡』
60. 八戸遺跡調査会 2006『是川中居遺跡5』
61. 八戸市教育委員会 2002『盲堤沢(3)遺跡発掘調査報告書』
62. 青森県教育委員会 2004『根岸山添遺跡』
63. 八戸市教育委員会 1997『境沢頭遺跡・仲間木遺跡・鳥河岸(2)遺跡・角内山遺跡』
64. 青森県教育委員会 2007『田代遺跡Ⅱ』
65. 八戸市教育委員会 2006『田向冷水遺跡Ⅱ』
66. 青森県埋蔵文化財センター 1983『鶉窪遺跡発掘調査報告書』
67. 青森県教育委員会 2001『上野遺跡』
68. 八戸市教育委員会 1986『丹後谷地遺跡発掘調査報告書』
69. 青森県教育委員会 2006『潟野遺跡』
70. 青森県八戸市教育委員会 2005『八戸市内遺跡発掘調査報告書21』

71. 八戸市教育委員会 1988『田面木遺跡』
72. 青森県八戸市教育委員会 1989『赤御堂遺跡』
73. 八戸市教育委員会 1983『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』
74. 青森県平賀町教育委員会 1979『石郷遺跡』
75. 青森県教育委員会 1986『今津遺跡 間沢遺跡』
76. 宇鉄遺跡発掘調査会 1996『宇鉄遺跡』
77. 平賀町教育委員会 2000『大光寺新城跡遺跡』
78. 青森県教育委員会 1980『永野遺跡発掘調査報告書』
79. 青森県山田高等学校考古学研究部 1973『撚糸文』第4号
80. 大畑町教育委員会 2001『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』
81. 岩手県江釣子村教育委員会 1985『江釣子遺跡群』
82. 北上市教育委員会 1989『藤沢遺跡(1988年度)』
83. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991『上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告』
84. 北上市教育委員会 2004『北上市内試掘調査報告』
85. 北上市立埋蔵文化財センター 2003『立花南遺跡』
86. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005『滝の沢地区遺跡発掘調査報告』
87. 北上市立埋蔵文化財センター 1986『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
88. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986『駒板遺跡発掘調査報告』
89. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告』
90. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『河崎の柵擬定地発掘調査報告』
91. 胆沢町教育委員会 1981『小十文字遺跡』
92. 水沢市教育委員会 1995『水沢遺跡群範囲確認調査』
93. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『大清水上遺跡発掘調査報告』
94. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1984『小屋畑遺跡発掘調査報告』
95. 岩手県久慈市教育委員会 1989『中長内遺跡(Ⅱ)』
96. 久慈市教育委員会 1988『中長内遺跡』
97. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告』
98. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001『稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告』
99. 岩手県紫波郡矢巾町教育委員会 1998『徳丹城跡』
100. 一戸町教育委員会 1982『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅱ』
101. 一戸町教育委員会 1981『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ』
102. 一戸町教育委員会 1988『上野遺跡』
103. 財団法人岩手県埋蔵文化財センター 2000『上野遺跡発掘調査報告』
104. 一戸町教育委員会 2003『一戸町文化財調査報告書第46集』
105. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』
106. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『浅石遺跡発掘調査報告書』
107. 北上市立埋蔵文化財センター 1982『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告』
108. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『門松遺跡発掘調査報告』
109. 浄法寺町教育委員会 2003『上杉沢遺跡』
110. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1981『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告』
111. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1981『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告』
112. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『下村遺跡発掘調査報告』
113. 二戸市教育委員会 1981『中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
114. 北上市立埋蔵文化財センター 1982『金崎バイパス関連遺跡発掘調査報告(Ⅲ)』
115. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳掘調査報告』
116. 水沢市埋蔵文化財センター 1999『杉の堂遺跡』
117. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1981『ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告(Ⅰ)』
118. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1982『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告(Ⅱ)』
119. 北上市立埋蔵文化財センター 2003『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』
120. 北上市立埋蔵文化財センター 2001『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』
121. 北上市立埋蔵文化財センター 2003『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書』
122. 北上市立埋蔵文化財センター 2005『台太郎遺跡第51次発掘調査報告書』
123. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『矢盛遺跡第10・11次・向中野館遺跡第9次・台太郎遺跡第58次発掘調査報告書』
124. 都南村教育委員会 1979『百目木遺跡』
125. 北上市立埋蔵文化財センター 2007『細谷地遺跡第9次・第10次発掘調査報告』
126. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告』

127. (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『本宮熊堂B遺跡第13・15・20次発掘調査報告』
128. 盛岡市教育委員会 1981『大館遺跡群』
129. (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1982『盛岡市葦内遺跡』
130. 宮城県教育委員会 1985『香ノ木遺跡 色麻古墳群』
131. 仙台市教育委員会 2004『鴻ノ巣遺跡』
132. 仙台市教育委員会 1982『栗遺跡』
133. 仙台市教育委員会 2007『長町駅東遺跡第4次調査』
134. 宮城県教育委員会 2000『市川橋遺跡』
135. 宮城県教育委員会 2001『山王遺跡八幡地区の調査2』
136. 宮城県教育委員会 1981『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』
137. 秋田県教育委員会 1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』
138. 秋田県教育委員会 1981『杉沢台遺跡 竹生遺跡』
139. 秋田県埋蔵文化財センター 2003『開防遺跡・貝保遺跡』
140. 秋田県教育委員会 2004『小林遺跡II』
141. 山形県鶴岡市教育委員会 2004『山田遺跡発掘調査報告書』
142. 山形県鶴岡市教育委員会 2003『山田遺跡発掘調査報告書』
143. 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1999『宮の前遺跡第3次発掘調査報告書』
144. 福島県文化センター 1989『東北横断自動車道遺跡調査報告6』
145. 福島県教育委員会他 2001『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告』
146. 福島県教育委員会 2002『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告2』
147. 本宮町教育委員会 1971『岩代陣場遺跡の研究』
148. いわき市教育委員会 ほか 1981『朝日長者遺跡 夕日長者遺跡』
149. いわき市教育委員会 ほか 2002『荒田目条理制遺構・砂畑遺跡』
150. いわき市教育委員会 2000『郡遺跡・広畑B遺跡』
151. 財団法人いわき市教育文化事業団 2000『根岸遺跡』
152. 福島県教育委員会 1990『矢吹地区遺跡発掘調査報告』
153. 福島県会津農林事務所 2007『油田遺跡』
154. 会津高田町教育委員会 1990『十五壇遺跡発掘調査報告書』
155. 郡山市教育委員会 1999『清水内遺跡-6・8・9区調査報告-』第二冊
156. 郡山市教育委員会 1999『清水内遺跡-6・8・9区調査報告-』第一冊
157. 福島県 1964『福島県史』第6巻
158. 福島県教育委員会 ほか 1975『東北自動車道遺跡調査報告』
159. 福島県教育委員会 1989『国道113号バイパス遺跡調査報告V』
160. 財団法人福島県文化センター 1996『相馬開発関連遺跡調査報告IV』
161. 保原町教育委員会 1992『二井田地区遺跡発掘調査報告I』
162. 保原町 1983『保原町史』第2巻
163. 福島県教育委員会ほか 2000『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書8』
164. 福島県教育委員会 1980『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告II』
165. 茨城県教育財団 2005『石岡別所遺跡』
166. 陸平調査団 1996『根本遺跡』
167. 篠山遺跡発掘調査会 1986『常陸笹山』
168. 財団法人茨城県教育財団 1988『一般県道新川・江戸崎線遺跡改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
169. 東京国立博物館 1980『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇(関東1)』便利堂
170. 財団法人茨城県教育財団 1996『牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』
171. 財団法人茨城県教育財団 1995『牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(III)』
172. 財団法人茨城県教育財団 2005『ナギ山遺跡1 柏峰B遺跡』
173. 牛久市・奥原遺跡発掘調査会 1989『奥原遺跡』
174. 財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 1998『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財発掘調査報告XV』 2分冊
175. 茨城県鹿島町教育委員会 1983『鹿島町内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書IV』
176. 茨城県鹿島町教育委員会 1993『国神遺跡IV』
177. 財団法人茨城県教育財団 2000『国補緊急地方道路整備事業一般県道荒井麻生線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1』
178. 財団法人茨城県教育財団 2004『戸崎中山遺跡』
179. 山武考古学研究所 1995『神岡上古墳群』
180. 財団法人茨城県教育財団 2003『羽黒遺跡』
181. 日本道路公団 ほか 2005『辰海道遺跡4』
182. 日本道路公団 ほか 2005『犬田神社前遺跡』
183. 財団法人茨城県教育財団 1995『真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書』
184. 財団法人茨城県教育財団 1992『一般道路西小塙真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
185. 千代川村教育委員会 1993『下栗野方台遺跡』
186. 財団法人茨城県教育財団 1997『島名福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』
187. 財団法人茨城県教育財団 1999『島名福田坪地区土地区画

- 整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
188. 財団法人茨城県教育財団 2000『島名福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
189. 財団法人茨城県教育財団 2001『島名福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
190. 財団法人茨城県教育財団 2004『島名熊の山遺跡』
191. 財団法人茨城県教育財団 2007『島名熊の山遺跡』
192. 財団法人茨城県教育財団 2006『島名熊の山遺跡』
193. 財団法人茨城県教育財団 2008『島名熊の山遺跡』
194. 財団法人 茨城県教育財団 2010『島名熊の山遺跡』
195. 財団法人 茨城県教育財団 2012『島名熊の山遺跡』
196. 財団法人 茨城県教育財団 2014『島名熊の山遺跡』
197. 財団法人 茨城県教育財団 2014『島名熊の山遺跡』※196の報告書とは別のもの・同じ年に発刊
198. 財団法人茨城県教育財団 2007『島名境松遺跡 島名前野東遺跡』
199. 財団法人茨城県教育財団 2002『島名前野東遺跡』
200. 財団法人茨城県教育財団 2004『島名前野東遺跡』
201. 財団法人茨城県教育財団 1998『(仮称) 萱丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
202. 財団法人茨城県教育財団 1995『北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書』
203. 財団法人茨城県教育財団 1998『(仮称) 中根・金田台地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
204. 財団法人茨城県教育財団 1997『(仮称) 萱丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
205. 財団法人茨城県教育財団 2000『一般国道 354 号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』
206. 土浦市教育委員会他 2006『弁才天遺跡北西原遺跡(第 5 次調査)』
207. 財団法人茨城県教育財団 1995『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
208. 財団法人茨城県教育財団 1993『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
209. 山武考古学研究所 1996『東山団地遺跡』
210. 土浦市教育委員会 2005『刑部遺跡』
211. 土浦市教育委員会 2002『木田余台Ⅱ』
212. 土浦市教育委員会 2004『大宮前遺跡』
213. 財団法人茨城県教育委員会 1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
214. 財団法人茨城県教育委員会 1999『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
215. 財団法人茨城県教育財団 1999『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
216. 財団法人茨城県教育財団 1998『茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書』
217. 財団法人茨城県教育財団 1998『北関東自動車道 (友部～水戸) 建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
218. 井上義安 1988『茨城町権現峯遺跡』
219. 財団法人茨城県教育財団 2007『羽黒山遺跡』
220. 財団法人茨城県教育財団 2006『上岩瀬富士山遺跡』
221. ひたちなか市教育委員会 2001『武田西塙遺跡』
222. 財団法人茨城県教育財団 1995『常陸那珂有料道路事業地内埋蔵文化財調査報告書』
223. ひたちなか市ほか 2008『鷹ノ巣』
224. 財団法人茨城県教育財団 1991『都市計画道路 3・4・2 鉾田環状線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
225. 国立歴史民俗博物館 1985『祭祀関係遺物出土地名表』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集
226. 鹿島町木滝台遺跡発掘調査会 日本文化財研究所 1978『木滝台遺跡 桜山古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』
227. 石井 毅 1981『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
228. 財団法人茨城県教育財団 1990『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 19』
229. 財団法人茨城県教育財団 1982『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 6』
230. 財団法人茨城県教育財団 1988『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 17』
231. 茨城県教育財団 1985『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 12』
232. 栃木県教育委員会 2000『成源寺遺跡』
233. 栃木県教育委員会 2005『東谷・中島地区遺跡群 5』
234. 栃木県教育委員会 1987『花の木町遺跡—栃木県子ども総合科学館 (仮称) 建設に伴う発掘調査報告—』
235. 栃木県教育委員会 1996『金山遺跡Ⅳ』
236. 栃木県教育委員会 2001『寺野東遺跡Ⅲ』
237. 栃木県教育委員会 1998『寺野東遺跡Ⅳ』
238. 栃木県教育委員会 1997『寺野東遺跡Ⅴ』
239. 栃木県教育委員会 1996『八幡根東遺跡』
240. 栃木県教育委員会 1997『八幡根東遺跡』
241. 栃木県教育委員会 1995『柿の内遺跡 下台原南遺跡』
242. 栃木県教育委員会 2005『東谷・中島地区遺跡群 6』
243. 上三川町教育委員会 1988『薄市・大山遺跡』
244. 栃木県教育委員会 2001『松山遺跡』
245. 栃木県教育委員会 1991『野木Ⅲ遺跡』
246. 栃木県教育委員会 1998『清六Ⅲ遺跡Ⅱ』
247. 栃木県教育委員会 1999『清六Ⅲ遺跡Ⅲ』
248. 栃木県教育委員会 2001『八剣遺跡』
249. 栃木県教育委員会 1999『下野国分寺跡 X I V』

250. 栃木県教育委員会 1984『赤羽根』
251. 栃木県教育委員会 2001『藤岡神社遺跡』
252. 栃木県教育委員会 2008『北原遺跡』
253. 立正大学 1987『下野・大和久古墳群』
254. 桜の木遺跡調査団 2005『桜の木遺跡調査報告書1』
255. 栃木県教育委員会 1999『伊勢崎Ⅱ遺跡』
256. 栃木県教育委員会 2001『鶴田A遺跡Ⅰ』
257. 群馬県安中市教育委員会 1995『荒神平・吹上遺跡』
258. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2004『舞台遺跡(2)』
259. 群馬県企業局 1980『伊勢崎・東流通団地遺跡』
260. 群馬県教育委員会 1999『三和工業団地Ⅰ遺跡(2)』
261. 板倉町教育委員会 1985『伊勢ノ木・小保呂遺跡発掘調査報告書』
262. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982『歌舞伎遺跡』
263. 群馬県教育委員会 1984『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
264. 群馬県教育委員会 ほか、1996『天引狐崎遺跡』
265. 群馬県教育委員会 ほか、1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』
266. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡』
267. 桐生市教育委員会 1978『千網谷戸遺跡発掘調査報告』
268. 群馬県教育委員会 1990『有馬遺跡Ⅱ』
269. 北橋村教育委員会 1996『北町遺跡 田ノ保遺跡』
270. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2007『中郷田尻遺跡』
271. 群馬県渋川市教育委員会 2008『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ』
272. 群馬県勢多郡赤城村教育委員会 2005『見立相女子遺跡Ⅰ・Ⅱ』
273. 渋川市教育委員会 2008『下遠原遺跡A・C区』
274. 高崎市教育委員会 2004『史跡日高遺跡』
275. 山武考古学研究所 1983『井出村東遺跡』
276. 群馬県教育委員会 ほか、1991『三ツ寺Ⅱ遺跡』
277. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『小八木志志貝戸遺跡群1』
278. 群馬県教育委員会 1987『下斉田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡』
279. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』
280. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『新保田中村前遺跡Ⅱ』
281. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『新保田中村前遺跡Ⅲ』
282. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 ほか、1988『新保遺跡Ⅱ』
283. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987『新保遺跡Ⅰ』
284. 群馬県教育委員会 ほか、1997『多比良追部野遺跡』
285. 高崎市教育委員会 2002『高崎情報団地Ⅱ遺跡』
286. 高崎市遺跡調査会 2000『綿貫堀米前Ⅱ遺跡』
287. 群馬県教育委員会 ほか、1984『熊野堂遺跡(1)』
288. 群馬県教育委員会 ほか、1990『熊野堂遺跡(2)』
289. 群馬県群馬町教育委員会 1989『西浦北遺跡』
290. 群馬県教育委員会 1988『後田遺跡Ⅱ』
291. 月夜野町教育委員会 2005『上組北部遺跡群Ⅱ』
292. 山武考古学研究所 1990『古立東山遺跡 八木連狸沢遺跡 古立中村遺跡 八木連荒畑遺跡』
293. 富岡市教育委員会 1997『東八木遺跡 阿曾岡・権現堂遺跡』
294. 富岡市教育委員会 1994『一ノ宮押出遺跡』
295. 富岡市教育委員会 1996『上丹生市子塚・山ノ上遺跡』
296. 群馬県教育委員会 ほか、1995『中高瀬観音山遺跡』
297. 群馬県教育委員会 ほか、1997『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』
298. 群馬県教育委員会 ほか、1996『南蛇井増光寺遺跡Ⅳ』
299. 群馬県沼田市教育委員会 2003『日影平遺跡』
300. 群馬県教育委員会 1985『石墨遺跡』
301. 群馬県沼田市教育委員会 2003『向田遺跡』
302. 群馬県教育委員会 ほか、1993『下川田下原遺跡 下川田平井遺跡』
303. 群馬県沼田市教育委員会 1993『上久屋地区遺跡群』
304. 群馬県教育委員会 ほか、1990『戸神諏訪遺跡』
305. 小野真一 1982『祭祀遺跡地名総覧』考古学ライブラリー11
306. 群馬県藤岡市教育委員会 2004『上落合岡遺跡』
307. 群馬県藤岡市教育委員会 1982~1985『F2 緑埜地区遺跡群Ⅰ』
308. 群馬県教育委員会 ほか、2002『荒砥諏訪西遺跡Ⅰ』
309. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000『内堀遺跡群XⅠⅠ』
310. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991『内堀遺跡群Ⅳ』
311. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992『横俵遺跡群Ⅳ』
312. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988『内堀遺跡群Ⅱ』
313. 大宮市遺跡調査会 2000『B-22号遺跡(土呂陣屋跡)発掘調査報告』
314. 大宮市遺跡調査会 1996『三崎台遺跡』
315. 大宮市遺跡調査会 1992『B-105号遺跡』
316. 大宮市遺跡調査会 1983『大宮公園内遺跡』
317. 桶川市教育委員会 2007『後谷遺跡』
318. 春日部市遺跡調査会 1995『坊荒句北(1,2次)坊荒句、立山遺跡』
319. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『猿貝北・新

- 町口』
320. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『戸崎前Ⅱ/薬師堂根Ⅱ』
321. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『築道下遺跡Ⅱ』
322. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2004『下田町遺跡Ⅰ』
323. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2005『下田町遺跡Ⅱ』
324. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2006『下田町遺跡Ⅲ』
325. 大場磐雄 1972「埼玉県の祭祀遺跡」『神道宗教』第65・66号
326. 寄居町教育委員会 1984『寄居町史』原始 古代 中世資料編
327. 浦和市遺跡調査会 1993『木村遺跡発掘調査報告書（第Ⅶ地点）』
328. 浦和市遺跡調査会 1987『木村遺跡発掘調査報告書（第Ⅶ地点）』
329. 浦和市遺跡調査会 1994『上大久保新田遺跡 発掘調査報告書』
330. 浦和市遺跡調査会 1987『上野田西台遺跡発掘調査報告書』
331. 浦和市遺跡調査会 1992『北宿遺跡発掘調査報告書』
332. 浦和市遺跡調査会 1986『北宿・馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』
333. 浦和市遺跡調査会 1983『北宿・馬場北・馬場東・馬場・小室山遺跡発掘調査報告書』
334. 浦和市遺跡調査会 1993『前窪遺跡発掘調査報告書』
335. 浦和市遺跡調査会 1996『前窪遺跡発掘調査報告書（第3次）』
336. 浦和市遺跡調査会 1999『水深西遺跡・水深北遺跡（第2次）・水深遺跡（第3次）発掘調査報告書』
337. 浦和市遺跡調査会 1992『子野上遺跡発掘調査報告書（第4次）』
338. 浦和市教育委員会 1991『大古里遺跡（第9・10・11・12地点） 稻荷原遺跡』
339. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『須黒神社遺跡』
340. 浦和市遺跡調査会 1985『大間木内谷・和田北・和田南・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書』
341. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『下野田本村遺跡』
342. 小倉均 岩井重雄 1977『白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告書』
343. 浦和市遺跡調査会 1983『西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書』
344. さいたま市遺跡調査会 2005『大谷場小池下遺跡』
345. さいたま市遺跡調査会 2008『下野田稻荷原遺跡（第9次）』
346. 埼玉県さいたま市遺跡調査会 2002『側ヶ谷戸貝塚』
347. 岩槻市 1983『岩槻市史 考古史料編』
348. 日本道路公団 ほか、1972『加倉 西原 馬込 平林寺』
349. 貞末堯司 1972『中小坂遺跡』ニュー・サイエンス社
350. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『稻荷前遺跡（B・C区）』
351. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『桑原遺跡』
352. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2008『木曾免遺跡』
353. 小松フォークリフト株式会社 ほか、2000『西原大塚遺跡 第45地点発掘調査報告書』
354. 埼玉県志木市遺跡調査会 2005『西原大塚遺跡第110地点発掘調査報告書』
355. 埼玉県志木市遺跡調査会 2008『城山遺跡第58・60地点』
356. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『東地総田遺跡』
357. 合角ダム水没地域総合調査会 1995『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』
358. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『鍛冶谷・新田口遺跡』
359. 埼玉県 ほか、2007『久台遺跡Ⅲ』
360. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2005『雅楽谷遺跡Ⅱ』
361. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『代正寺・大西』
362. 東松山市教育委員会 1993『岩鼻遺跡（第2次）』
363. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか、2006『杉の木遺跡』
364. 東松山市教育委員会 2003『杉の木遺跡（第3次）』
365. 船川遺跡調査会 1987『船川遺跡』
366. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『蟹沢・芳沼 入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田』
367. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『大野田西遺跡』
368. 滑川町月輪遺跡群発掘調査会 2008『月輪遺跡群』
369. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XV I I I』
370. 今井 宏 1984『屋田・寺ノ台』
371. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『砂田前遺跡』
372. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『新屋敷東・本郷前東』
373. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993『ウツギ内・

- 砂田・柳町』
374. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『木通詰・砂田前』
375. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000『堀東/城西Ⅱ』
376. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993『上敷免遺跡』
377. 埼玉県大里郡川本町教育委員会 1991『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』
378. 岡部町 ほか 2003『宮西遺跡Ⅰ』
379. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『如意遺跡』
380. 富士見市遺跡調査会 1984『針ヶ谷遺跡群』
381. 富士見市遺跡調査会 1983『針ヶ谷遺跡群』
382. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『古井戸』
383. 本庄市教育委員会 1986『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
384. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996『今井川越田遺跡Ⅱ』
385. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 ほか 2007『夏目/夏目西/弥藤次』
386. 本庄市教育委員会 2004『九反田(Ⅲ次調査)・観音塚(Ⅲ次調査)』
387. 埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 1988『真鏡寺後遺跡Ⅱ』
388. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『札之辻・小井戸』
389. 和光市教育委員会 2004『市内遺跡発掘調査報告書7』
390. 千葉県土木部 ほか 1990『大栄栗源干潟線埋蔵文化財調査報告書』
391. 我孫子市教育委員会 2000『別当地遺跡』
392. 千葉県教育委員会 1980『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』
393. 我孫子市教育委員会 1987『西台北遺跡』
394. 我孫子市教育委員会 1985『大久保遺跡』
395. 我子孫市教育委員会 2004『チアミ遺跡』
396. 白浜町 ほか 1989『小滝涼源寺』
397. 市原市教育委員会 ほか 2006『市原市長平台遺跡』
398. 財団法人市原市文化財センター ほか 1992『市原市叶台遺跡』
399. 市原市教育委員会 ほか 2005『市原市加茂遺跡A・B地点』
400. 市原市教育委員会 ほか 1979『唐崎台』
401. 財団法人千葉県文化財センター 1999『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書11』
402. 財団法人市原市文化財センター 1984『片又木遺跡』
403. 市原市教育委員会 2006『市原市南岩崎遺跡』
404. 財団法人千葉県文化財センター ほか 2004『千原台ニュータウンⅪ』
405. 財団法人千葉県文化財センター ほか 2006『千原台ニュータウンⅩⅣ』
406. 財団法人千葉県文化財センター ほか 2007『千原台ニュータウンⅩⅥ』
407. 財団法人千葉県文化財センター ほか 2007『千原台ニュータウンⅩⅨ』
408. 財団法人千葉県文化財センター ほか 2007『千原台ニュータウンⅩⅦⅦ』
409. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1986『千原台ニュータウンⅡ』
410. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ』
411. 市原市街路課 ほか 1985『草刈遺跡』
412. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1991『千原台ニュータウンⅣ』
413. 財団法人千葉県開発公社 1974『市原市大厩遺跡』
414. 八幡一郎 1942『関東地方先史硬玉製品目録』『人類学雑誌』第57巻11号 日本人類学会
415. 市原市教育委員会 2008『一市原市御林跡遺跡Ⅱ』
416. 市原市教育委員会 1995『市原市内遺跡発掘調査報告』
417. 市原市 ほか 1999『市原市市原条里制遺跡』
418. 日本道路公団 ほか 1997『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書』
419. 市原市 ほか 2004『市原市山田橋大山台遺跡』
420. 財団法人市原市文化財センター ほか 1999『山田橋表通遺跡』
421. 市原市教育委員会 市原市文化財センター 1991『市原市姉崎宮山遺跡 小田部向原遺跡 雲ノ境遺跡』
422. 千葉県文化財センター ほか 2003『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書1』
423. 印西町 ほか 1993『駒形北遺跡発掘調査報告書』
424. 千葉ニュータウン事業本部 ほか 2008『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅩ』
425. 本埜村 ほか 1994『宮内遺跡発掘調査報告書』
426. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか 1994『吉高浅間古墳発掘調査報告書』
427. 印旛村 ほか 1991『油作第1発掘調査報告書』
428. 平賀遺跡群発掘調査会 1986『平賀』
429. 千葉県土木部 ほか 1985『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
430. 酒直遺跡発掘調査会 1986『酒直遺跡発掘調査報告書』
431. 東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』第Ⅱ分冊
432. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1997『県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書1』
433. 財団法人山武郡市文化財センター ほか 1996『台前遺跡上引切遺跡』

434. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、2003『池田丸山・山荒久・沖荒久遺跡』
435. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、1996『大綱山田台遺跡群Ⅲ』
436. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、1997『大綱山田台遺跡群Ⅳ』
437. 財団法人千葉県文化財センター 1987『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』
438. 株式会社アート住建 ほか、2008『千葉県柏市呼塚遺跡 第10次調査報告書』
439. 財団法人香取郡市文化財センター 2002『多古台遺跡群Ⅱ』
440. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1984『東総用水』
441. 財団法人香取郡市文化財センター ほか、1999『境原遺跡』
442. 財団法人香取郡市文化財センター 1998『地々免遺跡』
443. 財団法人香取郡市文化財センター 1998『中ノ台遺跡C地区』
444. 財団法人千葉県都市公社 ほか、1975『阿玉台北遺跡』
445. 財団法人千葉県文化財センター 1990『佐原市吉原三王遺跡』
446. 千葉県土木部 ほか、1997『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書1』
447. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1990『請西遺跡群Ⅰ』
448. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1994『請西遺跡群Ⅲ』
449. 木更津市教育委員会 1991『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
450. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1989『小浜遺跡郡Ⅱマミヤク遺跡』
451. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、2002『中尾遺跡群Ⅱ』
452. 木更津市教育委員会 2004『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』
453. 木更津市教育委員会 2008『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
454. 木更津市教育委員会 2007『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』
455. 木更津市教育委員会 2002『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』
456. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1994『蓮華寺遺跡Ⅱ』
457. 木更津市教育委員会 2008『千束台遺跡Ⅰ』
458. 木更津市教育委員会 1998『塚原22号墳・62号墳』
459. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2003『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書12』
460. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1998『寺沢井戸遺跡』
461. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1996『郡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
462. 財団法人君津市文化財センター ほか、1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
463. 佐倉市教育委員会 1977『江原台第1遺跡発掘調査報告書』
464. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1978『佐倉市飯合作遺跡』
465. 佐倉市教育委員会 ほか、1974『飯重』
466. 佐倉市教育委員会 ほか、1996『城次郎丸遺跡』
467. 山万株式会社 ほか、1986『上座矢橋遺跡』
468. 鍋木諏訪尾余遺跡調査会 1984『佐倉市鍋木諏訪尾余遺跡』
469. 佐倉市 1992『大野子大山遺跡発掘調査報告書』
470. 間野台・古屋敷遺跡調査団 1977『間野台・古屋敷』
471. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1993『佐倉市南広遺跡』
472. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか、1993『高岡遺跡群Ⅱ』
473. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか、1993『高岡遺跡群Ⅲ』
474. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1985『佐倉市タルカ作遺跡』
475. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか、1998『太田長作遺跡』
476. 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』
477. 佐倉市 ほか、1999『吉見台遺跡A地点』
478. 白井駅南土地区画整理組合 1976『白井南』
479. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか、2008『内田端山越遺跡』
480. 佐倉市教育委員会 1983『岩富漆谷津・太田宿』
481. 財団法人香取郡文化財センター 2000『伊地山遺跡Ⅱ』
482. 財団法人山武郡市文化財センター 1994『古内遺跡』
483. 財団法人山武郡市文化財センター 2007『井戸遺跡 右京塚 半蔵遺跡 境遠谷津遺跡』
484. 成田国際空港株式会社 2006『空港整備地区南側貨物取扱施設埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
485. 財団法人三武郡市文化財センター 1997『御田台遺跡』
486. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1992『主要地方道成田松尾線Ⅶ』
487. 芝山町教育委員会 1989『三田遺跡発掘調査報告書』
488. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、1991『大台遺跡群』
489. 小原子遺跡群調査会 ほか、1990『小原子遺跡群』
490. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、1994『田向城跡』
491. 千葉県企業庁 ほか、2002『神山谷遺跡(1)』
492. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、2007『長倉宮ノ前遺跡』



493. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、2007『長倉鍛冶屋台遺跡』
494. 財団法人山武郡市文化財センター ほか、2003『遠山瓜ヶ作谷遺跡 遠山瓜ヶ作台遺跡』
495. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2000『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書4』
496. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1998『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書1』
497. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか、1988『神々廻遺跡群』
498. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1982『千葉ニュータウンⅦ』
499. 八日市場土地改良事務所 八日市場市教育委員会 1986『飯塚遺跡群発掘調査報告書』
500. 財団法人君津郡市文化財センター 1992『美生遺跡群Ⅰ』
501. 財団法人君津郡市文化財センター 1994『美生遺跡群Ⅲ』
502. 袖ヶ浦市 ほか、1992『文脇遺跡』
503. 千葉県土整備部 ほか、2007『主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書5』
504. 君津群市文化財センター 1991『金井崎遺跡発掘調査報告書』
505. 袖ヶ浦市 ほか、1994『上大城遺跡発掘調査報告書』
506. 千葉県企業庁 ほか、2005『袖ヶ浦市椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書』
507. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1991『笹田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群』
508. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1993『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
509. 財団法人君津市群市文化財センター ほか、1994『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
510. 袖ヶ浦町 ほか、1985『境遺跡』
511. 袖ヶ浦町 ほか、1985『境N o. 2 遺跡』
512. 財団法人君津郡市文化財センター ほか、1996『寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』
513. 財団法人君津市文化財センター ほか、1994『下向山遺跡』
514. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2004『東関東自動車道（千葉県・富津線）埋蔵文化財調査報告書13』
515. 袖ヶ浦市 ほか、1998『谷ノ台遺跡 発掘調査報告書』
516. 財団法人千葉県教育振興財団 2006『館山市東田遺跡』
517. 千葉県 2002『千葉県古墳時代関係資料』
518. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2004『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡』
519. 相山林継 1985『安房における鐸鈴のまつり』『国立民俗博物館研究報告』第7集
520. 千葉県都市部 1989『千葉市荒久遺跡（2）』
521. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1992『千葉市榎作遺跡』
522. 千葉市教育委員会 2007『千葉市芳賀輪遺跡』
523. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1977『千葉市東寺山石神遺跡』
524. 財団法人千葉市文化財調査協会 ほか、1996『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 台畑遺跡』
525. 千葉市教育委員会 2003『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ』
526. 財団法人千葉市文化財調査協会 1997『千葉市小中台A遺跡・牛尾舛遺跡』
527. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1979『千葉市西屋敷遺跡』
528. 財団法人千葉市文化財調査協会 ほか、1995『千葉市仁戸名遺跡』
529. 財団法人千葉市文化財調査協会 ほか、1998『千葉市下田遺跡』
530. 財団法人千葉市教育振興財団 ほか、2007『下泉町遺跡群』
531. 財団法人千葉市文化財調査協会 ほか、1997『千葉県高品城跡Ⅰ』
532. 財団法人千葉県都市公社 ほか、1975『千葉東南部ニュータウン2』
533. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2003『千葉東南部ニュータウン26』
534. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2004『千葉東南部ニュータウン28』
535. 財団法人千葉県文化財センター ほか、2004『千葉東南部ニュータウン30』
536. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1983『千葉東南部ニュータウン12』
537. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1984『千葉東南部ニュータウン15』
538. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1998『千葉東南部ニュータウン20』
539. 財団法人千葉県文化財センター ほか、1990『千葉東南部ニュータウン17』
540. 財団法人千葉市文化財調査協会 1997『海老遺跡』
541. 財団法人千葉市文化財調査協会 ほか、2002『千葉市土気東遺跡群Ⅰ』
542. 千葉市教育委員会 1981『千葉・上ノ台遺跡』
543. 千葉市教育委員会 1982『千葉・上ノ台遺跡』
544. 財団法人千葉市文化財調査協会 ほか、2001『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』
545. 銚子市 ほか、2000『椎柴小学校遺跡』
546. 財団法人総南文化財センター ほか、2004『根畑遺跡』
547. 立正大学博物館学講座 1970『東金平蔵台遺跡発掘調査概

- 報』
548. 財団法人千葉県文化財センター 1988『東金市久我台遺跡』
549. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1994『妙経遺跡・井戸谷9号墳』
550. 財団法人山武郡市文化財センター ほか 2002『小野山田遺跡群Ⅳ』
551. 財団法人山武郡市文化財センター ほか 1995『油井古塚原遺跡群』
552. 財団法人山武郡市文化財センター ほか 1997『油井古塚原遺跡』
553. 財団法人印旛郡市文化財センター 1998『千葉県印旛郡富里町富里第二工業団地土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査』
554. 富里市教育委員会 2005『松ノ木台遺跡発掘調査報告書』
555. 財団法人千葉県教育委員会 2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1』
556. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』
557. 千葉県 ほか 1994『加地区遺跡群Ⅲ』
558. 空港エンタープライズ株式会社 ほか 1994『荒磯』
559. 財団法人印旛郡文化財センター 2007『台方下平Ⅰ遺跡』
560. 千葉県土木部 ほか 1993『下総町不光寺遺跡』
561. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1988『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
562. 下総町遺跡調査会 1988『菊水城址主郭部調査報告書』
563. 株式会社太平洋クラブ ほか 2001『川栗遺跡群Ⅱ』
564. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか 2001『川栗遺跡群Ⅲ』
565. 千葉県教育委員会 ほか 1981『公津原Ⅱ』
566. 日本ビューホテル株式会社 ほか 1997『小菅三ツ塚遺跡』
567. 財団法人印旛郡市文化財センター ほか 1999『南羽鳥遺跡郡Ⅲ』
568. 成田市 ほか 1993『下方内野南遺跡』
569. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1998『下総町名木大台遺跡』
570. 財団法人香取郡市文化財センター 2000『名木不光寺遺跡』
571. 成田市教育委員会 ほか 1990『成田都市計画事業成田駅西口土地画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
572. 財団法人千葉県文化財センター ほか 1983『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
573. 千葉県土木部 ほか 1983『岩坂大台遺跡』
574. 千葉県土木部 ほか 1998『富津市川島遺跡』
575. 財団法人君津郡市文化財センター ほか 1991『植ノ台遺跡』
576. 富津市 ほか 1992『打越遺跡・神明山遺跡』
577. 財団法人千葉県都市公社 ほか 1974『小室』
578. 松戸市遺跡調査会 1999『稔台遺跡第2地点発掘調査報告書』
579. 白浜町 ほか 2003『青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書』
580. 茂原市教育委員会 ほか 1993『国府関遺跡群』
581. 茂原市教育委員会 ほか 1994『中原遺跡』
582. 八千代市教育委員会 2007『浅間内遺跡発掘調査報告書』
583. 財団法人千葉県文化財センター 1987『八千代市井戸向遺跡』
584. 八千代市川崎山遺跡調査会 1999『川崎山遺跡』
585. 八千代市遺跡調査会 ほか 2001『内込遺跡発掘調査報告書』
586. 大日本土木株式会社 ほか 2002『郷野遺跡』
587. 財団法人印旛郡市文化財センター 2004『権現堂遺跡』
588. 四街道市教育委員会 1990『入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』
589. 四街道千代田遺跡調査会 1972『千代田遺跡』
590. 宮ヶ谷戸遺跡調査団 1994『宮ヶ谷戸遺跡Ⅱ』
591. 雨間地区遺跡調査会 1998『雨間地区遺跡群』
592. 足立区伊興遺跡調査会 1998『足立区北部の遺跡群』
593. 足立区教育委員会 ほか 1992『伊興遺跡』
594. 東京都埋蔵文化財センター 1997『菅原神社台地上遺跡』
595. 成増一丁目遺跡調査会 1981『成増一丁目遺跡の発掘調査』
596. 成増天神脇遺跡調査会 2000『成増天神脇遺跡』
597. 東京都住宅局 ほか 1986『五反田遺跡Ⅰ』
598. 板橋区志村坂上遺跡調査会 2002『志村坂上遺跡D地点発掘調査報告書』
599. 志村坂上遺跡(H地点)調査会 1999『志村坂上遺跡H地点発掘調査報告書』
600. 志村坂上遺跡N地点発掘調査団 2002『志村坂上遺跡N地点発掘調査報告書』
601. 志村坂上遺跡F地点調査会 1998『志村坂上遺跡F地点発掘調査報告書』
602. 中台畠中遺跡調査会 ほか 2000『中台畠中遺跡発掘調査報告書』
603. 板橋区教育委員会 1992『徳丸東遺跡』
604. 加賀一丁目(東京家政大学構内)遺跡調査会 1995『加賀一丁目遺跡発掘調査報告書』
605. 東京都建設局 ほか 2000『四葉地区遺跡』
606. 西原遺跡調査会 1993『西原遺跡』
607. 板橋区教育委員会 1976『西台遺跡』
608. 西台遺跡調査団 1999『西台後藤田遺跡』
609. 新宿区西早稲田地区遺跡調査会 1993『下戸塚遺跡』
610. 板橋区教育委員会 1989『東京都板橋区赤塚水川神社北方

- 遺跡(1)－1983～1986年度発掘調査報告(その1)－』
611. 永峰光一 編 1977『中台三丁目東丘陵遺跡』
  612. 上小岩遺跡調査会 1990『上小岩遺跡Ⅱ』
  613. 東京都教育委員会 1970『北東低地帯文化財総合調査報告 第1分冊』
  614. 環8光明寺地区遺跡調査会 1997『東京都大田区環8光明寺地区遺跡調査報告書Ⅰ』
  615. 大田区久が原グリーンハイツ内遺跡発掘調査団 1999『久が原グリーンハイツ内遺跡』
  616. 東京都北区教育委員会 1996『飛鳥山遺跡』
  617. 東京都北区教育委員会 1997『飛鳥山遺跡Ⅱ』
  618. 東京都北区教育委員会 2003『田端不動坂遺跡Ⅴ』
  619. 東京都北区教育委員会 2000『御殿前遺跡Ⅵ』
  620. 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会 ほか、1992『赤羽台遺跡』
  621. 学校法人聖学院 ほか、2007『東京都北区中里峡上遺跡』
  622. 東北新幹線中里遺跡調査会 1989『中里遺跡5』
  623. 東京都教育委員会 1973『坑上遺跡』
  624. 株式会社モリモト ほか、2001『北新宿二丁目遺跡Ⅳ』
  625. 財団法人新宿区生涯学習財団 ほか、2002『東京都新宿区北新宿二丁目遺跡Ⅰ』
  626. 財団法人新宿区生涯学習財団 ほか、2002『東京都新宿区百人町三丁目西遺跡Ⅴ』
  627. 学校法人目白学園 1999『落合遺跡Ⅲ』
  628. 学校法人目白学園 ほか、2004『落合遺跡Ⅳ』
  629. 戸山遺跡調査会 1991『戸山遺跡』
  630. 世田谷区教育委員会 ほか、1981『堂ヶ谷戸遺跡』
  631. 東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第Ⅱ分冊
  632. 世田谷区教育委員会 堂ヶ谷戸遺跡調査会 1988『堂ヶ谷戸遺跡Ⅲ』
  633. 多摩市教育委員会 1985『和田・百草遺跡群・落川南遺跡』
  634. 多摩市遺跡調査会 1986『和田・百草遺跡群』
  635. 調布市教育委員会 ほか、1982『調布市下布田遺跡』
  636. 東京国立近代美術館遺跡調査委員会 1991『竹橋門』
  637. 豊島区教育委員会 ほか、2005『伝中・上富士前Ⅲ』
  638. 新井三丁目遺跡調査団 1988『新井三丁目遺跡』
  639. 中野区教育委員会 1979『向田遺跡発掘調査報告書』
  640. 日本道路公団 ほか、1995『もみじ山遺跡Ⅱ』
  641. 八王子市中田遺跡調査会 1966『八王子中田遺跡』
  642. 八王子市中田遺跡調査会 1967『八王子中田遺跡』
  643. 八王子市中田遺跡調査会 1968『八王子中田遺跡』
  644. 八王子市弁天池遺跡調査会 1981『弁天池北遺跡』
  645. 八王子市教育委員会 ほか、2004『西中野遺跡 発掘調査報告書』
  646. 八王子市宇津木台地区遺跡調査会 1984『迂津木台遺跡群Ⅳ』
  647. 落越遺跡調査団 1990『東京都八王子市中郷遺跡』
  648. 八王子市栲田遺跡調査会 1981『神谷原Ⅰ』
  649. 八王子市栲田遺跡調査会 1982『神谷原Ⅲ』
  650. 八王子市南部地区遺跡調査会 2001『南八王子地区遺跡調査報告14』
  651. 八王子市中野甲の原遺跡発掘調査団 2002『中野甲の原遺跡』
  652. 八王子市船田遺跡調査会 1970『船田・八王子市船田遺跡における集落址の調査Ⅰ』
  653. 日野新町一丁目住宅遺跡調査会 2003『姥久保遺跡』
  654. 府中市教育委員会 ほか、2004『武蔵国府関連遺跡調査報告31』
  655. 東京大学医学部附属病院 1990『医学部附属病院地点』
  656. 東京都埋蔵文化財センター 2004『多摩ニュータウン遺跡』
  657. 東京都埋蔵文化財センター 1999『多摩ニュータウン遺跡』
  658. 東京都埋蔵文化財センター 2000『多摩ニュータウン遺跡』
  659. 東京都埋蔵文化財センター 1999『多摩ニュータウン遺跡』
  660. 武蔵岡遺跡調査会 1978『東京都町田市武蔵岡遺跡』
  661. 武蔵岡遺跡調査会 1981『東京都町田市武蔵岡遺跡』
  662. 武蔵岡遺跡調査会 1982『東京都町田市武蔵岡遺跡』
  663. 目黒区教育委員会 2007『土器塚遺跡』
  664. 下古沢駒飼遺跡調査団 1998『下古沢駒飼遺跡発掘調査報告書』
  665. 比々多第一地区遺跡調査団 1987『比々多遺跡群』
  666. 伊勢原市No.128遺跡調査団 1998『咳止橋遺跡』
  667. 比々多第一地区遺跡調査団 1987『比々多遺跡群』
  668. 公益財団法人 かながわ考古学財団 2014『河原口坊中遺跡 第1次調査』第2分冊
  669. 小田原市教育委員会 2003『千代北町遺跡第Ⅴ・Ⅵ地点 千代仲ノ町遺跡第Ⅱ・Ⅴ地点 千代南遺跡第Ⅵ地点 高田宮町遺跡第Ⅱ地点 国府津舞台遺跡』
  670. 小田原市教育委員会 1999『千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点』
  671. 財団法人かながわ考古学財団 2000『三ツ俣遺跡Ⅲ』
  672. 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986『三ツ俣遺跡』
  673. 日本窯業史研究所 2004『犬蔵地区遺跡群』
  674. 川崎市教育委員会 1967『川崎市末長遺跡発掘調査報告』
  675. 玉口時雄 ほか、1972『長尾台遺跡』
  676. 長尾台北発掘調査団 1997『長尾台北遺跡発掘調査報告書』
  677. 川崎市民ミュージアム 2000『下原遺跡』
  678. 川崎市教育委員会 2005『千年伊勢山台遺跡』
  679. 黒川地区遺跡調査団 ほか、1993『黒川地区遺跡群報告書Ⅴ』
  680. 川崎市教育委員会 1977『川崎市高津区平風久保遺跡 川崎市中原区井田伊勢台遺跡発掘調査報告書』

681. 高津図書館友の会郷土史研究部 1988『東泉寺上』
682. 関俊彦 大三輪龍三 編 1973『東神庭遺跡』東出版株式会社
683. 川崎市教育委員会 1982『新作小高台遺跡発掘調査報告書』
684. 玉川文化財研究所 2009『末長遺跡第2地点発掘調査報告書』
685. 神奈川県立埋蔵文化財センター 1992『川尻遺跡』
686. 財団法人かながわ考古財団 1999『池子遺跡群Ⅷ』
687. 財団法人かながわ考古学財団 2001『原口遺跡Ⅱ』
688. 東海大学 2000『王子ノ台遺跡第Ⅲ巻』
689. 平塚市 ほか 2011『北金目塚越遺跡 第3地点発掘調査報告書1』
690. 平塚市真田・北金目遺跡調査会 ほか 2010『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書7』第2分冊
691. 平塚市真田・北金目遺跡調査会 ほか 2012『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書9』第3分冊
692. 平塚市真田・北金目遺跡調査会 ほか 2012『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書9』第1分冊
693. 平塚市真田・北金目遺跡調査会 ほか 2013『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書10』第2分冊
694. 平塚市真田・北金目遺跡調査会 ほか 2013『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書10』第4分冊
695. 池ノ辺遺跡調査会 ほか 1980『池の辺』
696. 神奈川県都市部住宅建設課 ほか 1989『藤沢市高倉滝ノ上遺跡』
697. 神奈川県土木部 ほか 1981『住吉遺跡発掘調査報告書』
698. 相武古代研究会 1979『桂町遺跡群・なだぎり遺跡発掘調査報告書』
699. 日本窯業史研究所 1998『赤田地区遺跡群』
700. 上品濃遺跡群発掘調査団 1992『上品濃遺跡群発掘調査報告書』
701. 上谷本第二遺跡発掘調査団 1971『上谷本第二遺跡A地区・B地区発掘調査概報』
702. 相武考古学研究所 1985『釜台町上星川遺跡』
703. 観福寺北遺跡発掘調査団 1997『関耕地遺跡発掘調査報告書』
704. 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 ほか 2006『明神台遺跡A地区本発掘調査報告』
705. 財団法人かながわ考古財団 2006『明神台遺跡 明神台北遺跡』
706. 奈良地区遺跡調査団 1986『奈良地区遺跡群Ⅰ』
707. 神奈川県教育委員会 1980『新羽大竹遺跡』
708. 神奈川県立埋蔵文化財センター 1985『山王山遺跡』
709. 県営三枚町団地予定地内遺跡発掘調査団 1988『三枚町遺跡発掘調査報告書』
710. 宿根北遺跡発掘調査団 1997『宿根北遺跡発掘調査報告書』
711. 殿屋敷遺跡群C地区発掘調査団 1985『殿屋敷遺跡群C地区発掘調査報告書』
712. 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1988『寺谷戸遺跡発掘調査報告』
713. 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1970『昭和44年度 横浜市埋蔵文化財調査報告書』
714. 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 2011『大原遺跡』
715. 神奈川県県民部県史編集室 1979『神奈川県史 資料編20 考古資料』
716. 横浜市教育委員会 ほか 2014『榑田原遺跡Ⅲ』
717. 広神村教育委員会 2002『大清水遺跡』
718. 佐渡市教育委員会 2007『県営ほ場整備事業(畑野東部地区)発掘調査報告書 晝場遺跡』
719. 新潟県教育委員会 1953『千種』
720. 中郷村教育委員会 1987『籠峰遺跡発掘調査概報』
721. 上越市教育委員会 ほか 2006『吹上遺跡』
722. 中条町教育委員会 2004『屋敷遺跡2次』
723. 新潟県教育委員会 ほか 2009『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXII 野地遺跡』
724. 新潟県岩船郡神林村教育委員会 1991『長松遺跡発掘調査報告書』
725. 学生社 2001『北陸の縄文遺跡 桜町遺跡調査概報』
726. 石川県教育委員会 ほか 2004『金沢市戸水B遺跡(10・12・13次)』
727. 石川県小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
728. 河村好光 1995『第3章 石川県縄文装身具集成 第1節 石製装身具 C. 石製玉類』『石川県考古資料調査・集成事業報告書 装身具Ⅰ』石川考古学研究会
729. 石川県羽咋市教育委員会 ほか 2003『滝谷八幡社遺跡』
730. 若狭考古学研究会 1971『浜禰遺跡』
731. 福井県教育庁埋蔵文化財センター 2009『吉河遺跡』
732. 福井県教育庁埋蔵文化財センター 1998『年報-12-』
733. 福井県三方郡三方町教育委員会 1988『田名遺跡』
734. 山梨県教育委員会 1993『東山北遺跡 第1次～第3次調査』
735. 山梨県教育委員会 2000『岩清水遺跡』
736. 山梨県教育委員会 1997『西田遺跡 第2次発掘調査報告書』
737. 韮崎市遺跡調査会 ほか 1996『山梨県韮崎市新田遺跡』
738. 韮崎市教育委員会 ほか 1997『坂井南遺跡Ⅲ』
739. 石和町遺跡調査会 ほか 2003『松本塚ノ越遺跡〔ホテルやまなみ地点〕』
740. 山梨県教育委員会 ほか 1987『二之宮遺跡』
741. 山梨県教育委員会 ほか 2000『諏訪尻遺跡』

742. 山梨県教育委員会 1989『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』
743. 楡形町教育委員会 1985『六科丘遺跡』
744. 上田市・上田市教育委員会 ほか 1994『岳の鼻遺跡』
745. 上田市教育委員会 ほか 1983『和手遺跡』
746. 上田市教育委員会 ほか 1989『琵琶塚Ⅱ』
747. 上田市土地開発公社 上田市教育委員会 2004『法楽寺遺跡』
748. 大町市教育委員会 1990『一律』
749. 日本道路公団 ほか 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 18 芝宮遺跡群 中原遺跡群』
750. 佐久市教育委員会 1984『北西の久保』
751. 佐久市教育委員会 2011『円正坊遺跡Ⅷ』
752. 佐久市教育委員会 1992『国道 141 号線関係遺跡』
753. 佐久市教育委員会 1976『市道』
754. 長野県埋蔵文化財センター ほか 2007『長野県埋蔵文化財センター年報 24』
755. 更科市教育委員会 1961『城の内』
756. 更科市教育委員会 1996『城ノ内遺跡Ⅳ』
757. 長野県更埴市教育委員会 1992『史跡森將軍塚古墳』
758. 更埴市教育委員会 2002『屋代遺跡群附松田館』
759. 長野県教育委員会 ほか 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 13 飯田古屋敷遺跡玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 清水山窯跡 池田端跡 牛出古窯遺跡』
760. 長野県道路公社 ほか 1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡七瀬遺跡』
761. 長野市教育委員会 1993『本村東沖遺跡』
762. 長野県教育委員会 ほか 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12 榎田遺跡』
763. 長野市教育委員会 1994『石川条里遺跡（8）』
764. 長野県教育委員会 ほか 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 石川条里遺跡』
765. 長野市教育委員会 ほか 1987『長野吉田高校グランド遺跡』
766. 長野市教育委員会 2006『水内坐一元神社遺跡（4）』
767. 長野市教育委員会 1998『水内坐一元神社遺跡Ⅲ』
768. 長野県教育委員会 ほか 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 16』
769. 長野市教育委員会 2007『篠ノ井遺跡群（6）』
770. 長野市 ほか 1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 篠ノ井遺跡群 石川条里遺跡 築地遺跡 於下遺跡 今里遺跡』
771. 長野市教育委員会 1999『綿内遺跡群 高野遺跡』
772. 長野市教育委員会 2005『浅川扇状地遺跡群檀田遺跡（2）』
773. 笹沢 浩 1982「駒沢新町遺跡」『長野県史考古資料編主要遺跡（北・東信）』
774. 松本市教育委員会 1987『松本市出川南遺跡』
775. 松本市教育委員会 1989『松本市向畑遺跡Ⅱ』
776. 長野県松本市教育委員会 1994『松本市高宮遺跡』
777. 松本市教育委員会 1993『松本市山影遺跡』
778. 松本市教育委員会 2003『中山古墳群 鍬形原遺跡 鍬形原砦址』
779. 岐阜県本巣郡糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会 1999『船来山古墳群』
780. 岐阜県土木部 1997『西田遺跡』
781. 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『葦山城跡・葦山城内遺跡』
782. 磐田市教育委員会 2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
783. 静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳一個別報告編一』
784. 南伊豆町教育委員会 1980『日詰遺跡 上』
785. 安本 博 1941「南伊豆に於ける土師器住居址の一考察」『静岡県郷土研究』15
786. 静岡県 1930『静岡県史』第1巻
787. 大場磐雄 佐藤民雄 ほか 1938「南豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雑誌』28巻3号
788. 沼津市教育委員会 1981『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』
789. 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『北神馬土手遺跡 他Ⅱ』
790. 沼津市教育委員会 1994『埋蔵文化財発掘調査報告書』
791. 沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
792. 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『静岡県埋蔵文化財調査研究所年報 XIII』
793. 小野真一 1972「伊豆・駿河・遠江」『神道考古学講座』2
794. 浜松市遺跡調査会 1984『半田山B古墳群アック津調査報告書（Ⅲ）』
795. (財) 浜松市文化振興財団 2008『東前遺跡Ⅱ』
796. 財団法人 浜松市文化協会 1998『梶子北遺跡』
797. 財団法人 浜松市文化振興財団 2009『舞阪町天白遺跡』
798. 財団法人 浜松市文化協会 1996『若林 村西遺跡』
799. 三島市教育委員会 1996『西大久保・奈良橋向遺跡』
800. 財団法人 浜松市文化協会 1999『西畑屋遺跡 1999』
801. (財) 浜松市文化振興財団 2006『中村遺跡一古墳・奈良時代編一』
802. 財団法人 浜松市文化協会 1997『下滝遺跡群』
803. 向坂綱二 1968「浜松市都田町中津坂上発見の祭祀遺物」『考古学雑誌』第50巻 第1号
804. 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993『新堀遺跡』

805. 富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群Ⅱ一月の輪上遺跡（B地区）－』
806. 富士宮市教育委員会 1994『月の輪遺跡群Ⅳ一月の輪上遺跡（B地区）－』
807. 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『御殿川流域遺跡群Ⅲ』
808. 三島市教育委員会 2000『夏梅木遺跡群』
809. 愛知県埋蔵文化財センター ほか 2009『下懸遺跡』
810. 新編岡崎市史編さん委員会 1989『新編 岡崎市史』史料考古 下 16
811. 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1992『勝川遺跡Ⅳ』
812. 刈谷市文化財保護委員会 1961『刈谷市泉田貝塚群』
813. 愛知県埋蔵文化財センター ほか 2007『朝日遺跡Ⅷ』
814. 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡Ⅴ』
815. 朝日遺跡群保存会 1971『朝日遺跡群の土器』
816. 愛知県埋蔵文化財センター ほか 2008『惣作・鐘場遺跡Ⅱ』
817. 豊川市教育委員会 1995『天間遺跡』
818. 豊田市教育委員会 1975『豊田市埋蔵文化財調査集報 第二集 縄文Ⅰ』
819. 豊田市教育委員会 1974『豊田市埋蔵文化財調査集報第Ⅰ集 古墳Ⅰ』
820. 豊田通商株式会社 2006『竪三蔵通遺跡』
821. 名古屋市教育委員会 2003『埋蔵文化財調査報告書 44』
822. 愛知県埋蔵文化財センター ほか 2001『牛牧遺跡』
823. 川添和暁 2015「縄文時代後晩期の土製垂飾類（玉類）について－東海地域の事例から－」『研究紀要』第16号 1－16頁 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
824. 愛知県西尾市教育委員会 1997『若宮西遺跡』
825. 三重県埋蔵文化財センター 2001『羽根中島遺跡発掘調査報告』
826. 三重県埋蔵文化財センター 1997『橋垣内遺跡発掘調査報告』
827. 三重県埋蔵文化財センター 2006『琵琶垣内遺跡（第1・4次）発掘調査報告』
828. 松坂市教育委員会 2006『草山遺跡発掘調査月報』
829. 三重県埋蔵文化財センター 1995『天白遺跡』
830. 滋賀県教育委員会 ほか 1994『鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
831. 滋賀県教育委員会 ほか 1989『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅺ』
832. 滋賀県教育委員会 ほか 1998『赤野井湾遺跡』
833. 滋賀県教育委員会 ほか 1999『湯ノ部遺跡Ⅳ・西河原宮ノ内遺跡Ⅰ』
834. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995『京都府遺跡調査概報第62冊』
835. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993『京都府遺跡調査報告書第18冊』
836. 京都府網野町教育委員会 1977『林遺跡発掘調査報告書』
837. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000『京都府遺跡調査概報第93冊』
838. 久美浜町教育委員会 1988『畑大塚古墳群』
839. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986『京都府遺跡調査概報第21冊』
840. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府遺跡調査報告書第12冊』
841. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008『京都府遺跡調査概報第128冊』
842. 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006『京都府遺跡調査概報第118冊』
843. 長岡京発掘調査団 1970『森本遺跡発掘調査概報』
844. 第2阪和国道内遺跡調査会 1970『池上・四ツ池』
845. 財団法人 大阪府文化財センター 1979『池上遺跡 第2分冊』
846. 財団法人 大阪市文化財協会 2001『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ』
847. 豊中市教育委員会 1988『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1987年度』
848. 財団法人 大阪文化財センター 1984『佐堂（その2）－Ⅰ』
849. 東大阪市遺跡保護調査会 1975『東大阪市埋蔵文化財調査概要 1975年度』
850. 東大阪市教育委員会 1977『馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ』
851. 財団法人 大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』
852. 兵庫県教育委員会 1985『筒江遺跡群Ⅰ』
853. 芦屋市 ほか 2004『月若遺跡発掘調査報告書第68・69・70地点』
854. 森下大輔 1987「河高・上ノ池遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度
855. 兵庫県教育委員会 1990『七日市遺跡（Ⅰ）－第2分冊』
856. 田原本町教育委員会 2008『唐古・鍵遺跡Ⅰ』
857. 倉吉市教育委員会 1999『上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
858. 財団法人 鳥取県教育文化財団 ほか 2000『青谷上寺地遺跡2』
859. 財団法人 鳥取県教育文化財団 ほか 2001『青谷上寺地遺跡3』
860. 財団法人 鳥取県教育文化財団 2009『青谷上寺地遺跡10』
861. 鳥取市教育委員会 1976『鳥取・秋里遺跡Ⅰ』

862. 米子市史編さん協議会 1991『米子市史』
863. 財団法人 鳥取県教育文化財団 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』
864. 鳥取県教育文化財団 ほか、1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』
865. 鳥取県教育文化財団 ほか、1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV』
866. 鳥取県教育文化財団 ほか、1999『長瀬高浜遺跡VIII 園第6遺跡』
867. 鳥取県埋蔵文化財センター 2008『梅田萱峯遺跡IV』
868. 青木遺跡発掘調査団 1978『青木遺跡発掘調査報告書III A・B・EH地区』
869. 財団法人 米子市教育文化事業団 1999『長砂第3遺跡』
870. 財団法人 米子市教育文化事業団 2006『吉谷亀尾前遺跡古市六反田遺跡』
871. 頓原町 2004『頓原町誌』
872. 島根県教育委員会 ほか、2004『大津町北遺跡 中野清水遺跡』
873. 島根県立古代出雲歴史博物館 2015『企画展 百八十神坐す出雲 古代社会を支えた神祭り』
874. 松尾充晶 2015「古墳時代の水利と祭祀」『古代文化研究』第23号 島根県古代文化センター
875. 前島己基 1974「石見における祭祀遺跡の新例」『季刊文化財』第23号 島根県文化財愛護協会
876. 江津市教育委員会 2005『高津遺跡』
877. 岡山県教育委員会 2005『土井遺跡 谷の前遺跡 慶運寺跡』
878. 岡山県教育委員会 ほか、1995『松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡 ほか』
879. 岡山県教育委員会 1996『斎富遺跡』
880. 岡山県教育委員会 1995『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』
881. 岡山県教育委員会 ほか、1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』
882. 岡山県教育委員会 ほか、2002『百間川米田遺跡4』
883. 岡山県教育委員会 ほか、1984『百間川原尾島遺跡2』
884. 岡山県教育委員会 2005『伊福定国前遺跡2』
885. 岡山県教育委員会 1998『伊福定国前遺跡』
886. 岡山県教育委員会 ほか、1999『加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡』
887. 岡山市教育委員会 2006『川入・中撫川遺跡』
888. 岡山県教育委員会 ほか、1998『高下遺跡 浅川古墳群 ほか 檜原古墳群 根岸古墳』
889. 岡山県教育委員会 ほか、2000『高塚遺跡 三手遺跡2』
890. 岡山県教育委員会 2003『津島遺跡4』
891. 岡山県教育委員会 ほか、1997『津寺遺跡4』
892. 岡山県教育委員会 ほか、1998『津寺遺跡5』
893. 岡山県文化財保護協会 1972『埋蔵文化財発掘調査報告 - 山陽新幹線建設に伴う調査』
894. 広域農道美作台地地区勝央町地内埋蔵文化財発掘調査委員会 1983『弥平治・能部遺跡』
895. 岡山県教育委員会 2001『下庄遺跡 上東遺跡』
896. 倉敷埋蔵文化財センター 2009『岩倉遺跡』
897. 岡山県文化財保護協会 1974『山陽新幹線建設に伴う調査II』
898. 岡山県教育委員会 1974『川入遺跡 上東遺跡 御堂奥遺跡 二子御堂奥古竈址群 島地貝塚 加賀池・宮地池遺跡 益坂散布地』
899. 楯築刊行会 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』
900. 倉敷考古館 1974『倉敷考古館研究集報 第10号』
901. 島根県古代文化センター 2005『古代出雲における玉作の研究II』
902. 総社市教育委員会 1991『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』
903. 岡山県教育委員会 1997『窪木遺跡1』
904. 岡山県教育委員会 ほか、2008『南溝手遺跡 窪木遺跡』
905. 津山市教育委員会 1994『津山市大開古墳群 大開遺跡』
906. 津山市教育委員会 ほか、『大畑遺跡』
907. 岡山県教育委員会 1978『大畑遺跡 宮の鼻古墳 宗金遺跡 佐藤遺跡 道上遺跡 横田東古墳群 横田遺跡 藤木城址 忠田山遺跡』
908. 岡山県教育委員会 1977『旦那原遺跡 岩倉遺跡 谷内遺跡 安信遺跡 塚谷古墳 桃山遺跡』
909. 岡山県教育委員会 2002『下湯原B遺跡 藪途山城跡』
910. 岡山県教育委員会 1976『須内遺跡 谷尻遺跡 植木遺跡 空古墳 戸谷遺跡 塔の畝遺跡 青地遺跡』
911. 岡山県教育委員会 2004『主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査2』
912. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1987『名広遺跡 - B調査区 -』
913. 広島県教育委員会 ほか、1983『境ヶ谷遺跡群』
914. 庄原市教育委員会 ほか、1999『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』
915. 財団法人 広島県教育事業団 2008『近森遺跡』
916. 島根県古代文化センター 2005『古代出雲における玉作の研究II』
917. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1997『龍王山2号遺跡』
918. 広島県教育委員会 1983『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）』

919. 東広島市教育委員会 1994『原1号遺跡発掘調査報告書』
920. 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 1997『西本6号遺跡』
921. 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 1993『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』
922. 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 1998『中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅰ』
923. 財団法人 東広島市教育文化振興事業団 1995『諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書』
924. 財団法人 東広島市教育文化振興事業団 2001『吉光谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
925. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1990『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(V)』
926. 広島県教育委員会 1998『広島県遺跡地図V(御調郡・世羅郡)』
927. 広島市教育委員会 1984『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』
928. 広島県教育委員会 1983『広島県文化財調査報告 第14集』
929. 広島県 1979『広島県史 考古編』
930. 広島市教育委員会 1990『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』
931. 広島県埋蔵文化財調査センター 1987『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)』
932. 神尾明正 1936「広島市外西山貝塚」『史前学雑誌』第8巻第5号
933. 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 2002『上朝枝遺跡発掘調査報告書』
934. 財団法人 広島県埋蔵文化財センター 1994『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)』
935. 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 1998『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)』
936. 日本道路公団岩国工事事務所 山口県教育委員会 1991『畑岡遺跡Ⅱ』
937. 宇部市 ほか 1968『宇部の遺跡』
938. 小野忠熈・隈昭志 1968『北迫遺跡 宇部市北迫遺跡と高地性貝塚集落の問題』
939. 財団法人山口県教育財団 ほか 1993『明地遺跡』
940. 財団法人山口県教育財団 ほか 1994『明地遺跡Ⅱ』
941. 中国四国農政局 ほか 2007『干焼田遺跡 片瀬遺跡』
942. 中国四国農政局 ほか 2006『今宮遺跡』
943. 中国四国農政局 ほか 2005『土井ヶ浜遺跡周辺遺跡群 寺ヶ浴遺跡 広田遺跡 磯地遺跡』
944. 中国四国農政局 ほか 2006『古殿遺跡』
945. 下関市教育委員会 ほか 2005『宮迫神田遺跡 的場遺跡』
946. 下関市教育委員会 ほか 2005『宮ノ下遺跡 神田遺跡』
947. 中国四国農政局 2004『西沢遺跡』
948. 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 1999『高野遺跡(北地区)』
949. 山口県鹿野町土地開発公社 山口県教育委員会 1995『小谷遺跡』
950. 日本道路公団徳山工事事務所 山口県教育委員会 1987『岡山遺跡』
951. 防府市教育委員会 1981『防府市文化財調査年報Ⅳ』
952. 山口県埋蔵文化財センター ほか 2008『真尾猪の山遺跡Ⅱ』
953. 山口県教育財団 山口県教育委員会 1992『国秀 平成3年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告』
954. 山口市教育委員会 1982『朝倉大歳』
955. 山口市教育委員会 1992『下東遺跡Ⅱ』
956. 財団法人 山口県教育財団 ほか 1998『浦辺古墳群 大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 小郡開作経塚』
957. 山口県教育委員会 1993『仏供田遺跡』
958. 山口県教育委員会 1993『赤妻遺跡Ⅱ』
959. 阿東町教育委員会 1998『宮ヶ久保遺跡』
960. 徳島市立考古資料館 2008『会館10周年記念特別企画展 古代のまつりと信仰』
961. 香川県教育委員会 ほか 2007『砂入遺跡』
962. 香川県教育委員会 ほか 1997『埋蔵文化財発掘調査報告』
963. 善通寺市教育委員会 独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2009『旧練兵場遺跡Ⅰ』
964. 善通寺市教育委員会 独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2015『旧練兵場遺跡Ⅴ』第1分冊
965. 善通寺市教育委員会 独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2014『旧練兵場遺跡Ⅳ』
966. 香川県教育委員会 ほか 2005『前田東・中村遺跡Ⅱ』
967. 香川県教育委員会 ほか 2004『成重遺跡Ⅰ』
968. 香川県教育委員会 ほか 2008『住吉遺跡 渡池遺跡 北内遺跡 池下遺跡』
969. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002『土居窪遺跡2次 税谷畑中遺跡 税谷本村遺跡2次』
970. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005『道後町遺跡Ⅱ』
971. 松山大学 ほか 1991『松山大学構内遺跡-第2次調査-』
972. 松山市教育委員会 ほか 1995『松山大学構内遺跡Ⅱ』
973. 松山市教育委員会 ほか 1994『大峰ヶ台丘陵の遺跡』
974. 松山市教育委員会 ほか 2002『船ヶ谷遺跡』
975. 松山市教育委員会 ほか 2005『東本遺跡6次調査地 桑原遺跡2次調査地 桑原遺跡4次調査地』
976. 松山市教育委員会 ほか 1996『東本遺跡4次調査 枝松遺跡4次調査』



977. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998『斉院・古照』
978. 松山市教育委員会 ほか 1995『大峰ヶ台遺跡』
979. 松山市教育委員会 ほか 2005『宮前川流域の遺跡』
980. 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2012『北井門遺跡2次調査』
981. 徳島市立考古資料館 2008『会館 10周年記念特別企画展 古代のまつりと信仰』
982. 高知県教育委員会 ほか 2002『具同中山遺跡群Ⅲ-3』
983. 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001『具同中山遺跡群Ⅳ』
984. 高知県教育委員会 ほか 1992『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
985. 高知県教育委員会 ほか 1988『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
986. 岡本健児 1972「四国」『神道考古学講座』第2巻
987. 高知県佐川町教育委員会 1995『岩井口遺跡 二ノ部遺跡・城跡』
988. 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999『天崎遺跡』
989. 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003『居徳遺跡群Ⅴ』
990. 夜須町教育委員会 1999『梨子木遺跡』
991. 筑前町教育委員会 2009『琴ノ宮遺跡 (上巻)』
992. 赤崎敏男 島津義昭 1974「福岡県松延池畔発見の土製模造品」『九州考古学』49・50
993. 甘木市教育委員会 2001『平塚川添遺跡Ⅰ』
994. 福岡県教育委員会 1993『九州横断自動車道関連埋蔵文化財調査報告-25-』
995. 福岡県教育委員会 1997『九州横断自動車道関連埋蔵文化財調査報告-45-下巻』
996. 福岡県教育委員会 1982『九州横断自動車道関連埋蔵文化財調査報告-1-』
997. 福岡県教育委員会 1992『九州横断自動車道埋蔵文化財報告-24-』
998. 甘木市教育委員会 1981『小田道遺跡』
999. 福岡県教育委員会 1995『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告-33-』
1000. 甘木市教育委員会 1974『持丸古墳群』
1001. 福岡県教育委員会 1999『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-54-』
1002. 福岡県教育委員会 1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-』
1003. 穂波町教育委員会 1989『穂波地区遺跡群 第1集』
1004. 飯塚市教育委員会 2007『烏尾遺跡Ⅱ』
1005. 前原町教育委員会 1987『井原遺跡群』
1006. 福岡県教育委員会 1982『三雲遺跡Ⅲ』
1007. 福岡県教育委員会 1983『三雲遺跡Ⅳ』
1008. 前原市教育委員会 2006『潤地頭給遺跡Ⅰ (第Ⅲ区)』
1009. 前原市教育委員会 2006『三雲・井原遺跡』
1010. 前原市教育委員会 2009『泊リユウサキ遺跡』
1011. 福岡県教育委員会 2004『堂畑遺跡Ⅱ』
1012. 福岡県教育委員会 2005『堂畑遺跡Ⅲ』
1013. 福岡県教育委員会 1998『鷹取五反田遺跡Ⅰ』
1014. 福岡県教育委員会 1983『塚堂遺跡Ⅰ』
1015. 大野城市教育委員会 1993『仲島遺跡Ⅺ』
1016. 大牟田市教育委員会 1977『山添古墳』
1017. 小郡市教育委員会 1996『三国地区遺跡群7』
1018. 小郡市教育委員会 1988『三国の鼻遺跡Ⅲ』
1019. 福岡県教育委員会 1988『九州横断自動車道関連埋蔵文化財調査報告-15-上巻』
1020. 小郡市教育委員会 1981『大板井遺跡Ⅰ』
1021. 小郡市教育委員会 2003『大板井遺跡ⅧⅢ』
1022. 小郡市教育委員会 2003『大保龍頭遺跡3・4・5』
1023. 小郡市教育委員会 1994『津古遺跡群Ⅱ』
1024. 小郡市教育委員会 1986『横隈狐塚遺跡Ⅲ』
1025. 葦牙書房 1943『遠賀川 筑前立屋敷遺跡調査報告』
1026. 水巻町教育委員会 1997『立屋敷遺跡 (第3次)』
1027. 岡垣町教育委員会 1992『縄手古墳群』
1028. 春日市教育委員会 2006『トバセ遺跡』
1029. 春日市教育委員会 2002『原ノ口遺跡』
1030. 九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 1993『九州大学埋蔵文化財調査報告』
1031. 小田富士夫 1972「九州」『神道考古学講座』第2巻
1032. 篠栗町教育委員会 1981『隈遺跡』
1033. 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2008『古川西遺跡3・4・5区』
1034. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987『日の出町遺跡』
1035. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997『金丸遺跡1』
1036. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989『上徳力遺跡1』
1037. 財団法人 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2005『中貫ミカシキ遺跡2』
1038. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 2001『長野角屋敷遺跡2』
1039. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987『長野A遺跡2 (Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区の調査)』
1040. 北九州市教育委員会 1997『能行遺跡』

1041. 財団法人 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室  
2009『貫・裏ノ谷遺跡1』
1042. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室  
ほか 1989『貫川遺跡2』
1043. 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室  
1985『勝円遺跡(C地点)』
1044. 福岡県教育委員会 2001『船越高原A遺跡II』
1045. 田主丸町教育委員会 2002『隈3号墳』
1046. 福岡県教育委員会 2002『彼坪遺跡I』
1047. 福岡県教育委員会 2003『大的遺跡I・日詰遺跡I』
1048. 福岡県教育委員会 2002『松門寺A遺跡』
1049. 久留米市教育委員会 1999『山川南元村遺跡』
1050. 日本住宅公団 1973『鹿部山遺跡』
1051. 古賀市教育委員会 2005『楠浦・中里遺跡』
1052. 古賀市教育委員会 2008『古賀市鹿部土地区画整理事業関  
係埋蔵文化財発掘調査報告VII』
1053. 宇野慎敏 2015「宗像および周辺地域出土勾玉の地域性と  
その歴史的意義—宗像市・福津市・古賀市・新宮町を中  
心として—」『法政考古学』第41集 法政考古学会
1054. 福岡県教育委員会 2007『浦松遺跡』
1055. 太宰府市教育委員会 2006『太宰府・佐野地区遺跡群21』
1056. 太宰府市教育委員会 2004『太宰府・佐野地区遺跡群17』
1057. 筑後市教育委員会 2000『筑後西部地区遺跡群II』
1058. 那珂川町教育委員会 1989『井河遺跡群』
1059. 那珂川町教育委員会 1979『安德・道善・片縄地区区画整  
理事業地内埋蔵文化財調査概報』
1060. 福岡県教育委員会 1976『九州縦貫自動車道関連埋蔵文化  
財調査報告—VII—』
1061. 筑紫野市教育委員会 1997『堀池遺跡』
1062. 福岡県教育委員会 1999『貝元遺跡II 上巻』
1063. 福岡県教育委員会 1998『貝元遺跡I』
1064. 福岡県教育委員会 1995『仮塚南遺跡』
1065. 筑紫野市教育委員会 1986『御笠地区遺跡』
1066. 株式会社島田組 2009『立明寺地区遺跡 B地点』
1067. 赤崎敏男 1973「福岡県五穀神山出土の土製模造品」『九  
州考古学』47
1068. 築城町教育委員会 1998『船迫窯跡群』
1069. 福岡県教育委員会 2000『築城五反田遺跡・築城小迫遺跡』
1070. 福岡県教育委員会 1995『上唐原遺跡I』
1071. 上毛町教育委員会 2009『下唐原伊柳遺跡II(遺物編) 下  
唐原石堂遺跡 下唐原桑野遺跡』
1072. 福岡市教育委員会 1987『有田・小田部 第8集』
1073. 福岡市教育委員会 1990『藤崎遺跡V』
1074. 福岡市教育委員会 1994『五十川赤目遺跡』
1075. 福岡市教育委員会 2004『樋井川B遺跡群』
1076. 福岡市教育委員会 1986『比恵遺跡』
1077. 福岡市教育委員会 1995『比恵遺跡群(17)』
1078. 福岡市教育委員会 2007『比恵47』
1079. 福岡市教育委員会 1995『飯氏二塚古墳』
1080. 福岡市教育委員会 2003『笠拔遺跡』
1081. 福岡市教育委員会 1986『柏原遺跡群II』
1082. 福岡市教育委員会 1995『警弥郷B遺跡2』
1083. 福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡2』
1084. 福岡市教育委員会 2000『雀居遺跡5』
1085. 福岡市教育委員会 2008『那珂48』
1086. 福岡県教育委員会 2000『西新町遺跡II』
1087. 福岡市教育委員会 1993『野方久保遺跡』
1088. 福岡市教育委員会 1982『野多目前田遺跡調査概報』
1089. 福岡市教育委員会 2006『山王遺跡2—第3次調査報告—』
1090. 福岡市教育委員会 1985『多々良込田遺跡III』
1091. 福岡県教育委員会 1984『今宿高田遺跡』
1092. 津屋崎町教育委員会 1998『勝浦北部丘陵遺跡群』
1093. 福岡県教育委員会 1994『団後遺跡 西一町田遺跡 炭山  
遺跡』
1094. 大刀洗町教育委員会 1993『大刀洗町内遺跡群』
1095. 志免町教育委員会 1996『松ヶ上遺跡』
1096. 福岡県教育委員会 2005『中州遺跡』
1097. 瀬高町教育委員会 1985『権現塚北遺跡』
1098. 福岡県教育委員会 2005『海津横馬場遺跡I』
1099. 福岡県教育委員会 2007『山門北池遺跡』
1100. 宗像市教育委員会 1985『宗像埋蔵文化財発掘調査概報—  
1984年度—』
1101. 宗像町教育委員会 1979『相原古墳群』
1102. 福岡県教育委員会 1972『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化  
財調査報告—III—』
1103. 広川町教育委員会 1991『割子田遺跡』
1104. 下稗田遺跡調査指導員会 1985『下稗田遺跡』
1105. 佐賀県教育委員会 1973『土生・久蘇遺跡』
1106. 佐賀県小城町教育委員会 2001『久蘇遺跡』
1107. 佐賀県教育委員会 1976『石木遺跡』
1108. 佐賀県教育委員会 1996『石木中高遺跡』
1109. 佐賀県牛津町教育委員会 1998『牛津町内遺跡発掘調査I』
1110. 唐津市 1982『菜畑』
1111. 唐津市教育委員会 2006『菜畑内田遺跡(6)』
1112. 唐津市教育委員会 2003『半田引地遺跡』
1113. 佐賀県教育委員会 1978『生石・森の下遺跡』
1114. 佐賀県教育委員会 2011『中原遺跡群V 11区~13区の  
弥生時代・古墳時代墳墓の調査』
1115. 佐賀県教育委員会 2003『梅白遺跡』
1116. 六興出版 1982『末蘆国』

1117. 川副麻理子 1998『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書5』
1118. 佐賀県教育委員会 1979『二塚山』
1119. 神埼町教育委員会 1979『山崎古墳』
1120. 佐賀県教育委員会 1993『切畑遺跡』
1121. 神埼町教育委員会 1999『尾崎土生遺跡』
1122. 神埼町教育委員会 2001『利田柳遺跡』
1123. 神埼町教育委員会 1980『利田柳遺跡Ⅲ区』
1124. 佐賀県教育委員会 1994『吉野ヶ里』
1125. 佐賀県教育委員会 1990『吉野ヶ里遺跡』
1126. 佐賀市教育委員会 1992『阿高遺跡 寺裏遺跡 梅屋敷遺跡』
1127. 佐賀市教育委員会 1990『南宿遺跡 木村遺跡 阿高遺跡 牟田寄遺跡 村徳永遺跡 古村遺跡』
1128. 佐賀市教育委員会 2002『平尾二本杉遺跡Ⅱ』
1129. 佐賀市教育委員会 2002『平尾二本杉遺跡Ⅰ』
1130. 佐賀県教育委員会 1986『久保和泉丸山遺跡』
1131. 佐賀市教育委員会 1993『牟田寄遺跡』
1132. 佐賀市教育委員会 1997『牟田寄遺跡Ⅳ』
1133. 佐賀市教育委員会 1997『牟田寄遺跡Ⅴ』
1134. 佐賀市教育委員会 1998『牟田寄遺跡Ⅵ』
1135. 佐賀市教育委員会 1999『牟田寄遺跡Ⅶ』
1136. 佐賀市教育委員会 1991『村徳永遺跡』
1137. 佐賀市教育委員会 1993『大野原遺跡』
1138. 佐賀市教育委員会 1994『御手水遺跡』
1139. 佐賀県教育委員会 1989『礫石遺跡』
1140. 佐賀県教育委員会 1990『惣座遺跡』
1141. 佐賀市教育委員会 1998『坪の上遺跡Ⅰ』
1142. 佐賀市教育委員会 1996『藤附遺跡1区 大塚遺跡1区 大日遺跡2区』
1143. 岩永雅彦 ほか 1995『長尾倉富』
1144. 小田富士夫 1972「九州」『神道考古学講座』第2巻
1145. 福岡大学人文学部考古学研究室 2003『佐賀県・東十郎古墳群の研究 対馬・サイノヤマ古墳の調査』
1146. 鳥栖市教育委員会 1984『前田遺跡』
1147. 佐賀県教育委員会 2001『柚比遺跡群1 第3分冊』
1148. 鳥栖市教育委員会 1986『梅坂古墳群』
1149. 佐賀県教育委員会 1977『二塚山遺跡群』
1150. 基山町遺跡発掘調査団 1978『千塔山遺跡調査報告書』
1151. 佐賀県教育委員会 1970『基山町伊勢山 鳥栖市永吉遺跡』
1152. 長崎県考古学会 2014『長崎県本土地域における古墳の様相－日本列島西端の古墳の様相－』
1153. 長崎県教育委員会 2006『肥賀太郎遺跡』
1154. 長崎県教育委員会 1984『今福遺跡Ⅰ』
1155. 長崎県教育委員会 1985『今福遺跡Ⅱ』
1156. 熊本県教育委員会 2001『岩瀬・木甘子遺跡』
1157. 熊本県教育委員会 1994『大久保遺跡』
1158. 熊本市教育委員会 1992『上高橋高田遺跡』
1159. 植木町教育委員会 2002『石川遺跡』
1160. 熊本県教育委員会 2002『石の本遺跡群Ⅴ』
1161. 熊本市教育委員会 1989『乾原・迎八反田遺跡群Ⅰ』
1162. 熊本市教育委員会 2003『神水遺跡Ⅴ』
1163. 熊本市教育委員会 2008『熊本市埋蔵文化財調査報告集一 平成19年度一』
1164. 熊本県教育委員会 1974『沈目』
1165. 熊本市教育委員会 1981『上南部遺跡発掘調査報告書』
1166. 東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第3冊
1167. 熊本県教育委員会 2005『前田遺跡』
1168. 玉名市教育委員会 2008『玉名市内遺跡調査報告書Ⅳ』
1169. 熊本県教育委員会 2001『柳町遺跡Ⅰ』
1170. 人吉市教育委員会 1993『中堂遺跡』
1171. 八代市教育委員会 2005『用七遺跡』
1172. 山鹿市教育委員会 1982『方保田東原遺跡』
1173. 山鹿市教育委員会 1984『方保田東原遺跡(2)』
1174. 熊本県山鹿市教育委員会 2001『方保田東原遺跡Ⅳ』
1175. 熊本県山鹿市教育委員会 2008『方保田東原遺跡(9)』
1176. 熊本県山鹿市教育委員会 2004『方保田東原遺跡(5)』
1177. 熊本県山鹿市教育委員会 2007『方保田東原遺跡(8)』
1178. 山鹿市教育委員会 2008『方保田東原遺跡10』
1179. 宇佐市教育委員会 1998『国道387号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ 別府遺跡』
1180. 宇佐市教育委員会 1981『宇佐地区圃場整備関係発掘調査概報』
1181. 宇佐市教育委員会 1986『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』
1182. 大分市教育委員会 2005『海部の遺跡1』
1183. 大分県教育委員会 2002『毛井遺跡 B地区』
1184. 大分市教育委員会 1991『下郡遺跡群』
1185. 大分市教育委員会 1993『下郡遺跡群』
1186. 大分市教育委員会 2007『下郡遺跡群Ⅴ』
1187. 大分市教育委員会 2009『下郡遺跡群 VII』
1188. 大分市教育委員会 2005『玉沢地区条里跡 第3次発掘調査報告』
1189. 大分県教育委員会 1984『尾崎遺跡』
1190. 玖珠町教育委員会 1987『小田遺跡群Ⅰ』
1191. 大分県教育委員会 1984『大分県内遺跡詳細分布調査概報3』
1192. 大分県教育委員会 2001『後迫遺跡』
1193. 日田市教育委員会 2004『本村遺跡3次』

1194. 宮崎県新富町教育委員会 1992『七又木地区遺跡』
1195. 宮崎県教育委員会 1985『宮崎県文化財調査報告書第 28 集』
1196. 宮崎県教育委員会 2007『西都原 173 号墳 西都原 4 号地 下式横穴墓 西都原 111 号墳』
1197. 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『西下本庄遺跡』
1198. 宮崎県都城市教育委員会 2007『今房遺跡』
1199. 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『下大五郎遺跡 谷ノ口遺跡 渡り口遺跡 下川原遺跡』
1200. 宮崎県城市教育委員会 2008『平田遺跡 A 地点・B 地点・C 地点』
1201. 面高哲郎 1982『都城市文化財調査報告書』第 2 集
1202. 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『下那珂遺跡』
1203. 宮崎県教育委員会 1996『山ノ田第 1 遺跡』
1204. 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『内宮田遺跡 柳迫遺跡 中別府遺跡』
1205. 宮崎県教育委員会 1985『浦田遺跡 入料遺跡 堂地西遺跡 平畑遺跡 堂地束遺跡 熊野原遺跡』
1206. 県宮崎郡田野町教育委員会 2003『鹿村野地区遺跡』
1207. 東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第 3 冊
1208. 鹿児島県教育委員会 1989『中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡（第 3 分冊）』
1209. 鹿児島県教育委員会 1989『中ノ原遺跡（I）（第 4 分冊）』
1210. 鹿児島県立埋蔵文化財調査センター 2008『市ノ原遺跡（第 4 地点・第 2 地点）』
1211. 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『尾ヶ原遺跡』
1212. 鹿児島県加世田市教育委員会 2003『祝原遺跡』
1213. 鹿児島県日置郡金峰町教育委員会 1991『木落遺跡 高源寺遺跡』
1214. 沖縄県・勝連町教育委員会 1990『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－（1）』
1215. 沖縄県教育委員会 1980『仲宗根貝塚第一・二次発掘調査概報』
1216. 沖縄県具志頭村教育委員会 1986『具志頭村の遺跡』
1217. 西原町教育委員会 1983『我謝遺跡－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告－』
1218. 沖縄県・西原町教育委員会 1983『我謝遺跡－分譲宅地造成に係る緊急発掘調査－』
1219. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡』
1220. 那覇市教育委員会 1996『那崎原遺跡』
1221. 沖縄県・玉城村教育委員会 1991『国指定史跡 糸数城跡－発掘調査報告書 I－』